

【完結】ポケットモンスター ～ アガリアの伝説 ～

冬月之雪猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケモントレーナーの少年、アルトの冒険ストーリーです！

現在の手持ちポケモン

- ・スピアー
- ・ゲッコウガ
- ・キテルグマ
- ・ギルガルド
- ・フーパ
- ・ギャラドス
- ・カラマネロ

目次

第一章『旅立ち』

プロローグ

第一話『コスラ洞窟』

第二話『ヴリル』

第三話『四天王・ミリガン』

第四話『チャンピオン』

第五話『運命の夜』

第六話『シャンティ・シティ』

第七話『刃身一体』

第八話『認定試験』

第九話『家族』

第十話『V S エルフラン』

エピローグ『旅立ちの日』

第二章『旅の仲間』

プロローグ

第一話『アイリス』

第二話『ユニオン・シティ』

第三話『キテルグマ』

第四話『大会前に』

第五話『開戦、ユニオン大会』

第六話『V S アイリス』

第七話『幕間』

第八話『V S バレット』

第九話『V S アギト』

148 140 135 128 121 115 108 101 95 89 81 69 59 52 46 39 32 26 20 13 5 1

第十話『ぶつかり合う魂』

エピローグ『旅の仲間』

第三章『決戦、メガロポリス』

プロローグ

第一話『進め、ポケモン・ケア道』

第二話『リール署』

第三話『交差路』

第四話『VSヴリル教団幹部』

第五話『追跡』

第六話『VSロイド』

第七話『チャンピオン・ザラクの力』

第八話『アルトギア手記』

第九話『仲間』

第十話『VSルーラー』

エピローグ『約束』

第四章『再会、バトルシティ』

プロローグ

第一話『到着、オーヴェル・シティ』

第二話『ジムリーダー・ヴァイク』

第三話『バトルタワー』

第四話『セラ』

第五話『人間万事塞翁が馬』

第六話『遭遇』

第七話『再会』

第八話『壁画』

155

164

169

173

184

191

198

206

213

219

227

235

242

251

260

267

274

281

288

298

303

312

321

第九話『アルトギア』	328
第十話『発動、きずなへんげ』	334
エピソード『ゲームオーバー』	342
第五章『奪還、メルカトシティ』	
プロローグ	350
第一話『カルネ・シティ』	360
第二話『近況』	372
第三話『エリザベス』	380
第四話『合流』	389
第五話『魔神』	396
第六話『光輪の超魔神』	405
第七話『奪還、メルカトシティ・I』	411
第八話『奪還、メルカトシティ・II』	418
第九話『VSミリガン』	427
第十話『コスラ手記』	435
エピソード『Truth lies at the bottom of a well.』	444
第六章『激闘、ヴェゼール・ヴィレッジ』	
プロローグ	451
第一話『師弟再会』	454
第二話『ヴリル王』	461
第三話『VSアクセル』	468
第四話『原種』	475
第五話『閑話休題』	480
第六話『新たな出発』	487

第七話『VSサレナジム』

493

第八話『VSノエル』

500

第九話『激戦、ヴェゼール・ヴィレッジ』

507

第十話『潜入、ヴェゼール要塞』

512

エピローグ『咎と愛』

521

第七章『アガリアの伝説』

プロローグ

525

第一話『挑戦、大迷宮』

530

第二話『VSドロシー』

538

第三話『アンノーン』

544

第四話『VSミカルゲ』

550

第五話『コスラ洞窟、再び』

556

第六話『VSカラマネロ』

563

第七話『王龍』

572

第八話『最後のアルトギア手記』

581

第九話『アガリアの伝説・上』

587

第十話『アガリアの伝説・中』

594

第十一話『アガリアの伝説・下』

608

第十二話『アガリアの伝説・終』

618

エピローグ『真実』

629

第八章『来るべき災厄』

プロローグ

634

第一話『VSイベルタル』

642

第二話『最強の力』

649

第三話『再起』

657

第四話『スピアー、怒りのミサイルばり』	662
第五話『レムハザード』	669
第六話『幕間』	678
第七話『伝説の真実』	684
第八話『ヴァイク』	690
第九話『眠り姫の目覚め』	699
第十話『VSお父さんとお母さん』	706
エピローグ『VSレムハザード』	713
第九章『開戦、ポケモンリーグ！』	728
プロローグ	735
第一話『開会式』	744
第二話『エキシビジョン・マッチ！ ザラクVSゼノン』	751
第三話『開戦、ポケモンリーグ！ VSヴォルフ』	758
第四話『バレット』	766
第五話『エリザベス』	778
第六話『幕間』	783
第七話『ライバル対決！ VSバレット』	795
第八話『アギトVSエリザベス』	806
第九話『ライバル対決！ VSアクセル・前編』	816
第十話『ライバル対決！ VSアクセル・後編』	824
エピローグ『決戦前夜、ミリガンとアルト』	829
第十章『激闘、チャンピオンリーグ！』	842
プロローグ『はじまりのバトル』	
第一話『優勝』	

第二話『終わり始まり』	850
第三話『開幕、チャンピオンリーグ』	860
第四話『四天王戦！ VS シエル』	875
第五話『四天王・ザイリン』	886
第六話『VS 四天王・フレデリック！ フーパ、オンステージ！』	895
第七話『決戦！ VS 四天王・ミリガン！』	908
第八話『最終決戦！ VS チャンピオン・ザラク I』	926
第九話『最終決戦！ VS チャンピオン・ザラク II』	935
第十話『最終決戦！ VS チャンピオン・ザラク III』	944
エピローグ『バシャーモの思い』	951
最終章『最強へ至る道』	
プロローグ	958
第一話『最終決戦！ VS チャンピオン・ザラク IV』	961
第二話『最強対決！ スピアー VS ゲッコウガ！』	966
第三話『アイリスとザラク』	972
第四話『アルトスピアー VS ザラクゲッコウガ！』	978
第五話『VS アルセウス I』	983
第六話『VS アルセウス II』	990
第七話『VS アルセウス III』	997
第八話『VS アルセウス IV』	1003
第九話『VS アルセウス V』	1013
最終話『ラストバトル』	1019

第一章 『旅立ち』

プロローグ

四方を高い山に囲まれた小さな村、ヴェゼール・ビレッジ。その中心にある広場で三人の子供達がポケモンバトルに興じている。

「いっけー、ビードル！」

「ビー！」

青みがかった黒髪の少年が繰り出したのはビードルだった。鋭い毒針を高々と掲げ、相手の少年を挑発している。

「へっへー！ 父ちゃんに貰ったオレの相棒、見せてやるぜ！ いっけー、ヤドン！」

「ヤーン」

太陽の光を浴びてキラキラと輝く金髪を逆立てた少年が繰り出したのはヤドンだった。のんきな表情で虚空を見つめている。

「アクセル、ヤドンを貰ったの！ 超可愛い！ いいなー！」

二人の少年のバトルを見守っている桜色の髪の少女はヤドンの登場に歓声を上げた。すると、アクセルと呼ばれた少年は嬉しそうに頬を緩ませた。

「へへー。なんなら撫でてみるか？ セラならいいぜ！」

「アクセル……」

相手の少年の発する不機嫌オーラを感じ取ったアクセルは慌てて表情を引き締めた。

「悪い、セラ！ ヤドンを撫でるのはアルトとのバトルの後だ！」

アクセルはアルトと呼んだ少年に拳を向ける。

「いくぜ、アルト！ ポケモンバトルだ！」

「……いくよ、アクセル！」

バトルのスタートと同時にビードルが走り出す。体を折り曲げ、大地を蹴ると、ビードルは一瞬の内にヤドンへ肉薄した。

「やーん？」

「やーん、じゃねえ！ 避けるー！」

「ビードル！ 糸を吐きながらヤドンの周りを飛び回れ！」

「ビーー！」

アルトの指示を聞き届け、ビードルは飛び回りながら器用にヤドンへ糸を吹き付ける。

「お、おい、ヤドン！ はやく逃げろ！ このままじゃ、グルグル巻きに……、されちゃったじゃんか……」

ヤドンは糸で完全に覆われて動けなくなってしまった。

すかさず、ビードルはヤドンの急所に毒針を向ける。

「ビーー」

終わりだ。ポケモンの言葉など分からなくとも、その意図は明白だった。

「ちつくしよー！」

敗者の嘆きがこだまする中、早速ヤドンを撫でる為に近づいていくセラ。同じく、アルトもビードルに近づいていく。すると、ビードルはピヨンと飛び上がり、アルトの腕の中に収まった。

「ビービーー！」

「ああ、よくやった。カツコよかったよ」

「ビーー！」

得意満々のビードル。すると、ビードルの体が光を放ち始めた。

「これって……」

「ウソ、マジ!?」

セラが糸でメガヤドランのような状態になってしまったヤドンを抱きかかえながらアルトの傍へ寄って行く。アクセルも慌てた様子で後に続いた。

「すっげー！ これって、アレだろー！」

三人と一匹が見守る中で、アルトの腕の中にいたビードルはキラキラと輝く黄金の繭に変わった。

「ビードルがコクーンに進化した！」

コクーンを掲げるアルト。コクーンは嬉しそうに「コクー」と鳴いた。

「進化なんて、わたし初めてだよ！」

「オレだって！ すっげー！ すっげー！」

大はしやぎのセラとアクセル。そんな二人に負けず劣らず、アルトも嬉しそうに目を輝かせた。

「コクーン。すっごく、カッコいいぞー！」

「コクーン！」

その時だった。ヤドンを急に目を尖らせ、セラの腕から飛び出した。

「えっ!? ヤドン!?!」

ヤドンの体がコクーンへぶつかる。

「コクーン!」

「コクーン！」

コクーンが大きく弧を描いて飛んでいく。

「お、おい、ヤドン！ 何してんだよ！ バトルはもう終わったんだぞー！」

「ヤーン？」

「……こいつ、わかってねえ」

首をコテンと傾げるヤドんに頭を抱えるアクセル。

そうしている間に、アルトとセラは飛んでいくコクーンを追いかけて広場の外へ向かって走り出していた。

「あっ、待ってよー！」

慌ててヤドンを抱き上げて二人を追いかけるアクセル。広場が少し丘のようになっていたせいで地面に落下したコクーンはコロコロと転がっていく。

「コクーン！ 待って！」

「コクーン！」

「そっちはダメ！ この前の地震で地面にひび割れが出来ちゃったって、おじいちゃんか！」

セラの叫び声に、アルトは血相を変えた。

「コクーン！」

地面を転げ落ちるように走るアルト。少しずつ、コクーンとの間の

距離が縮まっていく。

けれど、視線の先にはセラの言っていたひび割れが広がっていた。思った以上に大きく、コクーンの大きさでは溝へ落ちてしまう。アルトは両腕を必死に動かした。

「コクーン！」

手足の無いコクーンでは何処かに捕まるどころか、踏ん張る事さえ出来ない。溝の深さは分からないけれど、今の勢いで落ちたら無事では済まない。

アルトは手を伸ばす。そして、コクーンの体はひび割れの中へ吸い込まれていってしまった。予想以上の深さに、アルトは叫んだ。

「コクーン！」

そして、一切の躊躇いなく溝の中へ飛び込んだ。

「ウソツ!? 待って、ダメ！ アルト！ コクーン！」

悲鳴をあげるセラ。すると、後ろからやって来たアクセルはヤドンをセラに押し付けると、そのままアルト達の後を追うように溝へ飛び込んだ。

「アルト！ コクーン！ 待ってろ！」

「アクセル!」

深い闇の中へ消えていくアクセル。セラは真っ白になりそうな頭を必死に動かした。

「お、おじいちゃんを呼ばなきゃ！」

セラはヤドンを抱きかかえたまま、崩れ落ちそうな足を必死に動かして、民家の方へ走っていった。

第一話 『コスラ洞窟』

その夜は空が澄み渡っていた。星があまりにも綺麗で、俺は外へ飛び出した。

庭の芝生の上で寝転がり、夜空を見上げていると、「ビービー」という鳴き声が聞こえてきた。起き上がって顔を向けると、そこには一匹のビードルがいて、お母さんが大切に育てている植物の葉を食べていた。

「ダメだよ、キミ！ それはお母さんが大切に育てているものなんだ！」

注意すると、ビードルは「ビー！」と威嚇して来た。

実に困った。食事中に口うるさく注意されたら、俺だつてムツとなる。だけど、このままだとお母さんが悲しんでしまう。

「そうだ！」

俺は家の中へ駆け戻った。

「えっと、たしか……」

部屋に戻って、カバンの中を漁る。すると、そこには黄色い果実が入っていた。

オボンの実と言って、今朝方、農園を切り盛りしているセラのおじいさんから譲り受けたものだ。ポフィンというポケモン用のお菓子の材料にもなるまろやかな味わいの果物だ。

庭に飛び出すと、食事を再開していたビードルが飛び上がり、毒針を向けながら「ビービー！」と怒り出した。

「怒らないでよ！ それより、コレあげる！」

「ビー？！」

オボンの実を差し出すと、ビードルは不思議そうに鳴いた。

「きつと、葉っぱより美味しいよ！」

半分に割って、片方を食べてみせる。程よく熟していて甘い。

もう片方をビードルの傍に置くと、ビードルは一口食べた。すると、「ビー!?!」と驚愕しながらムシヤムシヤと食べ始めた。

それから、そのビードルは毎夜の如く現れて、俺にオボンの実をせ

がんだ。おかげで俺は定期的にオボンの実を仕入れる為にセラの家の農場でアルバイトをする羽目になった。けれど、不思議と辛くは感じなかった。きっと、オボンの実を食べる度に心底幸せそうな鳴き声をあげるビードルを見る事が何よりの楽しみになっていったからだ。

いつの頃からか、ビードルは昼間でも俺の前にも顔を出すようになった。オボンの実をあげられなくても、一緒に散歩したり、一緒に寝転がったり、一緒に遊んだりするようになった。

気づけば、俺達は掛け替えのない友達になっていた。セラのおじいさんにモンスターボールを貰って、ドキドキしながらビードルの前に差し出すと、ビードルは自分からボールに入ってくれた。

第一話『コスラ洞窟』

「……ビードル」

「コクー」

いつの間にか眠っていたようだ。眼の前にコクーのキラキラした顔がある。

「コクーン……。そっか、進化したんだっけ」

どうにか守れたようだ。ダメージを受けた様子はない。

「良かった……。コクーン」

「コクー」

コクーンを抱きしめながら起き上がると、体中がズキズキと傷んだ。

「イツツ」

「コク!?」

「だ、大丈夫。全然、へっちゃらだよ」

コクーンを心配させないように表情を取り繕う。身動きが取れないほどでもない

「それにしても、ここは……」

地震で出来た溝の底へ落ちた筈なのに、どう見ても洞窟の中だ。天井を見上げると、小さな穴が空いている。おそらく、そこから落ちてきたのだろう。這い上がるのは無理そうだ。

幸い、ヒカリゴケが自生しているおかげで結構明るい。

「……とりあえず、出口を探そう」

呼吸が出来るという事は風の流れがあるという事だ。落ちてきた穴だけではここまで潤沢な酸素は供給出来まい。指をツバで濡らしてみる。前にテレビでやっていた風の向きを確かめる方法だ。わずかに風の流れを感じる。

「こつちだね」

「コクー」

「大丈夫。コクーの事は俺が守るよ」

ギョツと抱きしめると、コクーは嬉しそうに「コクー」と鳴いた。洞窟の中を歩いていくと、壁に奇妙な絵が刻まれている事に気付いた。

「これは……、ポケモン？」

テレビやインターネットで見たことのあるポケモンや、まったく見たことのないポケモンなど、様々な種類のポケモンが描かれている。「すごいな！ これ、誰が描いたんだろう」

見れば、コクーの進化系であるスピアーや、アクセルのヤドンが進化した姿であるヤドキングの絵もある。

だんだんと楽しくなってきた。俺は適当な絵を手で塞いだ。

「だーれだ！」

「コクー！」

「どれどれー」

出てきたのはギャラドスだった。

「ギャラドスだ！ かつこいいい！」

「コクー！」

しばらく遊んでいると、通路の先から声が響いてきた。

「誰かが助けに来てくれたのかな？ おーい！」

「おーい！ その声、アルトか！」

通路の先から駆け寄ってきたのはアクセルだった。

「なんだ、アクセルか」

「なんだとはなんだ！ 折角助けに来てやったのに！」

「出口が分かるの？」

「さっぱりだ！」

「やっぱりだ！」

アクセルは昔から猪突猛進で、こういう時はまったく頼りにならない。
い。

「それより、これ見てよ」

「これ？ どれ？」

「これこれ」

壁画を指差すと、アクセルは「どっひゃー！」と期待通りの声を上げた。

素直な所は彼の数少ない美点だ。

「だーれだ！」

「ポッポ！」

「残念、ヘルガーでした！」

「掠りもしねー！」

「コクー！」

しばらく二人と一匹で遊んでいると、お腹が空いてきた。

「……そろそろ、出口を探しに行こうか」

「そだな。ってか、呑気に遊んでる場合じゃなかったよな、絶対」

「コクー」

やれやれだぜ。一緒に遊んでいたくせに、コクーンは呆れたように鳴いた。

「まあ、普通に呼吸出来るし、風の向きを確かめれば出られんדרו」

アクセルは指にツバをつけた。さては、昨日のテレビを見ていたな。

「ホウエンチャンピオンが行く、石の洞窟探索大作戦……、超面白かったね」

「おう！ そう言えば、石の洞窟にも壁画があったよな。カイオーガとグラードンだったけ」

「そうそう。伝説のポケモンって、憧れるよね」

「だなー。オレも伝説のポケモンにあつてみたいぜ！ サンダーとか、ルギアとか！」

「そう言えば、カロスで凄い事件があったよね。なんでも、伝説のポケモン同士の激突だったよ」

「ああ、ネットで騒がれてたな。カイオーガやグラードン、ルギアもいたんだっけ」

「レックウザやラティオスもいたってさ。しかも、ルギアの背中にトレーナーが乗ってたって噂だよ」

伝説のポケモンの話で盛り上がっていると、急に開けた場所に出た。どうやら、風はここから来ていたようだ。

「なんだ、ここ」

「コクー」

テレビで見たポケモンリーグのコロシム並に広い。壁には相変わらずポケモン達の絵が描かれていて、奥には祭壇のようなものがある。

「……あれも、ポケモンなのかな？」

祭壇の背後には禍々しい巨大なポケモンの影が描かれていた。その影に傅くように二体の見覚えのないポケモンが頭を垂れていて、その周りのポケモン達も卑屈な姿勢になっている。

あまり、見えていて気分のいいものではなかった。

「なんだ、これ……」

アクセルも不気味に感じたらしく、眉間にシワを寄せている。

「行こっか。さっさと出口を探さなきゃ」

「おうー」

再び風の向きを確かめる為に指先を舐める俺達。すると、困った事に風が祭壇の方から流れてきていた。

顔を見合わせて、ため息をこぼす。

「行きますか……」

「行きましょう……」

「コクー……」

近づいてみると、祭壇はより不気味に感じられた。

——タタカエ。

「え？」

「は？」

俺達は顔を見合わせた。

「聞こえた？」

「アルトも？」

——タタカエ。

俺達は慌てて走り始めた。考えるよりも先に本能で理解した。

これは、とびつきりヤバイヤツだ。

風が吹いてくる方向には扉のようなものがあつた。俺達は扉を蹴破り、その先へ飛び込んだ。

そして……、信じられない光景を目撃した。

『……はあ？』

妙に声が反響している事も気にならない。それ以上に、目の前の光景が理解を超え過ぎている。

『せ、戦争!』

『コク!』

俺達の前には戦場が広がっていた。

まだ、洞窟から脱出出来ていない筈なのに、見上げた先には燃え上がる火炎に染められた紅蓮の空。その下では無数のポケモン達が蠢いている。

彼らは二つの陣営に別れていた。陣営の後ろにはそれぞれ巨大な青と赤のナニカが立っている。まるで亡霊のようにボヤケた輪郭。放たれる赤と青の光はおぞましい輝きを帯びている。

——タタカエ。タタカエ。タタカエ。

笑い声が戦場に響き渡る。紅蓮の空に暗黒が浮かんでいる。

あまりのおぞましさに吐き気がした。そして、理解した。この戦場はあの暗黒に捧げられたものだ。あの暗闇を楽しませる為だけに、青と赤の光はポケモン達をけしかけている。

「なんだよ、これ！」

急に、アクセルの声の響きが元に戻った。

気がつくつと、俺達は森の中にいた。

「あ、あれ？」

後ろを振り向いても、なにもない。ただ、森の木々が連なっているだけだ。

狐に化かされたような気分で顔を見合わせる俺達の耳に聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「アルト！ アクセル！」

その声は村の北に研究所を構えるポケモン博士のモンテロのものだった。

「博士！」

でつぶりとしたお腹を揺らしながら、博士は俺達の下へやって来た。

「おお、無事のようにやな！ ワシのドンカラスがお主等を見つけたんじゃ！ しかし、地割れの底に落ちたと聞いたのじゃが、なんでまたこんな場所に？」

博士の横でドヤ顔をかますドンカラスにお礼を言いつつ、俺達はさつきまで彷徨っていた洞窟の事を博士に話した。

すると、博士は難しい表情を浮かべながら、「もしや……」とつぶやいた。

「なにか知ってるの？」

「……うむ。おそらくは、コスラ洞窟じゃな」

「コスラ洞窟……？」

博士は言った。

「大昔、この付近に存在した洞窟の名じゃよ。偉大なる神を祀る者達がコスラ洞窟に身を寄せ、祈りを捧げていたという伝承が残っている。お主等が見た壁画や祭壇はその名残じゃろう」

「オレ達が見た戦場は？」

「……それは、たぶん、夢ではないか？」

「夢？ 二人揃って同じ夢を見る事なんてあるの？」

博士は困ったように白ひげをイジった。

「もしかしたら、ポケモンの催眠術かもしれん。一部のポケモンは対象に指向性をもたせた夢を見せる事も可能と聞くからろう。一応、村に戻ったら研究所で検査をしよう」

博士のドンカラスに先導されながら、俺達は村へ戻っていった。森を抜け、村の入り口が見えてくると大人達が叫びだし、セラが飛び出してきた。

「アルト！ アクセル！」

感動の再会だ。アクセルと視線を交わし、俺達は急いで逆走した。けれど、ドンカラスに通せんぼを喰らい、セラの拳が唸った。

「このバカ共！ 心配させんじやないわよ！」

手加減なしのゲンコツ。とんでもなく痛い。けれど、それだけで許してくれる女ではなかった。俺達は大衆の面前で正座をさせられ、痛みを耐えながら延々と続くセラの説教を聞く羽目になった。

おじいさん譲りのセラの説教はとにかくキツイ。

「説教中に寝てんじやないわよ！」

居眠りをしたアクセルのせいで、説教はさらにエスカレートしていく。く。

ああ、ベッドが恋しい……。

第二話 『ヴリル』

目が覚めた時、時計の針はとつくに十二時を通り過ぎていた。昨夜は洞窟を彷徨ったり、セラに殴られたり、セラに説教されたりでヘトヘトだったから目覚ましをセットする事もなく泥のように眠ってしまったんだ。

部屋の隅に置いてあるポケモン用のベッドではコクーンがスヤスヤと眠っている。何度見てもカッコいい。博士によれば、コクーンでいる時間はとても短いらしい。前にお父さんから譲り受けたカメラを構えてコツソリとコクーンの寝顔を撮影する。

カシャカシャしていると、コクーンが目を覚ました。

「コクーン？」

「おはよ、コクーン」

「コクーン！」

今日はアクセルと一緒に博士の研究所へ向かう予定だ。ポケモンの催眠術をくらった可能性があるからで、念の為に検査をする事になっている。

第二話 『ヴリル』

我が村が誇るポケモン博士のモンテロはポケモンの生態の中でも、とりわけバトルに纏わる研究を行っている。

なぜ、ポケモンは戦うのか？

その謎を追求する事が博士の使命らしい。

ポケモンには極一部を除き、強力な戦闘能力がある。その極一部さえ、進化を経て強力な力を宿すようになる。まさに戦う為に生まれた生物だと、博士は言った。

特に、ここアガリア地方のポケモンは他の地方と比べても闘争本能が強く、野生のポケモン同士のバトルがアチラコチラで頻発しているらしい。

通常、ポケモンはトレーナーにゲットされる事で限界を突破したり、特殊なアイテムを与えられて強力な力を持った進化形態になる。だから、他の地方では最終進化形態と呼ばれるようなポケモンが野生

で存在する事は滅多にない。けれど、この地方では特殊なアイテムを必要とする進化以外の進化形態が野生で生息している。それほど、限界を越えたバトルが繰り返されているという事だ。

「アクセルは起きてるかな？」

コクーンを抱えながらアクセルの家に向かう。庭ではアクセルのお父さんのヌメルゴンが花壇に水を上げていた。ドラゴンタイプの最終進化形態であるヌメルゴンは治安維持の為に日々働く警察官であるアクセルのお父さんの切り札だ。

四天王のミリガンを筆頭とする警察組織のメンバーは強力な野生ポケモンや、悪党に対抗する為に必ず地方のジムを巡る事が義務付けられている。要するに、ポケモンリーグ出場が採用条件に加えられているわけだ。

お父さんに憧れているアクセルも、いつかジムを巡って警察官になる事を夢見ている。昨日のバトルはその夢の第一歩だったわけだ。見事に一歩目からコケてしまったけど、俺のビードルは強くてカッコいいから仕方ない。

「おはよ、ヌメルゴン！」

「ゴーン！」

ヌメルゴンは尻尾をブンブン振りながら手も振ってくれた。幼い頃からよく遊んでもらっている。俺達にとっては頼れるお兄さんだ。

ヌメルゴンにコクーンを見せびらかした後、インターホンを鳴らした。すると、中からアクセルのお父さんが出てきた。名前はアラート。山賊というか、海賊というか、とにかくアウトローな感じの顔の人。右目を覆う眼帯が余計に顔を厳つくさせている。

「おお、アルトじゃねーか！ 昨日は災難だったな！ 体は大丈夫かな？」

「はい、バッチリです！ でも、一応博士の所で検査を受ける事になってるんです。アクセルと一緒に」

「そうだったのか。アクセルは帰ってくるなり爆睡しちまったからな。ちよつと待ってな」

アラートが奥に引っ込むと、鼓膜が破れそうな大声が響き渡った。

「起きろ！ アルトが待ってんぞ！」

「どわー!? 父ちゃん!? 何事だ!?」

「アルトが待ってるぞ！ さっさと顔を洗ってこい！」

「やっべー！ こんな時間!?!」

「急げ急げ！」

相変わらず、騒がしい一家だ。

「待たせたな！」

見事に髪をセットしたアクセルが出てきた。アクセルのお母さんは服飾関係の仕事をしていて、身だしなみにすぐうるさいのだ。寝癖が一本でもあろうものなら雷が落ちる。

「おはよ、アクセル」

「おいーっす！」

寝起きとは思えないテンションの高さだ。俺がコクーンを抱えているのを見ると、自分もヤドンを出して抱えだした。

「ほれ、昨日はお前のせいで大変だったんだぞ。ちゃんと謝れよ！」

「ヤーン？」

「……あー、ごめんってよ」

「あはは……」

「コクーン……」

相変わらず、何を考えているのかいまいちよく分からないポケモンだ。

でも、可愛いから許す。触らせてもらうと、ついつい病みつきになっってしまうそうなほどプニプニしている。

「ヤーン」

ポケモン研究所に向かうと、途中でセラの家の農園を横切った。遠くでセラがおじいさんと果物や野菜の世話をしているのが見える。大声で声を掛けると、「しっぴかり検査してもらいなさいよ！」と返された。

素直に返事をして、そのまま丘を上っていく。広大な敷地にポケモン達が放し飼いにされている。ここがポケモン研究所だ。

博士のドンカラスが入り口で待ち構えていた。

「ドンカラス、おはよう！ 昨日はありがとう！」

「サンキューー！ マジ感謝！」

「コクーー！」

ドヤ顔を決めるドンカラス。

ポケモン研究所にいたるポケモン達のリーダーでもあるドンカラスが研究所の本棟へ向かって飛ぶと、周りのポケモン達はビシツと整列した。さすがのリーダーシツプだ。

本棟に入ると、早速博士がやって来た。

「おお、よく来たのう！ 早速じゃが、検査を始めるぞ。なに、ちよつと機械の前に立つだけでよい。ポケモンの技の影響を確かめるだけじゃなからな」

博士に言われるまま奇妙な機械の前に立つと、カシャツという音と共に博士のパソコンに俺の姿が映し出された。そこに様々なデータが表示されている。

「うむ！ 問題無さそうじゃな。ただ、二人共朝ごはんをちゃんと食べてこなかったようじゃな。それはいかん！ せつかくじゃ、ホットケーキでも食べていかんか？」

「食べてくー！」

「やつほー！ ホットケーキ！」

棚からぼた餅。セラが聞いたらさぞかしうらやましがる事だろう。博士のお菓子は絶品なのだ。さすがはメタボになるほど自分で作ったお菓子を食べてきた男だ。情熱が違う。

「ほっほっほ！ 今日のスフレ風じゃぞ！ ふわふわで口の中でとろけるんじや！ 美味しいぞい！」

チョコとメイプルと蜂蜜といちごジャムの中から好きなものを選んでかける。アクセルはチョコレートで、俺はメイプルだ。コクーンと分け合うと、「コクーー！」とコクーンは歓声を上げた。

「さすがポケモン博士！ 超美味しい！」

「ポケモン博士関係あるか分かんねーけど、天才だぜ！」

「ほっほっほ！ もっと褒めていいんじやよ！」

ドンカラスのドヤ顔を決める癖は間違いなく博士の影響だ。顔の上げ方が瓜二つ。

「そう言えばさ」

「ん？」

スフレのホットケーキを食べながら、俺は気になっていた事を博士に尋ねる事にした。

「あのコスラ洞窟だっけ？ あそこで崇められていた神って、もしかしてポケモンなの？」

「ポケモン？ あの黒いのが？」

あの戦場の光景で笑っていた暗黒。きつと、祭壇の奥に描かれていた黒い影はアレを描いたものに違いない。

「……偉大な神。ワシ達はヴリルと呼んでおる」

「ヴリル？」

「変な名前だな」

そんな名前のポケモンは聞いた事がない。

「ヴリルは闘争の神じゃ。ヴリルには付き従う二柱の神司がおり、ポケモンや人に『戦い』を伝えたとされておる」

「戦いって、要するにポケモンバトル？」

博士は重々しく頷くと、すっかり空になった皿をキッチンに運んでいってしまった。

お土産に鈴カステラを貰って、来た道に戻っていくと、セラが待っていた。

「おっ！ 二人共、大丈夫だった？」

「うん。特に問題無し」

「ホットケーキを食べたんだぜ！ いいだろー！」

「なにー！ 二人だけで博士のお菓子を食べるなんてズルい！」

「どうどう、落ち着けセラ」

「ほら、お土産に鈴カステラをもらったんだ。一緒に食べようよ」

博士の鈴カステラは怒れる猛獣をも黙らせる。セラはすっかりご機嫌になった。

「ふーん。ヴリルねー。おじいちゃんにも聞いた事ないわよ？ そ

れ、博士の作り話とかじゃないのー」

鈴カステラをモキユモキユと頬張りながらセラが言った。

「博士が作り話なんてするわけじゃないよ。データが友達なんだよ？ あの人」

「それに、オレ達は実際見たしな」

「それも怪しいなー。ポケモンの催眠術で見た夢なんですよ？」

「博士はそう言ってた」

「……ねえ、君達」

三人でヴリルの話をしながら歩いていると、急に帽子を被った黒尽くめの男の人に声を掛けられた。

怪しい人には近づかない。これは子供達の共通認識だ。ズザザザと後退る俺達に男の人は困ったような表情を浮かべ、帽子を取った。黒い短髪に鋭い眼光。けれど、思ったより怪しそうじゃない。

「えっと、おじさんは？」

「おじっ……、俺はダレル。ジャーナリストってヤツさ。君達、面白そうな話をしていたね。詳しく聞かせてもらえないかな？」

「ジャーナリストって、新聞記者の人なの？」

セラが興味を持ったようだ。

「ああ、そうだよ。この村に取材に来ていたんだ。もし、名物になるようなものがあれば、是非紹介したいんだよ。もしかしたら、記事に君達の名前が乗るかもしれない。どうかな？」

「新聞に名前が!? 是非是非! いいわよね、二人共!」

有無を言わさぬ迫力。こうなると、もはや何を言っても暖簾に腕押し。

俺達は人生初のインタビューを受ける事になった。

俺達が話したのは昨日の事。地割れに落ちた時の事を話すと、ダレルはひどく心配してくれた。やっぱり、第一印象と比べてずっといい人のようなだ。

コスラ洞窟の話、壁画の話、祭壇の話、ヴリルの話。すべてを話し終える頃にはすっかり空が赤くなってしまった。

「ありがとう、三人共。俺はこれからモンテロ博士の研究所にも取材

に行ってみるよ。記事が出来たら送るから、是非とも読んでくれ！」

「はーい！」

「楽しみにしてますー！」

「オレ達の名前、ぜってー載せてくれよな！」

手を振って別れた後、セラは「あれ？」と首をかしげた。

「どうしたの？」

「ん？ わたし達、博士の名前を言ったっけ？」

「えっと、どうだろ。言ったんじゃない？」

「言っただけでも、博士はそれなりに有名って事だろ。オーキド博士やナナカマド博士みたいだ。そういう印象、あんまり無いけどさ」

「それもそっか」

そろそろ帰らないとまずい。セラに別れを告げて、俺達は家に向かって駆け出した。

お母さんが、今夜はビーフシチューだと言っていた事を思い出す。

楽しみだ。

第三話 『四天王・ミリガン』

静かな夜。お父さんは仕事で遠くの街に行っているからしばらく帰ってこないし、母さんもセラやアクセルのお母さんと慰安旅行で遠出している。帰ってくるのは明後日だ。

別に珍しい事じゃない。俺にはコクーンがついているし、アクセルのお父さんがいる限り、村の治安もバツチリだ。

「……オラ！ 作ってやったわよ！」

ドンと音を立ててテーブルに並べられるご馳走の数々。

お母さん達はだいたい三人一組で行動する。母親の居なくなった家に料理の出来る人間が残っているのはセラの家だけなのだ。とうより、セラしかないのだ。

「いつもすまねえな、嬢ちゃん！」

アクセルのお父さんも一緒だ。村一番のポケモントレーナーもセラには頭が上がらない。

賑やかな食事が始まると、会話の流れは案の定というか、昼間出会ったジャーナリストのダレルの件だった。

「はー！ 俺達の村もついに新聞デビューか！ ぶっちゃけ、あんまり観光資源とかなかったからな、ここ。モンテロの爺さんの研究所くらいだろ」

「そう言えば、ダレルさんは博士の名前を知ってたんだよね。やっぱり、有名なのかな？」

「んー、研究所を構える程度には成功している筈だからな。それに、ポケモンセンターがない代わりにいろいろとポケモンの世話や治療もしてくれるし、俺達にとってはオーキド博士以上に偉大な人だ！」

アラートさんを始め、村の大人達はみんな博士の事を尊敬している。もちろん、俺達だつて尊敬しているし、大好きだ。

違う街から取材に来たジャーナリストに名前を知られている事がないんだか嬉しい。

「アクセルとアルトを見つけたのも博士とドンカラスだったしな！ さすがだぜ、博士！」

第三話『四天王・ミリガン』

食事の後、アラートさんの武勇伝を聞いたり、農園で肝試しをしていたら帰りがすっかり遅くなってしまった。

「眠い……」

「コクー」

途中でアクセルやアラートさんと別れ、家にたどり着くと倒れ込むようにベッドへ向かった。

「おやすみ、コクーン」

「コクー」

瞼を閉じると、俺はあつという間に眠りに落ちた。

そして……、

「……んー？」

妙な臭いと音で起こされた。咄嗟に視線を向けた目覚まし時計の針は四時二十五分を指し示している。

「コクー？」

コクーンも起こされたようだ。

「なんなの、この臭い……」

起き上がり、窓のカーテンを開ける。

「……え？」

窓の外には、地獄が広がっていた。

紅蓮の業火が蛇のように蠢き、村を焼いている。そして、嘘みみたいな数の巨大なポケモン達が炎の中で暴れている。徐々に状況に気づき始めた村人達が騒ぎ出している。

「はは……、なんだよ。まだ、夢を見てるのか」

あり得ない。俺はベッドに戻った。

「コクー!?!」

コクーンが騒いでいるけど、これは夢なんだ。はやく起きて、現実のコクーンに会おう。

明日はセラの農園で久しぶりにアルバイトをする予定なんだ。たっぷりオボンの実をもらって、セラにポフィン作り方を伝授してもらおう約束だ。コクーンにいっぱい食べてもらって、立派なスパア―

に進化してもらおう為に。

「はやく……、起きなきゃ」

瞼を閉じる。そして、強い衝撃が家全体を揺らした。

「うわっ!？」

ベッドから転がり落ちた俺は、窓の外から巨大な眼光が覗き込んでいる事に気付いた。

「なっ……、なっ……」

「コクー!」

コクーンの叫びで我に返った。

「コ、コクーン!」

「コクー!」

慌ててコクーンを抱きしめて部屋を飛び出す。階段を三段飛ばしで降りて玄関を飛び出すと、そこにはポケモンリーグの中継でしか見たことのないバンギラスの姿があった。その後ろにはギャラドスやボスゴドラの姿もある。

バンギラスは躊躇う事なく巨大な爪を振り下ろしてきた。

「コクー!」

腕の中からコクーンが飛び出す。

「だ、ダメだ、コクーン!」

案の定、コクーンは吹き飛ばされた。慌てて追いかける。あんな勢いできりさかれたら、瀕死ではすまないかもしれない。涙が溢れてくる。

「い、いやだ、コクーン!」

コクーンは木にぶつかって止まっていた。

「コ、コク……」

弱々しいけど、コクーンは生きていた。

「待ってる! すぐに研究所に連れて行って治療してもらおうから!」

コクーンを抱きかかえる。すると、うしろからズシンという音と共に衝撃が走った。バンギラスはまだ俺達を狙っていた。ただ、歩いただけなのに、まるで地震のように地面が揺れた。

殺される。俺はコクーンを抱きしめた。

「大丈夫だ、コクーン！ お前だけは俺が守ってやるから！」

「コク!? コクーン！ コクーン！」

暴れだすコクーンを必死に体で覆い隠す。

「コクーン！」

「うわああああああああああ！」

迫り来るバンギラスの爪。万事休すだ。俺は咄嗟に目を瞑った。

そして、ガキンという金属のぶつかり合う音を聞いた。

「……え？」

恐る恐る振り向くと、そこには盾と剣が浮かんでいた。

「なに、これ……」

「ギルガルド！ 聖なる剣！」

「ギル！」

女の人の声と共にギルガルドという剣と盾の形をした奇妙なポケモンはバンギラスに向かっていった。

「お、おい、相手はバンギラス……なのに……」

一瞬だった。俺の目には、剣がバンギラスの横を通過しただけのように見えた。

それなのに、バンギラスは首から血を吹き出しながら地面に倒れ伏した。そして、ギルガルドはそのままギャラドスとボスゴドラに向かっていき、二体の強力なポケモンを一方的に討ち倒してしまった。

「す、すごい……」

「君、怪我はない？」

「え？」

見上げた先には赤い瞳が浮かんでいた。

「もう、大丈夫！ わたしは四天王のミリガン！ 助けに来たわ！」

「四天王……、ミリガン!?!」

名前は知っていた。アラートが所属している警察組織の筆頭。それが四天王のミリガンだ。

でも、その容姿は驚くほど若々しくて、その上、息を飲むほど綺麗だった。

ミリガンは腰に携えた刀を抜き放ち、ぞろぞろと俺達を囲うように

集まり始めたポケモン達を睨みつける。どれも、ポケモンリーグに出
てくるような強力なポケモン達だ。

「大丈夫！ 君達はわたしが守る！ 出てきなさい、キリキザン！
ハツサム！ ジュカイン！ グソクムシャ！ エアームド！」

ギルガルドを含めた六匹のポケモン達が俺達の周りに姿を現す。

「ジュカインはこの子を守って！ 他のみんなは敵を蹴散らさない
！」

「ジュカ！」

「ギル！」

「キザツ！」

「クアー！」

「シャツ！」

「ハツサム！」

ジュカインを残して五匹のポケモンが散っていく。

その光景は、まさに圧巻だった。

「ハツサム！ 影分身で敵を攪乱！ グソクムシャとキリキザンはシ
ザークロス！ ギルガルドは聖なる剣！ エアームドは鋼の翼！」

ミリガンは矢継ぎ早に指示を繰り返し、ポケモン達は完璧に伝えて
みせる。相手もラグラージ、カイリユー、ボーマンダ、ハガネールと
いった最終進化形態なのに、一撃以上を耐えられたポケモンは一匹と
していない。

レベルが違いすぎる。これが四天王・ミリガン。最強の五人の内の
一人。

「よし、これで！」

見えている範囲のポケモンを殲滅し終えたミリガンは俺の下へ駆
け寄ってきた。

「今、わたしの部下が避難誘導を行っているの。君もそっちへ……ッ
!?!」

急にミリガンは俺を抱きかかえると大きく跳躍した。目を丸くし
ていると、空から何かが地面へ落ちてきた。

「な、なに?! なに?!」

慌てふためく俺を尻目にミリガンは苦々しい表情を浮かべた。
降り立ったのは帽子を目深に被った男の人だった。

「ミリガン。バトルしようぜ！」

「……え？ え？」

次から次へと、もはや何がなんだか分からない。

この状況で、どうして爽やかに微笑みながら『バトルしようぜ！』という言葉が出てくるのかもサツパリだ。というか、どこから現れたんだろう。

「……状況が分かっていないの？」

「分かっているさ！ この村の人々にも、この村を襲ったヴリル教団の連中にも感謝だ！ この状況なら、お前の本気と戦える！ さあ！

この村の人間を救いたいならオレとバトルだ！」

まるで幼い少年が最高の友達と相対しているかのように、その顔には一切の邪気がない。

それが、この状況では余計に不気味だった。

「この戦闘狂！ だから、あなたは歩く災害なんて言われるんです！

チャンピオン！」

「え？」

一瞬、ミリガンが何を言っているのか分からなかった。

「チャン……、ピオン？ え？ え？」

時間を掛けて、その言葉はゆっくりと頭の中に浸透していった。

「チャンピオン!？」

それはポケモントレーナーの頂点。最強の称号。その持ち主は二つ名に相応しく好戦的で、爽やかに笑っている。

「さあ、ミリガン！ バトルしようぜ！」

第四話 『チャンピオン』

「退けよ、父ちゃん！ アルトは家に一人きりなんだぞ！」

寝ている間に避難所へ連れて来られたアクセルは父親に噛み付いていた。一度寝たら中々起きないセラはお爺さんに背負われて避難して来たが、どんなに探してもアルトの姿はない。

「ダメだ」

「うるせえ！ 状況分かってんのか!? アルトが死んだらどうすんだよ！」

「いいから落ち着きやがれ！」

アラートの怒声は周囲の人間達を竦ませたが、アクセルは尚を食い下がるうとする。そんなアクセルに困ったのような、けれどどこか嬉しそうな表情を浮かべるアラート。

「大丈夫だ。ここに避難する前に状況を俺達の筆頭に伝えてある。両親不在で子供が一人取り残されている家があるって伝えたら直行してくれたよ」

「筆頭って……」

「四天王のミリガン。この世界で上から数えた方が早いほどの実力者だ。筆頭が助けに行つた以上、アルトはむしろここに居るより安全だ」

剣帝、あるいは剣聖と呼ばれるほどの剣の達人であるミリガンは己のポケモンに己の剣技を仕込んでいる。ポケモンの技に人間の業を重ねる事で、ミリガンは四天王の座へ上り詰めた。

その実力を、アラートはポケモンリーグで体感している。絶対的な強者。他の四天王と比べても、明らかに突出している。

村を襲つた者達も相当な実力者揃いだが、ミリガンの前では相手にならない。

「だから、アクセル。お前はセラの嬢ちゃんを守ってろ。俺もそろそろ持ち場にかねーといけねーんだ」

「……本当だろうな」

アクセルはアラートを睨みつけた。

「絶対、アルトは無事なんだろうな！」

「ああ、絶対だ！」

その言葉でようやくアクセルは安堵した。

アラートは決して軽はずみな事を口にする男ではない。その男が絶対という言葉の口にしたなら、それは絶対だ。アルトは大丈夫。

「……俺、セラの所にいるよ」

「ああ、そうしとけ！」

アラートは息子の頭を乱暴に撫でると持ち場へ向かっていった。

第四話『チャンピオン』

「断る！」

ミリガンはポケモン達をモンスターボールに戻しながらチャンピオンの言葉を一刀両断した。

コクーンを抱えたままの俺の体を軽々と持ち上げてチャンピオンに背を向ける。

すると――、

「バシャッ！」

眼の前に赤い影が現れた。

「バシャーモ!？」

「コク!？」

人のような姿の鳥ポケモン。ホウエン地方の初心者用ポケモンであるアチャモの最終進化形態が燃え盛る炎を脚に宿らせて俺達を睨みつけている。

「お前は誰よりも優しい。それはお前の弱さであり、同時に強さでもある。罪なき者達が理不尽に蹂躪される状況！ この状況がお前の本気を引き出す！ オレは、そんなお前の本気とバトルしたい！ そうしたい！ だから、バトルしようぜ、ミリガン！」

「ふざけるな！ こうしている間にも、わたしの仲間が戦っているんだ！ 傷ついているんだ！ 邪魔をするな！」

「はやく駆けつけたいなら、今ここでオレを倒してみせろ！」

「お前はわたしより強い！ その事は、チャンピオンリーグで証明されている！ あの時、わたしは本気で戦った！ そして、負けたんだ

！今のわたしがお前に挑んでも勝てないんだ！頼むから、わたしにみんなを助けに行かせてくれ、チャンピオン！」

ミリガンの叫び声にチャンピオンは笑った。

「最高のジョークだな、ミリガン！あの時のお前が本気？嘘をつくな。公式戦！ルールの定められた戦場で、お前が本気を出す事などあり得ない！それなのに、お前は四天王となった！思いやりに溢れた相手を気遣う戦い方でさえ、お前は最強に近い力を示した！そのお前の本気をオレは知りたい！味わいたい！だから、オレとバトルだ！さもなければ、その小僧が死ぬ事になるぞ！」

悪寒が走る。チャンピオンとバシャーモの目に宿る炎の如き意志に俺は体を竦ませた。

「バシャーモ！ブラストバーン！」

「バシャー！」

その技を俺は知っている。前にポケモンリーグの試合をテレビで見た時にリザードンが使っていた。ほのおタイプの技の中で最強の技。

バシャーモは炎を纏う脚を大地に振り下ろした。

「チャンピオン！」

「なっ!?!」

何が起きたのか理解出来なかった。舞い散る赤が何なのか、バシャーモがどうしてブラストバーンの発動を止めたのか、なにも分からなかった。

「な、なにをしている!?!」

チャンピオンが駆け寄ってくる。

ミリガンは俺とコクーンをゆっくりと地面におろした。そして、ようやく彼女のでかした事の正体が分かった。

彼女は自らの刀を自らの腹部に差し込んでいた。

「え……、え？」

「コクーン……？」

腹部から止め処なく血が溢れ出し、口からも血を零しながら、それでもミリガンは鋭い眼光をチャンピオンに向けた。

「このままだと、わたしは死ぬぞ！」

「……お、お前」

チャンピオンは顔を引き攣らせた。そして、深々とため息を零した。

「今のお前となら、最高のバトルが出来る筈なのに……」

そう言うと、チャンピオンは俺達に背を向けた。

「五分待っている。その後、病院へ連れて行く」

チャンピオンは新たなモンスターボールを放り投げる。現れたのはフシギバナ。

「フシギバナ、ハードプラント！」

その技も知っていた。けれど、俺の知っているハードプラントとは、威力も範囲も桁違いだった。いつの間にか俺達の周りに集まっていたポケモン達が地面から飛び出した無数の蔦に絡め取られて身動きを封じられてしまっている。蔦に囚われたポケモン達はその締め付けによって次々に意識を失っていき、ハードプラントが解除された後には一体足りとも立ち上がれるポケモンはいなかった。

「出る、ルカリオ。ゲッコウガ！」

次に現れたポケモンはルカリオとゲッコウガ。

「ヴリルの連中を全員潰せ」

「ワウ！」

「コウガ！」

二体のポケモンは信じられない速度で燃え盛る大地を駆け抜けていく。そして、彼らの向かった先から次々に悲鳴が響き渡った。

「……心配しなくても大丈夫」

俺の不安を察したのか、ミリガンは血の気の失せた顔で言った。

「ザラクは……、チャンピオンは自己中だけど、悪い人間ではないから……」

「ミ、ミリガン!？」

ミリガンは崩れ落ちた。よく見れば、地面が血の海に変わっている。

「ミリガン！」

グツタリし始めたミリガン。すると、彼女の頬に水滴が付着した。「へ？」

頭上を見上げると、いつの間にか雨雲が発生していた。

「小僧。ミリガンを寄越せ」

「え？」

いつの間にかチャンピオンが傍に来ていた。ミリガンを抱き上げると、空中に向かって「ギャラドス！」と叫ぶ。すると、ギャラドスが空を泳ぐようにやって来た。

どうやら、チャンピオンのギャラドスらしい。この雨もギャラドスのあまごいによるものみたいだ。村を焼く炎が勢いを失っていく。

「これでいいんだろ？」

「……上出来」

チャンピオンの言葉にミリガンが弱々しく答える。そして、二人はギャラドスの背中に飛び乗った。ミリガンは何か言おうとしているけれど、チャンピオンは俺に見向きもしていない。

それでも、俺は二人にお礼を言おうと思った。去っていくギャラドスに向かって大きく息を吸い込んで、「ありがとう！」と叫んだ。

すると、傍で倒れていたバンギラスが突然動いた。

「えっ？」

迫りくる鋭い爪を前に、俺は何も出来なかった。あまりにも突然過ぎたし、あまりにも俺は無防備だった。

折角助けてもらったのに、俺は死ぬ。だから、胸に抱き続けている親友だけは守ろう。そう思っ、俺は腕に力を籠めて、自分の体を盾にした。

「コクー!!!」

その瞬間、コクーの体から凄まじい光が溢れ出した。びっくりして手を離すと、コクーだったソレは目の前からかき消えた。そして、ほぼ同時に背後でガキンという金属同士がぶつかり合うような音が響いた。

デジャヴを感じるけれど、今度のそれはミリガンのギルガルドじゃなかった、

振り向いた先にいたのは、コクーンの新形態。

「スピーィィィィ!!!」

バンギラスの切り裂きを受け止めたスピアーはバンギラスの腕を這うように頭部へ向かっていき、鋭く尖る両手のニードルを構えた。右手のニードルはバンギラスのコメカミに直撃し、続く左手のニードルはのけぞったバンギラスの首を容赦なく抉った。

元々のダメージもあったのだろう。急所に命中したダブルニードルによって、今度こそバンギラスは戦闘不能になった。

「ス、スピアー……、すごい」

「スピーィィィィ!」

あまりにも見事な勝利にポカンとしていると、スピアーが抱きついてきた。

「わわっ!!」

コクーンの状態でもかなりのサイズだったがけれど、スピアーに進化した今、そのサイズはまさに特大だ。俺はそのまま尻もちをついてしまった。

「スピー!? スピー」

「あはは、大丈夫だよ。それより、ありがとう! カッコよかったよ、スピアー!」

「スピ? スピー!」

スピアーは途端に誇らしげな表情を浮かべた。なんだか、博士のドンカラスみたいなドヤ顔だ。

「スピアー。進化したんだね」

「スピー!」

ビードルがコクーンに進化したのはつい先日のだ。いくらなんでも早すぎる。

きつと、それだけ俺のピンチに必死になってくれたんだ。

「ありがとう、スピアー!」

「スピー!」

第五話 『運命の夜』

一夜が明けた。俺はいつものようにベッドから出て、コクーンにはようを言おうとした。けれど、そこにいたのはスヤスヤと寝息を立てているスピアーだった。

「……そっか、昨日は」

窓の外を見る。昨夜のポケモン達の襲撃によって、ほとんどの建物が倒壊している。木々もなぎ倒され、焼け焦げている。

けれど、ミリガンとチャンピオンに倒された百体以上のポケモン達の姿は見つからない。

「どこに行ったんだろう」

俺はスピアーを起こして避難所の方へ向かった。賑やかな声のおかげで場所はすぐに分かった。ポケモン研究所だ。

研究所はアラートのヌメルゴンを筆頭にガブリアス、ファイアロー、エルレイド、ゲンガーなどの強力なポケモン達が警戒態勢を取っていた。俺が近づいていくと、真っ先にヌメルゴンが気付いてくれた。

「ゴーンー！」

ドタドタと駆け寄ってきて、俺とスピアーを抱き上げるヌメルゴン。

「ゴーンー！ ゴーンー！」

かなり心配させてしまったらしい。ヌメルゴンの目には涙が溜まっていた。そのまま、俺達はヌメルゴンに避難所の中心部へ連れて行かれた。

「ゴーンー！ ゴーンー！」

ヌメルゴンの叫び声を聞きつけたアラートがやって来る。

「おじさんー！」

「スピアー！」

「アラート！ アルトじゃねーか！ 良かった、無事だったんだな！」

アラートはヌメルゴンから俺を受け取ると、スピアーを見た。

「……進化したのか」

「うん。バンギラスに襲われた時に！ かつこ良かったんだよ！」

あの時の事を思い出すと、胸が熱くなる。

絶体絶命のピンチだった。だけど、コクーンがスピアーに進化してくれたおかげで俺は生き残れた。あの時のスピアーのカッコ良さと来たら！

「凄いんだよ！ バンギラスの腕を這うように飛んでいって、ダブルニードルで二撃必殺！ 進化したてなのに、高レベルのバンギラスをだよ！」

スピアーを抱きしめながら自慢すると、アラートは苦しむような表情を浮かべた。

「おじさん…………？」

「…………すまねえ」

アラートは俺達を抱き締めると、涙を零した。

「お、おじさん!？」

「すまねえ！ 本当にすまねえ！ 筆頭が行けば大丈夫だと思っちゃまった！ 馬鹿だったぜ！ アクセルの言う通りだ！ 俺はあの時、お前を助けに行くべきだった！」

「お、おじさん、泣かないで！ 俺、生きてるんだ！ スピアーが助けしてくれたんだ！ だから…………」

アラートが泣き止んだのは、それから十分も後の事だった。大の大人が、まるで子供のように泣きじゃくる姿を俺は初めて見た。それも、勇敢でカッコイイ村一番のポケモントレーナーのアラートの泣き顔だ。

それだけ、心配させてしまったのだと分かった。ヌメルゴンも後ろでグズグズと鼻を鳴らしている。

「…………ごめんね、おじさん」

「アルトが謝る事は何もねえ！ よくぞ、無事でいてくれたな…………」

アラートはもう一度俺を抱き締めると、スピアーに向き合った。

「お前さん、前々からやるヤツだと思ってたんだ。よく、アルトを守ったな」

アラートはスピアーを抱きしめた。

「スピー……」

スピーはちよつと嫌そうだった。

「……さて、アクセルとセラの嬢ちゃんの所に行こう。お前さんを助けに行つた筈のミリガンが病院に搬送された話を聞いて、半狂乱状態だ。つたく、チャンピオンの野郎……」

「おじさん、チャンピオンの事、知ってるの？」

苦々しい表情を浮かべるアラートに問いかけると、その表情は更に渋いもの変わった。

「最悪な野郎だ。アイツのせいでジムリーダーは半数が入れ替わつた。アガリア地方の全制空権を握っていたメルカト・シテイのジムリーダーもな……。そのせいで、今や空はドラゴンポケモンの領域だ。飛行機やへりはおろか、迂闊にポケモンで空を飛ぶ事も出来ねえ……」

アクセル達の下に辿り着くまで、アラートは延々とチャンピオンの愚痴をつぶやき続けた。

どうやら、かなり鬱憤が溜まっていたようだ。

「しかもな！ あの野郎はチャンピオンの癖に前途有望なポケモントレーナーを見つけると、平気で野良バトルを仕掛けやがる！ そのせいで再起不能にされたトレーナーも少なくねえ！ ついた渾名が『歩く災害』だ」

そう言えば、ミリガンもチャンピオンを歩く災害と呼んでいた。

どうやら、かなりの危険人物らしい。

「アルト！」

しばらく歩いていると、アクセルとセラが駆け寄ってきた。

良かった。二人は家族と一緒にだったからあまり心配はしていなかったけれど、怪我をした様子もない。その事に安堵していると二人に押し倒されてしまった。

「だ、大丈夫だったのかよ!？」

「し、し、心配、し、したんだから！」

二人もアラートやヌメルゴンに負けず劣らず大泣きだった。

第五話『運命の夜』

アクセルやセラだけじゃなくて、村中の人にもみくしやにされ、電
話で慰安旅行に行っているお母さんにまで泣かれてしまい、陽が沈む
頃にはすっかりヘトヘトになってしまっていた。

「ねえ、スピアー」

「スピアー？」

今はスピアーと俺だけだ。ポケモン研究所の静かな丘で、ゆっくり
と話が出る。

空を見上げれば、そこには満天の星空が広がっている。まるで、
ビードルと初めて出会った夜のように美しい。

「みんな、俺の事を心配してくれてた。けど……、俺さ」

ミリガンやチャンピオンのバトルが瞼の裏に焼き付いて離れない。

「俺、怖くなかったんだ。それどころか、ミリガンとチャンピオンのバ
トルを見て、胸が熱くなった」

「スピアー」

「カッコよかった！俺も、あんな風にバトルがしたい！……そう
思ってたんだ」

他の事が何も考えられなかった。みんなが俺の事を心配している
事も、みんなが無事かどうかも、頭からすっぽり消えていた。

我ながら、ヒドいやツだと思う。

「……」

「スピアー。お前と一緒になら、きっと、どこまでも行けると思うんだ
！」

スピアーが進化した時の事を思い出す。いくら瀕死の状態でも、並
のポケモンが進化したての状態でバンギラスの攻撃を受け止めたり、
ましてや打ち倒す事なんて出来る筈がない。

「スピアー。俺、強くなりたいんだ！」

「スピ……。スピアー！」

言葉なんて無くても、想いが伝わってくる。スピアーは俺の気持ち
を分かってくれた。

「……そうか、お前も強さを求めるか」

「え？」

急に声を掛けられてビックリした。振り返ると、そこにはチャンピオンがいた。

「ちや、チャンピオン!？」

帽子を目深に被った青年は俺とスピアーを見つめている。

「あの時は急いでいたから声を掛けられなかったが、そのスピアーがバンギラスを打ち倒す瞬間をオレ達も見ていた」

ギラギラと瞳を輝かせ、チャンピオンは言う。

「名乗らせてもらおう。オレの名はザラク。このバトルの聖地、アガリアのチャンピオン！ 小僧。お前の名は？」

「……アルト」

チャンピオンは噛み締めるように何度も俺の名前を呟いた。

「アルト。この地方では、十才になっても資格を得られなければ旅立つ事を許されない。それは他の地方と比べて野生のポケモンの力が強大だからだ。それに伴い、旅のトレーナーのアベレージも高水準に達している」

「資格つて……?？」

「最終進化形態のポケモンを最低二体。それが絶対条件だ。一体だけでは、そのポケモンが戦闘不能になった時点で終わりだからな。二体必要なんだ」

そう言うと、チャンピオンのザラクはモンスターボールを俺に投げ渡してきた。

「そいつを貸してやる。いずれ返しに來い。ポケモンリーグ……いや、最強の称号を奪い合うポケモントレーナー達の聖戦の場、チャンピオンリーグで待つ」

そう言うと、ザラクは返事も待たずにギャラドスを出すと去っていった。

俺は戸惑いながら渡されたモンスターボールの開閉スイッチを押して放り投げた。

「コウガッー」

中から現れたのは、あの時、ルカリオと共に襲撃の犯人を囚えに行ったゲッコウガだった。

「ゲッコウガ……」

「コウガ」

ゲッコウガは俺をジッと見つめた後、今度はスピアーを見つめた。

「コウガ」

「スピー！」

二体の間で何か伝わったようだ。それが何かはすぐに分かった。ゲッコウガが後ろに跳び、スピアーは両手のニードルを構えた。

ポケモンバトルだ。

「俺達を試す気なんだね、ゲッコウガ」

「コウガッ！」

ゲッコウガは小さくうなずいた。

「……分かった。やるよ、スピアー！」

「スピー！」

相手はチャンピオンのポケモンだ。だけど、負ける事なんて考えない。

レベルの差も、経験の差も、熟練度の差も、なにもかも忘れる。

スピアーと一緒に目指すと決めた。頂きを目指す。その為に、どんな相手だろうと全力で挑む。恐れたり、畏れたり、怖れたりする暇なんてない。

「行くよ、スピアー！」

「スピー！」

「コウガッ！」

ゲッコウガが動く。

「スピアー！」

捉えきれない速度。防ぎきれない攻撃。

だったら――、

「ダブルニードル！」

「スピー！」

ゲッコウガがどんな攻撃をするかも、どの方角から攻撃を喰らわせようと考えているかも分からない。

分からないなら、こっちが決める。迫り来るゲッコウガに、スピ

アーは自分から踏み込んでいく。

衝撃と共に金属がぶつかり合うような音が響き渡る。

スピアーのニードルとゲツコウガの水のクナイがぶつかり合っている。

「……コウガ」

ゲツコウガは笑った。そして、姿を消した。

次の瞬間、スピアーは倒れ伏していた。

「コウガ」

捉えきれないどころじゃない。見えないほどの速度。

それは、紛れもなく俺が望んだ力。目指すべき頂点。胸が高鳴り、体が熱く滾る。

「スピアー！」

スピアーに駆け寄ると、スピアーはまっすぐにゲツコウガを睨みつけた。

悔しい。勝ちたい。そんな意志が伝わってくる。

「コウガ」

ゲツコウガはその視線をまっすぐに受け止めた。

——いくらでも、挑んでこい。

そんな意志を瞳に宿し、スピアーを挑発する。

俺とスピアーは何度も戦った。ゲツコウガが手加減してくれているのだろう。何度倒れてもスピアーはすぐに立ち上がった。

何度も繰り返し戦って、ただの一度も勝てなかった。それを仕方ないなどと諦める事が出来なくて、もう一度、もう一度と再び繰り返す。

「スピアー！」

「スピー！」

「コウガッ！」

気づけば、俺もスピアーも立っていられなくなっていた。

戦いたい。勝ちたい。強くなりしたい。

ただ、それだけを思い続けて意識を手放した。

第六話 『シャンティ・シティ』

ポケモン研究所での避難生活二日目の昼、ヴェゼール・ビレッジの住民は政府が用意した大型装甲バスでシャンティ・シティに一時避難する事が決定された。

アラートやモンテロをはじめ、大人達が忙しなく働き続けている。「……どうやって切り出そうかな」

俺は旅に出る事を決めた。チャンピオンにゲッコウガを借りたおかげで条件はクリアされている。だけど、誰に言っても反対される筈だ。これだけの大事件、大人達は過敏になっている。

元々、この地方は野生のポケモンが強力過ぎて、十歳になった時点で旅立つ人間の方が稀だ。一生を村や街の中だけで過ごす人もいる。

今はアガリアの制空権を握っていたメルカト・シティのジムリーダーの不在もあって、余計に旅が難しくなっている。

「黙って行っても、きつと連れ戻されちゃうよね」

ミリガンを筆頭とするアガリア警察は実力者揃いであり、結束も極めて強い。アラートの話によれば、アガリア随一の大都市であるリール・シティのジムリーダーも警察の人間らしい。

アラートに認められない限り、俺は旅立つ事が出来ないわけだ。

「よしー、こういう時は博士に相談だー！」

困った時のモンテロ博士。夜になるまで誰よりも懸命に働いていた博士を呼び止めるのは気が引けたけど、こういう事を相談出来る人は他にいない。

声を掛けると、博士は快く時間を作ってくれた。

「博士。俺、旅に出たいんだ」

ミリガンとチャンピオンの実力を肌で感じた事。その時の高揚感。スピアーの強さ。チャンピオンにゲッコウガを貸してもらった事。すべてを余す事なく伝えた上で、俺はそう言った。

博士は即座に反対したりはしなかったけれど、旅に出る事の危険性を朗々と語った。

「チャンピオンのゲッコウガがいれば、おそらくは大丈夫じゃろう。」

けどのう、空を飛べない以上、一度旅に出たら簡単には戻ってくる事も出来ん。それに、ヴリルのような組織も暗躍しておるし、旅のトレーナーの中には悪い事を考える者もおる。君のお父さんやお母さん、それに村のみんなも君に万が一の事があつたら大いに悲しむ筈じゃ。むろん、わしも」

「でも、俺は……！」

「分かっておる。じゃから、これは提案じゃ。みんなに旅立ちを認めてもらおう為に、たった一つだけ方法がある」

「本当?！」

博士は言った。

「シャンティ・シティにはジムがある。ジムリーダーのエルフランは草タイプのエキスパートじゃ。お主のスピアーならば相性が良い。ジムバッジをゲット出来れば、みなもお主を認める事じゃろう」

「ジムバッジをゲットすれば……」

「むろん、容易い事ではないぞ。それに、ゲツコウガの力を借りて勝利しても、みなは認めてくれるかもしれんが、お主自身が勝利を認められまい。つまり、スピアーだけの力で勝たねばならん」

「スピアーの力だけでジムを……」

俺はモンスターボールからスピアーを出した。

「スピー！」

スピアーに迷いはない。

「俺、シャンティ・シティでジムに挑戦する！ 頼むよ、スピアー！」

「スピー！」

第六話『シャンティ・シティ』

荷物をまとめて大型装甲バスに乗り込むこと六時間弱。セラやアクセルと延々とランプで暇をつぶしているとようやく窓が開かれた。狭くはないけれど、外の景色が一切見えない状況はかなり辛かった。「やっと到着かー」

アクセルはゲツソリした顔で窓の外を見つめている。

大自然に囲まれた街、シャンティ・シティは『サラの柱』と呼ばれる巨木を中心に広がっている。

「あれがサラの柱なのね！ おっきい！」

セラが歓声を上げた。セラの名前はサラの柱にちなんで付けられたらしい。サラというのは、はるか昔に災いを沈めた聖女の名前だ。装甲バスを出て、俺達はサラの柱へ向かって歩き出した。

歩きながら、俺達は独創的な建物の数々に目を奪われた。キノコのようだったり、木をくり抜いたものだったり、ログハウス風だったり、まるでお伽噺の世界に迷い込んでしまったかのような気分だ。

「見てよー！ ここのもー！ あそこもー！ ウイオルネ・ブランドだよ！」
セラが興奮している。点々と佇む、これまた独創的な建築のシヨツプの看板には、どれも『ウイオルネ』の名前が刻まれている。

その名前をテレビのコマーシャルで聞いた事があった。『夢と幻想の世界へあなたを誘う、ウイオルネ・コーポレーション』というキャッチフレーズで有名な会社だ。

「さすがはシャンティ・シテイね！」
「なにがさすがなんだ？」

アクセルが聞くと、セラは信じられないといった表情を浮かべた。「知らないの!? シャンティのジムリーダー、エルフランさんはウイオルネ・コーポレーションの社長なのよ！」

「へー」
「ふーん」
俺達の関心の薄さに気付いたのか、セラはムツツリした表情を浮かべると話がわかりそうな人を探しに行ってしまった。

挑む相手として、エルフラン自身には興味があるけれど、ウイオルネ・コーポレーションにはあまり興味が湧かない。

「……アルト。お前、旅に出るの？」
「誰かに聞いたの？」

「聞いたってか、聞いてしまった。博士に相談してたら」
相談したのは博士の部屋だ。偶然聞こえただなんて、信じられない。

「睨むなよ。オレも博士に相談したい事があったんだ」
「相談したい事って？」

「……オレも旅に出るつもりだったんだ」

「え？」

意外に思っ、俺はアクセルの顔をまじまじと見つめた。

「まあ、オレはスタートラインにも立ててなかったけどな。旅立つ条件は最終進化形態が最低二体必要だ。親父は絶対貸してくれないだろうし、博士も一匹は自分で育てなければダメだってさ……」

「アクセル……」

「でも、オレは絶対に旅に出る。親父みたいな立派なポケモントレーナーになりたいし、それに……」

アクセルは思いつめたような表情を浮かべると、両手で自分の頬を張った。

「とにかく！ ジム戦、がんばれよ。オレも必ず後を追うからよ」

「……うん！」

しばらく歩いていると、ようやくサラの柱の前までたどり着いた。広々とした石畳の広場には美しい女性の像と六体のポケモンの像が並んでいる。

「ようこそ、ヴェゼール・ビレッジのみなさん」

像の前には一人の女声がいた。赤い髪を靡かせる穏やかそうな人。彼女こそが、この街のジムリーダーであるエルフランだった。

「シャンティ・シティはみなさまの滞在を心より歓迎致します」

挨拶をしているエルフランに、いつの間にか戻ってきていたセラがキラキラした瞳を向けている。

「あの人がウイオルネの社長なのね！ あの服！ すっごくオシャレだわ！ さすがエルフランさん！」

完全にフアンの顔になっている。

これから彼女にジム戦を挑む事、セラには言わないほうが良さそう

だ。
俺達の住居は広場の西に用意されていた。一家に一軒ずつ。農場を持っていたセラの家には、なんと農場までセットされていた。

「す、すごいな」

アクセルだけじゃなく、大人達も驚いている。最悪、公民館のよう

な施設に押し込められる事も覚悟していたのに、まさかの一軒家。洞窟のようだったり、ファンシーなデザインだったり、その形は様々だけれど、どれも快適に住む事が出来そうだ。

話を聞くと、どうやらここはウイオルネ・コーポレーションがデザインした住宅のモデルハウスのエリアだったらしい。どうりで同じデザインの家が一つもないわけだ。

俺は割り振られた家を探した。蜂蜜色のファンシーな家。そこが俺の家らしい。

中に入ると、そこでは予想外の人物が待ち構えていた。

「ミ、ミリガン!？」

新居の居間では、四天王のミリガンがのんびりと寛いでいた。

「ああ、来たね。待ってたよ、坊や」

「えつと……、あつ！ あの時は助けてくれてありがとうございますございました！」

ミリガン登場の衝撃に一瞬戸惑ったけれど、まずはお礼を言った。あの時、ミリガンのギルガルドが助けてくれなかったら、今頃は死んでいた筈だから。

「……こちらこそ、ありがとう」

「え?」

ミリガンはゆつくりと近づくと、少し屈んで俺と視線を合わせた。「生きていてくれて、ありがとう。あのバンギラスが君を襲った時、わたしは動けなかった」

「で、でも、俺は生きてます！ スピアーが守ってくれたから!」

謝ろうと頭を下げかけたミリガンに慌てて言った。アラートの時といい、全く非の無い人に謝られると困ってしまう。

「……うん。君のスピアーは勇敢だったね」

そう言つて微笑むミリガンに思わず見惚れてしまった。間近で見ると、本当に綺麗な人だ。

「ただ、チャンピオンが目をつけてしまった」

困ったようにミリガンはため息を零した。

「あの男、君とスピアーの素質に目をつけたの。もしかしたら、君と接

触してくるかもしれない」

「あつ、この前会いました!」

「え?」

ミリガンは愕然とした表情を浮かべた。

「……あの馬鹿は君に何か言った?」

「ゲッコウガを貸してくれました! 俺、旅に出るつもりです! ミリガンやチャンピオンみたいに強くなりたいから!」

そう言うと、ミリガンは頭を抱え始めた。

「あ、あの男……」

ミリガンは目を据わらせながら俺の両肩を掴んだ。

「君はいくつ?」

「え? じゅ、十歳です」

「……そっか」

俺の肩から手を離すと、ミリガンはなにやら考え込み始めた。

「正直、わたしも君にはポケモントレーナーの才能があると思ってる」

ミリガンは言った。

「スピアーがバンギラスを倒せたのは、君との間にそれだけの絆があったから。ポケモンと絆を深める事はトレーナーの一番大切なスキルなの。だから、ポケモントレーナーとしては君の旅立ちに賛成。チャンピオンのゲッコウガがついていれば、そうそう危険な目に合うことも無いと思うし」

けれど、そう言って彼女は窓の外を見つめた。

「……今は時期が悪い。ヴリル……、君の村を襲った連中が各地で暗躍しているし、チャンピオンのせいで空を安易に飛べなくなった」

「でも、俺は旅に出たいんです!」

俺はモンスターボールからスピアーを出した。

「スピアーと一緒に、この街のジムリーダーに挑みます! ジムバッジをもらって、ちゃんとみんなに認めてもらってから旅に出ます!そして、絶対にポケモンリーグで優勝して、ミリガンやチャンピオンに挑戦します!」

ミリガンは少し驚いたように目を見開くと、好戦的な笑みを浮かべ

た。

「警察としては、ここは止めるべきなんだと思う。だけど……」

ミリガンはモンスターボールを手にとった。

「君は強くなる。チャンピオンがゲッコウガを託すほどだもの。だから、少し鍛えてあげる」

ミリガンのモンスターボールから飛び出してきたのはキリキザンだった。

「エルフランは強いよ。本気を出せば、それこそ四天王級。もちろん、ジムリーダーとして挑戦者の相手をする時は手加減するけど、それでも進化したてのスピアーで突破出来る程、甘い存在じゃない」

怖気づくべきなのかもしれない。けれど、ミリガンの話を聞けば聞くほど、胸にこみ上げてくる。戦ってみたいと、熱い思いが！

「……君は少しチャンピオンに似ているね。ついて来て。少し歩いた先にバトルフィールドがあるから」

「はいー！」

モデルハウスのエリアから歩く事十分。そこには柵に囲まれたバトルフィールドがあった。

四天王・ミリガンとのバトル。全身に鳥肌が立つ。感情が抑え切れない。

「行くよ、スピアー！俺達は強くなる！」

「スピー！」

第七話 『刃身一体』

シャンティ・シティのジムリーダー、エルフランはこっそりとその場にやって来ていた。

久しぶりに再会した親友の頼みで一肌脱いだというのに、その親友は自分との交流の時間を削ってまで野良バトルを始めようとしている。それも、相手は小さな子どもだ。

「……まさか、年下趣味だったの？」

剣と共に生き、鋼のような意志で正義を貫くアガリア四天王の一人、ミリガン。

彼女の意外な一面を垣間見たと思い込んだエルフランはワクワクした様子でバトルフィールドを覗いている。

「へー、あの子……」

二人のバトルは中々に見応えがあった。無論、ミリガンの方はかなり手加減している。

けれど、それを置いても少年は健闘していた。

「……うん。この続きはジムで実際に対峙した時にとっておこつと」

間違はなく、あの少年はジムに挑みに来る。

「十歳の子とのジムバトルなんて、かなりひさしぶりだね。もしも旅に出るつもりなら、ここから一番近いジムのある街はオーヴェル・シティ。ヴァイクはとにかく熱血だから、ボクがここでシツカリとバトルのいろはを教えてあげなきゃね」

時間があればミリガンが教えるだろうが、四天王であり、警察組織の筆頭である彼女にそこまでの時間的猶予はない。正義の味方は大忙しなのだ。

「さてさてさーて！ 楽しみだね！」

第七話 『刃身一体』

「それじゃあ、はじめようか！ 改めて自己紹介しておくね！ わたしはミリガン。四天王の一人。剣のエキスパートよ！」

「キザン！」

四天王・ミリガン。その手持ちポケモンであるキリキザンとのバトル

ル。

あの夜に見た彼女のポケモンの実力は理解の埒外にあった。まさに、次元が違う。

けれど、いつか追いついてみせると決めた。ならば、敵うかどうかなど関係ない。

「俺はヴェゼール・ビレッジのアルト！ 相棒はスピアー！ よろしくおねがいます！」

「スピー！」

スピアーが両腕のニードルを構え、油断なくキリキザンを睨みつけている。

そうだ。負ける事なんて考えない。俺達は勝つ！

「いくぞ、スピアー！ ダブルニードル！」

「キリキザン、シザークロス！」

スピアーとキリキザンがぶつかり合う。スピアーの渾身の一撃目をキリキザンはあつさり弾き、鋭い刃でスピアーに斬りかかる。

スピアーはニードルで受け止めようとしている。

「受け止めるな！ 回避しながら、ダブルニードル！」

「スピー！」

スピアーは受け止めようとした体勢のまま、地面を強く蹴った。飛び跳ねるようにキリキザンの周囲を駆け巡るスピアー。

「キザッ！」

キリキザンは油断なく構えたまま、スピアーの動きを見極めようとしている。

「見極める時間なんて与えない！ スピアー！ 糸だ！」

「スピー！」

動き回りながら、スピアーは糸を吐いた。

「キリキザン！ ストーンエッジ！」

「キザン！」

普通に切り裂こうとすれば粘着質の糸が絡む筈だった。けれど、キリキザンは地面から岩の刃を生やしてスピアーの糸を防いでしまった。

「……、
だけど――」

「今だ！ ダブルニードル！」

「スピー！」

スピーアは既にキリキザンの背後に回っていた。スピーアは迷いなく、キリキザンの延髄目掛けてニードルを伸ばす。

「キリキザン！ 不意打ち！」

「キザッ！」

「なっ!？」

キリキザンの目は既にスピーアを捉えていた。最小限の動きでスピーアのニードルを躲すと、その刃をスピーアの首に押し当てた。

「キザ」

「スピー……！」

勝負は決した。俺達の敗北だ。

「負けた……」

「悔しい？」

ミリガンがキリキザンを戻しながら歩み寄ってくる。

「……はい」

「そっか、四天王を相手に悔しいと思えるんだね、君は」

ミリガンは微笑んだ。悔しくて堪らないのに、また見惚れそうになった。彼女の笑顔はずるい。恐ろしい武器だ。

「やっぱり、君達は強くなるよ。少ない技、経験の中で勝利をもぎ取ろうとした君の判断力と、君の指示を迷いなく刹那で実行したスピーア。なにより、どっちも本気で勝とうと思って戦っていた」

ミリガンは別のモンスターボールを取り出した。

「君達に必要なものは経験。そして、新しい技」

「新しい、技……」

ミリガンはハッサムを繰り出した。

「スピーア。ハッサムの動きと技をしっかりと見て、感じて、盗み取ってみなさい」

「スピー……」

スピーアはハッサムを睨みつけた。対するハッサムは静かにその

視線を見つめ返している。

同じ虫ポケモン。その姿もどこか似通っている。

「やるぞ、スピアー！」

「スピー！」

闘志を燃え上がらせるスピアーにハッサムは笑みをもって応えた。

「ハッサ！」

「ハッサム！ あなたのスピードをスピアーに見せてあげて！」

「ハッサム！」

ミリガンが位置につくと同時にハッサムが動き出した。

「ハッサム、影分身！」

「ハッサム！」

ハッサムの姿がブレる。そして、数えきれない程のハッサムが姿を現した。

これだ。スピアーに必要な技。ダブルニードルを確実に決める為に必要なものは、相手を惑わせる技。

「よく見るんだ、スピアー！ お前なら出来る！ こつちも影分身！」

「スピー！」

スピアーの動きがブレる。けれど、分身が現れる事はない。

「ハッサム！ バレットパンチ！」

影分身の群れの中から一体のハッサムが飛び出した。

「スピアー！」

あまりにも高速で繰り出されたハッサムのバレットパンチにスピアーは為す術無く吹き飛ばされてしまった。

「ハッサ！」

倒れ伏すスピアーにハッサムが怒声をあげる。ハッサムの挑発に、スピアーは体を起こして応えた。

「ハッサム、影分身！」

「ハッサム！」

再び繰り出される影分身をスピアーはじっと見つめた。
神経を研ぎ澄ませている。

「スピー！」

飛び出したスピアーの体がブレ始める。

「がんばれ、スピアー！ もつとだ！ もつと速く！」

「スピー！」

脚と羽を懸命に動かすスピアー。ブレの幅が徐々に広がっていく。

「ハッサー！」

ハッサムが再びバレットパンチを繰り出す。

「スピー！」

その時、スピアーの体が二つに分かれた。ハッサムのバレットパンチが撃ち抜いたのは、影分身の方だった。

「出来た……、出来たぞ、スピアー！ よーし、もう一度、影分身だ！」

「スピー！」

一度成功させた事でコツを覚えたらしい。スピアーの体が今度は三つに分かれた。

「よし！ 影分身を攪乱しながら、ダブルニードルだ！」

「スピー！」

影分身を覚えた事で気分が高揚していた俺は肝心な事を忘れていた。

それは、影分身を教えてくれたハッサムこそ、相手を攪乱する戦法に長けたポケモンである事。分身と共に三体同時攻撃を仕掛けたスピアーに対して、ハッサムは的確に本物を割り出した。

「ハッサム！ 燕返し！」

あまりの早業に、動きが見えなかった。気づけばスピアーはフィールドのはるか外へ飛ばされ、戦闘不能にされていた。

「スピアー！」

慌ててスピアーに駆け寄って抱きかかえると、ミリガンが近づいてきた。

「アルト。刃は己の体の一部として扱えてこそ、その真価を發揮するの。技に頼り切ったり、振り回されるようではまだまだだよ。『刃身一体』。そこそがバトルの真髄。覚えておいてね」

「刃身一体……」

俺はスピアーが影分身を覚えた事で浮かれてしまった。だから、何

も考えずにダブルニードルを繰り出す指示を出してしまった。

この敗北は俺の責任だ。

「ごめんね。そろそろ時間だから、わたしは行く。次に会う日がいつになるかは分からないけれど、あなたと本気で戦える日を楽しみにしてる。またね、アルト」

「……はい。絶対、次は勝ちます！」

「うん！」

ミリガンは俺にポケモンセンターの場所を教えると、エアームドに乗って飛んでいってしまった。

俺はその姿が完全に見えなくなるまで見送り続けると、急いでポケモンセンターへ向かった。

第八話 『認定試験』

「スピーアー！・影分身！」

「スピー！」

スピーアーの体がブレる。五体の分身が現れ、ゲッコウガの周囲を駆け巡り始める。

「コウガッ！」

ゲッコウガは水のクナイを握り、辻斬りの構えを取った。ゲッコウガならば五体同時に瞬殺する事も可能だけど、これは訓練だ。その為にゲッコウガは手加減してくれている。

シャンティ・シテイに来て、今日で二日目。今夜、ヴリル襲撃事件の日に北国であるカルネ・シテイに慰安旅行に出掛けていたお母さん達が到着する予定だ。カルネ・シテイ周辺は山の神と呼ばれるポケモンによつて人とポケモンの生存圏が明確に分けられているらしく、地理的には遠くない場所へもショートカットを許されない。おかげでずいぶんと時間が掛かったようだ。

「ダブルニードル！」

「スピー！」

第八話 『認定試験』

朝の訓練を終えた後、俺はポケモンセンターに向かった。

「ようこそ、ポケモンセンターへ！ いよいよね、アルトくん」

「はー！」

昨日、ミリガンとの訓練の後にポケモンセンターでトレーナー認定試験の予約をしておいた。これは旅立ちの条件をクリアしているか確認する為のものだ。

「では、改めて説明するわね。ポケモントレーナーとして活動する為には認定試験を受けて、トレーナーカードを手に入れる必要があります。認定試験を受ける条件は最終進化形態のポケモンを二体以上所持している事。アルトくんは既にスピーアーとゲッコウガを所持しているのです、この条件をクリアしています。よつて、認定試験への挑戦を認めます」

ジョーイさんは数枚の資料を取り出した。

「認定試験に合格した場合、一時間の基礎講習を受けてもらいます。その後、トレーナーカードとポケモン図鑑、バッジホルダーが提供されます。トレーナーカードとポケモン図鑑については合格後の講習で説明するので、本日の試験、頑張ってくださいね」

「はい！」

説明を終えると、ジョーイさんはポケモンセンターの裏手へ俺を案内した。そこには薄紅色の着物を着た女性が待っていた。

「こんにちは。本日の認定審査員を務めさせていただきます、シャンティ・ジムのジムトレーナー、カザリと申します」

「ヴェゼール・ヴィレッジのアルトです！ 本日はよろしくおねがいします！」

カザリは穏やかな雰囲気の人だった。諸注意とバトルのルールを確認して、互いにフィールドの対面に立つ。

今回は二対二の入れ替え戦。どちらかのポケモンが全滅した場合、試合は終了。仮に負けたとしても、審査員に認められれば合格だけど、戦う以上は負けたくない。その為に朝から訓練に励んだ。

「それでは、立会人はわたしが務めます！ ルールは二対二の入れ替え戦！ ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！ ポケモントレーナー認定試験、バトルスタート！」

ジョーイさんの掛け声と共に俺はスピアーを、カザリはラフレシアを繰り出した。

「先手を取るぞ、スピアー！ 影分身！」

「スピ！」

スピアーが五体に分かれ、ラフレシアの周囲を旋回する。

「……なるほど、素晴らしい。ですが、ラフレシア！ 花吹雪！」

さつきまでの穏やかな雰囲気とは一変して、好戦的な笑みを浮かべ、カザリはラフレシアに指示を出した。ラフレシアを中心に花の吹雪が吹き荒れる。

「スピ！」

花吹雪は影分身もろともスピアーを飲み込んだ。

「スピアー！ ダブルニードルで花吹雪を突き破れ！」
「スピー！」

スピアーには遠距離から攻撃する手段がない。ここで距離を取ってもジリ貧になるだけだ。それなら多少のダメージを飲み込んでも接近戦に持ち込んだ方がいい。

「正しい判断です。では、ラフレッシュア！ 花吹雪が巻き起こす風に眠り粉を！」

「なっ!? スピアー！」

「スピー！」

スピアーは俺の声に応えるように花吹雪の壁を突き破った。そのまま眠り粉を撒き散らそうとしているラフレッシュアにダブルニードルを向ける。

「ラフ!?」

ラフレッシュアとスピアー。スピードはスピアーに軍配があがった。

「ダブルニードル！」

「スピー！」

「ラフレッシュア、ギガドレイン！」

「ラフ！」

ダブルニードルを受けながら、カザリのラフレッシュアはスピアーの体力を吸い取っていく。

二撃共まともに喰らい、効果は抜群だった筈なのに、疲弊しながらも立ち上がるラフレッシュア。

「ラフレッシュア！ 花吹雪！」

「させるか！ スピアー！」

「スピー！」

花吹雪発動前にスピアーがラフレッシュアの眼前に踏み込む。

「ダブルニードル！」

「スピー！」

今度はギガドレインを発動させる暇も与えない。ダブルニードルは二撃共急所を打ち抜き、ラフレッシュアは戦闘不能になった。

「お見事です」

ラフレッシュアをボールに戻しながらカザリは今度は穏やかに微笑んだ。

「では、次はこの子です。おいでなさい、マラカッチ！」

「マラカッチ！」

次に現れたのは初めて見るポケモンだった。サボテンのような姿で、なんだか陽気そうな雰囲気だ。

「マラカッチ、コットンガード！」

「マラカ！」

マラカッチの体の花卉から綿のようなものが溢れ出し、マラカッチの体に纏わりついた。

「スピアー！ 何をするか分からない。速攻で決めるぞ、ダブルニードル！」

「おや、影分身を使わないのですね。花吹雪を警戒しましたか？ では、燕返し！」

「スピアー！」

燕返し。ミリガンのハッサムも使った技だ。あまりの速度に、あの時は為す術無くやられてしまった。

「だけど、今は——、」

「見極めろ！」

「スピ！」

ゲッコウガとの訓練はスピアーに己よりも素早い存在の動きを幾度となく体感させた。

元々、スピアーの目は数千の複眼によって構成されている。人間やその他の動物と比べても遥かに優れた視力を持つ。

意識を研ぎ澄ませば、如何に速くても視る事は可能な筈だ。あとは体を反応させる事さえ出来ればいい。

「スピ！」

「燕返しを逸した!?!」

カザリが驚いている。この隙を逃すわけにはいかない。

「スピアー！ ダブルニードル！」

「スピ！」

スピアーのダブルニードルが連続でマラカッチの急所を撃ち抜く。
けれど……、

「マラカッチ！」

「マラカッチ、エナジーボール！」

マラカッチはダブルニードルの直撃を受けながらも耐えきり、なおかつ反撃に打って出た。

「避ける、スピアー！」

「スピ！」

咄嗟に回避に成功するスピアー。

「今です！ ウッドハンマー！」

「マラカッチ！」

スピアーが回避した先に向かって、マラカッチがウッドハンマーを振り下ろす。

「迎え撃て、スピアー！」

「スピ！」

もう、回避は不可能。ならば、踏み込む！

「ダブルニードル！」

「スピ！」

「マラカッチ！」

ウッドハンマーがスピアーに直撃する。

「スピ……」

「マラカ……」

けれど、ダブルニードルの一撃目がマラカッチの急所にも直撃していた。

二体は同時に倒れ込む。

「スピアー、マラカッチ！ 共に戦闘不能！ チャレンジヤーにはゲッコウガが残っていますので、このバトルは挑戦者の勝利です！」

ジョーイさんの宣言を聞き終わる前に俺はスピアーに駆け寄った。

「スピアー！」

「スピイ……」

スピアーは弱々しく鳴いた。

「カッコよかったよ、スピアー！　ありがとう！」

「スピ……。スピー」

スピアーを抱き上げると、ジョーイさんとカザリがやって来た。

「スピアーはわたしが預かりますね」

「お願いします」

ボールに戻したスピアーをジョーイさんに渡すと、ジョーイさんは急ぎ足でポケモンセンターの中へ戻っていった。

「おめでとう、アルトくん。この試験は見事に合格です」

カザリが拍手しながら言った。

「ありがとうございます！」

「素晴らしいバトルだったわ。スピアーとの信頼関係も完璧ね。出来れば、ゲッコウガの方も見たかったけど……。講習会はポケモンセンターの一室を借りてわたしが行うから、ついて来て」

「はい！」

カザリに案内されたのは広くも狭くもない一室だった。そこに小さな箱が置いてある。

「これが君のポケモントレーナー三点セットです。開けてみて」

「はい！」

急いで中を開けてみる。すると、中にはピカピカのポケモン図鑑とバッジホルダー、それに俺のプロフィールが書き込まれたトレーナーカードが入っていた。

「まずはトレーナーカードの説明から初めますね。これはあなたのポケモントレーナーとしての身分証になります。とても大切な物だから、決して無くしてはいけませんよ」

「はい！」

「それから、このカードには功績によって変化する仕組みがあります。例えば、ポケモンリーグやバトルタワーへの参加やポケモン図鑑の達成度、各種大会での優勝などなど。そうした功績が認められる度にノーマルからブロンズ、カッパー、シルバー、ゴールド、ブラック、プラチナへ変化していくのです」

手渡された資料を見ながら説明を聞いていると、ミリガンの写真が

乗っていた。

「ミリガンだ！」

つい叫ぶと、カザリは微笑ましそうに笑った。

「現在、ブラック以上のカードを持っているトレーナーは四天王・ミリガン、メルカト・シテイの元ジムリーダー・ナザレ、バステイロ・シテイのジムリーダー・レムハザード、フィオレ・シテイのジムリーダー・ドロシーの四名のみとなっています」

「あれ？ チャンピオンは？」

「……チャンピオンは……、リーグ優勝などの功績を讃えられ、カッパです」

チャンピオンがカッパ……。

なんだか、締まらない話だ。

第九話 『家族』

「これがトレーナーカードかよ！ すっげー！」

ジム戦の申込用紙を書いているとアクセルがトレーナーカードを見に来た。

「えへへ。凄いだろー！」

「スゲーよ！ くっそー、オレだって直ぐにゲットしてみせるからな！ 見ろ！」

アクセルはモンスターボールを二つ取り出した。

「とりあえず、二匹ゲットしたんだ！ この近くにいたヤヤコマと、親父に新しくもらったイーブイだ！」

「イーブイ!? 凄いいじゃん！ ……あれ？ っっていうか、ヤドンは？」「あー……、アイツは……」

どうやら、ヤドンが命令を遅れて理解した事でコクーンが吹っ飛ばされ、結果として俺達がコスラ洞窟に落ちた一件をアラートは重く見たらしい。

アクセルは旅立ちの事をシツカリとアラートに相談したようだ。ヤヤコマのゲットを手伝ってくれて、そのヤヤコマをシツカリと育て上げる事を条件にポケモントレーナーの認定試験を受ける事を認めてくれたらしい。

「とりあえず、ヤヤコマを最終進化形態のファイアローに進化させるのが目標だな。その間にイーブイをどのタイプに進化させるか決めるぜ」

「ふーん。アクセルなら、エーフィかブラッキーになるかもね」

「へへっ、それもアリだな！」

ファイアローなら、草タイプのジムとも相性が抜群にいい。ヤヤコマを選んだのも、そういう点を考慮しての事だろう。

「折角だし、バトルしようぜ！」

「うん！ いいよ！」

ヤヤコマはスピアーとも相性が抜群にいい。油断は決してしない。

第九話 『家族』

夕方、それぞれのライドポケモンに跨ったお母さん達がシャントイ・シテイに到着した。アクセルのお母さんのガーマイルとセラのお母さんのアーケオス、それに俺のお母さんのケンホロウがクタクタな様子でボールに戻されていく。

ライドポケモンであり、お母さん達のもう一体の最終進化形態であるギャロップ、バンバドロ、バクフーンも疲れた様子だけど、お母さん達を家まで送り届けるまで頑張るつもりのようなようだ。

「アルト！」

お母さんは迎えに来た俺を問答無用で抱きしめた。

「ああ、無事で良かったわ！ もう、お母さん、心配で心配で……！」
「だ、大丈夫だよ！ スピアーが守ってくれたし、四天王のミリガンやアラートさん達が頑張ってくれたから！」

「ああ、そうだわ！ スピアーにも会わせて！ あの子の無事も確かめたいわ！」

「う、うん！」

スピアーを出すと、お母さんはスピアーを抱きしめた。

「うう、立派になったわね！ それに、よく頑張ったわ！」

「ス、スピィ……」

スピアーは困った様子だ。

「お、お母さん！ スピアーが苦しそうだよ！」

「あつ、ああ、ごめんなさいね！」

解放されたスピアーはよろよろとモンスターボールの開閉スイッチを押して自分からボールの中へ戻っていった。バトルの時のタフネスはこういう時、あまり役に立たないようだ。

「お父さんも仕事を切り上げて、今こっちに向かっているらしいの！」

今日の内には到着するそうよ！」

「お父さんも!？」

ビックリした。お父さんは仕事がとても忙しくて、中々帰ってこない。前に会ったのは一年近くも前の事だ。時々、顔を思い出せなくてお父さんを泣かせてしまう事がある。お父さんが到着する前に記憶の中からお父さんの顔を掘り起こしておこう。

「本当にごめんね、アルト。まさか、慰安旅行中に村が襲撃を受けるなんて思わなくて……」

お母さんは大粒の涙を零しながら泣き始めてしまった。

「お、お母さん。元気出してよ！俺もスピアーも無事だからさ！それに、仲間も増えたんだ！見てよ！」

俺はお母さんの気を紛らわせる為にゲツコウガに出てもらった。

「コウガツ！」

ゲツコウガは礼儀正しくお母さんに一礼した。

「ゲ、ゲツコウガ!? ええ!? いつの間にゲツトしたの!?!」

さすがにゲツコウガの登場には驚いたようだ。涙が引っ込み、お母さんは目を丸くしている。

「その事は夜に話すよ！それより、俺達の家に行こう！すつごいよ！」

お母さんを新居に案内する最中、お母さんのバクフーンが俺を背中に乗せてくれた。

「バクー」

バクフーンも相当心配してくれていたみたい。安心したような鳴き声を何度も零している。

一度新居で慰安旅行に持っていった荷物を降ろすと、お母さんは村の人達に挨拶をする為に出かけていった。ほんの一時間程で戻ってくると、その手には大量の食材があり、大張り切りで夕飯を作り始めた。

数日振りのお母さんの料理を楽しみに待っていると、インタフォンが鳴った。玄関に向かうと、そこにはお父さんがいた。

「お父さん！」

「アルト！」

またもや俺とスピアーは抱きしめられた。

お父さんもお母さんも遠出の間に起きた事だった為に不安で仕方がなかったらしい。

夕飯を食べている間も二人はいつも以上に構ってきた。嬉しくなわけじゃないけれど、旅立ちの事を中々切り出せなかった。

「そう言えば、アルトってばゲッコウガをゲットしてたのよ！」

お母さんのファインプレー。俺はここぞとばかりに乗っかり、ゲッコウガをモンスターボールから出した。

「コウガッー！」

ゲッコウガはお父さんにも礼儀正しく一礼した。相変わらず、歩く災害と呼ばれているような人のポケモンとは思えないくらい礼儀正しい。

「ゲッコウガか！ 驚いたな。カロス地方の初心者用ポケモンで、このアガリアではあまり見ないポケモンだぞ」

「うん。……実はね、チャンピオンに借りてるんだ」

「……へ？」

俺は包み隠したりせず、ミリガンとの出会いから、スピアーの進化の瞬間、チャンピオンからゲッコウガを借りた事、モンテロ博士から受けたアドバイス、ミリガンとの訓練、トレーナーカードの入手までをすべて話した。

案の定というか、お父さんもお母さんも呆気にとられている。

「……えっと、色々聞きたいけど、そのゲッコウガがチャンピオンのゲッコウガっていうのは本当なのかい？」

「うん。ポケモン図鑑で確認出来るよ」

俺は図鑑を取り出して、手持ちポケモンの情報を表示させた。おやの欄にはモンスターボールの持ち主の情報が記載されている。ゲッコウガのおやは間違いなくチャンピオンのザラクだ。

「あ、あの歩く災害……」

お父さんは頭を抱えてしまった。

「あれ？ お父さん、チャンピオンを知ってるの？」

「ああ、仕事でね。何度か会った事があるよ。ほら、僕はポケモンリーグの運営にも携わっているからさ」

「そうなの？ そう言えば、お父さんって、何の仕事をしてるんだっけ？」

「言っただけじゃなかったっけ？ 僕はアガリア政府の役人だよ。ジムやポケモンセンターの運営にも囓んでるんだ」

お父さんは自分の仕事に誇りを持っているみたいだ。少し誇らしげにしている。

「じゃあ、このジムリーダーとも知り合いなの？」

「エルフランさんかい？ いや、まだ実際には会った事ないよ。シャンティ・ジムは老舗だからね。担当の人が他にいるんだ。僕はもっぱら新進気鋭のジムであるオーヴェル・ジムやサレナ・ジムに関わっているんだ」

「そうなんだ。あのね、俺さ……」

俺は意を決してジムに挑戦する事、そして、バッジを手に入れたら旅に出ようと思っっている事を話した。

咄嗟に反対される事を予期していたのに、二人は押し黙ってしまった。

「えつと、お父さん？ お母さん？」

「……アルト。今のアガリアで旅をする事がどんなに危険で大変な事か、それは分かっているんだね？」

「う、うん。空は飛べないし、ヴリルっていう悪者が暗躍してる。それに、野生のポケモンもすごく強いって、みんなから言われた」

「それでも、旅に出たいんだね？」

「うん！ 俺、ミリガンやチャンピオンみたいに強くなりたいんだ！

それに、二人とリーグで戦うって約束もしたし」

「そうか……」

「お父さん？」

「よし！ じゃあ、僕とポケモンバトルだ！」

「え？」

お父さんはボールホルダーから二つのモンスターボールを取り外した。

「スピアーだけじゃない。ゲッコウガも出して、僕のポケモンとダブルバトルだ！」

「ゲッコウガも!？」

「コウガ……」

驚いている俺とは反対にゲッコウガはやる気まんまんの様子。一

歩前に出て、お父さんを見つめている。

「子供はいつか旅に出るもの。それが昔からの仕来りだ。これはどの地方でも語り継がれているもの。だから、旅立ちを決意した子供を縛り付ける事は出来ない。だから、アルト。君の力を僕に見せてくれ。君なら大丈夫だと、僕に信じさせてくれ！」

「お父さん……」

モンテロ博士にも言われたし、俺自身も反対されると思っていた。だけど、お父さんは俺の気持ちをシツカリと分かってくれた。

「うん！ 俺達之力、お父さんに見せるよ！」

スピアーもモンスタールボールから出す。

「スピー！」

スピアーもやる気まんまん。ゲツコウガと並び立ち、お父さんを見つめている。

「……うう。正直、お母さんはちょっと反対なんだけど……。でも、そうよね。可愛い子には旅をさせよって言うし……」

お母さんは悩んでいるみたいだ。でも、お父さんとのバトルでしっかりと力を証明すれば安心してもらえる筈。

スピアーは認定試験でジムトレーナーにも勝利したし、チャンピオンのゲツコウガも一緒だ。相手がお父さんでも、この二体と一緒になら絶対に負けない。

「行くよ、スピアー！ ゲツコウガ！」

「スピー！」

「コウガッ！」

俺達は昼頃にアクセルとバトルしたバトルフィールドへ向かった。この短い間に三回も使っている。すでに常連だ。

「それじゃあ、行くよ。オーダイル！ クロバット！」

「ダーイル！」

「キィ！」

お父さんが繰り出したのはオーダイルとクロバットだ。小さい頃から知っている二体。

「行くよ、お父さん！」

「来い、アルト！」

互いにバトルフィールドの対面に立つと、お母さんが「バトルスタート」の合図を下した。

最初に動いたのはお父さんのクロバットだった。

クロバットはスピアーと相性が悪過ぎる。ダブルニードルを急所に命中させても殆どダメージが通らない。

「ゲッコウガ！」

「コウガッ！」

ゲッコウガは水のクナイを生み出して辻斬りの構えを取った。すると、オーダイルの方がゲッコウガに向かってきた。

「オーダイル！ アクアジェット！」

「ダイル！」

オオダイルは水を纏いながら加速してゲッコウガに襲いかかった。

「ゲッコウガ、辻斬りで迎え撃て！」

「クロバット！ 怪しい光！」

「キィ！」

向かい来るオーダイルの背後からクロバットは怪しい光を放った。

「まずい、ゲッコウガ！」

「コウガッ！」

ゲッコウガは怪しい光に囚われなかった。見事な一撃をオーダイルに見舞い、そのまま一撃で倒してしまった。

「す、すごい……」

「自分のゲッコウガに見惚れている場合じゃないぞ、アルト！」

「コウガ！」

「う、うん！」

お父さんとゲッコウガから同時に注意され、慌てて意識を切り替える。まだ、クロバットが残ってる。

「コウガ」

ゲッコウガは何故か俺のところまで戻ってきてしまった。

「後は俺達でやれって事？」

「コウガ」

「……うん、そうだよね。わかった！ スピアー！」

相手はスピアーと相性の悪いクロバット。だけど、これはお父さんに認めてもらう為のバトルだ。ゲッコウガに頼り切った情けないバトルを見せるわけにはいかない。

「影分身！」

「スピ！」

スピアーの体から六つの分身が飛び出す。今朝までは五つが限界だったのに。

そうだ。俺達は常に成長している。相性の不利なんて、いくらでも覆せる。

「クロバットに糸を吐け！」

「スピ！」

影分身でクロバットの周囲を旋回しながら糸を吐くスピアー。

「クロバット、エアスラッシュ！」

けれど、クロバットは空気の刃で降り注ぐ糸を切り裂いてしまった。

「スピアー、ダブルニードル！」

「クロバット、怪しい光！」

クロバットの怪しい光が本物のスピアーを正確に捉えた。

「スピアー！」

「クロバット！ ブレイブバード！」

「右に飛べ！」

「スピッ！」

翼を折り畳み、青白い光と共に突っ込んでくるクロバットを間一髪で回避するスピアー。

だけど、怪しい光のせいでフラついてしまっている。

「もう一度、ブレイブバード！」

「スピアー！ 左に飛べ！」

「ス、スピ……ッ」

狭い来るクロバットにスピアーは行動が遅れてしまった。

「スピアー！」

スピアーはクロバットのブレイブバードの直撃を受けて大きく吹き飛ばされてしまった。

ひこうタイプの技はスピアーには効果抜群だ。

「ここまでだね」

お父さんは言った。レベルの差もある。ひこうタイプの技の中でもトップクラスの攻撃力を誇るブレイブバードの直撃を受けては、いくらスピアーでも立ち上がれない。

そう、頭では理解していても、俺は諦められなかった。

「スピアー！」

「……スピィィィィ！」

「なっ!?!」

立ち上る土煙の中からスピアーが飛び出してきた。地面を這うように、凄まじい速度でクロバットへ向かっていく。

「スピアー！ ダブルニードル！」

「いかん！ クロバット、守れ！」

「穿て、スピアー！」

「スピッ！」

スピアーの左腕のニードルがクロバットの守りを貫き、右腕のダブルニードルがその急所を捉えた。

「いけ、スピアー！ 連続でダブルニードルだ！」

「スピィィィ!!」

反撃の隙を与えない。連続のダブルニードルはすべてが急所を貫き、ついにはクロバットを戦闘不能にした。

「……追い詰められた事で真の力を発揮したのか。むしタイプの技でクロバットを戦闘不能にするなんて、驚いたよ」

クロバットをボールに戻しながらお父さんは言った。

「うん。ゲッコウガはさすがの一言だし、スピアーも十分に頼れる事が分かった。だから、僕は君の旅立ちを認めるよ。お母さんは、どうだい？」

お父さんと俺の視線を受けて、バトルを見守っていたお母さんは深い溜息を零した。

「……お母さんも認めます。でも、色々条件はあるからね！ 毎日電話する事！ ちゃんとご飯を食べる事！ 嫌になったり、どうしようもない事があつたら直ぐに帰ってくる事！」

「お母さん……。うん！」

その夜、俺は久しぶりにお父さんとお母さんの間に挟まれて眠った。



翌日、俺はシャンティ・ジムにやって来た。申込書はポケモンセンターを通じて提出してある。

中に入ると、受付には認定試験でバトルしたカザリがいた。

「ようこそ、アルトくん。君の挑戦を待っていたわ。さあ、ジムリーダーが奥のバトルフィールドで待っていますよ」

「はい！」

奥へ進んでいくと、そこには室内とは思えない程に植物が鬱蒼と茂る空間が広がっていた。

「ようこそ、シャンティ・ジムへ！」

赤い髪に緑の瞳。シャンティ・ジムのジムリーダー、エルフランがバトルフィールドの対面で待ち構えていた。

「待ってたよ、アルトくん。君の挑戦を歓迎します！」

「よろしくお願いします！」

第十話 『VSエルフラン』

植物が鬱蒼と茂るバトルフィールドの片面に立つ。はじめてのジム戦だけど、緊張はない。それどころか、早く初めたくてウズウズしてくる。

「キミの事はミリガンから聞いてるよ」

スピアーのモンスターボールを取り出すと、エルフランが言った。

「ミリガンから？」

「うん！ ボクと彼女は旧知の仲なんだ！ だから、今回は特別なルールを設ける事にしたよ」

「特別なルール……？」

「うん！ キミのゲッコウガはチャンピオンから借りたポケモン。だから、キミはゲッコウガに頼らずにジムを攻略しようとしている。違うかな？」

「……違わないです」

なんだか見透かされているようで居心地が悪い。

「だけどね。キミが旅に出るなら、ゲッコウガの力は絶対に必要になる。特別に思い過ぎて、肝心な時に頼る事を渋ったら本末転倒！ たとえ、ゲッコウガがチャンピオンの手持ちで、キミの本来の手持ちではなくても、今はキミの仲間なんだ！ だから、このバトルではスピアーだけじゃなく、キミとゲッコウガの絆も見せてもらおうよ！」

「俺とゲッコウガの……」

ゲッコウガのモンスターボールを取り出す。一緒に訓練をしたり、お父さんのポケモンとダブルバトルはしたけれど、絆を結んでいる自信はない。エルフランの言う通り、俺はゲッコウガを特別に思い過ぎていたのかもしれない。思えば、ゲッコウガは俺に対しても、俺の家族に対しても真摯に接してくれていた。歩み寄ってくれていたゲッコウガに一線を引いていたのは俺の方だ。

「ゲッコウガ……」

ゲッコウガのモンスターボールを強く握りしめる。

そうだ。ゲッコウガはチャンピオンのポケモンだけど、今は俺の仲

間なんだ。

「今回はスピアーとゲッコウガにそれぞれ入れ替えなしのバトルをしてもらう。キミが二回連続で勝てばバッジをあげる。一回負けたら、三戦目をしてもらう。その時に使うポケモンはキミの好きな方がいいよ。二回負けたら挑戦失敗。残念無念、また来週だよ！」

「はい！」

俺は一度ゲッコウガのモンスターボールをボールホルダーに戻すと、スピアーのモンスターボールをフィールドに向かって投げた。

「いくぞ、スピアー！」

「スピー！」

エルフランもモンスターボールを取り出した。

「キミの力を見せてもらおうよ！ 出ておいで、ルンパツパ！」

「ルンパ！ ルンパ！」

エルフランが繰り出したのは陽気な踊りを舞うルンパツパだった。

「それでは！ これよりジムリーダー・エルフランとチャレンジャー・アルトのジムバトルを開始します！」

審判を務めるカザリが白い旗を振り下ろした。

「バトル・スタート！」

第十話『VSエルフラン』

開戦の合図と共にスピアーが飛び出した。

「スピアー、影分身！」

七つの分身が現れ、ルンパツパの周囲を旋回し始める。

「ルンパツパ、あまごいー！」

「ルンパ！」

ルンパツパが両手を天に掲げると、バトルフィールドの上空に雨雲が発生した。

「スピアー、糸を吐け！」

ルンパツパはくさタイプと共にみずタイプを持つポケモンだ。雨が降り始めれば、タイプの相性が良くても形勢が逆転してしまう可能

性がある。

だからこそ、ここは確実にルンパツパのスピードを殺す。

「ルンパツパ、真上に向かってハイドロポンプ！」

降り注ぐ糸をルンパツパはハイドロポンプで吹き飛ばした。

糸に絡まってくれば楽だったけれど、今まで糸が効果を発揮出来たのはアクセルのヤドンだけだ。だからこそ、1つ目の作戦がダメになっても直ぐに意識を切り替える事が出来る。

「ダブルニードル！」

「スピッター！」

攻撃の瞬間はどんなポケモンでも隙が出来る。スピアーのスピードなら、そこを突く事が出来る筈だ。

「甘いよ、アルトくん！」

「なっ!？」

スピアーの攻撃をルンパツパは華麗なステップで回避してしまい、スピアーは勢い余って地面を抉ってしまった。

同時にポツポツと地面に水滴が落ち始め、あつという間に土砂降りの雨が降り始める。

普通のアまごいで発生する雨じゃない。さっきのハイドロポンプが糸を吹き飛ばすだけじゃなくて、あまごいのパワーを上げたんだ。

「まずい、スピアー！」

雨の激しさにスピアーの飛行能力が落ちてしまった。反対にルンパツパの動きはキレが良くなっている。泥濘んだ地面を自在に滑り、スピアーの背後を取るルンパツパ。

「ルンパツパー！ エナジーボール！」

ゼロ距離で打ち込まれたエナジーボールによってスピアーが吹き飛ばされた。

「今だよ、ルンパツパー！ ハイドロポンプ！」

「ルンパルンパツパー！」

回避の指示を飛ばそうとした時、ようやく気がついた。スピアーがエナジーボールで吹き飛ばされた先はフィールドのほぼ反対側。この土砂降りの雨はルンパツパを強化し、スピアーの飛行能力を落とす

だけじゃなく、俺の声をスピアーから遮断する意味もあったのだ。

「避ける、スピアー！」

力の限り叫んでも、雨の音にかき消されてしまう。おまけにスピアーの自慢の視力も封じられてしまっている。スピアーは為す術無くハイドロポンプの直撃を受けた。

「スピアー！」

更に遠く離れた場所へ飛ばされてしまったスピアーに俺の声が届かない。

「終わりだよ！ ルンパツパ、ハイドロポンプ！」

雨のせいで何が起きているのかさえ分からない。

しばらくして、カザリの声が雨の向こう側から響いてきた。

「スピアー、戦闘不能！ ルンパツパの勝ちです！」

「そんな……、スピアー！」

雨が弱まっていく。閉ざされていた視界が開かれ、フィールドの様子が見えるようになった。そこには、木に背中を預けて気絶しているスピアーの姿があった。

「スピ、アー……」

スピアーが負けた。その事を理解するまでにかなりの時間を要した。

ジムリーダーの強さは分かっているつもりだった。だけど、一矢報いる事さえ出来ずに、ここまで圧倒されるとは思っていなかった。

分かっている。敗因は俺にある。バトルは技の指示を出せばいいというものじゃない。スピアーの位置、環境の変化、それらを見極めて適切な指示を出すのがトレーナーの仕事だ。それなのに、まんまとエルフランの意図通りにスピアーをフィールド上で孤立させてしまった。

「……ごめん、スピアー」

スピアーをボールに戻す。

「そんなにしよげないの！ キミはポケモントレーナーとして第一歩を踏み出したばかりなんだよ？ 知らない事、分からない事ばかりで当たり前なの！ 失敗を経験して、次に繋がられるかどうかが大切

なんだ！」

「次に繋げる……」

ゲッコウガのモンスターボールを取り出す。

本当なら、スピアーだけでジムバトルを制するつもりだった。モンテロ博士も、みんなに認めてもらう為には俺とスピアーの力だけで勝たなければ意味がないと言っていた。

だけど、それは間違いだった。エルフランの言うとおりで。俺はポケモントレーナーとしての第一歩を踏み出したばかり。認めてもらえるように、これから強くなるんだ。

「……ゲッコウガ、一緒に戦ってくれ！」

「コウガッ！」

モンスターボールから取り出したゲッコウガは俺に向かって頷いた。

「それでいいんだよ。出会い方じゃない。過ごし方なんだよ、ポケモンとトレーナーの絆を育むのは！ キミと、スピアーと、ゲッコウガ。一緒に強くなるんだ！ ポケモンジムはその為にあるの！ さあ、行くよ！ 出てきて、ジユカイン！」

「ジユカッ！」

エルフランの次なるポケモンはジユカインだった。

「ジユカインは強いよ。チャンピオンのポケモンでも、力で押すだけじゃ勝てないからね！」

「……はい！」

「コウガッ！」

気を引き締め直す。スピアーと共に学んだ事を胸に刻む。

「いくよ、ゲッコウガ！」

「コウガア！」

カザリが再び白い旗を振り上げる。

「それでは、二回戦！ ゲッコウガ対ジユカインのバトルを始めます！」

白い旗が振り下ろされる。

「バトル・スタート！」

まずは相手の動きを見る。

「ゲッコウガ、影分身！」

「コウガッ！」

ゲッコウガの体がブレていく。無数の影分身がフィールド全体に現れる。

「ジュカイン、ハードプラント！」

「ジュカッ！」

ジュカインが拳を地面に叩き込むと、フィールド全体に植物の蔦が生えてゲッコウガの影分身をかき消していく。

「ゲッコウガ、辻斬りだ！」

本物のゲッコウガが水のクナイで蔦を切り裂く。

「ジュカイン、リーフブレード！」

「ジュカッ！」

ジュカインは両腕のトゲを鋭く尖らせ、ゲッコウガに向かっていく。

「ゲッコウガ、影分身！」

「コウガッ！」

再び無数の分身を生み出すゲッコウガ。

「真つ向勝負に安易に乗らない。うん、正解だよ！」

そう言うと、エルフランはジュカインをその場に留まらせた。

誘っているんだ。ジュカインはくさタイプの中でも特にスピードの早いポケモン。安易に仕掛ければ手痛い反撃を受ける。

だけど、反撃を恐れるばかりじゃ勝てない。

「ゲッコウガ、水手裏剣！」

「そう。こういう時に一番ダメなのは動かない事！　だけど、問題はそこからどう繋げるかだよ！」

ジュカインは水手裏剣を放ったゲッコウガにリーフストームを放っていた。水手裏剣をかき消し、尚も威力を落とさず迫るリーフストーム。

「ハイドロカノン！」

技を放てば反撃が来る。だけど、反撃をする為にジュカインは必ず

止まる。その瞬間こそ、ゲッコウガの必殺技を打ち込むチャンスだ。

「コウガッ！」

ゲッコウガ手の中で圧縮した水のエネルギーを解き放った。ハイドロポンプを超える水圧がリーフストームを貫き、ジユカインに直撃する。

「ジユカッ!?!」

吹き飛ばされたジユカインはフィールドのラインを越え、ジムの壁に激突した。

「今だ、ゲッコウガ！」

ゲッコウガは一気にフィールドを駆け抜けた。

「辻斬りだ！」

「コウガッ！」

「ジユカイン、リーフブレード！」

「ジユカッ！」

崩れた壁の中から現れたジユカインのリーフブレードとゲッコウガの水のクナイが激突する。

「いっけー、ゲッコウガ！」

「コウガア！」

「ジユカイン！」

「ジユカア！」

ゲッコウガとジユカインの斬り合いは目で追うのがやつとの速度だった。互いに他の技を出す余裕はない。ここから先は、もうゲッコウガを信じる事しか出来ない……。

「いや、違う！ ゲッコウガ、ジユカインをエルフランの方へ押し込め！」

「コウガッ！」

ゲッコウガは俺の意図を正確に読み取ってくれた。

このバトルフィールドは初戦のルンパツパのあまごいやハイドロポンプとゲッコウガのハイドロカノンによって泥濘みがいくつも出来上がっていた。その中で一番大きいものはスパアールンパツパに回避されたダブルニードルで決った場所。そこをジユカインは踏

み抜いた。

「今だ、ゲッコウガ！」

「コウガア！」

足元が沈み込み、隙が出来たジユカインの急所にゲッコウガの辻斬りが命中する。

「ジユカツ……」

「……お見事」

戦闘不能になったジユカインをエルフランはボールに戻した。

「ゲッコウガの実力に頼り切らず、よく考えたね」

ポケモンだけじゃない。フィールド全体をシツカリと見る。スピアーの敗北と共に学んだ事だ。

「それで、どうする？ 三戦目はゲッコウガでいく？」

俺はゲッコウガを見つめた。

「ゲッコウガ、ありがとう」

ゲッコウガは目を細めて笑うと、一足飛びで俺の近くまで戻って来た。近くの木の傍に歩み寄り、背中を預けて腕を組む。

「うん。見てて、ゲッコウガ」

俺はスピアーのモンスターボールを握りしめた。

「アルトくん！」

エルフランは俺に向かってスプレーのようなものを投げた。中には青白い液体が入っている。

「まんたんのくすり。使ってあげて、スピアーに」

「……はい！ ありがとうございます！」

モンスターボールから出すと、スピアーは少しよろけた。

「スピアー」

まんたんのくすりをスピアーにふりかける。すると、みるみる内にスピアーの体調が改善されていく。

「俺、スピアーと一緒に勝ちたい」

「スピ……」

スピアーは俺の顔を見つめると、右腕のニードルを差し出してきた。

「うん！一緒にバッジ、手に入れよう！」

「スピッツ！」

スピアーが構えると、エルフランは穏やかに微笑んだ。

「人もポケモンも成長する。キミ達は、もうルンパツパに負けた時のキミ達じゃない。さあ、この戦いを通じて進化させたキミ達の力をボクに見せてみる！ いけ、ルンパツパ！」

ルンパツパがボールから飛び出す。

「ルンパルンパ！」

陽気に笑いながら、ルンパツパは俺達を誘うように手を伸ばしてくる。

「いくぞ、スピアー！」

「スピッツ！」

三度、^{みたび}白い旗が振り下ろされる。

「三戦目！スピアー対ルンパツパ！バトル・スタート！」

今や沼地の如き様相となったバトルフィールドはルンパツパにとつて有利な地形となっている。無闇に突っ込んでも、さっきのようにステップで躲かれるのが関の山だ。だけど、手を拱いていたらあまごいが来る。

「スピアー！ルンパツパの足元に糸を吐け！」

「スピッツ！」

「狙いは悪くないよ。けど、ルンパツパ！しぜんのちから！」

「ルンパツ！」

ルンパツパが祈りを捧げるように両腕を掲げると、地面の泥が弾丸のような勢いで飛び散り、地面に付着したスピアーの糸を吹き飛ばしてしまった。

「今のは……」

「しぜんのちから。バトルフィールドの環境によって様々な技が飛び出す変幻自在の技だよ！」

フィールドによって変化する技。とんでもない隠し技だ。足元に粘着性のある糸をばら撒けばルンパツパの機動力を削げると思ったのに、エルフランは一枚も二枚も上手だ。

「……いや、待てよ」

そうだ。狙いが悪かったわけじゃない。

ハイドロポンプやエナジーボールで吹き飛ばされるから敢えてルンパツパ自身は狙わなかった。だけど、地面を狙えばしぜんのちからで剥がされる。

だったら――、

「スピアー、影分身！ それから、ルンパツパと地面に向かって、とにかく糸を吐きまくれ！」

「スピイツ！」

八体のスピアーがルンパツパの周囲を旋回しながら糸を吐き出していく。

「そうだよ。考え続けるんだ！ ポケモンが使える技。その応用！

同じ技でも、状況や使い方次第で無限の可能性を引き寄せる事が出来るんだ！ ルンパツパ、ハイドロポンプでスピアーを影分身ごと薙ぎ払え！」

「薙ぎ払い!?!」

「ルンパツ！」

ルンパツパはハイドロポンプを放ち続けながら体を回転させた。

次々にかき消されていく影分身。

「いや、今がチャンスだ！ スピアー、ダブルニードル！」

「スピイツ！」

スピアーはハイドロポンプの水流を這うようにしてルンパツパへ迫った。

「そう来ると思ったよ、しぜんのちから！」

「よける、スピアー！」

あと一步のところまでルンパツパはハイドロポンプの発動を中断して、しぜんのちからに切り替えた。地面から飛んでくる泥の弾丸を辛うじて避けるスピアー。

隙が無さ過ぎる……。

「ルンパツパ、エナジーボール！」

ルンパツパは掌に緑の光を溜め、スピアーに向かって投げつけた。

距離が離れているおかげでスピアーは避けられているけれど、このままじゃジリ貧だ。

フィールド自体は決して広いわけじゃない。なのに、スピアーのニードルを届かせるには、ルンパツパとの間に広がる距離が絶望的に遠過ぎる。

「……諦めてたまるか！ 俺達は勝つんだ！ 絶対に、二人で！」
「スピーイ！」

スピアーがルンパツパに向かってニードルを向ける。

「スピーイイツ！」

スピアーが叫ぶ。すると、伸ばしたニードルに光が灯り、その光がニードルから飛び出した。

「ミサイルばり!? うちおとして、ルンパツパ！ エナジーボール！」
「今だ、スピアー！」

ミサイルばりの発動に驚いている暇なんてない。ミサイルばりが命中すればルンパツパは大きなダメージを受ける。だからこそ、ルンパツパの注意はスピアー自身から外されている。二度目からは対応されるかもしれない。だけど、初撃である今なら……ッ！

「ダブルニードル！」

「ルンパツパ、うしろ！」

「スピーイイツ！」

スピアーの右腕のニードルが遂にルンパツパの急所に命中した。続く二撃目も急所を撃ち抜く。

「畳み掛ける、スピアー！ 連続でダブルニードル！」

「スピスピスピスピスピーイイイイ！」

このチャンスを逃したら、もう勝利はない。

「いつけえええええええ！」

「スピーイイイイイイ！」

反撃の余地を与えない連続攻撃。スピアーが止まった時、ルンパツパは完全に戦闘不能になっていた。

「ルンパツパ、戦闘不能！ 勝者、スピアー！ よって、この試合は挑戦者アルトの勝利です！」

カザリの宣言を聞いた瞬間、俺はスピアーに向かって駆け出していた。

涙が溢れてくる。

「スピアー！」

「スピィー！」

スピアーも俺に向かって両腕を広げて飛んでくる。あまりの衝撃に息が出来なくなった。

「ゲホゲホ」

「ス、スピ……」

「コウガ……」

ゲツコウガが呆れながら手を貸してくれた。起き上がると、改めてスピアーとゲツコウガを見た。

「スピアー、ゲツコウガ！」

「スピ！」

「コウガッ！」

俺達は右腕を大きく振り上げた。

「俺達の勝ちだー！」

「スピ！」

「コウガア！」

エピソード『旅立ちの日』

スピアーとゲッコウガと共に勝利の喜びを分かち合っていると、エルフランと宝石箱のような小箱を持ったカザリが近づいてきた。

「おめでとう、アルトくん！」

エルフランはカザリの持つ小箱から小さなバッジを取り出した。キラキラと翠に輝く木が三つ並んだようなデザインだ。

「これがシャンティ・ジムに勝利した証、ボワバッジだよ」

「ボワバッジ……」

エルフランから受け取ると、早速バッジケースにはめ込んだ。八つの穴の一つが埋まり、感動が込み上がってくる。

「キミは旅の第一歩を踏み出した。スピアーとゲッコウガ。そして、まだ見ぬキミの仲間達と共にこのジムバトルを通じて学んだ事を活かして欲しい！ キミがポケモンリーグに出場する日を楽しみにしているよ！ きつと、ミリガンやチャンピオンも！」

「……はい！」

エピソード『旅立ちの日』

ジムを出ると、そこにはアクセルとセラがいた。

「アルト！ 最近、コソコソしてると思ったら！ アクセルから聞き出したわよ！ 旅に出るって、どういう事!?! どうして、そんな大事な事を黙ってるのよ！」

セラはカンカンに怒っていた。アクセルを睨むと、彼の頭には大きなたんこぶが出来ていた。どうやら、苛烈な尋問を受けたようだ。

「ごめん、セラ。だけど、俺は決めたんだ」

バッジケースを取り出して、エルフランから貰ったボワバッジを見せる。

「それ……、ジムバッジ？」

「すっげー！ 勝ったのかよ、アルト！ ジムリーダーに！」

眉間にシワを寄せるセラとは反対に、アクセルは興奮した様子でボワバッジを覗き込んだ。

「オ、オレだって！ 絶対にゲットしてみせるからな！ 必ず追いつ

くから、待ってるよ!」

「……待ってなんかあげないよ」

「え?」

エルフランとのバトルを通じて、多くの事を学んだ。俺達は成長している。これから先もずっと成長し続ける。

「俺は止まらない。もっともっと、強くなる。だから、追いつきたいなら駆け足だよ!」

「お、おう! 絶対に追いついてやる!」

アクセルと拳をぶつけ合う。すると、セラが小さな声で何かを呟いた。

「え、なに? セラ」

「バカって言ったのよ! 二人揃って、勝手に決めて!」

「セラ!」

セラは泣きながら走り出した。いつも勝ち気でお姉さん振る事が多いセラの泣き顔なんて、ほとんど見たことが無かった。少しの間途方に暮れてしまった俺達は大慌てでセラを追いかけた。

「待ってよ、セラ!」

「おーい、セラ! 悪かったって!」

「うるさいうるさい! バカ共、ついて来るな!」

周りの大人達はひたすら微笑ましげな顔をするばかり。必死に走っていると、気がつけばシティの外れまで来てしまっていた。

「あつ、危ないよ、セラ!」

街や村の境界線に近づいてはいけない。親が子に伝える大切な決まり事。当然、俺達もお母さん達に聞かされている。シャンティ・シティのシンボルを身に着けたドデカバシが警告の為に近づいてきた。

「カバシ! カバシ!」

街の方へ戻れと叫ぶドデカバシ。だけど、セラには聞こえていないらしい。ドデカバシを無視して境界線を越えてしまった。

「カバシ!」

ドデカバシが慌てる。基本的に野生のポケモンが街や村に近づくことはない。それは、それぞれの街に駐屯するアガリア警察やジム

リーダーの存在があるからだ。

この地方では野生のポケモンの中には強力な力を有する個体が数多く存在する。それでも、凄腕のポケモントレーナーに育てられた一流のポケモンとは一線を画す。

それでも、時折ふらりと境界に近づくポケモンがいる。だからこそ、大人は子供に近づくなといい、ドデカバシのようなポケモンが巡回している。

「セラー！」

「カバシ！」

ドデカバシが追いかけてしようとすアクセルを止める。

「どけよ！ セラが行っちゃもう！」

「カ、カバシ……！」

ドデカバシは境界の外へ行ってしまうセラと行こうとしているアクセルの間に挟まれ混乱仕掛けている。

「スピアー、ゲッコウガ！」

「スピッツ！」

「コウガッ！」

スピアーとゲッコウガを出すと、ドデカバシは目を丸くした。

「ドデカバシ！ 俺はボワバッジを持つてるんだ！ 一緒に行かせてくれ！」

「……カバシ！」

バッジを見せるとドデカバシは俺達の足止めをやめてセラを追い始めた。

「先行してくれ、ゲッコウガ！」

「コウガア！」

ゲッコウガは二つ返事で速度を増した。あの夜と同じようにあつという間に森の奥へ姿を消す。

「すっげー！ なんだよ、あのスピード！」

「ゲッコウガならすぐにセラを捕捉してくれる筈だよ！ 急ごう！」

「お、おう！」

「カバシ！」

「スピッター！」

セラとゲツコウガはわりと近くにいた。だけど、状況が問題だ。ゲツコウガがセラを背中に庇い、ゴロンダの群れと対面している。ゲツコウガの力を察したのか、群れ全体が殺気立ち、セラは怯えきっていた。

「セラー！」

アクセルがセラに駆け寄っていく。俺もゲツコウガの下へ向かった。

「ゲツコウガ！ セラを守ってくれて、ありがとう！」

「コウガ」

ゴロンダの群れを見る。殺気立って入るけど、攻撃してこない。

「コウガ」

ゲツコウガも群れを睨むだけに留めている。

「お、おい、どうするんだ!？」

アクセルがセラを背負いながら聞いてくる。きっと、ゲツコウガなら簡単に蹴散らす事が出来る。

「カバシー！」

判断を迷っていると、ドデカバシに突かれた。

「ドデカバシ……?？」

ドデカバシはシティの方を翼で指し示している。戻れと言っているんだ。ゲツコウガも頷いている。

ゲツコウガにしんがり殿を頼み、俺達はゆっくりと来た道をもどり始めた。

「……うう、怖かったよお」

セラは泣きじやくっている。

「マジで勘弁しろよな。寿命が縮んだぜ……」

そう言いながら、アクセルはホッとした様子だ。

「まったくだよ。キミ達、戻ったらお説教だからね！」

「はい……って、あれ?？」

いつの間にか、隣にエルフランの姿があった。

「エ、エルフラン!？」

「ジムリーダー!？」

「ハロハロー」

どうやら、ドデカバシが巡回ルートを外れた事がトレーナーに伝わり、ジムの前で起きた事をジムの関係者から聞いていたエルフランが咄嗟に駆けつけてくれたようだ。

「あの場所はゴロンダ達の縄張りなんだよ」

エルフランは言った。

「彼らは怖がっていたのさ。アルトくんのゲッコウガを」
「怖がっていた……？」

強くて頼りになるゲッコウガをどうして怖がるのか、俺にはサツパリ分からなかった。

「ゲッコウガは強い。それこそ、その気になればゴロンダ達を一方的に薙ぎ払えてしまう程に」

「でも、ゲッコウガはそんな事……」

「うん。ゲッコウガは頭がいい。それに凄く優しい子。だけど、ゴロンダ達には分からない。もしかしたら、自分達の棲家が壊されるかもしれない。もしかしたら、子供も大人も殺されてしまうかもしれない。だから、彼らは決死の思いでゲッコウガに立ち向かおうとした」
「……俺が頼んだんだ。ゲッコウガに先行してセラを守ってもらおうと思つて……。ゲッコウガは何も悪くないんだ！　ごめん、ゲッコウガ。ごめん……、ゴロンダ」

「コウガ」

ゲッコウガはポンポンと俺の頭を撫でた。

「ゲッコウガ……」

「キミが間違えたわけじゃない。もちろん、ゲッコウガが悪いわけでもない」

「でも……！」

「アルトくん。ポケモンは生き物なんだよ」

エルフランは言った。

「彼らはいつだって全力で生きているんだ。そして、キミも全力だった。キミがゲッコウガを向かわせなかったら、その子が危ない目にあつていたかもしれない事も事実なんだよ。全力と全力がぶつかり

合えばこういう事もある。キミはまた一つ学んで成長したんだ！
旅に出るって事は、そういう事の連続なんだ。楽しい事ばかりじゃない。辛い事や苦しい事もたくさん待っている。だから、キミには旅を諦めるっていう選択もある。どうする？」

「……それでも、俺は旅に出ます」

この世界は人間だけのものじゃない。空に、海に、大地に、ポケモン達がいる。野生の営みがある。

そんな当たり前の事さえ、俺は今まで考えた事すらなかった。

「俺は強くなりたい」

はじめはミリガンやチャンピオンの力に憧れた。だけど、エルフラとバトルして、いろいろな事を教わって成長した。ただ、ポケモンを鍛えて、強い技を覚えればいいわけじゃない事を知った。

「もつと、知りたい。もつと、成長したい。もつと、強くなりたい！

その為にも、俺は旅に出る！」

「うん！ 失敗の先にこそ、成長がある。だけど、足を止めたら成長まで辿り着く事は永遠にない。だからこそ、キミは強くなる」

気づけば、俺達はシティまで戻ってきていた。

「この街の西から続く6番道路。その先にはオーヴェル・シティがある。通称・バトルシティとも呼ばれる程にポケモンバトルが盛んに行われている場所なの。ジムだけじゃなくて、バトルタワーや各種大会が行われるドームもある。そして、ジムリーダーのヴァイクはアガリア一熱い男。きつと、そこでもキミは成長出来るよ」

そう言うと、エルフランはジムに向かって去っていった。

「旅立ちの時は見送りに行くよ。またね、アルトくん」

オーヴェル・シティ。俺の旅の最初の目的地。

「バトルシティか……」

拳を握りしめていると、鼻をすすする音が聞こえた。

「セラ……？」

「本当に行っちゃうんだね……」

「……うん。ごめん、セラ。決めたんだ、俺」

セラはアクセルを見た。

「アクセルも……？」

「……ああ、オレも行く。オレだって、強くならなきゃいけないんだ」
その言葉にセラはまた鼻を噉った。

「分かったわよ……。もう、止めない」

「セラ……！」

セラは家に向かって歩き出した。

「ごめんね、今日は迷惑掛けちゃって。それから、ありがとう」

それだけ言うと、セラは走り去っていった。

俺達はその背中に何も声を掛ける事が出来なかった。

数日後、俺は旅立ちの準備を終えた。

村の人達に挨拶も済ませて、必要な物をリュックサックに詰め込み、お母さんがカルネ・シティで買ってきた蒼いストールを首に巻いた。

「達者でな、坊主」

「辛くなったら帰ってくるんだよ、アルトちゃん」

「危ない事はあんまりすんなよ、アルト！」

「がんばってね、アルトくん。キミの活躍を期待しているよ」

村の外れでみんなと最後の挨拶を交わす。

「アルト。困った事があつたら、必ず報せるんだぞ。どこにだって飛んでいくからな！」

お父さんは耳にタコが出来る程聞かされたポケナビの説明をしつこくしてきた。

「電話してちょうだいね！ 一日一回は無理でも、三日に一回は絶対よー！」

お母さんには痛いくらい強く抱きしめられた。

「必ず追いつくからな」

「うん」

アクセルと拳をぶつけ合い、最後にセラの下へ向かった。

「行ってらっしゃい、アルト」

俺がボワバッジを手に入れた日から今日まで、セラは俺やアクセルの前に姿を現さなかった。怒っているのかと思っていたけど、セラは

むしろ晴れ晴れとした表情を浮かべている。

「わたしも追いつくからね、絶対」

「え?」

セラは不敵に笑うと、モンスターボールを取り出した。

「まさか、セラも!?!」

「うん、旅に出る!」

俺はアクセルと顔を見合わせた。

「で。でも……!」

「おいおい、いきなりどうしたってんだ?!」

「うっさい! わたしが決めたの! 見てなさいよ、二人共! わたしはあんた達より絶対強くなってるんだから!」

セラの宣言に驚きつつも、どこか嬉しかった。

旅に出ると決めても、二人と離れ離れになる事が寂しくなかったわけじゃない。

しばらくは離れ離れになるけれど、いつかは三人でまた一緒にいられるようになる。

「……はやく追いついて来てよ、二人共」

「おう!」

「もちろん!」

俺はシャンティ・シティの西の境界に向かって歩き出し、モンスターボールからスピーアとゲツコウガを出した。

「行ってきます!」

「スピー!」

「コウガッ!」

スピーアとゲツコウガと一緒に手を振って、俺達はシティの境界を出た。

俺達の冒険の旅は今、はじまった!

第二章 『旅の仲間』 プロローグ

ポケットモンスター。縮めて、ポケモン。

この世界で生きる、不思議な生き物。

空に、海に、大地に、彼らはいる。

「神様ー！」

アガリア地方の北部に尋がるアネト山脈。その最奥に佇むジユラ・マウンテン。

そこは常にブリザードが吹き荒れる、アガリア屈指の魔境の一つ。

少女はそこにいた。

「逃げて下さいー！ここにいたら捕まりますー！」

少女に神と呼ばれたポケモンは動かなかった。これまで、神が選んだ人間やポケモン以外にこの場へ脚を踏み入れたものはいない。

「神様ー！はやく、奴らの手の届かない場所へ！」

少女が必死に叫ぶ。

ジユラ・マウンテンの中腹には『神』を祀る者達の隠れ里がある。彼女はその村で生まれ育ち、今日まで生きてきた。

他の村人達が妄信的に神を崇める中、好奇心旺盛な彼女は神を超常的な存在ではなく、家族や仲間のように接してきた。なんと村人達に叱られても彼女は変わらず、その想いは神にも伝わった。

いつしか献上品を届けに行く日でなくとも、彼女が望めば神の方から彼女の為の道を開くようになり、気づけば彼女は巫女と呼ばれるようになった。

村人達は『ヤツラ』の存在に気付いても、神の怒りに触れる愚か者としか思わなかった。けれど、少女は違った。

好奇心旺盛な彼女は十歳にして、村の誰よりも賢くなっていた。村中の本から知識を得て、時には神の眷属と呼ばれるポケモンが運んでくる書籍からも世界を学び続けてきた。

そんな彼女だからこそ、識っている。神様はポケモン。いくら強く

てカツコよくても、絶対に勝てる保証はない。

「あつ……、ああ……」

そして、少女の不安は的中する。神様と少女を取り囲む無数のポケモン達。どのポケモンも徹底的に鍛え上げられている。

「神様、逃げてー!」

両手を広げて神を守ろうとする少女。神はようやく動き出した。青白い翼を広げて、少女の前に立つ。

そして……、

プロローグ

「トレーナー同士、目と目が合ったらポケモンバトル! 準備はいいかい? ルーキー!」

シャンティ・シティを取り囲む大森林を抜けた途端、いきなりバトルを仕掛けられた。

「ルールは二対一でいいですか?」

けれど、驚いている暇なんてない。これがアガリアで旅をするという事なんだ。

常在戦場。むしろ、挑まれる前に挑む心構えでいなければ、ミリガンやチャンピオンには届かない。

「オーケー! カモン、オオスバメ!」

「スバツ!」

「行くぞ、スピアー!」

「スピツ!」

「おっとー! スピアーかよ。こいつはマズったな……。けど、始まったもんは仕方ねー! いくぜ、ルーキー!」

「来い!」

はじめての赤の他人とのポケモンバトル。

少し、緊張する。

「オオスバメ、ばくおんぱ!」

「スバア!!!」

「スピアー、大きく距離を取りながら影分身!」

「スピー!」

ばくおんぱはとにかく攻撃範囲が広い上に威力も高い。ジム戦前なら為す術無くやられていたかもしれない。だけど、今のスピアーには距離を取って攻撃する手段がある。

「スピアー、ミサイルばり！」

「スピッツ！」

「あつまーい！ オオスバメ、エアスラッシュで撃ち落せ！」

「スバスバア！」

信じられない。スピアーのミサイルばりはとても細い。それなのに、オオスバメは的確にエアスラッシュを命中させた。

「オラオラ！ 休んでいる暇なんぞ無いぞ！ オオスバメ、ばくおんぱ！」

「スバア!!!」

「スピッツ!?!」

攻撃のリズムが早い。今までのバトルとは違う。お父さんも、カザリも、エルフランも、みんな俺達の力を引き出すように戦っていた。だけど、この人は俺達を倒す為だけに戦っている。

スピアーはばくおんぱを受けて大きく吹き飛ばされた。

「スピアー！」

「……………ここまでだな」

「ま、まだいけます！」

「スピッツ！」

スピアーも戻ってきて戦意をオオスバメに向けるが、オオスバメも地上に降りて羽を休め始めた。

「根性があるな、坊主。けど、勝ち目のないバトルの時は『降参』する事も大切だぜ」

「こ、降参なんて！」

「街中か、街に近い所なら限界バトルもありだけだよ。こういう野良バトルはほどほどに楽しむもんだぜ」

そう言うと、彼はキズグスリを放り投げてきた。

「まっ！ 光るもんがあつて楽しかったぜ。あばよ、坊主」

そう言い残すと、こつちが何を言っても振り返らずにシャンティ・

シティの方へ歩いて行ってしまった。

「……ま、負けた」

「スピー……」

結局、何も出来なかった。俺は貰ったキズグスをスピーアーに使いながら今のバトルを振り返った。失敗から学ぶ。それが大切だ。

「とにかく、リズムだね。今までと同じリズムで戦ってたら、どうしても後手に回っちゃおう」

「スピー！」

「そう言えば……。なんで、あの人は俺の事が新人だルーキーってわかったのかな？」

「スピー？」

とりあえず、進もう。出足を挫かれたけど、オーヴェル・シティまでは途中に広がるクレルモア大平原を横切らないといけない。モタモタしている時間はない。

「距離はこっちで大丈夫だよね」

ポケナビで位置と方角を確認する。問題なし。

「行こっか、スピーアー」

「スピー！」

スピーアーをボールに戻して、再び歩き始めた。

しばらく歩いていると、ようやくクレルモア大平原に到達した。

「たしか、ここから北に向かうとチャンピオンロードとポケモンリーグの会場があるんだっけ」

思わず現実逃避しそうになる程、すごい光景が広がっている。

「……なにこれ」

ここは平原だった筈なのに、まるで溪谷のようになってる。底の方は赤く燃えたぎった溶岩が流れていて、岩や緑の結晶体の柱が無数に点在している。空は雷鳴が轟き、赤青黄色に翠の何かが超スピードで飛び回っている。

この世のものとは思えない光景に呆然としてると何かが降ってきた。

「……へ？」

「おおよよ!? こんな場所で何をポケータツとしてるんですか!?」
いきなり、見知らぬ女の子に手を引っ張られた。

「え? え?」

直後、俺が立っていた場所に巨大な岩が落ちてきた。

「なっ、なっ!? なにごと!?」

「なにごとって、決まってるじゃないですか! 超級トレーナー同士のポケモンバトルですよ!」

「ポケモンバトル!? これが!」

「伏せて! 破壊光線同士がぶつかり合います!」

倒れ込むように伏せると、動き続けていた影の内の二つの正体が見えた。

青はギャラドス。赤はリザードン。両者の間には一キロ近い距離が空いている。到底、ポケモンの技が届くとは思えなかった。

「来ますよ!」

女の子の叫びと共にギャラドスとリザードンが同時に破壊光線を発射した。

信じられない。あれだけの距離が離れていたにも関わらず、破壊光線はどちらも減衰する事なく元・大平原のど真ん中でぶつかりあった。衝撃が地面が揺れ動き、爆風がここまで届いた。

「これがポケモンバトル……」

「とにかく、ここにいたら危険ですよ!」

「あっ、あれは!」

今度は黄色の正体が判明した。スピアーだ。ミサイルばりをリザードンに向けて放った。

六つのミサイルばりが信じられない速度でリザードンに殺到する。リザードンはオーバーヒートで焼き払おうと躍起になっているけれど、ミサイルばりはまるで意志を持っているかのように炎を避け、回避しようとするリザードンを追いかける。

そこで、翠の正体も分かった。ジュナイパーだ。矢のように打ち出されたリーフストームがミサイルばりを撃ち落とした。すると、今度はギャラドスの龍の波動がジュナイパーに向かい――、

「だあああ！ ボケつと見てるんじゃないやありませんよ！」
「うわっ!？」

眼の前で繰り広げられる超級トレーナー同士のポケモンバトルに見惚れていると、女の子は実力行使に打って出た。モンスターボールから出したユキノオーに俺を背負わせると、大平原の外側へ向かって走り始めた。

「ま、待って！ もっと見たい！」

「もっと見たいじゃありませんよ！ 死にたいんですか!？」

「だって、あんな……、すごい！」

まだ、彼らは戦っている。リザードンがオーバーヒートをスピアーに放った。

「スピアーが！」

オーバーヒートに呑み込まれるスピアー。あれでは一溜まりもない。そう思った。

「……え!？」

けれど、スピアーは健在だった。オーバーヒートの中を超速回転しながら泳ぎきり、リザードンに致命的な一撃を加えた。

「あれって……」

「ドリルライナーですね。急所を穿つ、まさに必殺の一撃です」

「ドリルライナー……」

リザードンは炎と飛行の二重タイプ。スピアーとは相性が最悪に近い相手だ。そのリザードンのオーバーヒートを受けながら、逆に倒してしまうなんて……。

「すごい……。すごい！」

ユキノオーに背負われながら、俺は瞼に焼き付いたスピアーの勇姿を何度も振り返った。

「いつか、俺達も……」

第一話『アイリス』

第一話『アイリス』

「とにかくですね！ 超級トレーナーを見たら逃げる！ これ、基本ですよ！」

クレルモア大平原で出会った少女は腰に手を当てて言った。

「で、でも、超級トレーナーとか、どうやって見分ければいいの？」

「なんと！ そんな事も知らないのですか!? おどろ木ももの木さんしよの木ですよ！」

どうしよう。何を言ってるのか分からない。

「さ、さんしよ……？」

「とにかく！ 一定以上の高度で戦闘行為を行っていたら、それは超級トレーナーの証です。それに、ポケナビを見ればトレーナーカードのランクが一目瞭然！ シルバーでポケモンリーグ上位入賞レベルなんです！ あんなゴールドクラスのバトルにノーマルカードが近づくなんで自殺行為ですよ！」

「ま、待ってよ！ ポケナビでトレーナーカードのランクなんて分かるの!？」

「分かりますよ！ この地方ではランク識別アプリの搭載は義務ですからね！ ここをこうです！」

女の子は俺のポケナビを操作してマップを表示させた。マップ上には二つの丸が浮かんでいて、一つは白、一つは青みがかった緑だ。「そのカラーがトレーナーカードのランクを示しているんですよ。あなたは白だからノーマル。わたしは青銅のブロンズ。ちなみに、ここをこうすると！」

今度は名簿のようなものが現れた。

「あなたが出会い、バトルしたトレーナーの一覧です……って、おおよよ!?! なんて、あなたのポケナビにチャンピオンや四天王の名前が!？」

「え？」

ポケナビは貰ったばかりの筈。それに、チャンピオンとは別にバトルなんてしていない。

「なんでだろ?」

「いやいやいやいや、どうしてあなたが不思議そうに首を傾げているんですか!」

「だって、チャンピオンとバトルなんてしてないし……」

「そうなんですか? バグ……? いや、そんな筈は……」

首を傾げている彼女を尻目に俺は名簿を見た。

ミリガン、ザラク、他にもアラートの名前まである。それなのに、エルフランやカザリの名前がない。最新のところにはヴァルカスとアイリスという名前が載っていた。

「えっと……、君がアイリス?」

「そうですよ? って、そう言えば自己紹介がまだでしたね! 名乗らせてもらいましょう。わたしの名はアイリス! このバトルの聖地、アガリアの未来有望なポケモントレーナーです!」

なんだか、聞き覚えのある名乗り方だ。流行っているのかな?

「俺はアルト。ヴェゼール・ヴィレッジのアルトだよ」

「ふむふむ、アルトですね! 覚えましたよ! それで! 本当にチャンピオンや四天王にはあつた事がないんですか?」

「いや、会ったことはあるよ」

「あるんですか!?! でも、さっき……」

「バトルした事はないよ」

「なるほど……。ちなみに、チャンピオンとはどこで?」

「俺の村だよ。ヴリルっていう悪いヤツラに襲われてさ。その時に四天王のミリガンが助けに来てくれたんだ。その時にチャンピオンも現れてさ」

「ヴリル!」

「へ?」

急にアイリスは怖い表情を浮かべて迫ってきた。

「あの連中に襲われたんですか!?! 大丈夫だったんですか!?!」

「う、うん。ミリガンとチャンピオンが助けてくれたから、村は燃やされたけど俺達は全員無事だったよ」

「いやいやいやいや、村が燃やされたって、全然無事じゃないじゃない

ですか!」

「いや、まあ……、うん」

アイリスはムキーンと怒り始めた。なんというか、感情豊かな子だ。「アイリスはヴリルを知ってるの?」

「……人並み程度に、ですが」

そう言うと、アイリスはヴリルの事を熱く語りだした。

「あのカルト団体は最悪ですよ! 自分達の信奉する神こそが絶対とか言っつて、他の神様を祀っている村を襲ったり、自分達の神に纏わるものがあれば強引に奪っていく! その上、ポケモンをたんなる戦闘マシーンとしか思っていないんですよ! いつか、絶対に叩き潰してやる……!」

最後の言葉には深い怨念が籠められていた。

「ヴリルか……」

村を燃やされた事に怒りを感じないわけじゃない。ただ、ミリガンやチャンピオンの事が衝撃的過ぎて、あんまり印象に残っていない。だけど、あの大量のポケモン達は驚異的だった。

「……ふう、やめましょう。ヴリルの話なんて一文の特にもなりません! そんな事よりも、アルト! バトルしましょう!」

「唐突だけど、いいよ! バトルしよう!」

トレーナー同士、目と目があったらポケモンバトル。俺はスピアーのモンスターボールを構えた。

「行きますよ、マニユーラー!」

「マニユツ!」

マニユーラ。氷と悪の二重タイプを持つ鉤爪ポケモン。スピアーとは相性も悪くない。

「いけ、スピアー!」

「スピツ!」

「スピアー……。ああ、だから、さつき!」

「いくぞ、スピアー! 影分身!」

「スピツ!」

スピアーの体が十体に分裂する。

「ムフフ！ マニョーラ！」

「マニョ」

アイリスが指をパチンと鳴らすと、マニョーラはニヤニヤと笑いながらふらふらと動き出した。

「なにかする気だ！ 発動前に仕掛ける、ミサイルばり！」

「今です！」

「なっ!？」

スピアーがミサイルばりの体勢に入った瞬間、マニョーラは一気にスピアーへ肉薄した。

「これぞ、騙し討ち！」

「避ける、スピアー！」

意識を研ぎ澄ませば、スピアーの複眼ならどんな攻撃も見切れる筈だ。

「スピッ!？」

「ニョーラ！」

スピアーはマニョーラの右の拳を回避した。けれど、本命の回し蹴りを急所に受けてしまった。

「スピアー！」

「畳み掛けますよ、マニョーラ！ 悪の波動！」

このままでは負ける。

旅に出たのに、強くなると決めたのに、また負ける。

「スピアー！」

そんなのイヤだ。俺達は勝つんだ！

「ダブルニードル！」

「スピッ！」

「なっ!？」

スピアーはマニョーラの悪の波動をダブルニードルで貫いた。

「マニョーラ、辻斬りで迎え撃つのです！」

「ニョラッ！」

「スピッ！」

スピアーの二撃目のニードルがマニョーラの辻斬りと激突する。

反動で二体は互いに弾かれ距離が出来た。

「ミサイルばり！」

「冷凍ビーム！」

スピアーの放ったミサイルばりは三発。内、一発は冷凍ビームに呑み込まれてしまった。

両者共に避ける暇はない。マニョーラに二発のミサイルばりが、スピアーに冷凍ビームが直撃してしまった。

「スピアー！」

「マニョーラ！」

二体共、完全にノックアウトしてしまっている。引き分けだ。

「スピアー」

「スピ……」

スピアーも悔しそうにしている。

「おおよ……。まさか、ルーキーと引き分けるとは……」

アイリスの方も納得し難い様子だ。

勝ちたいのは俺達だけじゃない。相手も勝ちたいと思つて戦っている。

「足りなかったんだ。もっと、勝ちにこだわらなきゃ……」

「スピー！」

俺はマニョーラの騙し討ちに動揺してしまった。そんな事ではダメなのだ。

どんな状況でも活路を見出し続ける。それが出来なければ、スピーアーがどんなに強くても、意味がない。

「アルト」

アイリスがマニョーラをボールに戻して近寄ってくる。

「ナイスフアイトです！」

「……君も、ナイスフアイト」

いろいろと思うところはあるけれど、俺達は互いの健闘を称え合つた。

「……って、やばっ」

大森林を抜けた時点で既に正午を通り過ぎていた。それから超級

トレーナーのバトルを観たり、ユキノオーに背負われながら走り回ったり、いろいろやっていたせいで空が赤く染まる始めている。

「夜までにはオーヴェルに辿り着く予定だったのに……」

「えっ、そうだったんですか!? およよ、これはわたし、やらかしましたかね?」

「いや、アイリスのせいじゃないよ。助けてもらったわけだし、いろいろと教えてもらったから、むしろありがたいと思ってる。マニユーラとのバトルもためになったしね」

「ムムツ、その心の広さはアイリス的にポイント高いですよ!」

相変わらずよく分からない事を言う子だ。

「それはともかく、野宿なんてしたことないけど大丈夫かな……」

「野宿? ポケモンセンターに泊まればいいじゃないですか」

「え? この近くにあるの?」

「もちろんですよ。だって、ほら!」

アイリスは近くの丘を駆け上っていく。慌てて追いかけると、眼下には光り輝く街並みが広がっていた。

「クレルモア大平原の南。治安の悪さはアガリア随一! ジムはないけどカジノはある! 通称・娯楽街! ユニオン・シティです!」

第二話 『ユニオン・シティ』

ユニオン・シティ。治安の悪さはアガリア随一の娯楽街。

その名に恥じぬ物騒な雰囲気は街中に漂っている。待ちゆく人達は誰も彼も目つきが鋭く、あちこちから妙な臭いが流れてくる。

「とりあえず、さっさとポケモンセンターに向かいましょう。早々絡まれる事はありませんが、厄介な人間もそれなりにいますから」

「なんでまた、それが分かかっていてこの街に?」

「欲しいものがあるのですよ、この街で!」

「欲しいものって?」

「あつ、聞いちゃいます? ムッフ、実はですね! この街でポケモンバトルの大会が開かれるんですよ。その優勝商品は、なんと! 溶けない氷なのです!」

「溶けない氷?」

「文字通り、溶けない氷なんですよ。こおりのエネルギーの結晶体で、こおりタイプのポケモンの力を高めてくれるんです」

「そんなものがあるんだ」

「折角ですし、アルトも参加してみますか? ルールはポケモン三体の入れ替え戦なんですけど」

「三体か……。俺の手持ちはスピアーとゲッコウガだけなんだ」

「そうなんですか? 大会は明日の夜ですし、朝、近くで適当にゲットしてみても?」

「三体目か……」

ゲッコウガはチャンピオンのポケモンだから、俺のポケモンは実質スピアーだけだ。

新しいポケモンをゲットするのもいいかもしれない。

「そうだね。明日、三体目をゲットしてくるよ」

「そうと決まれば、今日ははやくポケモンセンターに行つて休みましよう!」

「うん!」

繁華街を抜けると、静かな広場に出た。ポケモンセンターはその広

場に面していた。

「ようこそ、ユニオン・シティのポケモンセンターへ」

「あれ?」

そこにはシャンティ・シティのポケモンセンターで受付をしていたお姉さんがいた。

「どうして、ここに? 転勤?」

「おお、ルーキーのお決まりの反応ですね。かくいうわたしも最初はびっくりしましたが、あなたの知っているジョーイさんと、このジョーイさんは別人なのですよ!」

「え、そうなの?」

「いえ、同一人物ですよ。実は、明日の大会に向けて応援を頼まれたのよ」

「……まさかの同一人物とは」

ちよつと、悪戯心が湧いた。

「おお、ルーキーのお決まりの反応ですね」

「このジョーイさんは別人なのですよ!」

ジョーイさんもノツてきた。

「ほいやー!!」

アイリスは顔を真赤にしながら蹲ってしまった。

「それにしても、アルトくんはオーヴェルに向かった筈じゃなかったかしら? どうして、ユニオンに?」

恥ずかしがっているアイリスを尻目にジョーイさんは平常運転に戻った。

「実は、クレルモア大平原で超級トレーナーのバトルと遭遇しちゃつて、アイリスに助けてもらったんです。それで、気付いたらここに」「ああ、時々いるのよね。チャンピオンロードに入る前の腕試しにあそこを使うトレーナー。危ないから止めてほしいんだけど……」

話しながらジョーイさんは部屋の鍵を用意してくれた。

「はい、二人部屋。アルトくん、スピアーとゲッコウガ以外のポケモンはゲットしたの?」

「まだです。明日の大会に向けて、朝になったらゲットしに行こうと

思ってます」

「じゃあ、大丈夫ね。一応、部屋の中でポケモンを出す場合はルールがあるからコレ、読んでおいてちょうだい。あと、窓の鍵は解錠厳禁よ。ポケモンセンターに泥棒に入るなんて無謀な人は早々いないけど、万が一ってあるし」

「無謀……？」

「ポケモンセンターを利用するのは100%旅のトレーナーなんですよ」

アイリスが復活した。頬はまだ少し赤い。

「旅のトレーナーはピンキリですが、それでも旅に出ている時点で最低でも最終進化形態二体を保有している事になりますからね。そんなトレーナー達の溜まり場を襲うなんて、無謀もいいところなんです」

「なるほど」

そう言えば、治安が悪い筈なのにアイリスは早々襲われる事なんてないと断言していた。

旅のトレーナーを襲う事のリスクは思った以上に高いみたいだ。

「ところで、二人部屋ですか……？」

「ええ、その方がいいと思うわ。あなた達の歳のトレーナーが一人でいると、油断するおバカさんが結構いるのよ。昨日も襲っちゃった不良グループが可哀想な事になっていたわ」

その時の惨状を思い出しているのか、ジョーイさんは乾いた笑みを浮かべた。

「襲っちゃったって事は、その襲われたトレーナーもわたし達と同年くらいだったんですか？」

「ええ、そうよ。燃えるような赤い髪の男の子。彼も明日の大会に出るって言ってたから、残念だけど手持ちのポケモンについては内緒でも、あの歳でかなりの実力者よ」

「ほほう、面白いじゃないですか！」

「同い年の凄腕トレーナーか……」

アイリスとも再戦がしたい。これは何としても三体目のポケモン

をゲットしないといけなくなった。

「それと、これあげる」

「これは？」

「ユニオン・シティ近辺の地図よ。この辺に生息しているポケモンの種類も載ってるから、どのポケモンをゲットするか吟味してみて」

「ありがとうございます！」

第二話『ユニオン・シティ』

ジョーイさんと別れて、俺達は割り当てられた部屋に向かった。

「およよ、まさかまさかの初同衾。これは乙女的に嬉し恥ずかしイベントな予感……！」

相変わらず、よく分からない事を言う子だ。

「スピアー、ゲッコウガ」

部屋に入ると、すぐにモンスターボールからスピアーとゲッコウガを出した。

「コウガ」

ゲッコウガはチラリとアイリスを見た。何故か、アイリスの方は視線を逸している。

「ゲッコウガ。睨んじやだめだよ？」

「コウガ」

ゲッコウガが視線を外すと、アイリスはホツとしたように胸を撫で下ろした。ゲッコウガが怖かったのかもしれない。

「大丈夫？」

「へ？ え、ええ！ 問題無しですよ！」

拳動が少し変だけど、大丈夫そうだ。俺はジョーイさんに貰った地図をベッドの上に広げた。

「明日、新しいポケモンをゲットする事にしたんだ。どのポケモンがいいと思う？」

地図には様々なポケモンの情報が書き込まれていた。

「ひこうタイプとかどうかな？」

「この近くにはヤヤコマやマメパトがいるようだ。」

「うーん、ひこうタイプは微妙ですよ」

アイリスが渋い表情で言った。

「そうなの？」

「ええ、この地方では飛行する事が危険過ぎて、鳥ポケモンでさえ森や山で隠れ潜むように暮らしているんです。下手に空を飛んだらドラゴンポケモンの餌食ですからね」

「……そのドラゴンポケモンをゲットするのは？」

「ゴールドクラスでようやく退けられるようになる相手に手を出すと？」

アイリスの目が据わっている。

「……やめとく」

「それが賢明ですね」

仕方なく、別のポケモンを吟味する。

「アルトの今の手持ちから考えると、でんきタイプかじめんタイプなんかがいいと思いますよ？」

「でんきタイプだと、ピカチュウがいるね。あとはバチュルやコリンクか……」

「じめんタイプはディグダ、サンド、ツチニンなんかがありますね」

「スピアーとゲッコウガはどう思う？」

スピアーはよく分からないのか首を傾げている。対して、ゲッコウガはコリンクを指さした。

「コリンクですか、悪くありませんよ。最終進化形態のレントラーはエレキフィールドを覚えますし、ライドポケモンの適正もありますからね」

「ライドポケモン……？」

「ポケモンに乗って移動する事です。海や川の移動には波乗りを覚えたライドポケモンが必須ですし、陸上を駆けるライドポケモンがいれば旅がグツと楽になるんです」

そう言えば、お母さんは遠出する時にいつもバクフーンに乗っていた。

「うん、コリンクにする」

「決まったところでお風呂に入ってきますね」

「うん。俺は明日の準備をしてるよ」

「むふふ、ではではー」

アイリスは変な顔をしながら浴室の方へ向かっていった。

「アイリスは変な子だね」

「スピー！」

「コウガ……」

何故か、ゲツコウガはガツクリしている。

「でも、一緒にいて楽しい子だね」

「スピー！」

「コウガッ！」

ゲツコウガは元気になった。

「……ゲツコウガって、アイリスの事を知ってるの？」

「コウガコウガ！」

首をブンブンと横に振るゲツコウガ。余計に怪しい。

そう言えば、アイリスはチャンピオンの名前がザラクだと知っていた。偶々かもしれないけれど、アイリスはチャンピオンの関係者なのかもしれない。

「……まあ、いっか」

アイリスもゲツコウガも話したくないみたいだし、無理に聞き出したいわけでもない。

モンスターボールのチェックやポケモンゲットの指南書をジョーイさんに借りて読んでいると、頭から湯気を出して不満そうな表情を浮かべているアイリスが出てきた。

「ムムム、まさか覗きに来ないとは、ガツカリですよ！」

この子は一体、何を言ってるんだろう。

「とりあえず、俺も入ってくるね」

「ツハ！ これは、わたしが覗きに行くパターンですね！」

「別にいいけど？」

意味は分からないけど……。

「ノンノン。恥じらいがなければ意味がありません。というわけで、わたしはテレビを見てます」

「自由だなー」

アクセルやセラとは全然違う。だけど、こうして誰かと一緒にいるのは悪い気分じゃない。

第三話 『キテルグマ』

ユニオン・シテイに来て二日目の朝、俺はアイリスと一緒にコリンクの生息域へ向かった。

ジョーイさんに借りた『ポケモンゲットの極意!』という指南書によれば、自分から襲い掛かってくるポケモンは闘争心が強く、力を求める傾向にあるからゲットした後の関係性も深めやすいそうだ。逆に逃げ出そうとするポケモンを無理にゲットしても信頼関係を築くのが難しく、あまりお勧めしないとのこと。

「思い出しますねー。わたしが最初にゲットしたポケモンはカチコールだったんですよ!」

アイリスと初ゲットの時の話で盛り上がっていると、雷鳴のような音が聞こえてきた。でんきポケモンが暴れているのかと思つて音の方へ向かうと、そこにはバイクに跨る集団の姿があった。

「うわー、関わっちゃいけないオーラが迸ってますよ……」

バイクに乗っているのにヘルメットをしている人が一人もいない。おまけにスキンヘッドや前衛的過ぎる髪型の人ばかり。スキンヘッドの人の頭皮には入れ墨がもれなく刻まれている。

「……場所、変えようか」

「そうですね。それがいいです」

こっさり離れようとした時、近くの木が大きく揺れた。

「およ?」

「ん?」

「クマー?」

そこには、まるでぬいぐるみのクマのようなポケモンがいた。

第三話 『キテルグマ』

「このポケモンって……」

「キテルグマ!」

アイリスは慌ててモンスターボールを投げた。ユキノオー、クレベース、マニニューラが飛び出してくる。どれも最終進化形態のポケモンだ。

「アルトもゲッコウガを出してください！」

「う、うん！」

血相を変えたアイリスの言葉に従ってゲッコウガを出す。

「コウガッ！」

ゲッコウガはすぐに戦闘態勢に入った。

「あ、アイリス？」

「あのポケモンはキテルグマです。アローラ地方のポケモンなのですが、とにかく野生のポケモンの中でとびつきりヤバイやつです」

「クー？」

キテルグマは自分を取り囲むポケモン達を呑気に見まわしている。

アイリスが言うほど恐ろしい雰囲気は感じられない。

「アイリス、いくらなんでも警戒し過ぎなんじゃ……」

言った瞬間に後悔した。キテルグマはなんの予備動作もなく近くの巨木を片手で引き抜くと、いきなりユキノオーに襲い掛かってきた。

「キイイイイ!!」

「ええ!?」

まさか、最終進化形態のポケモン四体に囲まれて、逃げもせず襲い掛かってくるとは思わなかった。

「ユキノオー、ウッドハンマーです！ マニニューラは悪の波動！ クレベースは冷凍ビーム！」

アイリスが矢継ぎ早に指示を出す。ユキノオーがキテルグマの振り下ろした巨木を受け止めると同時にキテルグマに攻撃を繰り出すマニニューラとクレベース。

さすがに卑怯じゃないかと思っただけけれど、次の瞬間、その思考は吹っ飛ばされた。

「キイイイイイ！」

なんと、キテルグマは俊敏な動きで悪の波動と冷凍ビームを同時に躲けたのだ。そのままマニニューラに肉薄すると、アームハンマーで吹っ飛ばしてしまった。

「マニニューラー！」

スピアーと引き分けたマニニューラが一撃でノックアウトしてしまっただ。

俺達がマニニューラに気を取られている内に、キテルグマは今度はクレベースを持ち上げた。

「ちよつと!?!」

超重量のクレベースが真上にぶん投げられるという衝撃的過ぎる光景に絶句すると、キテルグマは落ちてくるクレベースにアイアンヘッドを見舞った。

「ク、クレベース!?!」

「まずい、ゲッコウガ!」

「コウガア!」

このままだとユキノオーまで倒されてしまう。

「ゲッコウガ、影分身!」

「コウガ!」

無数の影分身がキテルグマを取り囲む。その間にユキノオーがアイリスの下へ戻ってきた。

「つ、強過ぎますよ、いくら何でも!」

戦闘不能になってしまったマニニューラとクレベースをボールに戻しながらアイリスは顔を引き攣らせた。

「キイイイイイ!!」

たしかに、このポケモンはヤバイ。下手に背中を見せたらゲッコウガでも危ういかもしれない。

「ゲッコウガ、水手裏剣!」

「コウガッ!」

ゲッコウガが分身に紛れながら水手裏剣を放つ。とにかく、少しでもダメージを与えて逃げる隙を作らないと、今のままでは撤退もままならない。まさか、コリンクをゲットしに来て、こんなピンチに陥るとは思っていなかった。

「キイイイイ!」

キテルグマは迫りくる水手裏剣をアームハンマーでかき消してしまった。

その光景にゲッコウガの目が細まる。雰囲気が一変して、俺が指示を出す間もなく超スピードでキテルグマに肉薄すると辻斬りを繰り出した。

「コウガッ！」

「キイイイイ！」

辻斬りはキテルグマの急所を完璧に捉えていた。それなのに、キテルグマは光り輝くこぶしをゲッコウガに繰り出した。

「ゲッコウガ!?!」

「……キテルグマに接触ダメージは効果が薄いんですよ。それに、今のはドレインパンチですね。攻撃と同時に相手の体力を奪い取って回復する技です」

厄介過ぎる。

「ゲッコウガ！」

ハイドロカノンしかない。そう思って指示を出す前にゲッコウガは影分身でキテルグマの視界を塞ぎ、背後に回ってからハイドロカノンを繰り出した。

「すごい……」

これがゲッコウガの本当の力。俺が出そうと思っていた指示以上の最適な行動を自ら選択して実行した。

分かっていたことだけど、俺の指示はゲッコウガの力を半分も引き出せていなかったんだ。

ハイドロカノンを受けたキテルグマは前のめりになって倒れこんだ。

「コウガッ」

ゲッコウガが戻ってくる。

「ゲッコウガ……」

「コウガ」

ゲッコウガは窘めるように俺の頭をポンと叩いた。

そうだ。落ち込んでいる暇なんてない。今の俺が未熟だなんてこと、エルフランとの戦い十分に思い知った。

「……俺、頑張るよ。ちゃんと、ゲッコウガの力を引き出せるように」

「コウガ」

ゲッコウガは穏やかに笑った。

その時だった。

「おっしやー！ 今だ！」

突然、スキンヘッドの男が現れて、倒れているキテルグマにモンスターボールを投げた。

「ああっ!? ちょっと、なにしてるんですか!」

「へっへー! ゲットもしないでモタモタしてっからだよ! コイツがいれば、あの生意気な赤髪のがきに一泡吹かせてやれるぜ!」

呆気にとられていると、モンスターボールが弾けた。

「なっ!」

ゲット失敗だ。キテルグマはスキンヘッドの男を見ている。

「キイイイイ!」

スキンヘッドの男はポケモンを出していない。彼の仲間はずでに背中を向けて逃げ始めている。ゲッコウガやアイリスのユキノオーは見向きもしていない。

俺はボールホルダーにセットしておいた空のモンスターボールを手を取った。

「行け、モンスターボール!」

「クマ?」

モンスターボールがキテルグマの鼻にぶつかった。そのまま、キテルグマの体がモンスターボールに吸い込まれていく。

腰を抜かすスキンヘッドの前で揺れ動くモンスターボール。しばらくすると、カチツという音が鳴った。

「……ゲット出来た」

モンスターボールが自動的に手元に戻ってくる。

はじめはコリンクをゲットする為に来て、キテルグマと戦ったのも逃げるためだった。だから、ゲットする気は欠片もなかった。

しばらく茫然としていっていると、アイリスが目の前に現れた。

「や、やりましたね! まさかのキテルグマゲットですよ! これで大会参加条件のポケモン三体が揃いましたね!」

「……あつ」

三体目。俺にとって、実質的には二体目。初めて、バトルでゲットしたポケモン。

「……でも、いいのかな？」

キテルグマを倒したのはゲッコウガだ。俺は指示を出すことさえ出来なかった。

「何を言ってるんですか！」

アイリスは怒ったように言った。

「ゲッコウガはあなたのポケモンです！ それに、そのキテルグマはあなたがゲットしたポケモンですよ！ そんな態度はゲッコウガにも、キテルグマにも失礼です！ ここはドーンと、キテルグマゲットを喜ぶべきです！」

「アイリス……」

「コウガツ！」

ゲッコウガも頷いている。

そう言えば、エルフランが言っていた。

『出会い方じゃない。過ごし方なんだよ、ポケモンとトレーナーの絆を育むのは！』

そうだ。ちゃんと教わった。

「キテルグマ！」

俺はモンスターボールからキテルグマを出した。

よろめくキテルグマにリュックサックから取り出したキズグスリを振りかける。

「キテルグマ。俺はアルト。今日から、君のトレーナーだよ」

「クマー」

キテルグマはつぶらな瞳を俺に向けてくる。

「これからよろしくね」

「クマー！」

キテルグマが腕を伸ばしてくる。体を持ち上げられて、キテルグマの肩に乗せられた。

「うわー、ふかふかだ！」

「ムムム！ モフモフですか!? モフモフなんですね!? わたしも乗りたいです!」

さつきまでの怒った顔から一変して、アイリスはいつもの彼女に戻った。

「キテルグマ。アイリスも乗せてもらっていい?」

「クウー!」

キテルグマはアイリスを反対の肩に乗せた。

「ムホー! モフモフですよ! わっほーい!」

「……うん、モフモフだね」

キテルグマの毛皮に顔をうずめると、草木の香りがした。

「コウガ」

ゲツコウガがキテルグマに右手を差し出した。

「クマー」

キテルグマも右手を差し出し、二体はこぶしをぶつけ合った。健闘を称えあっているみたいだ。なんだか、予想以上にすごいポケモンをゲットしてしまった。

「モフモフ、最高です……」

うっとりした様子の子のアイリス。たしかに、このモフモフは最高だ。

「クマー!」

第四話 『大会前に』

「すっごーい！ あのキテルグマをゲットするなんて！」

シャンティ・シテイのジョーイさんと瓜二つの顔を持つ、ユニオン・シテイのジョーイさんがキテルグマのモンスターボールを見るなり甲高い声を上げた。

「あのキテルグマ……？ っていうか、キテルグマって、アローラのポケモンよね？ アルトくんに渡した地図にも載ってなかったわよ？」

シャンティ・シテイのジョーイさんが首を傾げる。それにしても、二人のジョーイさんはそっくりだ。目を皿のように細めても中々見分けがつかない。

「あの子、前にアローラから来て、リーグに挑戦したトレーナーに捨てられたのよ。二年前の、ほら、例のリーグ」

「ああ、アレね……」

「アレって？」

アイリスも顔を引き攣らせている辺り、有名な話なのかもしれない。

「現チャンピオンが出場したリーグよ。信じられない話だけど、豪傑が集うアガリアリーグを彼は一匹のポケモンだけで勝ち進んだの。それも、ノーダメージでね。あまりにも圧倒的過ぎて、同じ大会に出場したトレーナーの多くが心を折られてしまったの……。キテルグマを捨てたトレーナーもその一人。彼はアローラでも指折りのポケモントレーナーだったそうよ」

「チャンピオンが出場したリーグ……」

チャンピオン。村を襲ったヴリルを蹴散らして、俺にゲッコウガを貸してくれた人。

最強のポケモントレーナー。

「観てみる？ 記録ビデオがあるから、部屋のテレビで見れるわよ」

「観ます！」

第四話 『大会前に』

「……それにしても、ノーリアクションなんですね」

「なにが？」

「キテルグマが捨てられたポケモンだつてことにですよ。わたし、結構激おこぶんぶん丸ですよ！ それも、生まれ故郷のアローラではなく、環境も生態系も違うアガリアで捨てるなんて！」

最後の方は怒りで声が震えていた。それほど、彼女にとって許しがたい行為なのだろう。

「……キテルグマは俺のポケモンだよ」

キテルグマは俺とアイリスを肩に乗せてくれた。

トレーナーに捨てられた過去を持つていても、俺のことをトレーナーとして認めてくれた。それなのに、俺がキテルグマの過去にこだわるのは間違つていると思う。大切なのは今だ。

「なるほど……、無粋な事を言いましたね」

アイリスはバツの悪そうな表情を浮かべながらジョーイさんに借りたビデオをテレビにセットした。

アイリスは変な子で、一緒にいて楽しい子で、そして、とてもやさしい子だ。

「アイリス。今夜の大会、がんばろうね」

「え、ええー！ 絶対に優勝してみせますよ！」

力こぶを作り、笑つてみせるアイリス。やっぱり、彼女には笑顔がよく似合う。

「さてさてさーて！ 二年前のポケモンリーグの映像、かなり衝撃的ですよ。覚悟はいいですね？」

「うん」

アイリスが再生ボタンを押す。

『さて、はじまりました！ アガリアリーグ！ 第一回戦はカルネ・シテイのザラク選手対サレナ・シテイのノエル選手！ バトル・スタートです！』

映像に早速登場した現チャンピオンのザラク。なんと、彼はお母さんが慰安旅行に向かつていたカルネ・シテイの出身だったようだ。

ザラクが繰り出したポケモンはバシャーモだった。そう言えば、ヴリルに村を襲撃された夜、彼がミリガンに差し向けたポケモンもバ

シヤーマだった。

対するサレナ・シテイのノエルという少女が繰り出したのはゲッコウガだ。つい、ゲッコウガのモンスターボールを見下ろしている内にバトルがスタートしてしまった。

『おーつと!? 一撃です！ 水タイプの中でも最速を誇るゲッコウガが動き出す前にバシヤーマのかみなりパンチがクリーンヒット！ なんとという素早さ！ なんとというパワー！』

視線を逸らした一瞬の内の出来事を実況の人が解説してくれた。

『さあ、ノエル選手の次なるポケモンは！ なんと、メタモン！ 早速、メタモンがバシヤーマの姿に変身したぞ！』

バシヤーマ対バシヤーマ。いざ、戦闘が開始されたかと思えば、またしても一瞬で終わってしまった。チャンピオンのバシヤーマが早過ぎて、同じ能力を有しているはずのメタモンが反応し切れていなかった。

『準決勝までは三対三！ ノエル選手、後がありません！ さあ、最後のポケモンは！ ドーブルです！ これは……』

実況の菌切れが悪い。さすがに俺でも分かる。ドーブルの技はスケッチという相手の技をコピーするもの。バシヤーマの速度を考えれば、勝敗は火を見るよりも明らかだった。

どんでん返しが起こることもなく一回戦を制したチャンピオンは二回戦もバシヤーマを続投させた。

さすがに二回戦の相手はバシヤーマの対策にスピードの速いポケモンを揃えてきたけれど、バシヤーマは如何なる攻撃も紙一重で躲し切り、すべての敵を一撃で仕留めていった。

三回戦、四回戦も流れは同じ。フルバトルになる準決勝でも、メタグロスやガブリアス、果てはメガ進化ポケモンのメガ・カメックスさえバシヤーマのみで蹴散らしてしまった。

相手が弱いわけじゃない。ただ、チャンピオンのバシヤーマが強過ぎる。

最後の決勝、相手はアローラから来たトレーナーだった。アロハシャツを着た青年は次々に倒されていく自分のポケモン達の姿に青

ぎめていく。そして、彼が最後に繰り出したのはキテルグマだった。バシャーモの初手、ブラストバーンを跳躍で避けきり、ドレインパンチを繰り出そうとして回避されるも、すかさず破壊光線を放つが、その隙を突かれてかみなりパンチが命中してしまった。それでもキテルグマは倒れなかつたけれど、運悪く麻痺してしまった。スピードの落ちたキテルグマにバシャーモはブラストバーンを発動し、リーグ優勝を決めた。

「すごい……」

動画が終わった時、それ以外の言葉が出て来なかった。チャンピオンのバシャーモの圧倒的な力に対してだけじゃない。あれほどの力を持つバシャーモに立ち向かい、健闘してみせたキテルグマに対してもだ。

ほとんどのポケモンが一撃で倒される中、キテルグマはかみなりパンチの直撃を受けても倒れず、ブラストバーンの直撃によって意識を失っても立ち続けていた。

「やっぱり、かなり衝撃的だったようですね」

「……うん。すごく、衝撃的だったよ」

「ちなみに、チャンピオンが初戦で蹴散らした選手は去年のリーグの優勝者なんですよ」

「あのメタモンやドーブルを使っていたトレーナーが!?!」

バシャーモ一体になす術なく敗退し、崩れ落ちた少女。彼女が翌年のリーグ優勝者。にわかには信じ難い話だ。

「ポケントレーナーにとつての一年は短いようで、とても長いのですよ。チャンピオンに敗北した彼女は折れることなく研鑽を重ね、今やチャンピオンが一目置く程の実力者となりました。リーグ優勝後はサレナ・シテイのジムリーダーに就任し、変幻自在のテクニシャンとして名を馳せています」

ジョーイさんはリーグでチャンピオンと対戦したトレーナーの殆どが心を折られたと言っていた。

サレナ・シテイのジムリーダー、ノエル。会ってみたい。バトルしてみたい。

「……ムフフ、火が点いちやったみたいですね」

今の俺はチャンピオンやノエルはおろか、他のリーグ挑戦者達の足元にも及ばない。

ゲッコウガやキテルグマのトレーナーとして、あまりにも力不足だ。

だからこそ、バトルしたい。もっともっと、たくさんのバトルを経験して、彼らに相応しいトレーナーになりたい。

「スピアー！ ゲッコウガ！ キテルグマ！」

俺は三つのモンスターボールを放り投げた。

「スピッツ！」

「コウガッ！」

「クマー！」

ボールから飛び出してきた俺のポケモン達。スピアーは新顔のキテルグマを気にしている。

「みんな」

俺は言った。

「俺は強くなりたい。ジムリーダーよりも、四天王よりも、チャンピオンよりも！」

今の俺が口にするには大きすぎる夢。だけど、夢のまままで終わらせたりしない。絶対に叶えてみせる。

「だから、俺はこれからもたくさんのトレーナーやポケモン達と戦って、勝っていききたい！ まずは今夜の大会、絶対に優勝する！」

「スピアー！」

「コウガア！」

「クマー！」

スピアーも、キテルグマも、他ならぬチャンピオンのポケモンであるゲッコウガも力強く頷いてくれた。

「ほほーん。言ってくれますね、アルト。でも、優勝は渡しませんよ！ 勝つのはわたしですからね！」

アイリスが好戦的な眼差しを向けてくる。

「負けないよ、アイリス。勝つのは俺だ！」

「フッフッフ！ その迷いなき瞳、確固たる意志を乗せた啖呵、さすがはザラクが見染めたトレーナーですね。だからこそ、今一度言いましょう！ 勝つのはわたしです！ 今朝はキテルグマに不覚を取りましたが、あれがわたしの実力だとは思わぬように！」

時計の針が大会スタートの二時間前を指し示した。

「行こう、アイリス！」

「はい！」

スピアー達をボールに戻して、俺達は大会が開催されるユニオン・シテイの中心部、ユニオン・ドームへ向かった。

第五話 『開戦、ユニオン大会』

大会が行われるユニオン・ドーム周辺にはたくさんの人が詰め掛けていた。

「賑やかだね」

「ポケモンバトルの大会は老若男女を問わず、善悪すら問わずにあらゆる人を魅了しますからね！ 折角ですし、夜店で小腹を満たしてから行きましょうか」

「賛成！」

アイリスと一緒に屋台通りへ飛び込んでいく。たこ焼き、焼きトウモロコシ、焼きそば、わたあめ、チョコバナナ。つつい目移りしてしまう。

「それにしても、大人ばかりだね」

「フッフ、当然です！ ユニオン・シティは大人向けの娯楽都市ですからね。他の街や村とは違って、ここには民家もありません。従って、わたし達のような子供がいる方が稀なのです！ 最初に言つたじゃないですか、治安が悪くても絡んでくる人は早々いないと。ここにいる子供は総じて旅のトレーナーなのですよ！」

「なるほど……」

つまり、少し先のベンチで大量の焼きそばやたこ焼きをモリモリ食べている男の子も旅のトレーナーなわけだ。

「金髪……、という事は赤髪の凄腕トレーナーとは別口ですね」

俺達と同じ年くらいに見える。今の情勢下で十歳の旅立ちには珍しいという話だったけれど、この街には同世代のトレーナーが少なくとも四人集まっていることになる。

視線に気づいたのか、焼きそばを食べていた少年が顔を上げた。

「……食うか？」

「えっ？」

「ん？」

いきなり焼きトウモロコシを放り投げてきた。

「よつと」

弧を描いて飛んでくる焼きトウモロコシの芯を見事にキャッチするアイリス。

「……そっちがブロンズか」

ポケナビを見ながら彼は言った。

「どうして……」

「どうして分かるのかって？ ブロンズは大会で五回優勝すると上がれるんだ。一回だけならマグレもあり得る。けどな、五回となると最初の壁を破る必要があるんだ」

「最初の壁？」

「……アルトも感じたことはありませんか？ 旅のトレーナーとのバトルで、リズムが早いと」

ドキッとした。たしかに、オオスバメのトレーナーとの初バトルで感じたことだ。

キテルグマとゲッコウガのバトルでも、アイリスのマニユーラとのバトルでも、どうしても指示が遅れている感覚を覚えていた。

「それが最初の壁だ。それを敗れてねーなら、お前は敵じゃねーな」

おもしろい。まだまだ、知らないことがたくさんある。

ユニオン大会。ますますもって、楽しみになってきた。

「……へー。挑発してんのに、そういう顔するかよ」

いつの間にか食べ終わった焼きそばのパックを律儀にビニールに詰め込むと、彼は立ち上がった。

「オレはバレット。いずれメルカトを解放する男だ」

「メルカト……。まさか、あの街の出身者なのですか!？」

メルカト・シティ。たしか、この地方の制空権を握っていたジムリーダーの街だ。

「そうだ。今やドラゴンポケモンの巣窟と化した故郷を取り戻す。その為には力があるんだ。お前達も大会に出るんだよな？ 糧にさせてもらうぜ、全力で掛かってこい！」

獐猛な獣のような笑みを浮かべるバレット。メルカト・シティのことを俺はよく知らない。けれど、彼の意志の強さを感じる。

「負けないよ、バレット。俺も強くなるって決めたから」

「生憎ですが、勝利はわたしのものです！」

ちようど、広場のスピーカーからアナウンスが聞こえてきた。

『間もなく、大会が始まります。出場する選手のみなさまは選手用入場口より控室の方へお越しください』

俺達三人はニツと笑いあつた。

「いくか！」

「うん！」

「レッツゴーです！」

第五話『開戦、ユニオン大会』

いよいよ大会が始まる。選手の控室にはたくさんのトレーナー達が屯つていて、自分の順番を待っている。俺達は壁に備え付けられた大型画面で大会開幕のスピーチを聞いていた。

優勝賞品の『とけないこおり』が披露される。キラキラしていて美しい。

「あれがアイリスの目的なんだよね？」

アイリスに話しかけると、彼女は振り向きもせず、画面を食い入るように睨みつけていた。

画面には今回の大会の企画・運営を行っている『ジュリアス財団』のロゴマークが映し出されている。

「ジュリアス財団……」

「……四天王・シエルを長とするアガリア随一の財団法人です。この地方の大会の殆どはジュリアス財団によって開かれているのですよ」

ミリガンと同格の四天王。どんな人なんだろう。

『これより第一試合が開始されます。アギト選手とレイモンド選手はバトルフィールドへ移動してください』

天井のスピーカーからアナウンスが流れる。

選手は総勢十六名。使用ポケモンは三体。結構な長丁場人になりそうだ。

「アルト。彼の髪を見てください」

アイリスに言われて、控室から出ていこうとしている少年を見た。髪が赤い。

ジョーイさんが言っていた凄腕トレーナーに違いない。

「アイツ、すげーのか？」

「ジョーイさん曰く、凄腕だそうですよ」

「へー」

バレットは嬉しそうだ。

「おつ、始まりますよ！」

控室からバトルフィールドに移動した二人の姿が画面に現れる。

「いよいよ、スタートだ。」

『いけ、リザードン！』

赤髪の少年、アギトが繰り出したポケモンはリザードンだった。炎を吐き出しながら、獰猛な雄叫びを上げている。

『へい、ボーイ！ ボクのポケモン、超強いヨ！ イケ、ダイケンキ！』
レイモンドが繰り出したのはダイケンキ。リザードンでは相性が悪い。

『リザードン、火炎放射！』

『ダイケンキ、ハイドロポンプ！』

信じられない。普通、みずタイプの技とほのおタイプの技がぶつかり合えばみずタイプの技が押し勝つはずだ。それなのに、リザードンの火炎放射はハイドロポンプを触れた端から蒸発させていき、ダイケンキ本体に襲い掛かろうとしている。

『ナンと！ ダイケンキ、アクアジェット！』

ダイケンキはハイドロポンプを中断すると水を纏って火炎放射に向かっていった。

スレスレで回避し、一直線にリザードンへ向かっていく。

『リザードン、ドラゴンクローで迎え撃て！』

『ダイケンキ、シエルブレード！』

ドラゴンクローで迎え撃つリザードンにアクアジェットの勢いを乗せてシエルブレードを振り下ろすダイケンキ。

『受け流してアイアンテール！』

やっぱり、リズムが早い。ドラゴンクローでシエルブレードを受け流したりザードンは、その勢いを利用して体を捻り、強烈なアイアン

テールを放った。

ダイケンキが戦闘不能になり、レイモンドは二番手としてケンホロウを繰り出す。

『ケンホロウ、ゴッドバード！』

初手から大技を繰り出すケンホロウ。光に包まれ、猛スピードでリザードンに迫っていく。

『リザードン、フレアドライブ！』

向かってくるケンホロウに炎を纏ったりリザードンが踏み込んでいく。二体の激突はフィールドを震撼させ、衝撃波によって巻き上げられたフィールドの砂が結果を覆い隠してしまった。

『リザードン、ドラゴンクロー！』

『ケンホロウ、とんぼがえり！』

見えないはずなのに、アギトとレイモンドは迷いのない指示を出した。砂煙の中心が赤く光ったかと思うと、ケンホロウがレイモンドの下へ戻ってくる。満身創痍の様子だが、戦闘不能にはなっていない。

『いけ、ワルビアル！ ストーンエッジ！』

レイモンドの三体目はワルビアル。飛び出すと同時に地面を殴りつけ、岩の刃を次々にリザードンの周囲へ展開させる。

『リザードン、フレアドライブ！』

ケンホロウのゴッドバードやとんぼがえりに加えて、一度目のフレアドライブで相当なダメージを負っている筈なのに、リザードンが纏う炎はさっきよりも勢いを増している。

ストーンエッジの真正面から打ち砕きながらワルビアルに迫るリザードン。

『ワルビアル、カウンター！』

『させるな、リザードン！ 仕留めろ！』

アギトの声と共にさらに勢いを増すリザードンのフレアドライブ。カウンターを狙っていたワルビアルは場外まで吹き飛ばされて戦闘不能になってしまった。

『オーマイガー、オーマイガー！ セメて、リザードンだけでも！ ケンホロウ！ ゴッドバード！』

『迎え撃て、リザードン！ フレアドライブ！』

再びの激突。煙が晴れた時、立っていたのはリザードンだった。空へ向かって炎を吐きながら雄叫びを上げている。

凄まじい力。まるで、昼に観た二年前のアガリア・リーグでのチャンピオンのバシヤーモのようだ。

「強いな」

「燃えてくるじゃないですか！」

バレットとアイリスは闘争心を燃やしている。

俺もウズウズが止まらない。バトルしたい。熱く滾って仕方がない！

『第二試合をはじめます』

次々に行われるポケモンバトル。

そして、第五試合のアナウンスがスピーカーから流れる。

『第五試合をはじめます。アルト選手とアイリス選手はバトルフィールドへ移動してください』

アイリスを見る。

「さてさてさーて！ まさか、初戦からアルトとぶつかるとは、中々に運命的ですばらしい！」

瞳をギリギリと輝かせ、アイリスは言った。

「あなたの大会は残念ですが、ここでお仕舞です！」

「……『とけないこおり』は俺がプレゼントしてあげるよ」

アイリスは間違いなく強い。だからこそ、燃えてくる。

「ムフフ、勝っても負けても美味しすぎますね！ けれど！ だからこそ！ わたしが勝ちます！」

「俺が勝つ」

控室を出る。途中で別れてバトルフィールドへ出ると、大観衆を前に呑まれそうになった。

「アルト！」

アイリスが叫ぶ。

「あなたが見るべきは大観衆ではありません！ わたしだけを見てください！」

「うん！」

そうだ。俺が戦うのは観衆じゃない。アイリスだ。

「頼むぞ、スピアー！」

「さあ、決着をつけますよ！ マニユーラー！」

第六話 『VSアイリス』

第六話 『VSアイリス』

アイリスとのバトルは二回目だ。互いの手持ちも知っている。要するに、このバトルで運や意外性が介在する余地は無いという事だ。

「スピアー、影分身！」

「スピッツ！」

「同じ戦法……？ マニョーラ！」

スピアーが分身すると、マニョーラもあの時のバトルのようにふらし始めた。あの時は惑わされたけれど、今回は違う。

ゲッコウガの動きや画面越しに見たトレーナー達のバトルを見て分かった。リズムの早さの正体。それは動体視力や反応速度、咄嗟の判断力だけじゃない。技と技の切り替え方だ。

第一試合でアギトと戦ったレイモンドのダイケンキはアクアジェットで加速した状態からシエルブレードを繰り出した。ゲッコウガもキテルグマにハイドロカノンを撃つ前に影分身で目くらましを作った。

「スピアー、糸を地面にばら撒け！」

ミサイルばりやダブルニードルを繰り出せば本物が暴かれる。だけど、糸を無秩序にばら撒くだけなら問題ない。

「下手に動けば糸を踏んでしまう……。ならば、マニョーラ！ 地面に向かって冷凍ビーム！」

「マニョーラ！」

折角糸をばら撒いたフィールドが凍り付いていく。シャンティ・ジムの時と一緒に。あの時もルンパッパのしぜんのちからであつさりと作戦を破られた。

だけど、俺もあの時のままじゃない。マニョーラの使える技の中で、この状況に対応出来る技が冷凍ビームだけなのは分かっていた。

「スピアー、凍った大地にミサイルばり！」

「スピイー！」

ミサイルばりが氷の大地を砕く。鋭く尖った氷の断片が今度こそマニニューラの動きを止めた。

「氷のまきびしですか、ここまでの戦法をデザインしていましたね？」

「これでだまし討ちはない！ スピアー、ミサイルばりだ！」

「甘いですよ！ 悪の波動！」

ミサイルばりと悪の波動がぶつかり合う。

「避けるー！」

押し負けた。ミサイルばりを弾き飛ばして迫りくる悪の波動をスピアーが間一髪で回避する。

「もう一度だ、スピアー！ 狙い撃て！」

「スピーー！」

思い浮かべるのはクレルモア大平原で見たスピアーの姿。意志を持つかの如く自在に動くミサイルばり。

「……焦り過ぎですよ、アルト！ マニニューラ！」

「ニユラッ！」

「え!？」

氷のまきびしが敷かれている筈のフィールドをマニニューラが走り出した。

よく見れば、大地が抉られ、まきびしが無くなっている。

「しまった!?! さっきの悪の波動……!！」

マニニューラはミサイルばりを紙一重で回避すると、スピアーに肉薄した。

「騙し討ち！」

「ニユラッ！」

またしても、マニニューラの騙し討ちが決まってしまった。

「策を弄することも大切。ですが、そのスピアー。その策が強みを殺していますね」

「スピアーの強み……」

騙し討ちを受けたスピアーがニードルを杖にして立ち上がろうとしている。

「あなたなら分かるはず！ スピアーに真の力を発揮させる方法

が！ マニョーラ、冷凍ビーム！」

「避ける、スピアー！」

スピアーの強み。そうだ、分かっている。

お父さんのクロバット。エルフランのルンパッパ。スピアーが勝利したバトルはいつだって正攻法だった。

「……そうだ、そうだった」

一番大切で、一番基本的なことを忘れていた。

トレーナーとして、スピアーを勝たせるんだって片意地を張り過ぎた。他ならぬスピアーを信じる気持ちが欠けていた。

「スピアー、ダブルニードル！」

「スピッツ！」

「マニョーラ、もう一度冷凍ビームです！」

「マニョー！」

「お前なら見切れるはずだ！」

「スピイイイ！」

範囲の広い冷凍ビームの軌道を見切り、スピアーがマニョーラに接近していく。

「辻斬りで迎え撃つのです！」

「ニユラツ！」

「穿て、スピアー！」

「スピイイイ！」

スピアーのニードルがマニョーラの辻斬りをはじき、その急所に命中する。

「マニョー！」

戦闘不能にはならなかった。けれど、マニョーラの動きが明らかに鈍り始めた。

「これは、毒状態!? まさか、今のは……、どくづき！」

新しい技だ。

「畳み掛ける！ ダブルニードル！」

「スピイイイ！」

毒でふらついているマニョーラにダブルニードルが二連続で命中

した。

戦闘不能になるマニョーラ。

「やったー!」

「スピーイ!」

スピーアーと一緒にたつてガッツポーズを取っていると、アイリスはマニョーラを戻して新しいモンスターボールを取り出した。

「喜ぶのは早いですよ、アルト。ユキノオー、出番です!」

アイリスの二番手、ユキノオーが現れると、同時に小さな氷の粒が降り注ぎ始めた。

「いきますよ、いかなだれ!」

「オオオオ!」

ユキノオーは大地を殴りつけた。すると、大地が波打ち、雪崩の如くスピーアーに迫る。あの質量を貫くことは出来ない。

「スピーアー、上空に逃げるんだ!」

「スピー!」

「こおりのつぶて!」

「オオオオ!」

飛び上がったスピーアーにユキノオーがこおりのつぶてを繰り出す。

「ミサイルばりで撃ち落とせ!」

「スピー!」

狙いを定めてミサイルばりを撃ちだすスピーアー。

「エナジーボール!」

「ダブルニードル!」

迫るエナジーボールをダブルニードルで貫き、スピーアーはユキノオーに肉薄した。

「どくづき!」

「ウッドハンマー!」

ニードルを伸ばすスピーアーにユキノオーのウッドハンマーが迫る。

「スピーアー!」

「スピー!」

けれど、スピーアーは羽を動かし、地面に向かって回避した。そして、

大地を蹴つてどくづきをユキノオーの急所へ当てた。

「オオオオオ！」

毒状態になりながら、再びウッドハンマーを振り下ろすユキノオー。

「影分身！」

スピアーの体が分裂する。ユキノオーは影分身に視界を塞がれ、本物を見失った。

「うしろです！」

「ダブルニードル！」

アイリスの指示を受けてユキノオーが振り向く前にスピアーはダブルニードルをユキノオーの背中の急所に命中させた。

倒れこむユキノオー。

「スピイイイイイ！」

二連勝だ。後一勝で二回戦に進める。アイリスに勝てる。

「……壁、破りましたね」

「え？」

アイリスは微笑んだ。

「今の攻防、壁の前で足踏みをしているトレーナーが相手ならわたしの完勝でしたよ。やはり、強いですね、アルト！」

アイリスが最後のポケモンを繰り出す。クレベースだ。

「スピッ」

降り続けるあられによってスピアーがダメージを受ける。けれど、クレベースはむしろ気持ちよさそうにしている。氷の体を持つクレベースにとつて、この環境こそが最適なのだろう。

「だけど、勝つ！ スピアーと二人で！」

「スピッ！」

「スピアー、どくづきだ！」

スピアーが一気に接近してどくづきの態勢に入る。けれど、アイリスは何故か指示を出さない。嫌な予感がする。けれど、明らかに耐久力の高そうなクレベースは毒状態にして確実に削らないと長期戦になつてしまう。そうになると、すでに二連戦で疲弊しているスピアーが

不利だ。

キテルグマやゲッコウガを出せば楽に勝てるかもしれない。だけど、俺はこの戦い、スピアーと一緒に勝ちたい。

「今です！」

どくづきが命中した瞬間、アイリスが叫んだ。クレベースの肉体が割れ、スピアーに殺到した。

「肉を切らせて骨を断つ。これぞ、ゆきなだれ！」

「スピアー！」

スピアーが大量の氷雪に飲み込まれてしまった。

「……正直に言います。スピアーだけでマニョーラとユキノオーを倒されるとは思っていませんでした。けれど、三体抜きはさせませんよ！ さあ、二体目のポケモンを！」

イヤだ。俺は決めたんだ。スピアーと二人で勝つって、そう決めたんだ。

「スピアー！」

「アルト……？」

困惑するアイリスを無視して、スピアーの名前を叫ぶ。

スピアーを飲み込んだ氷雪が揺れ動く。

「まさか!？」

「スピイイイ！」

「ダブルニードル！」

「スピイイイ！」

ダブルニードルの一撃目がクレベースの頭部に命中する。二撃目も同じ場所へ。

「クレベース！ ジャイロボール！」

「ク、クレッ！」

クレベースが高速回転を始めた。堪らず離れたスピアーは満身創痍の状態だ。

「……ゲッコウガがエースだと思っていました。けど、違う」

アイリスの視線が鋭くなる。

「雪の中で、聞こえないはずのアルトの声を聴いて起き上がった。そ

のスピアー、只者じゃありませんね」

ダブルニードルは確実に効いている。毒状態も相まって、クレベースも満身創痍だ。

次で決まる！

「勝つ！ スピアー！ ダブルニードルだ！」

「じこさいせい！」

「え!？」

スピアーのダブルニードルに急所を穿たれながら、クレベースは耐え切った。

「ジャイロボール！」

「スピッツ!？」

「スピアー!！」

ジャイロボールが命中してしまった。吹き飛ばされ、場外で戦闘不能になるスピアー。

シヨックのあまり放心していると、クレベースも倒れた。

「あられ下での自己再生でほぼ回復していたクレベースが毒のダメージだけで戦闘不能になるレベルのダメージを与えるとは……」

アイリスはクレベースをボールに戻すため息をこぼした。

「完敗ですよ、アルト。せめて、キテルグマかゲツコウガを引きずり出す筈だったのですが」

勝った。その事を認識出来たのは、直後の審判の勝利宣言の時だった。慌ててスピアーに駆け寄ると、スピアーは完全に目を回していた。

「アイリス、ありがとう！」

アイリスのおかげで、また一步強くなれた。一方的にお礼だけ言って、俺はスピアーをジョーイさんの下へ運んで行った。

第七話『幕間』

バトル終了と共にアイリスは走り出した。

「ムフフ、あの成長速度は先が楽しみになりますね！」

腰に下げたボールホルダー。そこにセットされている四つ目のボールにアイリスは話しかけている。

「前途有望。ザラクがゲッコウガを渡した理由が分かりましたよ」

遠い日の思い出を振り返るように微笑むアイリス。

そして、彼女の足が止まる。彼女の視線の先にはスーツ姿の巨漢が資料を片手に指示を出していた。

「ジュリアス財団ユニオン支部支部長オブライエン」

「……その顔、その名前、何の冗談かと思ったぞ」

男は部下を下がらせると、アイリスに向き合った。

「遠路遙々、よく来たな」

「ええ、本命は取られてしまいましたけど、あなたを含めた十三人はわたしをもらいます」

「やれやれ、欲張りだな」

オブライエンがモンスターボールを構える。

「……先に言っておこう。あの時の事はすまなかったと思っている。我々は決して……」

「言い訳無用。あなたもポケモントレーナーならば、バトルで語りなさいー」

「ああ、そうしよう」

第七話『幕間』

スピーカーを回復させてから控室に戻ると、すでに一回戦は終わっていた。

大型画面には二回戦の第一試合が映し出されている。

「……よう」

バレットがいた。

「バレット！ 君も勝ったの?」

「当然だ」

バレットは肩をすくめてみせた。口元が少し緩んでいる。

「……また、圧勝だったな」

第一試合が終わった。またしても、アギトはリザードン一匹で完勝してしまった。

「決勝の相手は彼で決まりみたいだね」

第二試合が始まったけれど、どちらもアギトを上回っている様子はない。

「ああ、あのリザードンはまだまだ本気じゃなさそうだしな」

「本気じゃない……？」

バレットは頷いた。

「一回戦の時にも感じたが、受けた技に対してのダメージが少な過ぎる。明らかに他のトレーナーのポケモン達とは格が違う。この大会はブロンズまでのトレーナー限定の筈なんだが、完全にカップクラスを超えてるな」

「え？ この大会って、ブロンズまでのトレーナーしか参加出来ないの？」

バレットは「は？」と呆れたような視線を向けてきた。

「当たり前だろ。クラスが二つ違えば基本的にバトルが成立しない。だから、トレーナーカードのクラスによって参加出来る大会と出来ない大会があるんだ。一応、無制限の大会もあるけどな」

なるほど、もつともな話だ。ブロンズに上がる条件が大会で五回優勝する事である以上、ノーマルが優勝出来る可能性のある大会が複数存在することになる。

もしも、すべての大会が無条件で参戦出来るものなら、例えばクレルモア大平原でバトルしていた超級トレーナーがこの大会に出場していたら、ノーマルは永遠にノーマルのままで終わってしまう。

『二回戦、第三試合をはじめます。アルト選手とアモン選手はバトルフィールドへ移動してください』

「行ってくるね」

「おう」

控室の出口に向かうと、先に革ジャンを着た男の人が出て行った。

おそらく、彼が対戦相手のアモンだ。

「あれ？」

なんだか、見覚えがある。特にスキンヘッドの頭に刻まれた入れ墨。

「ツヘー！ ようやく気付いたかよ、ガキ！」

振り返ったアモンの顔を見て、完全に思い出した。

「あっ！ あの時の人！」

キテルグマとのバトルの時、キテルグマに横からボールを投げた人だ。

「あの赤髪のがきにリベンジする前に、まさかテメエとやり合う事になるとはな！ あの時の借りはキツチり返させてもらうぜ！」

そう言うと、彼はドシドシとバトルフィールドへ向かって歩いて行った。

よく分からないけれど、なんだか怒っているみたいだ。

「一筋縄ではいかなそうだね」

俺もバトルフィールドへ向かって駆け出した。



報告書をまとめているとポケナビが鳴った。モニターには友人であり、シャンティ・シティのジムリーダーでもあるエルフランの名前が表示されている。

「もしもし」

『やつほー、ミリガン。ユニオン大会の実況映像観てる？』

応答すると、エルフランの元気な声がスピーカーから響いた。

「ユニオン大会？ 観てないけど、どうして？」

ユニオン・シティで大会が行われていることはシエルから聞いている。けれど、ノーマルとブロンズだけの大会で、景品も『とけないこおり』だ。殊更、興味を惹かれるほどの大会ではない。

『なんと、アルトくんが出ているのだよ！』

『アルトくんが？ なんて、ユニオンに？』

ヴェゼール・ヴィレッツジで出会った少年。あと一歩で失いかけた命。あのチャンピオンがゲッコウガを貸し与えたポケモントレー

ナー。

彼はヴァイクがいるオーヴェルに向かっていた筈だ。その事は他ならぬエルフラン自身に聞いたこと。

ユニオンは治安が悪く、取り締まりを強化するべきという意見書も複数届いている街だ。少しの不安が過る。

『ボクもジョーイさんに電話で教えてもらったんだけど、クレルモア大平原でゴールドクラス同士のポケモンバトルに巻き込まれたんだって』

一瞬、頭の中が真っ白になった。

クレルモア大平原はシャンティ、オーヴェル、ユニオン、そして、チャンピオンロードを十字に結ぶ重要な土地だ。旅のトレーナーや物流などに携わる者が頻繁に行き来している。だから、アガリア警察や政府からもクレルモア大平原でのバトルは自粛するように呼びかけ続けている。

けれど、チャンピオンロードの目と鼻の先にあり、余計な障害物もない平原はリーグ挑戦者にとって格好の訓練場所だ。その為に、時折大規模なポケモンバトルが繰り広げられる事もある。

「ア、アルトくんは無事なの!?!」

ゲッコウガがいる以上、余程の事が無い限り大丈夫だと思っっていた。

だけど、超級トレーナー同士のポケモンバトルに巻き込まれるなんて、完全に余程の事だ。

『もちろん。無事じゃなかったら大会になんて出てないし、ボクもこんなに冷静じゃないよ』

それはそうだ。あまりの事に頭の回転が鈍っていた。

『近くにいたトレーナーと一緒に逃げ出して、その先にたどり着いた場所がユニオンだったわけ』

「なるほど」

『ちなみに、一回戦は無事勝利。今から二回戦が始まるどころだよ。ブロンズとは思えないほどのリザードン使いもいるし、観といて損はないと思うよ。それじゃあ、始まるから切るね』

わたしは早速執務室のテレビを点けた。チャンネルを切り替えると、アルトくんがモンスターボールを投げる瞬間だった。

『頼むぞ、スピアー！』

『スピー！』

『やったれ、リングマ！』

『グマー！』

画面の向こうには、シヤンティ・シティで鍛錬をつけてあげた時の少年はいなかった。

最初の壁を破った新人トレーナーが新たな技を備えたスピアーで対戦相手を圧倒している。影分身からの毒づきで毒状態にしたリングマの背後に回ってダブルニードル。

「アルトくん、強くなってるね」

わたしはハッサムをボールから出した。ハッサムはアルトくんのスピアーを気にかけていた。案の定、食い入るように画面を見つめている。

「ハッサ！ ハッサ！」

画面の向こうのスピアーにエールを送るハッサムに口元が緩んでしまう。

二番手のマツスグマも危うげなく倒し、三体目に出てきたヤンチャムには何もさせずに勝利した。

「ハッサ！」

ハッサムが嬉しそうに小躍りしている。師匠として、弟子の成長が嬉しくてたまらないのだろう。気持ちはよく分かる。

暇を見つけたら、もう一度会いに行ってみようかな。

第八話『VSバレット』

二回戦が終わり、控室に戻る前にジョーイさんの下へ向かった。ダメージは受けていないけど、次の試合の為に万全の状態にしておきたい。

「お疲れ様、アルトくん。圧勝だったわね」

段々と見分けられるようになって来た。この人はシャンティ・シテイのジョーイさんだ。

ジョーイさんはスピアーの入ったモンスターボールをメデイカルマシンにセットした。

「でも、次の試合からはキテルグマかゲッコウガを使った方がいいと思うわ」

「え？」

このままスピアーだけでいけるところまでいこうと思っていたから意表を突かれた。

「ポケモンバトルはポケモンの肉体だけじゃなくて、精神も削るの。連戦すれば、そのストレスは多大なものになるわ。あなたがスピアーを大切に思っていて、一緒に勝ちたいとも思っている事はわたしも知ってる。だけど……いえ、だからこそ、次は別のポケモンを出すべきよ」

「スピアー……」

スピアーと一緒に勝ちたい。だけど、ジョーイさんの言っている事はもつともだ。

むしろ、言われる前に気付かなければいけない事だった。

俺は自分の感情を優先して、スピアーの事を考えていなかった。

「コラコラ！ 泣きそうな顔をしないの！」

ジョーイさんは腰に手を当てながら言った。

「ポケモントレーナーなら、誰だって特別なポケモンを持っているの。それがパートナー。パートナーと一緒に強くなりたいと思うのは当然の気持ちよ。だから、その気持ちを否定する必要はないの。大切な事は、パートナー以外の仲間を頼る事」

ボールホルダーからキテルグマとゲッコウガのボールを取り外す。エルフランやアイリスにも言われた。スピーアーだけじゃない。キテルグマとゲッコウガも俺のポケモンだ。

「うん、次はキテルグマとゲッコウガでいきます！」

「がんばってね！」

「はい！」

第八話『VSバレット』

控室に戻って来た頃にはバレットのバトルも終わっていた。

「おい、アルト」

「なに？」

バレットはホルダーから外したモンスターボールを見せてきた。

「俺が一回戦と二回戦で出したポケモンはレントラーだ」

「……え？」

いきなりの宣言に戸惑っていると、バレットは「察しの悪いやつだ」と肩を竦ませた。

「お前は俺のバトルを観ていないだろ。バトルはフェアな方が楽しいじゃねーか」

バレットの言葉と同時にスピーカーから準決勝開始のアナウンスが流れてきた。

大型画面の向こうでは、早々にアギトがりザードンだけで決勝進出を決めた。

「行くよ、バレット」

「おう！」

控室を出て、二手に分かれる。

バトルフィールドへ向かいながら、胸の高鳴りを抑える事が出来なかった。

滾る。

試合間隔の短さから、彼も一体のポケモンだけで勝ち進んできた事は分かっていた。それに、自分の手の内を敢えて晒し、正々堂々の勝負を望むスタンス。

バレットは間違いなく強い。

「頼むよ、キテルグマ！」

バトルフィールドに出ると、俺は先にボールを投げた。これがバレットのフェアプレイ精神に対する答えだ。

「ツハ、キテルグマで来たか！ スピアーは温存か？ だつたらー！」
バレットは持っていたボールをホルダーから外した別のボールと入れ替えた。

「出番だ、ライチュウ！」

「ライラーイ！」

おそらく、さっきのボールがレントラーだつたのだろう。現れたライチュウは不遜な表情を浮かべ、キテルグマを挑発している。

「クマー」

キテルグマはジッとライチュウを見つめている。

『それでは、準決勝第二試合をはじめます！』

スタートの合図と共にライチュウが走り始めた。スピードがはやい。だけど、キテルグマは視線をライチュウから外さずに捉え続けている。

キテルグマの技はアームハンマー、ドレインパンチ、アイアンヘッド、破壊光線の四種類。キテルグマのスピードなら、遠距離攻撃の破壊光線よりもむしろ――、

「キテルグマ、アームハンマー！」

「キィィィィー！」

指示を出した瞬間、キテルグマは大地を蹴った。信じられない速度でライチュウに肉薄する。

「なに!？」

「ライ!？」

バレットとライチュウが驚愕の表情を浮かべて止まる。

バレットはスピアーをエースだと言っていた。だから、キテルグマを侮っていたのかもしれない。一瞬でも静止してしまえば、キテルグマの攻撃は躲せない。アームハンマーが命中して、ライチュウがフィールドの外へ吹き飛ばされていく。

『い、一撃必殺！ キテルグマのアームハンマーがクリーンヒット！』

ライチユウは起き上がる事が出来ない。あまりの事態にバレットは眼を見開き、それから俺達を睨みつけた。

「クマー」

キテルグマは挑発するようにバレットへ手招きしている。

「クソッ！ いけ、レントラー！ エレキフィールド！」

「ガウ！」

二番手はエースのレントラー。フィールド全体にでんきエネルギーを帯電させた。

「キテルグマ、アームハンマー！」

「キイイイイ！」

「ボルトチェンジ！」

「ガウ！」

キテルグマが飛びかかると、レントラーは稲妻の如き速度でボールへ戻り、バレットの三つ目のボールからエレキブルが飛び出してくる。レントラーがボルトチェンジで逆らせた雷撃にキテルグマの動きが止まった瞬間をエレキブルは見逃さず、けたぐりを放つてきた。

「受け流してドレインパンチ！」

「キイイイイ！」

キテルグマは機敏な動きでけたぐりを回避すると、その勢いを利用してカウンター気味にドレインパンチを叩き込んだ。

「ブルッ!？」

「トドメのアームハンマー！」

「キイイイイ！」

「ボルトチェンジ！」

「ブルッ！」

アームハンマーが直撃する寸前でエレキブルがボールへ戻り、再びレントラーが現れる。

「ワイルドボルト！」

「破壊光線！」

エレキフィールドの効果で威力の増大したワイルドボルトへキテ

ルグマの破壊光線がぶつかる。

「エネルギーの流れを見極めろ、レントラー！」

「ガウツ！」

「なっ!？」

「クマッ!？」

信じられない。ポケモンリーグの最終決戦に出場したトレーナーの切り札だったキテルグマ。その破壊光線を、レントラーは身に纏うワイルドボルトのでんきエネルギーで受け流してしまった。迫りくるレントラー。

「アームハンマー！」

「クマッ……い！」

ダメだ。破壊光線を放った直後で、キテルグマは痺れて動けない。レントラーのワイルドボルトが直撃した。倒れこそしなかったものの、キテルグマは痺れてしまっている。

「今だ、レントラー！ ほのおのキバ！」

「ガウツ！」

麻痺で動きの鈍ったキテルグマにレントラーのほのおのキバが直撃する。

「キイイイ！」

燃え盛る炎がキテルグマの毛皮を焼く。

「も、戻れ、キテルグマ！」

慌ててキテルグマをボールに戻す。これで火は消えた筈だけど……。

「ツハ！ お前、そのキテルグマを使いこなせてねーな？ どんなにポケモンの格レベルが高くてもな、それだけで俺のレントラーは倒せんねーんだよ！ 分かったら、さっさとエースを出せ！」

エース。強さだけなら、それはゲッコウガだ。

だけど、俺が一番力を引き出せてやれるのは……、

「頼む、スピアー！」

「スピイッ！」

スピアーは両手のニードルをレントラーに向け、臨戦態勢だ。

「出たな、スピアー！　いくぜ、レントラー！」

「ガウツ！」

「スピアー、勝つぞ！」

「スピッツ！」

レントラーが動く。

「ワイルドボルト！」

「影分身！」

激しい稲妻を纏うレントラーを大量のスピアーが取り囲む。

「ミサイルばり！」

「ボルトチェンジ！」

ミサイルばりがボルトチェンジで吹き飛ばされ、同時にレントラーからエレキブルへ入れ替わる。

「エレキブル、全方位に十万ボルト！」

「ブルツ！」

「させるな、ダブルニードル！」

十万ボルトの発動体勢に入るエレキブルの背後からスピアーがニードルを伸ばす。

「うしろだ、エレキブル！」

「そのまま穿け！」

バレットの指示で回避行動に出るエレキブル。だけど、遅い！

「スピイイイ！」

スピアーのダブルニードルはエレキブルの急所を捉えた。キテルグマのドレインパンチで受けていたダメージもあつたのだろう、そのまま戦闘不能になった。

「やるじゃねーか！　だが、俺のレントラーは負けない！」

再び現れるレントラー。

「もう、ボルトチェンジはない！　影分身！」

「ワイルドに溜まったエネルギーを取り込め！　ワイルドボルト！」

「グオオオオオツ！」

さっきまでのワイルドボルトの比ではない。エレキブルの十万ボ

ルトやレントラーのワイルドボルトがエレキフィールドのでんきエネルギーを高めていたんだ。その膨大なエネルギーを一気に取り込み、レントラーは走り始めた。

『こっ、これは！…まるでピカチュウ系のみが覚えられる最強のでんきわざ、ボルテッカーのようだ！』

強大過ぎるエネルギーがレントラー自身を傷つけている。このままでは自滅だ。

「がんばれ、レントラー！ お前は誰にも負けない！ もう、二度と！」

「グオオオオウ！」

「……スピアー！」

「スピッ！」

このまま逃げ回れば、それだけで勝てる。だけど、そんな勝ち方は納得出来ない。

なにより、今のバレットとレントラーからは逃げたくない。

勝利に対する執念。その大切さを俺はアイリスとの初バトルの時に思い知った。

「ダブルニードル！」

「レントラー！」

「スピイイイ！」

「ガウウウツ！」

真正面からぶつかり合うレントラーとスピアー。舞い上がった土煙が二体の姿を覆い隠す。永遠にも感じられる数秒の後、煙が晴れた。

立っていたのは、スピアーだった。

「スピイイイ！」

右腕のニードルを高々と掲げるスピアー。

『スピアーの勝利！ よって、アルト選手の決勝進出決定！』

実況が勝利を宣言すると共にスピアーは糸が切れたように倒れてしまった。

「スピアー！」

駆け寄ると、同じようにレントラーに駆け寄るバレットの姿があった。

「……強いな、お前のスピアー」

「レントラーこそ」

ゲッコウガでなければ手も足も出なかったキテルグマをバレットのレントラーは退けてみせた。

「決勝、がんばれよ」

「うん」

俺達は一緒にジョーイさんの下へ向かった。

スピアーとキテルグマを預けると、決勝戦は一時間の休憩を挟んだ後に行われる事がアナウンスされた。

第九話 『VSアギト』

控室へ戻ると、そこにはアギトがいた。試合の組み合わせの関係で入れ違いになり、控室で会うのは初めての事だ。

次の試合の対戦相手。すべての試合をリザードン一体で勝ち進んできた少年。燃えるような紅い髪と、血のように赤い瞳。

彼は自販機で買ったサイコソーダを飲んでいた。

「……お前のスピアー」

話しかけてみようか考えていると、向こうの方から話題を振ってきた。

「かっこいいな」

友達になれると直感した。

「あ、ありがとう」

「だが、もつとカツコよくなれるぞ」

「え？」

アギトはカバンから小箱を取り出した。

「ポケモンはケアが大切だ。羽毛や毛皮のあるポケモンはブラッシング、いわタイプやはがねタイプは研磨。これはポケモントレーナーとしての基本だ」

「な、なるほど！」

てつきり、バトル一筋の脳筋なタイプかと思っていたけれど、アギトが目指しているのはブリーダーらしい。試合開始までの間中、ポケモンの世話の仕方のレクチャーをしてくれた。かなりのポケモン愛を感じる。

「キテルグマの毛づくろいは特にこまめにやってやれ。まだ、ゲットして間もないだろ？ 仲良くなる為にもちようどいい。それに、毛並みが悪いと埃なんか絡んでほのおタイプの攻撃の通りがよくなつてしまう」

「ふむふむ」

「ケア用品はワイオルネ・ブランドの物が一番だ。オレも愛用している。消耗品として使うには値が多少張るが、ポケモンのケアは妥協す

るな。自分の生活費を切り詰めてでも優先しろ。金が足りないなら大会に出て賞金と賞品を手に入れる。オレはそうしてる」

「……もしかして、この大会に出てるのも?」

「ああ、欲しいケア用品があつてな。金が必要になった。あと、ポフレの作り方を習う為にサレナ・シティへ行こうと思つているんだ。あそこには伝説のポフレ職人が経営するポフレスクールがあるからな。その為の費用も必要だ」

アギトはすごい。ポケモンバトルの腕だけじゃなくて、シツカリとした夢を持つている。その為に努力もしている。

「それに、今月の末にはコンテストも開催されるからな」

「コンテスト?」

「知らないのか? ポケモン・コンテスト。ポケモンのうつくしき、かつこよき、かわいさ、かしこさ、たくましさを競う大会だ。トレーナーカードのようにノーマル、グレート、ウルトラ、マスターという四段階のランクがあり、マスターランクで優勝するとコンテスト・リボンというものを貰える。このリボンを五つ集めれば、グランドフェスティバルへ出場する権利が与えられる。ポケモンブリーダーを目指すものとして、オレはグランドフェスティバル優勝を一種の到達点だと考えている」

話している内に時間が来たようだ。天井のスピーカーから決勝戦開始のアナウンスが流れてくる。

「時間か……」

アギトは残念そうに肩を落とした。

「こんなに長く話したのは久しぶりだ。楽しかったぞ、アルト」

「こつちこそ、色々とためになったよ。ありがとう、アギト」

大会が終わったら、早速ケア用品を買いに行こう。

第九話『VSアギト』

バトルフィールドへ移動すると観客席から俺とアギトの名前を叫ぶ声が聞こえてきた。

さすがは決勝戦だ。今までとは盛り上がり方が違う。

「頼むよ」

ホルダーからモンスターボールを取り外す。

結局、準決勝でもスピアを戦わせてしまった。本音を言えば、決勝戦こそ一緒に戦いたいけれど、無理をさせるわけにはいかない。

アギトのエースがりザードンである以上、キテルグマは相性が悪い。

だから、ここは――、

「ゲッコウガ！」

「コウガッ！」

ゲッコウガがフィールドに飛び出すと、会場が沸き立った。

「ゲッコウガか、ならば！」

アギトもモンスターボールをフィールドへ投げる。飛び出してきたポケモンはリザードンではなかった。

「ジャローダ！」

「ジャー！」

蛇のような姿のくさタイプポケモン、ジャローダの出現に再び沸き立つ会場。

『おーっと！ ここまでリザードン一体で勝ち進んできたアギト選手が新たなポケモンを出してきたぞ！』

相性の上ではゲッコウガが不利だ。だけど、ゲッコウガなら相性の不利なんていくらかでも覆してくれる筈だ。

「ゲッコウガ、影分身！」

「コウガア！」

無数のゲッコウガがフィールド上を埋め尽くす。

「ジャローダ、リーフストーム！」

渦を巻くリーフストームがゲッコウガの影分身を蹴散らしていく。

「そこだ、辻斬り！」

「コウガッ！」

リーフストームの効果範囲を見切り、ゲッコウガがジャローダに接近していく。

「ハードプラント！」

地面から巨大な蔓が生えだしてゲッコウガに襲いかかるが、ゲッコ

ウガはそれさえ見切り、ジャローダの急所を辻斬りで切り裂いた。

「ジャロツ！」

「コウガツ!？」

けれど、ジャローダは耐え抜いてみせた。地面から生えた蔓が更に勢いを増してジャローダとゲツコウガへ向かっていく。

「ゲツコウガ、辻斬りで蔓を切り裂け！」

「コウガツ！ コウツ、コウツ、コウガツ！ コウガアツ！」

迫り来る蔓をゲツコウガは次々に切り裂き、その効果範囲から飛び出した。

「光合成！」

ジャローダはハードプラントの蔓で出来た巨大ドームの中で息を潜めている。今は夜だから光合成をしても回復量は微々たるものだろう。だけど、手を拱いていたら折角与えたダメージを回復されてしまう。

ドームの隙間はとても狭い。だけど――、

「ゲツコウガ、水手裏剣！」

「コウガツ！」

ゲツコウガが水手裏剣を投げる。狙いはドームの隙間。

「ジャローダ、リーフストーム！」

普通なら通る筈のない攻撃。だけど、アギトは通ると確信して反撃の技を命じた。

ゲツコウガなら僅かな隙間だろうと確実に通す。そのダメージで動きが鈍ったところを辻斬りで蔓を切り開いたゲツコウガに攻撃させるつもりだった。

だけど、ジャローダがリーフストームで自分からドームに穴を開けてくれたおかげでゲツコウガの必殺技が威力を減衰させずに届く！

「ハイドロカノン！」

「コウガツ！」

「ジャロツ！」

ハイドロカノンとリーフストームがぶつかり合う。

信じられない。ゲツコウガのハイドロカノンとぶつかりながら、

リーフストームは一瞬だけ拮抗してみせた。その隙にジャローダはハイドロカノンの射線から退いた。

「三発目、これで最大パワーだ！ リーフストーム！」

「ジャロツ！」

さっきのリーフストームより更に威力が増している。

準決勝の時と同じだ。安易に反動のある必殺技を使ってしまった。キテルグマに不覚を取らせる結果になった。

「ゲ、ゲッコウガ！」

「コウガ」

リーフストームが迫ってきているのに、ゲッコウガは振り返った。そして、笑ってみせた。

「ゲッコウガ……？」

「コウ……、ガアツ!!」

振り向き様にゲッコウガは辻斬りを振るった。

『な、なんと！ ゲッコウガの辻斬りがジャローダの渾身のリーフストームを切り裂いた!』

実況が口にした通り、リーフストームが真っ二つに切り裂かれた。左右に分かれてしまったリーフストームの中心をゲッコウガは駆け抜けていく。

「龍の波動！」

ジャローダはリーフストームの発動を中断し、龍の波動を放った。けれど、龍の波動が捉えたゲッコウガは姿がかき消え、代わりに本物のゲッコウガがジャローダの背後に現れた。

「いつの間に……」

ゲッコウガはいつの間にか影分身と入れ替わっていたらしい。

「コウガ」

ポカンとしていると、ジャローダを戦闘不能にしたゲッコウガが戻ってきていた。

「ゲッコウガ……」

「コウガ」

キテルグマと戦った時と一緒だ。ゲッコウガが本気を出せば、さっ

きみみたいな苦戦を強いられる事自体があり得ない。

あり得ない事をさせてしまうくらい、俺は未熟なんだ。

「コウガッ!!」

いきなり怒鳴られて、飛び上がりそうになった。

思わず顔をあげて、それで気付いた。

俺は俯いてしまっていた。まだ、試合は終わっていない。アギトも二番手のポケモンを繰り出そうとしている。そんな時に下を向くなんて、それこそあり得ない。

「ごめん、ゲッコウガ!」

「コウガ!」

ゲッコウガはこんな俺の指示にも素直に従ってくれている。

だったら、俺のやるべき事はゲッコウガの力を完全に引き出せるよう成長する事だ。

しよげてる暇なんてない。

「強いな、そのゲッコウガ。だけど、ゲッコウガが強いだけだ。それでお前、満足出来てるのか?」

アギトにも見抜かれてしまった。

「ううん。出来てない。全然、満足出来てない!」

「だったら、オレがお前の満足を引き出させてやる!　いくぞ、リザードン!」

アギトは袖を捲った。そこには無骨な腕輪が二つ嵌められている。

「いくぞ、リザードン!　進化の果ての、その果てへ!　メガ進化!」
「なっ!?」

言葉を失った。リザードンは最終進化形態。その筈なのに、その姿が見る見る内に変わっていく。皮膚は黒く染まり、赤い炎は青い炎へ変わった。

『これは!　なんとという事でしよう!　このノーマルからブロンズまでの大会で、まさかのメガ進化だ!　バトル中、すなわちポケモンの闘争本能が高まっている間のみ、通常の進化形態の更に先へ進化させる事を可能とするメガ進化!　これはバトルの行く末がますます楽しみだ!』

「いくぞ、アルト！」
「……来い、アギト！」

第十話 『ぶつかり合う魂』

メガ進化。一説では、ハウエンとカロスに落ちた二つの隕石が関係しているらしい。

正確な事は不明のまま。近似する現象として、ゲンシカイキ、絆現象などが確認されている。

「シエル様」

配下を集めさせたメガストーンを見つめながら考え事をしていて、秘書のアークが部屋に入って来た。

「どうしたの?」

「アギトが無断でメガストーンを使用したようなので御報告を」

「……ああ、そう。まあ、派手に使わなければ多少は……」

「ユニオンで開催されている全国中継の大会の決勝戦で使用しました」

おっふ。派手に動くなどあれほど厳命しておいたのに、よりにもよって私が主催した大会でメガストーンを使うとは……。

「それから、もう一つ御報告が」

「なによ!」

「どうやら、決勝の相手はチャンピオンがゲッコウガを託した少年のようです」

「どうなってんの!」

落ち着きなさい、シエル。大丈夫よ。あなたは四天王。あなたはジュリアス財団の会長。こんな事で動じてはダメよ。

チャンピオンと繋がっていても、かの少年は何も知らない十歳の子供の筈。全国中継と言っても、所詮は小さな都市の小さな大会だから、チャンピオン本人が観ている可能性も低い。

「それから、最後にもう一つ」

「まだあるの!」

「はい。チャンピオンが楽しそうな笑顔を浮かべ、ギャラドスと共に飛び立ちました」

ガツデム。だから、あれほど言ったのに!

「つていうか、それを最初に言いなさい！」

第十話『ぶつかり合う魂』

「いくぞ、リザードン！ 火炎放射！」

「グオオオオッ！」

リザードンが吐き出した火炎放射は普通の炎ではなかった。その身に宿るものと同じ青。

前にポケモン博士のモンテロに教えてもらった事がある。赤い炎よりも、青い炎の方がずっと温度が高いと。

「避ける、ゲッコウガ！」

「コウガッ！」

「薙ぎ払え！」

回避したゲッコウガを追うように、リザードンは炎を吐きながら首を捻る。エルフランのルンパツパがハイドロポンプで使った応用技だ。点から線に変わった攻撃を回避し続けるのはむずかしい。

「ゲッコウガ、リザードンの口下を狙って水手裏剣だ！」

「コウガッ！」

ゲッコウガは火炎放射を回避しながら水手裏剣を投げつける。

「火炎放射を維持したまま、ドラゴンクロー！」

二つの技の同時発動。驚くべき事だけど、さすがに火炎放射の狙いが粗くなった。

「今だ、影分身しながら接近しろ！」

「コウガッ！」

水手裏剣を防ぎ切ったりリザードンの前に現れる無数のゲッコウガ。

「火炎放射を地面に向けながら飛び上がれ！」

「グオオオオッ！」

「なっ!？」

「コウガッ!？」

炎が地面にぶつかりかると、四方へ分裂した。堪らず後退するゲッコウガ。

地面が炎の熱で赤く染まっている。

「コウガッ！」

恐ろしい程の熱量だ。またたく間に大地が溶岩地帯のような有様に変貌してしまった。

「ゴツ、コウガア！」

このままだと立っているだけでゲツコウガがダメージを受けてしまう。

フィールドを冷やそうにも、水手裏剣では文字通り焼き石に水だし、ハイドロカノンを使えばそれこそ致命的な隙が出来てしまう。

「も、戻れ、ゲツコウガ！」

「コウツ！」

ゲツコウガが悔しげに顔を歪めながらボールへ戻る。

この状況を切り抜けられるのは、やっぱりお前しかない。

「スピアー！」

「スピイイイッ！」

ボールから飛び出したスピアーが急上昇していく。

リザードンと同じ高度へ飛び上がり、睨みつけるスピアー。リザードンも静かに睨み返している。

『アルト選手！　ここでスピアーを出した！　さあ、互いにエース同士のバトル！　ここから先は一瞬足りとも目が離せないぞ！』

そうだ。これは初の空中戦。目を凝らせ！　一瞬たりとも二体の姿を見失うな！

「スピアー、影分身だ！」

「スピッ！」

スピアーの姿が無数に分裂していく。360°に展開したスピアーの軍勢を相手に、リザードンが錯乱している。

「リザードン、火炎放射で薙ぎ払え！」

さつきと同じ戦法だ。けれど、地上とは違う。空中なら、例え線になってもスピアーならいくらでも避けられる。

「どくづきだ！」

「スピッ！」

「アイアンテール！」

「見切れ、スピアー！」

スピアーは紙一重でアイアンテールを躲し、どくづきを急所に命中させた。

「グウウウツッ！」

苦しげに吠えながらよろめくりザードン。

「フレアドライブ！」

「影分身で身を隠しながらミサイルばり！」

炎を纏うリザードンを影分身で攪乱しながらミサイルばりで狙い撃つ。ミサイルばりの精密さと威力が覚えたての頃と比べて格段に向上していた。一発の針が炎を貫き、二発目の針が肉を抉る。

「戻れ、リザードン！」

不利と感じたのか、アギトがりザードンを戻す。

「さすがだな、アルト。そして、スピアー！ まさか、むしタイプのポケモンでオレのリザードンを追い詰めるとはな！」

アギトが三体目のボールを投げた。

「出て来い、ガブリアス！」

「ガブッ！」

「りゅうせいぐん！」

ガブリアスが口から光の玉を吐き出した。スピアーが咄嗟に回避すると、そのまま天高く舞い上がり、弾けた。

「避ける、スピアー！」

「スピッ！」

降り注ぐ流星をスピアーは巧みに回避していく。狙いの定まっていない攻撃なんて、スピアーにとっては止まっているようなものだ。

「狙え、ガブリアス！」

「なっ!？」

戦慄した。ガブリアスの眼はスピアーを追っていない。スピアーががりゅうせいぐんを回避する、その先を見ている。

「まさか!?! スピアー！」

「大文字！」

回避が間に合わない。

「ダブルニードルで穿け！」

「スピイイイッ！」

スピアーは迷うことなく俺の指示に従った。巨大な炎を貫き、ガブリアスに迫る。

「ドラゴンクロー！」

スピアーのニードルとガブリアスのドラゴンクローがぶつかり合う。そして、スピアーの背後には流星が迫っていた。

「スピアー！」

「もう遅い！」

「ガブッ！」

「スピッ!？」

ガブリアスはスピアーを流星目掛けて投げつけた。

「スピアー!？」

「ス……、パイ……」

スピアーが地面に落下する。

『スピアー、戦闘不能！ これで残るポケモンは二体ずつ！ いやいよバトルも大詰めだ！』

スピアーが負けた。思わず膝をつきそうになり、倒れ込むスピアーの姿を見て踏みとどまった。

まだ、終わっていない。ここで諦めたら、スピアーの頑張りが無駄になってしまう。

「戻れ、スピアー！」

スピアーをボールに戻し、俺はキテルグマのボールを手にとった。

「俺達は勝つんだ！ 頼む、キテルグマ！」

「クマッ！」

飛び出してきたキテルグマは一気にガブリアスへ接近していく。ガブリアスが大文字を使える以上、遠距離戦は不利だ。

「アームハンマー！」

「キイイイ！」

「ドラゴンクロー！」

「ガブッ！」

アームハンマーとドラゴンクローの激突で地面が大きく陥没した。

「ガブツ………！」

「キイイイイ！」

キテルグマが押し勝った。

「追い打ちをかけるー！」

「キイイイイ！」

弾き飛ばされるガブリアス目掛けて突っ込んでいくキテルグマ。

「大文字！」

「ガブウ！」

「アイアンヘッドで炎を突き破れ！」

「キイイイイ！」

速度を上げ、頭から大文字に飛び込むキテルグマ。業火を越え、突き進んでくるキテルグマにガブリアスは笑う。

「燃えるな、ガブリアス！」

「ガブツ！」

「この熱く滾る想い、アルトにぶつけるぞー！」

「ガブツ！」

「地震だ！」

「クマツ!？」

ガブリアスが地面を踏みつけると、フィールド全体が大きく揺れ動いた。会場中から悲鳴が響き渡り、俺とキテルグマも立っていられなくなった。

「いくぞ、アルト！これがオレ達の全力だ！」

「ガブツ！」

アギトは腕に嵌めたもう一つの腕輪に宝石を装着した。

「烈火の如く燃える魂！」

「ガブツ！」

アギトとガブリアスの動きがシンクロし、途方もないエネルギーが迸る。

「まずい、止めるんだ！破壊光線！」

「クツ、クマ！」

キテルグマが破壊光線を撃つために立ち上がろうとする。

「受ける、『ダイナミックフルフレイム』!!」

「キテルグマ!?!」

大文字やリザードンの火炎放射どころではない極大の炎がキテルグマを呑み込んでしまった。

『こ、これは! アローラ地方に伝わる『Zわざ』! なんと、アギト選手! メガ進化に続いて、とんでもない奥の手を持っていた!』

炎が鎮まった跡には倒れ込むキテルグマの姿があった。

「キ、キテルグマ!」

慌てて駆け寄ると、キテルグマは辛うじて呼吸をしていた。だけど、瀕死の重傷だ。

「キテルグマ……」

「アルト!」

泣きそうになっていると、アギトの声が響いた。

「まだ、バトルは終わっていない! オレは全力を見せた! お前も、お前の全力をぶつけて来い!」

そうだ。まだ、バトルは終わっていない。

キテルグマをボールに戻し、俺はゲッコウガのボールを手にとった。

「頼む、ゲッコウガ!」

「コウガアツ!」

地震を使われて身動きが取れなくなる前に倒す!

「辻斬りだ!」

「コウガアアツ!!」

「ガブリアス! ドラゴンクローで迎え撃て!」

「勝て、ゲッコウガ!」

「コウガツ!」

辻斬りとドラゴンクローが交差する。

「コツ、コウツ、コウガツ! コウガアアツ!」

「ガブツ、ガウウツ、ガアアア! ガブウウツ!」

二体の斬り合いに、俺はエルフランとのバトルを思い出した。

炎で熱せられ、地震によって揺さぶられたフィールドには亀裂が無

数に走っている。

「ゲッコウガ！ ガブリアスを俺の方へ押し込め！」

「コウガアアアッ！」

「踏みとどまれ、ガブリアス！」

「ガブウウウッ！」

「コウガアアアアッ!!」

ゲッコウガが押し勝った。ガブリアスは亀裂に脚を取られ、ゲッコウガに無防備を晒した。

「決めろ、ゲッコウガ！」

「コウガアッ!!」

ゲッコウガの渾身の辻斬りがガブリアスの急所を捉えた。

『ガ、ガブリアス、戦闘不能！ いよいよ、残るポケモンは互いに一体ずつ！ 勝った方がユニオン大会優勝者となる、まさにクライマックスだあああ！』

戦闘不能になったガブリアスをボールに戻し、アギトは笑う。

「楽しいぞ、アルト！ いけ、リザードン！」

「さあ、いくよ、ゲッコウガ！」

「グオオオオオオッ！」

「コウガアアアアッ！」

黒い皮膚、青い炎のリザードン。一度はゲッコウガを追い詰めたポケモン。まさしく、これまで戦ってきたポケモンの中で最強だ。

「だけど、俺は勝つ。スピアーとキテルグマが頑張ってくれたんだ。絶対に負けたくない。」

「ゲッコウガ、辻斬りだ！」

「フレアドライブで迎え撃て！」

「炎を切り裂け！」

「ドラゴンクローで受け流して、アイアンテール！」

「見切れ、ゲッコウガ！」

「フレアドライブ！」

「水手裏剣で切り裂け！」

一瞬の攻防。俺とアギトの矢継ぎ早の指示をゲッコウガとりザー

ドンは完璧に実行した。

そして、ゲツコウガは水手裏剣を刀のように振り回し、炎を纏うリザードンを切り裂いた。

「火炎放射で壁を作りながら飛び上がれ！」

「させるな、ゲツコウガ！ 辻斬りで炎の壁を超えろ！」

「ドラゴンクロー！」

「グオオオオオオツツ！！！」

「コウガアアアツツ！！！」

青い炎の壁をくぐり抜けるゲツコウガをリザードンがドラゴンクローで迎え撃つ。

「大地に向かって火炎放射！」

「口に水手裏剣を叩き込め！」

高温の火炎放射と水手裏剣がぶつかり合い、爆風の如く水蒸気が広がり、リザードンとゲツコウガは互いに吹き飛ばされた。

「グウウウウツツ！」

「コウガアアツ！」

互いに疲弊し切っている。

次の一撃で決着がつく。

「いくぞ、リザードン！」

アギトは二つ目の腕輪に触れた。Zわぎが来る！

「ゲツコウガ！ こっちも必殺技だ！」

「コウガッ！」

アギトとリザードンの動きがシンクロする。

「烈火の如く燃える魂！ 受ける、『ダイナミックフルフレイム！』」

「ハイドロカノン！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！！！」

「コウガアアアアアアアアアアアアツツ！！！！」

炎と水。二つのエネルギーがぶつかり合う、そして――、

エピソード『旅の仲間』

水蒸気爆発によって真っ白になったバトルフィールド。やがて、一陣の風と共に霧が晴れると、そこにはゲッコウガとリザードンの姿があった。

一目で分かった。爆心地はゲッコウガ。リザードンの『ダイナミックフルフレイム』にゲッコウガのハイドロカノンが押し負けたのだ。ゲッコウガの体が揺れる。ゆっくりと後ろに向かって倒れていく。『決まった！ 白熱した試合を制したのは、アギト選手の——』
実況の声が突如止まる。リザードンもまた、前に倒れ込んだのだ。「スピアーの攻撃で受けたダメージ、どくづきの毒、フレアドライブの反動。加えて、Zわざは体力を著しく消耗する」
アギトの体を後ろに倒れていく。

「要するに……」

『ゲッコウガ、リザードン、共に戦闘不能！ よって、この試合は引き分け！ アルト選手とアギト選手の同時優勝だああああ！』

「同時優勝……」

呆然となりながらゲッコウガに近づいていく。業火に焼かれた肌は痛々しく、完全に意識を失っている。

「ありがとう、ゲッコウガ。キテルグマ。スピアー」

ゲッコウガをボールに戻して、俺は三つのボールを強く抱きしめた。

「アギト！」

倒れ込んだアギトの下へ向かう。

「大丈夫？」

「……すまないが、手を貸してもらえるか？」

「うん！」

アギトを起こすと、そのまま肩を貸した。

「はやく、みんなをジョーイさんに回復させてもらおうよ」

「ああ」

アギトはリザードンをボールに戻した。

「よく頑張ったな、リザードン」

ジョーイさんの下へ向かいながらアギトは言った。

「今日のバトルは最高だった。ありがとう、アルト」

「こちらこそ、ありがとう、アギト」

何もかも出し尽くしたバトルだった。胸が高鳴り、興奮で震えだしそうになっている。

アギトの言うとおりで。まさに、最高のバトルだった。

エピソード『旅の仲間』

ポケモン達が回復した後、表彰式が始まった。

同時優勝は前代未聞という程でもなく、それなりに起こり得るものらしく、驚いた事に優勝賞品の『とけないこおり』が二つ用意されていた。優勝賞金もきっちり支払われ、トレーナーカードにユニオン大会優勝の功績が付与された。あと四つの大会で優勝すれば、晴れてブルンズクラスに上がる事が出来るわけだ。

表彰式が終わると、俺はアギトと共にポケモンセンターへ向かった。表彰式に向かう前にジョーイさんに言われていたからだ。

たどり着いたポケモンセンターには顔見知りが増え踏み歩いていた。

二人のジョーイさんに、バレットとアイリス、そして……、

「なんで、アモンが？」

二回戦で戦ったスキンヘッドの男、アモンまでいた。

「なんでい！ いちゃ悪いのか！」

「悪くないけど、意外だなーって」

「言うじゃねーか……」

そもそも、アモンは地元の人だ。ポケモンセンターの利用者じゃない。

「ツヘ！ 別にポケモンセンターに用があったわけじゃねー」

そう言うと、アモンは俺とアギトを睨みつけた。

「おめでとさん。すげーな、お前ら」

そう言うと、ニカツと笑った。思わずキョトンとなる俺達二人にユニオンのジョーイさんが吹き出した。

「やるわね、アモン。大会優勝者二人を呆気に取らせるなんて、中々出

来る事じゃないわよー」

「うっせーな!」

顔を真っ赤にしながら怒鳴りつけるアモン。余計に吹き出すジョーイさん。なんだか、すごく親密そうだ。

「ほらほら、主役二人が置いてけぼりじゃないの!」

シャンティのジョーイさんがパンパンと手を叩いて言った。

「この子、昔は女暴走族のリーダーだったのよ。アモンとは、その頃からの仲だから、顔を合わせればイチャイチャし始めるの。無視していいわよ」

「れ、レディース……」

「ジョーイさんが……」

「ちよつと、姉さん! 人の黒歴史を子供に教えるの止めてよ!」

アギトの時も思ったけれど、人は見かけによらないものだ。

アギトと顔を見合わせ合い、とりあえずシャンティのジョーイさんのアドバイスに従う事にした。

「アモン。ありがとう」

一応、優勝を祝福してくれたお礼だけは言っておこう。

「ツヘー!」

キテルグマを横取りしようとしたり、アギトを襲撃したり、たぶん悪い人だと思うけど、イヤな人では無さそうだ。

「あらあら、アモンってば、照れちゃってるー?」

「うっせー!」

またもやイチャイチャし始めたアモンとユニオンのジョーイさんを放置して、俺達は食堂へ向かった。

「優勝おめでとうございます、アルト!」

「ありがとう、アイリス」

「しっかし、同時優勝ってのは……微妙に締まんねーな」

バレットが頬を掻きながら言った。

「互いに全力を出し尽くした結果だ。オレ達は満足している。そうだろう、アルト」

「うん!」

食堂へ向かうと、ジョーイさんが美味しそうな料理を次々に作ってくれた。

ちよつとした祝賀会が始まり、俺達はサイコソーダで乾杯した。

「ところで、アルトはこれからどうするか決めているのですか?」

「うん。とりあえず、アギトにアドバイスしてもらったから、ポケモンのケア用品を買いに行くつもりだよ。その後は最初の予定通り、オーヴェルに行つてジム戦かな」

「ここからだ、リールも近いぞ」

「リール・シティにはワイオルネ・コーポレーションの専門店もある。それに、リールとオーヴェルはかなり近い。オレもリールを経由した方がいいと思うぞ」

バレットとアギトの言葉を証明するように、アイリスがポケナビでマップを開いてくれた。

たしかに、ここからだ、とオーヴェルへ向かうよりもリールへ向かった方が良さそうだ。

「うん。じゃあ、リールに行くよ」

「なら、オレも同行していいか?」

アギトが言った。

「サレナへ向かう前にリールで買いたいケア用品があるんだ」

そう言えば、欲しいケア用品があるから大会に出場したと控室で言っていたっけ。

「この流れ、乗るしかありませんね! わたしも行きます!」

「アイリスも?」

「ええ! 旅は道連れ世は情け! 折角の旅なら賑やかな方が楽しいですからね! というわけで、バレットも一緒に行きましょう!」

「……いいぜ。オレもリール・ジムに挑むつもりだしな。どうせなら道中で特訓しようぜ!」

「みんなと一緒に、うん! いいね!」

アイリスも、バレットも、もちろんアギトも同世代だけど凄く強い。一緒に旅をすれば、得られるものも多い筈だ。

それにより、三人共、一緒にいて凄く楽しい。

「よろしく、みんな！」

「よろしくおねがいます！」

「短い間かと思うが、よろしく頼む」

「よろしくな！」

俺達はもう一度、旅の仲間となった事を祝して乾杯した。

第三章 『決戦、メガロポリス』 プロローグ

ポケモントレーナー達による聖戦の場、ポケモンリーグとユニオンの狭間に広がるクレルモア大平原。その上空で、チャンピオン・ザラクは一人の少女と対峙していた。

「驚いたな。まさか、お前の方から会いに来てくれるとは！」

空の上での会合。この地方において、それが意味する事は、互いに超級トレーナーである証左。

けれど、ただの超級トレーナー同士の会合ならばあり得ない事が一つ。それは、空の支配者たるドラゴンポケモン達の動向。

襲いかかるでもなく、警戒するでもなく、ただ二人のやり取りを見守りながら滞空している。

「……殺してやる」

少女の発した言葉にドラゴンポケモン達は戦闘態勢へ移行する。

同時にザラクは笑う。それはもう、心の底から嬉しそうに笑っている。

「そう怒り、その憎しみ、素晴らしい！ さあ、ぶつけてこい！ お前のすべてを受け止めてやる！ バトルしようぜ、ナザレ！」

「死ね」

少女が片腕を上げた瞬間、ドラゴンポケモン達は一斉にザラクへ攻撃を開始した。

「いくぞ、バシヤーマー！ ギャラドス！」

「バシヤツ！」

「ギャオオオオオオ！」

ユニオンで行われているノーマルからブロンズまでの小規模な大会に面白そうなトレーナーが参戦していた。ゲッコウガを貸し与えた少年の姿もあり、つつい興奮を抑えられなくなったザラクは会いに行ってみようと思った。

その結果、かつて再起不能にした筈のメルカト・ジムの元ジムリー

ダーであるナザレと再会を果たした。心を完膚なきまでに砕いた筈の存在が、再び立ち上がり挑んでくる。

そのシチュエーションに、ザラクの心はドキドキとワクワクで満たされた。

プロローグ

アガリア地方の南部に広がる巨大都市郡^{メガロポリス}。その中心であるリール・シテイのジムリーダー・ルーラーは思わずポケナビの電源を切りそうになった。

相手は彼女が所属しているアガリア警察の筆頭である、四天王・ミリガン。

「おいおいおいおい、ウソだろ?」

『事実よ、ルーラー。現在、クレルモア大平原上空でチャンピオンとナザレがバトルを行っている。わたしとザイリン、フレデリックは被害を大平原の外に漏らさないように余波を抑え込む事で手一杯なの。シヤンテイとオーヴェルはエルフランとヴァイクがいるけど、ユニオンがまずい。悪いけど、ユニオンの防衛に向かってちょうだい』

「……ナザレをどうする気だ? ミリガン」

ルーラーは失踪していた少女の顔を思い浮かべながら問いかけた。アガリアの四大魔境の一つ、竜が住まう山脈、メルカトを代々守ってきた一族の末裔。ミリガンを含めても四人しかいないブラツククラスのトレーナー。あまねくドラゴンポケモンを支配するドラゴンマスター。

彼女がチャンピオンに敗れて失踪した事で、アガリアは空の安全を失った。

空はナザレのものであり、ナザレ不在のいま、何人も空を冒してはならない。それがドラゴンポケモン達の総意。彼らはナザレ以外には決して従わない。

ミリガンを含めて、一部の超級トレーナー達ならば倒す事も可能。けれど、一度討伐に乗り出せば、ドラゴンポケモン達は根絶やしになるまで戦い続けるだろう。討伐が完了するまでにアガリア全土は焦土と化してしまう。だからこそ、アガリア政府も、アガリア警察も、ド

ラゴンポケモンによる領空の支配を黙認している状況だ。

チャンピオンが倒されれば、何も問題はない。むしろ、アガリアが抱え込んでいる問題の大部分が解決する。けれど、チャンピオンの力は圧倒的だ。

『なんとか説得してみろ』

ナザレを説得する。それがどれほどむずかしい事か、ミリガンも理解している筈だ。

邪悪なわけではない。むしろ、二年前までの彼女は純真で、誰よりも優しくかった。

けれど、彼女は決して自分の意志を曲げない。

メルカトで神の如く扱われていたナザレ。人もポケモンも誰もが彼女に従っていた。

怒られる事も、反発される事もなく、それ故に彼女の精神は人の理の外にある。

『ユニオンを頼むよ、ルーラー』

「……了解」

ポケナビの通話を切り、ルーラーは深くため息を零した。

「チャンピオンの野郎……」

チャンピオンが現れてから、すべてが狂い始めた。

「とりあえず、ユニオンに行くか」

ルーラーはポケナビでリール警察署とリールジムのジムトレーナー達に連絡を入れると、ライド用ポケモンのチルタリスをモンスターボールから出した。

「ユニオンに向かうぞ」

空はいつになく静かだった。

「急ぐか……」

ナザレが本気を出せば、すべてのドラゴンポケモンが彼女の敵に牙を剥く。この静けさは、彼女が本気を出している何よりの証だ。



シャンティジムのジムリーダー・エルフランは森と平原の境界で眼の前の地獄に白目を剥きそうになっていた。

四天王の内、混乱を抑える為に奔走しているシエルを除いた三人が全力で余波を抑えているが、地上は溶岩と氷雪に覆われ、それらが無数の竜巻に巻き上げられ、稲妻と砂塵と流星が延々と降り注ぎ続けている。

この世の終わりを思わせる程の天変地異のフルコース。北のリーグを囲うブリュートナギレス大山脈は防ぎ切れなかった破壊光線かなにかの必殺級を受けて大きく抉れている。

「……ナザレ」

エルフランは悲しげにこの惨状を作り出している元凶の片割れの名前を呟いた。

自然をこよなく愛し、アガリアの調和を守っていた少女。共に老舗のジムを任せられた身として、かつてエルフランは彼女と交流を深めていた。

「チャンピオン、彼女に何をしたのかな……」

ナザレを知る者ならば誰もが抱く疑問。ただ、圧倒されただけで彼女がここまで変わってしまう事などあり得ない。

けれど、チャンピオンはただただ強いだけのバトルマニアだ。悪意などなく、どこまでも純粹。だからこそ、解せない。

「……まあ、とりあえず」

エルフランは微かに微笑んだ。

「ナザレが無事で良かった」

行方不明になってから二年。生きているのか、死んでいるのかも分かっていなかった。

ナザレが生きていた。それだけを喜び、エルフランはシャンティを守る為に意識を切り替えた。

第一話 『進め、ポケモン・ケア道』

リールシティまではそれぞれのライドポケモンに乗って移動する事になった。

アイリスはユキノオー、アギトはリザードン、バレットはレントラー、そして、俺はキテルグマ。

「キイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

「うわー、速い！」

キテルグマは空を飛んでいるリザードンと殆ど変わらない速度で走っている。

「待ってくださいよー！」

「クソッ！ 二足歩行に負けるな、レントラー！」

「オオオオオ！」

「ガウウウウ！」

ユキノオーとレントラーが遅れ気味になっている。

「……少し、速度を落とすぞ」

アギトの命令でリザードンが速度を落とした。

「キテルグマも少し速度を緩めて」

「クマー」

四体が横並びになると、ユキノオーとレントラーはホツとしたような表情を浮かべた。

「まったく、規格外過ぎますよ！ キテルグマにライドポケモンの適正は無い筈なのに、ユキノオーより速いなんて……」

最初、俺はアイリスのユキノオーに相乗りさせてもらう予定になっていた。だけど、試しにキテルグマをお願いしてみたら、思った以上に快適かつスピーディーなライドポケモンとして活躍してくれた。

「おっ！ 早くも見えてきたな！」

「あそこが？」

「そうです！」

「リール・シティだ」

まだかなりの距離がある筈なのに直ぐそばまで来ているかのよう

な錯覚を覚える。それほどに巨大なビルが立ち並んでいた。

「ムフフ、この分なら夜には辿り着けそうですね！」

「リール・シティにはジムがあるんだよね？」

「そうですねよ！ リール・ジムのジムリーダーはルーラーという女性です。ちなみに、彼女はアガリア警察のリール署の署長も兼任しているのですよ！」

「アガリア警察って、ミリガンと同じなんだね」

「四天王・ミリガンか……。そう言えば、彼女もアガリア警察の人間だったな」

「アガリア警察……。ツハ！ 制空権どころか、メルカトすら奪還出来ない警察なんぞ、オレの敵じゃねーな！」

アガリア警察には幼馴染のアクセルの父であるアラートも所属している。だから、悪く言われると気分が悪い。だけど、メルカトはバレットの故郷だ。

「今のメルカトはドラゴンポケモンの巣窟だ。安易に踏み込めば、超級トレーナーであつても無事では済まない。それに、ドラゴンポケモン達の逆鱗に触れば、ヤツラの牙はアガリア全土に向けられる。アガリア政府や警察が動かない理由も分かってやるべきだ」

「ツハ！ 御丁寧にどうも！」

バレットは怒りに満ちた視線をアギトに向けている。アギトの言葉は正論だ。だけど、そんな事はバレットにも分かっている。

「はいはい！ 二人共ストープ！」

口を挟むべきか考えていると、アイリスが二人の間に入った。

「アギト。あなたの言葉は正しい。ですが！ 奪われた故郷を取り戻したいバレットに言うべき事ではありませんよ！」

「……すまない」

アイリスに怒られて、アギトはシュンとなった。

「バレット。あなたも感情的になり過ぎです！ メルカトの現状を覆す為には力と知恵の双方が必要となります。本気で取り戻す気があるなら、安易に感情に振り回されしないで下さい！」

「お、おう……。すまん……」

バレットもシュンとなつてしまった。

「アルト！」

「は、はい！」

「流れるにとりあえずビクつかせようと思っただけです」

「……とつてもビククリしたよ」

俺が肩を落とすと、アギトとバレットが苦笑した。

アイリスはすごい。あつという間に空気が和らいだ。

「さてさてさーて！ リール・シティまでは残り一キロですよ！ ユ

キノオー、ラストスパートです！」

「オオオオオオ！」

ユキノオーが速度を上げた。

「負けるな、レントラー！」

「追え、リザードン！」

「行くよ、キテルグマ！」

「ガウウウウウ！」

「グオオオオオ！」

「キイイイイ！」

レントラーとリザードン、キテルグマも速度を上げた。

アガリア随一の大都市。リール・シティは目の前だ。

第一話『進め、ポケモン・ケア道』

結局、リール・シティにたどり着いたのは夜だった。俺達は急いでポケモンセンターに駆け込むと四人部屋で泥のように眠った。朝方に出発して、丸一日走り続けていたのだから仕方がない。

朝になって目を覚ますと、どうやら一番最初に目を覚ましたらしいアギトがリザードンの体をマッサージしていた。

「昨日の内にやっておくつもりだったんだがな。すまない、リザードン」

「グウウ」

リザードンは気持ちよさそうに目を細めながら鳴いた。

そうだ。一番疲れているのは走り続けていたポケモン達だ。俺も慌ててキテルグマをモンスターボールから出した。

「クマー」

「アギト！ ポケモンのマッサージって、どういう風にやればいいの？」

「ポケモンによっても変わるが、キテルグマなら——」

アギトにアドバイスをもらいながらキテルグマのマッサージをする。最初は不思議そうに首を傾げていたキテルグマが徐々に気持ちよさそうにくつろぎ始めて、なんだか嬉しくなってきた。

「アルトも分かってきたようだな。そうだ、これがポケモンのケアだ。ポケモンが気持ちよさそうにしている姿、最高だろう。このくつろいだ顔の為なら、なんだろうとやってやりたくなる」

「うん！」

今日はとにかくケア用品を買い揃えよう。ユニオン大会で賞金が手に入ったから、少しでも良いものを買おう。

「アギト。あとで、一緒に買物に付き合ってもらえる？」

「もちろんだ。最高のケア用品を紹介してやろう。大会の賞金は一切残らないだろうが気にするな」

「うん！」

賞金はキテルグマやスピアー、ゲッコウガと一緒に手に入れたものだ。だからこそ、みんなの為になる物に使うべきだ。

「……なにやら面白そうな話をしていますね！」

いつから聞いていたのか、布団の中から顔を出したアイリスが口を挟んできた。

「わたしも是非！」

アイリスが言うと、バレットも布団から出て来た。

「アギト。オレもアドバイスしてもらっていいか……？」

なんだか、少し照れくさそうな表情を浮かべている。

アギトは苦笑すると、「もちろんだ」と言った。



リールのジョーイさんはやっぱりシャンティやユニオンのジョーイさんと瓜二つだった。ただ、彼女は二人と比べるとかなり事務的な印象で、ポケナビにリール・シティと周辺の都市郡のマップをダウン

ロードさせてもらった時も言葉少なめだった。

アギトに案内されて向かった先はワイオルネ・コーポレーションのアンテナショップだった。

なんだか既視感のある独特なデザインの店舗で、中に入るとアロマの香りが広がっていた。

「フッフ、さすがはワイオルネですね！ 乙女心が爆買いせよと叫んでいます！」

「するな。無駄な買い物は欲しい人間の手元に品物が届かなくなる可能性を呼び起こす。それに、真に必要な物が出来た時、資金が不足してしまう可能性も出てくる。必要な物を必要なだけ買え」

「……はい」

アイリスのテンションが一気に下がった。だけど、アギトの言葉はもつともだ。

「アイツ、ほんとうに真面目くんだよな」

バレットは少し呆れ気味だ。

「アギトは正しいよ。必要な物だけを買おう」

「へいへい」

バレットの背中を押しながらアギトにアドバイスをもらいに行く。

スパイアー用に、むしタイプ用手入れシート五袋。ニードル磨きよう研磨剤を一缶、研磨セットを二つ。

キテルグマ用に、ブラシを五種類二つずつ。毛皮手入れ用スプレーのボトルを三本。目やに落としシート五袋。

ゲッコウガ用に、専用石鹸を三つ、柔らかかスポンジを三つ、ソフトタオルを三枚、粘膜用スプレーを三本。

それからポケモン用のマッサージ用品、それぞれに合った餌、ストレス発散用のオモチャを買った。

正直、ゲッコウガがオモチャで遊ぶ姿は想像が出来なかったけれど、アギトは言った。

「人間も娯楽がなければ退屈する。ポケモンも同じだ。時にはモンスタールールから出して、遊ばせてやる事もポケモンの精神衛生的に必要な事だ」

もつともな話だ。アギトのアドバイスに従って、俺はボールやパズルを買った。

パズルは知性の高いポケモン用のオモチャで、結構難しそうだった。

かなりの大荷物になってしまったけれど、基本的に滞在中はポケモンセンターの部屋に置いておけるし、移動中はライドポケモンに頼む事になる。キテルグマなら軽々と運んでくれる筈だ。専用のカバンも買って、その中にケア用品を詰め込むと、早速ポケモンセンターに戻ってアギトのケアレスンを受ける事になった。

さすがに部屋ですべてのポケモンを出すわけにはいかず、ポケモンセンターの裏の広場を使わせてもらおう事になった。

アイリスはマニユラの毛づくろいから始め、バレットはライチュウのブラッシングを念入りに行っている。

俺もまずは長距離移動で頑張ってくれたキテルグマのブラッシングから開始した。モフモフの毛皮を痛めないように丁寧に梳いていく。毛皮手入れ用スプレーを使うとかなり艶やかになった。

それぞれが一匹目のポケモンをケアし終わった頃には、なんと夕方になっていた。

「……い、いけません！ クレベースやユキノオーのケアもあるのに！」

「ツハ！ オレはバッチリとコツを掴んだぞ！」

「えっと、次はスピアーだね」

結局三体目のポケモンのケアは翌日に持ち越しとなった。

「慣れてくれば、今よりも早く、より丁寧にケアする事が出来るようになる。いいか、手を抜く事だけはするな！ 手持ちのポケモンを大切に思っているなら出来る筈だ！ ポケモンの笑顔だけを見ろ！」

「はい！」

「おう！」

「うん！」

それから一週間、俺達はひたすらポケモンケアの修行に励み続けた。

ジムバトルを気にする余裕などない。大切なポケモンの為なのだ。日に日に時間は短く、けれど丁寧に仕上げる事が出来るようになってきた。最初は何時間も掛かっていたのに、今では一時間で三体のケアを完了させる事が出来るまでになった。

「うへへー、美しいですよクレベース！ マニユーラ！ ユキノオー！」

「ツハ！ オレのレントラーのかっこよさに磨きがかかっちゃまったな！ ライチユウも凜々しいぜ！ エレキブルも最高だ！」

「スピアー、かっこいいよ、スピアー！ キテルグマも更にモフモフだー！ ゲッコウガも輝いてるよ！」

なんだろう。すっごく幸せな気分だ。スピアーのニードルはキラキラと輝いているし、キテルグマの毛皮はモフモフだし、ゲッコウガの肌もツヤツヤだ。

「スピッター！」

スピアーはニードルを太陽にかざしてウツトリしている。

「クマー」

キテルグマはボールで遊んでいる。

「ゴ、コウガ……」

ゲッコウガはなんだか戸惑っている様子だ。

「よくやった。だが、これで終わりじゃない。むしろ、ここから始まりだ。そもそも、ポケモンのケアに終わりなどない。常に最高の状態を維持するんだ。いいか、トレーナーはポケモンを幸せにする義務がある。その為の努力や労力を惜しむな！ わかったな！」

それだけ言うと、アギトは自分が世話をしていたガブリアスをボールに戻した。

「それと、すまない。オレはそろそろサレナ・シテイへ向かう」

「あつ、そっか！ ポフレスクールに通うんだよね？」

ユニオン大会の控室でアギトが言っていた事を思い出した。

「サレナのポフレスクールと言うと、前チャンピオンのゼノンが開校したところですか？」

「そうだ。伝説のポフレ職人としても名高き、前チャンピオン・ゼノ

ン。その教えを受けたいと思っただけだ」

「ぜ、前チャンピオンって、ポフレスクール開いてんのかよ……」

知らなかったのは俺だけじゃなかったみたいだ。

そう言えば、ザラクがチャンピオンになる前、前任のチャンピオンがいた筈だけど、あまりその人の話を聞いた事がない。

「なんでも、ザラクに敗れた後、『これで解放される！ やっふー！』と叫び、そのままサレナ・シティでスクールを開いたそうです」

「マジかよ……」

バレットは言葉を失っている。

「ゼノンはザラクと違い、かなり真面目な人物ですからね。大真面目にチャンピオンの業務をこなしていたらポフレ作りが殆ど出来なくなってしまう、鬱憤が溜まっていたそうです」

「詳しいね」

『週刊アガリア』の記事に書いてありましたからね」

週刊アガリア。たしか、お母さんも読んでいた週刊誌だ。アガリアの様々な時事ニュースが載っている。

「あれ？ じゃあ、なんで現チャンピオンは歩く災害とか言われるくらい自由なんだ？」

「不真面目だからですよ」

「なるほど」

バレットが微妙な表情を浮かべている。

チャンピオン。薄々思っていた事だけど、困った人みたいだ。

「とりあえず、そういうわけだ。スクールにはしばらく通い続けるから、サレナジムに挑む時は連絡を入れてくれ」

「うん！」

「おう！」

「はい！」

「あれ？ アイリスもサレナジムに挑むの？」

疑問に思っただけで、何故かアイリスはショックを受けた表情を浮かべた。

「いやいや、わたしは挑みませんが、アルトは挑みますよね!？」

「そうだけど……、え？」

「え？」

俺はてつきり、アイリス達とはここまでだと思っていた。アギトはサレナに向かうと分かっていたし、アイリスやバレットにもそれぞれの目的がある。だから、この反応はちよつと予想外だ。

「俺達、これからも一緒に旅をするって事？」

「そうですね!?! なんて、疑問系なんですか!?! そういう流れでしたよね!?!」

「そういう流れだったの？」

バレットに聞くと、バレットも首を傾げていた。

「……みたいだな。けど、いいんじゃないか？ 楽しいだろ？」

それもそうだ。

「バレットも一緒に来てくれる？」

「……いいぜ。オレも楽しいからな」

一緒にいて楽しい。これは、とても大切な事だと思う。

「……出来るだけ、早めにサレナに来てくれ」

アギトは少し寂しそうだ。

「うん！ 俺も前チャンピオンに会ってみたいし、なるべく早く行くよ」

「てか、意外と寂しがり屋なのな、お前……」

アギトとはしばらくお別れになるけれど、これからもアイリスやバレットと一緒に旅が出来ると思うと、なんだか嬉しくなってくる。

俺は何か言いたそうなアイリスに手を差し出した。

「というわけで、改めてよろしく、アイリス」

「なんででしょうね、この一人だけ勝手に盛り上がっていた痛い子みたいな空気……。いえ、気にしてはいけませんね！ よろしく願いますー！」

その日、俺達はリール・シティを中心とした^{メガロポリス}巨大都市郡を繋ぐリール鉄道の駅でアギトを見送った。すっごい寂しそうな顔だった。

「すぐ会いに行くからね！」

「絶対だぞ」

去り際に言葉を交わした時、彼は迫真の表情だった。

「……なるべく、早めに会いに行行ってやろうな」

「ですね」

「うん」

とにもかくにも、まずはジム戦だ。

「リール・ジムのジムリーダー・ルーラーはかくとうタイプのエキスパートですからね。スピアーで戦うなら対策が必要ですよ」

「キテルグマやゲッコウガで戦う手もあるが、アルトのエースはスピアーだしな」

「うん」

キテルグマやゲッコウガは強い。だけど、俺が一番力を引き出せるのはスピアーだ。

「ちよつといいかな?」

悩みながらポケモンセンターへの道を歩いていると、急に声を掛けられた。顔をあげると、そこにはメガネを掛けた男の人が立っていた。

「君達、オブリビテーク図書館の場所を知っているかい? 探しているんだけど、どうにも見つからなくてね」

「知ってる?」

俺はアイリスとバレットに聞いてみた。

「フフフ、わたしが知ってますよ! アガリア随一の大図書館ですよ。ここから然程離れていませんから、案内しますよ」

「いいのかい!? ありがとう!」

「おじさん、図書館で何か本を借りるの?」

「おじつ……、まだ、二十歳なんだけど……」

おじさんは禁句だったようだ。ガツクリと肩を落としてしまった。

「……おじさん、図書館で何を借りるの?」

「『アガリアの伝説』に関する本だよ!」

お兄さんと呼ぶと途端に元気になった。

「『アガリアの伝説』って?」

「よくあるお伽噺さ。その昔、アガリアには邪悪な神がいて、ポケモン

や人を争わせていたんだ。そして、その邪悪な神を打ち倒す為に一人の聖女が立ち上がったらしい」

たしかに、よくあるお伽噺のような内容だ。

「ただ、その伝説を裏付ける遺跡や文献がそれなりにあってね。例えば、シヤンティ・シティのサラの柱が有名だね。あの柱のサラという名前は伝説に登場する聖女の名前らしい」

「それ知ってる！　すごい大きな木の事だよね！」

「その通り！　あの木は聖女と共に戦ったポケモンが邪神を封じる為に自ら樹木となったらしいよ」

「お兄さん、詳しいんだね」

「ボクはアガリア大学に通っていてね。『アガリアの伝説』をテーマに卒論を書くつもりなんだ。それで調べていたら、『アルトギア手記』っていう四冊の本で構成された手記の存在に行き着いたんだ」

『アルトギア手記』……？」

「うん。なんでも、『アガリアの伝説』に纏わる最古の……というか、当時の人の手記らしくてね。その内の一冊がオブリビテーク図書館に所蔵されてるって噂を聞いたんだ。なんでも、『赤の書』って呼ばれてるらしい」

「へー、なんだか面白そうだね！」

「だろう！　こういうの、ボク、ワクワクしちゃうタイプなんだ！」

そう言うと、お兄さんは「あっ」と叫んだ。

「そう言えば、自己紹介がまだだったね。ボクはロッド。アガリア大学の三年生さ。よろしくね！」

第二話 『リール署』

『アルトギア手記』は『赤の書』、『青の書』、『黒の書』、そして、『白の書』の四つで構成されているんだ。不思議な事に、写本の類が一切無くて、存在する事は知られているのに、その在処は誰も知らない。どうだい？ ワクワクしないかな！」

「うん、ワクワクするー！」

ロッドの話はとてもおもしろい。だけど、こういう話に一番飛びつきそうなアイリスが黙って道案内に徹している事がすこし気になる。『赤の書』がオブリビテーク図書館にあるっていう話も、あくまで噂なんだ。だけど、こういう特別感のある物を探すって、ある種のロマンだと思っただよね！」

「要するに宝探しって事か……。卒論、大丈夫なのか？」

バレットがツツコむと、ロッドは目を泳がせた。大丈夫じゃないみたいだ。

「……いい、一応、『アルトギア手記』以外の資料も集めてるから、見つからなくても最悪、それなりのものをでっち上げるよ」

俺とバレットは顔を見合わせた。

「……でっち上げて良いものなのかな？」

「ダメだろ」

どうやら、ロッドは困った人みたいだ。

「た、たしかに、卒論は大切だ！ うん、それはボクも分かってる！」

でも！ しかし！ だが！ 夢を追いかける事は卒論よりも大事だと、ボクは思う！」

「……いや、卒論書いてから夢を追いかけるよ」

バレット。ちよつと、アギトの影響を受けている感じがする。正論のナイフでロッドをめった刺しだ。

そうこうしている内にオブリビテーク図書館が見えてきた。パット見た感じだと、とても図書館とは思えない。お城のような建物が聳えていた。

第二話 『リール署』

「おおよ、なんだか様子がおかしいですね」

アイリスが立ち止まった。

「どうしたの?」

「見て下さい」

アイリスが指差す先には奇妙な二人組がいた。バンギラスやギヤラドスを引き連れて、何かを叫んでいる。

『ここに『赤の書』がある事は分かっている! それは我ら『ヴリル教団』が持つべきもの。即刻差し出したまえ!』

「ヴリル!」

ヴリル教団と言えば、俺の故郷であるヴェゼール・ヴィレッジを襲った悪の組織だ。

あまりにも突然の再会に、頭の処理が追いついていない。

「ヴリル……」

最初、誰の声だか分からなかった。それほど、アイリスの声は冷たく、おそろしいものだった。

「アイ、リス……?」

胸騒ぎがした。このままだと、よくない事が起きる気がした。

「アル、ト?」

咄嗟に手を掴むと、アイリスは戸惑いの表情を浮かべた。

そして、そこら中からバイクの集団がやって来た。

「あーあー、馬鹿な連中だねー」

近くを歩いていた女性が言った。

「よりにもよって、ここで悪事を働くとは、命知らずもいたもんだ」
別のおじさんが呆れたように呟く。

「可哀想にのう。まだ、若いのに……」

別のおじいさんは心底憐れむような眼差しをヴリルに向けている。他の人達も、図書館を襲撃しようとしているヴリルの二人に対して、恐怖や怒りを一切向けていない。ひたすら、彼らを哀れんでいる。

「なんだ、この空気……」

バレットも戸惑っている。

そうしていると、バイクの集団の一人がヘルメットを脱いだ。

非常に柄の悪そうな男だ。ユニオンで出会ったアモン以上にアウ
トローな印象を受ける。

暴走族。マフィア。そういった非合法集団を意味する単語が次々
に浮かんでくる。

けれど、どれも間違っていた。

彼の、彼らの正体を、人々は恐怖と共に叫ぶ。

「ア、アガリア警察だ！」

「リール署の連中が来たぞ！」

「ヒイヒイ！」

一瞬、彼らが何を言っているのか分からなかった。

「アガリア警察って、言った？」

「言ってたな」

「言ってみましたね」

「言ってたね」

俺達四人は改めてヴリルの二人を取り囲むバイク集団を見た。

「オラオラオラオラ！ オレ達の縄張りで好き勝手してくれたよーだ
な！」

「ビヤツハー！ ぶっ殺してやるぜ！」

「血祭りに上げろ！」

手に持った金属バットを地面に擦らせながら、とても警察とは思え
ない口上を吐き出すバイク集団。

その中で、唯一ヘルメットを脱いだ柄の悪い男はまっすぐにヴリル
の二人へ向かった。

「感謝するで、お前ら！」

大きく手を叩きながら、男は言う。

「悪党はええ！ 最高や！ どんなにボコボコにしても、どんなにズ
タボロにしても許される！ その上、わしらは姉御に褒められる！」

まるで、獲物を見つけた獣のような顔だ。舌なめずりをしながら、
喜色を浮かべている。

「悪党万歳！ 悪事万歳！」

「悪党万歳！ 悪事万歳！」

「悪党万歳！ 悪事万歳！」

「悪党万歳！ 悪事万歳！」

「悪党万歳！ 悪事万歳！」

「悪党万歳！ 悪事万歳！」

なんだか、ヴリルの二人が被害者に見えてきた。どっちが悪なのか分からなくなりそうな光景だ。

「ほな、いくで！ お前ら！」

「オオオオオオ!!!」

男達が一斉にモンスターボールを投げる。現れたのはかくとうタイプのポケモン達だった。

カイリキー、サワムラー、エビワラー、カポエラー、ダゲキ、ナゲキ、ハリテヤマ、ローブシン、コジヨンド。

「さあ、パーティーの始まりや！」

リーダーらしき男の掛け声と共にポケモン達は一斉にヴリルの二人へ襲いかかった。

「なっ!? クソツ、バンギラス！」

「ギャラドス！」

ヴリルの二人がバンギラスとギャラドスに指示を出そうとした時、既に勝負は決していた。

九体のポケモンの内、三体はトレーナーの方へ向かっていたのだ。コジヨンドが顔面を砕き、サワムラーは脚をへし折った。

そして、トレーナーの危機に反応し、隙を見せたバンギラスとギャラドスは残る六体のポケモンの一斉攻撃で沈んだ。

あまりにも情け容赦のない光景に言葉を失った。

「……噂通りだね」

ロッドが言った。

「アガリア警察随一の武闘派集団。それがリール署だつて話だよ。彼らによって、アガリア随一の面積と人口を誇るリール・シティの秩序と安全は守られているんだ」

ロッド曰く、リール・シティの秩序と安全を守っている筈の正義の味方は地面に倒れ伏して痙攣を起こしているヴリルの二人にバット

を振り下ろそうとしていた。

「ちよつとー!」

「さ、さすがにやり過ぎだろー!」

止めようと思つて駆け出すと、バレットも同時に飛び出していた。

「レントラー!」

「ゲッコウガ!」

ゲッコウガが振り下ろされたバットを止め、レントラーがヴリルの二人を男から引き離した。

「あーん? なーにしとんじゃ、ボケエツ!!」

竦み上がりそうになる程の怒声。彼の矛先がヴリルの二人から俺達に変わった事が分かる。

「こんな雑魚共甚振つて、はしゃいでんなよ、アガリア警察」

バレットが不機嫌になっている。前から、彼はドラゴンポケモンの巣窟となった故郷メルカトを奪還せずに足踏みしているアガリア警察に不満を持っていた。

その怒りが爆発してしまつたみたい。

「言つてくれるのう」

男は面白がるようにバレットを見た。

そして、大きく手を叩いた。

「その通りやな」

「……は?」

「え?」

戸惑う俺達を尻目に、男は他のバイク集団に指示を出していく。

「そいつら、牢屋にぶちこんどけ。尋問は姉御が帰ってきてからや。しっかり治療したれ」

「うっす!」

「ラジャー!」

「りよーかい、兄貴!」

他のバイク集団がヴリルの二人を連れて去つていった。

そして、残つた男は言つた。

「ほな、バトルしよか!」

なんだか、すごく既視感がある。多分だけど、この人はどこかチャンピオンと似ている。

「はあ?」

バレットは呆気に取られている。だけど、アガリア警察随一の武闘派集団であるリール署の、おそらくは幹部クラスとバトル出来るチャンスだ。

「はい! おねがいます!」

ゲッコウガを見る。やる気満々の表情だ。

「おい! 流れがおかしくないか!」

「なーに言つとるんや! お前が言つたんやろ! 雑魚相手にいきがとつてもしやーない。まったくもつて、その通りや! よく見たら、その顔、ユニオン大会の中継で見たでえ」

男は獰猛な笑みを浮かべた。

「わしはリール署の副署長・ヴォルフや! ちなみに、リール・ジムのジムトレーナーも兼任しとる! ジムに挑むつもりなんやろ? なら、手っ取り早く、今ここで腕を試させてもらうで! ほなら、掛かってこいや!」

「クソツ、ついていけねー」

「簡単だよ、バレット。要するに、バトルするって事だよ!」

「……おー、おー、簡単だな! そうだな、バトルだな! やつてやるぜ!」

幸い、ここは広場だ。道行く人達もさっきの騒動で遠巻きに見ている。バトルフィールドとしては申し分ない。

「ゲッコウガ!」

「レントラー!」

「コウガツ!」

「ガウツ!」

ゲッコウガとレントラーが戦闘態勢に入る。

「ほな、いくで! エビワラー! サウムラー!」

ヴォルフが繰り出したのはパンチポケモンのエビワラーと、キックポケモンのサウムラーだった。どちらもかくとうタイプのポケモン

だ。
「さあ、二次会の始まりや！」

第三話 『交差路』

リール・シテイの北にある街、ユニオン・シテイ。その更に北で繰り広げられるバトルは八日目を迎えて尚、激化の一途を辿っていた。四天王と三人のジムリーダーが懸命に余波を防いでいるが、それも限界に近づいてきている。

「ハッハッハッハ！ 楽しい！ 最高だ！ なあ、ナザレ！」

「殺してやる！ 殺してやる！」

飢えれば草木を齧り、嵐を起こして雨水を啜る。そうした極限の中で、ザラクとナザレの両者は精神を研ぎ澄ませていく。

大地は底の見えない穴と化し、空は入り乱れる複数の気象がぶつかり合い、地獄の如き様相となったクレルモア大平原。

そこへ、一匹の龍が近づいてきていた。

彼らのバトルの余波が、ついに龍が棲まう烈空へ届いてしまったのだ。

「レックウザ!？」

疲弊しきっていた四天王・ミリガンは現れた伝説のポケモンに目を見開いた。

現れた烈空の覇者・レックウザによつて、混沌としていた気象がまたたく間に静まり返る。

ザラクも伝説の降臨に感動し、動きを止めた。

そして――、

「来い、レックウザ！」

ナザレはモンスターボールをレックウザへ投げつけた。

「なっ!？」

その光景に四天王・ザイリンは目を疑った。伝説のポケモンであるレックウザが自らボールの中へ飛び込んだのだ。

「おいおい、ウソだろ!？」

悲鳴をあげるザイリン。

ボールから出されたレックウザは完全にナザレへ忠誠を誓い、ザラクに牙を剥けている。対して、ザラクの目はキラキラと輝いていた。

「テンション、上がってきたぜ！」

その言葉にザイリンだけでなく、ミリガンも頭を抱えそうになった。

ここに来て、まさかの状況の悪化。

「クフフフ、さすがはドラゴンマスターですね。観客を飽きさせない見事な演出です」

「黙ってる、フレデリック！」

緊張感のない四天王・フレデリックの言葉にザイリンが怒鳴り声をあげる。

その時だった。

「はいはい、そこまでよー」

甘ったるい声と共に一人の女が戦場へ現れた。黒いローブに黒いとんがり帽子。まるで、お伽噺に出てくる魔女のような服装。見る者を魅了させる美貌。

「ドロシー!?!」

ミリガンは驚きの声を上げた。

彼女と同じくブラッククラスの特レーナーであり、フィオレ・ジムのジムリーダー・ドロシー。彼女が己のジムから離れる事は滅多にない。それは、彼女がブラッククラスである所以でもあるアガリアの四大魔境の一つ、大迷宮パレスを守護する為だ。

「おひさー、ナザレ」

「……ドロシー」

憎悪と憤怒で心を満たしていたナザレさえ、彼女の登場を無視する事が出来なかった。

「久しいな、ドロシー！　そうか、お前だな。ナザレとオレの再会を仕組んだのは！」

「ピンポンピンポン、大正解！　久しぶりにナザレに会いたくてさ！」

「そうか！　ありがとう！」

「あははー、礼にはおよばないぜー！」

談笑するザラクとドロシーをナザレはジツと見つめている。

彼女はドロシーを恐れていた。単純な強さならば、彼女よりもミリ

ガンやザラク、レムハザードの方が強いだろう。けれど、彼女の真の恐ろしさは別のところにある。

ドロシーはエスパータタイプのエキスパートであり、彼女は運命を操る力を持っていると言われている。それが本当なのかどうかはナザレも知らない。だが、確実に言える事がある。

ここにナザレが存在する事は、彼女が望んだ結果だ。

「ナザレ」

ドロシーは言った。

「実は美味しい紅茶が手に入ったのよ！ あなた、紅茶好きでしょ？

だから、誘おうと思ったの！」

屈託のない笑顔。その瞳に、その表情に、その言葉に、誰もがやすらぎを覚えてしまう。

そして、気づけば蜘蛛の糸に絡め取られてしまう。

だからこそ、彼女は人々からこう呼ばれている。

《大迷宮の魔女》

テレポートによって姿を消す二人。ザラクはつまらなそうに唇を尖らせた。

「レックウザと戦ってみたかったな……」

そう呟くと、彼は不貞腐れたように去っていった。

第三話『交差路』

「ゲッコウガ、影分身！」

「レントラー、エレキフィールド！」

アガリア警察随一の武闘派集団、リール署の副署長、ヴォルフ。かれが繰り出してきたのはかくとうタイプのサワムラーとエビワラー。

ゲッコウガは強い。だけど、俺はその強さの真髄を引き出せていない。もし、チャンピオンが指示を出していたら、きっとゲッコウガはアギトのポケモンを圧倒していた筈だ。

ユニオン大会で少しは成長出来たと思う。だけど、まだまだ足りない。このバトルでも、絶対に成長してみせる。

「いくで、お前らー！」

ヴォルフの轟くような叫び声と共にサラムラーとエビワラーが動

く。

「ゲッコウガ、辻斬りだ！」

間一髪、エビワラーのグロウパンチに合わせる事が出来た。どのタイミングで指示を出したのか分からないけれど、無数の影分身に惑わされずに本体を捉えた眼力は驚異だ。

「ほのおのキバで迎え撃て！」

レントラーの方にはサワムラーの攻撃が向かっていた。バネのような伸縮自在の脚が繰り出す強烈なブレイズキックをほのおのキバで受け止めるレントラー。ほのおタイプの技同士がぶつかり合った事で火力が膨れ上がり、二体は共にやけどを負ってしまった。

「やるやないか！ 影分身を見破られても動じんメンタル！ 射程を読ませんサワムラーの攻撃を受け止めおった胆力！ ええでえ、燃えてきたわ！」

エビワラーとサワムラーが攻勢に出た。エビワラーが繰り出す拳は速すぎて、俺の目では捉えきれない。それを見切るゲッコウガはさすがだ。

「ゲッコウガ、辻斬りだ！」

「コウガッ！」

「あかんで、兄ちゃん。接近戦はわしのエビワラーの独壇場や」

その言葉を証明するかのように、ゲッコウガの辻斬りをエビワラーは最低限の動きで回避した。そして、ゲッコウガの懐にカウンターを叩き込んだ。

「コウツ!？」

「ゲッコウガ！」

ゲッコウガは慌ててエビワラーから距離を取った。

「みずしゆりけん！」

「そないなもん、当たるかあ、ボケエ！」

信じられない。ゲッコウガが連続で放つみずしゆりけんを、エビワラーは最低限の動作だけで回避し切ってしまった。

「足元に水手裏剣！ 後ろへ飛べ！」

「コ、コウツ！」

みずしゆりけんが作り出した泥濘をエビワラーが踏んだ。

「ラァッ!?!」

わずかに滑った! 今だ!

「みずしゆりけん!」

「コウガッ!」

後ろに飛びながら、ゲツコウガはみずしゆりけんを放った。ゲツコウガだから出来る荒業だけど、みずしゆりけんは狙い変わらずエビワラーに向かっていく。

「サワムラー、なげつけたれ!」

「サァッ!」

「えっ!?!」

いきなり、でんきエネルギーを帯びたレントラーがみずしゆりけんの前に飛んできた。

「馬鹿な、ワイルドボルトの電流を受けながら!?!」

バレットが叫んだ。なんと、サワムラーはワイルドボルト発動中のレントラーを投げつけたらしい。ゲツコウガのみずしゆりけんが直撃したレントラーは戦闘不能にこそならなかったがふらついている。

「しま終いや」

「コッ!?!」

レントラーに意識を奪われている間にエビワラーがゲツコウガの死角へ回り込んでいた。

「ゲツコウガ、辻斬りで——」

ゲツコウガはエビワラーのインファイトを止めた。けれど、同時に背後から仕掛けてきたサワムラーのインファイトを防ぐ事は出来なかった。

「コウガァ!?!」

「ほれ、サンドイッチの完成や」

サワムラーのインファイトを背後から受けたゲツコウガに、エビワラーが前面からインファイトを仕掛けてきた。前後からの同時攻撃にゲツコウガは戦闘不能になってしまった。

「ウソだ……」

ゲッコウガだ。チャンピオンのポケモンだ。それなのに、一矢報いさせてやる事すら出来なかった。

「フィールドのエネルギーを取り込め！ ワイルド——」
「捨て身はアカンでえ、兄ちゃん」

サワムラーの長い脚が正確にレントラーの急所を捉えた。ゲッコウガに集中していた筈なのに、見事なフェイント攻撃だ。

「ま、負けた……」

バレットが膝から崩れ落ちた。俺も立っていられなくなった。

最強のポケモンで挑んだのに、成長するどころか、こんなにアツサリと負けるなんて……。

「まだまだやのう」

エビワラーとサワムラーをボールに戻すと、ヴォルフは言った。

「ステータスに頼り過ぎや。それじゃあ、アカン！ 必要なもんは力やのうて、技や！ 今のままやと、姉御からバツジは貰えんでえ。ほななあ」

去っていくヴォルフの後ろ姿を、俺達は見ている事しか出来なかった。

「だ、大丈夫かい？」

ロッドが声を掛けてきた。返事をしたいけど、声が出てこない。

「無理ないさ！ 相手はリール署の副署長だよ？ むしろ、よくやったさー！」

「ウルセエー！」

バレットが怒鳴り声を上げた。

目を白黒させるロッドを睨みつけると、バレットはレントラーをボールに戻した。

「また、負けさせちまった……。すまねえ、レントラー」

バレットの頬を涙が伝う。俺の視界もボヤケてきてしまった。

あまりにも不甲斐ない。

「ごめん……、ゲッコウガ」

気を失っているゲッコウガを抱きしめながら、俺はそれ以外の言葉を出せなかった。バトルで頑張ってくれたポケモンに、感謝の言葉

も、励ましの言葉も言えず、ただ謝る事しか出来ない。それが余計に不甲斐なくて、悔しくて……。

「そこまで！」

アイリスが声を張り上げた。

「今日の敗北は明日の勝利！ 立ち上がりなさい！ 蹲っただけは、本当に敗者になりますよ！」

「アイリス……」

そうだ。泣いている場合じゃない。俺は未熟だ。そんな事、分かっていた事だ。

「ごめん、アイリス。ありがとう！」

「……ツハ、そうだな。次は勝つ！ 絶対に！」

俺達が立ち上がると、周りで見物していた人達が一斉に拍手してきた。

「ブラボー！ おお、ブラボー！ 素晴らしい！」

「あの不良警察相手によく頑張った！」

「良いバトルだったぞ！」

「いい青春だ！」

こんな大勢の前で泣いてしまった事が、途端に恥ずかしくなってきた。バレットも顔が真っ赤に染まっている。

「と、図書館！」

「お、おう！ そうだ！ オレ達は図書館に用があるんだ！」

俺達は全速力で図書館に向かって駆け出した。

「ちよ、ちよと待ってくださいよ！」

「お、置いてかないで！」

アイリスとロッドが慌てて追いかけてくる。周りの人達は微笑ましそうに笑ってくる。

「くっそー、次は負けねえ！」

「絶対勝つ！」

俺達はそのままオブリビテーク図書館へ飛び込んでいった。

第四話 『VSヴリル教団幹部』

オブリビテーク図書館。そこはアガリア随一の蔵書量を誇る大図書館だ。

壁面はおろか、天井まで本で埋め尽くされている。

「あつ、メタグロスだ！」

「ジバコイルもいるな」

驚いた事に、図書館の内部にはポケモンが放たれていた。

「彼らはオブリビテーク図書館の従業員だよ。高い所に仕舞われている本を取り出す為に、浮遊能力を持つポケモンに協力してもらっているのさ」

ロッドが言った。

「それにしても、まさかヴリルが来ているとはね」

「ロッドはヴリルを知ってるの?」

「もちろん。有名な組織だからね。それに、彼らが信仰している神は『アガリアの伝説』に登場する闘争の神なんだよ」

そう言えば、前にポケモン博士のモンテロが話していた。

ヴェゼール・ヴィレッジの地下に広がるコスラ洞窟で俺とアクセルが見た壁画。そこに描かれていた黒い影。それこそが闘争の神である『ヴリル』だ。

「ねえ、ロッドは『コスラ洞窟』って、知ってる?」

試しに聞いてみた。すると、前を歩いていたアイリスが立ち止まり、目を見開いた。

「……アルト。何故、その名前を知っているのですか?」

「え?」

なんだから、ロッドと会ってからのアイリスは様子がおかしい。

「どうしたの?」

「答えて下さい。何故、コスラ洞窟の存在をあなたが知っているのですか?」

虚言は許さない。そう、彼女の瞳が訴えかけてくる。

「えつと……。ちよつと長くなるかもしれないんだけどさ」

俺はコスラ洞窟を発見した時の事を話した。

ヤドンのたいあたりで地面の溝に落ちてしまったコクーン。追いかけて来たアクセルと共に探検した洞窟。その奥で見つけた壁画。そこで見た不思議な光景。そして、モンテロから『コスラ洞窟』の名前を覚えてもらった事。

すべてを語り終わると、アイリスは険しい表情を浮かべた。

「……モンテロ。ポケモンの研究者。知っていても不思議ではない……？」

「ア、アイリス……？」

「どうしたんだよ、お前」

バレットも怪訝そうに眉をひそめている。

「……もしかして、君は『アルトギア手記』を読んだ事があるのかい？」

ロッドが言った。

「え？」

「それ、お前が探してる本だよな？」

「ああ、そうだよ。アルトギア手記の内容は一般に公開されていない。だから、そこに記されている単語も、それを見た者以外には分からない筈なんだ。『コスラ洞窟』も、その一つ」

「……やっぱり」

アイリスはロッドを睨みつけた。

「おかしいとは思いました。『アルトギア手記』は政府や警察が『極秘指定文書』に指定しているものです。そんなものの噂が流れている事も、ただの大学生が嗅ぎ付ける事も……」

「……もしかして、オブライエンは君が？」

話の流れがよく分からないけれど、なんだかアイリスとロッドの間に緊迫した空気が流れている。

「……どうしようか、バレット」

「どうしようかって聞かれてもな……」

陽気な性格である筈の二人が喧嘩をする姿は、あまり見たくない。

「と、とにかく、二人共落ち着こうよ」

「落ち着けません！ この男、ヴリルの一員です！ それも、おそらく」

は幹部クラス！」

ロッドを指さして叫ぶアイリス。俺とバレットはその言葉を呑み込む為にたっぷり三十秒も掛かってしまった。

「ええ!？」

「はあ!？」

第四話『VSヴリル教団幹部』

「うん！ 計画変更だね」

ロッドは己を睨みつけているアイリスを見つめ返しながら言った。

「当初の計画では、キールとレイニーの二人が挑発した後、警備が強化された場所をボクが探り、一斉に襲いかかる手筈になっていたんだ」

「ロ、ロッド……?」

突然、饒舌に語り始めたロッド。

イヤな予感がする。

「チャンピオンと関係を持つ少年。君だと思っていたんだ。だけど、違った。オブライエンを倒す程のトレーナー。おまけに、持っているんだよね? 消息不明の『青の書』を」

そう言つて、ロッドは笑った。

その笑顔が、あまりにも恐ろしくて、俺は咄嗟にモンスターボールをホルダーから外した。

「君が『青』なのかい? それとも、『青の書』を持っているだけなのかい? まあ、どっちでもいい。一緒に来てもらうよ」

「お断りします」

アイリスがモンスターボールを取り出した。けれど、その前にロッドがボールを投げていた。

飛び出してきたスリーパーはアイリスがボールを投げる前に、持っていた振り子を見せた。

「しまっ!？」

アイリスは崩れ落ちてしまった。その体をスリーパーが念力で持ち上げる。すると、アイリスが持っていたモンスターボールが足元に転がってきた。

咄嗟に拾い上げつつも、あまりの事に思考が追いついていない。次

に何をすべきなのか迷っていると、ロッドはポケナビに向かって言った。

「作戦変更。『青の書』の重要な手掛かりを手に入れた。一斉攻撃を開始しろ」

瞬間、オブリビテーク図書館全体が大きく揺れた。

「アルトくん。バレットくん」

ロッドはさつきまでと変わらぬ穏やかで、どこか抜けているような雰囲気のまま片手を上げた。

「今日はありがとう！ じゃあね！」

そう言っつて、彼がオンバーンを出した時、ようやく俺の脳は現状を理解した。

崩れ落ちる壁。その向こうにはバンギラスやギャラドス、ボスゴドラといった強力なポケモンの群れが犇めいている。

そして、目の前でアイリスがヴリルの幹部に攫われようとしている。

「……ダメだ」

『アルトギア手記』のこと、『コスラ洞窟』のこと、理解し切れていない部分は多い。

だけど、そんな事はどうでもいい。重要な事は一つだ。

旅に出て、すぐに出会った少女。一緒にバトルして、一緒に大会に出て、一緒に笑いあった。そんな彼女が悪の組織に誘拐されようとしている。

飛び立つオンバーン。咄嗟に握り締めていたゲッコウガのモンスターボールを投げようとした。そして、思い出した。

明確な驚異に対して、咄嗟に選んだ最強の手札。だけど、ゲッコウガはさつきのヴォルフとのバトルで戦闘不能になっている。

慌てて別のボールを取り出した時、既にオンバーンは飛行を開始していた。

「スピーアー、キテルグマー！」

「ライチュウ！ エレキブル！」

追いかけてようと走り出した時、バレットのポケモン達が何かから俺

を守った。

外にいるポケモン達からの攻撃だ。

悲鳴が響き渡る。図書館を利用していた人達だ。このままだと、大惨事になってしまう。

キテルグマやスピアーなら、きつと外のポケモンとも渡り合える。だけど、そんな事をしていたらアイリスが連れ去られてしまう。

「アルト！　ここはオレに任せろ！　レントラーが戦闘不能になっている以上、アレに追いつけるのはお前のキテルグマだけだ！　急げ！」

「わかった！」

問答など無用だ。バレットは強い。そのバレットが任せると言った。だったら、信じるだけだ。

「キテルグマ！」

「クマー」

キテルグマの肩に飛びつく。

「スピアー、オンバーンを追え！　キテルグマも全速力だ！　絶対にアイリスを助ける！」

「スピッ！」

「キイイイッ！」

図書館を飛び出すと、そこには無数のポケモン達がいた。

「スピアー、影分身！」

「スピイイイッ！」

スピアーの体が無数に分裂し、俺とキテルグマを覆い隠した。

破壊光線や龍の波動、ブラストバーンが放たれるが、キテルグマはすべてを回避してポケモン達の頭上を飛び越えた。

「先行してくれ、スピアー！」

「スピッ！」

スピアーが速度を上げる。オンバーンは既に遥か彼方だ。だけど、見失うわけにはいかない。

「キテルグマ、もっとスピードを上げて！」

「キイイイッ！」

キテルグマが加速する。街道を走る車を追い越し、時には建物を飛び越えてオンバーンを追跡してくれた。

けれど、その行動に黙っていない人達がいた。

「あれは!?!」

けたたましいサイレンを響かせながら、見覚えのあるバイクが追いかけて来た。

「リ、リール署!?!」

思い出すのはトレーナーを真っ先に攻撃し、バンギラスとギャラドスを情け容赦なく蹴散らしたアウトロー集団だ。

幸い一人だけのようにだが、相手をしていたら確実に見失ってしまう。

「どうしたら……」

迷っていると、手元にもう一つのボールがある事に気がついた。

ゲッコウガのボールじゃない。これはアイリスが落としたボールだ。

「お願いだ、力を貸してくれ!」

ユキノオーか、クレベースか、マニニューラか、いずれにしてもオンバーンを追いかけられるポケモンじゃない。だけど、こおりタイプの技でリール署の人の足止めなら頼める筈だ。

モンスターボールを投げる。すると、飛び出してきたのは予想していたどのポケモンとも違っていた。

「……うそ」

飛び出してきたポケモンは氷のように透き通る美しい翼をはためかせ、リール署のバイクへふぶきを放った。

バイクは見事に止まり、そのポケモンは長い尾をなびかせながらキテルグマと並走し、俺を見つめた。

「フリーザー!?!」

アイリスの四体目のポケモン。それは伝説のポケモン・フリーザーだった。

つい、感動しそうになった。だけど、そんな場合じゃない。

頭をブンブンと振り、余計な思考を振り払う。

「力を貸してくれ、フリーザー！ アイリスを助けるんだ！」
「キュイ！」

フリーザーが高度を下げる。すると、キテルグマは俺を掴み、フリーザーの背中に乗せた。

「……キテルグマ？」

「クマツ！」

「うん！ 一度戻って、キテルグマ！」

キテルグマをボールに戻すと、フリーザーは一気に速度を上げた。滑り落ちそうになったけれど、なんとかしがみつく。

「遠慮はいらない！ 全速力だ、フリーザー！」

「キュイ！」

加速していくフリーザー。すると、オンバーンの背中が近づいてきた。先行していたスピアーが影分身で足止めしてくれていたんだ。だけど、俺達が辿り着く前にオンバーンのばくおんぱでスピアーが落とされてしまった。

「スピアー！」

間一髪でスピアーをボールに戻す。

「キュイイイイツ！」

フリーザーが大きな声で鳴いた。すると、オンバーンとロッドが振り返った。そして、フリーザーの存在に動きを止めた。

「ロッド！」

「アルトくん……」

オンバーンとフリーザーが睨み合う。アガリアで空を飛べばドラゴン・ポケモンに襲われる筈だけど、ドラゴン・ポケモンの姿は影も形もない。

つまり――、

「アイリスは返してもらおう！」

「ボクとスカイバトルをするって事かい？ 言っておくけど、ボクは強いよ？」

「関係ない！ アイリスは友達なんだ！ 絶対に攫わせたりしない！」

「熱いね……、うん。個人的にだけど、ボクは君みたいなタイプが好きなんだ。だから、お相手させてもらおうよ！」

ロッドは言った。

「改めて、名乗らせてもらおうよ。ボクはロイド。ロッドは偽名なんだ。彼女の言っていた通り、ヴリル教団の幹部を務めている」

「どうでもいい！　いくよ、フリーザー！」

「キュー！」

「来い、アルトくん！」

第五話 『追跡』

ロッド改め、ヴリル教団幹部ロイドとのポケモンバトル。

相手はドラゴン・ポケモンの中でも最速と言われるポケモン、オンバーン。

だけど、ロイドに加えて、アイリスまで背負っている今、オンバーンの飛行速度は格段に落ちている。飛行速度で劣る筈のスピアーやフリーザーが追いつけたのも、それが理由だ。

相性も悪くない。ひこうタイプとドラゴンタイプの二重タイプであるオンバーンにとって、こおりタイプのポケモンはまさに天敵だ。

問題があるとすれば、アイリスがいる以上、下手な攻撃は出来ない事。そして、なによりも他人のポケモンであり、伝説のポケモンであるフリーザーを俺が使いこなす事が出来るのか、という事。

だけど、迷っている時間はない。

「いくよ、フリーザー！」

「キュー！」

フリーザーは俺の指示に従ってくれている。

ポケモン図鑑で確認したところ、フリーザーの技は『ふぶき』、『ぜったいれいど』、『ぼうふう』、『ゴッドバード』の四つ。どれも範囲が広く、下手に使えばアイリスまで巻き込んでしまう。

だから、俺はキテルグマのモンスターボールを握り締めた。

出来れば、正々堂々と戦いたい。だけど、今優先するべき事はアイリスの救出だ。

「ふぶき！」

「キュー！」

リール署の警察官を足止めした時にも使った技だ。

さつきは手加減していた。今度は全力だ。狙うのはオンバーンじゃない。

「……これは」

すべてが白一色に染まっていく。俺はキテルグマのボールを上空へ投げた。

「ぼうふうでオンバーンを囲い込め！」

「キュー！」

ふぶきで視界を閉ざし、ぼうふうで逃げ道を塞いだ。

「お願い、キテルグマ！」

「キイイイッ!!」

ボールから飛び出したキテルグマがオンバーンに向かって一直線に降下していく。

この状況なら、否応にもキテルグマに対処せざる得ない。

「フリーザー、ゴッドバード！」

「キュー！」

本命はこつちだ。ふぶきとぼうふうのコンビによって発生した氷雪の渦。光を帯びたフリーザーがその中心部に向かって突き進む。渦に衝突する寸前、俺を覆うようにフリーザーの背中に氷のドームが現れた。

「キュー」

「ありがとう、フリーザー」

渦の壁を突破した先、そこにはキテルグマへばくおんぱを放とうとしているオンバーンの姿があった。

「戻れ、キテルグマ！」

ばくおんぱが放たれる寸前にキテルグマをボールに回収する。そして、フリーザーがオンバーンに接近した。

「いない!?!」

だけど、オンバーンの背中にいる筈のロイドとアイリスの姿はなかった。

やられた。オンバーンを足止めの為の罠に使ったんだ。

「キューッ！」

フリーザーがふぶきでオンバーンを凍らせた。トレーナーのポケモンはモンスターボールに入れる事も出来ない。可哀想だけど、これ以上の足止めをくらっている余裕もない。

「ごめん、オンバーン。いこう、フリーザー！」

「キュー！」

氷雪の渦を解除すると、足元から聞き覚えのある声が響いた。

「おーい、聞こえとるかー！」

「ヴォルフ!？」

さつき足止めをした警察官はヴォルフだったらしい。肩やバイクの車体に僅かな雪を乗せた状態でこちらに手を振っている。

「あの、これには事情があつて!」

「わーっとるわい! ったく、いきなりふぶきなんぞをかましおつてからに!」

そう言うと、ヴォルフはモンスターボールからピジヨットを出した。

「しっかし、わしの読みどおりやったな」

ピジヨットに乗つて俺達の下へ上昇して来たヴォルフは言った。

「読みどおりつて?」

「兄ちゃんらとバトルしたんは、あの男と共犯かどうか確かめるためたつたんや。トレーナーの人柄を見るには、バトルが一番やからな」

「……ロッド。ううん、ロイドはヴリルの幹部だったんだ。アイリスが連れ去られちゃつて……」

「安心せい。事情は大まかにやが把握しとる。オブリビテーク図書館には、うちのもんが常駐しとるさかいな。エビワラーとサワムラーが今も追跡しとる」

「ロイドの居場所が分かつてるの!？」

「せやせや。せやから、こつから先は兄ちゃん次第やで」

「どういう意味?」

ヴォルフは言った。

「今はまだ、友達を助ける為に頑張ったけど力及ばなかった子供で済む。せやけど、こつから先、わしと一緒に姉ちゃんを救けるなら、完全にヴリルと敵対する言うこつちゃ。それに、『青の書』の情報を持つとる姉ちゃんと行動を共にすんなら、これから先の旅は楽しいだけのもんとちやうで」

「関係ない!」

ヴリルと敵対する事になつても、アイリスに何か大きな秘密があつ

ても、そんな事はどうでもいい。大切な事は友達がピンチである事だけだ。

「アイリスを助けなきゃー！」

「わし、兄ちゃんの事、めっちゃ気に入ってたわ！」

ヴォルフは満面の笑顔で言った。

「よっしゃー！ なら、行くで！」

ヴォルフはポケナビのアプリを起動した。リール・シティのマップらしき物の中を二つの光の玉が猛スピードで移動している。

「この光がエビワラーとサワムラーや！ ほな、追跡するで！ ピジョット！」

「いくよ、フリーザー！」

「ピジョット！」

「キュー！」

第五話『追跡』

「厄介だな」

ロイドはため息を零した。オブリビテーク図書館に対する一斉攻撃で厄介なリール署の視線を釘付けにする筈だった。けれど、一番厄介な男の目は眩ませる事が出来なかった。

リール署の副署長ヴォルフ。元々は、このリール・シティを中心とした巨大都市郡全域に根を張る愚連隊のリーダーだった男だ。メガロポリス

二年前に赴任して来たジムリーダー、ルーラーは彼を籠絡する事でリール署というアガリア随一の武闘派集団を結成した。

「スリーパー！ サイコキネシス！」

「リーパー！」

ロイドを追跡する二体のかくとう・ポケモン。エビワラーとサワムラーはヴォルフが子供の頃から一緒にいた。共に育ち、共に喧嘩し、共に遊び、共に負け、共に勝ってきた。

故にこそ、彼らは以心伝心。もはや、言葉など要らない。

「サアツ！」

「ラアツ！」

あらゆる格闘技を極めた達人、ルーラーの教えを受けた二体は目に

見えない力さえも捉えきる。そして、伝授された足運びは敵を惑わせる。

「……なら、サイコカッターだ！」

サイコエネルギーが刃の形となって飛んでくる。当然のように躲す二体。けれど、サイコカッターは使用者の思念を反映させる。

物理的にはありえない動きで再び迫るサイコカッターにエビワラーとサワムラーは互いに迫るサイコカッターへ攻撃を繰り返す。

「すごいな」

ロイドは素直に感心した。それぞれが自分に向かってくるサイコカッターを止める為に足を止めれば、そこをサイコキネシスで狙うつもりだった。けれど、彼らは互いに迫るサイコカッターを狙う事で足を止めずに済ませた。

トレーナーが不在の状況でここまでの判断が出来るポケモンは相当に稀だ。

故に、ロイドの胸中に浮かぶ感情は『敬意』だった。

「ごめんね。出来れば、ボクも正々堂々と戦いたかった」

彼は心から二体の素晴らしいポケモンにお詫びの言葉を告げた。

そして、モンスターボールを放り投げた。

「スリーパー。バリアの中にエビワラーとサワムラーを閉じ込めるんだ」

「スリーパー」

スリーパーがサイコエネルギーで巨大なドームを作り出す。閉じ込められたエビワラーとサワムラーは咄嗟に判断し、一方がバリア自体を破るために攻撃し、一方がスリーパーを攻撃した。

急所を撃ち抜かれたスリーパー。けれど、バリアはまだ残っている。そして、ボールから飛び出してきたポケモンはバリア越しにエビワラーとサワムラーを見つめた。

それだけで十分。カラマネロという、ポケモン界随一の催眠能力を持つポケモンにとっては……。

「よくやった、カラマネロ。スリーパーもお疲れさま」

戦闘不能になったスリーパーを戻し、ロイドは虚ろな表情を浮かべ

ているエビワラーとサワムラーに向き合った。

「君達を戦闘不能にする気はない。だけど、もう一仕事、やってもらおうよ」

カラマネロが彼らを操り、街の中を走らせ始める。

「これで、ボク達を追跡する者は居なくなった。やれやれ、少し疲れたね」

カラマネロをボールに戻し、改めてアイリスを抱きかかえるロイド。

そして、走り始めた彼の足は間もなく止まる。

「やれやれだね。間に合わなかったわけだ」

アルトとヴォルフが立っていた。

「……いや、そうか。エビワラーとサワムラーだけじゃなかったわけだね」

元・愚連隊のリーダーにして、現・リール署の副署長。彼の目は己と手持ちポケモンのものだけではない。この街すべてが彼の目となっている。

「どうやら、今度こそ正々堂々と戦わないといけないようだね」

そう、ロイドは嬉しそうに言った。

「キテルグマー！」

アルトがキテルグマを繰り出した。その隣にフリーザーも並び立つ。

フリーザーの方は完全に殺気立っている。

「いくよ、カラマネロ。ムシヤーナ」

ロイドがポケモンを繰り出しても、ヴォルフは動かなかった。

「ずいぶん警戒してるんだね」

「当たり前やろ。ヴリル教団幹部・ロイド。こっちはおどれのせいで、姉御が帰ってきたら大目玉や！ 絶対に逃さん！」

「ごめんね。でも、ボクは捕まるわけにはいかないんだ。なんと言つても、ようやく『青の書』の手掛かりが掴めたんだから」

「……アホくさ。そないなものの為に、お前らは友達^{ダナ}同士を引き離す言うんか？」

「そだよ。ボクは仲良くしている子供達を引き離してでも、『青の書』が欲しいんだ。だから、アルトくん」

ロイドはアルトに笑いかけた。

「この子を返してほしかったら、全力で掛かってきてくれ」

「言われなくても、俺は全力でロイドを倒す！」

まっすぐな瞳。燃え上がるような意志。

「いくぞー！」

「来い、アルトくん！」

第六話 『VSロイド』

第六話 『VSロイド』

「ムシャーナ、サイコフィールド！」

「ムシャー」

ロイドのムシャーナを中心に紫の光が大地を走る。見たことのない技だ。おそらくは、バレットのレントラーが使うエレキフィールドに近いものだろう。

「キテルグマ、アームハンマー！」

「キイイイッ！」

「カラマネロ、ばかぢから。ムシャーナ、みらいよち！」

「ネーロ」

「ムシャー」

キテルグマのアームハンマーをカラマネロは真正面から受け止めた。同時に輝きを帯びるムシャーナ。みらいよちも知らない技だ。

以前、幼馴染のセラのお爺さんから聞いた事がある。アガリア地方におけるエスパークタイプのポケモンの生息域は非常に限られていて、そこはアガリアでも屈指の危険度を誇る場所だという。その為、このアガリアにはエスパークタイプのポケモンを持つトレーナーの数も少ないらしい。

ポケモンリーグの中継でも滅多に現れないポケモン。その技も未知の部分が多い。

「……、」

「フリーザー、ゴッドバード！」

「キュイ！」

「ムシャーナ、サイコキネシス！」

「キュイイイッ！」

いくら強力な念動力を持ってしても、伝説のポケモンを止められる筈がない。

フリーザーはサイコキネシスを無視して突き進んでいく。

「いいのかい？」

ロイドはアイリスと共にムシャーナの背後へ回る。

「ああ、そう来ると思ってたで、ゲス野郎」

名前を偽り、感情を偽り、表情を偽り、言葉を偽る。

そんな彼だからこそ、そう来ると思ってたからこそ、ゴッドバード。ふぶきやぼうふうとは違い、自分の意志で止まれる技なら、絶対にアイリスを人質として使うと思った。

「今やで、サウムラー、エビワラー!」

「なっ!?!」

完全な不意を打てた。サウムラーの伸びる足がロイドを襲い、バランスを崩した所をエビワラーが近づき、見事にアイリスを回収した。

「カラマネロの催眠術にかかっていた筈なのに!?!」

「ド阿呆^{アホウ}。スリーパーを持つとるヤツを尾行させんのに、なんも対策せんわけないやろ」

そう言うと、エビワラーからアイリスを受け取ったヴォルフは紫色のきのみを見せた。

「カゴのみ……。なるほど、警戒していたつもりだけど、足りなかったようだね。だけど、奪われたら奪い返すだけだよ!」

「ロイド! お前にアイリスは渡さない!」

「キユイイイイツ!」

フリーザーが高らかに鳴く。キテルグマが退いた。これで、ようやく全力が出せる。

「フリーザー、ぜったいいいど!」

「カラマネロ、ムシャーナ、ひかりのかべ!」

カラマネロとムシャーナが眩い光の結界を前面に貼った。

「逃がすなや、エビワラー、サウムラー!」

「ラアツ!」

「サアツ!」

この後に及び、逃走を図るロイドをサウムラーとエビワラーが止めた。

そして、フリーザーのぜったいいいどがカラマネロとムシャーナを呑み込む。

一撃必殺。二重に張られたひかりのかべごと、二体は氷漬けとなり戦闘不能になった。

「……いやー、予想外だったよ。君がここまで手段を選ばない戦い方が出来るとは思っていなかった」

ロイドは苦笑しながら俺を見つめた。

「万が一にも、エビワラーがお姫様を回収出来ず、フリーザーのゴッドバードが止まらなかつたらって、考えなかつたのかい？」

「フリーザーはアイリスが大好きなんだ。傷つけるわけがないだろ。それに、エビワラーとサウムラーの力は身をもつて知ってる。だから、信頼したんだ」

ロイドは目を見開いた。

「……そうか、そうだったのか」

顔を右手で覆い、肩を震わせて笑い始めるロイド。訝しんでいると、彼は言った。

『青の書』を持つ少女が近づいた少年。ただの少年の筈が無かったね。そうか、君が『青』か！」

「何の事か分からないけど、そろそろ観念してくれる？」

「観念？ 何故？ まさか、もう勝ったつもりかい？」

「つもりやない。わしらの完全勝利や」

ヴォルフの言葉と共にエビワラーとサウムラーがロイドに攻撃を仕掛ける。人間が相手でも、彼らにはいささかの躊躇いもない。

「間違っているよ、ヴォルフ。このバトル、ボクの勝利さ」

エビワラーの拳とサウムラーの脚がロイドに命中する寸前に止まった。

「なっ!？」

ボールに手を触れた様子はない。そもそも、そんな暇は無かった筈だ。

「簡単だよ。君達が来る前からボールの外に出しておいたんだ」

ロイドが見上げた先、そこにはシンボラーと、その上に乗るネイティオの姿があった。

「受けるといい。めいそうにより高められた力が放つ、ネイティオの

アシストパワー」

「フリーザー！ ネイティオとシンボラーにぜったいれいどだ！」

「キュイ！」

「おっと、そろそろ時間だ」

「えっ!?!」

シンボラーのサイコキネシスによって動きを封じられたエビワラーとサワムラーに放たれるネイティオのアシストパワー。そして、同時になにもない筈の空間から未知の攻撃がフリーザーを襲った。

「これがみらいよち。サイコフィールドによって高められた一撃は、伝説だろうと打ち倒す」

「キュア!?!」

「フリーザー!?!」

攻撃態勢に入っていたフリーザーは回避行動を取れず、急所に命中してしまった。

倒れ伏すフリーザー。伝説のポケモンの敗北に頭が真っ白になりかけた。

「アルト！」

けれど、聞き慣れた声に怒鳴られて、すぐに意識が戻った。

「あ、アイリス!?!」

「どうやら、ヴォルフがカゴのみを食べさせて目を覚まさせたらしい。」

「バトルはまだ終わっていません！ あなたはポケモントレーナーでしよう！」

「アイリス……。そうだ、キテルグマ！」

フリーザーが倒されても、俺にはキテルグマがいる。

「キイイイッ！」

跳び上がるキテルグマ。

「ユキノオー、こおりのつぶてでキテルグマを援護するのです！」

「オオオオオッ！」

アイリスが繰り出したユキノオーがこおりのつぶてを放つ。

「こおりのつぶてを足場にするんだ、キテルグマ！」

「キイイイッ！」

向かってくるキテルグマにアシストパワーを放つシンボラーとネイティオ。対して、キテルグマはユキノオーの放ったこおりのつぶてを蹴り、空中を縦横無尽に駆け回って避ける。

「すごい事するね」

ロイドが感心したように言った。

その能天気さが彼の生来のものなのか、それとも単なる仮面に過ぎないのか。

「勝つのは俺達だ！ キテルグマ、アームハンマー！」

「キイイイッ！」

遂にキテルグマがネイティオとシンボラーを捉えた。強烈なアームハンマーが二体を同時に地面へ叩きつける。

「もう一度、アームハンマー！」

「キイイイッ！」

落下速度の加わった強烈なアームハンマーが命中した。

地面に無数の亀裂が走る。その中心でネイティオとシンボラーは目を回していた。

これでロイドの手持ちポケモンはすべて倒せた筈だ。

それなのに、ロイドの余裕は崩れない。

「なんで……」

「言っただろう？ 『そろそろ時間だ』って」

ロイドが微笑む。そして、俺達は彼の言葉の真意を直後に理解した。

一人、二人、三人……。

次々に白い装束を纏った人物達が現れ、俺達を取り囲んでいく。

「なるほど、時間を稼いだったっちゅうわけか」

ヴォルフが忌々しげに呟く。

「この人達は……」

「ヴリル教団の人間ですね」

気がつけば、尋常じゃない人数になっている。

「クマー」

「オオオオオ」

キテルグマとユキノオーが俺達を守るように前へ出た。

「おう、お前ら」

ヴォルフが小声で囁きかけてきた。

「わしが囷になるさかい、その間にキテルグマに乗って逃げい」

「何言ってるの!?! この数なんだよ!?!」

「ヴリルは過去に人を殺しています! 馬鹿な事を言わないで下さい

! それなら、わたしが!」

「ダメだ!」

俺は二人の前に飛び出した。

「アイリスの事も、ヴォルフの事も、俺が守る! いくぞ、キテルグマ

!」

「キイイイツ!!」

その直後だった。

突然、空から何かが降ってきた。

舞い上がる砂煙。その先に立っていたのは――、

「ちや、チャンピオン!」

「ザラク!」

アガリア地方最強のポケモントレーナー。チャンピオンのザラク
だった。

第七話 『チャンピオン・ザラクの力』

チャンピオン・ザラクの襲来に、ヴリル教団は選択を迫られた。本来ならば、撤退の一択のみ。『歩く災害』という二つ名は伊達ではなく、ザラクと銚を交えるという事は、天災に挑むようなものだ。

けれど、目の前には探し求めていた『アルトギア手記』の断片である『青の書』の情報を持つ少女がいる。その存在が彼らの脚を縫い止める。

そして、彼らの前に、更なる脅威が降り立った。

「ヴリル教団！ アタシの縄張りですいぶんと好き勝手な真似をしてくれたようだな！」

「器物損壊。誘拐未遂。殺人未遂。以上三件の現行犯として、あなた達を検挙します」

現れたのはアガリア屈指の女傑が二人。

一人はこのリール・シテイのジムリーダーにして、アガリア警察リール署の署長、ルーラー。

そして、もう一人はアガリア四天王の一人にして、アガリア警察の筆頭、ミリガン。

「恐れるな！」

けれど、彼らは踏みとどまる。撤退以外の選択肢などあり得ない状況で、戦いを選ぶ。

「我らの悲願は目の前だ！ 『青の書』の情報は、なんとしても持ち帰る！」

白い装束を纏う者達の中でも、おそらくはリーダー格なのであろう男が叫ぶ。

「我らの偉大なる神、ヴリル様にすべてを捧げよ！」

一斉にモンスターボールを取り出すヴリル教団の団員達。そして、ルーラーとミリガンも応戦する為に自らのモンスターボールを握りしめる。

一触即発の雰囲気にも誰もが息を潜め、開戦の時を待つ。水の音、石ころの転がる音、なんでもいい。些細な切っ掛けが一つあれば、この

均衡は崩れ去り、このメガロポリスで大規模な戦いの火蓋が切つて落とされる。

そして――、

「……うるさいから、全員黙っている」

ザラクの言葉と共に、全員の動きが停止した。数千規模のヴリル教団も、ミリガンとルーラーも、たまたま近くを歩いていた街の住民も、誰一人として動くことができない。指一本、視線一つさえ動かさない。

「フリーデイン。サイコフィールドを張っておけ」

「フリーデイン！」

いつからそこにいたのか、ザラクの頭上には、ねんりきポケモンのフリーデインが浮かんでいた。

かなしばり。それこそが、ミリガン達の動きを停止させた力の正体。その範囲も、規模も、縛りの強さも規格外過ぎるフリーデインのサイコパワーにヴリル教団の団員達は震える。

そして、それは一人だけ逃走を図ったロイドも例外ではなかった。すでに数百メートル離れた場所まで遠ざかっていた彼の動きもフリーデインは完全に停めている。

ザラクは恐怖に怯えるヴリル教団を尻目に、己がゲッコウガを貸し与えた少年の下へ向かう。

第七話『チャンピオン・ザラクの力』

「久しぶりだな、アルト。観ていたぞ、ユニオン大会！ 順調に強くなっているな！」

ポンと頭に手を置かれると、俺の体は自由を取り戻した。フリーデインが俺に対するかなりばりを解いたのだろう。

恐ろしかった。呼吸する以外のすべてを支配された感触。これがエスパーポケモンの力。

「アルト」

ザラクは小さく呟いた。

「ありがとう」

「え？」

ザラクはチラリとアイリスを見た。アイリスはかなしばりの支配下に置かれたままだ。

「さてさてさーて」

ザラクは未だ動けずにいるヴリル教団に視線を向けた。

「出る、フシギバナ」

「バーナ」

ザラクは服の袖を捲った。そこには、アギトと同じ腕輪が嵌められている。

メガストーンだ。

「フリーデン、サイコフィールドを通じて、伏兵を含めたすべてのヴリルをロックオンしろ」

「フリーデン！」

フリーデンの目が青白く輝く。そして、右手をフシギバナに向けた。

「いくぞ、フシギバナ。真の力を解き放て！　メガシンカ！」

「バーナ！」

フシギバナが光に包まれ、そして、メガフシギバナへメガシンカを遂げた。

「フリーデンからテレパシーでヴリルの位置情報を受け取ったな？」

「バーナ」

「よし、ハードプラント！」

「バーナ」

旅をして来て、その光景の異常さが前よりも分かるようになった。ヴリル教団の団員達が一人残らずハードプラントの蔭に捕われ、締め上げられている。

抵抗すら出来ずに、隠れ潜んでいたらしき団員も残らず意識を奪い取られた。

圧倒的過ぎる。これが、チャンピオン・ザラクの力。

「や、やあ、チャンピオン」

ただ一人、意識を刈り取られていない男、ヴリル教団幹部のロイドは怯えた表情でザラクの前へ運ばれてきた。

「やあ、こんにちは！」

爽やかな挨拶。だけど、俺からは見えないザラクの顔を見たロイドは青ざめた表情を浮かべた。

「そ、そうか……。ああ、そうか……。考えてみれば、当たり前か……。アハツ、アハハハハハ！」

ロイドは狂ったように笑い始めた。

「フリーデイン。さいみんじゅつ」

「フリーデイン！」

フリーデインはロイドの眼の前まで降りてくると、彼の頭に手を置いた。

そして、強大な力がロイドを包み込んだ。

何をしているのか、理解が出来ない。けれど、とても恐ろしい事だという事だけは分かる。

「あー……。あー……。？」

フリーデインが手を離すと、ロイドは虚ろな目で空を見上げ、ヨダレを垂らしながら「あーあー」と繰り返した。

「な、なにをしたの……。？」

「うん？　なに、すこし夢を見ているだけだ」

「夢……。？」

「ああ、ナザレは再び立ち上がってきた。なら、この男も大丈夫だろう」

そう言うと、ザラクは爽やかな笑顔を浮かべた。

「さて、帰るか」

「え？」

「折角だし、アルトと一回バトルしてみようかとも思ったんだけどな。今日は気分が乗らない。次に会った時はバトルしよう。その時までには、もっと成長しておけ」

「う、うん！　俺、もっと強くなる！　だから、今度バトルだ！」

俺の言葉にザラクは嬉しそうに笑った。

「おう！」

ザラクは俺の頭をポンと軽く叩くと、ギャラドスに乗って去って

いった。

「……あつ！　つていうか、みんなのかなしぱり！」

見送ってから気がついたけれど、「あーあー」言ってるロイド以外、全員が身動きを封じられたままだ。

どうしようかと頭を抱えていると、数分くらいして、ミリガンがかなしぱりを打ち破った。

「……ツク。さすがはチャンピオンのフリーデン。通常は技の一部を封じるだけの技なのに……」

「ミ、ミリガン！」

久しぶりに再会したミリガンに駆け寄ろうとすると、彼女は「ストップ！」と叫んだ。

「ごめん、近寄らないで！」

「え？」

若干のショックを受けていると、「ああ、違うのー！」とミリガンは慌てたように言った。

「その……、諸事情で一週間くらいお風呂に入っていないのよ」

ガツクリと肩を落としながら彼女は言った。

「ごめんね、アルトくん。事情も聞きたいし、後で改めて会いましょう。そうね、ポケモンセンターにいてくれる？」

「う、うん。あつ、でも、アイリスやヴォルフが……」

大勢のヴリル教団の団員やルーラーのように、二人もかなしぱりの支配下に置かれたままだった。

「たぶん、少し待ってれば自然と解除される筈よ。わたしが自力で解除出来る程度に抑えられていたから」

ホツとした。ザラクのフリーデンの力はあまりにもデタラメで、下手したら一生このままなのではないかと恐れていたからだ。

「ヴォルフの事はいいから、その子と一緒にポケモンセンターへ行っておいてちょうだい」

その言葉と共にルーラーとヴォルフがほぼ同時に動きを取り戻した。

「どっせー！」

「つらあ！」

二人共汗だらけだ。

「あんのクソチャンピオン！　なんで、アタシ達まで止めんだよ!？」
「落ち着きなさい、ルーラー。それよりも、オブリーブテーク図書館の方の確認を！」

「あ、ああ、了解」

ミリガンに命じられて、ルーラーは慌ててポケナビを起動した。

「ミリガン！」

上司に少し会釈した後、ヴォルフはミリガンの下へ駆け寄った。

「あの嬢ちゃん、ヴリルの標的にされとるんや。アルトのポケモンはキテルグマ以外戦闘不能になつとる。わしもポケモンセンターに同行してええか？」

「なつ、ゲツコウガも!？」

「え？　あ、ああ」

ミリガンは少し青ざめた表情を浮かべると、頷いた。

「わかったわ。お願い、ヴォルフ」

ヴォルフはうなずくと俺達の下へ戻って来た。

「ほな、一旦ポケモンセンターへ行くで。ポケモン達を休ませたらなアカン」

「うん！」

ヴォルフがアイリスを抱えると、俺はポケナビでバレットに連絡を取った。

『ああ、こっちは大丈夫だ。図書館に常勤の警察官と腕の立つポケモントレーナーが何人か居てな、一緒に蹴散らしてやったぜ!』

さすがはバレットだ。ホツとしながら、俺達はポケモンセンターへ向かった。

「なあ、アルト」

いつの間にか、兄ちゃん呼びから名前呼びに変わっていた。

「なに?」

「これをやる」

ヴォルフはポケットから小型の機械と数枚のディスクを渡してき

た。

「これは？」

「わざマシンや。そのディスクの中にはポケモンの技のデータが記録されとる。そのディスクをセットして、わざマシンをポケモンに向けると、ディスクに記録されとる技をポケモンに覚えさせる事が出来るっちゆう優れもんや」

「すごいー！いいの!？」

「ああ、もちろんや」

ヴォルフは言った。

「あの時も言ったけどな、アルト。これからの旅は楽しいだけのもんとちやう。ヴリル教団ちゆう巨悪と戦う事になる。せやからな、強うなれ。まずは、うちの署長、ルーラーからジムバッジを手に入れるんや」

「ヴォルフ……。うん！」

ロイドを追いかける途中でヴォルフに言われた。

ヴリル教団に狙われるアイリスを救けるなら、それはヴリル教団と敵対する事を意味すると。

「強くなるのは、前から決めていた事だから」

「さよか……。アルトなら、大丈夫そうやな」

ヴォルフは俺の頭をポンポンと叩いた。なんだか、今日はよく頭を叩かれる日だ。

「わしの連絡先、ポケナビに登録しとき。リール・シティからは離れられんが、何かあれば力になつたるさかい」

「ありがとう、ヴォルフ！」

第一印象はとんでもないアウトローだと思っただけけど、ヴォルフはすごく優しく、頼りになる大人だ。そのヴォルフが力になってくれる。すごく頼もしい。

しばらく歩いていると、ポケモンセンターが見えてきた。たった半日程度の出来事なのに、すごく長い間の事のように思えて、ドツと疲れが押し寄せてきた。

「おつとー」

崩れ落ちてしまった体をヴォルフは器用に受け止めてくれた。
「ええで、そのまま寝とき。よく頑張ったで」
俺はその言葉に甘える事にした。

第八話 『アルトギア手記』

あれから一夜が明け、ポケモン達も回復した。

「よく頑張ったぞ、ライチュウ」

「ライラーイ！」

バレットはライチュウのブラッシングを行っている。

「スピアー。気持ちいい？」

「スピー」

俺もスピアーのニードルを磨いている。

「あの一……」

キラキラと煌くニードルに満足していると、アイリスがマニユーラのブラッシングをしながら声を掛けてきた。

「ん？」

「どうしたの？」

「いやいやいやいや」

アイリスは首をブンブンと横に振った。

「どうして、なんにも聞かないんですか!？」

「興味ねーし」

バレットの一刀両断。アイリスが固まってしまった。

「ア、アルトは……?」

「え? 聞いて欲しいなら聞くけど?」

出来れば、もう少しスピアーのニードルを磨いて上げたかったけど、仕方がない。

アイリスに向き合おうと、何故か彼女は瞳をウルウルさせていた。

「ごんだけ興味無いんですか!!」

アイリスのばくおんぱ。危うくひっくり返るところだった。

「いろいろ気になる所がある筈ですよね!? 『アルトギア手記』の事とか! 『青の書』の事とか! ザラクがわたしをチラ見した事とか!

他にもいろいろ!」

「いや、チャンピオンのチラ見とか知らねーし。あと、歴史に興味がない」

そう言うと、今度はエレキブルのブラッシングを始めるバレット。

「いやいやいやいや、歴史に興味が無くてもですね!？」

「だから、そんなに話したいなら聞くんば」

「そんなローテンションな姿勢で聞かれるのは心外なんです！」

「別にローテンションってわけじゃないよ。ただ、アイリスがチャンピオンとの関係を隠しているのは知ってたからさ」

「え!? 何故!？」

「え? いや、ゲッコウガを見せた時の反応とかでいろいろ察しがついたっていうか……」

名乗り方とか、時々口走るフレーズとか、訳知り顔でチャンピオンの名前を呟く所とか、かなりあからさまだった気がする。

「むしろ、なんで驚かれてるのか、逆に不思議なんだけど……」

「ぐぬぬ……!」

「アイリス」

唸っているアイリスに声を掛ける。

「今回の一件で、俺はアイリスが何かを背負っている事を知った。だから、力になりたいと思ってる」

「アルト……」

「だけど、その為に根掘り葉掘り聞くつもりもない。チャンピオンとの事を隠したいと思ってるなら、それでいいよ」

「ど、どうしてですか?」

「だって、事情なんて関係ないもん」

俺の言葉にバレットも小さく笑った。

「どんな事情であれ、俺もバレットもアイリスの味方だよ。無理に話さなくても、君の力になってみせる」

「そういう事だ」

アイリスはポカンとした表情を浮かべて固まった。

とりあえず、話も終わった事だし、スピアーのニードル磨きに戻ろう。

「ほえええええ!？」

「どわ!？」

「のわ!?!」

いきなりのばくおんぱに俺とバレットはひっくり返った。

「キブル!?!」

「スピ!?!」

エレキブルとスピアーも驚いている。

「なんなんだよ!?!」

バレットが怒鳴ると、アイリスは真っ赤な顔で叫んだ。

「わ、わたしの乙女心がオーバーヒートを起こしちゃってるんです!」

「はあ!?!」

「なんですか!?! わたし、逆ハーレムでも築けばいいんですか!?!」

相変わらず、よく分からない事を言う子だ。

「ぎゃくはーれむって、なんだ?」

「知らない」

言った本人は床をゴロゴロと転げ回っている。

俺はバレットと顔を見合わせた後、黙ってニードル磨きの作業に

戻った。

「ス、スピ……?」

いいの? と問いかけてくるスピアー。問題ないと返しておく。

第八話『アルトギア手記』

「……というわけで!」

なにが、『というわけで』なのかはサツパリ分からない。俺達がポケモンのケアをあらかた終えた頃、ようやく我に返ったアイリスが何の脈絡もなく言い出した。

「わたしの話を聞いて下さい!」

「いいぞ」

「どうぞ」

「コホン」

咳払いをすると、アイリスは語り始めた。

『『アルトギア手記』。それは、空白の時代を埋める書物なのです』

「空白の時代……?」

バレットを見ても、彼は「さあ」と肩を竦めた。

「アガリアに纏わるすべての歴史書に共通する空白の事ですよ。今より二百年程前に起きたであろう出来事のすべてが、あまねく歴史書から抹消されているのです。カントー、ジョート、ハウエン、シンオウ、イツシュ、カロス、アローラなど、他の地方の文献からでもあります」

「そんな事、あり得るのか？ 他の地方の文献からも抹消するとか……」

「あり得ているからこそ、『アルトギア手記』は重要な意味を持っているのです」

アイリスは言った。

『アルトギア手記』は単なる歴史書ではなく、空白の時代に存在した技術、遺産についても記述されていて、その中には『最終兵器』の情報も含まれているのです」

「最終兵器って？」

「わたしも詳しい事は知りません。『赤の書』、『青の書』、『黒の書』、『白の書』の四つの断片を揃える事で初めて理解出来るものようです」

「なんだか、いきなり壮大な話になってきたな」

バレットは頬をポリポリと掻きながら呟いた。

「その最終兵器って、実在するものなの？」

「それも分かりません。ですが、お二人はアガリアの四大魔境を知っていますか？」

「知ってる？」

「おう！ メルカトも、その一つだろ」

メルカト。それはバレットの故郷の名前だ。

「そうです。竜の棲まう山脈・メルカト。地下大迷宮・ファイオレ。亡霊の港・バステイロ。そして、氷神の山・ジュラ。『アルトギア手記』の四つの断片はそれぞれ、その四つの魔境に封印されました。今はそれぞれ行方を晦ましていますが、その四つの魔境がそもそも『アルトギア手記』の為に人為的、あるいは超常的に作り上げられたものだと考えると、最終兵器の存在も眉唾物とは言えない筈です」

そう言われると、確かに『アルトギア手記』には特別な力があるような気がしてきた。

「そして、これが噂の『青の書』です」

そう言つて、アイリスはおもむろにモンスターボールからフリーザーを出した。

「あつ、フリーザー」

「おお、話には聞いてたが、マジでフリーザーだな。つて、フリーザーが『青の書』なのか？」

「違いますよ。フリーザー」

「キュイ」

フリーザーが片方の翼を広げると、そこから一冊の本が落ちた。

「フリーザーに持たせてたのかよ」

「一番安全ですからね！」

「ごもつとも」

落ちた本は『青の書』の名の通り、表紙が青かった。だけど、奇妙な事にタイトルや著者名がどこにも書かれていない。

「タイトルは無いのです。だからこそ、『青の書』とか、『赤の書』と仮称されているのですよ」

「なるほど」

「ちなみに、この『青の書』は氷神の山・ジユラに封印されていたものです。そして、このフリーザーこそが、その氷神の山の氷神なのですよー」

「だろうな」

「違ったら、逆にビックリだね」

「もつと驚いて下さいよー！」

「キュイ！」

フリーザーまで抗議している。寸前までドヤ顔を決めていた辺り、俺達が驚く事を期待していたようだ。

「まったく……」

恨みがましい眼差しを俺達に向けた後、アイリスは小さく息を吐いた。

「わたしがこの本とフリーザーを手に入れたのは、四年程前の事です」
アイリスは言った。

「その日、わたしは義理の兄になる予定の人とのんびりお餅を食べていました。お姉ちゃんがいつものように出かけていて、暇だったから引き止めてしまったんです」

アイリスの声はそれまでと一変して感情の色を失った。

「はやく帰ってこないかなーって、彼と話していました。あまりにも暇で、彼のゲッコウガに遊んでもらったりもしました」

その時点で、俺には彼女の言う義理の兄が誰なのか、薄っすらと予想がついた。

「いつもなら、とつくに帰ってきている時間になっても、お姉ちゃんは帰ってきませんでした。だから、義理の兄は姉を探しに行きました。わたしも心配になって、すぐに後を追いました」

とてもイヤな予感がした。

「お姉ちゃんはとても賢い人で、わたし達の村が神様と敬っていたポケモンからも愛されていました。いつしか、村の大人からは『氷神の巫女』なるカツコイイ二つ名まで付けられていて、わたしがその二つ名で呼ぶと真っ赤になる可愛い人でした」

アイリスの目からポタポタと涙が溢れ始めた。

彼女はヴリル教団に取り囲まれた時、囹になろうとしたヴォルフに言った。

『ヴリルは過去に人を殺しています！ 馬鹿な事を言わないで下さい！ それなら、わたしが！』

人を殺している。それは、誰の事だろう。

「雪山を必死に歩き続けました。いつもならお姉ちゃんが傍に居ないと猛烈なふぶきとぼうふうに阻まれて歩けない道も不思議と通れて、そして、そこに辿り着きました」

彼女が事あるごとにヴリルを敵視していた理由。点と点が結びついていってしまう。

「お姉ちゃんはいました。義理の兄になる筈だったザラクの腕の中で……、まるで、眠っているかのように……」

「殺されたのか？」

バレットは俯きながら問いかけた。

「……ええ、そうです。ヴリル教団は氷神の山に封印された『青の書』を手に入れる為にフリーザーを襲撃し、その戦いに巻き込まれたお姉ちゃんは……」

俺はフリーザーを見た。まるで彫像のように動かず、ポロポロと涙を零し続けている。

「だから、わたしはお姉ちゃんを死に追いやった、十四人の幹部達を……」

拳を握りしめるアイリス。

「要するに、アイリスは復讐がしたいの？」

「そうです。それが、わたしの事情です」

固い意志の籠められた言葉。本当なら、他人には絶対に話したくないだろう事を話した理由はおそらく……。

「そっか、頑張れよ」

そう言うと、バレットは近くの雑誌を読み始めた。

「え？ あ、あの……」

アイリスはバレットの反応に戸惑っている。

「アイリス」

「は、はい」

俺は言った。

「頑張ってね」

俺はヴォルフに貰ったわぎマシンの説明書を読み始めた。

「え？ いや、ちよつと？」

「ああ、一つだけ言っとくぞ」

バレットはそっぽを向きながら言った。

「オレは今日、また強くなれた」

アイリスは困惑している。

「ヴリルの連中は良い踏み台になる。どうせなら、幹部だけと言わず、ガンガン狩りに行こうぜ」

バレットの言葉の意味をゆっくりと呑み込んでいくアイリス。

「……いいんですか？」

「いいものにも、さつき言ったよ？ 事情はどうでもいいって」

「アルト……」

「俺達は強くなりたい。その為に、もつともつとバトルしたい！ アイリスと一緒になら、これから先、バトルに不自由する事は無さそうだね」

「そういうこつたな」

「アルト……。バレット……」

俺達はそっぽを向いた。どうい理由であれ、女の子に泣かれるのはちよつと苦手だ。

第九話 『仲間』

リール・シティを震撼させたヴリル教団の事件。ネットのニュースや新聞、雑誌でも話題になっている。俺達が宿泊しているポケモンセンターの前にはリール署の警察官が交代で警護に当たっている。

あれから、一週間が経った。

第九話 『仲間』

一週間前の事だ。四天王・ミリガンとリール・ジムのジムリーダー・ルーラーが揃ってポケモンセンターにやって来た。

『青の書』を出せ！　そして、金輪際、お前達がこの街から出る事を禁じる！』

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「ツハ！　何を言い出すかと思えば、ふざけんじゃねーぞ！」

真っ先にバレットが噛み付いた。けれど、ルーラーは歯牙にも掛けなかった。

「黙っている。これは決定事項だ」

有無を言わさぬ言動に反骨心を抱く事さえ許されない、獅子や龍の如き眼光。

「ルーラー。少しは言い方を考えなさい」

「黙ってる、筆頭。アンタとヴォルフの言い分は聞いた。だがな、ヴリルの組織力を甘く見過ぎだ！　二千人を超す団員を捕縛しても、ヤツらは微動だにしやがらねえ。おまけに、下っ端でさえ、いくら尋問しても情報を吐き出さねえ。敵ながら天晴ってヤツだ。そんな連中に狙われているガキを放逐するなんざ、正気の沙汰じゃねえ！」

まるで、丸裸でバンギラスの前に立っているかのようだ。頭の前から爪先まで、完全に硬直してしまっている。

「チャンピオンが認めた子よ。抑えつけて、立ち止まる子だと思うの？」

「アタシの街シマに入ったからには、このガキ共はアタシが守る！　筆頭だろうが、このガキ共自身だろうが、誰にも邪魔はさせねえぞ！」

ルーラーは俺達を見下ろした。

「この街から一步でも出てみる。足の骨を砕いてでも引き戻すぞ」
それが決して冗談ではない事を俺達は本能で悟った。この女性ヒトは
やると言ったらやる。それがどんなに理不尽で、非人道的な行為で
も、迷う事なく実行する。出会って数分も経っていないのに、そう確
信させるナニカが彼女にはあった。

「姉御！」

入り口から誰かが入って来た。聞き覚えのある声だ。

「ヴォルフ。何の用だ？」

「アルトは気合のごっついヤツなんや！　せやから、一回でええ、チャ
ンスを与えたってくれへんか!」

「却下だ！　何度言わせる気だ、ヴォルフ!!」

空気がビリビリと震える程の咆哮。無意識の内に呼吸が荒くなっ
ていく。

「何度だって言います！　一回でええんや！　チャンスを！」

「ヴォルフ!!!」

ルーラーは、その細腕のどこにそんな力があるのか、片腕だけで
ヴォルフの体を持ち上げた。

「テメエ、ガキ共の命にかかわる事だって、分かってねえのか!?　粹も
気合も悪くはねえ！　だがな、それで見過ごせる域を越えてんだよ
！」

「トリプルバトルや！」

ヴォルフは叫ぶように言った。

「ジムリーダーとしてやない。『バトルタワーの支配者』ルーラーとして、この
三人とバトルするんや！　それで、この三人がアンタを打ち破れば、
ヴリルだろうが、誰にも負けん！　せやろ！」

「アタシの本気を打ち破る？　この三人が……？」

ルーラーは困惑の表情を浮かべ、ヴォルフから手を離れた。

「ヴォルフ。テメエ、そこまでのトレーナーだと思ってるのか？」

「せや！　わしが見込んだトレーナーなんや！　頼んます、姉御！」

ヴォルフはルーラーに土下座をした。何度も頭を下げるヴォルフ。

「ヴォルフ……」

俺は拳を強く握り締めた。その痛みで体の自由を取り戻して、ヴォルフの横で同じように頭を下げた。

「お願いします、ルーラー！ 俺達にチャンスを下さい！」
すると、バレットとアイリスも俺達の隣で頭を下げた。

「お願いします、ジムリーダー」

「頼む！ オレはここで立ち止まるわけにはいかないんだ！」
しばらくすると、ルーラーは深々と息を吐いた。

「ヴォルフ。テメエが他人の為に頭を下げたのは、あの日以来だな」
ルーラーは言った。

「いいぜ、一回だけだ。お前に免じて、一回だけガキ共にチャンスを入れてやる。一週間もあれば街も安定するだろう。その後で、お前が言った条件のバトルをしてやる。アタシの本気を打ち破れるなら、幹部クラスだろうと遅れは取らんだろう」

「姉御！」

ルーラーに飛びつくヴォルフ。蹴り飛ばすルーラー。

「だが、ハンデは無しだ。意味がないからな」

そう言うと、ルーラーは俺達に背中を向けてポケモンセンターから出て行った。

「……とんでもない事になったわね」

ミリガンが言った。

「ヴォルフ。ルーラーの強さはよく知っている筈よね？」

「あつたりまえやー！」

仰向けに寝転がりながらヴォルフは言った。

「バトルタワーのレコードホルダー。その名にちなんで付けられた二つ名が『バトルタワーの支配者』^{ルーラー}や。わしらのチームを一人で潰した姉御の勇姿、今でも漏らしそうになるで」

バトルタワー。俺が最初に向かう筈だったオーヴェル・シテイにある施設だと、以前エルフランから聞いた。

力を求めるポケモントレーナーが集う塔。そのレコードホルダー。

「ほれ、見てみい」

ヴォルフはニヤリと笑いながら俺を見た。

「普通の奴なら縮こまるところや。せやけど、笑つとる」

「……そういう子よ。アルトくんはわたしに負けた事を悔しがることが出来る子」

ミリガンが微笑む。

「そうね。決まってしまったものは仕方がないわ」

彼女は俺達を順番に見つめた。

「ハッサム！ キリキザン！ グソクムシヤ！」

ミリガンはモンスターボールから三体のポケモンを繰り出した。

「ハッサ！」

「キザッ！」

「……シヤ」

突然の事に戸惑っていると、彼女は言った。

「この子達を置いていくわ。トリプルバトルは個々の力だけじゃなく、チームワークと戦略も重要よ。一週間は短いけれど、準備を整えておきなさい」

「ミリガン、ありがとう」

「あ、ありがとうございます！」

「ど、ども」

ミリガンはいつもの見惚れてしまいそうになる笑顔を浮かべると、「がんばってね」と言っただけで去って行った。

否応にも気合が入る。

「ハッサ！」

以前、スピアーにかけぶんしんを伝授してくれたハッサムが近寄ってきた。

「ハッサム」

「ハッサ」

ハッサムは右腕のハサミを閉じた状態で向けてきた。握手を求めているのかと思ったけど、どうやらモンスターボールを指し示しているようだ。

「えっと、スピアーに会いたいの？」

「ハッサ！」

「う、うん。出て来て、スピアー」

モンスターボールからスピアーを出すと、ハッサムはスピアーになにやら「ハッサハッサ！」と語りかけ始めた。何を言っているのかわからないけど、スピアーは「スピ！」と嬉しそうに応えている。

「キザ……」

「シャ……」

キリキザンとグソクムシャはなにやら呆れたような視線をハッサムに向けていた。

何を話しているのか非常に気になる。

「アルト」

ヴォルフが話しかけてきた。

「勝手にいろいろ進めてすまん。せやけど、実際問題、これから旅を続けるとなればヴリルの幹部との戦いは避けられん。せやから、今この瞬間から強うなれ」

「ヴォルフ……」

「ミリガンも言つとつたが、トリプルバトルはチームワークや。わしとダブルバトルをした時の事を思い出してみい。あの時、お前らが負けたんはチームワークがなつとらんからや」

ヴォルフとのバトル。思い出すだけで悔しさが胸を満たしていく。

チャンピオンの圧倒的な力を目の当たりにして、痛感した。俺はゲッコウガの力を一欠片も発揮させてやる事が出来ていない事を……。

「チームワークや！」

気づけば俯いていた俺にヴォルフは言った。

「当たり前の話や。一人のトレーナーが自分のポケモン二体で戦えば、それ単純に戦力二倍になる。せやけど、二人のトレーナーがそれぞれ一体ずつバラバラに戦ったら、そら一かける一で一のまんまや！ 足し算にもならん！ 下手したら互いの足を引っ張って、マイナスになってまう事もある。せやけどな！」

ヴォルフは言った。

「もし、三人のトレーナーがきつちり息を合わせられれば、そら三倍ど

ころやないで」

「どういう事……?」

「ええか、一人が三体に指示を出すという事は、三つの戦場を同時に把握して、そこから三つの最適解を瞬時に判断せなアカン。せやけど、戦場を把握する目が六つあれば、最適解を導き出す頭が三つあれば、どうや? 三かける三かける三やで! すごい事が出来そうな気がするんか?」

「する!」

俺はアイリスとバレットを見た。

ユニオン大会で戦った二人。もし、ヴォルフの言うように俺達の手を掛け算出来れば、どんな事が出来るんだろう。考えただけでワクワクしてくる。

「おお、アルトの目が燃えていますよ!」

「ツハ、単純なヤツだ。だが、悪くない!」

俺は拳を突き出した。

「やろう、掛け算!」

「ムフフ、三乗パワーでルーラーをケチヨンケチヨンにしてやりませか!」

「燃えてくるじゃねーか!」

アイリスとバレットも拳を突き出す。三つの拳をぶつけ合い、俺達は気合を入れた。

「勝とう、ルーラーに!」

「もちろんです!」

「やってやるぜ!」

俺達はミリガンが残した三体のポケモンと向き合った。

「これから一週間、よろしくお願いします!」

俺達が頭を下げると、ハッサム、キリキザン、グソクムシは笑みを浮かべて頷いた。

「ハッサ!」

「キザンツ!」

「シャアツ!」

それからの一週間、朝も、昼も、夜も、俺達はとにかくバトルを繰り返した。

それぞれが繰り出すポケモンを変え、戦略を考え、わざマシンにも手を出した。

時には俺がバレットのレントラーに指示を出し、バレットがアイリスのユキノオーに指示を出し、アイリスが俺のスピアーに指示を出したりもした。

そして、今日が約束の日。準備を整えてポケモンセンターを出る。目指す先はリール・シテイの中心、リール・ジムだ。

第十話 『VSルーラー』

今から二年前、アガリア地方は大きな変革を迎えた。

切っ掛けは一人の少年。彼は他の追従を許さない圧倒的な力でポケモンリーグを勝ち進み、当時の四天王とチャンピオンを蹴散らした。

歴代最高のチャンピオンと讃えられた前チャンピオン・ゼノンは後継者の出現を喜び、かねてからの夢だったポフレ・スクールを開校した。ゼノンの片腕として、各地の大会や催し物を企画運営していた元四天王・サリヴァンもゼノンに付いていき、四天王を辞した。

グランドフェスティバル最多優勝回数を誇るアガリアのスター、元四天王・ヴェガも敬愛するゼノンの引退を受け、コンテストに専念する事を決めた。

アガリアの四大魔境の一つ、メルカトの守護者であるメルカト・シテイの元ジムリーダー・ナザレは先日まで行方を晦ましていたが、突如姿を現し、現在はフィオレ・シテイのジムリーダー・ドロシーと共に行動している。

アガリア王家の末裔であり、氷神の山・ジユラを囲むアネト山脈の門番を務めていたカルネ・シテイの元ジムリーダー・レギオンは娘のシエルにすべての財産を譲渡して、己を鍛え直す為に他の地方へ旅に出ってしまった。

アガリアと世界を結ぶ貿易港、ロヴェリア・シテイの元ジムリーダー・クラウドスはアガリア政府の要請により、ドラゴン・ポケモンの巣窟と化したメルカトを封印する任務に従事している。

そして、ポケモン研究者であり、オブリビテーク図書館の司書を兼任していた、ここリール・シテイの元ジムリーダー・ヴェルトーゼは年齢と技量の衰えを理由に引退を表明した。

チャンピオンを含め、影響力の大きい人間が七人も同時に職を辞してしまった。クラウドスは仕方がないにしても、これでは立ち行かない。そう判断したアガリア政府は即座に新たな四天王、及びジムリーダーを選定した。

アタシもその一人。バトルタワーのレコードホルダーとして、それなりの知名度と実力を有していた点からミリガンにスカウトを受けた。

「すべてを変えた男。アイツに認められたガキか……」

何度も頭を下げるヴォルフの姿が脳裏に蘇る。

アタシがリール・シテイに赴任して来た時、真っ先に行つた害獣駆除。

その時に出会つた男。リール・シテイを中心とした巨大都市郡全域に根を張る愚連隊のリーダー。

害獣の中に一匹だけ紛れ込んでいた気高い狼。アタシはヴォルフだけを拾い上げようとした。ジムの運営には、有能な人材が必要だったからだ。

あの時も、ヴォルフは他人の為に頭を下げた。

『こいつら、他に行き場がないんや！ 頼む！ 切り捨てんでくれ！』
何度も地面に頭を擦り付けて懇願する姿は、とても愚連隊のリーダーとは思えなかつた。プライドや地位よりも、迷うことなく仲間を取る姿にアタシは負けた。

ミリガンに頼み、立ち上げたリール署。荒れた街の治安を守るためというのは建前だ。

「……ヴォルフの野郎」

理性的に考えれば、チャンスなど与えるべきじゃない。それほど、ヴリル教団は強大かつ残忍な組織だ。力があればいいというものでもない。大人の悪知恵に翻弄され、怖い思いや、悲しい思い、辛い思いをするかもしれない。下手をすれば命を落とす可能性もある。

この街に居る限り、アタシとヴォルフが守つてやれる。

「負ける訳にはいかない」

チャンピオン、ミリガン、ヴォルフ。これだけの連中に認められてある時点で、あのアルトというガキには何かがある。万が一の可能性じゃない。アタシはこのバトルを勝つか負けるか分からない真剣勝負として戦わなければいけない。

「来たな……」

バトルフィールドに立ち、彼らを出迎える。

三人のガキ共。コイツらの事は、アタシが守る！

第十話『V S ルーラー』

ルーラー・ジム。シャンティ・ジムとは違って、極めてシンプルな内装だ。植物が生えているわけでもなく、水場があるわけでもない。地面が土である事以外、普通の体育館のようだ。

「来たな、ガキ共」

まるで、龍の住処に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚える。

ジムリーダー・ルーラーはモンスターボールを握り締めながら俺達を鋭い眼光で睨みつけた。

「先日言ったとおりだ。手加減は一切しない」

それは文字通りなのだろう。

「望むところだ！」

バレットが叫んだ。

「行きますよ、二人共！」

アイリスがモンスターボールをホルダーから外す。

「絶対に勝つ！」

俺も気合を入れた。

三人同時にモンスターボールを投げる。

「ライチュウ！」

「フリーザー！」

「ゲッコウガ！」

繰り出したのはライチュウ、フリーザー、ゲッコウガの三体。

「フリーザー。ジュラ・マウンテンの氷神か……」

ルーラーの視線はフリーザーで少し止まった後、ゲッコウガ、ライチュウの順に移動した。

「いくぜ、ルカリオ！ カイリキー！ ニョロボン！」

「ワウ！」

「リツキー！」

「ニョロツ！」

やはりというか、かくとうタイプのエキスパートである彼女のポケ

モンはかくとうタイプで統一されていた。

「いくぞ、ルカリオ。メガシンカ!」

「え?」

「はあ!?」

「なっ……」

ルーラーはいきなりルカリオをメガシンカさせて来た。

「言った筈だぞ。手加減は一切しない」

ルーラーはバトルフィールドの外周にある観客席の方を見た。そこには審判用のスペースがあり、そこにヴォルフがやってくる。

「ほな! わしが審判を務めさせてもらおうで! これより、ジムリーダー・ルーラーと、チャレンジャー・アルト、バレット、アイリスの変則バトルを始めるで! バトルスタート!」

バトルが始まった。

「カイリキー、じしんを起こせ! ルカリオはわるだくみ、ニョロボンはハラダイコ!」

「飛び上がるのです、フリーザー! そして、ふぶき!」

「ライチュウ、こっちもわるだくみ!」

「ゲッコウガ、みずしゆりけん!」

じしんで俺達のポケモンの足を止め、その間にパワーアップを図るつもりだろうが、そうはさせない。フリーザーのふぶきの中をゲッコウガのみずしゆりけんが飛んでいく。凍結し、ふぶきの風圧によって速度を上げたみずしゆりけんは狙い変わらずにルカリオとニョロボンへ飛んでいく。

「ストーンエッジ!」

「リッキー!」

カイリキーが地面を蹴りつけると、地面からするどい岩の刃が飛び出した。

岩の刃は氷結したみずしゆりけんを弾き、そのままふぶきに対する壁として立ちはだかった。

「ただ、おかげでじしんが止まった。」

「しんぞく!」

ライチユウが走り出す。

「しんそくで迎え撃て、ルカリオ！」

「ワウツ！」

「ねこだまし！」

「ライト！」

「つばめがえし！」

ライチユウのねこだましで怯んだメガルカリオに、ゲツコウガがヴォルフに貰ったわざマシンで新しく覚えたつばめがえしを放つ。

「インファイト！」

「ニヨロ！」

そこにニヨロボンが割り込んできた。

「させません！ れいとうビーム！」

「キュイ！」

フリーザーが新たに覚えたれいとうビームでニヨロボンの攻撃を阻んだ。

その間にゲツコウガのつばめがえしがメガルカリオを捉えた。

「一気に倒せ！」

「クロスチョップ！」

「しんそく！」

止めようとするカイリキーをライチユウが抑える。ここで何としても一匹落とす。

「決める、ゲツコウガ！」

「コウガアツ！」

「ルカリオ、インファイト！」

「ワウウウツ!!」

「コウガアアツ!!」

インファイトとつばめがえしのぶつかり合い。
「負けるな、ゲツコウガ！ 絶対に勝つんだ！」

「コウガアアアアツ!!!」

ゲツコウガの攻撃速度が上がっていく。

「ニヨロボン！ きあいパンチで大地を砕け！」

「なっ!?!」

「ニヨロ!」

カイリキーのじしんによって緩んでいた大地が、ハラダイコによって極限まで攻撃力を高められたニヨロボンのきあいパンチによって砕け散る。

「ライチユウ! ゲツコウガの足元へしんそくだ!」

「ライツ!」

「フリーザー! ニヨロボンとカイリキーをぼうふうで囲い込むのです!」

「キュイ!」

「ゲツコウガ、ライチユウに乗って攻撃を続行だ!」

「コウガアツ!!」

足場を失い、仕切り直しになり掛けたゲツコウガとルカリオの接近戦をライチユウが無理矢理立て直させた。

「畳み掛ける!」

「コウガアアアツ!!!」

「ルカリオ、はどうだんを炸裂させろ!」

「ワウツ!」

とんでもない事をする。メガルカリオははどうだんを至近距離で炸裂させ、無理矢理ゲツコウガとの間に距離を作り出した。

「れいとうビーム!」

「ニヨロツ!」

頭上から声と共にれいとうビームが降り注ぐ。ぼうふうに閉じ込められていた筈のニヨロボンがいつの間にか天井に張り付いていた。一緒に閉じ込められたカイリキーが投げたのだろう。

「フハハハハ! その状態では避けられませんよ! フリーザー、ぜったいれいどです!」

「キュイイイイイツ!」

「天井を突き破れ、きあいパンチ!」

「ニヨロ!」

「なんですと!?!」

ぜったいれいどが直撃する寸前、天井に穴を空けて回避するニョロボン。

「アリですか!？」

思わず審判のヴォルフに確認を取るアイリス。

「アリや！」

「ええい、ならば！ フリーザー！ 天井全体にぜったいれいど！」

「キュイ！」

フリーザーが天井を凍てつかせていく。

「フハハハハ！ これでニョロボンは帰ってこれませんよ！ 完全勝利です！」

直後、天井が崩落した。

「キュイ!？」

落ちてくる天井に慌てるフリーザー。

まるで流星群の如く降り注ぐ瓦礫。だけど、慌ててはいけない。この状況はおそらくデザインされたもの。その証拠に、カイリキーとメガルカリオは上を見ていない。こつちが目を逸らせば、形勢は一気にルーラーの方へ傾いてしまう。

「ゲッコウガ！」

デザインされた策略。その策略がハマっている内は、逆に自分達の行動を縛ってしまう。

つまり、今こそ必殺技を切るタイミングだ。

「真上に向かってフルパワーのハイドロカノン！」

「ゴウガアアアツ!!!」

これまで見てきたゲッコウガのハイドロカノンとは違う。正真正銘、チャンピオンのポケモンとしてのフルパワーを発揮した。落ちてくる天井ごと吹き飛ばし、龍神の如く天へ舞い上がるハイドロカノン。

時間にして、一秒。けれど、確実にルーラーの視線はハイドロカノンへ向かった。

「ボルテッカー！」

その一秒を見逃すバレットじゃない。

「ライライライライライライライライライライツ!!!」

いかすち
雷を纏い、猛スピードでカイリキーに襲いかかるライチュウ。

「クロスチョップ!!」

「リ、リツキー!」

「おせえよ、なあ! ライチュウ!」

「ラーイツ!!!」

カイリキーの四本の腕が繰り出すクロスチョップをすり抜け、ライチュウのボルテッカーが急所に命中した。ライチュウと共に吹き飛んでいくカイリキー。

「つばめがえし!」

一度体勢を崩せばこっちのものだ。ルーラーがメガルカリオに指示を下す前にゲッコウガがメガルカリオとの間の距離を詰めた。

「見つけた! ぜったいれいど!」

同時にアイリスが壁に張り付くニョロボンを見つけた。ハイドロカノンは命中しないように撃った。けれど、余波だけで相当なダメージを受けたようだ。

取った!

俺達は確信した。ボルテッカーをまともに受けたカイリキーは麻痺状態に陥り、ニョロボンはぜったいれいどを回避する余力がない。メガルカリオも、一騎打ちならゲッコウガが勝つ。

「……ルカリオ、見切れ」

「ワウ」

何が起きたのか、すぐには分からなかった。ゲッコウガの攻撃がメガルカリオの体を突き抜けたように見えた。

けれど、実際には違う。高速のスウェイだ。あまりにも速すぎて、ゲッコウガは残像を攻撃してしまった。

「しんそく」

「コウガツ!」

気づいた時、ゲッコウガはメガルカリオによって吹き飛ばされていた。

「カイリキー、ニョロボン、戦闘不能!」

ヴォルフが二体の戦闘不能を宣言しても、ルーラーとメガルカリオの表情はピクリとも動かない。さっきまでとは明らかに様子が違う。

「油断するなよ、二人共」

「ええ、一体になった事で明らかに集中力が上がっています」

ルーラーは手加減なしだと言っていた。だけど、トリプルバトル自体が手加減になっていたんだ。よく考えてみれば、公式の大会でもトリプルバトルは非常に珍しい。おそらく、ルーラーもトリプルバトルは不得手だったのだろう。

ここからだ。リール・ジムのジムリーダー・ルーラーの本領は！

「勝つよ、みんな！」

「おう！」

「はい！」

「コウガッ！」

「ライライ！」

「キュイツ！」

エピソード『約束』

ヴォルフは審判席で固唾をのんでいた。一対三の状況。こうなる事を見越して、ルーラーにトリプルバトルを提案した。

氷神と謳われたジュラのぬしポケモンとチャンピオンのゲッコウガ。ポケモンのレベルだけを見るなら、むしろ、ルーラーの方が不利だ。あの二体が自らに掛けている制限を解けば、それこそ、止められるポケモンは限られている。

それでも、一対一ならばルーラーが勝つ。トレーナーとしての力量、共に戦った時間の長さ、そして、勝利に対するモチベーション。なにもかもをルーラーが勝っている。

バトルタワーはシングルバトルとダブルバトルのみ。トリプルバトルは存在しない。トリプルバトルはルーラーにとつても不慣れなルールであり、それ故にゴリ押しが効いた。

天井全体に対するぜったいれいど。天まで届くハイドロカノン。その二つに意識を割いてしまうというミスを誘発させる事が出来た。「……アルトをここで立ち止まらせるわけにはいかんのだ」

ヴォルフはこれまで様々な人間を見てきた。悪い人間、良い人間、面白い人間、つまらない人間、それこそ多種多様な人間を見てきた。チャンピオン・ザラクは、はじめて見るタイプの人間だった。

直接見たのは、一週間前の事件の時から初めてだったが、確信を持った。アレはヴリル教団どころではない。それよりも圧倒的に危険な、そして、いざれ確実に爆発する爆弾だ。止められる人間がいない事が一層恐怖を掻き立てる。

ヴォルフとしても、本音を言えばルーラーに賛成だった。子供を危険に晒す事は慚愧に堪えない。

けれど――、

「アルトなら、届く。チャンピオンの領域まで」

これまで見てきた人間の中で、アルトと同じ空気を持つトレーナーを一人知っている。

おそらく、ザラクも同じように思ったのだろう。だから、ゲッコウ

ガを託した。

「四天王・ミリガン。あの女と、よう似とるからな」

エピソード

「フリーザー、上空にぼうふうですー！」

「キューー！」

一対三となった戦況。最初に動いたのはアイリスだった。

フリーザーが狙うもの、それは上空に舞い上がり、そして降りてきたハイドロカノンの水。

ぼうふうによって攪拌され、冷やされた膨大な水は雨雲となって空を覆い隠した。

「……良いチームワークだな」

ルーラーは言った。

「友情つてのはいいもんだ。かけがえがない、大切なもんだ」

心が沸き立つ。ここからなんだ。ジムリーダー・ルーラーの本気は！

「それを壊そうとしやがったのがヴリルだ！ あのクス共はアガリア警察が必ず駆除する！ だから、それまでは絶対にこの街から出さない！ ルカリオー！」

「オオオオオオオッ!!!」

ルカリオの体から波動が迸る。降り始めた雨がメガルカリオだけを避けているようだ。

「……メガシンカはトレーナーとポケモンの絆がなによりも重要なです。これまで、三体にそれぞれ割かれていた意識がメガルカリオに統一された事で、いよいよメガシンカの真のパワーが発揮されます。気を引き締めて下さいー！」

止まっていた時が再び動き出す。

「しんそく」

ルーラーの指示と共に、ルカリオの姿が掻き消えた。

「ワウッー！」

見えないどころか、反応すら出来なかった。

気づけば、ルカリオはライチュウの目の前に立っていた。

「ああ、そう来ると思ったぜ！」
バレットが叫ぶ。

「ライツ！」

このバトルで出すポケモンを選んでいる時、バレットは言った。

『アルトはゲッコウガ。アイリスはフリーザーを出せ。それ以外のポケモンだと勝ち目がない』

ジムリーダーに選ばれる程の超級トレーナー。そのポケモンと本気でバトルするなら、こちらも超級ポケモンを使うしかない。

本音を言えば、スピアーと戦いたかった。だけど、相性の面でも、レベルの面でも、スピアーでは勝てない。

その事を認めるのに、三日も掛かった。悔しくてたまらなかった。だけど……、

『オレはライチュウでいく』

レントラーで行きたかった筈なのに、バレットはライチュウを選んだ。

わざマシンを最初に使ったのもバレットだ。

『ライチュウはオレのポケモンの中でも一番新しい仲間だ。だから、ゲッコウガやフリーザー、ルーラーのポケモン達と比べれば、レベル的に大きく劣る。だから……』

ルーラーが追い詰められた時、戦況を覆す為に真っ先にライチュウを狙ってくる。

その読みは的中し、ライチュウはメガルカリオがしんそくを使った時点で、そのわざを使っていた。

「ワウツ?!」

ねこだまし。怯んだ隙に、ライチュウは体をメガルカリオへ擦り付けた。

「インファイト！」

「ワウワウワウワウツ!!!」

炸裂するメガルカリオのインファイトによってライチュウは戦闘不能になった。

けれど、メガルカリオはライチュウの体を伝う静電気によって麻痺

状態になった。

「……後は頼むぜ」

ライチユウを戻しながら、バレットは言った。

彼の本来のバトルスタイルはボルトチェンジによる交代戦法。感情的に見えて、実は策略家だ。ユニオン大会で、もしも俺がスピアーを出していたら、彼はレントラーを一番手に選んで、得意の戦法を完全な形で使いこなしていた筈だ。ライチユウをキテルグマで倒せていなければ、あの試合で俺は負けていたかもしれない。

次に繋げるバトル。全員の力を合わせるバトル。バレットは、そういうバトルを体現している。

このバトルを、バレットと一緒に戦えて良かった。

「フリーザーに乗れ、ゲッコウガ!」

「飛翔しなさい、フリーザー!」

麻痺で動きが鈍っているメガルカリオは咄嗟にはどうだんを放ってきたが、ゲッコウガとフリーザーは容易く回避した。

数度に渡るゲッコウガとの攻防。至近距離でのはどうだんの炸裂。そして、麻痺。

どんなに優れたトレーナーでも、この状況をひっくり返す事なんて出来ない。

その筈なのに、ルーラーとメガルカリオが放つ覇気は些かも衰えていない。

「ルカリオ! 波動を解き放て!」

「ワオオオオオオン!!」

烈風が巻き起こる。

「キュイ!」

「コウガアツ!」

フリーザーとゲッコウガが何かを感じ取った。声に焦りが滲んでいる。

あの二体を動揺させる何かが来る!

「ゲッコウガ、ハイドロカノン!」

「コウガアツ!」

フリーザーに乗ったまま、ゲッコウガがハイドロカノンを放つ。

「ワオオオオオオッ！」

目を疑った。空からのハイドロカノンは重力の影響を受けて、よりスピードを増していた。それでも、回避される事は想定内だった。

想定外だったのは、紙一重で回避したメガルカリオが、ハイドロカノンを足場にフリーザーとゲッコウガの下まで駆け上がってきた事だ。

「ゲッコウガ、つばめがえし！」

「コウ——ッ」

「ワオオオオッ！」

ルーラーは指示を出していない。それなのに、メガルカリオは俺の指示を聞いたゲッコウガがつばめがえしの体勢に入る前にインフアイトを繰り出していた。

「波動だ！」

バレットが叫んだ。

「鍛え抜かれたルカリオは波動で一キロ先の人間やポケモンの心を読むむ！ まずいぞ、アルト、アイリス！」

ルーラーは指示を出していないわけじゃない。思考した時点でルカリオに伝わっていたんだ。そして、俺達やゲッコウガ達の思考も読まれてしまっているとしたら……。

「そっ、それが出来るなら、どうして今まで!？」

「トリプルバトルだったからだ！ 六体のポケモンが入り乱れている間は思考を読む力が逆に負荷を掛けてしまう。だが、今は三体が戦闘不能になって、ノイズが減ったんだ！」

バレットとは対極のバトルスタイル。ルーラーとメガルカリオは、一人の時こそ最強になる。

「ゲッコウガ！」

フリーザーの背中という極限の戦場で、ゲッコウガはメガルカリオの猛攻に押されていた。

ゲッコウガの攻撃は当たらず、メガルカリオの攻撃は回避した筈なのに当たってしまう。

これがどうポケモン・メガルカリオのチカラ。

「フリーザー！ 二体とも落としてしまいなさい！」

「キュイ！」

ゲッコウガを落とさないようにしていたフリーザーが急旋回した。

「キュア!?!」

けれど、それは失敗だった。急旋回によって動きの止まったゲッコウガに対して、メガルカリオはその指示が出る事と、その指示によってフリーザーが取る行動を既に知っていた。知っていたから、完璧な形で急所を撃ち抜く事が出来た。

空中で戦闘不能になるフリーザー。もう、ゲッコウガしか残っていない。

「ゲッコウガ！」

アイリスがフリーザーをボールに戻した瞬間、叫んだ。

読まれているなら、それでも構わない。

「地上に向かってフルパワーのハイドロカノン！」

「コウガアアアアッ！」

「ワウツ！」

メガルカリオは俺の指示の途中で既にはどうだんを放っていた。けれど、ゲッコウガははどうだんをまともに受けて尚、俺の命令を実行した。

ニヨロボンが砕いた大地を極大のみずエネルギーが蹂躞する。

そして、ハイドロカノンを放ったゲッコウガは空へ舞い上がる。そして、さっきのように駆け上がるには距離が離れているメガルカリオは小さな湖となったフィールドへ落ちていく。

「ここだよ、ゲッコウガ。ハイドロカノン！」

「コウガアアアアアアアアアッ!!!」

「ワウツ!?!」

水面で体勢を整えようとしているメガルカリオにハイドロカノンが降り注ぐ。咄嗟にはどうだんを盾にしたけれど、それで防げる威力じゃない。

そして、決め技は次の一撃だ。

ゲッコウガに使ったわざマシンのディスクは二つ。

一つ目は『つばめがえし』。

そして、二つ目は――、

「アクロバット！」

ハイドロカノンによって満身創痍となったメガルカリオにゲッコウガのアクロバットが決まった。

「負けるな、ルカリオ!!!」

ルーラーが叫んだ。

「ウウウウウアアアアアアアアアアアア!!!」

あり得ない。もう、立っていられる筈のないダメージを与えている。それなのに、メガルカリオは血走った目でゲッコウガを睨みつけ、尚もはどうだんを放とうとしている。

「……コウガ」

けれど、ゲッコウガはメガルカリオに背を向けた。

直後、メガルカリオのメガシンカは解け、そのまま意識を失った。

「……ルカリオ、戦闘不能！ よって、この試合はチャレンジャー達の勝利や！」

ヴォルフの宣言と同時にルーラーが水の中へ飛び込んだ。ルカリオが沈んでしまったからだ。

ゲッコウガが助け出そうとしていたが、ルーラーはすごい速さでルカリオの下まで泳ぎ、ボールに戻してから浮上した。

「あ、姉御！」

慌ててヴォルフが駆け寄ると、泥水が滴る髪をかき上げ、ルーラーは言った。

「……感情的になり過ぎたな」

ため息を零しながらヴォルフに何かを耳打ちし、ルーラーは俺達の下へやって来た。

「三つ約束しろ」

彼女は言った。

「一つ、何かあったら必ず最寄りのアガリア警察に頼る事。アタシやヴォルフ、ミリガンでもいい。連絡先はお前達のポケナビに後で送っ

ておく。アタシ達に対する迷惑とか、面倒とか、危険とか、そういう事を考慮するな。いいな？」

「は、はい」

「わかりました」

「うっす」

分かっていた事だけど、ルーラーはとても優しい人だ。感情的になり過ぎるくらい、本気で俺達を倒そうとしたのも、俺達をこの街で守りたかったからだ。

「二つ、ここからはサレナやロヴェリアも近いが、次は必ずオーヴェルに向かえ。暑苦しい街だが、ポケモントレーナーとしての実力を磨くなら、あそこ以上の場所はない」

オーヴェル。本当なら、旅立って直ぐに向かう筈だった街。異存なんて、ある筈がなかった。サレナで待っているアギトには悪いけど……。

「三つ、お前達の命はお前達だけのものじゃない事を忘れるな。家族や友達のことを大切にしろっていう、当たり前の話じゃない。お前達が命を落とす時、お前達のポケモンがどうなっているかを想像しろ。そして、その想像を絶対に現実にするな」

俺達が命を落とした時、ポケモンがどうなるか……。

少し想像して、吐きそうになった。

「意地悪を言ってるんじゃない。そうならないように努力しろ。努力が足りないなら、大人を頼れ。そう言っているんだ。それがお前達をこの街から出す条件であり、ポケモントレーナーとして、ポケモン達に対する義務だ」

いつも戦ってくれているポケモン達に対して、ポケモントレーナーが果たさなければいけない義務。

ヴリル教団と敵対する事になっても、特に怖いとは思わなかった。だけど、それはポケモン達の命が奪われる可能性を考えていなかったからだ。

「アルト。アイリス。バレット」

ルーラーは俺達を順番に見つめた。そして、傍までやって来たヴォ

ルフが持つ見覚えのある小箱から小さなバッジを三つ取り出した。

「このバッジを見る度に、この約束をちゃんと思い出せよ。リール・ジムに勝利した証、コンバット・バッジだ」

そう言うと、はじめて彼女は俺達に笑顔を見せてくれた。俺達はコンバット・バッジを握り締めながら、ルーラーとの約束を胸に刻み込んだ。

第四章 『再会、バトルシテイ』 プロローグ

「ファイアロー、ニトロチャージ！」

「アイー！」

炎を纏うファイアロー。速度を上げながらフシギバナへ向かっていく。

「そのスピード、コントロールし切れるかな？ つるのムチでジャンプ！」

「バナー！」

フシギバナがつるのムチを使って自分の体を持ち上げ、飛び上がる。

目標を失ったファイアローはそのまま速度を上げつつフィールドを旋回した。

「コントロールし切れるかって？ やってやるさ！ ファイアロー！」

「ブレイブバード！」

「アイーッ！」

室内の限られた空間。スピードに振り回されれば自滅してしまう可能性もある。

「……」

「出来るさ、お前なら！ ファイアロー！」

「アイーッ！」

バトルの中で繰り返されたニトロチャージ。それにより、ファイアローは己の限界を越えた速度で飛翔している。壁ギリギリ、天井ギリギリ、地面ギリギリ、急旋回。狙う先は空中のフシギバナ。

「……見事」

「いつけー！」

「アイーッ！」

青白い光を纏い、ファイアローのブレイブバードが発動する。ひこうタイプの技はフシギバナに対して効果抜群。一撃で戦闘不能にし

た。

「そこまで！ フシギバナ、戦闘不能！ よって、この試合は挑戦者・アクセルの勝利です！」

フシギバナをモンスターボールに戻し、拍手しながら近づいてくるシャンティ・ジムのジムリーダー・エルフラン。

「おめでとう、アクセルくん。これがキミの冒険のはじまりだよ」

手渡されたボワバツジは、一月前に旅立った幼馴染が見せてくれたものと全く同じものだった。

ようやく、スタートラインに立てた。

「ボワバツジ、ゲット！ よーっし、待ってるよ、アルト！ 絶対に追いついてやるぜ！」

「その意気だよ！」

プロローグ

ジムから出ると、そこには旅支度を整えたセラが待っていた。

「おめでとう！」

まだ、何も言っていない。ジムバツジも見せていない。それでも、セラはまっさきにお祝いしてくれた。オレが負ける可能性なんて、欠片も考えていない。

「サンキュ！」

モンスターボールからファイアローとサンダース、そして、ゴルバットを出す。この一ヶ月の間にオレが村のみんなの助けを借りて育て上げた自慢のポケモン達だ。

「いよいよだぜ、みんな！」

「アーン！」

「ダースッ！」

「キーン！」

ゴルバットは最近ゲットしたばかりの新入りだ。修行の為に森へ入っていたら、小さな洞窟を見つけて、そこにいたズバットをゲットして進化させた。ジムリーダーにも認められたし、オレ達は十分に強い。

だけど、少し前にシャンティ・シティの公民館にあるデカイテレビ

で見たユニオンの大会を思い出すと、少し自信が揺らぐ。

アルトはもつと強くなっていた。あんなバトルをしてみたいって、憧れそうになった。

「憧れてたまるか！ 待ってろよ、アルト！」

そうだ。アルトは憧れる相手じゃない。オレの大切な幼馴染だ。

「はいはい、そこまで！ 荷造りはバッチリ終わってるし、みんなも見送りの準備を終えて待ってるよ！」

「もう!?!」

スピード特化のバトルスタイルであるオレ以上のスピードだ。村人全員、オレの勝利を疑わなかったらしい。否応にも胸が熱くなってくる。

「よーっし、いくぞー！」

「うん！」

「アーイツッ！」

「ダースッ！」

「キイツッ！」

村の出口に行くと、そこには本当に村人全員が集まってきていた。ヴェゼール・ヴィレッツジのみんなだけじゃない。シャンティ・シティの人達や、ジムに居たはずのエルフランとカザリまでいる。

「すっげー！ みんな、暇なのか!?!」

「違うわよ、バカタレ！ 忙しい中、みんな来てくれてるんだから、まずは『ありがとう』でしょ！」

「イテッ！ お、おう！ サンキュ、みんな！」

小突かれたおでこを摩りながら礼を言うと、またどつかれた。

「軽すぎ！ もつと気持ちを籠めなさいよ！」

「籠めてるだろ!?!」

あまりの理不尽に反論すると、みんなが笑い始めた。

「アクセル」

お袋が近づいてきた。

「いいかい？ セラちゃんにあんまり面倒をかせさせるんじゃないよ！」

「セラがオレについてくるんだぜ!？」

面倒を掛けられるのはむしろオレの方だ。

「何言ってるんだい! セラちゃんが付いていってくれるって言うから旅立ちを許してやってんだよ? アンタ一人じゃ心配で旅なんてとてもとても……」

「アルトだって一人で旅立ったんだぞ! オレだって出来らあ!」

「アルトくんはアンタと違って頭がいいんだよ!」

「オレがバカだって言いてえのか!？」

「許しもなく森に出て散々みんなに迷惑掛けたバカはどこ誰だ!？」

ちくしょう。悔しいのに言い返す言葉が出てこない。

「そこまでにしとけ、エイリア」

お袋の頭をポンポン叩きながら親父は腰を屈めた。

「アクセル。男なら、やると決めた事はきっちりやり通せ。オレから言う事はそれだけだ。しつかりな」

そう言つて頭をぐりぐりと撫でてくる親父。恥ずかしいから止めてほしい。おまけに痛い。

「セラ。アクセルから離れるんじゃないぞ」

セラの方にはセラの爺ちゃんが声を掛けていた。

「アクセルなら、かならずお前を守つてくれる。お前に預けたポケモン達は十分に強いが、まっさきに頼るべきが誰かを忘れるんじゃないぞ」

さすがはセラの爺ちゃん。分かっついていらつしやる。

「うーん。アクセルを頼りにかあ……」

困った顔をするセラ。まるで爺ちゃんが分かっている人みたいな態度だ。失礼なヤツだ。お前の爺ちゃんは村で一番分かっている人だぞ。

「はっはっは! こりゃ、尻に敷かれそうだな、アクセル!」

近所の兄ちゃんがからかってきた。

「アクセルとセラちゃんも旅に出ちまうのかあ……。寂しくなんなあ……」

近所のおっちゃんが泣き出した。

「アクセルくん」

今度はアルトのお袋さんだ。

「アルトに会ったら電話するように言っておいてね！ あの子ったら、あれほど言ったのに！」

かんかんに怒ってる。この一ヶ月、アルトは家に一切電話を入れていないらしい。ちなみにオレ達にも掛かってこない。こっちから掛けても忙しい忙しいで殆ど会話にならない。ユニオン大会の事もオレ達はエルフランに教えてもらった。

「アクセルくん！ これ、旅先で食べてね！」

よく行くポケモンフードの店の姉ちゃんがポフレをくれた。

「サンキュ、姉ちゃん！」

「フフフ、いいのよー。あー、でも、寂しくなるなー。お姉ちゃんのこと、忘れないでねー？」

「あったぼうよ！ 姉ちゃんの事を忘れてたりするもんか！」

「キヤー、ありがとう！」

姉ちゃんと話しているいきなりセラに耳を抓まれた。

「イテエ！ イテエよ、セラ！」

「デレデレしてんじやないわよ！」

「なんの事だよ!?!」

オレ達のやりとりを見て姉ちゃんは吹き出すし、いったい何なんだ。

「セラちゃん。がんばってねー」

「うっさい！」

「おーい、ガラが悪いぞー」

「うっさい！」

なんだかんだでセラもポケモンフード店の姉ちゃんと仲がいい。なんだか兄弟みみたいだ。

兄弟みみたいといえば、オレとアルトはどうだっただろう？ 幼馴染

だし、仲も良かった。だけど――、

「ほれほれー、本音言ってみなー！」

「うっさい、おばはん！」

「あらま！ 言ったなー、未来のおばはん！」

あんな風に心底笑い合った回数が何回あったか、数えようと思えば、数えられてしまいそうな気がする。

「どうしたんだい？」

モンテロ博士が声を掛けてきた。

「……なんでもない」

「そうかい？ それならいい。アクセル。君にこれをプレゼントするよ」

博士が取り出したのはモンスターボールだった。

「ポケモン？」

「そうだよ。とても大きな力を持っているから、ピンチになったら頼りなさい」

「わかった！ サンキュ、博士！」

「旅は危険がつきものだ。気をつけるんだよ」

「はい！」

一通り別れの言葉を交わした後、セラがホルダーに並んでいる六つのモンスターボールの内の一つを取り外した。

「出て来て、バンバドロ！」

「ブルルツ！」

セラは村のみんなから選りすぐりのポケモンを借りている。オレにはモンテロ博士以外誰も貸してくれなかった。ひどい差別だ。

「ほら、アクセル！ ボサツとしてないで乗ってよ！」

「へいへーい！」

このバンバドロはセラのお袋さんのポケモンだ。アローラから嫁ぎに来た時、一緒に連れて来た大切なポケモンらしい。

セラの後ろに乗ると、何故か睨まれた。

「アンタが前！」

「お、おう！」

「ごだわりがあるらしい。」

「ビュー、白馬の王子様ならぬ、バンバドロの王子様だね！」

近所のおばちゃんがよく分からない事を言ってる。

「さっさと行こう！　いってきますー！」

「いってきまーすー！」

オレは半ば逃げ出すようにバンバドロを走らせた。パカラパカラと実に快適だ。

手を振るみんなの姿が見えなくなっても、野生のポケモンは襲ってこない。バンバドロがそれだけ強力なポケモンという事だろう。

「ハイヨー、バンバドロ！」

「ヒヒーン！」

「ちよ、ちよつと！　いきなりスピード上げないで！」

悲鳴を上げながらオレの腰にしがみついてくるセラ。

「振り落とされるなよ！　いけいけ、バンバドロ！」

「ヒヒーン！」

オレの……、オレ達の冒険はここからだ！

待ってろよ、アルト！

第一話 『到着、オーヴェル・シティ』

オーヴェル・シティ。通称・バトルシティ。

アガリアで最もポケモンバトルが盛んな街として知られ、ポケモン・ジムの他、バトルタワーや各種大会が行われるドームもあるらしい。

リール・シティから電車をいくつも乗り継ぎ、歩くこと一時間弱。街の入り口まで後一步だ。

「いやー、無事に到着しましたね！」

「ヴリルの連中、襲ってこなかったな」

バレットはつまらなそうに言った。たしかに、襲ってきてくれれば経験値になったのに、残念だ。

「いやいやいやいや。襲われたら、それ事件ですからね！　っていうか、オーヴェルの近くではさすがに襲ってきませんよ！」

「どうして？」

「どうしてって……、オーヴェルは超級トレーナーの巣窟ですよ！」

フィオレの大迷宮に挑む為に修行に来るトレーナーもいますから」

「大迷宮って、四大魔境の？」

「そうですよ。フィオレ・シティは大迷宮の表層に広がる街ですが、フィオレ・ジムは大迷宮の内部に設置されているのです。エスパー・タイプの巣窟で、最下層には魔神が眠っているという、一般トレーナーから超級トレーナーになる為の登竜門。ザラクのフーデインも、大迷宮の下層でゲットしたポケモンなのです！」

フィオレ・シティの大迷宮。いずれ、俺達が挑戦する事になる魔境。

この街には、そこに挑む人と、そこに挑んだ人が集まっているんだ。「その大迷宮を突破出来るようになれば、メルカトも……！」

ドラゴンの巣窟と化したメルカト。そこにも、いずれ必ず挑む事になる。

「フィオレ、バステイロ、ジュラ。メルカトに挑むなら、その三つを先に制覇しなければいけませんよ」

「どういう意味だ？」

「攻略の難易度に違いがあるのです。『アルトギア手記』の始まりである『青の書』が封じられていたジユラ。二番目の『赤の書』が封じられていたバステイロ。三番目の『黒の書』が封じられていたフィオレ。そして、最後の『白の書』が封じられていたメルカト。その順番で、攻略の難易度が上がっていくのです」

攻略の難易度が『アルトギア手記』の断片のはじまりからおわりに向かって徐々に上がっていく。なんだか、それは――、

「以前、『青の書』の事を相談したバステイロ・ジムのジムリーダー・レムハザードは言っていました」

アイリスは言った。

「『アルトギア手記』は誰かの為のもの。その誰かが力を得ていく為の道標と」

「誰かの為……？ その誰かって、誰の事だ？」

「分かりません。ただ、これを一種の試練と考えると、その試練を乗り越えられた人物は一人しかいません」

「一人？ 一人、乗り越えたつてののか!? でも、メルカトは……！」

「乗り越えたからこそ、こんな事になっているのですよ。その乗り越えた男とは、他にもないザラクの事ですから」

チャンピオン・ザラク。メルカトの現状の根本的な原因。

「あの野郎か……」

バレットは苦々しい表情を浮かべている。

「『アルトギア手記』の試練を乗り越えれば、俺達もチャンピオンに近づけるのかな？」

俺が思った事を口にする、バレットはハツとした表情を浮かべてアイリスを見た。

「それだけでは足りないでしょう。ザラクは元々、ハウエン、シンオウ、カロスの旅しながらトレーナーとしての腕を磨いていました。突破したから強くなったと言うより、強かったから突破出来たのです。それに、突破した理由も……」

「どうしたの？」

言い淀むアイリスに問いかけると、彼女は渋い表情を浮かべた。

「今でこそ、バトル脳のお馬鹿さんですけど、昔は違いました。お姉ちゃんの事が大好きで、一緒に生きる為の人生設計も真面目に考える人だったんですよ。だけど、その未来が壊されて……」

アイリスはバレットの顔を見つめた。

「言うべきですね、あなたには」

彼女は言った。

「メルカト・ジムのジムリーダー・ナザレ。彼女はわたしの姉であり、ザラクの婚約者の仇の一人なのです」

「ウソだ！」

バレットが叫んだ。

「それはないぞ！　ありえない！　だって、お前の姉を殺したのはヴリル教団だろ!?!」

「そうですね。そして、あの女はヴリル教団の幹部の一人でした。まあ、目撃者はザラク一人。証拠を出せと言われても、出せませんが……」

「見間違いだ！　それか、勘違いだ！」

メルカト・ジムのジムリーダー・ナザレ。アガリア地方の制空権を握っていた人。

「ナザレ様に限って、カルト宗教に傾倒するなんてあり得ない！　あの方は崇める方じゃなくて、崇められる方だぞ！」

「知っていますよ。ですが、それは崇めている方の言い分。崇められている方の心は誰にもわからない」

イヤな空気だ。アイリスとバレットは互いに譲れないものを持っている。その二つがぶつかり合って、火花を散らしている。

「……アイリス。ナザレ様に対する侮辱だけは許さねえぞ。オレ達にとって、あの方は神にも等しいんだ」

これ以上はダメだ。きつと、取り返しがつかなくなる。

「ねえ、二人と——」

「見つけた！」

二人を止めようと口を開きかけた、その時、いきなり赤毛の女の子が空から降ってきた。

第一話『到着、オーヴェル・シティ』

「青に金に銀。年齢、およそ十才。あなた達がアルト、バレット、アイリスで間違いありませんね？」

「そ、そうだけど、君は？」

「わたしの名前はシャシャ！ オーヴェル・ジムのジムトレーナーです！ あなた達の事はリール・ジムのジムリーダー・ルーラーから聞いています。悪名高きヴリル教団に真っ向から喧嘩を売ったとの事！ その意気、その粹、その根性！ まっこと素晴らしい！」

すごいテンションの子が現れたものだ。さっきまで喧嘩腰になっていたアイリスとバレットが呆気にとられている。

「この腕輪を身に着けなさい」

そう言つて、彼女は俺達にそれぞれ銀色のブレスレットを渡してきた。

「これは？」

「それはバトル・ブレスレット。この街における、あなた達の身分証明書のようなものです。そして、ジムリーダー・ヴァイクに挑む為に、無くてはならないものなのです！」

「ジムリーダーに……？？」

どういう事かと聞けば、彼女は丁寧に説明してくれた。

この街にはアガリア全土から腕に覚えのあるトレーナーが集まってきたいて、ジムリーダー・ヴァイクへの挑戦者もかなりの数に上るらしい。

その為に設けられたもの、それがジムリーダーに挑む為の権利を得る為の試練だ。

「その名も『ポケモントレーナー100人斬り』！ 文字通り、これからあなた達には100人のトレーナーと戦い、連勝してもらいます！」

「ハア!？」

「ちよつと待つてください！ なんですか、それ!？」

バレットとアイリスもさすがに度肝を抜かれたようだ。

「ご安心を！ このブレスレットはトレーナーカードと連動していま

す。戦績に反映されるのは自分と同ランクか、一つ下、あるいは一つ上のランクのトレーナーとのバトルのみとなっています。なので、カップがゴールドに挑まれるような事態は起こりません！　そして……」

シャシャはニヤリと笑った。

「同ランクのトレーナーとの戦いで負けるようなトレーナーに、ヴァイクと戦う資格はありません」

これがバトルシテイと呼ばれるオーヴェルの流儀。

面白い。ワクワクしてくる。

「それと、一つ忠告です」

「忠告？」

「この街に滞在しているトレーナーの多くはカップ以上。それ以下のトレーナーは100人いるかどうか分かりません」

「ええっ!？」

それは困る。俺のトレーナーカードが一番下のノーマルだ。一つ上のランクのトレーナーまでとしか戦えないのでは、ジムに挑戦出来ない。

焦っていると、シャシャがクスツと微笑んだ。

「ご安心を！　この街では毎日のように大会が行われています！　その内容は様々ですが、そこで五回優勝すればブロンズに上がれます！　そこから更にバトルタワーで100連勝、あるいはバトルポイントが一万を超えればカップに上がる事が出来ます！　トレーナーカードのランクアップの方法は他にも色々ありますが、この街ではこの方法が最も手っ取り早いかと！　トレーナーカードのランクが上がるれば、対戦相手に事欠くこともなくなりますので、がんばってください！」

なるほど、ルーラーの言っていた通りだ。この街ほど、トレーナーとしての腕を磨くのうってつけの場所は他にない。

「ツハ、おもしろえー！」

「いっちよ、やってやりますか！」

バレットとアイリスは既にブロンズだ。俺も、まずは二人と同じと

ころまで上らないといけない。

「よし！ まずはブロンズにあがるぞ！」

「なら、オレはバトルタワーに挑むぜ！ モタモタしてつと、先にカットパーに上がっちゃうからな！」

「負けない！」

俺は居ても立ってもいられなくなった。

目と鼻の先にあるオーヴェルの門に向かって、俺達は駆けていく。

「わわっ！ 待ってくださいよ！」

アイリスも慌てて追いかけてくる。

「がんばってねー！」

シャシャの声援を背に受けながら、俺達は遂にオーヴェル・シティへ入った。

そして、目を大きく見開いた。

「これが、オーヴェル！」

まず目を引いたのは天高く聳えるタワー。高層ビルはタワー以外にほとんどなく、代わりに巨大なドームがいくつも見える。そして、次に視界に入ってきたのは空中戦を行う無数のポケモン達。地上を見ても、無数のバトルフィールドで無数のトレーナーとポケモンがバトルを繰り広げている。

「アレがジムですね」

アイリスが指さした先、そこは街の中心部。一際巨大なドームに『GYM』の文字が見える。

「こいつは凄いで！ やべえ、ウズウズしてきやがった！」

バレットの言葉を聞きながら、俺の視線は一点に向かったまま動かなかった。

そこには、見覚えのあるポケモンの姿があった。スピアーだ。

ドリルライナーで相手のポケモンの大技を貫き接近していく。その姿は間違いなく、クレルモア大平原で目撃した超級トレーナーのスピアーだ。

「戦いたい……！」

「なら、さっさとランクを上げようぜ！」

バレットに腕を引かれて我に戻る。

「立ち止まつてる暇なんてないぞ、アルト！　ここなら、オレ達は間違
いなく強くなれる！　いくぞ！」

「うん！」

「だから、いきなり走り出さないで下さいってば！」

第二話 『ジムリーダー・ヴァイク』

バンバドロの足は速い。あっという間に森を抜けて、クレルモア大平原に出た。

「平原って割に、草も木も生えてないわね」

「ほんとだな」

まるで荒地地だ。ところどころ、地面がひび割れていて、バンバドロも少し走りにくそうにしている。

しばらく走っていると、一人のロングコートを着たトレーナーが立っていた。隣にはゴウカザルが控えている。

「バンバドロ……？」

急に、バンバドロが足を止めた。なんだか、怯えているようだ。

「……ふむ。エルフランが言っていた子供とは、君達の事か」

振り向いた顔を見て、息が止まりそうになった。

仮面だ。彼は顔を暗い色の金属で作られた鉄仮面で覆い隠していた。

「驚かせてしまったか……。すまないな、ファツションで着けているわけではないんだ。それよりも、安心したよ」

「安心って？」

「以前、来ると聞いていた少年は、何故かユニオンに向かってしまったからな。歓迎の用意が無駄になってしまった」

「それ、アルトの事？」

「そうだ。十才の少年の旅立ちと聞いてな、いろいろと便宜を図る予定だったのだが、ルーラーに役目を奪われてしまった。だが、君達に對しては仕事を全う出来そうだな」

「あ、あなた、誰なの……？」

セラは警戒心を剥き出しにしている。

無理もない。まず、見た目が怪しすぎる。世界広しと言えど、こんなに怪しいヤツも早々居ないだろうってくらい怪しい。

そんな彼はセラの反応に頓着する事なく言った。

「オレの名はヴァイク。オーヴェル・シテイのジムリーダーだ。君達

を迎えに来た」

第二話『ジムリーダー・ヴァイク』

クレルモア大平原でヴァイクと出会ってから一時間後、オレ達はオーヴェル・シテイの中心に佇むオーヴェル・ジム内の一室にいた。フカフカナソファアーに座らされて、お菓子とお茶を出され、『少し待っている』と言われた。

しばらく待っていると、ヴァイクが戻ってきた。大平原で着ていたロングコートを脱いだ彼は筋骨隆々で、まるでゴースキーのようだった。

「待たせたな。さて、君達にはいくつか話しておく事がある。まずは、そう。君達の幼馴染であるアルトについてだ。彼も二週間程前からこの街に滞在している」

「アルトが!?!」

「本当!?!」

「ああ、本当だ」

オレはセラと顔を見合わせた。会えるかもしれないとは思っていたけれど、こんなに早く再会出来るとは思っていなかった。

「アルトはどこに!?!」

「彼は現在、ランクをブロンズに上げる為、シテイ内で開催されているノーマルからカップまでの大会を順番に制覇している。既に三つの大会で優勝を果たし、今頃は四つ目の大会に参加している頃だろう」

「三つの大会で優勝!?!」

「アルト、すごっ!」

素直に感心してしまいそうになった。ユニオン大会の映像を見た時にも感じた事。このままだと、追いつくどころか、どんどん離されて行ってしまう。

アルトが遠い場所へ行ってしまう。

「オ、オレだって!」

「落ち着きたまえ、アクセル」

いきり立つオレを宥めるように、ヴァイクは言った。

「キミの実力は聞いている。スピードを活かした戦術が見事だとエルフランが褒めていたよ。既に最初の壁も破っていると聞く。素晴らしい才能だ。だが、それだけで勝ち抜ける程、ポケモンバトルの大会は甘くない。負けても得られるものはそれなりにあるだろうが、それよりも、どうかな？ オレの指導を受けてみる気はないか？」

「で、でも、モタモタしてたらアルトが先に行っちゃまうよ！」

置いて行かれたくない。オレは、アルトやセラと一緒に居たいんだ。

「焦っているな。気持ちは分かるとも。だが、オレも意地悪を言っているわけではないんだ。アルトが素直にこの街に来てくれていれば、こんな事にはならなかったのだがな」

「どういう事……?」

セラが聞いた。

「アルトは今、少々面倒な事に巻き込まれている。ヴリル教団の名は知っているな?」

もちろんだ。オレ達の村を襲った連中。アイツラのせいで、オレ達は故郷から離れる事になったし、一歩間違えればアルトが死んでいたかもしれない。

「彼は現在、ヴリル教団に狙われている少女と行動を共にしている。要するに、彼はヴリル教団と戦う宿命を背負ったのだ」

「はあ!？」

「なんで、そんな事になってんの!？」

「詳しい経緯を話すとなれば長くなる。それに、そこは大して重要でもない」

「重要だろ!」

「違うな、アクセル。重要な事は、今のキミ達がアルトと再会しても、共に旅をする事が出来ない事だ」

ヴァイクの言葉に、吐き出そうとした声が引っ込んだ。

「幸か不幸か、アルトはチャンピオンに目をつけられている。それに、手持ちポケモンの中には彼のゲッコウガもいる。だから、少人数の旅でなら、ある程度は安全だ。だが、そこに足手まといが二人加われば、

旅の安全性は一気に失われる」

「足手まとい……」

「つていうか、悪い人達に狙われてるなら、旅なんてしてる場合じゃない!」

「そういう意見も出ている。実際、リール・ジムのジムリーダー・ルーラーは彼らの旅を禁じ、ヴリル教団が掃討出来るまでシテイ内に留まらせようとした」

「じゃあ、なんで、アルトはここに居るの?」

困惑するセラに、ヴァイクは言った。

「彼らが望んだからだ。アガリア警察も、ジムリーダーも、一般市民に対しては法律以上の権限を持たないからな。外に出たい者を止める術はないさ」

「でも、街の外に出るにはトレーナーカードが必須ですよね!」 ジムリーダーや警察なら……」

「犯罪行為を行った者に対してなら、そういう事も可能だ。けれど、『外に出たら危ない』という理由で止める事は出来ないんだ。まあ、それでもルーラーはやろうとしたが、結局は納得させられた」

「どういう事ですか……?」

「負けたのさ。三対一とはいえ、本気で戦った上でのトリプルバトルでね」

「じ、ジムリーダーとの本気のバトルで勝った……?」

シャンティ・ジムに挑む前、オレは街のみんなにバトルのいろはを教えてもらった。

だから、超級と呼ばれるトレーナーの力を知っている。親父が見せてくれた本気の力、あの力に対抗する術を、オレはどんなに考えても思いつかなかった。

そもそも、ポケモンのレベルが違いすぎる。作戦とか、気合とか、そういうものが入り込む余地がなかった。

それなのに、アルトは勝った。チャンピオンのゲッコウガを使ったのかもしれないし、三対一ということは、他にもトレーナーがいて、力を合わせた結果なのだろうけど、それでも、超級トレーナーに勝利し

たという事実は揺るがない。

置いて行かれたくない？　もう、とつくに置いていかれている。

「オ、オレは……」

「アクセル。オレがお前をそこまで引き上げてやろう」

「え？」

ヴァイクは言った。

「この街の仕組み上、アルトもしばらくはここで足を止める事になる。その期間で、お前を鍛え上げてやる」

「な、なんで……」

ジムリーダー直々の指導。特にオーヴェルのジムリーダーは多忙を極めているって、親父が言っていた。それなのに、どうしてそこまでしてくれるのかが分からない。

「理由はいくつかある。そもそもの話になるが、オレはアルトを鍛えるつもりだった。十才の旅立ちが珍しくなってきた昨今の情勢、野生のポケモンやヴリル教団のような分かりやすい悪党以外にも、危険がそこかしこに蔓延っている。最低限のレベルまで引き上げておく必要があった。まあ、アルトはユニオン大会やリール・シティでのバトルを経て、勝手に育ってしまったがな。君に対しては、シツカリと役目を全うしたいと考えている」

「そう言えば、大平原で会った時に言っていましたっけ」

セラが言った。

そう言えば、たしかにヴァイクは言っていた。

『十才の少年の旅立ちと聞いてな、いろいろと便宜を図る予定だったのだが、ルーラーに役目を奪われてしまった。だが、君達に対しては仕事を全う出来そうだ』

オレに対して特別な措置を取ってくれたわけじゃなくて、十才のトレーナーに対する措置だったわけだ。それなら納得がいく。

「ここは、今ではバトルシティなどと呼ばれているが、本来はポケモントレーナーの修練場としてアガリア政府主導の下、造られた街なんだ。バトルタワーや各種ドームが密集して建設されている理由がそれさ。言い方は悪いが、未熟なトレーナーを一人前に育て上げる事こ

そ、この街の本分。エルフランが真つ先にここへ向かえと言った理由もそれだ」

ヴァイクは言った。

「どうだ？ オレの指導を受ければ、多少時間はかかるがアルトに追いつく事が出来るぞ」

「アルトに……、追いつける」

また、ヴェゼール・ヴィレッジと一緒に遊んでいた頃に戻る。

「お、お願いします！」

「ああ、その言葉が聞きたかった。これからはオレの事を師匠と呼べ」

「はい、師匠！」

「……ッフ」

呼ばせた癖に照れている。最初に会った時はとんだ不審者に声を掛けられたものだと思っただけけれど、どうやら良い人みたいだ。

「あのー……」

セラが恐る恐る手を挙げた。

「わたしはどうしたらいいんですか？」

「……うむ、それはオレも悩んでいた。君はトレーナーを目指しているわけではないんだよね？」

「は、はい。まあ……、その……」

「オレの指導はそれなりにキツイからな。よし、これをやろう」

そう言って、ヴァイクはセラに一枚のカードを渡した。

「このカードはオーヴェル・シテイ内のあらゆる施設を無料で利用出来るフリーパスだ。これで大会を見学するなり、遊ぶなりして時間を潰していてくれ。中央エリアにはバトル指南の教室などもあるから、そこを覗いてみるのもいいだろう。コンテストに興味があれば、イーストエリアにコンテスト会場もある。シーズンではないが、毎日何かしらの催し物が開催されているから、それなりに楽しめるだろう」

「い、いいんですか？」

「アクセルを借りる料金とでも思ってくれ」

そう言くと、ヴァイクは立ち上がった。

「さて、今日は宿泊施設まで送るから休むといい。明日からは厳しい

修練の日々が待っているぞ。覚悟はいいな?」

「はい!」

「元気がいいな。良い事だ」

その日、オレとセラは中央エリアのホテルで部屋を取った。ここにはアガリア中のポケモントレーナーが集まってくるから、ポケモンセンターだけだと部屋が足りないらしい。

セラのフリーパスを見せたら一番良い部屋に案内してもらえた。

「見た目はヤバイけど、良い人だね、ヴァイクさん」

セラが言った。

「そうだな。明日からの修練、どんな感じなんだろう」

「まあ、頑張んなさいよ。アルトに追いつきたいんでしょ?」

「……おう!」

第三話 『バトルタワー』

『なるほどな。だから、いつまで待っても来ないわけだ』

「怒ってる……?」

『怒ってないぞ』

「……なるべく、はやい内にそっちに行くよ」

『そうしてくれ』

アギトとの通話を終える。彼が待っているサレナに向かわず、オーヴェルに來た事を少なからず怒っているみたいだ。バレットの言っていたとおり、アギトは結構寂しがり屋だ。

「ポケナビ通話、終わりました?」

「うん」

「アギトのやつ、寂しがってたろ」

「うん」

今日、ようやくトレーナーカードのランクが上がった。折角だから、このままカップターのランクまで上げてしまいたい。

「バレット。バトルタワーはどんな感じ?」

「思ったより、手応えがないな。おそらく、マッチングの方式はコレと一緒になんだろう」

バレットは腕につけたブレスレットを指さして言った。

「要するに、ノーマルはノーマル同士、カップター以上はカップター以上同士で対戦を組まれているという事ですね」

「まあ、条件が100連勝な時点で、当然と言えば当然だな。この分だと、割とあっさりカップターにいけそうだ」

「なら、俺も明日からはバトルタワーに籠もるよ」

四つの大会を勝ち抜いて、わかった事がある。ノーマルランクのトレーナーと戦っていても、これ以上は成長出来ない。オーヴェルに修行に來ているトレーナーでも、この環境でカップターに上がっていないトレーナーの実力は高が知れている。

「ねえ、カップターから先に行くには、どうすればいいの?」

「シルバーやゴールドか? たしか、シルバーの条件は総合評価って

「ヤツだ」

「総合評価？」

「いまいち、ピンとこないでいると、アイリスが教えてくれた。」

「要するに、ポケモン図鑑に登録したポケモンの数、手に入れたバツジの数、バトルタワーの連勝数、ポケモンリーグにおける戦績、アガリアの安全と秩序に対する貢献度などなど、それらを総合的に評価して、カッパーの枠に収まらないトレーナーだと認められれば、晴れてシルバーランクに上がる事が出来るのです」

「なんだか、一気に難易度が上がるね」

「当然ですよ。シルバー以上は例外なく超級トレーナーですからね。ちなみに、ゴールドは公的に認められた功績によってランクアップする事が出来ます。例えば、ポケモンに襲撃された街を救ったり、悪の組織を壊滅させたり、新種のポケモンを発見したり、そういう偉業を為した者を称える称号なのですよ」

「ブラックは？ それに、プラチナランクっていうのもあるんだよね？」

「ブラックは特殊ですね。現在ですと、レムハザード、ミリガン、ドロシー、ナザレの四人が保有している筈です。それぞれ、アガリアの命運を握っている存在ですから」

「プラチナは？」

「プラチナランクというのは、存在するだけの称号ですね」

「どういう意味？」

「アイリスは少し考えてから言った。」

「ポケモンマスター」

「なに、それ？」

「さあ、わたしも具体的にどういう存在かは知りません。ただ、チャンピオンよりも凄い、トレーナーの頂点だと、ザラクは言っていました」

「チャンピオンが？」

「ええ、そうです。おそらく、プラチナ・ランクとは、ポケモンマスターの為の称号なのではないかと」

「ポケモンマスター……」

第三話『バトルタワー』

バレットとアイリスに案内してもらって、天高くそびえ立つバトルタワーにやって来た。

「近くで見ると、すごい高さだね。それに、思ったより横幅も広い！あまりにも高過ぎて、遠くから見ると凄く細い建物に見えた。けど、実際には一周するのに走って一時間以上かかりそうな程だ。」

「このタワーの高さは千メートルを越えているそうですよ」

アイリスが言った。

「千メートル!？」

確か、シヤンティ・シティにある巨大樹・サラの柱は300mくらいだと聞いた。その三倍以上という事になる。あまりにも途方もない。まさに、規格外の建物だ。

「そんなに高いと、ドラゴンポケモンに襲撃されたりはしないの？」

実際の所、ドラゴンポケモンの領域がどの高度にあるのかは知らない。だけど、雲まで届きかねないこの建物はドラゴンポケモンの領域にも届いてしまっている気がする。

「上層フロアは超絶トレーナーの中でも指折りの猛者が集まっていますから、さすがにドラゴンポケモンも無闇に襲う事はありませんよ」

「指折りの猛者って、ルーラーやチャンピオン並の？」

「ええ、バトルタワーは純粋に強さを求める者の集う場所ですから。リーグには出てこないような強者もそろそろ蠢いていますよ」

「でも、そいつらはルーラー以下なんだろう？」

バレットの言葉にアイリスは首を横に振った。

「いえいえ、そうとも言い切れません。ルーラーがバトルタワーにいたのは二年前の事。当時は今と比べてアガリアも安定していましたから、言い方は悪くなりますが、今よりも環境が生温かったですよ。けれど、現在は制空権を奪われ、旅が過酷化した事でトレーナーのレベルが飛躍的に上がっています。その環境の中で覇を唱えているのが現在のの上層フロアのトレーナー達なのです」

トレーナーのレベルが飛躍的に上がった。本当にそうなのか、疑問に思う。

この街の大会で戦ったノーマルやブロンズのトレーナー達は、誰も彼も指示が遅く、ポケモンのレベルも低かった。ユニオン大会で感じたようなワクワク感は殆ど感じられなかった。

その事を話すと、アイリスは苦笑した。

「アルト。それは、あなたが既にカツパーの領域へ足を踏み込んでいるからですよ。幸か不幸か、あなたが戦ってきたトレーナー達はほとんどがカツパーを超える実力を備えた人物ばかりでしたからね。アギトしかり、あのヴリル教団の幹部しかり、ルーラーしかり」

それに、と彼女は言った。

「ルーラーの実力をあのバトルで測る事は愚かですよ。アレはヴォルフがルーラーの実力を発揮出来ないように仕向けていましたから。それに、わたし達の最終的な勝因はゲッコウガのフルパワーによるゴリ押しだった事、忘れてはいけませんよ。ルーラーがここへ向かわせた理由もソレです。慢心、ダメ絶対です！」

腕でばってんポーズを作るアイリス。

ぐうの音も出ない。たしかに、少し調子に乗っていた。

「まつ、齒ごたえの無さはオレも感じてんよ。要するに、さっさとカツパーに上がろうぜって話だ。グダグダ喋ってないで、行こうぜ」

「グダグダとは何ですか！」

バレットの言うとおりだ。まずはカツパーに上がろう。そうすれば、強いトレーナー達と戦える。また、ワクワク出来る。

「行こうー」

「おうー」

「もー」

バトルタワーのエントランスに入ると、そこにはジョーイさんの姿もあった。それも、三人。忙しく歩き回っている。もしかしたら、他にもいるのかもしれない。

バレットに習って、バトルタワーに挑戦する為の受付を済ませる。登録を済ませると、提示したトレーナーカードにバトルタワーの欄が追加された。

そのまま、右手の壁にずらりと並んでいるエレベーターの方へ向か

う。

それぞれのエレベーターの前にはパネルがあつて、そこにトレーナーカードを翳すと、マッチングが行われ、バトルフィールドへ移動させてもらえるようだ。

「そんじゃ、そつちも頑張れよ」

「うん。バレットも頑張つてね」

「それじゃあ、わたしいつちよがんばりますかねー!」

三人横並びになってパネルにトレーナーカードを翳す。

「あとでね」

「おう!」

「はい!」

エレベーターに乗り込むと、少しの重力を感じた後、すぐに止まった。

開かれた先には砂漠を横した広大なバトルフィールドが広がっている。

『バトルタワー・第三フロア・砂漠フィールド。マッチング完了。トレーナー・アルトとトレーナー・ダインの試合をスタートします。両者、スタンバイをお願いします』

エレベーターを出ると、対面にもエレベーターの乗り口があつて、その中から対戦相手のトレーナーが出て来た。

「子供か……。だが、手加減はしない!　いくぞ、ムクホーク」

「ホークッ!」

「いくよ、スピアー!」

「スピイツ!」

バトルタワーはシングルバトルとダブルバトルの二つのルールが採用されている。だけど、基本はシングルバトルで、先に三体のポケモンが戦闘不能になった方の負け。

「いくぜ、ブレイブバード!」

「見切れ、スピアー!　回り込んで、ダブルニードル!」

青白い閃光を纏うムクホークをスピアーが真横から突き刺す。

「馬鹿なっ!?!」

「とどめばり！」

大会を勝ち進む中で覚えたスピアーの新技だ。ムクホークを戦闘不能にすると同時に攻撃力を一気に上げる。

「ちくしよう、出て来いエンペルト！ れいとうビームだ！」

「当たらないよ、そんな攻撃！ スピアー！」

「スピイイッ！」

スピアーの動きにエンペルトはまったくついていけない。背後を取った。

「ダブルニードル！」

「スピスピッ！」

攻撃力の上があったダブルニードルを急所に受けたエンペルトは一撃で戦闘不能になった。

「ウソだろ。むしタイプポケモンに!? たのむ、フローゼル！」

出てきたのはフローゼル。指示を聞く前にすでに動き出している。

「そうだ、お前のスピードなら！ アクアジェット！」

「かげぶんしん！」

「スピッ！」

「ゼル!？」

縦横無尽に飛び交う無数のスピアーにフローゼルの動きが止まった。

「そこだ、ダブルニードル！」

「スピイ！」

勝った。戦闘不能になったフローゼルに愕然となる対戦相手のトレーナー。

楽しくない。ロイドやルーラーとバトルした時のワクワク感を少しも感じる事が出来なかった。

「行こう、スピアー。はやく、カッパーに上がろう」

「スピ……」

エレベーターの乗り口に戻る。パネルにトレーナーカードをタッチすれば、また直ぐに新しい対戦がマッチングされた。

『バトルタワー・第四フロア・水辺フィールド。マッチング完了。ト

レナー・アルトとトレーナー・リンシャオの試合をスタートします。
両者、スタンバイをお願いします』

はやく、もっと強いトレーナーと戦いたい。

今のままじゃ、つまらない。

第四話『セラ』

夢を見ている。少し前までは当たり前だった光景だ。アルトとアクセルがいて、ビードルにオボンの実をあげている。うちの農園で取れた新鮮なオボンの実はまさしく絶品。ビードルにも、それが分かるみたいで、いつも凄く美味しそうに食べてくれる。

「セラ。明日も手伝いに行くからね」

「はいはい。オボンの実はしつかり準備しておくわ」

「うん！　ありがとう！」

アルトはビードルの事が大好きだ。そして、同じくらいビードルもアルトの事が大好き。さっさとゲットすればいいのに、おじいちゃんがあげたモンスターボールに中々入れようとしない。

どうしてなのか、一度聞いてみた事がある。

『モンスターボールに入れようとしたらイヤがるかもしれない。そのまま、どっかに行っちゃうかもしれない。だから……』

想像しただけで、怖くてたまらない。そう、顔に書いてあった。

臆病者だなんて言えなかった。わたしも、少し想像して怖くなったから。

だけど、いざその時が来たら、ビードルはあっさり自分からモンスターボールに飛び込んだ。拍子抜けもいいところ。アルトも同じ気持ちだったのか、ホッとしたように笑っていた。

アクセルがおじさんにヤドンをもらった時、わたしも自分のポケモンが欲しくなった。三人で三匹のポケモンを可愛がりながら、村の中で大人になっていく。それ以外の未来が来ることなんて、想像もしていなかった。

街を焼かれた日。わたしはずっと眠っていた。後から聞いた話だけど、わたしがパニックを起こさないように、おじいちゃんのサーナイトが催眠術で起きないようにしていたみたい。

目が覚めて、変わり果てた故郷を見た時、しばらく何も考えられなくなつた。涙が止まらなくて、アクセルに八つ当たりをしてしまった。それから、アルトが危ない目にあっていた事を知って、また泣い

た。アルトとアクセルが旅に出る事を決めた時も泣いた。

未来が変わってしまった事を受け入れる為に、泣いて、泣いて、泣いて、泣き続けた。

それでも、やっぱり受け入れきれなくて、わたしもアクセルについていく事にした。

第四話『セラ』

「サナ!!」

いきなり布団を引つ剥がされた。

「ギニャアアアアア!?!」

飛び上がるわたしをサイコキネシスで見事キャッチするサーナイト。

「サーナイト! もつと優しく起こしてよ!」

「サナ! サナサナ!」

おじいちゃんから借りたポケモンの一体、サーナイトは時計を指差して怒っている。起きる予定の時間から三十分近く経っていた。

「サナ! サーナ!」

どうやら、何度も何度も起こしたらしい。プリプリと怒るサーナイトに謝りながら洗面所へ向かう。軽くシャワーを浴びて、髪を乾かしながら部屋を見て回る。

アクセルの気配がどこにもない。昨夜も帰ってこなかったみたい。

この街に来て、今日で一ヶ月。ジムリーダー・ヴァイクの修行は苛烈を極めている。

「……あとで、様子を見に行こうかな」

初対面の時は純粹に怪しい人だと思った。この街に来た当初はクールな人だと思い直した。一ヶ月の間接してみたら、思ったよりも暑苦しい人だった事が判明した。

アクセルも性格的な相性が良かったのか、師匠の事を慕っている。二人の修行風景は見ていて気が滅入りそうになる程暑苦しい。

「とりあえず、朝ごはんを食べにいきましょう! 行くよ、サーナイト!」

「サナ!」

サーナイトがそばにいと、少し落ち着く。赤ん坊の頃から一緒にいてくれたから、密かにお姉ちゃんと心で読んでいる。まあ、雄なんだけど。

「サナ？」

「サーナイト、ほんとに綺麗よねー。っていうか、可愛い！」

「……サナ」

わたしとしては褒め言葉を口にした筈なのに、サーナイトのテンションはだだ下がりで。

「うそうそ、かつこいいよー！」

「サナー！」

気を取り直した笑顔もまた可愛い。

ホテルを出て、しばらく中央エリアを歩いていると、見覚えのある銀色の髪が見えた。

「アイリスー！」

「およよ、この声はー！」

いつも通りの独特な反応。彼女はアイリス。一週間くらい前、アクセサリーショップで出会った女の子だ。まさか、この街で同い年の女の子に会えるとは思っていなかった。嬉しくなつて話しかけてみると、向こうも壁のないタイプですぐに意気投合する事が出来た。

「セラー！ おはようございませす！ možい、あなたも朝食を食べに『レストラン・ヒムロ』へ？」

「うん！ あそこのパンケーキを食べないと朝が始まった気がしないんだよねー」

「ふっふっふ、分かっていますね！ さすがです！ わたしも全くの同意見ですよ！ ささつ、食べに行きましょう！」

「サナ……」

サーナイトが何か言いたげだけど、わたしはアイリスと一緒にレストラン・ヒムロへ向かつて駆け出した。新しい街で出会った新しい友達。これはこれでいいものだと思う。

到着すると、すぐに席へ案内された。いつもはもつと混んでいるのに、アイリスと偶然会えた事といい、今日は運がいい。遅起きは三円

の得というやつね。

「そっちの方はどうなの？ 順調？」

「うーん、順調とは言い難いですねー。二人共、カッパーに上がったのはいいけど、シルバーランクにまで挑まれて、少々苦戦しているようです」

「ふーん。そっちも大変なんだねー」

「セラの方こそ、どうなんですか？」

「こっちも暑苦しく頑張ってるけど、まだまだ先は長そうだよ。まあ、楽しいみたいだからいいけどさー」

アイリスには同行している仲間が二人いる。名前もよく知らないけれど、どうやら中々に暑苦しいタイプみたい。

一回、踏み込んで聞いてみたら話を逸らされた。わたしもアクセルの事を根掘り葉掘り聞かれたら嫌な気分になるだろうし、アイリスも同じなのだろう。この距離感がわたし達には丁度いいという事。

「それにしても、ここのパンケーキは絶品だよねー。ふわっふわで口の中でとろけるよー」

「むふふ、同感ですよ。さすがはオーヴェル・シティ随一のレストランですー！」

バレットの修行が終わったら、アルトに会いに行ける。それから三人でまた一緒に過ごせるようになる。いろんな場所を回って、いろんな経験をして、いつか復興した故郷に帰る。

アイリスとは、きつとここでお別れになる。旅人同士が再会出来る可能性って、どのくらいなんだろう？ そう考えると、親密になり過ぎる事が怖い。

「さてさてさーて！ わたしはバトルタワーに向かいますねー！」

「わたしは西エリアのショッピングモールに行ってくるよ」

「ではではー！」

「うん！ またね！」

アイリスの背中が見えなくなるまで見送ってから、西エリアに向かって歩き出す。

なんだか、少しだけ寂しい気持ちになった。

◆ ショッピングを終えて、買った物をホテルに届けてもらう手続きも済ませると、わたしは中央エリアのオーヴェル・ジムへ向かった。

裏手にある通用口に貫ったフリーパスで入る。一ヶ月通つて慣れ親しんだ道を歩くと、ジムトレーナーの人達が声を掛けてくれた。

ジムバトル用のバトルフィールドは地上にあるのだけど、わたしが向かう先は地下だ。そこにも広大なバトルフィールドがあつて、そこでアクセルとヴァイクはトレーニングに励んでいた。

「ファイアロー！ オレに向かってブレイブバード！」

「ア、アーイ！」

「ゴウカザル！ オレに向かってフレアドライブ！」

「ウキツ！」

頭が痛くなつてきた。相変わらず、ツツコミを入れなくなる修行風景だ。

ヴァイク曰く、ポケモンとトレーナーは一心同体。だから、ポケモンの技も実際に受けて、その力や痛みを知る必要があるとの事。

最初は止めてほしくてわんわん泣いてしまった。だけど、あの馬鹿共はわたしの涙をお菓子やアクセサリーで誤魔化しやがった。止める気は一切ない。それが分かつてしまつて、泣く泣く諦めたけど、見ているハラハラする。

ジツと見つめていると、ジムトレーナーのシャシャさんがいつものように紅茶とお菓子を運んできてくれた。

「あと、どのくらい掛かるんですか？」

「うーん。アクセルくんも大分腕を上げて来てますからね。けれど、我らがジムリーダーは凝り性なところがありまして……」

「まだまだ当分掛かるって事ですね」

ため息が出る。はやく、アルトに会いたい。

「オッス！ セラ！」

しばらく待っていると、アクセルが来た。

「オッスじゃない！ せめて、夜は帰ってきてよ！」

「わ、悪かったよ！ あんま怒るなって！ 今、結構いい感じなんだ」

今日は少しお説教をしてやろうと思っていた。

それなのに、アクセルはこっちの気も知らないで、それはもう楽しそうに修行の事を語り始める。強くなってきたいて、それが堪らなく嬉しいみたい。これではお説教で水を差す気が起きなくなってしまう。

「アクセル。今日はいい感じだったぞ。ファイアローの意志とお前の意志がシツカリとシンクロしていた。そろそろ、修行も第二段階に移れるな」

「第二段階……？ えっ?! そろそろ終わるんじゃないの!?!」

「ん？ 何を言っているんだ。まだまだ、これからだ！ 修行をつけていて実感した！ アクセルには素質がある！ だが、急いで仕事を仕損じるぞ」

「で、でも！」

急がないと、アルトに会えないまま、アルトが別の街に行ってしまう。折角、すぐ傍にいるのに！

「もう少し、辛抱しろ。アクセルならば、届くかもしれんだ。ポケモンとトレーナーの究極の在り方に！」

「きゅ、究極の在り方……？」

あまりの迫力に、わたしは目を丸くした。見ると、アクセルも初耳だったのか、ポカンとした表情を浮かべている。

「そうだな。そろそろ、見せてもいいだろう」

「見せるって？」

アクセルが聞くと、ヴァイクは言った。

「つい先日、カロスで確認された現象だ。ポケモン研究家のプラターヌは、それを『キズナ現象』と呼称し、論文を発表している」

「キズナ現象……。それって、一体……」

「実際に観たほうが早い。ついて来い。視聴覚室に行くぞ」

「は、はい」

「う、うっす」

視聴覚室に移動して、わたし達が観せられたのはカロス地方のポケモンリーグの映像だった。

目的の試合があるのか、メガリザードン同士の手汗握るバトルは早送りで省略されてしまい、アクセルは不満そうだった。

そして、ようやく等速に戻った映像は第二試合。

『続きまして、第二試合！ トモ選手とサトシ選手の入場です！』

バトルフィールドが地下から浮上してくる。けれど、様子がおかしい。片方の選手は既にバトルフィールドで待機しているのに、もう一方の選手が現れない。

「どうしたのかな？」

「わかんね」

しばらく待っていると、サトシ選手の失格を審判の人が宣言しようとして、そして、現れた。

『すみません！ 待って待って！ マサラ・タウンのサトシ、ここにいます！』

ギリギリセーフ。サトシ選手はバトルフィールドに現れた。肩にはピカチュウを乗せている。

「よく観ておけ、このトレーナーのバトルを」

ヴァイクが言った。

一体、何が始まるんだろう？

『おーっと！ ようやくサトシ選手が現れました！ ギリギリで間に合ったようです！』

サトシ選手は大観衆の注目が集まる中で腕を振り上げた。

『オレはマサラ・タウンのサトシ。夢はポケモンマスターになること！ そして、カロスリーグ優勝だ！』

思わず、呆気にとられてしまった。ポケモンリーグの初戦で優勝宣言をするトレーナーなんて、滅多にいない。少なくとも、今までテレビで観てきたリーグにはいなかった。

ヴァイクが見ると言ったトレーナーのバトル。『キズナ現象』。いったい、どんなバトルになるの？

横をチラリと見ると、アクセルも息を呑んで彼のバトルを待っている。

『出ました！ 優勝宣言！ さあ、サトシ選手がどんなバトルをする

のか、注目です!』

いよいよ始まる。トモ選手が繰り出したポケモンはチルタリス。

そして、サトシ選手が繰り出したポケモンは――、

『ゲッコウガ、君に決めた!』

『コウガッ!』

ゲッコウガ。アルトがチャンピオンに借りているポケモンと同じポケモン。

始まったバトル。先手を打ったのはトモ選手のチルタリス。りゅうのはどうがゲッコウガを襲う。そして、続けて放たれるりゅうせいぐん。情け容赦のない連続攻撃。いきなり戦闘不能にされてしまったのではないかと思った、その時だった。

『おーつと、これは強烈なりゅうせいぐん! ゲッコウガ、万事休すか!?!』

その実況の声に伝えるように、サトシ選手の声が響き渡る。

『オレ達のすべてを出すぞ! もっともっと強く! いくぞおおおつ!』

『コウガアアアッ!』

思わず立ち上がってしまった。映像の中で、ゲッコウガの姿が変化したのだ。

メガシンカとは違う。メガシンカなら、メガストーンを必要とする筈なのに、サトシ選手はメガストーンを使っていない。

きつと、これが『キズナ現象』なんだ。

姿を変えたゲッコウガはチルタリスを効果が今ひとつの筈のみずタイプのみずしゅりけんを使って一撃で倒してしまった。その後繰り出されるシャンデラや同種族のゲッコウガすら圧倒して二回戦進出を決めてしまった。

それから、サトシ選手の試合は続いていく。決勝では惜しくも負けてしまったけれど、最後まで胸を熱くさせるバトルの連続だった。

「あれが『キズナ現象』というものだ」

映像が終わると、胸の鼓動が止まらないわたし達に向かってヴァイクが言った。

「プラターヌ博士曰く、この現象は信頼関係の厚いポケモンとトレーナーの間で稀に起こるものだそうだ。あのサトシというトレーナーは『キズナ現象』が発動した時、ゲッコウガが見た光景を自らも見て、ゲッコウガの受けた痛みを自らも感じたと言っていたらしい。そして、この現象は数百年前にも目撃されている。カロスでは数例のみに留まるが、ここアガリアでも、似通った現象の記録が残されている」

ポケモンが見たものを見て、ポケモンが受けた痛みを感じる。ようやく、ヴァイクがアクセルに課している修行の意味が見えてきた気がする。

『キズナ現象』はポケモン側にも素質を求めるものらしい。だが、記録によれば、アガリアのポケモンにはその素質を持つものが数多く存在する筈なのだ。ポケモンとトレーナーの絆の力。それこそ、まさに最高にして、最強の奥義だと、オレは思う」

「で、でも、絆の力って、修行で身につくものなんですか？」

「それはオレにも分からない。なにしろ、前例がないからな」

「ええ……」

あんまりな物言いだ。要するに、アクセルの修行は成功するかどうかも分からない眉唾物という事だ。そんな事にこれ以上付き合っただなんていられない。

修行を辞めさせようと思って口を開きかけたら、アクセルは感動した様子で「すげえ」と言った。

ああ、これはダメね。

「オレも、サトシみたいに……!」

アクセルはヴァイクにせがんで映像をダビングしてもらった。

そして、ホテルに帰ると飽きもせず何度も何度も同じ映像を見続けるようになった。

「ファイアロー、サンダース、クロバット!」

いつの間にか進化していたクロバットを含め、手持ち三体をモンスターボールから出して、アクセルは言った。

「目指すぞ、『キズナ現象』!」

「ア—イッ!」

「ダース！」

「キイツ！」

困ったものだ。こんなに嬉しそうに燃えられたら、何も文句なんて
言えないじゃない。

だから、仕方なくわたしはこう言った。

「がんばれ、アクセル！」

「おう！」

第五話 『人間万事塞翁が馬』

「お前さん、相手は選んだほうがいいぜ？ ジムバッジ、欲しいんだろう？」

「選んでるよ。だから、勝負を挑んでいるんだ！」

ポケナビのアプリによれば、目の前のトレーナーはシルバーランク。シルバー以上は超級トレーナーだとアイリスが言っていた。

「舐めてるわけでもない。負ける前提ってわけでもない。なるほど、チャレンジャーってわけだ。いいぜ、相手になってやる！ 本気でな！ それがお前さんの向上心と勇気に対する礼儀だ！」

互いにモンスターボールをホルダーから外す。

「いくぜ、ゲンガー！」

「スピアー！」

第五話 『人間万事塞翁が馬』

「わたし、思うんですよ」

バトルを終えて、ポケモンセンターに寄ってからホテルに戻ると、いきなりアイリスがそう切り出した。

何の事かと、先に戻っていたバレットを見ると、彼もよく分からないのか肩を竦めた。

「あなた達、明らかに勝率が下がってますよね」

返す言葉もない。今日のバトル、一度も勝てなかった。今日だけじゃない。昨日も、一昨日も、負けっぱなしだ。街中だからゲッコウガのフルパワーを使えないとか、相手がシルバーランクだとか、そんな事は言い訳にならない。

バレットを横目で見ると、彼も押し殺したような表情を浮かべている。

「理由が分かっていないようなので、お答えしましょう。正直、自分で気づいて欲しかったのですが」

アイリスは呆れたように言った。

「ポケモンバトルはあなた達だけじゃなくて、ポケモン達にも負担を掛ける事、忘れてませんか？」

その言葉に、体が強張った。ユニオン大会の時、ジョーイさんに教えられた事。

『ポケモンバトルはポケモンの肉体だけじゃなくて、精神も削るの。連戦すれば、そのストレスは多大なものになるわ』

教えてもらったのに、ここ一ヶ月の間、ほとんど休む事なくバトルを続けていた。

「アギトに折角教えてもらったポケモンのケアも、前に行ったのはいいんですか？」

「いつだろう。毎日続ける筈だったのに、いつやったのか思い出せない。」

いつも夜遅くまでバトルをしていたから、帰ってきて直ぐに眠ってしまったていた。

「バトルシティの空気に呑まれましたね。強者を求めれば天井知らずの場所ですから、無意識に焦りを覚えていたのでしょうか」

「やれやれとため息を吐くアイリス。」

「ポケモンとトレーナー。二つで一つなのです。トレーナーが焦り、ポケモンを酷使すれば、相手が誰だろうと負けて当然ですよ」

「……うっせーな。だったら、もっと早く言えよ」

バレットが不機嫌そうに言った。きつと、俺も口を開いたら同じような事を言ってしまう。

傍で見て分かっていたなら、もっと早く言っただけだった。戦って、戦って、休む暇も与えなかった俺を、スピアー達はどう思っただろう。今になって、冷水を浴びせられたような気分になっている。

「言っただけでしょう？ 自分で気づいて欲しかったと。あなた達なら、気づけると思ったのです。だけど、気づかないまま、今日まで来てしまった。ええ、わたしも少し反省しています……」

バレットは口を噤んだ。まるで、今にも泣きそうな顔をしている。俺も同じだ。だけど、泣いている場合じゃない。

「スピアー」

モンスターボールからスピアーを出すと、スピアーの体は一ヶ月前と比べて、明らかに傷が多く、汚れも多かった。如何に、俺がスピアー

の事をちやんと見ていなかったのか、分かった。

「ごめん……。ごめんね、スピアー」

「スピ!? スピィ!」

スピアーは慌てている。当たり前だ。いきなり、こんな風に謝られても困ってしまう。

俺は部屋の備え付けのタンスの中からケア用品を取り出した。使っていないくて、薄っすらと埃を被っていた。

「スピアー、体拭くね」

「スピ? スピ!」

嬉しそうに近寄ってくるスピアー。

「……ライチュウ」

バレットもライチュウの毛づくろいを始めた。静かに、黙々と。

「スピ!」

「ライラー!」

嬉しそうなスピアーとライチュウの声が部屋に響く。嬉しかった筈なのに、この声を聞いたかった筈なのに、どうして忘れていたんだろう。

「……言い出せなかった理由、実はもう一つあります」

アイリスがポツリと言った。

「あなた達はリール・シテイで強いトレーナーとの負けられないバトルを何度も繰り返しました。きっと、それが吞まれた要因です。……要するに、わたしのせいです」

自罰的な表情を浮かべる彼女。

「一緒に行くって決めたのは俺達だよ」

だから、そんな事を言い訳にしたりしない。

言い訳なんかしたら、今度こそ、スピアー達に顔向けできない。

「アイリス」

バレットが呟くように言った。

「さっきのは八つ当たりだ。悪かった」

その後は、誰も喋らなかつた。

スピアーの次はキテルグマ。その次はゲツコウガ。一匹ずつ、丁寧

にケアしていく。

無茶をさせて来たのに、三匹共、嬉しそうに身を任せてくれた。

「……サレナに行かない?」

しばらくして、俺は言った。

「そうだな。アギトも待つてるし」

「いいと思いますよ。経験なら、もう十分に得られたと思います」

最初にこの街に来ていたら、違っていたかもしれない。だけど、今の俺には来るのが早過ぎた。

いつか、バトルシテイの空気に呑まれないようになったら、また挑戦しに来よう。

その日、俺達は荷物をまとめた。朝になったら出発する為に。

◆ 『アギト。どう? 楽しんでる?』

ポケナビのマイクが拾わない程度にため息をこぼす。楽しい気分が台無しだ。

今日のポフレは中々の出来で、先生にも褒められた。リザードン達にも好評で、アルト達が来た時に振る舞えるよう、レポートをまとめていたところだった。

「何の用だ?」

『まったく、無愛想な子ね』

茶番に付き合う気はない。無言を貫いていると、ようやく本題に入った。

『ようやく、ナザレの居場所が判明したのよ。まったく、あの魔女のせいで余計な手間を取らされたわ』

魔女。このアガリアにおいて、それは一人の女を指し示す言葉だ。

大迷宮パレスの魔女・ドロシー。

アガリアの四大魔境の一つ、ファイオレの大迷宮を管理しているブラック・ランクのトレーナーであり、同時にファイオレ・ジムのジムリーダーでもある。

今から二ヶ月程前、ナザレはザラクと戦い、その途中で乱入して来たドロシーに拉致された。その消息を電話の相手は血眼になって探

し続けていたらしい。

「それで？」

『察しはついているんでしょ？ ナザレを連れ戻しに行つてちようだい』

再びため息を零す。

「場所は？」

『サレナとオーヴェルの間に広がる森。その奥地に佇む廃墟よ』
「わかった」

通話を切り、舌を打つ。

ポフレスクールで、まだまだ学びたい事がたくさんあった。それに、ここで待つていれば、またアルト達と会える筈だった。

「いや、諦める必要はないな。スクールには、停学届けを出そう。アルト達には、こつちから会いに行こう。行き先もオーヴェルとの狭間だ。まったく問題ない」

思い立ったが吉日だ。オレは早速停学届けをしたためた。復学届もついでに書いておこう。

第六話 『遭遇』

目が覚めた。ひどく、長い夢を見ていた。

「うんうん！ バッチリみたいね！」

目の前で、魔女がはしゃいでいる。黒いトンガリ帽子と、黒いローブ。まるで、絵本やお伽噺の世界から飛び出してきたかのようないでたちだ。

彼女の名前はドロシー。アガリアの四大魔境の一つ、フィオレの大迷宮を管理しているフィオレ・ジムのジムリーダーだ。

「ダークライのダークホールにザラクのフーデインのさいみんじゅつ。そこへ複数のエスパールポケモンによるさいみんじゅつの上書き。さすがのわたしもドン引きだよ！ 感謝してよねー、ナザレ！」

記憶が穴だらけになっていて、すべてを思い出す事は出来ない。けれど、彼女の言う通り、欠落し始める寸前の記憶にダークライの姿があった。

雪原に倒れ伏す少女の姿。怒りに燃えるザラクの顔。見たこともないゲッコウガの姿。フーデインの憎悪に満ちた眼。破壊され尽くした、メルカト・シティ。

明滅するように脳裏に浮かぶ光景は、どれも抑えがたい感情を湧き上がらせてくる。

「……彼女は、わたしは、彼に何を」

「あなたはジユラの巫女を殺した。巫女の伴侶となる筈だった少年は修羅となり、復讐を果たした。そして、今のアガリアになった。大まかに説明すると、こんなところね」

吐き気がこみ上げてきた。彼女の言葉によって、空いていた穴が塞がれていく。

「ブークスクス！ それにしても、笑っちゃうわよね！ まさに運命的って感じ！ これだから、やめらんないのよねー」

ドロシーは妖しく微笑みながら言った。

「ナザレ。あなたの頭の中は疑問だらけ。違う？」

違う。

何故、ダークライが現れたの？

何故、わたしは彼女を殺したの？

何故、メルカト・シテイは壊されたの？

何故？ 何故？ 何故？

頭の中は何故ばかりだ。

「悩めるあなたに救済を」

ドロシーは言った。

「真実を識りたければ、この子の手を取りなさい」

彼女がモンスターボールから出したのは、ケーシイだった。

「ドロシー。あなたの目的はなに？」

「わたしの目的？ 決まってるじゃない！」

彼女は朗らかに笑った。

「楽しみたいのよ！ あなた達で！」

邪気の欠片も匂わせず、邪気に満ちた事を言う。だから、わたしは

この女が恐ろしい。

わたしは逃げるように、ケーシイの手を取った。

第六話『遭遇』

「ハア!? 街を出る!?! なんで!?!」

テールをバシーンと叩きながらセラが詰め寄ってくる。

「さすがにオーバーリアクション過ぎないか？」

「全然オーバーじゃないわよ！ むしろ、足りないくらいよ！」

机をバシーンと叩いておいてこの言い草。

「なんで、そんな怒ってんだよ」

「怒ってない！」

目尻を吊り上げ、ドスの利いた声を響かせる様は紛れもなく怒れる猛獣だ。

「怒ってるだろ」

ギャオーと、まるでバンギラスだ。

「アルトの事はどうするのよ!?!」

「アルトの事？」

なんだか、話が噛み合っていない気がする。

「もしかして、なんか勘違いしてないか？」

「勘違いって？」

「街を出るって言っても、行き先は近くの森だけ？」

「は？」

「新しいポケモンをゲットしに行くんだ」

「新しいポケモン？ どうして、そんな急に？」

「今のままだと、いつまで経っても第二段階を突破できないからだ」

「……五大会で優勝するってヤツ？」

オーヴェル・シテイに来て、一ヶ月。修行は第二段階に入った。

その内容は、五つの大会に出場して優勝する事。要するに、ノーマルからブロンズへのランクアップだ。

オーヴェルでは毎日数多くの大会が行われていて、その種類は多岐に渡る。

ランク別のスタンダード・トーナメント。

タイプが限定されるエキスパート・トーナメント。

ポケモンを限定するマニアック・トーナメント。

勝利条件が特殊なテクニカル・トーナメント。

レンタルしたポケモンのみで戦うボロウ・トーナメント。

どれも一筋縄ではいかない大会だ。そして、ヴァイクはそのすべての種類の大会で優勝して来いと言ってきた。

それぞれの大会では、優勝する為に求められるものが大きく異なる。それらすべてを吸収して来いとのこと。

「でも、結構順調だったじゃない」

セラの言う通り、ストレートに勝てたわけではないが、それでも既にスタンダード、ボロウ、テクニカルの三つの大会で優勝を果たしている。順調と言えば順調だ。

だけど、エキスパート・トーナメントやマニアック・トーナメントは今の手持ちだと条件を満たせる大会が少ない。それに、参加出来ても一体だけで勝ち抜かないといけない場合が殆どだ。

「いくら順調に勝ち進めても、一体だけで全部の試合を戦うのはダメだ。ファイアロー達なら勝てるかもしれないけど、負担が大きすぎ

る」

「……なるほど」

セラは深々とため息をこぼした。

「もう、びつくりしたー。いきなり街を出る！　なんて言うから、アルトに会うの諦めたのかと思っちゃったじゃない！」

「そんなわけないだろ」

「だってー」

「ってか、会うだけならいつでも会いに行けんだろ？　オレは師匠に修行完了まで禁止されてるけど、セラは別だし」

アクセルの言葉にセラは頬を膨らませた。

「な、なんだよ!？」

「ばーか！」

「はあ!？」

セラはオレに背を向けるとスタスタとどこかへ行ってしまった。

「アイツ、時々わけわかんなくなるな……」

◆

翌日、オレは早速オーヴェル・シティの東に広がるエズの森へ向かった。

ここはサレナ・シティとの間に広がる森で、『迷いの森』という別称を持っている。

一応、サレナまでの道は整備されているけど、その両側の森には人の手が殆ど入れられていない。立入禁止にはなっていないけど、注意勧告の看板が数メートル置きに置かれていた。

「よーし！　気合入れるぜ！」

注意勧告の看板の横から堂々と森へ足を踏み入れる。

オレにはクロバットがいるから、迷子になる心配は一切ない。超音波を使って、どんなに複雑な地形でも瞬く間に出口を見つけ出せる。

意気揚々と歩き続けて三時間。早くも帰りたくなってきた。早朝に出発して、まだ正午になりたてだというのに森の中は仄暗く、十数メートル先すら見通せない。行けども行けども風景に変化は無く、自分が今、正しい道順を歩いているのかどうかも分からない。

更に奇妙なことが一つ。これだけ歩いていけば、嫌でも野生のポケモンと接触する筈なんだけど、出会うどころか、ポケモンの息遣いを欠片も感じられない。まるで、この森にいるのがオレだけのような錯覚を覚える。

「もう、帰ろっかな……」

来た道に戻ろうと振り返ると、あつという間に方向感覚を失った。なにしろ、どこを向いても同じ光景が広がっている。

「クロバット、頼むー!」

さすがは『迷いの森』だ。自力で脱出する事は不可能に近い。

「キィ!」

モンスターボールから飛び出したクロバットに森の出口を探してもらおう。

「キィ!」

突然、クロバットが慌てだした。

「どうしたんだ?」

「キ、キィ!」

クロバットが急上昇していく。すると、さっきまでクロバットのいた空間目掛けて、光線が飛んできた。

「破壊光線!」

クロバットが狙われている。さっきまで感じられなかったポケモン達の気配が急に濃くなってきた。

「なんか、やばい! もどれ、クロバット!」

クロバットをモンスターボールに戻す。けれど、ポケモン達の気配は消えていない。

止まっていたら囲まれる。必死に足を動かした。

方角なんて分からない。どこに向かっているのかも分からない。だけど、とにかく走る。

「うおっ! ひょう! へあ!」

茂みの向こうから突風が吹き荒び、そうかと思うと雷が走り、さらにいわなだれが襲いかかってきた。どう考えても一匹のポケモンじゃない。複数のポケモンが付け狙ってきている。

「なんでだ!?!」

さつきまでは完全に無視を決め込んでいたくせに、いきなり張り切りすぎだ。

「いつそ、迎え撃つか? でも、さすがに複数相手だとジリ貧だし……」

それにしても、オレってかなり運動神経が良かったみたいだ。さつきから不意打ち気味のポケモンの技をうまく回避出来ている。

「もしかして、オレって、天才か? ハッハー! お前らの攻撃なんて当たらねーよ! バーカ、バーカ!」

そう言った途端、ドドドドとこおりのつぶてが飛んできた。

「うわー!?! 調子こいてすんません!」

右に左に木を盾にしながら突き進んでいく。もう、自分が森のどの辺にいるのかサッパリだ。

「これ、やばくね? これ、やばいよな! どうする? どうする!?! どうするよ、オレ!」

奇跡的に全弾回避に成功してるけど、そろそろ息が切れてきた。もう、あまり長く持ちそうにない。

「勝てるか!?! 勝てるよな! オレ達ならいける!」

少し開けた空間に出た瞬間、意を決して立ち止まる。

「いくぞ、ファイアロー! クロバット! サンダース!」

「アーイッ!」

「キイイ!」

「ダースッ!」

もう、迎え撃つ以外に道はない。敵はまだ顔を見せないが、構うものか!

「クロバット、ちょうおんぱ! ファイアローはニトロチャージ! サンダースはひかりのかべ!」

とにかく、後手に回るのはまずい。クロバットのちょうおんぱは相手を混乱させると同時に相手の居場所を見つけ出す事が出来る。後はニトロチャージで加速したファイアローの攻撃をかますだけだ。トレーナーがいるならともかく、野生のポケモンが相手ならいける筈

だ。

「なんだ!?!」

とんでもない爆音が木々の向こうから響いてきた。耳を塞いでも鳴り響く音。

「ばくおんぱ!?!」

ちようおんぱを無効にすると同時にこちらへダメージを与える最善解。ひかりのかべの外にいたクロバットとファイアローがよろけてしまっている。

「まさか、トレーナーがいるのか!?!」

いや、考えている暇はない。トレーナーがいてもいなくても、このままだとやられる。

敵の数、敵の実力、敵の居場所。なにも分かっていない。対して、こっちはすべて出し尽くしている。

「……よし、決めた! サンダース、フラッシュだ!」

「ダースッ!」

まばゆい光が溢れ出す。

「ファイアロー!」

「アーイツ!」

クロバットとサンダースをボールに戻すと、ファイアローがこっちに突っ込んでくる。背中を向けると、ファイアローは見事にオレを掴んだ。

「よーし、逃げるぞー!」

「アーイツ!」

「ハッハー! オレのファイアローのスピードは世界一だぜえ!」

「アーイツ!」

しばらく飛んで、そろそろ着陸しようかと思った矢先、いきなり正面から爆音がなり響いた。

「はあ!? まさか、もう追いつかれたのか!?!」

オレを抱えていたとはいえ、ファイアローのスピードは天下一品だ。追いつかれるどころか追い抜かれて回り込まれるなんてあり得ない。

仰天している内に森を抜けた。オーヴェルとサレナを結ぶ6番道路じゃない。そこにあつたのは巨大な建物だ。

「なんだこりゃ!？」

嘗ては絢爛豪華な城塞だったのだろう。けれど、今では苔だらけ、罅だらけ。まさに廃墟だ。

「つて、やべー！」

建物の近くにリザードンがいた。傍にはトレーナーの姿もある。

「さっきの連中とは別口か？」

逃げる？ 論外だ。

だって、リザードンは女の人を襲っている。

理由なんて分からない。もしかしたら、襲われている方がとんでもない悪党なのかもしれない。

でも、親父はいつも言っていた。

『いいか、アクセル。誰かが困っていたり、辛い目に合ってたたら、何も考えなくていい。まずは助ける。事情だとか、善悪だとか、そういう七面倒臭い事は助けた後に考えな!』

オレは将来、親父みたいな立派な警察官になる。困っている人を救けるのが警察官の仕事だ。

「ファイアロー、ブレイブバード！」

「アーイツ！」

ファイアローがリザードンに向かって飛んでいく。向こうもコツチに気がついた。

赤い髪と赤い瞳の男。年齢はたぶん、同じ年!

「へいへい! ポケモンバトルはポケモン同士でバトルするもんだぜ!」

「……驚いたな。まさか、乱入されるとは」

湧き上がるようなプレッシャー。コイツ、絶対に強い。

「だめ。君では勝てない。さがっていて」

折角滾ってきているところなのに、うしろの姉ちゃんがなんか言ってる。

「やだね！」

「え?」

「同じ年の強いヤツ。コイツから逃げたら、いつまで経ってもアルトに追いつけない。」

「おい、お前! バトルしようぜ!」

「お前じゃない。アギトだ。いいだろう、バトルだ!」

「話の分かるヤツは大好きだ。」

「いくぜ、ファイアロー!」

「迎え撃て、リザードン!」

「絶対に勝つ!」

第七話 『再会』

ヴリル教団幹部・シャーリーは憂鬱な気分になっていた。

「最近、こんなのばかり」

世間では、『ヴリル教団は悪である』という風評が広がっている。実際、教団は様々な悪事に手を染めている。おかげでアガリア警察にマークされ、逮捕者も続出している。

今のヴリル教団はおかしい。そう囁く声が教団内でも増えてきている。

「オブライエンとも連絡がつかないし……」

ヴリル教団幹部・オブライエン。彼も今のヴリル教団に疑問を抱く者の一人だった。

「まあ、新しいのが入って来た……」

今回、シャーリーに下された命令はエズの森に入り込んだ者を追いつ返す事。今朝方入って来た少年は出口にそれとなく誘導していたのにファイアローに乗って奥地の方へ行ってしまった。

「迷いの森になんで自分から入りに来るかなー」

今とはある理由から野生のポケモン達が巣穴に引っ込んでいるが、常ならば強力なポケモン達がそれぞれの領域をそれぞれのやり方で守っている。四大魔境には劣るものの、この森は最高ランクの危険度を誇る場所だ。

入ってきたのは四人の子供。それも、内三つの顔には見覚えがある。

『『アルトギア手記』の所有者じゃん。うわっ、最悪。なんで、よりもよって……』

ヴリル教団の幹部には序列がある。シャーリーは幹部の中でも下っ端であり、上からのつ命令には逆らう事が出来ない。

「手を出すな。でも、追い払え？ 無茶言っつてんじゃないわよ！」
そろそろ潮時なのかもしれない。シャーリーは思った。

元々、ヴリル教団はメルカト・シテイを総本山とする『竜神教』から枝分かれした宗派だ。

代々の巫女を奉る竜神教に対して、人を崇めるのはおかしいと声を上げたのがヴリル教の開祖だった。

シャーリーはその時に開祖へついたメルカトの民の末裔だ。本人の意志は関係なく、彼女ははじめからヴリル教団の幹部としての人生を歩まされてきた。

とはいえ、昔から不満を抱いていたわけではない。数年前までは悪事とはかけ離れた慈善団体だった。そもそも、ヴリル教団の教義は『ポケモンと人の絆を深め、一体となる』というものだ。

数年前、『アルトギア手記』の情報が回り始めてから、すべてがおかしくなってしまうた。

「これで最後にしよう」

四人の子供達の下へ向かう。

第七話『再会』

「どうなってるんですか!」

アイリスが爆発した。

「自分から迎えに行くと言っておきながら、連絡すらつかないって、舐めてるんですか!」

「どうどう。落ち着いて、アイリス」

ヒヒーンと唸るアイリスを宥めつつポケナビを起動させる。アップリケーションから電話を選択して、アギトの名前をプッシュする。接続中の文字が表示され、しばらくすると呼び出し中に変わる。けれど、通話状態になる前に接続が切れてしまった。

昨夜、オーヴェルを出て、サレナに向かう事を決めた時、アギトにもその旨を伝えた。すると、彼は折角だから迎えに行くと言って、時間を指定してきた。それなのに、約束の時間はとっくに過ぎている。アイリスだけじゃなくて、バレットもイライラし始めている。

「もう出かけようぜ。ちんたらしてたら着くまでに日が暮れちゃう」

「でも、行き違いになるかもしれないよ?」

「知るかよ。時間を指定しておいて来ない方が悪いだろ」

バレットは容赦がない。かなり怒っているみたいだ。

仕方なく、俺達はホテルを出て、オーヴェルとサレナを繋ぐ6番道

路のゲートに向かった。

「あれ？」

ゲートにたどり着くと、そこには予想外の人物が右往左往していた。

「セラ!？」

「え？ あ、アルト!？」

そこにいたのは幼馴染のセラだった。シャンティ・シティにいるはずの彼女がどうしてオーヴェルにいるのか不思議だったけど、久しぶりの再会に胸が踊った。

「久しぶり！ 元気にしてた!？」

「このバカアルト!？」

「へあ!？」

再会を喜び合う筈が、なぜか殴り飛ばされた。

「アルト!？」

バレットが駆け寄ってくる。

「お、おい、なんだあの暴力女は!？」

ドン引きしつつ俺を守るようにセラを睨むバレット。

「お、幼馴染」

「幼馴染を出会い頭に殴ったのか!？」

セラはとさえええ、アイリスに宥められている。

「お、落ち着いてください、セラ!？」

「つていうか、なんでアイリスがアルトと一緒にいるの!？ アイリスと一緒に旅をしている仲間って、アルトの事だったの!？」

「え、ええ、まあ。いやー、世間は狭いですねー!？」

「狭いですねー、じゃない!？ つまり、ヴリル教団に追われてる少女って、アイリスの事だったの!？」

セラの言葉にアイリスが凍りついた。

「何故、それを……」

「ヴァイクから聞いたのよー!？」

ヴァイク。たしか、この街のジムリーダーの名前だ。

「そんな事より、アルト!？ どうして、連絡を入れないのよ!？ おばさ

んもカンカンだよ！」

「うっ!？」

そう言えば、旅に出てからいろいろなことがあり過ぎて連絡を入れた記憶がほとんどない。

「ユニオン大会の事だつて、わたし達はエルフランさんから教えてもらったんだからね！ それに、ヴリル教団と戦っているなんて！」

「わ、悪かったよ。今度からはちゃんと連絡を入れるから……」

「ウソおっしやい！ アクセルもそうだけど、アルトも何かに集中すると他の事がすぐに疎かになるんだから！」

ぐうの音も出ない。実際、連絡を完全に忘れていた。

「こっちから何回掛けても不通だし！ もう！」

そう言えば、何回か着信があった。けど、大会前だったり、バトル中だったり、ジムバトル前だったりでて出ている余裕がなかった。折り返そうとも思っただけど、バトルが終わるころには忘れてしまっていた。

「そ、それよりもセラ！ アクセルはどこにいるの!？」

このままだと説教タイムに突入してしまう。慌てて話を逸らすことにした。

「話を逸らそうとしてる……」

バレた。

「もう！ アクセルはエズの森に行ってるの」

「エズの森に？」

たしか、そこは6番道路の南北に広がる広大な森だ。

「なんでまた？」

「新しいポケモンをゲットするんだってさ。でも、お昼に帰ってくる筈だったのに、全然帰ってこないのよ……」

途端にセラは不安そうな表情を浮かべた。

「それは確かに心配ですね。あの森には強力なポケモン達の縄張りがあるからここに点在していますから」

「どうするっ!？」

バレットが俺に問う。答えは決まってる。

「アクセルを探しに行きたい。付き合ってくれる?」

「もちろんですよ!」

「エズの森。暇つぶしには悪くない」

決定だ。サレナに向かうのは明日になる。

俺達はそのままゲートを抜けて、6番道路に入った。

セラは残るように言ったけど、心配だから付いていくと言って譲らなかつた。

「アクセルは北と南のどっちに行つたと思う?」

まずはそこからだ。

「待ってて」

セラはホルダーからボールを取つた。

「出て来て、グラエナ!」

「ガウツ!」

かみつきポケモンのグラエナだ。なんだか、見覚えがある。

「もしかして、アラートさんの?」

「ガウツ!」

やっぱりそうだ。このグラエナはアクセルの父親であるアラートのポケモンだ。

「この子なら、アクセルの痕跡を追跡出来る筈よ! お願いね、グラエナ!」

「ガウツ!」

早速、グラエナはアクセルのにおいをかぎわけ始めた。

「ガウツ!」

アクセルのにおいを見つけたらしい。一直線に北の森を駆けていく。さすがは警察アラートのポケモン犬だ。

グラエナを見失わないように必死に走っていると、急に拓けた場所に出た。グラエナは立ち止まり、唸り声をあげている。

「どうしたの、グラエナ!」

「ガウツ! ガウツ!」

グラエナは一点を見つめて吠えている。

「あんまり吠えないでほしいな」

茂みをかき分けて、一人の女性が姿を現した。

途端に、アイリスが殺気立ち、モンスターボールを構える。

「ヴリル教団幹部・シャーリー！」

「おやまー、裏方に徹してたからバレてないと思ってたんだけど」

油断していた。オーヴェルでは名前を聞くことさえなかったのに、街を出た途端に遭遇するなんて。

「セラ、下がっていて！」

「う、うん」

ゲッコウガのボールを取り出す。バレットもモンスターボールを構えた。

「ノコノコと姿を現すとはいい度胸ですね」

「待つて待つて！ 戦いに来たわけじゃないんだって！」

「問答は無用です。あなたもポケモントレーナーならば、バトルで語りなさい」

アイリスがヒートアップしている。無理もない。幹部クラスという事は、シャーリーはアイリスのお姉さんの仇の一人という事だ。

「うわー、取り付く島もない感じ……」

シャーリーはうんざりした様子で言う、モンスターボールを取り出した。

「これは純粋な善意だよ。この先に行くのはやめておきな」

シャーリーが繰り出したのはピジョットだった。その背に跨り、彼女は言う。

『『アルトギア手記』も、まだ持つてるならさっさと警察にでも渡しちやいな！』

「なっ!? 待ちなさい！」

ピジョットはアイリスの声を無視して上昇していく。

「このまま進んだら、間違いなく碌なことにならないよ！ これ、お姉さんからの忠告！」

言いたいことだけを言って、シャーリーとピジョットはどこかへ飛び去ってしまった。

「なんだったんだ、アイツ」

いきなり現れて、いきなり去っていった。

「この先に行くのはやめとけって言ってたね」

「ヴリル教団の幹部の言う事なんて、聞く必要はありません！」

「落ち着け、アイリス」

キシャーと猛るアイリスを宥めつつ、バレットは言った。

「少なくとも、他のヴリル教団の人間がいることは確かだろう。これは、少し急いだほうが良さそうだな」

「ど、どういう事？」

セラが不安そうに聞いた。

「帰ってこないアクセル。ヴリル教団がうろついている森。ちよつと嫌な予感がするね。グラエナー！」

「ガウツ！」

グラエナが再び走り出す。

「ちよ、ちよつと！ 嫌な予感ってなによ！」

「セラ。とにかく、今はアクセルを探そう！」

森の中を一直線に駆け抜けていく。しばらく走っていると、木々の合間に赤い光が見え始めた。

「な、なにあれ？」

「ほのおか!？」

「急ぎましょう！」

「うん！」

森を抜ける。

「グオオオオツ！」

「アーツ！」

視界が広がった瞬間、飛び込んできたのは二体のポケモン。高速で飛び回るファイアローにメガリザードンが翻弄されている。

「やるじゃないか！ まさか、これほどまでとは思わなかった！ シャーリーの警戒網を抜けてくるだけの事はある！」

「そっちのリザードンもやるじゃねーか！ 一撃でも喰らったらヤベー！ ファイアロー！ もつとスピードを上げるぞ！ ニトロチャージ！」

二つの聞き覚えのある声に応えて、二体のポケモンがぶつかり合う。

「見極めろ、リザードン！ ドラゴンクロー！」

「お前なら躲せる！ すれ違い様にはがねのつばさー！」

「グオオオオッ！」

「アーイッ！」

刹那の攻防。振り下ろされたメガリザードンのドラゴンクローをファイアローは紙一重で躲した。そして、そのまま腹部にはがねのつばさを打ち込んだ。

ダメージは大きくない。けれど、メガリザードンは体勢を崩してしまった。

「今だ、ファイアロー！ ブレイブバード！」

「アーイッ！」

「受け止めろ、リザードン！」

「なに!？」

「グオオオオッ！」

信じられない。トップスピードまで加速したファイアローのブレイブバードをメガリザードンは真正面から受け止めてしまった。

「アイアンテール！」

「グオオオオッ！」

「ファイアロー!？」

吹き飛ばされるファイアロー。

「いくぞ、アクセル！ 烈火の如く燃える魂！ 受けろ、『ダイナミックフルフレイム』」

「だ、ダメだ、ファイアロー！」

あまりの光景に凍り付いていた思考が一気に再起動を果たす。

バトルをしていたのはアクセルとアギト。様々な疑問が脳裏を過るが、そんな事に思考を割いている場合じゃない。

アクセルはあろうことか、ファイアローを庇って、メガリザードンの乙わざである『ダイナミックフルフレイム』の前に飛び出したのだ。「ゲッコウガ！ たのむ！」

「フリーザー！」

「レントラー！」

「サーナイト！」

一斉に飛び出すポケモン達。だけど、間に合わない。

「レックウザ！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオ！」

誰かがアクセルの前に飛び出した。そして、開かれたボールから繰り出されたのは、天空を住処とする伝説のポケモン・レックウザだった。

「ガリユウテンセイ！」

第八話 『壁画』

「ガリョウテンセイ！」

その声と共にレックウザの体が光り輝いた。その光の一部がレックウザの体を離れて、アイリスのフリーザー目掛けて飛んでいく。咄嗟に光を回避したフリーザー。けれど、光はまるで意志を持つかのよううねり、フリーザーの翼にぶつかつた。

その直後、アギトのメガリザードンのZわざ、ダイナミックフルフレイムがレックウザに直撃する。衝撃によつて大地に亀裂が走る。フリーザーは咄嗟に近くのアイスとバレットを掴んで飛翔した。

「アルト！」

バレットがアルトに手を伸ばす。けれど、彼の視線は別の方向を向いていた。

「ゲッコウガ！ セラをー！」

「コウガッ！」

広がっていく亀裂。ゲッコウガは間一髪でセラの救出に成功した。

「アルト！」

アルトの体が亀裂に飲み込まれていく。

「コウガアッ！」

「来るな！ セラを頼む！」

慌ててアルトを助けに行こうとしたゲッコウガにアルトは叫んだ。広がり続ける亀裂はやがて、アルトを完全に飲み込んでしまった。

第八話 『壁画』

想定外だ。レックウザのガリョウテンセイが発動しなかった。レックウザが命令を拒絶したわけではない。実際、発動しようとはしていた。けれど、メガレックウザにメガシンカする為のエネルギーがフリーザーの方へ引き寄せられてしまった。

おかげでダイナミックフルフレイムが直撃し、地面が割れ、奈落へ落ちてしまった。

「さて、困ったな」

落ちてきた穴は瓦礫によつて塞がれてしまったらしく、光がまつた

くない。これではレックウザをモンスターボールから出すことも出来ない。

咄嗟に庇った少年は気を失っている。

「勇敢だし、バトルのセンスも中々のものだったな」

先日まで悪意の坩堝に居た身としては眩く感じる。

「地面に横たえておくのも可哀そうか」

膝の上に少年の頭を乗せる。これで、少しは負担も減るだろう。

「それにしても、ドロシーめ……」

テレポートされた先は廃墟だった。

『真実を識りたければ、この子の手を取りなさい』

そう言われたから、何かあるのかと調べてみたが、なにも無く、代わりにヴリル教団の大幹部の子飼いが現れた。

「あのアギトという少年についていくべきだったのか？」

真実の導。それが何なのかが分からない。

もしかしたら、この状況がそれなのかもしれない。

「まさか、この子？」

すやすやと寝息を立てている少年の頭を撫でてみる。

「うへへ、ファイアロー……。ちょう、かつこいーぞー」

頬が緩む。ダークライのダークホールに引き込まれる前、よく神殿にやって来ていた少年を思い出した。あれから二年。おそらく、この子と同じくらいの歳になっているだろう。

「バレットは元気かな？」

あの子も勇敢で心優しい少年だった。破壊されたメルカト・シティの光景が脳裏を過る。万が一の可能性を考えてしまい、胸が痛んだ。

「わたしのせいだ……」

幻のポケモンが相手だったから、など言い訳にもならない。屈してはならない相手に屈してしまった。

「……姉ちゃん、泣いてんのか？」

「え？」

どうやら、わたしは涙を流していたようだ。少年の頬にわたしの涙が伝っている。

「ああ、起こしてしまつてごめんなさい」

「なんで謝るのさ？ それより、どつか痛いのか？」

心配そうに覗き込んでくる男の子にわたしは困ってしまった。

事情を説明することはできない。けれど、なんでもないと行って納得するタイプとも思えない。

「少し、思い出に浸っていたの。それより、あなたこそ、どこかに痛みはない？」

「オレ？ オレは平気さ！ っていうか、なんでオレ、寝てんだ？」

彼は軽快な動きで起き上がった。

「それにしても暗いな」

彼はボールホルダーに手を伸ばした。

「あれ？ あつ、そつか！ たぶん、大丈夫だよな……。よし、出てこい！ サンダース！」

「ダース！」

ボールから飛び出したサンダースは一直線に少年へ体当たりをした。

「うわわっ！ どうしたんだよ!？」

「ダース！ ダース！」

声が震えている。きつと、ボールの中で彼の事をずっと心配していたのだろう。

「その子、きつとあなたの事を心配していたんだよ」

「そうなのか？ サンキュー、サンダース！ だけど、大丈夫！ オレ、ピンピンしてんぜ！」

「ダース！」

サンダースは嬉しそうに鳴いた。

わたしは確信した。この子は極めて優秀なポケモントレーナーだ。ポケモンに心の底から愛されている。それこそがポケモントレーナーにとって最も大切なことだから。

「よし、サンダース！ フラッシュユダ！」

「ダース！」

少年の掛け声で、サンダースはフラッシュユを発動した。辺りが真昼

のように照らされる。

「わーお」

彼は辺りの壁を見回すと歓声を上げた。わたしもつられて彼の視線を追う。すると、彼の歓声の理由がすぐに分かった。

壁一面にポケモンの壁画がずらりと並んでいた。

「すっげー！ コスラ洞窟みたいだ！」

「コスラ洞窟？」

聞き覚えがある。だけど、どこで聞いたのか、明確には思い出せない。

「オレの故郷の地下にあった洞窟だよ！」

「そうなんだ」

「おう！ つと、忘れてた！ 初対面の人にはまず挨拶だな！ オレはアクセル！ ヴェゼール・ヴィレツジのアクセルだ！」

「わたしはナザレ。メルカト・シテイのナザレだよ」

「よろしくな！ ナザレ姉ちゃん！」

「うん、よろしく。あと、わたしのことはナザレでいいよ」

「そか？ わかった！」

快活で小気味の良い子だ。

「それにしてもすっげーな！ これ！」

アクセルは壁画に夢中のようだ。目が覚めたらポケモンの壁画に囲まれた奇妙な空間にいるなんて、普通ならもっと怖がるものだけど、彼は好奇心が勝っているらしい。

「ナザレ！ だくれだ！」

ワクワクした表情を浮かべながら両手で壁画の一つを隠している。

「うーん、ピカチュウ？」

「ぶぶー！ メガリザードンだぜ！」

露わになったポケモンは確かにメガリザードンだった。

「こっちはメガバシャーモ……？」

「こっちはメガスピアーもいるぜ！」

よく見たら、この壁画はどれもメガシンカポケモンばかりだった。

メガシンカはハウエンとカロスを発祥としている。アガリアに伝

わったのは割と最近の事だ。だけど、この壁画は明らかに長い年月を経ている。とても奇妙だ。

「うわっ！ これ！」

「どうしたの？」

思考に耽っていると、アクセルが歓声を上げながらわたしの服の袖を引っ張った。

彼は壁画の一枚をわたしに見せたがっているようだ。

「お気に入りのメガシンカポケモンがいたの？」

聞きながら壁画を見る。そして、わたしは驚きのあまり呼吸が出来なくなつた。

「これは……」

そこに描かれていたのはゲッコウガだった。けれど、見た目が普通のゲッコウガとは明らかに異なっている。

わたしはその姿を一度だけ見たことがある。

「サトシゲッコウガだ！」

「え？」

アクセルは興奮した様子で叫んだ。

「サトシ……、ゲッコウガ？」

「そうだよ！ 背中の巨大なみずしゆりけん！ 間違いない！ カロスリーグの準優勝者・マサラタウンのサトシのサトシゲッコウガだよ！」

「ど、どういうこと？ カロスリーグにこのゲッコウガが出ていたの？」

「おう！ すっげーんだぜ！」

わたしは茫然としながらアクセルの話聞いた。カロスに現れたメガストーンを用いない特別な進化を果たしたゲッコウガ。きずな現象と呼ばれ、カロスのポケモン博士であるプラターヌ博士が研究をはじめたばかりらしい。

「これ！ ファイアローのメガシンカかな!？」

アクセルは興奮しながら壁画を次々に見回していく。

わたしが知る限りメガシンカが報告されていないポケモンのメガ

シンカ形態らしき姿が描かれている絵がたくさんある。

「これはいつたい……」

「ダース……」

考え込みそうになったところでサンダースの疲れた声が聞こえた。ずつとフラッシュで照らしてくれていたから疲れてしまったのだろう。

「アクセル。とりあえず、ここから脱出しよう」

「おう！ ごめんな、サンダース。もうちよつとだけ頑張ってくれ！」

「ダース！」

アクセルがサンダースを抱き上げ、わたし達は脱出の為に移動を開始した。

「結構、入り組んでるみたいだね」

少し歩いたら横道がずらりと並んでいた。

「任せとけ！ クロバット！」

「キィ！」

「ちようおんぱで出口を探してくれ！」

「キィ！」

すごい。洞窟探索にはうってつけのパーティだ。クロバットはしばらく羽ばたいていると、出口を見つけたらしく一直線に進み始めた。

「へへ！ クロバットはすごいぞ！」

自慢げに言うアクセル。

「うん。すごいね」

「へへ！」

「ダース！」

頑張つてフラッシュを維持しているサンダースが頬が膨らませながら不満声を上げた。

「おっと、サンダースもすごいぞ！」

「うん。サンダースもすごいよ」

「ダース！」

ふふんという表情を浮かべている。

わたしも自分の手持ちのポケモン達に会いたくなってきた。無事
でいてほしい。どこかで元気にしていてほしい。

「ナザレ? どうしたの?」

「え? ああ、なんでもないよ」

わたしは彼よりも少し先を走った。遠くに光が見える。出口は近
い。

第九話 『アルトギア』

落ちていく。どこまでも、どこまでも、落ちていく。
極彩色で溢れた世界に包まれていく。

『……ねえ』

誰かが呼んでいる。応えようとして、口の開き方を忘れた。瞼の開き方も、指の動かし方も、なにもわからない。

——そもそも、俺は誰だろう？

意識が薄れていく。色彩が失われていく。白だけの世界に染まっ
ていく。

『……ねえってば』

揺さぶられている。泡のように消えていく筈の意識が急速に覚醒
へ向かう。

瞼が開き、目の前には青い少年がいた。

『ああ、起きたね』

青い髪に、青い瞳。年の頃は俺よりも少し上。

『はじめまして。こんにちは。ボクの名前はアルトギア。よろしく
ね』

第九話 『アルトギア』

アルトギア。その名前は何度も耳にした。

ヴリル教団が探し求めている本。空白の時代を埋めるもの。それ
が『アルトギア手記』。

『驚いているね。それに、混乱している』

クスクスと笑いながら、アルトギアは言った。

『少し、キミの記憶を覗かせてもらったよ。烈空の竜……、レックウザ
の『進化の力』を浴びて、ボクは起動したようだ。本来の使い方は
ないけれど、まあ、良しとしよう』

アルトギアは手をたたいた。すると、周囲の風景が一新され、俺達
はどこかの平原に降り立った。

『クレルモア大平原。かつて、ここで大きな戦が行われたんだ』

もう一度手を叩くと、平原は炎に包まれた。平原の東と西に無数の

ポケモン達が立ち並んでいる。その後ろには、赤と青の光。

思い出した。俺はこの光景を前にも見たことがある。ヴェゼール・ヴィレツジの地下に広がるコスラ洞窟の祭壇で視た、奇妙な夢だ。

『ほら、魔獣……じゃなくて、ポケモン達をよく見てごらん』

言われるまま、ポケモン達を見つめた。すると、彼らの姿が通常とは異なっていることに気が付いた。どのポケモンもメガシンカを果たしている。

『メガシンカ。キミの時代では、『進化の力の暴走』をそう呼んでいるんだね』

アルトギアは興味深そうに言った。

『なるほど、科学の発展は目覚ましいようだ。特殊な石を使い、精神を^{シンクロ}同調させることで闘争心の弱いポケモンにも蓋を開けさせることが出来るわけだ』

興味深い。そう言って、彼はクスクスと笑う。

彼はメガシンカを進化の力の暴走と言った。なんだか、とても不穩に感じる。

『おや、脅かしてしまっただけかな？ だけど、メガシンカがどういうものか伝える言葉として、これほど適切な言葉は他にないよ』

どういう事だろう。メガシンカとは、ポケモンとトレーナーの絆によつて進化を超える進化の事だとセラのお爺さんに聞いた。

『うん、そのとおり。メガシンカはポケモンと担^{トレーナー}い手が揃う事ではじめて発動するものだ。例外はない。たとえ、どんなに闘争心の強いポケモンでもね』

さつきも、彼は『闘争心の弱いポケモンにも蓋を開けさせることが出来る』と言った。メガシンカはバトルの間だけの限定的なものだ。メガシンカには、闘争心が重要なのだろうか。

『進化の力はあまねくポケモンに先天的に備わっているものだ。その力は強大であり、ポケモンが『こうなりたい』と望む姿に変化させることが出来る。たとえば、タツベイだ。タツベイは空に憧れ、その祈りが進化の力によつて叶えられた姿こそ、ボーマンダなんだ。弱い^{コイキンダ}ポケモンは強い^{ギャラドス}ポケモンに変わり、醜^{ヒンバ}いポケモンは

美しいポケモンミカロスに変わる。むかし、ブーバーやエレブーはその姿こそが最終進化形態だった。けれど、現代では力を望み、進化したことでブーバーンやエレキブルという姿を体得した』

『ただ、そう言っていてアルトギアは話を続けた。』

『進化の力は強大過ぎて、ポケモンに大きな負荷をかけるんだ。『進化』が生きた歳月ではなく、ポケモンが強く成長する事で発動する理由もそこにある。弱い状態では進化に耐えられないからなのさ。最終進化形態というものは、その進化の力に耐えられる限界の姿なんだ。その先に踏み込めば崩壊する。それが分かっているから、ポケモン達は無意識下で進化の力を抑制しているのさ』

アルトギアの話の聞いていると、なんだか進化がとても恐ろしいものに感じる。

『実際、恐ろしいものだよ。メガシンカがポケモンに与える負荷は計り知れない。例えば、ガブリアスだ。メガガブリアスの手と翼は過剰なエネルギーによって溶けてしまい、巨大なカマの形に変化している。メガオニゴリはアゴが砕け、メガボーマンダは翼が歪にくっついてしまう。影響は肉体的なものだけに限らない。メガギャラドスやメガカイロスカイトスを筆頭に、メガシンカしたポケモンの精神は破壊と闘争の二つに染まる。メガハッサムなどは常にオーバードローしてしまい、長くその状態が続けば死に至る。故に、我々は『進化の力の暴走』と呼んだ』

俺達の周りにメガシンカポケモン達が立ち並ぶ。いずれも、よく見ればどこか歪な姿をしている。

進化を超えた進化。絆の力。そういった前向きな言葉で飾られていたメガシンカ。けれど、アルトギアの言葉を一笑に付す事は出来なかった。

メガシンカとは、一体何なのだろうか。

『メガシンカ。それはポケモンが無意識に蓋をしていた進化の力を解き放つもの。必要な条件は、己の身の崩壊を呑み込んでも、力を得ようとする闘争心だ』

彼は言った。

『この世で最も闘争心の強い生物はポケモンではない。人間こそ、最も闘争を好む生物なんだ。トレーナーの闘争心を注がれたポケモンは蓋を開き、メガシンカを果たす。おそらく、メガストーンはその行為を簡略化させる為の道具なのだろう』

アルトギアの言葉に畏れを抱きながら、俺は取り囲んでいるポケモン達を見つめた。

『ボクが生きた時代にメガストーンは無かった。けれど、『進化の力の暴走』を意図的に起こす事は出来た。ポケモンの闘争心とトレーナーの闘争心を共鳴させる事で、互いの闘争心を増幅させるのさ。最も、これはポケモンの方にも素質を求める技術でね。すべてのポケモンとトレーナーが使えたわけではなかった』

アルトギアが手を叩いた。すると、周囲の風景が再び変わった。

石畳に佇む一人の男。外套を翻し、彼は高々と右腕を掲げている。『彼は後の世に……いや、嘗ての世に君臨した霸王だよ。偉大なるヴリル王。彼はすべてのポケモンと心を通わせる事が出来た。気性の荒いドラゴンポケモンも、彼には自ら頭こぶを垂れた。才能というものなのだろうね。彼だけはあらゆるポケモンをメガシンカさせる事が出来た。その力によって、アガリア全土を支配したんだ』

ヴリル。その名も幾度となく聞いた。

アイリスの姉を殺した人達。ヴェゼール・ヴィレツジを襲った人達。まさに悪の代名詞のような団体が掲げる神の名前。

だけど、目の前にいるヴリル王から、邪悪な雰囲気は一切感じられない。むしろ、気高く、崇高な人物という印象を受ける。

『悪というのも正解だよ。彼は元々、盗賊だったからね。だけど、王となってからは史上最高の名君として君臨した。アガリア王国は人とポケモンが寄り添いあい、誰もが笑い会える素晴らしい国だった』

アルトギアは夢見るような表情で言う。

『逆らう気になれないほどの圧倒的な力を持つ霸王。彼の存在があったからこそ成立した理想郷だ』

それなのに、アルトギアはそう悲しそうに呟いた。

『愚かな者達が現れた』

風景が変わる。今度は赤い髪の青年と白い髪の女性が立っていた。『ヴリル王の息子、コスラ。そして、コスラの母であるラミタルアだ。コスラはヴリル王の力を色濃く受け継いでいて、彼のようにポケモンの進化の力を暴走させる事が出来た。もつとも、制御が出来たわけではないけどね』

風景がまた変わる。コスラを複数のポケモン達を取り囲んでいる。ポケモン達の姿はメガシンカとも異なる姿に変貌していく。歪で、おぞましい姿に。

『コスラとラミタルアは反乱を起こした。ポケモン達を次々に暴走させ、豊かな国を焦土に変えていった。最初は王位を狙っていたけれど、いつからか闘争こそ目的であると公言するようになった。国を割った闘争は長引き、そして、その戦いはポケモンと人の心を歪ませていった』

恐ろしい光景だ。燃え盛る大地を踏みしめ、人とポケモンが延々と傷つけあっている。

地獄という言葉が浮かんだ。この光景こそ、まさに地獄だ。

『——さて、ボクが語れるのはここまでだ』

「え?」

急に口がきけるようになった。さつきまでの地獄絵図は消え去り、代わりに暗闇が広がっている。目の前には一冊の本。

「アルトギア手記だ」

青の書とも呼ばれるはじまりの本。ページを開いてみると、アルトギアが語った内容が文章として記されている。だけど、メガシンカに纏わる記述はない。書いてあるのはアガリア王国で起きた惨劇の歴史のみ。

「夢じゃないよね?」

彼の話はとても恐ろしかった。だけど、同時に引き込まれる内容でもあった。

国を支配し、国を割るほどの力。文章では、『最終兵器』という言葉でぼやかされていた王の力。

『進化の力の暴走』

ポケモンに負担をかける忌むべき力なのに、俺はその力を魅力的に感じてしまった。

まるで、からからに喉が乾いた状態で、冷たく冷えた水を差し出されたかのように、俺はその力が欲しくなった。

アルトギアは言った。

『レックウザの『進化の力』を浴びて、ボクは起動したようだ』

『ボクが語れるのはここまでだ』

そして、前にアイリスが最終兵器について、こう語っていた。

『わたしも詳しい事は知りません。『赤の書』、『青の書』、『黒の書』、『白の書』の四つの断片を揃える事で初めて理解出来るものようです』
『アルトギア手記』は誰かの為のもの。その誰かが力を得ていく為の道標』

その言葉が指し示すもの。アルトギア手記を追っていけば、あの力が手に入る。

最強のポケモントレーナーになれる。

「力が手に入る」

暗闇に光が差し込んだ。バレットとアイリス、そして、セラの声が聞こえる。助けに来てくれたようだ。俺はアルトギア手記を閉じて、みんなの下へ向かった。

第十話 『発動、きずなへんげ』

「……アルトギア手記が起動したか」

アギトは手元にある赤い本に視線を落としながら溜息を零した。

それは『赤の書』と呼ばれるもの。行方不明であり、オブリビテーク図書館に所蔵されていると噂されていたもの。ヴリル教団の幹部・ロイドが求めていたもの。

「初めて会った時から感じていたシンパシーの理由はコレか」

アルトギア手記の起動には条件が二つある。一つはメガシンカ、あるいはきずな現象の発動時に発生するエネルギーを注ぎ込む事。

あの時、アルトギア手記の発動直前、ナザレがレックウザにガリョウテンセイを命じていた。命令を聞き届けたレックウザはメガシンカを発動し、そのエネルギーが鍵となったのだろう。

そして、もう一つは資格を持っている事。資格とは、王の力の事。資格を持つ者とは、ヴリル王の血を引く者の事。

「オレがヴリル教団の関係者である事はバレてしまったし、シエルに目をつけられる前に……、いっそ」

アギトの瞳に暗い光が宿る。楽しい時間の終わり。まるで、黄昏時のように胸が苦しくなっている。

パーティの準備をしていた。連れていきたい場所がいくつもあった。ポフレをご馳走したかった。ポケモンのケアについて語り明かしたかった。

はじめて出来た友達と、もつと一緒に遊びたかった。

「いくぞ、リザードン」

モンスターボールからリザードンを繰り出す。リザードンはアギトを見つめた。

リザードンが視線で問う。

「それでいいのか？」

アギトは悲しそうに表情を歪めてうなずく。

「仕方がない。これも運命というものだ」

第十話『発動、きずなへんげ』

「アルト」

アイリスとバレットに心配され、セラに怒られていると、リザードンを引き連れたアギトが現れた。

「……アギト」

アイリスがアギトに敵意を向けている。彼がアクセルとのバトルの最中に口走っていた言葉。

『やるじゃないか！ まさか、これほどまでとは思わなかった！』

シャーリーの警戒網を抜けてくるだけの事はある！』

シャーリーはヴリル教団の幹部だ。彼の言葉は彼女との関係性を匂わせていた。

「約束の時間にも現れず、こんな場所で何をしていたのですか？」

「ナザレの回収を命じられていた。抵抗されたり、邪魔が入ったりで時間が掛かった。だから、オーヴェルに向かうのが遅くなってしまった。すまなかったな」

声だけで分かる。彼は感情を抑え込んでいる。

見られたくなかったのだろう。知られたくなかったのだろう。

彼の瞳から、彼の感情が伝わってくる。

「あなたに命じたのはヴリル教団ですか？ 何故、あなたは——」

「待て！ それよりも、ナザレだと!? それは、ナザレ様の事か！」

質問を重ねようとしたアイリスを押しつけて、バレットが吠えた。メルカト・シティの出身者であるバレットにとって、ナザレという言葉は到底聞き逃す事の出来ないものだ。

「そう言えば、バレットはメルカトの出身だったな。そうだ。メルカト・シティのジムリーダー。彼女を回収しろとヴリル教団の大幹部に命じられた」

「大幹部!? たしか、教団の幹部には序列があると聞きます。大幹部と呼ばれているのは、その内の上位三名！ その命令で動くあなたは一体!？」

「オレは選ばれてしまった。だから、命令に逆らう事は出来ない。一応、言っておく。ヴリル教団は悪の組織だが、その目的は悪意ではなく善意によるものだ」

「善意!? わたしの姉を殺しておいて、善意というのですか!?!」
アイリスが激昂している。

「いいや、それは悪だ。言い訳の余地なんてない。四年前の事だろうか？ オブライエンから聞いている。アルトギア手記を求めて、ジュラ・マウンテンに向かい、そこで一人の少女を殺害してしまったと」「それならば!」

「待て! そんな事よりもナザレ様のことだ! ヴリル教団はあの方に何をした!?!」

バレットもヒートアップしている。

「オレも詳しい事は知らない。ただ、シエルは言っていた。ナザレはある日、シグナスが連れてきた、と」

「シグナス!?! それは幹部の頂点! 現教祖の側近ですよね!?!」

「ああ、そうだ。アルトギア手記の情報をヴリル教団に齎し、ナザレを教団に引き入れた男。その功績を持って、教祖に取り入り、側近の地位を手に入れた男だ」

「アルトギア手記の情報を!?!」

「ナザレ様を引き入れただど!?!」

目の色を変える二人を尻目に、アギトは俺を見た。

「アルト。バトルをしよう」

「いいよ」

俺はスピアーのモンスターボールをホルダーから取り外した。

「はあ!?!」

「ちよつと待ちなさい! それよりも話の続きを!」

騒ぎ立てる二人をアギトは完全に無視している。

「ルールはシングルバトル。交換はなしの二対一でいこう」

「わかったよ、アギト」

二人にとってはヴリル教団の話の方が重要なのだろう。だけど、俺とアギトにとっては違う。

不思議だけど、アギトの顔を見た時から疼いて仕方がない。彼とバトルしたい。

「アルト」

アギトは言った。

「オレに勝つたら、『赤の書』をやるよ」

そう言って、彼は懐から赤い本を取り出した。

『赤の書』!？」

「おいおい、なんでロイドが探してたもんをヴリル^ア教団^キの関係者^トが持ってたんだよ!？」

「リール・シテイの件は目眩ました。シエルが企んだ。シグナスの眼を欺くためにな」

「どういう事ですか!？」

「ヴリル教団も一枚岩ではないという事だ！ さあ、いくぞ！ アルト！」

「ああ、いくよ！ アギト！」

俺はスピアーを繰り出した。

「リザードン！」

「グオオオオツ！」

それまでアギトの傍に控えていたリザードンが炎を吐き出しながら前に出てくる。

「いくぞ、フレアドライブ！」

リザードンが炎を纏いながらスピアーに襲いかかる。

「かげぶんしん！」

だけど、大振りな攻撃なんてスピアーには当たらない。回避と同時にかげぶんしんを発動する。ここは少し開けているけれど、周囲の森や廃墟のおかげで障害物が多い。スピアーには有利な地形だ。

無数のスピアーがリザードンを取り囲む。

「薙ぎ払え、かえんほうしゃ！」

「ちよっ!？」 森の中なんですよ!？」

アイリスが悲鳴を上げる。けれど、リザードンは構わず命令を遂行した。放たれるかえんほうしゃによってスピアーのかげぶんしんがかき消されていく。だけど、それでいい。かげぶんしんはあくまでも目眩ました。

「どくづきだ！」

「スピッター！」

「飛べ！ リザードン！」

「逃がすな！」

完全な不意を打ったのに、リザードンはスピアーの攻撃を躲して空高く飛び上がった。すかさず追いかけるスピアー。飛翔速度ならスピアーの方が上だ。

「スピーイイイツ！」

「グウツ!？」

紙一重で躲された。

「ダブルニードル！」

「ドラゴンクロール！」

二体は空中で絡み合うように攻撃を放ち合う。攻撃力は明らかにリザードンが上だ。だけど、飛行方法の関係上、機動力はスピアーが圧倒的に上だ。

「前とは比べ物にならないほどに成長しているな！」

「当然だ！ まだまだ、こんなものじゃない！」

リザードンには不可能な上下左右自在の飛行法で徐々に削っていくスピアー。

「リザードン！ フレアドライブで距離を取れ！」

リザードンが炎を纏う。

「そこだ！ ダブルニードル！」

仕切り直したかったのだろうが、フレアドライブは炎を纏うために一瞬だけ止まる。そこを見逃すほど、スピアーは甘くない。

炎を貫き、リザードンの急所を貫くスピアー。リザードンは苦悶の声を上げる。

「本当に強いな！ やはり、そのスピアーはただものじゃない！ だが、オレのリザードンもただものではないぞ！ いくぞ！」

アギトが左腕を天に向かって突き上げる。

「もっともっと熱く！ 真の力を解き放て、リザードン！」

メガシンカじゃない。アギトのメガストーンとZリングは右腕だ。けれど、アギトとリザードンの間に何かが繋がった。

フレアドライブじゃない。それよりも遥かに強大な炎がリザードンを包み込む。

堪らず離れるスピアー。

「これって……」

炎が破裂する。そして、その中からメガリザードンが姿を現す。

だけど、いつも見る姿とは少し違う。角が三本に増えている。それに、背中だけでなく、腕にも翼竜のような翼が生えている。

リザードンのメガシンカした姿は二種類あり、あの姿には、その両方の特色が現れている。

「スピアーを森に叩き込め！ リザードン！」

リザードンが姿を変えてから、やけに日差しが強くなっている。急激に引き上げられた気温によつて風の向きが変わり、スピアーは回避行動が遅れてしまった。

「スピアー！」

森の中へ飛んでいくスピアー。その後をリザードンが追いかける。

「リザードン、十時の方角にかえんほうしゃ！」

「えっ!？」

森の中に入っていった二人の姿は木々に邪魔されて見えない。それに、離れ過ぎていて指示も届かない。それなのにアギトは命令を下した。そして、直後に森の奥で青い光が膨らんだ。

「ドラゴンクロー！」

何が起きているのか分からない。

「きずな現象!？」

それまで場の空気に圧倒されてオロオロしていたセラが驚いた様子で叫んだ。

「えっ、セラ!？」

「アルト！ たぶん、アイツ、リザードンが見ているものが見えてる!？」

「リザードンが見ているものが!？」

その言葉を肯定するようにアギトは笑みを浮かべ、遥か先にいるリザードンへ命令を下した。

「アイアンテールで撃ち落せ！」

何が起きているのか分からない。だけど、このままだと孤立したスピアーが負けてしまう。

シャンティ・ジムで最初にルンパツパと戦った時を思い出す。あの時も、ルンパツパのあまごいで指示が届かず、為す術無く負けてしまった。

「イヤだ……」

オーヴェルでも、何度も負けた。負ける度に悔しくて堪らなかった。

勝ちたい。負けたくない。強くなりたい。負ける度に、そう思った。

目指したのは最強。本当なら、誰にも負けたくなんてない。スピアーと一緒に、もっと高みへいきたい。

もっと、もっと、もっと、もっと！

「スピアー！ 俺達は、もっともっと強くなるんだ」

『スピイイイッ！』

その瞬間、俺はたしかに、スピアーの声を聞いた。

体が自然と動く。目の前の視界に映るリザードンの眉間に向かって、ニードルを伸ばす。

「ミサイルばり！」

『スピッ！』

今までに見たこともない威力のミサイルばりがリザードンを撃ち抜いた。

「ぐあっ!？」

すると、アギトが苦悶の声を上げながら頭を手で覆った。

「ドラゴンクロー！」

その姿に気を取られ、目の前に迫るドラゴンクローを躲し切れなかった。胴体を引き裂かれ、尋常じゃない痛みが走る。

「あぐっ!?! あがっ……」

「アルト!?!」

「なんだよ、なにが起きてるんだ!?!」

痛い。これがスピアーの感じていたバトルの痛み。この痛みの中で、スピアーは戦い続けてくれていたんだ。

湧き上がる感情を抑えつけていられない。

「かえんほうしゃー！」

「穿け！ ダブルニードル！」

『スツピイッ！』

熱い。当然だ。炎に飛び込むのだから、涼しい筈がない。だけど、スピアーは怖れる事なく炎の中を突き進んでいく。その先にいるリザードンへニードルを伸ばす。

「トドメばり！」

『スツピイイッ！』

最大の攻撃がりザードンの急所を撃ち抜いた。倒れ込んだりザードンの姿が元に戻る。

同時に、全身を猛烈な疲労感が襲った。意識を保っていられない。

「スピ……アー……」

俺は地面に倒れ込んだ。

エピソード 『ゲームオーバー』

壁画の洞窟から出ると、目の前には壮絶な光景が広がっていた。メガリザードンとメガスピアーの戦いだ。どちらもテレビや雑誌で見た姿とは少し異なっているけれど、そんな事が気にならないほどの白熱したバトルだった。

見惚れている内に二体は倒れ、戦闘不能に陥った。

「なんだ!?!」

その途端、急に森全体が殺気立ち始めた。

「この森に根を張る野生のポケモン達だよ。暴れ過ぎたな。この森を荒らされた事に対する怒りが警戒心や恐怖心を上回ったんだ」

「まさか、この殺気の矛先って!?!」

慌てて駆け出した。

「アクセル!?!」

「スピアー!?!」

メガスピアーの状態でも一目で分かった。アルト程では無いが、オレだってスピアーとは長い付き合いだ。間違いなく、あれはアルトのスピアーだ。

駆けつけると同時に、無数のポケモン達に取り囲まれた。

「悪かったよ! お前たちの住処を荒らした事は謝る!」

ポケモンに人間の作法が通じるかなんて分からない。だけど、必死に頭を下げた。

かれらが怒っている理由は正当なものだ。

『ポケモンは生き物なんだよ』

アルトが旅だった日にシャンティジムのジムリーダー・エルフランから教えられた事。

『彼らはいつだって全力で生きているんだ』

そうだ、彼らは生きている。この森の中で日々を営んでいる。

故郷を荒らされる苦しみ、痛み、悲しみをオレは知っている。

「ごめん!」

しばらく頭をさげ続けていると、不意に殺気が和らいだ。顔をあげ

ると、ポケモン達は背中を向けてそれぞれの住処に戻っていく。

「ありがとう!」

そう叫ぶと、一体だけ、ポケモンが振り返った。ズンズンと近づいてくる。

「え? あつ、ありがとうはまずかったか!」

「ルチャ!」

かくとうとひこう。二つのタイプを持つポケモン。ルチャブルはオレをまっすぐに見上げ、腰を指さした。

「え? え?」

「ルチャ! ルチャブ!」

困惑していると、ルチャブルはオレの腰のモンスターボールをつついた。

「ゲットしろって言ってるんだよ」

「え?」

木々の合間から出て来たナザレは言った。

「その子はキミを気に入つたみたい」

「オレを? そうなのか!」

「ルチャ!」

オレは慌てて空のモンスターボールを取り出した。元々、この森に入ったのは新しい仲間を見つける為だ。

「一緒に来てくれるか!」

「ルチャ!」

空のモンスターボールを差し出すと、ルチャブルは開閉装置を小突いた。

オレはルチャブルをゲットした。

エピソード『ゲームオーバー』

ゲットしたばかりのルチャブルにも協力してもらって、オレはスピアーとリザードンを運んだ。二匹のトレーナーはおそらく廃墟の方にいる筈。

「大丈夫?」

スピアーを背負って汗だくになっているオレをナザレが気遣って

くる。

「へっちやらだぜー！」

ウソだ。重くて仕方がない。ビードルだった頃は軽々持ち上げられたのに、立派に成長しやがって！

「止まって」

廃墟は目と鼻の先なのに、急にナザレが言った。

「どうしたんだ？」

「ヴリル教団だ」

「はあ!？」

「しっ!」

口を塞がれた。抗議しようとする、ナザレは申し訳なさそうに謝りながら廃墟の方を指さした。その先を視線で追うと、そこには白服の集団がいた。

白服の集団はアルト達を取り囲んでいる。とても友好的な雰囲気には見えない。

「キミはここで待っていて。わたしが彼らを助けてくる」

「ナザレこそ、ここで待てる。オレが行く」

友達がピンチに陥っている。

あの時と同じだ。故郷をヴリル教団が襲った時、オレは家に取り残されているアルトを助けに行こうとした。だけど、親父に止められて、それに従ってしまった。あの時は、あと一歩のところまでアルトが死ぬ所だった。

だから、誰かに任せる気は一切ない。オレはオレの友達をオレの手で救ける。その為に強くなると決めたんだから。

「ルチャー！」

「アーイッ！」

協力してリザードンを運んでいたルチャブルとファイアローがリザードンを地面に降ろしてオレの横に並んだ。

「いくぞ、ファイアロー！ ルチャブル！」

「……分かった。なら、一緒に助けよう」

一気呵成に打って出ようと駆け出した途端、ナザレの言葉と共に

レックウザが姿を現した。

伝説のポケモン。烈空に棲まう竜。

「すげー……」

レックウザは人だかりの真上で体を捻り、雄叫びを上げた。

ヴリル教団はそれだけで狂騒に駆られている。

「レックウザ！ 進化の力を解き放て！」

ナザレの声と共にレックウザの体が光を放ち始める。ヒノヤコマがファイアローに進化した時、ゴルバットがクロバットに進化した時、イーブイがサンダースに進化した時、同じ輝きをオレは見た。

光が弾けると、そこには姿の変化したレックウザがいた。

「これって、きずな現象か!？」

「違うよ。これはレックウザだけに許された力。レックウザは自らの意志で進化の力を解き放ち、メガシンカする事が出来るの」

メガレックウザが吠える。すると、突風が吹き荒れ始めた。

まるで竜巻の内側にいるかのようにうだ。呼吸する事すら儘ならない。慌ててファイアローとルチャブルをボールに戻す。

「な、なにこれ!？」

「デルタストリーム。メガシンカしたレックウザは長い髭から粒子を放ち、天候を操る事が出来るの」

荒れ狂う暴風の中で、ナザレが歩み寄ってくる。まるで、風がナザレの事を避けているかのように自然な歩みだ。

「行こう、アクセル」

「うん！」

ナザレが伸ばした手を掴むと、オレの体も風の鎖から解き放たれた。廃墟前の広場は死屍累々だった。風によってすべての人間が地面に抑えつけられている。

メガレックウザの神々しさも相まって、まるで神の怒りに触れてしまったかのような光景だ。

「ヴリル教団よ」

一瞬、それがナザレの言葉とは思えなかった。さっきまでとは明らかに違う。

まるで、本気で怒った親父の傍にいらるような気分だ。

「貴様はナザレ!？」

「竜神教の巫女よ！ 我らの道を阻むというのか!? あなたも賛同した事でしょう!？」

「コード・Rだけでなく、コード・Bも見つかったのです！ これで！」

「聖地もちやくちやくと！」

ヴリル教団の連中は押しつぶされながらも叫び続けている。

そんな彼らに対して、ナザレは言った。

「黙っている」

まるで、質量を持っているかのように、その一言はヴリル教団を押し黙らせた。

さつきまで一緒にいた優しく綺麗なお姉さんが、とても恐ろしい存在に変わってしまった。

「お前たちは知らないのかもしれない。だが、お前たちがわたしにした事をわたしは忘れない。お前たちはわたしの敵だ」

その言葉にヴリル教団の連中の顔が恐怖で引き攣った。

そして――、

「あんまり、うちのもんを怖がらせんでくれ」

オレ達の後ろから、そんな声が聞こえてきた。振り返ると、そこには初老の男が立っていた。

「……ヴェルトーゼ」

ナザレは知っているようだ。少し困惑している様子を見せている。

「リールジムの元・ジムリーダーにして、オブリビテーク図書館の司書。そのアナタが何故、ヴリル教団に？」

「むろん、アルトギア手記の為だよ。お前さんも知っているだろう。おれは歴史を研究しているんだ。空白の時代について、おれは知りたいたんだよ。だから、ほら、わかるだろ？ 空白の時代について記された唯一の歴史書であるアルトギア手記を集める上で一番効率のいい方法は集めている連中につくことだ。だから、ヴリル教団に入ったんだよ」

「ヴ、ヴリル教団は悪い奴らなんだぞ！」

オレの言葉にヴェルトーゼはポカンとした表情を浮かべた。

「ヴリル教団が悪い奴ら？　おいおい、酷い事を言うな」

「だって、ヴリル教団は——」

「ヴリル教団は悪い事もする奴らだよ。たまには良い事だってするんだ」

「結局悪い奴らじゃねーか！」

ヴェルトーゼという男、どうやら独特な間を持つタイプらしい。

「それにしても、ナザレまでここにいるとは思わなかったね。コード：Rの回収だけで済むかと思つたのに、残業確定じゃないか」

ヴェルトーゼはモンスターボールを取り出した。

「わたしと戦うつもりなのか？」

意外そうな表情を浮かべるナザレ。

「傲慢さがウリのきみには分からないだろうけどね、おれは勇気つてものを持つてるんだ」

「勝てない相手に挑むのは勇気ではなく、無謀だ」

ナザレの言葉を肯定するかのようになガレツクウザがヴェルトーゼを睨みつける。

伝説のポケモンのメガシンカ形態を相手に、それでもヴェルトーゼは怯まない。

「それは違うな、ナザレ。実際、おれは一度お前に勝っている」
「なに？」

ヴェルトーゼはモンスターボールからポケモンを繰り出した。

それは見たこともないポケモンだった。

「だ、ダークライだど?!」

「ダークライ？」

聞いたことがない。オレはポケットからポケモン図鑑を取り出した。トレーナーになった日にジョーイさんにもらったものだ。

図鑑のセンサーをダークライに向けると、画面にダークライの姿とデータが表示された。

『ダークライ。あんどくポケモン。幻のポケモンと呼ばれるポケモンの内の一体。人々を深い眠りに誘い、夢を見せる能力を持っている』

幻のポケモン。それは伝説のポケモン以上に希少な存在であり、そもそも実在するかどうかさえさやふやなポケモンだ。彼らは神と称されることもある伝説のポケモンと比べてさえ、隔絶した能力を有していると言われている。

「貴様か……、貴様だったのか!」

肌がヒリヒリするような殺気を放つナザレ。まだ、出会ってからそんなに経っていないから、オレは彼女のことを何も知らない。だけど、彼女がこれほどの怒りを爆発させるなんて、よほどのことがあった筈だ。

「すごいだろ? シンオウに伝わる幻のポケモンだよ。ダークライには誰も敵わない。例え、レックウザでもね」

メガレックウザとダークライが睨み合う。伝説と幻。テレビでも見たことのない夢の対決だ。こんな状況でもなければ手に汗握り、興奮しながら見ていることが出来たのに、そんなわけにもいかない。

「ナザレ」

声を掛けると、ナザレはオレの腕を引っ張り、自分の背中でヴェルトーゼからオレを隠した。

「レックウザは確かに難敵だよ。だけど、レックウザだけならどうとでもなる。さあ、もう一度、きみを傳かせてあげよう」

「テツメエ! ナザレ様から離れやがれ!」

未だに暴風が吹き荒れる中で、一人の少年が立ち上がった。

「バレット!?!」

その少年を見た瞬間、ナザレは目を見開いた。

「ファインプレイだ、少年」

ヴェルトーゼが指を鳴らす。その時にはすでにダークライが動いていた。手の中で闇の塊を生み出している。

「レックウザ! しんぞく!」

メガレックウザはその巨体からは想像もつかない程のすばやさでダークライに肉薄した。

けれど、ダークライは動じた様子も見せず、闇を解き放った。瞬く間に世界が黒く染まっていく。

意識が薄れていく。

「ゲームオーバー！」

意識が途切れる寸前、甘ったるい声が聞こえた。

第五章 『奪還、メルカトシティ』 プロローグ

培養槽、計測器、遠心分離機など、様々な器具が立ち並ぶ研究室で、四天王のシエルは白衣の男に詰め寄られていた。

「あと一步のところまで来ているんです！　どうか、コード・Rを渡してください！　それで完成する筈なのですー！」

「何度も言っただけですよ。コード：Rのことは知らない」と

「何故隠すのですか!?　我々は同志である筈！　これは来るべき災厄に備える為に必要なことなのですよ!?!」

白衣の男は声を荒げる。

「各地のポケモン達の凶暴化！　大迷宮と亡霊の港の活性化！　これは紛れもない事実です!」

数々のデータが記された紙を投げつけられ、シエルは表情を歪める。

「それは分かっているわ」

「ならば!」

「だけど、知らないものは知らない。それに、あなたの研究は倫理に反している」

「倫理!　そんなもの、何の意味があるのですか!　このままでは全滅ですよ!?!」

シエルはその言葉を否定しない。来るべき災厄。それは間違いなく起こる未来。

だから、彼女は彼らの手を取った。そのことに後悔はない。ただ一点を除いて。

「踏み越えてはいけない一線があるのよ。何があろうとも絶対に」

「くだらない。実にくだらん!　そんな感情論を振り翳して、みなを危険に晒すというのか!　わしはそんな事、断じて許さんぞ!」

燃えるような視線を向けられても、シエルは譲らない。

「あなたの思想には共感する。だけど、あなたの研究には賛同出来ない

「いよ、モンテロ博士」

しばらく睨み合うと、モンテロはシエルに背を向けて去って行った。

プロローグ

「——というわけで、ニューゲーム！」

気がつくのと、オレは奇妙な場所にいた。薄闇が広がるバトルフィールド。目の前にはお伽噺に出てくる魔女のような格好をした女がいて、オレに向かって笑いかけている。

「ふっふっふ！　こんにちは！　はじめまして！　そして、ようこそ！　アガリア四大魔境の一つ、『大迷宮』へ！　歓迎するよ、アクセルくん」

一瞬のうちに頭の中は疑問だらけになった。

「あっはっは！　大混乱だね！」

魔女は楽しそうに笑った。

「でもでも！　主人公が最初からなんでも知ってるなんて、ゲームでも小説でも面白くないよね！　だから、ゼーンぶ、ひ・み・っ！」

「はあ？」

意味がわからない。

「いったい、ここはどこなんだ？　どうして、オレはここにいるんだ？　目の前の魔女は何者なんだ？　ナザレはどうしたんだ？　アルトやセラは無事なのか？」

「ほらほら！　悩む前にまず行動！　キミもポケモントレーナーなら、ここに来てやる事は一つだよ！」

「何の事を言ってるんだ？」

「ジムバトルだよ！」

「はあ!？」

いきなり、フィールドが明るくなった。

「さあさあ！　ポケモンバトルだよ！　勝てば、キミの疑問の幾つかは解決する筈さ！」

「よ、よく分からねーけど、やるしかないみたいだな！」

ボールホルダーを確認する。手持ちのポケモン達は全員揃って

る。

「つて、ん!?!」

おかしい。ルチャブルを加えても四つである筈のボールが五つある。

「ほらほら! バトルスタートだよ! ルールは五対五の入れ替え戦! 交換はチャレンジヤーのみに認められます! つてな感じで、わたしの一番手はこの子! 出ておいで、ヤドキング!」

「ヤドッ!」

繰り出されたのはヤドキング。ヴェゼール・ヴィレッジに居た頃、はじめて親父からもらったヤドンの進化形態。おっとりした性格のヤドンの進化形態とは思えないキリツとした表情でオレを見つめてくる。

「いくぞ、サンダース!」

一番手はサンダースだ。みずタイプを持つヤドキングとは相性がいい。

「さーて! お手並み拝見! 世界を変革するほどの知性を持つヤドキングをキミはどう攻略するかな?」

「先手必勝さー! でんこうせっか!」

「ダースッ!」

俊敏な動きでヤドキングに肉薄するサンダース。

「れいとうビーム!」

「ヤドッ!」

ヤドキングはこおりのエネルギーを手の中で収束させ、地面に叩きつけた。一気に地面が凍りついていく。

「ダース!?!」

サンダースは慌てて跳び上がった。地面と一緒に凍らされたら身動きが取れなくなる。だけど、着地をした途端に滑ってしまった。

「きあいだま!」

「ヤードッ!」

「ひかりのかべ!」

「ダース!」

ヤドキングの放ったきあいだまをひかりのかべで間一髪防いだ。だけど、氷の大地はサンダースの折角のスピードを殺してしまう。

「もどれ、サンダース！」

「わるだくみ！」

サンダースをボールに戻すと、ヤドキングは実に悪そうな表情を浮かべて笑った。

わるだくみは悪い事を企んで頭を活性化させるあくタイプのおかげだ。特殊な攻撃の威力が高まる。

「お前のスピードならどんな攻撃だって躲せる筈だ！ 頼むぞ、ファイアロー！」

「アーイッ！」

「ニトロチャージ！」

炎を纏いながらファイアローは加速していく。このバトルフィールドはシャンティ・ジムと比べて圧倒的に広い。ここならファイアローのスピードを存分に活かす事が出来る。

「サイコネシス！」

「もつとスピードをあげろ！ ニトロチャージ！」

「アーイッ！」

ヤドキングの眼が青白く輝くが、ファイアローは更に加速してヤドキングの視界から外れる。これがエスパーポケモンとの戦い方だ。

オレは旅に出る日まで、ずっと村のみんなに特訓してもらった。その相手は様々だったけれど、その中にはエスパータイプのサーナイトもいた。だから、理不尽なほどに強力なエスパーポケモンとの戦い方も知っている。

「もつともつとだ！ ニトロチャージ！」

「アーイッ！」

「ヤ、ヤド!?!」

フィールド中を縦横無尽に飛び回るファイアローをヤドキングはすでに眼で追えていない。

「そこだ、ブレイブバード！」

「そ・こ・で！ トリックルーム！」

「なに?！」

ヤドキングを中心に光が膨らむ。巨大なドームがバトルフィールドを包み込み、ファイアローの動きが急激に鈍くなった。そして、反対にヤドキングは軽快なステップを踏みながらファイアローに向かっていく。

「れいとうビーム!」

「避ける、ファイアロー!」

「あ、アーイ!」

ファイアローは必死に羽を動かしたけれど、トリックルームのせいで動きがぎこちなく、れいとうビームが直撃してしまった。

「ファイアロー!」

氷漬けになり落下するファイアローを地面に叩きつけられる前に慌ててボールへ戻す。

「ファイアロー、戦闘不能!」

ニコヤカに宣言する魔女をにらみながら考える。トリックルームの発動中はスピードの速いポケモンが不利になる。だけど、オレの手持ちのポケモンは全員がスピード自慢だ。

「……だったら!」

オレが選んだのはクロバット。案の定、トリックルームの影響を受けて動きが鈍い。

「ちようおんぱ!」

だけど、動きが鈍るのは本体のみ。技は影響を受けずに突き進む。

「おつとつと! 混乱狙いで来たか!」

「ツヘ! 混乱してればスピードは関係ない! クロスポイズン!」

「キイイイッ!」

動きはゆつくりだけど、確実にヤドキングへ迫っていくクロバット。

取った!

「残念無念! ヤドキングは混乱しないのさ!」

「はあ?！」

ちようおんぱを受けた筈なのに、ヤドキングはしっかりとクロバット

トを見据えてれいとうビームを放った。

「ク、クロバット!?!」

クロバットを慌ててモンスターボールに戻す。これで、残るはサンダースとルチャブルだけだ。だけど、サンダースやルチャブルのわざではヤドキングのトリックルームを打ち破る術がない。

「おやおやー? もしかして、ギブアップかにやー?」

「誰がギブアップなんてするか! 頼む、サンダース!」

「ダースッ!」

でんこうせっかは使えない。だったら!

「フラッシュだ!」

「ダースッ!」

フィールド上を眩い光が照らし出す。

「ヤド……ッ!」

ヤドキングが怯んだ。

「今だ、10まんボルト!」

「サンツ、ダース!」

激しい稲妻がサンダースの体から迸り、まっすぐにヤドキングに向かっていく。

「耐えなさい、ヤドキング。サイコキネシス!」

「ヤドッ!」

10まんボルトが直撃したにも関わらず、ヤドキングは命令通りにサイコキネシスを発動した。

「サンダース!?!」

「ダ、ダース!?!」

サンダースの体が宙に浮き、次の瞬間、地面に叩きつけられた。

「も、戻れ!」

戦闘不能になったサンダースをモンスターボールに戻して、代わりにルチャブルのモンスターボールを掴む。だけど、かくとうタイプのルチャブルはエスパークタイプと相性が悪い。ここまで圧倒されている状況で繰り出しても、わざの構成を考えても勝てる気がしない。

「どうすれば……」

考えていると、ルチャブルのモンスターボールを掴む手に五つ目のボールが当たった。

いつの間にかボールホルダーにセットされていたモンスターボール。中のポケモンの正体さえ分からない。だけど、このバトルが五対五である以上、いつかは繰り出さないといけない。だから、ここはコイツに賭けてみる。

「いっけー！」

モンスターボールからポケモンが飛び出す。現れたのは予想外のポケモンだった。

「レックウザ!?」

それはナザレの手持ちである伝説のポケモンだった。

「さーて！ キミはレックウザをどんな風に操るのかな!? たのしみたのしみ！」

「いや、操れるわけないだろ!?!」

他人のポケモンなんて、相当に付き合いが長かったり、本来のトレーナーの命令がなければ操る事は出来ない。しかも、相手は伝説のポケモンだ。むしろ、相手のポケモンより先にオレが倒されてしまう。

「いいや、操れるよ。だって、その子がキミのボールホルダーに紛れ込んでいたのはナザレの仕業だもの」

「はあ!?!」

驚きのあまり声を上げると、レックウザは魔女の言葉を肯定するかのように頷いた。

「ど、どういう事だよ!?! あの時、なにが起きたんだよ!?!」

「それを知りたければ勝つ事だよ！ ほらほら！ がんばれがんばれ！」

むかつく。なにがむかつくって、魔女は超がつくほどの美人で、声も超がつくほど可愛くて、ついついノセられて頑張りたくなってしまふ。それがなんだかむかつく。

「えーい、やったるぜー！ レックウザ！ 全力だ！」

「ギャオオオオオオッ！」

レックウザの体が七色に輝く。オレの全力という言葉に應える為
に、レックウザは全力の姿に変身した。

フィールドに突風が吹き荒れ始める。デルタストリームだ。乱気
流に襲われて、ヤドキングは顔をしかめている。

「よし！ 一気に攻めるぞ！ りゆうせいぐん！」

ヤドキングの技の構成はすでに判明している。アイツにこの技は
防げない。

「それはどうかな！ ヤドキング！ サイコネシスでりゆうせいぐ
んをレックウザの方へ誘導しなさい！」

「ヤード！」

「レックウザ！ 乱気流を操れ！」

「ギャオオオオオオッ！」

サイコネシスによって軌道が歪められたりゆうせいぐんをデル
タストリームの力で無理矢理戻す。サイコパワーと気流という自然
の力のぶつかり合いだ。

「いっけー！」

たしかにサイコネシスは理不尽なほどに強力なわざだ。だけど、
大自然の力はそれ以上に凶悪だ。嵐そのものに抗う事なんて、どんな
に強力なエスパーポケモンでも出来はしない。

「ヤド?！」

りゆうせいぐんが命中した。戦闘不能になったヤドキングを魔女
がモンスターボールに戻す。

「うんうん！ 見事だと褒めてしんぜよう！」

そう言うと、彼女は別のモンスターボールを取り出した。

「メタグロス！」

「メッター！」

てつあしポケモンのメタグロス。ポケモンリーグでも常連だ。は
がねタイプとエスパータイプの二つのタイプを持つポケモン。ホウ
エンリーグのチャンピオンの相棒としても有名で、前に見たTV番組
でもホウエンチャンピオンと一緒に映っていた。

だけど、レックウザの敵じゃない。なんと言っても、レックウザは

伝説のポケモンだ。

「だいはくはつ！」

「は？」

耳を疑った。その技がある事は知っている。だけど、そんな技を使うトレーナーなんている筈がない。

だって、その技は――、

「メッター！」

「ギャオ!？」

頭が真っ白になった。爆風のせいでも、爆音のせいでもない。

「デメエ！　なにやってんだよ！」

頭が沸騰する。ポケモンは友達だ。ポケモンは生き物だ。そのポケモンに自爆を命じるなんて、許しておける筈がない。

「おやおや、何を怒っているのかな？　だって、相手は伝説のポケモンだよ？　あらゆる技の中でも最大の威力を誇るだいはくはつ。ここで使わないでどうするのさ！」

明るい声が耳障りだ。

「理由があろうと、やっちゃいけねー事があんだよ！」

だいはくはつの威力を間近で受けたレックウザは戦闘不能に陥っている。そして、だいはくはつを発動したメタグロスも地面に落下したままピクリとも動かない。

「ポケモンをなんだと思ってるんだ！」

「あっはっは！　それをトレーナーのキミが言うのかー。面白い冗談だねー」

魔女は言った。

「ポケモンを戦わせている時点で、キミだってポケモンが傷つく事を容認しているんだよ？　それなのに、だいはくはつを悪の所業みたいに言うなんて、神経を疑っちゃうなー」

言い返せなかった。言葉が浮かばなかったわけでも、魔女の言葉に納得したわけでもない。

ただただ、気に食わなくて、怒りのあまり、頭の中が真っ白になってしまったのだ。

「オレはお前が大嫌いだ！」

オレが叫ぶと、同時に最後のモンスターボールからルチャブルが勝手に飛び出してきた。

「ルチャブル!？」

「ルチャ！ ルチャブ！」

軽快なステップを踏みながら、魔女を睨んでいる。怒っているのはオレだけじゃないって事だ。

「いくぞ、ルチャブル！ このババアにギャフンと言わせてやらア！」

「ルチャ！」

「誰がババアじゃー!？」

キレ気味の叫び声と共に魔女がモンスターボールを投げる。中から飛び出してきたのは見た事もないポケモンだった。

「……は？」

「ル、ルチャ……？」

そのポケモンはあまりにも巨大で、あまりにもおぞましくて、あまりにも狂氣的だった。

「おーでーまーしー！」

その鳴き声は、まるで、人の言葉のように聞こえた。

「いじげんラツシユ！」

何が起きたのか分からなかった。いきなりルチャブルを取り囲むように6つの輪が現れたかと思えば、そこから次々に拳が飛び出してきた、ルチャブルをあっという間に戦闘不能にってしまった。

「な、なんだよ、そいつ……」

慌ててルチャブルに駆け寄り、モンスターボールに戻しながらそのポケモンを見上げる。

「フーパ。空白の時代を終わらせた魔神だよ」

第一話 『カルネ・シテイ』

最後に見たのは巨大な輪だった。その後はすぐに意識を失って、そして、現在に至る。

「さむっ!？」

目を開けたら、一面の銀世界が広がっていた。

「いやいやいやいや、死ぬでしょ!？　むしろ、なんで生きてるの!？」

雪山で寝たら死ぬ。コーラを飲んだらゲップが出るくらい当たり前の話だ。それなのに、わたしはこうして生きている。そもそも、さっきまで森の中に居たはずなのに、なにがどうして雪山に移動しているのかサッパリ分からない。

「と、とにかく、このままだと死んでしまうー！」

雪山育ちだからと言って、装備も無しに雪原を歩くほど無謀ではない。むしろ、雪と冷気の恐怖は誰よりも理解している。

「お姉ちゃん……」

雪の上を歩いていると、嫌でも昔の事を思い出してしまう。復讐の旅に出たのも、それが理由の一つだ。忌まわしいからではない。愛おしいからこそ、思い出したくない。

とある山奥の小さな隠れ里。そこで生まれ育った二人の姉妹。聡明で面倒見がよく、ポケモンをこよなく愛していた姉と、姉がいなければ何も出来ない甘えん坊の妹。

妹はことある毎に姉に泣きついた。お腹が空いた。外を歩きたい。ポケモンをゲットしたい。一人で眠れない。本を読んで。抱っこして。歌を歌って。遊んで。

姉は妹のわがままをいつもニコニコしながら受けれていた。

「お姉ちゃんはきつと……」

鬱屈した村人達。閉塞感のある村。面倒ばかりかける妹。

そんな彼女が神とは名ばかりの鳥ポケモンの下に足繁く通った理由。

ある晴れた日に、姉は遠くの大地を見つめていた。

「……………うっ……………く」

涙が滲んでくる。悲しみと怒りでどうにかなってしまいそうだ。

もう、彼女の心の内を知る事は永遠に叶わない。謝罪する事も、感謝する事も出来ない。

だって、彼女はもうこの世界のどこにもいない。

第一話『カルネ・シティ』

「……ねえ」

体が揺さぶられている。意識がゆったりと覚醒を始め、薄っすらと開いたまぶたの先から光が溢れてくる。その光があまりにも眩しくて、すぐにまぶたを固く閉ざした。

「ねえ、起きてよ」

また強く揺さぶられた。意識は完全に覚醒を果たし、眩しさに耐えながらまぶたをひらく。

「よかった。やっと起きてくれたね」

そこにいたのは白い髪の少年だった。

「心配したよ。いきなり空から降ってくるんだもの。慌ててチルタリスに受け止めさせたんだけど、ちつとも目を覚まさないし……」

「えつと……、君は？」

「ボクかい？ ボクはエックス。ここ、カルネ・シティのジムリーダーさ」

「カルネ・シティ!?!」

慌てて飛び起きて辺りを見回した。そこはレンガ造りの家が立ち並ぶ街の一角で、屋根や地面には薄っすらと雪が積もっていた。

「ほんとうに……、カルネ・シティ……なの？」

「ウソなんてつかないよ。ここは間違いなくカルネ・シティさ。もつとも、ここは旧市街・エリアで、今は観光名所として公開しているだけの場所なんだけどね」

「旧市街って？」

「その名の通りさ。以前……と言っても、かなり昔だけど、カルネ・シティの住民はここに住んでいたんだ」

「どうして、今は住んでいないの？」

「施設の老朽化が一番の理由だね。なにしろ、ここの建物は数百年前

からここに在り続けているんだ。今の時代に住み続けるには不便だし、危険なのさ。ただ、当時の街の長は歴史を重んじるタイプの人だったらしくてね、取り壊して立て直すよりも、保存して、街を拡張し、新しい住居を建てる事を提案したわけ」

「なるほど」

「それよりも、ボクはキミの事が気になるな。どうしてまた、空から降ってきたんだい？ ドラゴンポケモンと争った風にも見えないけど」

そんな事を言われても困ってしまう。状況がよく分からないのは俺も一緒だ。最後の記憶はスパアールと一緒にアギトのリザードンと戦ったところ。それ以降はぱったりと途切れ、次に覚醒した時にはエックスの前だった。

「わからないんだ。俺はさっきまでエズの森にいた筈で、そこでバトルをした後の記憶が抜けているんだ」

「エズの森でバトルを？ ずいぶんと命知らずな事をするね。あそこは超級ポケモンも生息している危険区域なんだよ？」

エックスは注意していると言うより、純粹に疑問を抱いているような口調だった。

「そんな事より、エックス」

「そんな事って言葉で片付けるのはまずい気がするけど、なにかかな？」

「バトルしよう！」

「おっと、会話の種目がキャッチボールからドッジボールに変わったね。でも、いいよ。バトルしよう」

そう言うと、エックスは俺をカルネ・シティの中心である居住・エリアに案内してくれた。

「カルネ・シティは五つのエリアに分かれているんだ。東に旧市街・エリア。西に歓楽・エリア。南に市庁舎・エリア。そして、北に封鎖・エリア。カルネ・ジムは封鎖・エリアのゲート前にあるんだ。こっただよ」

北に進んでいく。乗用車が駆け回る喧騒豊かな街。けれど、周囲を取り囲む壁が否応なく閉塞感を覚えさせる。

「ああ、気になるかい？ はじめて来た人はみんな驚くんだ。でも、仕方がないんだよ。こうしないと、街のみんなを守れないんだ」

街を四角く取り囲む巨大な壁。それは旧市街・エリアにもあった。おそらく、人間が踏み込む場所にはすべて同じ壁が建造されているのだろう。

「ポケモンが入ってこないようにする為？」

「それもあるね」

エックスは言った。

「昔の話なだけどき。この街には巨大な城壁があつたんだ」

「城壁？」

「これから向かう場所の先には、かつてアガリア城というお城があつたんだ。旧市街はその城の城下町だったわけ。この壁はその城壁の代わりなのさ」

「城壁は取り壊しちゃったの？」

旧市街は遺しているのに、不思議な話だ。

「違うよ」

「え？」

「取り壊したんじゃないで、壊されちゃったんだ。とつても強いポケモンにね」

「ふーん」

そうこう話している内に目的地へ到着した。かなり大きな建物だ。なんだか、妙に騒がしい。

「あの人達は？」

ジムを取り囲むようにたくさんの人が詰めかけている。中にはプラカードのようなものを掲げている人もいる。

「ああ、あの人達は——」

説明しようとしたエックスの頭に何か当たった。

「イテッ」

「え？」

それは石だった。

エックスはただだと頭から血を流しながら困ったように笑って

いる。

「危ないからボクの後ろにいてね」

「だ、大丈夫!？」

「うん。慣れてるからね」

「慣れてるって……」

その光景は常軌を逸していた。シャンティでも、ルールでも、オーヴェルでも、その街のジムリーダーは街の人達から絶大の支持を受けていた。それなのに、エックスを見るカルネ・シテイの人達の目は怒りと憎しみに満ちている。

「我らの村を返せ！」

「悪魔め！」

「貴様などがカルネ・ジムのジムリーダーなどと、決して認めんぞ！」
ぶつけられているのは石だけではない。腐った野菜や卵に罵詈雑言。見ていて気持ちが悪くなる。

「あはは、お疲れさま」

それなのに、エックスは何事もないかのように彼らに笑いかける。あまりにも異様だ。

「でも、ごめんね。今日は久しぶりに挑戦者が来てるんだ。キミ達も、少しだけお行儀よくしてもらおうよ」

一段低くなった声のトーン。すると、さっきまで石を投げていた人達が一斉に怯えた表情を浮かべて道を開けた。

「ありがとう。さあ、おいで」

エックスに手を引かれてジムの中に入る。そこはとても閑散としていて、人の気配が微塵も感じられない。

「あつ、そうだ。まだ、キミの名前を聞いていなかったね。教えてもらってもいい？」

「う、うん。アルト。ヴェゼール・ヴィレッジのアルトだよ」

「よろしくね、アルト。楽しいバトルにしよう」

扉を二つくぐり、廊下を渡った先にバトルフィールドがあった。天井はなく、地面は氷雪に覆われている。雪国のジムに相応しいバトルフィールドだ。

「早速はじめようか。ルールは二対二の入れ替え戦。交換はチャレンジャーのみ認めるものとする」

エックスがモンスターボールを構える。俺もスピアーのモンスターボールを手にとった。

「……あつ」

手に取ってから慌てた。今更だけど、俺は意識を失う前にスピアーをモンスターボールから出していた。回収した記憶はない。

「さあ、いくよ。グレイシア！」

「シアッ！」

エックスが繰り出したポケモンはイーブイの進化系の一つ、グレイシア。

「……スピアー！」

モンスターボールを投げる。心臓が早鐘をうつ。

「スピッ！」

空中で蓋の開いたモンスターボールからスピアーが飛び出した。

「スピアー！」

「スピッ！」

理由は分からない。だけど、スピアーがモンスターボールの中にいてくれた事に心底ホツとした。

「どうかしたの？」

エックスが心配そうに声をかけてくる。

「なんでもない！」

「そう？　なら、はじめるよ。グレイシア、こごえるかぜ！」

「シアッ！」

グレイシアの体から冷気が迸る。

「上空に上がれ！」

「スピッ！」

むかし、ポケモン博士のモンテロから聞いた事がある。空気というものゝは温められると体積を増し、冷やされると減る。体積が増えるという事は密度が減るといふ事であり、体積が減るといふ事は密度が増えるという事。要するに、暖かい空気は上に向かい、冷たい空気は下

に向かう。

上空に逃げてしまえば、こごえるかぜは怖くない。

「こおりのつぶてー！」

「シアーッ！」

放たれるこおりのつぶては追尾弾のようにスピアーに迫る。

「こおりのつぶてに向かってダブルニードル！」

「スピー！ スピスピ、スピッ！」

迫りくるこおりのつぶてにスピアーは臆する事なく突っ込み、ダブルニードルで粉碎した。

「そのまま攻めるぞー！ ダブルニードル！」

「スピーッ！」

猛烈な速度で降下していくスピアー。

「速いね。でも、これはどうかな？ つぶらなひとみ！」

「シアー！」

「スピーッ！」

グレイシアがつぶらなひとみを向けてきても、スピアーは一切容赦をしなかった。可愛いとは思ったかもしれない。庇護欲を誘われたかもしれない。傷つけてはいけない存在だと錯覚したかもしれない。

それでも、スピアーの攻撃に手心は一切加えられない。急所を的確に捉えた二連撃。そこから更にトドメばりを繰り出し、スピアーはグレイシアを戦闘不能にした。

「容赦ないね」

クスクスと笑いながらエックスは言った。

「グレイシアのつぶらなひとみはポケモンだけじゃなくて、トレーナーにも効果抜群なんだけど、キミには効果がなかったようだ」

エックスが新たなモンスターボールを取り出す。

「次はキミだよ。トドゼルガ！」

飛び出してきたのはこおりわりポケモンのトドゼルガ。鋭い牙が特徴のこおりタイプのポケモンだ。

「はーらいー！」

「ゼガア！」

バンバンとお腹を叩き出すトドゼルガ。

「スピアー、どくづきだー！」

「スピッツ！」

はらだいこの真っ最中で隙だらけのトドゼルガにスピアーが肉薄する。

「めざめるパワーー！」

「ゼガアツー！」

「なっ!？」

「スピッツ!？」

はらだいこを終えたトドゼルガは全身からエネルギーを解き放った。紅蓮に燃え盛るほのおのエネルギー。こおりとみずの二重タイプであるトドゼルガが使える筈のないほのおタイプのわざ。

あまりにも予想外の攻撃に、スピアーは回避する事が出来なかった。

「終わりだよ、こおりのきばー！」

「ゼガアー！」

体勢を整える暇もなく、トドゼルガのこおりのきばがスピアーに命中した。はらだいこによって極限まで高められたこうげき力を前に、スピアーは戦闘不能になってしまった。

「スピアー!？」

強くなった筈なのに、鈍足なトドゼルガにこんなにも一方的に負けるなんて思わなかった。

「これがめざめるパワー。ポケモンにはね、無限にも等しい可能性があるあるんだ。イーブイっていうポケモンは、それこそポケモンの可能性を体現しているよ。現在確認されているだけでも、ほのお、みず、でんき、あく、エスパー、こおり、くさ、フェアリーと八つの異なる進化形態を持っている。この技はそうしたポケモンの底に眠るパワーを引き出して放つ事が出来るのさ」

「めざめるパワー……。ポケモンの底に眠る力……」

「興味があるなら後でわざマシンをプレゼントするよ」

「いいの!？」

「うん。と言つても、とりあえずはこのバトルを楽しんでからさ。さあ、次のポケモンを出しなよ」

「分かった！」

スピアーをモンスターボールに戻す。

「ありがとう、スピアー。いくよ、キテルグマ！」

「クマーー！」

俺が二体目を選んだポケモンはキテルグマ。ほのおタイプのわざを持つとはいえ、みずタイプとこおりタイプの二重タイプであるトドゼルガとゲッコウガの相性はあまりよくない。それでも、ゲッコウガのフルパワーならゴリ押しで勝利を掴み取れるだろう。

だけど、そんな勝ち方はいやだ。ポケモンに頼り切るんじゃない。俺はポケモンと一緒に勝ちたいんだ。

「勝つよ、キテルグマ！」

「クマーー！」

「ゼガツ！」

睨み合う二体の重量級ポケモン。

「いくよ、トドゼルガ。れいとうビーム！」

「躲してアームハンマー！」

「こおりのきばで迎え撃て！」

キテルグマもそうだけど、トドゼルガも見た目に反して俊敏だ。れいとうビームを見事に躲して接近したキテルグマのアームハンマーにトドゼルガはこおりのきばで噛み付いた。かみつかれた箇所から凍りつき、キテルグマは苦悶の声を漏らす。けれど、それで攻撃を止めるほど、キテルグマは甘くない。

「キィィィッ!!」

キテルグマはこおりのきばで噛み付いてきたトドゼルガを、噛みつかれたままアームハンマーで地面に叩きつけた。

「ゼガツ!?!」

「勝つよ、キテルグマ！」

「クマー！」

「強くなるよ、キテルグマ！」

「クマー！」

流れ込んでくる。

見たこともない南国の光景。見たこともないポケモン達。見たこともない世界。

これはキテルグマの心だ。

「いくよ、キテルグマ！」

「クマー！」

まだ、ヌイコグマだった頃、キテルグマは群れに馴染む事が出来なかった。

強くなりたい。生きるよりも、触れ合うよりも、キテルグマにとって、強さこそが重要だった。

暴れまわる森の破壊神。人にも、ポケモンにも畏れられ、遂には孤独となった。誰もがキテルグマを遠ざけた。そして、一人のトレーナーが立ち上がる。血気盛んな若者だった。キテルグマという危険なポケモンからアローラを守る為に彼は戦い、捕獲した。

捕獲したトレーナーと共に戦い続けるキテルグマ。その圧倒的な力はトレーナーをアローラ最強の座に押し上げた。そして、気を良くしたトレーナーは別の地方のリーグにも挑んだ。

戦って、戦って、その度に更なる力を得てきたキテルグマ。

だけど、その力は、更なる圧倒的な力に捻じ伏せられた。

ザラク。最強の名を冠する男。その圧倒的な力にキテルグマは魅せられた。いつの頃からか抱いていた『自分は強い』という自負が碎かれた瞬間でもあった。更なる力、更なる高みの存在を知った。

だから、リーグに破れ、故郷に帰ろうとしたトレーナーと袂を分かった。心を折られた彼と共にいても、もはや先へは進めない。そう考えたからだ。

強く。もつと強く。遥かな高みの力へ手を伸ばし続ける。

「一緒に行こう、キテルグマ！」

「キイイイッ！」

イメージするのはキテルグマが前のトレーナーと共に使っていたわざ。

「あつ、なるほどね。キミもボクやザラクと同じなんだ。じゃあ、ボクも見せてあげるよ」

エックスは楽しそうにトドゼルガに手を伸ばす。

「メガシンカもZわざもめざめるパワーも、すべてはポケモンが元々持っている力なんだ。ボク達に出来る事は、その力を解き放つ為の手助けをしてあげる事だけなんだ。だからこそ、大切なのは信じてあげる事。キミなら出来ると教えてあげる事！」

俺とキテルグマ、エックスとトドゼルガの動きがそれぞれシンクロする。

「もつと、もつと、もつと！ 遥かな高みへ！ 『ぜんりよくむそうげきれっけん』！」

「凍てつく力を解き放て、『レイジングジオフリーズ』！」

キテルグマとトドゼルガ。二体のポケモンのZわざがぶつかり合う。

そして――、

「キイイイッ！」

トドゼルガが放つ氷のエネルギー砲をキテルグマは打ち破った。

肉薄し、全身に漲るパワーと共に突撃していく。壁に吹っ飛んでいくトドゼルガ。

「トドゼルガ、戦闘不能。あはは、負けちゃったね」

エックスはポケットから小さな宝石箱を取り出すと、その中身を渡してきた。

「それがカルネ・ジムで勝利した証、ネーヴェバッジだよ」

それは氷の結晶の集合体のようなデザインの綺麗なバッジだった。

「ありがとう、エックス」

予定外だし、予想外な事態だけど、これで三つ目。俺はバッジケースにネーヴェバッジを仕舞い込んだ。

「おっと、もう夕方だね。夕食の準備をするから食べて行ってよ」

「いいの？」

「もちろん。久しぶりのお客様だからね、歓迎するよ。ついでに泊まってくといいい」

「ありがとう！」

エックスに連れられてバトルフィールドを出ようとした、その時だった。

上空から何かが降りてきた。

「キュイ！」

聞き覚えのある鳴き声。

「今日はお客様がいつぱいだね」

エックスが嬉しそうに言った。

「アルト！ アルトじゃないですか！」

降り立ったフリーザーの背中から俺の方に向かって飛び降りてくるアイリス。慌ててキャッチすると、そのまま仰向けに倒れてしまった。

「痛い……」

第二話 『近況』

大きなテーブルに所狭しと料理が並べられている。

「どんどん食べてね。お代わりもいっぱいあるからさ」

「あ、はい」

エックスは浮かれた様子で次々に料理を運んでくる。

「うーん、相変わらずですね」

アイリスが呆れている。

「エックスとは長い付き合いなの？」

「長いと言うか、彼はザラクの幼馴染なんですよ」

一瞬、思考が停止した。

ザラクも一人の間人である以上、それなりに人付き合いがあってもおかしくはない。実際、アイリスのお姉さんと恋人同士だったり、アイリスの事を気にかけていたり、人間臭いところもそれなりに見てきた。だけど、どうしても一匹狼なイメージが強い。

「ザラクもエックスも、どっちもマイペースの塊ですからね。相性が良かったのでしょうか。時々、ザラクがわたし達の村にエックスを連れてくる事もありましたよ。お姉ちゃんもエックスが苦手のようでしたが、わたしは結構懐いていて、遊んでもらった覚えがあります」

「人に歴史ありって感じだね」

「まさしくその通り。まあ、そんなわけで彼に助けを求めに来たわけですよ」

「どうやら、アイリスの方もエズの森から封鎖・エリアの先の雪原に飛ばされていたらしい。」

「レポートなのか、それとも別のなにかなのか、残念ながらサツパリですね。アルトはどうですか？」

「俺もサツパリだよ。意識を失った状態で空から降ってきた所をエックスが助けてくれたみたいなんだけど」

「そ、空から降ってくるとは、中々のヒロイン力を……！」

戦慄の表情を浮かべるアイリス。謎の敗北感に打ちひしがれている彼女を放っておいて、俺はエックスが作ってくれた料理を食べる事

にした。

どれもボリユーム満点ですごく美味しい。

「あはは、気に入ってくれたみたいだね。カルネ料理は味付けが少し濃い目でね、苦手な人もいるんだ」

「そうなんだ。でも、すっごく美味しいよ！」

「ありがとう」

第二話『近況』

食事を終えた後、俺はアイリスとエズの森で起きた事について話し合った。

その時すでに意識を失っていた俺よりはマシとはいえ、アイリスの方も直前にダークライのダークホールの影響を受けていた為に詳しい事は何も分かっていないようだ。

ダークライ、見てみたかったな……。

「けれど、ヒントはあります。まず、アルトやわたしが無事である事。それと、ダークホールの影響が無くなっている事。この二点です」

「なるほどね。キミ達の話聞く限り、キミ達を飛ばしたのがヴリル教団とは考え難いね。なにしろ、彼らの目的はキミ達なんだから」

エックスの言葉に異論はない。だけど、そうなると思います真相が分からなくなる。

「とりあえず、バラバラになった仲間と連絡を取ってみたらどうかかな？　もしかしたら、なにか掴めるかもしれないし、みんなの安否も心配でしょ？」

そう言えば、連絡を取ろうと思えばポケナビで取れるんだった。あまり使わない機能だから忘れていた。

「わたしも人の事を言えませんが、アルトはもうちよつとこまめに家族と連絡を取り合った方がいいと思いますよ」

アイリスが呆れたような視線を向けてくる。

「と、とりあえずアクセルに連絡を取ってみるよ」

ポケナビの通話アプリを起動する。アクセルの名前をタップしてしばらく待つと、応答があった。

『ハロハロー…どちらさまー？』

「え？」

スピーカーから流れてきたのは甘ったるい感じの女の人の声だった。

「あ、アクセル？　なんか、可愛い声になったね」

『アツハツハツハ！　でしよでしよー！　アクセル、女の子になりましたー！』

「ええ！　そうなの!?」

『そうなの!?　じゃねーだろ！』

おっと、アクセルの声が元に戻った。

『ツツコめよ！　っていうか、何してんだババア！』

『誰がババアじゃー！』

スピーカーからドンガラガツシャーンという音が響いてくる。

『だいたい、ハロハローってなんだよ！　歳考えろ！』

『おーい！　それを言ったら戦争だぞー！』

『うわっ!?　フーパ出すなよ！　ほんとに大人おとな気ねーな！』

楽しそう。

「うん。アクセルは無事みたいだね。次はセラかな」

『うおい！　切ろうとするな！　まだ何にも話してないだろ！　お

前、どこにいったよ!?』

「こつちを放つたらかしにしたのアクセルの方じゃん」

『いや、そうだけでも！　お前！　ちよつと態度がそつけないか!?』

「だって、アクセルはどうせ無事だろうと思ってたし」

『あのなー！　こつちは変なババアに捕まって大変だったんだぞー！』

『だから、ババアって連呼するんじゃないわよ！　キレるわよ!?　本
気と書いてマジでキレるわよ!?』

『うるせーな！　電話してんだから邪魔すんなよ！』

『可愛くない子ねー！』

「あんまり無視すると本当に切っちゃうよ？」

『だー！　待て待て！　とりあえず、お前、大丈夫なのか!?　怪我とか
してねーだろうな!?』

「うん、大丈夫だよ……。アクセルは？」

『オレも大丈夫だ！ どうも、ババアがフーパでオレ達をワープさせたみたいでさー！』

「フーパ？」

『ああ、ババアの……。』

『ア・ク・セ・ルくん？ いい加減にしようねー』

ゴチンという音が響いた。

「……大丈夫？」

『お、おう。とりあえず、オレはフィオレにいる』

「俺の方はカルネ・シティにいるよ」

『カルネ・シティ!? おい、なんでそんなところに飛ばしたんだよ!?』

『んー？ さーて、何故でしょう。人に聞いてばかりじゃなくて、自分で考えないと成長出来ないぞー？』

『こいつ腹立つな、マジで……。』

さつきから会話に割り込んでくる、この人は何者なんだろう？

「ねえ、その人は誰なの？」

『ドロシー。フィオレ・ジムのジムリーダーだ』

「フィオレ・ジムの!？」

アガリアに四人しかいないブラック級トレーナー。四大魔境の一つ、大迷宮のを管理している人。そんな人が今回の件に絡んでいるとは予想もしていなかった。

『ほらほら、そこまで！ キミにはまだまだやる事があるでしょ!』

『散々邪魔した挙げ句にそれか!? クツソ！ おい、アルト！ あんまり無茶すんなよ!』

「あつ、ちよつと!」

切られた。

「あー……。アルト？」

「なに？」

「顔が怖いですよ……。？」

深く息を吸う。とりあえず、メッセージを送っておこう。

バカ！ アホ！ アクセル！

「これでよし」

切り替えよう。次はセラの名前をタップする。

『アルト!? 大丈夫!?』

今度は最初からセラの声だった。

「うん。セラは?」

『うーん、なんか大変な事になってる……』

「え? どういう事?」

よく聞くと、スピーカーの向こうから絶え間なく爆発音のようなの
のが聞こえてくる。

一気に不安になって来た。今、セラはどういう状況の中にいるんだ
ろう。

「セラ! 今、どこにいるの!?!」

『どこって、えーつと……。ここって、どこ?』

『クセルセス高原だ。メルカトの南部に広がる高原地帯って言った方
がアルトも分かりやすいだろ』

割り込んできた声はバレットのものだった。

「バレット!? セラと一緒になの!?!」

『ああ、とりあえずお前の幼馴染は無事だ。怪我もない』

「そっか、ありがとう。それで、そっちはどういう状況なの? なん
か、物騒な音が聞こえるんだけど……」

『あー……。なんて言えばいいのかな。実はナザレ様も一緒なんだよ』
「ナザレ様って、たしか……」

元・メルカトジムのジムリーダーにして、ドロシーと同じくブラッ
ク級のトレーナーの筈。

「え? 行方不明だったんじゃないの?」

『お前は気絶してたから……。エズの森にいたんだよ』
「そうなんだ」

『んで、一緒にここへ飛ばされたんだけどよ、メルカト・シティの方が
らざらざらドラゴンポケモン達が来て、狂喜乱舞してんだわ』

「この音、喜んでる音なの!?!」

凶暴なポケモンが大暴れの真っ最中なのかと思った。

『今、ナザレ様が抑えているところだ。それで、アルト。とりあえず、合流出来ないか？ オレはこのままナザレ様と一緒にメルカトを開放しようと思ってるんだが、セラは連れていけないからな』

『ごめんなさい……』

『別に責めてるわけじゃない』

メルカトの奪還。それはバレットの旅の目的だ。急展開だけど、それなら俺も力を貸してあげたい。

「分かった。すぐにそっちへ向かうよ」

『頼む。ようやくなんだ……。ようやく、故郷に帰れる日が来たんだ』
ポケナビ越したと、今のバレットの顔は分からない。だけど、その胸中に宿る感情は伝わってきた。

「良かったね、バレット」

『……おう』

嬉しそうだ。

「なるべく急ぐね。セラも待っててね」

『う、うん！』

俺はポケナビの通話を切った。とりあえず、全員の安否は確認出来た。

「メルカトに向かうんですね？」

「うん！」

アイリスはクスリと微笑んだ。

「腕が鳴りますね」

アイリスもやる気満々だ。

「なんか、すごい話を聞いちゃったな」

エックスが呟いた。

「ナザレが見つかった上に、これからメルカトを奪還しに行くなんて、結構な大事件だよ。出来ればボクも行きたいんだけど、ジムリーダーだから離れられないんだよね……」

「ふっふっふー。心配無用ですよ！。そもそも、メルカトの一件はナザレの不在が主要因ですからね。ナザレが帰還した今、そこまで難しい事ではありませんよ」

「うーん。だけど、メルカトは魔境の一つだからね。危険な事には変わりないよ。ザラクに連絡を取ってみるから、ちよつと待っていて」

「いやいやいやいや、ザラクが来たらこじれますから!」

そう言えば、そもそもナザレが失踪した原因を作ったのはザラクだった。

「ねえ、アイリス」

「なんですか?」

「大丈夫なの?」

「なにがです?」

アイリスは朗らかな笑みを浮かべている。だけど、ナザレは彼女の姉の仇の一人だ。

あれほど、ロイドやシャーリーを目の敵にしていた彼女がそのナザレに協力しようとしている事に違和感を覚える。

「アイリス。なにか溜め込んでない?」

アイリスは沈黙した。困ったような、悩ましいような、そんな表情を浮かべながら虚空に視線を向けている。

やがて、彼女は深く息を吐いた。

「別に……、隙あらばナザレを亡き者にしようとか、そんな事は考えてませんよ?」

「そうなの?」

びっくりした。

「……いや、マジですか? わたし、そんな事企んでる風に見えてました?」

「うん。それでアイリスがバレットと戦う事になったら、どう止めようかなって悩んじゃったよ」

「いやいやいやいや、悩むところおかしいですからね!」

安心した。

「ねえ」

エックスが話に入って来た。

「ところで、ずっと気になってたんだけどさ」

「どうしたの?」

エックスは不思議そうな顔で言った。

「どうして、アルトはアイリスって呼んでるの？」

「え？」

どういう意味だろう。首を傾げていると、アイリスはなんだか気まぐずそうな表情を浮かべている。

「あー……、エックス。あなた、相変わらず空気が読めませんね」

「ええ!? ボク、空気が読めてなかったの!？」

「ええ、全く読めていませんね」

アイリスは深々と溜息を吐くと俺の方を見た。

「アルト。もう夜ですし、メルカトに向かうのは明日でもいいですか？」

「え？ うん。それはもちろん」

「じゃあ、この後、少しだけわたしの話を聞いてもらえますか？」

不安そうに瞳を揺らすアイリス。彼女が今、何を思っているのかは分からない。だけど、その姿はオーヴェルに向かう前、自分の旅の目的を話してくれた時の姿とダブる。

「うん、聞くよ」

「……ありがとう」

第三話 『エリザベス』

それにしても、カルネ・ジムは広大だ。それに、とても豪華だ。どこもかしこも埃を被っているけれど、壁には絵画が飾られ、床には絨毯が敷かれている。それに、各所に高級そうな調度品が並んでいる。「気になる?」

部屋に案内してくれているエックスが唐突に振り返って言った。

「えっと、うん。なんか、ジムっていうよりも、お城みたいだね」

「大正解。その通りだよ」

「え?」

エックスは近くの大きな絵画をランプで照らした。

そこに描かれていたのは白い髪が特徴的な大家族だった。

「これ、エックスの家族の絵?」

「違うよ。これはアガリア王家の絵」

「アガリア王家って?」

「かつて、荒廃していた大地を復興させた偉大な王の末裔だよ」

「偉大な王って、ヴリル王の事?」

アルトギア手記『青の書』が起動した時に見た光景を思い出す。あらゆるポケモンと心を通わせ、その圧倒的な力で理想の国家を設立させた霸王。

アルトギアも、彼を偉大なるヴリル王と呼んでいた。

「ああ、そっか。キミはアルトギア手記を開いたんだね。だけど、ボクが言っているのは、彼より後の時代の王の事さ」

エックスは隣の絵画にランプの灯りを移した。そこに描かれているのは一人の女性。

「女王アガリア。聖女サラの娘であり、彼女の意志を受け継いだ女性だよ。アルトギア手記を封印したのも彼女だとされているんだ」

「アルトギア手記を? じゃあ、四大魔境を作ったのも?」

「そう、彼女さ」

もう一度、女王アガリアの肖像を見る。白い髪、蒼い瞳。どこか、アイリスと似ている。

俺はさつきから口を閉ざしたままのアイリスを見つめた。

「アイリスは、前にアルトギアは試練だつて言つてたよね？」

「ええ、そうですね。もつとも、レムハザードの受け売りですが」

レムハザード。アガリア地方の最東部に位置するバスティロ・シテイのジムリーダー。『亡霊の港』と呼ばれる魔境の管理者でもあるブラック級トレーナーだ。

「彼女は言いました。アルトギア手記は女王アガリアが『来るべき災厄』に備える為に遺した大いなる導しるべであり、相応しい者に絶対なる力を与える物だ、と」

「『来るべき災厄』？」

初めて聞く言葉だ。アイリスは思い悩む表情を浮かべている。

「そのままの意味だよ。そう遠くない未来、アガリア地方は未曾有の災厄に襲われる」

「それ、本当なの？」

未曾有の災厄と言われても、想像がつかない。

エックスはクスリと微笑んだ。

「本当だよ。だから、シエルはヴリル教団に入ったんだ」

「シエルって？」

「四天王の一人ですよ」

「ええ!!? 四天王がヴリル教団なの!?!」

もはや、悪の代名詞と言っても過言ではないヴリル教団。そこにミリガンと同じ立場である筈の四天王が絡んでいるなんて信じられない。

「でも、ミリガンはヴリル教団と戦つてるよ!?!」

ミリガンは正義の味方だ。それに、近くに悪が潜んでいる事に気づかない人じゃない。

「その辺りの事情までは分かりませんよ。事情があるのか、単に知らないだけなのか」

「でも、二人は知ってるじゃないか!」

そう言うと、アイリスは少しムツとした表情を浮かべた。

「な、なに?」

「べつにー」

そつぽを向かれてしまった。なにが彼女の機嫌を損ねたのかさっぱり分からない。

困っていると、エックスが微笑みながら口を開いた。

「シエルはアガリア王家の末裔であり、カルネ・ジムの元・ジムリーダーだったのさ」

「アガリア王家の末裔で、元・ジムリーダー……」

再び、女王アガリアの肖像画を見る。アガリアの四大魔境を築き、『来るべき災厄』に備える為にアルトギア手記を封印した嘗ての王。

その末裔であり、ヴリル教団の一員となったカルネジムの元・ジムリーダーにして、現・四天王。

「シエルはどうしてヴリル教団に入ったの？」

「アルトギア手記の為さ」

「ストップ」

アイリスがエックスの話を遮った。

「そこから先はわたしが話します」

「了解」

エックスはクスリと笑うと、俺達を客室へ案内してくれた。

第三話『エリザベス』

「——というわけで、話の続きですね！」

「う、うん」

アイリスは妙に張り切っている。

「シエルがヴリル教団に入った理由。それは二年前の事が切っ掛けなのです！」

「あっ」

二年前。その言葉で察しがついてしまった。

「もしかして、ザラク関連？」

「ザツツライツ！」

相変わらず、アルトギア手記と並んで、ザラクは物事の本場にいる。

「二年前、ザラクはカルネジムを訪れ、圧倒的な力で当時のジムリーダーであり、シエルの父であるレギオンを打倒しました」

相変わらず、無茶苦茶な話だと思う。ジムリーダーは選びぬかれた精鋭だ。その本気の力を真つ向から叩き伏せるなんて、並のトレーナーに出来る事じゃない。

「レギオンは己を鍛え直す為、娘にすべてを託して旅に出ました。そして、託された娘は王家に伝わる『アガリアの伝説』を知る事になりました」

「アガリアの伝説って、ロイドが言っていた？ 要するにアルトギア手記の事だよな？」

「いいえ、違います。アルトギア手記はあくまでもアガリアの伝説を紐解く為のもの。言ってみれば、扉と鍵のような関係です」

アイリスは言った。

『来るべき災厄』。それはアガリアの伝説でのみ語られるもの。けれど、シエルは様々なデータを検証し、それが眉唾なお伽噺ではない事を悟りました」

アイリスは表情を曇らせた。

「彼女は懸命に周囲へ訴えかけました。このままではアガリア全体が危機に瀕すると……。だけど、信じる者はいませんでした。『世間知らずのお姫様がお伽噺を信じ込んで怯えている』と誰もが思いました。ただ一人、エックスを除いて」

「エックスは信じたの？」

「彼はご存知の通り、マイペースの塊ですからね。一笑に付すのではなく、シエルに証拠を求めました。そして、彼女の集めたデータを検証し、彼女の言葉が真実だと確信したそうです。それから、彼女と彼はアガリアを救う方法を模索し始めました」

アイリスは肩を竦めてみせた。

「けれど、どうしても上手くいきませんでした。どんなに証拠となるデータを集めて提示しても、誰も信じなかったからです」

「どうして？」

「如何に王家に伝わるものとはいえ、多くの人はお伽噺としか思わない。お伽噺を真実だと捉える事は、大人になるほど難しいそうです。レギオンがシエルのように騒ぎ立てなかったのも、彼が継承した時に

はずで成人していて、伝説の内容を鵜呑みにしなかったからなので
す」

「……なるほど」

前にモンテロ博士も言っていた。大人になると知識が増える分、自分の知らない事に対しては懐疑的になる。そして、未知を識る事を怖れるようになる。

だからこそ、博士は俺やアクセル、セラをよく研究所に招いてくれた。大人の自分では掴めないなにかを子供の俺達になら掴めるかもしれないからと。

「だから、シエルは誰にも頼らず、自力でアガリアを救う事にしました。ザラクの大暴れのドサクサに紛れて四天王の座を勝ち取り、王家の財産を使ってジュリアス財団を築いたのです」

「ジュリアス財団って、ユニオン大会のスポンサーだよね？」

「ええ、その通り。ユニオン大会に限らず、現在行われている大会のほとんどはジュリアス財団が主催となっているのです。そうして表向き立場を確固たるものにした彼女は『アガリアの伝説』を完全に紐解く為にアルトギア手記を回収するべく動き出しました」

「それが、シエルがヴリル教団に入った理由？」

「その通りです」

ようやく、話が繋がった。

「つと、シエルの話はこんな所ですね。わたしもエックス経由で聞いた事ですから、これ以上の事は知りません」

「え？」

「……マメパトがタネマシンガンを食らったような顔しないでくださいよ。そもそも、シエルの話は本題じゃないんですからー！」

ムスツと頬をふくらませるアイリス。

そう言えば、元々はアイリス自身の話を聞く予定になっていた。それがズレにズレた結果、シエルの話を聞く事になったのだ。

「ごめん、アイリス。ちゃんと聞くから機嫌を直してよ」

アイリスは頬に溜め込んでいた空気を吐き出すと、そのまま溜息を零して言った。

「わたし、アイリスじゃないんです」

「へ？」

意味がわからなかった。

「ど、どういう事？」

「アイリスはお姉ちゃんの名前なんですよ。本当のわたしは『エリザベス』っていう名前なんです」

「……あ、ああ、そっちな」

ホツとした。目の前の彼女が偽物なのかと思った。

「いやいやいやいや。そっちなかって、それだけですか!？」

「ああ、いや、驚いたよ？ でも、エックスの言葉でそういう事かなって、ちよつと想像ついてたから……」

「毎度の事ですが、アルトは察しが良すぎます！ もつと派手にリアクションしてくださいよ！ わたし、一世一代の告白のつもりだったんですよ!？」

「えつと、ごめんね？」

エリザベス。ずっとアイリスと呼んでいたから、なんだか違和感が大きい。

「エリザベスって、なんかゴージャスな感じだね」

「どういう感想ですか!？」

アイリス……いや、エリザベスはポンポンと怒っている。

「どうして、お姉さんの名前を名乗ってたの？」

そう尋ねると、今度は悲しげな表情を浮かべた。

「簡潔に言えば、自己満足ですよ」

エリザベスは語った。姉であるアイリスと過ごした日々の思い出を、姉が抱いていたであろう外の世界に対する憧れを。

「わたしはお姉ちゃんの代わりになりたかった。お姉ちゃんが見たかったものを見て、お姉ちゃんがやりたかったことをやる。その為に、まずはお姉ちゃんを殺したヴリル教団の幹部に復讐する事にしました。シエルと繋がっているエックスから、幹部の情報を教えてもらって……」

なるほどと思った。どうして、彼女がヴリル教団の幹部に詳しいの

か疑問に思っていたのだ。

「でも、オブライエンと会って、アルト達と旅をして、考えるようになったんです」

オブライエン。何度か、その名前は耳にしてきた。たしか、ヴリル教団の幹部の一人だ。

「ユニオン大会の日。わたしはオブライエンと戦いました」

「そうなの!?!」

「ええ……。実を言うと、それがそもそもの目的でした」

エリザベスの瞳に涙が浮かんだ。

「殺してやろうと思いました。あるいは、二度と溶けない氷の中に封じ込めようかと」

きつと、本気でやろうとしたのだろう。唇を噛み締めながら、彼女は言った。

「でも、あの男! 自分から……!」

何度も呼吸を整えて、彼女はユニオン大会の日に起きた出来事を語った。

オブライエンとのバトル。エリザベスはフリーザーを繰り出し、オブライエンはブーバーンを出した。そして、フリーザーが初手から全力のぜったいれいどを発動した瞬間、彼はブーバーンをボールに戻し、ボールホルダーを外して、自らぜったいれいどの効果範囲に踏み込んでいったらしい。

『こんな事では償いにはならないだろう。けれど、これ以外に贖う術を知らんだ。すまなかつた』と、彼は言いました」

エリザベスは拳を壁に何度も叩きつけた。

「卑怯者! 卑怯者! 卑怯者!」

おそらくだけど、オブライエンという男はその時、本当に死のうと思っていたのだろう。ボールホルダーをわざわざ外したのは、そういう事だと思う。

そして、エリザベスはそんな彼の行動を見て……、

「……殺せなかつた」

悔しそうに涙を零しながら、彼女は言った。

「なんで、すまなそうな顔をするんですか！ 謝ったりするんですか！ お姉ちゃんを殺しておいて、なんで今さら！」

きつと、今まで必死に抑え込んできたのだろう。俺に過去のことを話しているというよりも、まるで栓の壊れた蛇口のように、エリザベスは感情を吐き出し続けた。

俺は黙って聞いていた。実の姉を殺された彼女の苦しみを分かっ
てあげられるとは思えなかったし、ボールホルダーをわざわざ外して、ポケモンの命を気遣ったオブライエンを悪と断じる事も出来ない。

だから、彼女の為にしてあげられる事はそれだけだった。

「……失礼しました」

しばらくして、落ち着いたエリザベスは顔を赤らめた。

「エリザベス」

「……な、なんか、本名で呼ばれると照れますね」

もじもじするエリザベス。

「とりあえず、エリザベスだと長いから、エリザでいい？」

「いやいやいやいや、別に長くないでしょ！ まあ、いいですけど……」

エリザ。うん、この方が呼びやすい。

「結局、オブライエンはどうしたの？」

エリザは少し表情を曇らせた後に言った。

「彼は今も変わらずですよ。もつとも、ヴリル教団そのものからは距離を取る事にしたそうですが……。彼は四年前の事でヴリル教団を見限っていました。けれど、償う方法が分からず、そのまま籍を残していたそうです。そして、シエルに出会い、彼女の手足となる事を誓ったとの事です」

「シエルの？」

エリザは頷いた。

「シエルがヴリル教団に入り込む為に手引きをしたり、その後もシエルの手の届かない場所の情報を読んだりなどなど」

「なんだか、映画のスパイみたいだね」

少しだけ、分かった気がする。人を殺したいと思うほどの怒りをエリザが抑えられるようになった切っ掛けは間違いなくオプライエンの存在だろう。

恨んだ相手が真摯に罪を償おうとしている事を知って、彼女は許してしまったのだ。

「……それから、アルトやバレットと旅をして、気づけばお姉ちゃんの代わりに見るはずだった外の世界をわたし自身の目で見て、楽しんでいました」

まるで、それが悪い事のように彼女は顔を顰める。

「青の書の事をヴリル教団に知られ、狙われると分かっても一緒に居てくれようとするアルトとバレットの事が好きになりました。いつの間にか、お姉ちゃんの代わりにいる事が苦しくなっていました」

「ふーん」

「……いやいやいやいや、そこを『ふーん』で流さないてくださいよー！」

涙目で詰め寄ってくるエリザ。だけど、他に反応のしようがない。「だって、エリザがエリザでいたいって思えるくらい、俺達と一緒にいて楽しかったって事でしょ？ なら、それは良い事だと思うよ。少なくとも、俺は嬉しいし」

「ほこや!?!」

エリザが真っ赤になった。相変わらず、表情がコロコロ変わって、エリザの顔は見ていて飽きない。

彼女はお姉さんに迷惑がられていたと言ったけど、それは違うと思う。死んだ人の事だから、安易に口に出す事は出来ないけれど、きつと、お姉さんもエリザの事が好きだった筈だ。

「エリザ」

「ほ、ほえー」

変な声。

「改めて、これからもよろしくね」

「ひゃ、ひゃいー！」

第四話 『合流』

クセルセス高原。旧メルカト・シティの南部に広がる風光明媚な場所だ。

メルカトの民はよくここでピクニックに興じていた。オレも家族に連れて来られて、友達やポケモンと一緒に駆けずり回っていた。コリンクと出会ったのも、この場所だった。

「ねえ、アンタ」

「アンタじゃない。バレットだ」

過去に思いを馳せていると、隣に桜色の髪の女が現れた。アルトの幼馴染の一人、セラだ。

「どうした？」

「あのさ……、アルトと一緒にどんな旅をして来たのかって、聞いてもいいい？」

「構わないぞ」

「あ、ありがとう！」

あと一歩でメルカトを解放出来る。悲願の達成を目前に控え、足止めを喰らうのは不愉快な事の筈なのに、どうしたわけか、あんまり苛つかない。足止めの原因となっている女に対しても、怒りは欠片も湧いてこない。

「オレがアルトとアイリスと出会ったのはユニオンだ。大会が行われるユニオン・ドームの近くだった」

時間に見れば、ほんの数ヶ月。歩いた距離も、街三つ分。

だけど、オレはあの二人と過ごす日々を心の底から楽しんでいた。

「アルトとスピアーは息がピッタリと合っていた。それに、キテルグマやゲッコウガも強かった」

同じ年の相手との全力バトルで負けたのは、アレが初めてだった。

「アギトにポケモンのケアを習ってな。ブラッシングなんて、あんまり念入りにやってこなかったが、これが存外面白くてな」

ヴリル教団との戦い。三人で挑んだリアル・ジム。戦って、戦って、戦い続けたオーヴェル・シティ。なんとも濃密な日々を過ごしたもの

だ。

「た、大変だったんだね」

「いや、楽しかったぞ」

旅はいつか終わるものだ。それが、目前まで迫ってきている。

「……オレの悲願はメルカトを解放する事だ。それが、もうすぐ果たせる」

嬉しい事の筈なのに、どうしてか胸につかえる。

「そっか」

セラは眩くように言った。

「バレットはアルトともっと旅をしたいんだね」

その言葉に、オレは笑いそうになった。

「……ああ、そうだ」

悲願の達成は、すなわち、旅の終わりを意味している。

怒りが湧かないのも当然だ。オレは終わってしまう事を恐れているんだ。

セラを近隣のポケモンセンターに預けて、さっさとメルカトに乗り込めばいいものを、未練たらしくナザレ様に頼み込んでまで待つてもらっている理由もそれだ。

「わたしもずっとアルトと一緒に旅をしたかったの」

セラは言った。

「赤ん坊の頃からずっと一緒だったんだもん。何をするのも、どこへ行くのも、いつだって一緒がいいの。だから、わたしやアクセルを差し置いて、アルトと一緒に旅をしていたアンタやアイリスが羨ましくて仕方ないの」

「そっか……」

これからはセラがアルトと旅をする事になる。それが羨ましいと感じてしまう。

この気持ちを、彼女はずっと抱いていたのだろう。

「間違いなく、楽しい旅になる筈だ」

「ううん。きつと、ならないよ」

セラは視線を地面に落としながら言った。

「アルトも、きつとバレットやアイリスと一緒に旅をされていて、楽しくて仕方がなかったんだと思う。だから、ちつとも連絡をくれなかったんだ。わかるんだ、わたし。だって、幼馴染だもん」

セラは蹲ると、鼻をスンと鳴らした。

「セラ……」

「アクセルは猪突猛進過ぎるって、アルトが言うの。けどね、アルトも同じなの。なにかに夢中になると、それしか見えなくなるの。二人との旅に、アルトは夢中になってたんだ」

グスグスと泣きじやくり始めるセラに、オレはなんと声をかければいいのか分からなかった。

「アルトはポケモンが大好きで、ポケモンバトルも大好きなの。でも、わたしがあなた達の旅と一緒にいて行っていたら途中で辛くて仕方が無くなっていたと思う。それが、アルトにも分かっていったんだ」
困り果てた。アイリスも面倒くさい性格だが、セラも負けていない。

オレは涙が苦手なんだ。

「……アルトと一緒に旅をしたいのはわたしじゃない。アクセルなら馴染めるかもしれないけど、わたしなんて……、アルトにとって邪魔にしかないんだ」

オレはやれやれと肩を竦めた。

「ツハ！ 何を言い出すかと思えば」

セラはむつつりした顔で睨んでくる。だけど、生憎とオレは泣いている女を優しく慰める言葉なんて知らない。そもそも、オレの周りで知っついていそうなヤツは一人もいない。

「お前はついて行きてーんだろ？」

セラは何も言わず、ただ小さく頷いた。

「だったら、それでいいじゃねーか」

言うてから、気がついた。その言葉はオレ自身にとっても答えだ。

「オレも、アイツラと一緒に旅がしたいんだ」

「でも……、イヤだつて言われたら？」

「その時はその時だろ」

セラは不満そうだ。

「行動しない内から愚痴つても仕方ねーだろって話だ」

「テキトー過ぎじゃない?」

「心外だな。むしろ、賢明と言え」

その時だった。東の空に見覚えのある青い翼が見えた。

第四話『合流』

「バレット! セラ!」

フリーザーの背中からアルトが飛び降りてくる。その後にアイリスも続く。

「ふっふっふ、参上しましたよ!」

二人は同時にモンスターボールを構えた。

「いよいよだね、バレット!」

「腕が鳴りますね!」

その言葉に思わず笑ってしまった。

「え? あれ?」

「なんで笑うんですか!」

戸惑うアルトとムキキと怒るアイリス。だけど、許して欲しい。

「一緒に来てくれるか、二人共」

「もちろん!」

「当然!」

旅はここで終わるかもしれない。終わらないかもしれない。

どちらにしても、今この瞬間、オレは最高に気分がいい。

「なあ、セラ」

オレは後ろでモジモジしているセラに声をかけた。

「お前も来るか?」

「え?」

セラは目を丸くして、それからオレの言葉をゆっくりと呑み込んだ。

「行く!」

セラの返事にアルトは一瞬驚いてから、嬉しそうに笑った。

やっぱり、セラの思い過ぎしだ。アルトはちゃんとセラと旅をした

いと思っている。

「よし、メルカトを奪い返しに行くぜ！」

「うん！」

「はい！」

「おー！」

オレ達四人はナザレ様の下へ向かった。

大きな岩の上に座りながら、あの方はメルカトの方角を見つめている。

「ナザレ様！」

「あ、バレット」

降りて来たナザレ様はオレに微笑みかけると、アイリスを見て目を見開いた。

「あなた……」

「はじめまして、ナザレ。わたしの名前はエリザベス。バレットの友達です！」

「……ん？」

エリザベス？ 何を言っているんだ、コイツ。訝しんでいると、アイリスはニヤリと笑った。

「アイリスっていうのはエリザのお姉さんの名前だったんだよ。お姉さんの代わりに世界を見て回る為に、そう名乗ってたみたい。だから、本当の名前はエリザベスなんだってさ」

アルトがわかりやすく解説してくれた。アイリスは渋い表情を浮かべている。

「なんで、アツサリ言っちゃうんですか!? バレットにも胸キュンさせてもらおうと思ったのに！」

「お前は相変わらずだな。とりあえず、エリザでいいのか？」

「……いいですけどね、別に」

いじめてしまった。本当に面倒くさいヤツだ。

「ふーん」

「な、なに？」

セラはアルトを戸惑わせている。

「胸キユンさせたんだ」

「えつと、セラ？」

「ふーん。ふーん。ふーん！」

面倒くさいヤツがここにも一人。まったく、二人はナザレ様を見習うべきだ。

「アイリス……。彼女の妹なのね」

「……ええ、そうですよ」

ナザレ様は石ころを蹴っ飛ばしているアイリス改め、エリザに歩み寄っていく。

「ごめんなさい」

一瞬、頭が真っ白になった。

ナザレ様は蹲るようにして、頭を下げている。何度も、何度も、美しい金色の髪を土で汚すことも厭わず、頭を地面に擦らせている。

「償える事じゃない。でも、わたしに出来ることならなんでもします。本当に、ごめんなさい」

その姿に、オレはエリザの言葉を思い出した。

——メルカト・ジムのジムリーダー・ナザレ。彼女はわたしの姉であり、ザラクの婚約者の仇の一人なのです。

あの時、オレが否定した彼女の言葉は真実だったのだ。そんな事はあり得ないと頭から除外して、二人を引き合わせてしまった。

「やめてください」

エリザは言った。

「……大体の事は察してます。それに、あなたの事はザラクがすでに裁いています。だから、もういいです」

エリザはナザレ様に決して顔を見せなかった。オレからも、彼女の顔は見えない。

だけど、声が震えていた。

「わたしはわたしの友達の為に来ました。さっさと、メルカトを解放しますよ！」

その言葉に、オレは泣きそうになった。考えなしの馬鹿野郎を友達と呼んでくれた彼女に、胸が苦しくなった。

「その事なんだけどき」

パンと手を叩いて、アルトは言った。

「実は、カルネ・シティを出る前に今回の事をヴォルフに話したんだ」
ヴォルフはリールジムのジムトレーナーであり、リール・シティの秩序を守るアガリア警察リール署の副署長だ。

「ヴォルフに？」

「うん。メルカトの奪還となると、一筋縄ではいかないって、エックスに言われたからね」

エックスというのはカルネジムの現ジムリーダーの事らしい。どうやら、その男の助言で、ヴォルフに応援を頼んだようだ。

オレとしては、オレ達だけでメルカトの奪還を成し遂げようと思っていたのだが、確かにヴォルフの力を借りられるなら、それに越したことはない。なにしろ、これまでアガリア警察や政府が手を出せなかった四大魔境に踏み込むわけだから、ナザレ様が一緒にいても安全快適とはいかない。

「オレ達が到着する頃に、応援も到着するって言ってたから、そろそろだと思っただけ」

その言葉と同時に東や南の空にたくさんの影が現れた。

「あれか？」

ヴォルフだけかと思ったが、想像以上の大軍が押し寄せてくる。

「……いや、違う」

空を見上げていると、ナザレ様が立ち上がると、険しい声で言った。

「ヴェルトーゼ。それに……、シグナス！」

それは、どちらもヴリル教団の大幹部の名前だった。

第五話 『魔神』

空を埋め尽くす影がゆっくりと降下してくる。

「ちよ、ちよつと……」

セラは真つ青な顔で俺の服の袖を掴んだ。

「なにしてるの!?! 逃げようよ!」

「なんで?」

「え?」

セラは目を丸くしている。その理由が分からなかった。

メルカトを奪還する。それがバレットの悲願だ。

だから、ここに来た。

「バレットの邪魔はさせない」

エックスが言っていた。メルカトの奪還は一筋縄ではいかない。

『そもそもの話になるんだけどね。ナザレは生きているんだ。それなのに、生きているナザレではなく、ドラゴンポケモン達はメルカトや空を守っている。これが、何を意味しているのか分かるかい?』

そこまで言われれば、さすがに察しが付く。要するに、この状況は誰かが仕組んだものだ。

そして、この状況で現れたヴリル教団。無関係である筈がない。

「結局、なるようになってしまふのですね」

エリザはやれやれと肩を竦めた。

「いずれは戦う相手。今がその時という事ですね」

「待ってよ! あの数なんだよ!?! ちゃんと見てよ!」

セラは悲鳴染みた声で言った。怯えている。

「たった五人で勝てるわけないよ!」

「その通りだ」

セラの言葉に重ねるように、バレットが言った。

「お前ら、セラと一緒に逃げてくれ」

「バレット!?!」

バレットは苦笑いを浮かべていた。

「嬉しかったぜ、一緒に行くって言ってくれて」

「だったらー！」

「けどよ、さすがにコレはヤベーだろ」

頭上を見上げ、バレットは肩を竦めた。

「十分だ。オレは最高の仲間を得た！　ここで終わったとしても、満足だ！」

「バレット！」

バレットはセラを俺の方に突き飛ばすと、叫んだ。

「行け！　お前らはセラを逃してやれ！」

セラの震えが伝わってくる。俺達とは違って、セラは逃げたいんだ。だったら、逃してあげないといけない。だけど、それはバレットを置いていくという事だ。だって、バレットは逃げない。悲願を前に、逃げられる性格じゃない。

「エリザ！」

「お断りします」

セラの事を任せようと思ったのに、エリザに先手を打たれてしまった。

「友の為、そして、わたしの為。ここから逃げ出す事など出来ません！　そもそも、セラはあなたの幼馴染でしょう！　あなたが守り、逃しなさい！」

ヴリル教団が迫って来ている。迷っている時間はない。だけど、動けない。

だって、バレットとエリザはここに残る。二人を見捨てる事なんて出来ない。

なにより、目の前に敵がいるのに、背を向けて逃げるなんて、そんな事はしたくない。

「……ごめん、セラ」

「アルト……」

俺はゲツコウガのモンスターボールを手に取った。

「絶対にお前を守るから！　だから！」

怯えているセラを遠ざけて、ゲツコウガを出す。

「コウガ……？」

ゲッコウガが何かを問いかけてくる。だけど、ポケモンの言葉は分からない。

俺はただ、戦うだけだ。

「いくよ、ゲッコウガ」

ポケモンと一体となる感覚を意識する。

「強く、強く、どこまでも強く！ 限界を超えた、その先へ！」

「ダメだよ、アルトくん。それはダメ」

天に向って突き上げようとした手を掴まれた。

赤い瞳が俺を見つめている。

「ミ、ミリガン？」

音もなく現れたのは、四天王・ミリガン。

「ごめん、遅くなったわ。でも、もう大丈夫！」

ミリガンはいつかのように言った。

「助けに来たわ！」

第五話『魔神』

ミリガンはギルガルドを繰り出した。

「ヴリル教団に告ぐ！ 降伏しなさい！」

よく響く声で彼女は叫んだ。当然の如く、従う者はいない。聞こえていなかったわけではないだろう。その証拠に、彼らの声がここまで届いている。もう、ヴリル教団は目と鼻の先まで降りてきていた。

「ハッハッハ！ 四天王と言えど、この数を相手に何が出来る！」

「たったの六人！ しかも、ガキばかりじゃねーか！」

「そっちこそ、さっさと降伏した方が身のためよ！」

嘲笑する声に対して、ミリガンは一言、「残念ね」と呟いた。

腰の刀を抜き放ち、彼女は言う。

「ならば、斬る！ ギルガルド！」

「ギガッ！」

ギルガルドがヴリル教団のいる高度まで上がっていく。

「撃ち落せ！ ラスターカノン！」

「だいもんじ！」

「エレキボール！」

「はかいこうせん！」

「れいとうビーム！」

「エアカッター！」

次々に繰り出される攻撃に対して、ミリガンの瞳は揺るがない。

「せいなるつるぎ！」

「ギルツ！」

ギルガルドの姿が掻き消えた。そして、空に光の線が縦横無尽に走った。

炎も、雷も、破壊や氷結のエネルギーも、なにもかもが引き裂かれ、ポケモン達が落ちていく。

「は？ はああああ!？」

「ウソだろ!?! 倒されたのか!?!」

「み、見えなかった……」

悲鳴がこだまする。降りてきていたとはいえ、あの高度から地面に叩きつけられたら無事では済まない。せめて、助けられるだけは助けようと思つてモンスターボールに手をかけると、その前にミリガンがジユカインを繰り出した。

「ハードプラント！」

「ジユカツ！」

飛び出すと同時にジユカインは大地を殴りつける。すると、地面から無数の蔦が現れて、落下してくる教団員とポケモン達を絡め取つた。そのまま締め上げられ、意識を失つていく。

「……見事」

空に残っているのは二人だけ。

「よもや、千の軍勢を一手の内に落とすとは、さすがは四天王。一騎当千という言葉を体現しているな」

「シグナス！ よもや、アナタが表舞台に上がるとは驚きだけど、この千載一遇の好機を逃しはしない！ アナタを逮捕します！」

シグナスと呼ばれた男は黄金の髪を靡かせ、ミリガンに拍手を送る。

「結構。ならば、やってみるがいい」

そう言うと、シグナスは乗っていたピジョットから飛び降りた。

「四天王・ミリガン。大層な名を持ったものだな、コード：D」

コード：D。その言葉が、やけに耳にこびりつく。

初めて聞く言葉なのに、どこか懐かしく感じる。

「相変わらずね、アナタは」

その言葉は、いつも優しく温かみのある彼女からは想像も出来ないほどに冷たく響き渡った。

「天然物が見つかった以上、人工物は不要と思っていたが、気が変わった」

シグナスは紫のモンスターボールを取り出した。

あんなボールは見たことがない。

「マスターボール!?!」

ナザレが目を見開いた。

「マスターボールって……?」

モンスターボールには様々なバリエーションがあるけれど、マスターボールなんていう名前は聞いた事が無かった。

「あらゆるポケモンをゲットする事が出来る、カントーのシルフカンパニーが開発した究極のモンスターボールだよ」

答えたのはゆっくりとハクリユウに乗って降りて来た初老の男だった。

おそらく、彼がヴェルトーゼだ。

「たとえば、どんなポケモンでもゲットする事が出来るんだ。それこそ、伝説や、幻と呼ばれるようなポケモンでもね」

直後、俺達はその言葉の真意を識る事になった。

「いでよ、破滅を齎すモノ!」

マスターボールが開かれる。その瞬間、悪寒が走った。

「なんだ、これ……」

「これ……、ポケモンなの?」

現れたのは、巨大な魔神。六つの腕は胴体に繋がっておらず、空中に浮かんでいる。

ポケモンどころか、生き物とさえ思えない。

「これぞ、空白の時代を終わらせたモノ。名は、フーパ。世に言う『最終兵器』だ」

「さ、最終兵器ですって!?! まさか、アルトギア手記の!?!」

血相を変えるエリザ。だけど、おかしい。最終兵器とは、王の力の事の筈だ。

「その通りだ」

だけど、シグナスはエリザの言葉を肯定する。

「さて、ミリガンよ。挑むのなら、覚悟しろ。フーパの力には誰も勝てんぞ」

シグナスの言葉に、ミリガンは笑った。

「……なにがおかしい?」

訝しむシグナスに対して、ミリガンは言った。

「四天王の力を見せてあげる」

そう言うと、ミリガンはギルガルドに手を伸ばした。

「いくよ、ギルガルド」

「ギガッ!」

肌がチリチリとする。ミリガンとギルガルドを中心に漆黒の風が渦巻いていく。

ギルガルドの刀身が肥大化しながら闇色に染まっていき、柄は血のように紅く輝き始める。

その姿はまさしく魔剣。まがまがしく、おぞましく、そして、美しい。

「きずなへんげか! だが、そんなものでフーパに敵うものか!」

「今のギルガルドに斬れないものはない! せいなるつるぎ!」

「迎え撃て、フーパ!」

魔剣と化したギルガルドがフーパに向かって飛んでいく。

そして、フーパはとっぜんギルガルドに背中を向けた。

「え?」

その行動に虚を突かれ、ギルガルドが止まる。

その直後、悲鳴が響き渡った。

《オマエ、モウイラナイ》

そんな言葉と共に、フーパはシグナスの体を握りつぶした。血しぶきが舞っている。

「え?」

何が起きたのか、理解が追いつかない。俺だけじゃなくて、みんなも呆気にとられている。ミリガンやヴェルトーゼも。

《ツギハ、オマエニスル》

そう、フーパは明らかな人語を喋りながら、ミリガンを指さした。

「ギガツ!!」

その瞬間、ギルガルドが行動を再開した。漆黒の光が宿る刃でフーパを斬り裂く。

《イタイ。オマエ、ジャマ》

その言葉と共にリングがギルガルドに向かって飛んでいく。

《イナクナレ》

リングとギルガルドが交差した瞬間、ギルガルドの姿が消えてしまった。

「ギ、ギルガルド?!」

ヤバイ。そう思って、俺は駆け出した。

「ゲッコウガ!」

ミリガンの前に躍り出て、ゲッコウガを繰り出す。

フーパはミリガンを見つめていた。

「フルパワーでハイドロカノン!」

躊躇っている余裕はなかった。ゲッコウガも同じ気持ちなのか、即座に命令を実行してくれた。放たれたハイドロカノンはフーパに直撃する。

《ジャマ》

リングがゲッコウガの真横に現れる。そして、そのリングの穴から、フーパに直撃した筈のハイドロカノンが現れた。

「ゲッコウガ!?!」

極大のみずエネルギーが直撃して、ゲッコウガは満身創痕になってしまった。

「危ない!」

跳ね飛ばされたゲッコウガに気を取られた俺をミリガンが突き飛ばした。そして、ミリガンは飛んできたフーパの腕に掴まれてしまった。

「ミリガン!？」

「くっ……、あう」

苦痛に顔を歪めるミリガン。手元からギルガルドのモンスターボールが落ちた。

「ミリガンを離せ!」

《ヤダ。モツテカエル》

その言葉と共にフーパはミリガンを掴んだ腕を手元に戻し、巨大なリングへ体を沈ませてく。

「ゲッコウガ!」

「コ、コウガアツ!!」

ゲッコウガがミリガンを掴んでいる腕に向かってみずしゆりけんを放った。

けれど、別の腕に阻まれてしまった。

「させるか! レントラー!」

「ガウツ!」

レントラーが肉薄していく。

「フリーザー!」

「キユイ!」

エリザのフリーザーがれいとうビームを放った。リングとフーパの胴体を氷結させる。

「今です!」

「おう! ほのおのきばだ!」

「ガウツ!」

レントラーのほのおのきばがフーパの腕に命中した。

《ジャマ》

けれど、フーパは欠片もダメージを受けた様子を見せず、別のリングをレントラーに向かって投げはなした。

「まづいっ!?! 逃げろ、レントラー!」

「ガウ！」

フーパの腕から飛び去るレントラー。その前にリングが滞空する。

《オーデーマーシー》

リングの穴に暗闇が広がる。その先から、一匹のポケモンが飛び出してきた。

「ルギア!？」

バレットが驚愕の声を上げる。そのポケモンは、たしかにルギアだった。

ずっと前に、別の地方にあるフウラシティという場所の『風祭り』というイベントの映像で、その姿を見た事がある。

《アソンデイロ》

フーパは力づくで氷を壊すと、再びリングの先へ体を沈め始めた。「待て！」

ゲッコウガがみずしゆりけんを放つ。けれど、ルギアに阻まれた。

「邪魔をするな、ルギア！」

バレットはライチュウを出した。

「ライチュウ！ しんそくだ！」

「ライツ！ ライライライライライライ！」

ルギアが繰り返し出す攻撃をすり抜け、フーパに向かっていく。俺もスピアーを出そうとしてモンスターボールに手をかけた。

けれど、次の瞬間、ライチュウの前に別のリングが現れ、そこから更なるポケモンが現れ、ライチュウを吹き飛ばした。

《オーデーマーシー》

七色の翼がはためく。

「ホウオウだど!？」

ルギアとホウオウが同時に口の中へエネルギーを収束させていく。

「コウガアツ！」

「ガウツ！」

「キユイ！」

ゲッコウガ達が俺達を掴んで走った。そして、二体の伝説のポケモンによる最大出力の攻撃が放たれ、世界は白一色に染め上げられた。

第六話 『光輪の超魔神』

「コウガツ！」

ゲツコウガの声で目が覚めた。

なんだか、すごく騒々しい。

「アルト！」

起き上がると、聞き覚えのある声が聞こえた。

第六話 『光輪の超魔神』

「ヴォルフ！」

声を掛けてきたのはリールジムのジムトレーナーであり、アガリア警察リール署の副所長、ヴォルフだった。その周りには忙しなく動き続けている大人たちがいる。

「久しぶり！ この人達は？」

「全員、アガリア警察の捜査員や。事が事やから、万全を期す為に人数を集めとつたんやが……」

ヴォルフは悔しそうに顔を歪めた。

「どうしたの？」

「覚えとらんのか？」

「えつと……」

寝ぼけた頭を必死に働かせて、眠る前の記憶を探り当てる。

「あつ！」

思い出した。ヴリル教団が現れた事。シグナスという大幹部がフーパというポケモンを出した事。フーパがシグナスを握りつぶした事。フーパがミリガンを連れ去った事。

「そうだ、ミリガン！ ミリガンが変なポケモンに連れ去られたんだ！」

「せや」

ヴォルフはポケモン図鑑を取り出した。

「コイツで間違いないな？」

図鑑にはフーパの姿が表示されていた。

「フーパ。まじんポケモン。気に入ったモノをリングを使って秘密の

住処へ集めている。リングを潜って、テレポートする事が出来る」

驚いた。未知の怪物のように感じたポケモンがすでに凶鑑に登録されていた事に。

「うん！ このポケモンだよ！」

「……少し前、カロスで伝説のポケモンが暴れまわるつちゆう事件があったんやけど、知つとるか？」

「え？ う、うん！ ルギアやグラードンが街の中で暴れまわったんだよね？」

そう言えば、意識を失う直前に現れたルギアやハウオウはどうしたんだらう？ どこにも姿が見えない。

「せや。あの事件を起こしたんがフーパなんや。もつとも、解決したんもフーパやけどな」

「ど、どういう事？」

「フーパつちゆうポケモンには二種類のフォルムがあつてな。それぞれ、『戒められし姿』と『解き放たれし姿』ちゆう風と呼ばれとる。そんで、戒められし姿の時は単なるイタズラ好きのポケモンらしく、人を困らせる事はあつても、傷つける事は無いらしい。せやけど、解き放たれし姿の時は魔神の名に相応しい性格に変わって、暴れまわり、あらゆるものを奪っていくそうや。あんまり詳しい事は分からのやけど、カロスのデセルシティに現れたフーパはその二つのフォルムで分裂してもうたそうや」

「分裂つて？」

「要するに、一体のポケモンが二体のポケモンになったちゆうこつちや」

「そんな事がありえるの!？」

「わしも専門家やないさかい、詳しい事は分からん。せやけど、カロスのプラターヌ博士から提供してもらった情報にはそう書かれとつた」
「じゃあ、そのフーパがミリガンを!？」

ヴォルフは首を横に振った。

「デセルシティのフーパは100年前に現れた個体なんや。そんな時にフーパの力を封じ込めたグリスつちゆう男の曾孫がすっかり世話焼

いとるつちゆう話や」

「じゃあ、別個体って事？」

ヴォルフは頷いた。

「とにかく、フーパは規格外や。戦闘能力だけやない。人間の言葉を操れるほどの知性と、伝説のポケモンを呼び出す能力。それに加えて、リングのテレポート。筆頭を救い出すんは骨が折れるで、ほんまに」

「……ミリガンの居場所は分かっているの？」

ヴォルフは後ろを指差した。

「知つとるもんは居る」

そこには地面に突き刺さった魔剣があった。

「ギルガルド!? リングの向こうに消えた筈じゃ!?!」

「消えた先から戻ってきたんや。たぶん、飛ばされた先がそんなに離れとらんかったんやろ」

「そっか……」

ギルガルドの刀身は闇色に染まっている。

「ギルガルドなら、ミリガンの居場所が分かるの？」

「分かる筈や。きずなへんげはトレーナーとポケモンの様々な感覚をシンクロさせる。ミリガンが見とる景色や聞いとる音を、ギルガルドも見て、聞いとる筈や」

「なら、はやく助けに行かなきゃ!」

場所が分かっているならグズグズしている暇なんてない。

「そうしたいんは山々なんやが、ギルガルドが動かんのや」

「動かない……?」

たしかに、ギルガルドは地面に突き刺さったまま微動だにしていな
い。まるで、本物の剣のように、無機質に感じる。

「きずなへんげを維持する為かもしれんさかい、迂闊に動かせんし、今は戦力を整えとる所や」

「ルーラーもいるの?」

「いや、署長はリールシテイに残つとる。ジムリーダーは街の平和の要やからな。早々動けん。せやから、動けるもんを総動員しとる」

「そっか……。セラやバレット達は？」

「バレットならナザレと一緒に向こうにおるで。セラっちゅうのはピ
ンクの髪の女の子の事か？　せやったら、別の場所で寝取るで」

「そっか」

「ほな、わしもそろそろ動かんといかん。ギルガルドが動き出すまで
は体を休ませるなり、友達と話すなりしとき」

「分かった」

ヴォルフが去っていく。

とりあえず、俺はバレットの下へ向かった。

大きなテントの中で、バレットはナザレとエリザと話し込んでい
た。

「アルト！　起きたのですね！」

「エリザもここにいたんだ！」

「とりあえず、セラ以外は揃ったな」

三人に怪我をした様子はない。ルギアとハウオウの同時攻撃を受
けた筈なのに、不思議な事だ。

「ねえ、あの後、どうなったの？　ルギアとハウオウに攻撃された事は
覚えているんだけど」

「わたしがルギアとハウオウを捕獲した」

ナザレが言った。一瞬、聞き間違いかと思った。

「ル、ルギアとハウオウを!？」

「驚く事じゃない。ナザレ様なら当然だ！」

バレットが自慢気に言った。

「ゲッコウガとフリーザー、レントラー、ライチュウが咄嗟に攻撃を防
いでくれたおかげだよ」

ナザレはすまなそうに言った。

「あの時、何も出来なくてごめんなさい。ドラゴンポケモンを呼ぼう
としたんだけど、声が届かなかったの。いつもなら、どんなに離れて
いても届くの……」

「声？」

「あなたもアルトギア手記に選ばれた人間なら分かる筈だよ。『王の

力』。わかりやすく言えば、『きずな現象』。その応用だね。完全に発動しなくても、声だけや、感覚だけを共有する事も出来るの」

そんな事が出来るとは知らなかった。きずな現象は『進化の力』を暴走させるだけのものでは無かったらしい。

「それで、その後は？　あのヴェルトーゼって人は？」

「ヴェルトーゼは気づいた時には姿を消していましたよ」

忌々しげにエリザが言った。

「……もしかして、気を失ったのって、俺とセラだけ？」

「状況が状況だ。気にするな」

バレットが言った。どうやら、三人はすっかり意識を保っていたらしい。

「それよりも今後の……って、おい!!」

「え？」

いきなり、バレットが素っ頓狂な声を上げた。

「うしろ！」

エリザが叫んだ。

「うしろ？」

言われて振り返ると、そこには魔剣が浮かんでいた。

「ギルガルド!?!」

「ギルツ！」

その異様な光景に他の人達も集まってきている。

「え？　動いて大丈夫なの!?!」

「ギガツ！」

ギルガルドは何かを放り投げてきた。

「えっ!?!　うわっつと！」

慌ててキャッチすると、それはモンスターボールだった。

「えっつと？」

困惑していると、ギルガルドは刃をメルカトの方角へ向けた。

「ギガツ！」

「……ミリガンがいるの?」

「ギガツ！」

肯定するように鳴いた後、ギルガルドは俺の傍へ寄り、俺に持たせたモンスターボールの開閉スイッチを押しして中に入ってしまった。

「えつと……う？」

「なるほど。ミリガンが居ない今、ギルガルドはアナタを仮初めのトレーナーとして認めたようね」

戸惑っている、ナザレが言った。

「俺を？」

「だからこそ、モンスターボールをアナタに渡したんだと思う」

ギルガルドのモンスターボールを見下ろす。ミリガンのエースポケモン。

「……分かった。一緒にミリガンを助けよう」

顔を上げると、そこにはヴォルフがいた。

「どうやら、やる事は変わらんようやな」

「うん！」

ギルガルドが指し示した先はメルカト・シティ。つまり、ミリガンを奪還する為には、その前にメルカトを奪還しなければならないという事だ。

「行こう！　メルカトを……、ミリガンを取り戻すんだ！」

第七話 『奪還、メルカトシティ・I』

ドロシーのフーデインが念写した映像を、オレはハラハラしながら観ていた。

そこに映されているのはクセルセス高原的一幕。

「オイ！ ヤベーじゃねーか！」

オレは呑気に爪を磨いている魔女に掴みかかった。

「やーん、エッチー」

「エッチーじゃねーよ、ババア！」

ぶん殴られた。相変わらず、ババア呼びだけはNGらしい。そういう所がババアなんだよ。

「つてか、なんでフーパが現れるんだ!? コイツはココにいるのに！」

オレはフーパが入っているモンスターボールを取り出して言った。

ドロシーに渡されたものだ。開閉スイッチを押して投げると、中から戒められし姿のフーパが現れる。

「おでましー！」

可愛い声が響き渡る。最初に見た、解き放たれし姿からは想像もつかないほど可愛い。

「フーパって、何体もいんのか!?!」

「四体よ。それ以上はいない」

ドロシーは言った。

「そもそも、四大魔境はそれぞれフーパが眠りについた場所なのよ。この子はココで、100年前にデセルシティに現れたのはバステイロで眠っていた子。そして、ミリガンを連れ去ったのがジユラのフーパ」

「つて事は、メルカトにも別のがいんのか？」

「ええ、もちろん。四体のフーパの中でもとびつきり危険な個体が居たわ」

「居た？ それって……」

ドロシーはクスリと微笑んだ。

「いよいよ始まるわよ、『来るべき災厄』が。あんまりモタモタしてる

と、出遅れちやう、ぞー！」

「うるせー！　いくぞ、フーパ！」

「おー！　いくぞーいくぞー、アーくん！」

「アクセルだつてのー！」

ココはファイオレの大迷宮^{パレス}。ドロシーはその入口を閉ざしやがった。脱出する為にはフーパのリングの力を使うしか無い。そして、その為には解き放たれし姿を制御出来るようにならなければならない。

大迷宮の完全攻略。それがフーパの解き放たれし姿を制御する唯一の方法だと、ドロシーは言った。

「やってやるぜー！」

「やってやるぜー！」

第七話『奪還、メルカトシティ・I』

「メルカト・シティは高原を超えた先にあるヴィーヴル山脈の山頂や。途中には強力なドラゴンポケモンが睨みを利かせとる。ナザレが一緒でも油断は出来ん！　覚悟はええな！」

怒号が響き渡る。アガリア警察の捜査員達は一人残らず殺気立っている。

筆頭であるミリガンの窮地。それは彼らにとってあつてはならない事だった。

「筆頭を取り戻すぞー！」

強面の捜査員の号令に、再びの怒号。

俺はエリザとバレットに視線を送った後、セラに向かって言った。

「セラはここで待っていてくれ」

「……邪魔つてこと？」

「え？」

別にそういう意図はなかった。ただ、再びフーパと戦う事になるからセラには安全な場所においてほしかっただけだ。

そう説明しても、セラは涙を浮かべながら俺を睨んでくる。

「セ、セラ？」

「アルトのバカ！」

「えええ!？」

セラは俺に背を向けると、さっさと走り去ってしまった。

一応、ここには中継地点とする為の仮設住宅が設営されていて、捜査員の一部も残る事になっている。ついて来るよりは絶対に安全な筈だ。

理由は分からないけれど、怒らせてしまったのなら謝りたい。けど、悠長に事を構えている余裕もない。ミリガンの身の安全を考えると、時間は一刻を争う。仲直りは後回しにするしかない。

「……行こう」

「いいのか？」

「終わってから話すよ。今はミリガンだ」

気を使うバレットにそう言いながら、俺はヴォルフの下へ向かった。

「ヴォルフ！」

「おう！　ギルガルドを出してくれ！」

「うん！」

ギルガルドのモンスターボールを投げる。

「ギガツ！」

飛び出してきたギルガルドは俺の傍で滞空した。

「ギルガルド。ミリガンはメルカト・シテイにいるんだよね？」

「ギガツ！」

それを肯定だと受け止めて、ヴォルフが歩き始めた。その傍らにはエビワラーとサウムラーもいる。他の捜査員達もそれぞれ強力なポケモンを一体ずつ外に出している。バレットとエリザもそれぞれライチュウとマニニューラを出した。

「ライチュウ。なにか起きたら、とにかく『しんそく』で事にあたれ」

「ライ！」

「マニニューラ。警戒を」

「ニューラ」

俺もスピーアを外に出した。ゲッコウガは一応かいふくのくすりで回復させたけれど、いざという時の為に少しでも休んでいてもらいたい。

「スピッツ」

「ギガツ」

スピアーはギルガルドと並んで俺の頭上にいる。周囲をキョロキョロ見回しながら警戒してくれているようだ。

傾斜が激しい。山を登り始めて三時間が経過した。幸いと言うべきか、ドラゴンポケモンとは遭遇していない。だけど、極度の緊張感の中での登山は体力を大きく削っていく。

捜査員の中には疲労の色を隠せなくなっている人もいた。

「あと、どのくらいなの？」

「まだ半分も来ていない。この人数だし、警戒しながらだから……」

バレットの言葉が聞こえたのか、誰かがうめき声を上げた。すると、その人を叱責する声上がる。

「……人数が多すぎたか。せやけど、状況が状況やからな……」

ヴォルフが苦々しい表情を浮かべて呟いた。

「大丈夫なのですか？ この状況で襲われたりしたら……」

「安心せい。アガリア警察は精鋭ぞろいや。口喧嘩しとつても、いざという時は切り替える。ただ、このままだと速度の低下は防がれへんな」

ヴォルフが後ろに向かって怒声をあげた。まるで、アクセルのお父さんのアラートさんが怒った時のような迫力だ。正直、かなり恐い。

「まったく、困ったものですね」

やれやれとエリザは肩を竦めた。

「たしかに、この速度だと陽が沈むぞ」

バレットは少し焦っている。

「どうかしたの？」

「夜はヤバイんだ。ドラゴンポケモン達の警戒度が一気に跳ね上がる。日中なら、今歩いている道から外れさえしなければ襲われないが、夜中は外れなくても襲われる危険性がある」

もうすぐ正午だ。ここで速度が落ちたら、本当に到着が夜になってしまう。

バレットの言う危険もある。それに、ここで疲れるようなら山頂に

ついた頃には体力が底をついてしまう。

「ヴォルフ！」

「……言いたい事は分かる。せやけどな……いや、しかし」

ヴォルフも分かっているんだ。だけど、迷っている。

「ヴォルフ！」

捜査員の一人が声を上げた。

「彼らの言うとおりのだ。このままだとマズい！ わたしが半分を連れて、空に上がる！」

「ちよう待たんかい、カーネル！ メルカトの空とそれ以外の空じゃ、危険度が段違いやぞ！」

「分かっている！ だが、こんな風にぞろぞろ引き連れて無駄に疲弊するより、わたし達が囷になってドラゴンポケモンの数を減らした方が効率的だ！」

「それは……、そうやけど」

言い淀むヴォルフに構わず、カーネルは他の捜査員達に言った。

「言った通りだ！ いいか、これは命の危険がある任務だ！ 一分だけ待つ！ その後に覚悟を決められた者だけ挙手してくれ！」

命の危険。それは洒落や言葉遊びではない。空中での野生のドラゴンポケモンとのバトル。

誤ってポケモンから落下すれば、間違いなく助からない。それに、ポケモンのわざを受けてしまう可能性も高い。

一分が経過する。手はちようど半分上がっていた。手を挙げているのは疲弊した様子を見せている者達ばかりだ。

「感謝する」

カーネル達はひここうポケモンを繰り出して空に上っていく。すると、どこに隠れていたのかと不思議になるほどのたくさんのドラゴンポケモンが山脈中から飛び出してきた。

バトルが始まった。

「急ぐでー！」

ヴォルフの掛け声と共に俺達も歩き出す。人数が減り、体力の少ない者もいなくなった事でかなり速度が上がっている。

それから更に三時間が経過して、一度休憩を取る事になった。山頂まで、あと少しだ。

空では未だにバトルが続いている。落ちた人はいないが、リタイアした人は多い。今でもバトルを続けているのはカーネルを含めて十人だけだ。

「ナザレ様、大丈夫ですか？」

バレットはナザレに声をかけている。彼女は汗一つかいていないが、眉間にシワを寄せている。

「うん、ありがとう」

シワを解き、お茶を運んだバレットに笑顔でお礼を言った後、彼女は二つのモンスターボールをホルダーから外した。

おそらく、あの中に入っているのがルギアとハウオウだ。

「どうしたんですか？」

バレットが聞いた。

「空に上った子達も、他の子も、いくら呼びかけても応えてくれないの」

暗い表情で彼女は言った。

「フーパのせいじゃない。ルギアとハウオウは応えてくれた。……–でも、イヤな予感がする」

その言葉が聞こえていたのだろう。ヴォルフは難しい表情を浮かべながらナザレに言った。

「それ、もうちよい具体的に話せるか？」

「憶測に過ぎない。それでもいい？」

「構わん」

ナザレは少しの間の後に言った。

「わたしはシグナスがすべての元凶だと思っていたんだけど、もしかしたら、彼もわたしと同じだったのかもしれない」

「どういうこっちゃ？」

「ヴェルトーゼ。彼のダークライによって、わたしは操られていた。シグナスも、ヴェルトーゼの隠れ蓑として使われていた可能性が高い。そして、メルカトのドラゴンポケモン達もダークライの支配下に

あるとしたら……」

「……おいおい、それは」

ヴォルフは青褪めた表情を浮かべた。

「ダークライの支配下にあるなら、わたしの声が届かない理由にも説明がつく。それに、囷になった彼らを襲いながら、地上を歩いているわたし達を襲わない理由も……」

「誘い込んだるっちゆう事か!？」

ナザレは頷いた。

「一人のトレーナーの意志の下で行動しているのなら、おそらくは」
「せやけど、狙いは何や!？」 わざわざ隠れ蓑シグナスを始末してまで、なんで……」

「わからない。推測出来る事はここまで」

ヴォルフは押し黙った。

「……ナザレ。アルトとエリザ、バレットを連れて下山しろ」

次に口を開いた時、彼はそういった。

「えっ、ヴォルフ!？」

「ミリガンはわしらが救ける。せやから、お前達はここを離れるんや!？」

そう、彼が叫んだ直後だった。

《オーデーマーシー》

俺達の目の前にフーパが現れた。

第八話 『奪還、メルカトシティ・Ⅱ』

《オーデーマーシー》

まるで地獄の底から響いてくるような声。

「逃さないって事らしいね」

「ギガッ！」

ギルガルドが俺の前に躍り出る。

「ミリガンは返してもらおう！ ギルガルド、せいなるつるぎー！」

「ギーガアッ！」

刀身に光を宿し、ギルガルドがまっすぐにフープパへ斬りかかる。

《オマエ、イラナイ》

フープパはリングをギルガルドに向かって飛ばしてきた。

「避ける！」

「ギルッ！」

あのリングに呑み込まれたら何処へ飛ばされるか分からない。ギルガルドは紙一重で回避した。

《オマエ、ジャマ》

今度はリングと共に六つの腕が飛んでくる。

「オンバーン！ ばくおんぱ！」

「ボスコドラ、ストーンエッジ！」

「メタグロス！ コメットパンチ！」

「ローブシン、きあいパンチ！」

その腕に次々と攻撃が加えられる。アガリア警察の捜査員達だ。他の捜査員達も次々に攻撃を仕掛けていく。

《オマエラ、ジャマ！》

フープパは空中にリングを飛ばした。その先からフープパすら超える超巨大なポケモンが飛び出してくる。

「なっ、なに!?!」

「レジギガス!?!」

大地に降り立った超巨大ポケモン、レジギガスはフープパを取り囲んでいるポケモン達にはかいこうせんを放った。

「レジレジレジ！ ギガガガガガ！」

あまりの威力に大地が赤く輝き、蒸気を発している。直撃こそ全員が回避したようだけど、それでも戦闘続行が不可能なレベルのダメージを受けてしまったようだ。

「ギルガルド！」

「ギルツ！」

フーパだけでも厄介なのに、このままでは全滅してしまう。

「ゲッコウガ！ 頼む！」

「コウガツ！」

ギルガルドとゲッコウガがレジギガスの体を駆け上がっていく。

巨体故か、動きがかなり鈍い。

「せいなるつるぎ！ ハイドロカノン！」

至近距離からの二体同時攻撃。レジギガスの体がふらついた。

「今です！ フリーザー！」

そこへエリザのフリーザーが必殺技を解き放った。

「ぜったいれいど！」

一撃必殺！

超巨大なレジギガスの体が丸ごと凍りつき、レジギガスは戦闘不能になった。

「アルト！ エリザ！」

「えっ!？」

「あっ！」

喜んだのもつかの間、いきなり俺達の足元から地面が消失した。

リングだ。慌ててリングのへりに手をのばすけれど、リングが大きすぎて届かない。

「ルギア！ ホウオウ！」

穴の底へ落ちる寸前、俺の体を何かが掴んだ。

「ル、ルギア!？」

「ホウオウ!？」

それはナザレが捕獲した伝説のポケモン達だった。俺達を救出した二体はそのままエアロブラストとせいなるほのおをフーパに向け

る。

激しい衝撃と閃光が走り、俺は咄嗟に目を閉じた。

《ジャマスルナ！》

再びリングが開かれる。向こう側からラティオスとラティアスが飛び出してきた。

「次から次へと！」

「ツハ！ まるで伝説のポケモンのバーゲンセールだな！」

吐き捨てるように叫ぶエリザとバレット。

本来、一生に一度でも見れば奇跡という存在である伝説のポケモンが次から次へと飛び出してきて、ありがたみが一切ない。

ラティオスとラティアスはルギアとホウオウを攻撃し始めた。

《オマエラ、コイ》

腕が飛んでくる。

「ギルツ！」

「コウガアツ！」

「キュイ！」

ギルガルドのせいなるつるぎ、ゲツコウガのつばめがえし、フリーザーのれいとうビームがそれぞれ飛んできた腕を阻む。

《ジャマ、スルナアアア！》

フーパの怒りに満ちた声が響き渡る。

「うっさいわ、ボケエ！ わしらの筆頭を返さんかい！」

ヴォルフが怒声をあげる。

彼のエビワラーとサワムラーがフーパに向かって駆けていく。

フーパは腕を飛ばして攻撃するけれど、二体のかくとうポケモンは腕の軌道を完全に見切っている。

「バレットパンチ！ ブレイズキック！」

「ラアツ！」

「サアツ！」

急所に直撃だ。フーパは顔を歪めている。

「畳み掛ける！ ギャラドス！ はかいこうせん！」

「ギガイアス、ロックブラストよ！」

「ジバコイル、かみなり！」

「ブルーバーン、オーバーヒート！」

捜査員達の総攻撃。

「ギルガルド、ゲッコウガ！ 俺達も続くぞ！」

「フリーザー！ ぜったいれいどの準備を！」

「レントラー、ライチュウ！ お前達も行け！」

フーパは強過ぎる。そして、それ以上に伝説のポケモンを呼び出す力が厄介過ぎる。

ここで押し切るしか無い！

「せいなるつるぎ！ ハイドロカノン！」

「ワイルドボルト！ ボルテツカー！」

「バレットパンチ！ ブレイズキック！」

「はかいこうせん！ オーバーヒート！」

「りゅうのはどう！ ラスターカノン！」

「オーロラビーム！ 10まんボルト！」

「シザークロス！ ストーンエッジ！」

効いている。フーパは苦しげに後退していつている。

「いくぞ、キテルグマ！」

キテルグマを出す。

「フルパワーだ！」

「キイイイッ！」

意識を重ね合わせる。

強く、強く、強く！ 相手が強ければ強いほど、俺達はもっと強くなれる！

「もつと、もつと、もつと！ 遥かな高みへ！ 『ぜんりよくむそうげきれつけん』！」

「キイイイイイイッ！！！」

フーパに近接攻撃を加えていたポケモン達が離れる。そこへキテルグマが極大威力の拳を無数に叩き込んでいく。

「キイイイイイイッ！」

《グアアアアアッ！》

フーパが倒れ込む。

「そこで、ぜったいれいど！」

すかさずエリザのフリーザーがぜったいれいどを放つ。フーパの体が凍てついていく。

《ユルサナイ！ ユルサナイ！》

けれど、フーパはぜったいれいどのこおりエネルギーを弾き返してしまった。

「一撃必殺のぜったいれいどが!？」

「おいおい、いくらなんでもタフネス過ぎんだろ！」

これだけ攻撃を繰り返しても立ち上がってくるなんて信じられない。

これが空白の時代を終わらせた魔神の力。

「だったら、倒れるまでやってやる！ ギルガルド！ ゲッコウガ！

キテルグマ！」

「ギルツ！」

「コウガアツ！」

「キイイイイツ！」

その時だった。

「エアロブラスト！ せいなるほのお！ サイコキネシス！ サイコシヨック！」

ルギア、ホウオウ、ラティオス、ラティアスが同時にフーパへ攻撃を仕掛けた。

《ナンデ!? ナンデ!?!》

ラティオスとラティアスまで攻撃に加わっている事にフーパも混乱しているようだ。

《イタイ。ヤメテ。ナンデ……?》

その声に、胸が締め付けられた。

おそろしい怪物なのに、トレーナーであるシグナスを握りつぶして、ミリガンを連れ去った悪いポケモンなのに……。

—— わたしはシグナスがすべての元凶だと思っていたんだけど、もしかしたら、彼もわたしと同じだったのかもしれない。

脳裏にナザレの言葉が甦った。

「待って、ナザレ！　もしかしたら、フーパも操られているのかもしれない！」

「えっ!?」

俺はフーパを見た。その瞳には涙が浮かんでいた。

「フーパ！」

《イタイ。クルシイ。ナンデ？　ナンデ？》

フーパは泣きじやくっている。ナザレも、他のみんなも呆気に取られている。

そして、しばらく立つとフーパの体が光に包まれた。

「フーパ!？」

俺は思わず駆け出していった。光と化したフーパはどんどん小さくなっていく。俺はその光を抱きしめた。

「イタイヨー！　ウエーン！」

腕の中には小さなポケモンがいた。

「フーパなの？」

「イタイヨー！」

フーパは泣きじやくっている。

「お、おい、アルト！　いくらなんでも無茶やで！　そのポケモンを離して、こつちに来るんや！」

ヴォルフが叫ぶ。だけど、そんな事は出来ない。

「だって、泣いてるんだ！」

悪いポケモンなんだって、たくさん攻撃してしまった。そのせいで、泣いている。

「せ、せやけどな……」

ヴォルフも困っている。ポケモンの涙を見て、平気でいられるトレーナーなんていない。

しばらくして、大きな溜息を零すと、ヴォルフはかいふくのくすりを取り出した。

「……つたく、せつかく無力化出来たってのに」

澁々と愚痴を零しながらも、ヴォルフは優しい手付きでフーパを治

療し始めた。

みんな、ひどい顔だ。ポケモンを泣かせてしまった。その事が重くのしかかってくる。

治療が終わると、フーパは不思議そうに俺達を見回した。

「アレレ？ ココドコ？ ミンナ、ダーレ？」

「え？」

フーパは首を傾げている。

「覚えてないの？」

「シー？ フーパ、ネムツテタ！ イマ、オキタ！」

その言葉はフーパが操られていた事の証明だった。

「ダークホールか！」

ヴォルフは険しい表情で呟いた。

「だとすると、やっぱり……」

ナザレは山頂を睨みつける。

「ヴェルトーゼ！」

怒りに燃えた彼女の声にフーパはビクツとした。

「だ、大丈夫？」

「アレ、コワイ」

その言葉にピシッとナザレが凍りついた。

「い、いやいや、ナザレ様は怖くなんて無いですよ！」

バレットが慌ててフォローしている。

「コワイモン！」

「怖くねーよ！」

バレットとフーパが睨み合う。そんな中、エリザがパンパンと手を叩いた。

「そこまで！ それよりも、ポケモン達の回復を！ ミリガンを攫ったのがフーパの本意でないのなら、本番はむしろここからですよ！」

その通りだ。俺達は表情を引き締めた。それぞれ、ポケモン達の回復に専念し始める。

俺もゲッコウガとギルガルドにヴォルフから貰ったかいふくのくすりを使った。

「ネエネエ」

「どうしたの？」

治療を終えると、ずっとその光景を見ていたフーパが声を掛けてきた。

「フーパハフーパナノ！」

「俺はアルトだよ」

「アート！」

「ア・ル・ト」

「アート！」

ルが抜けてる。まあ、いいか。

「アート！ アート！」

フーパは嬉しそうに俺の名前を呼んでいる。

「ごめんね、フーパ」

「ホエ？ ドウシタノ？」

フーパは覚えていない。だけど、どうしても謝りたかった。

「……ううん、なんでもない」

「アート、ヘンナノー！」

フーパと話している内にみんなの方も終わったようだ。

これから、再び山頂に向かう事になる。

「フーパはどうするの？」

ヴォルフに問いかけた。

「置いていくわけにもいかんしな……」

また、ダークライに操られたら大変だ。

「アート！」

「なに？」

フーパはリングを取り出した。ヴォルフ達が一斉に警戒する中、リングから出てきたのはマスターボールだった。

「アート！」

フーパはマスターボールを俺に渡した。

「フーパ。一緒に来てくれるの？」

「ウン！ フーパ、ママ、アートトイッショ！」

「また？」

フーパは開閉スイッチを叩いて、中に入ってしまった。

「まっ、いっか！ よし、行こう！」

俺達は再び山頂に向かって歩き出した。

第八話『奪還、メルカトシティ・II』

そして、いよいよ旧メルカト・シティに足を踏み入れた。

第九話 『VSミリガン』

白い気泡がゆらゆらと漂っている。その気泡が溶け消えるまで、わたしは延々と目で追いつける。意味があるわけでも、愉しいわけでもない。他にやる事がないからだ。

固くて冷たいガラスの向こうには未知の世界が広がっている。けれど、わたしの力ではガラスを割る事なんて出来ないし、出来たとしても、外に出たら死んでしまう。

おかしな話だ。名前もなく、生きる理由もなく、この薄緑色の液体の中で漂い続けているわたしは、そもそも生きてすらいない。それなのに、死を恐れている。

生きたい。産まれない。外に出たい。

わたしの心の中には、その思いだけが渦を巻いている。

第九話 『VSミリガン』

瓦礫だらけのメルカトシティに足を踏み入れる。そこでは、既にバトルが始まっていた。

「ウォーグル、ブレイブバード！ ピジョットはゴッドバード！」

「ウォー！」

「ジョットー！」

一人の男が無数のドラゴンポケモンと戦っている。彼の傍ではオオチが指をふりふりさせている。『このゆびとまれ』だ。

「ポリゴンZ、トライアタック！ ハピナスはいやしのはどう！ ミミロップ、とびひざげり！」

ウォーグルとピジョットが縦横無尽に駆け巡って包囲網を築き、ポリゴンZが包囲網を抜け出そうとしているポケモンを抑え込み、ミミロップが男の方にやって来たポケモンを仕留めていく。

「クラウス！」

ナザレが飛び出した。モンスターボールを投げると、いつの間にかゲットしていたレジギガスが飛び出てきた。

「レジレジレジ！ ギガガガガ！」

「レジギガス！ おおっ！ ナザレ殿！ 無事だったのか！」

近くで見ると、すごく大きな人だった。逆立てた髪と相まって、まるで鬼のような強面だ。

「クラウスも無事で良かった。てっきり、ヴェルトーゼにあなたも操られてしまったかと……」

「ヴェルトーゼ？ それに、操られた？」

目を白黒させているクラウスにナザレは頭をさげた。

「ごめんなさい。説明している時間がないの。レジギガスを預けるから、あと少しの間だけ、ここをお願い！」

「よ、よく分らんが、了解した！ あと少しだそうだ！ いくぞ、みんな！」

「ウォー！」

「ジョットー！」

「タッチー！」

「ピピピピ！」

「ハッピナー！」

「ミミッ！」

「ジジジジ！」

クラウスは再びバトルに集中し始めた。

ヴォルフのエビワラーとサウムラーに先行してもらいながら俺達も再び走り出す。

「あの人は？」

「クラウス。ロヴェリアジムの元ジムリーダーや。ナザレがいなくなった後、ここの管理を任せられた」

「一人で？」

驚いた。ここは凶暴なドラゴンポケモンの棲家となってしまうた事で封鎖された筈だ。

そこにたった一人で居座り、管理を行うなんて並のトレーナーに出来る事じゃない。

「クラウスは現旧併せてジムリーダー中最強や。クラウスが居おったからこそ、アガリアは存続出来た。まあ、ミリガンが代わりをこなしたったかもしれんが、そうになると他の治安がとんでもない事になっ

とったやろうな」

「ジムリーダー中最強……」

後ろを振り向くと、レジギガスが大暴れしている。

「レジレジレジレジギガガガガガガガガガガ!!」

動きは相変わらず鈍いけれど、ウォーグルとピジヨット、ポリゴンZがカバーに回る事でフォローをしているらしい。いきなり渡された伝説のポケモンを完璧な形で運用出来ている。

これが最強のジムリーダーの力。

「見惚れてる場合ではありませんよ!」

エリザに背中を叩かれた。

「う、うん!」

そうだ。今はミリガンだ。

「ちなみに、ザラクは堅物過ぎて苦手みたいです」

「えっ、チャンピオンが!?!」

エリザは苦笑した。

「バトルを申し込むといつでも受けてくれる代わりに長時間説教されるそうで」

「クラウスはロヴェリア大学で教鞭も振るっと思ったからな。わしも正直苦手や」

要するに不良の天敵という事らしい。

「オイ! 駄弁ってんな!」

バレットに怒られた。

「そろそろ神殿に入るぞ!」

その言葉と共に捜査員の人達が前に出た。

「ヴォルフ。連れてきたのはお前だ。しっかり守れよ」

女性の捜査員がすれ違いざまにヴォルフへ呟くのが聞こえた。

「わーっとる」

ヴォルフの顔つきも変わった。

目の前には巨大な神殿が聳えている。あそこがメルカトジムであり、竜神教の総本山だ。

砕けた石柱や石像の間を抜け、巨大な門を潜る。神殿の内部には到

るところにポケモンの像が置かれていた。壁には壁画が並んでいる。「ボーツと眺めている暇はありませんよ!」

「う、うん!」

エリザに怒られた。それでも、壁画に視線が吸い寄せられてしま

う。右端には人の絵。左端にはポケモンの絵。そして、その中間には

……、

「これって……」

「アルト!」

バレットに怒鳴られた。慌てて前を向くと、そこには見覚えのある女性の姿があった。

「ミリガン!?!」

囚われている筈のミリガンが一人で立っている。

自力で逃げ出してきた。そう安易には考えられない。

ナザレ、シグナス、フーパが操られた。

だとしたら――、

「そう来るよな! メタグロス!」

鋼と鋼がぶつかり合う。ミリガンがグソクムシヤで攻撃を仕掛けてきたのだ。それをさっきの女性捜査員のメタグロスが防いだ。

「やるぞ、お前ら!」

他の捜査員達も続々とポケモンを繰り出していく。包囲網を築いた捜査員達は一斉に腕を捲った。それぞれの腕にあるのはメガストーンだ。

「全員がメガシンカ出来んのか!?!」

バレットが驚愕の声を上げる。

「つたりまえやろ。こいつら全員、泣く子も黙るアガリア警察の精鋭やぞ」

メガメタグロス。メガヘラクロス。メガボスコドラ。メガギヤラドス。メガカメックス。メガゲンガー。メガデンリュウ。メガハガネール。メガヘルガー。メガクチート。メガライボルト。メガタブンネ。

これだけのメガシンカポケモンを一斉に見る機会なんて滅多にあるものじゃない。

「いやいやいやいや、興奮してないでわたし達も準備しますよ！」

「えっ？ でも……」

俺達に一番なんてあるのか？ そう思った瞬間、驚くべき光景が目の前に広がった。

「絶対捕食回転斬」

驚いた。それから、思い出した。

これだ。これがミリガンだ。ヴェゼール・ヴィレツジで俺をヴリル教団のポケモン達から救ってくれた天下無双の力。

立っているのはミリガンのグソクムシャだけで、メガシンカポケモン達が、ほぼ同時に戦闘不能になっていた。

「Zわざ……」

メガシンカを使うアガリア警察の精鋭のポケモン達が鎧袖一触で全て倒されてしまった。

捜査員達が慌てて別のポケモンを繰り出すけれど、グソクムシャの相手になれるポケモンは一体もいなかった。

「ダメだツ、ヴォルフ！ 急いでガキ共を連れて逃げろ！」

「これが、筆頭の方……」

「な、舐めてたわけじゃないのに、この人数でダメなのかよ!？」

彼らが弱いわけじゃない。ミリガンが強過ぎる。

『ルールの定められた戦場で、お前が本気を出す事などあり得ない！

それなのに、お前は四天王となった！ 思いやりに溢れた相手を氣遣う戦い方でさえ、お前は最強に近い力を示した！』

かつて、ザラクがミリガンに向けて言った言葉だ。

これはルールを定められた公式戦じゃない。操られている以上、思いやりなんてものもない。

今のミリガンはザラクが望んでいたミリガンだ。

最強の存在。

「それしかないか……。おい、逃げるで、お前ら！」

俺は腕を握ってくるヴォルフの手を振り払った。

「あ、アルト!?」

戦いたい。最強の存在。チャンピオンのザラクが望んだ、ミリガンの真の実力。

この機会を逃したら、二度目は無いかもしれない。

「スピアー!」

ゲツコウガでも、キテルグマでもない。お前と一緒に戦いたい。そうしたい!

「バトルだ、ミリガン!」

「受けて立つ」

真紅の眼光が俺を射抜く。ワクワクが止まらない。

もしかしたら、こうなる事が心のどこかで分かっていたのかもしれない。だから、ここにたどり着くまで、俺はスピアーを出さなかったんだ。

ヴリル教団も、ヴェルトーゼの思惑も、他のなにもかもがどうでも良くなった。

これは本気のミリガンと戦う千載一遇のチャンス。

「いくぞ!」

「スツピイイイッ!」

戦え。戦え。戦え。戦え!

「スピアー! かげぶんしん!」

「スピイイイッ!」

無数のかげぶんしんがグソクムシャを取り囲む。

「いあいぎり!」

グソクムシャの姿が掻き消えた。

「上空へ逃げろ!」

間一髪。スピアーが上昇すると同時にすべてのかげぶんしんが切り裂かれた。

けれど、安心なんてしてられない。あのスピードを生み出す脚力は空に逃げたスピアーにも攻撃を届かせる。

「ミサイルばり!」

「なっ!」

グソクムシャのミサイルばりが飛んでくる。

「こつちもミサイルばりだ！」

「スピッ！」

「いあいぎりー！」

速すぎる。ミサイルばりを放った直後、グソクムシャは既に次の攻撃の為に移動を開始していた。ミサイルばりをミサイルばりで撃ち落としたが、攻撃直後の為に回避もままならない。グソクムシャの攻撃は一度でも食らったら終わりだ。

「後ろだ！ いあいぎりに向かってダブルニードル！」

「スピッ！」

グソクムシャのいあいぎりとスピアアのニードルがぶつかり合う。合わせられたけれど威力は向こうが上だ。スピアアは吹っ飛ばされてしまった。けれど、直撃を免れたおかげでダメージは少ない。

ミリガンと目が合う。驚いている顔だ。

「眼がいいんだね、そのスピアア。それに見合うステータスも備えている」

本当に操られているのか疑いそうになるくらい、ミリガンは流暢に喋った。だけど、明らかにいつもとは違う。彼女が持つ温かみを、その声からは一切感じ取れなかった。

「うん。その子は強いよ。だけど、君はその子の強さに見合うかな？」

その言葉と共にグソクムシャの体を黒い光が包み込んでいく。ギルガルドの時と同じだ。

キズナ現象。カルネジムで一晩を明かした時にエリザから聞いた。ポケモンと人の心がシンクロした時、進化の力が解き放たれ、進化を超えた進化を引き起こす。

「俺達はいっただって一緒なんだ！俺達は一緒に強くなるんだ！いくぞ、スピアアー！」

「スピイイイッ！」

視界が一瞬だけ青く染まった。そして、声が聞こえた。

『ダメだよ、キミ！それはお母さんが大切に育てているものなんだ！』

スピアーの心が流れ込んでくる。

一緒に過ごして来た日々の記憶が、スピアーの感情が、スピアーの
声が！

——強く、強く、強く！ 誰もたどり着いた事のない高みへ！

「ああ、一緒に行こう！」

目の前に黒く染まったグソクムシヤの姿が見える。そして、その向
こうにミリガンが見える。

「ドリルライナー！」

それは、いつだかにクレルモア大平原で見たスピアーが使ったわざ
だ。

「飛ぶぞ、スピアー！」

「スピッツ！」

ドリルライナーを回避すると、グソクムシヤは機敏に反転して向
かってきた。

「いあいぎりー！」

「ダブルニードル！」

いあいぎりとニードルがぶつかり合う。そして、目の前に何かが落
ちてきた。

真つ赤な本と、真つ黒な本。赤い本には見覚えがある。アギトが見
せた、アルトギア手記の二冊目だ。

「アギ、ト!？」

ミリガンの後ろに、いつの間にか彼は立っていた。そして、その隣
には初老の男の姿がある。きつと、あの男がヴェルトーゼだ。アギト
も操られてしまったのだ。

そこまで思考して、俺は赤と黒の入り混じった光の奔流に呑み込ま
れた。

第十話 『コスラ手記』

『おーい、生きてっかー』

頬をペシペシと叩かれた。目を開けると、そこには赤い少年がいた。

『よう！ オレの名はコスラってんだ！ よろしくな！』

第十話 『コスラ手記』

コスラと名乗った少年は人懐こい笑みを浮かべて俺の隣に座った。どこか、アギトに似ている。

『オマエ、魔獣……じゃなくて、ポケモン好きか？』

もちろん、大好きだ。

『そうかそうか！ そうだよな！ 嫌いになれる筈がねーよ！』

気づけば、俺達の周りにはたくさんのポケモンがいた。ニドラン、ピツピ、ピカチュウ、メタモン、デデンネ、ヨーギラス、ほかにもたくさん。

コスラはピカチュウを抱き上げた。

『こいつらは純粋だ。いつだって、無邪気に笑いかけてくれる。だから、オレもポケモンが大好きだ』

風景が変わった。コスラが抱いていたピカチュウも、いつの間にか消えている。

代わりに、ポケモン達が働いている姿が見えた。カイリキーやローブシンが鉄骨を運んでいる。ストライクやハツサムが木を切っている。カメックスが水を巨大な穴に注いでいる。

『オレはポケモン達を解放したかった』

彼は悲しそうに言った。

『父上が憎かったわけじゃない。ポケモン達を道具みたいに扱っているのが嫌だったんだ。だって、ポケモンは友達なのに、まるで奴隷のようじゃないか』

彼が指を差した先ではミスをしたポケモンにムチを振るう人間の姿があった。

『ポケモン達は父上に逆らえない。『人間を傷つけてはいけない』って

命令のせいで、あんな理不尽な目に合わされてる』

コスラは泣いていた。まるで、ポケモンが受けた痛みを自分も味わっているかのようだ。

『ああ、そうだ。オレは味わった。ポケモン達の痛みを知りたくて、彼らとシンクロした。だからこそ、彼らの怒りが分かっていった。みんな、父上の事は愛していた！ だけど、他の人間は父上じゃない！ それなのに、どうしてこんな風に虐げられなければいけないんだ!』
彼は吠えた。怒りと憎しみを吐き出すように、何度も吠えた。

『だから、ポケモン達を率いたんだ。父上の呪縛を解いて、一緒に人間のいない場所を目指そうと思った。だけど、父上はそれを許してくれなかった……』

目の前に黒い男が現れた。どこか、ザラクと似た雰囲気を持っている。

「コスラよ。貴様は自分が何をしているのか、分かっているのか？」
まるで、言葉そのものが重みを持っているかのような重圧を感じる。

この人がヴリル王。空白の時代に理想郷を築いた霸王。

『分かっていたさ。この国はポケモンのおかげで平穏と栄華を維持していた。人の代わりにポケモンが働いてくれるから、人の代わりにポケモンが争ってくれるから、だから、人間は働きもせず、争いもしない。ああ、たしかに平和だった。たしかに富んでいた!』

コスラは叫んだ。まるで、目の前に父親がいるかのように、感情を吐き出し続けた。

『だけど、こんな事を望んだわけじゃなかった……』

また、景色が変わっていた。

見覚えのある景色だ。コスラ洞窟でも、アルトギアの前でも見た。

戦場だ。ポケモン達が戦っている。命を奪い合っている。

『怒りは怒りを呼ぶ。憎しみは憎しみを呼ぶ。一度始めてしまえば、もう止まらない。オレの心がポケモン達を戦わせ、進化の蓋を開けさせた。戦って、戦って、戦って、気づけばオレの心にポケモン達の心が逆流してきていた。ポケモン達の抑えきれなくなった闘争心は才

レの心をあつという間に呑み込んだ』

おぞましい光景だ。これは、今まで見てきた戦場の光景の続きなんだ。

無数のポケモン達が、まるで一個の生命体のように動いている。敵を喰らい、殺意や憎悪を際限なく高まらせていく。止まれなくなっている。

その中心にはコスラがいた。赤い光を帯びながら、もがき苦しみ、
【戦えー！ 戦えー！】と叫び続けている。ポケモンを好きだと言った、隣の少年と同一人物とは思えない。

そして、戦いは終結に向かっていく。戦えるポケモンがいなくなったのだ。

【ああ……ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ!!】
おぞましい光景だった。積み重なるポケモン達の死体の上で少年が慟哭している。

そして、その体が光に変わっていく。

『これが王の力の代償ってヤツだ』

コスラは言った。

紅い光と化したコスラがポケモン達の死体に広がっていく。そして、一際強く輝いたかと思うと、死体は綺麗サッパリと無くなっていた。

代わりに、一体の魔神が立っていた。

『フーパ。今では、オレ達の事をそう呼んでいるらしいな』

人がポケモンに変わってしまった。

竜神教の神殿の壁画を思い出す。あそこには人間とポケモン、そして、ポケモンと人が合体したような姿の異形が描かれていた。

フーパはゆっくりと歩を進めていく。その視線が向かう先には、もう一体のフーパがいた。

『オレが語れるのはココまでだ』

◆ その言葉と共に意識が暗転する。瞼が閉じていく……。

「イヤアアアア!?!」

悲鳴が聞こえて、意識が急速に覚醒した。

「ミリガン!?!」

ミリガンは頭を抱えたまま悲鳴を上げていた。

「な、なんや!?! どないしたんや!?!」

ヴォルフの声だ。さっきまでと周りの状況が変わっている。バレットとエリザがアギトと戦っていて、ヴォルフとナザレがヴェルトーゼのダークライと戦っている。

だけど、気にしている暇はない。

「ミリガン!」

「待て、アルト!」

バレットが叫ぶ。同時に俺の前にサワムラーが現れた。

「サワムラー!?!」

サワムラーが吹き飛ばされた。グソクムシヤだ。未だに黒く染まったまま、ミリガンと同じようにもがき苦しんでいる。

「アルト、ゲツコウガや! ゲツコウガを出せ!」

「えっ!?! でも!」

俺はスピアーと一緒に!

「はよせんかい!」

切羽詰まった表情でヴォルフが怒鳴り声をあげた。

そして、地面に倒れ伏しているスピアーの姿が見えた。

「クツ……、ゲツコウガ!」

「コウガア!」

飛び出すと同時にゲツコウガはグソクムシヤの攻撃を防いだ。

目で追う事さえ出来ない高速バトル。それを見て、俺は悔しくて堪らなかった。

「オラッ! チャンピオン! 見とるんやろ!?! ミリガンの本気とかちおうチャンスやぞ!」

ヴォルフがここにいる筈のないチャンピオンに向かって叫んだ。

そして、聞こえる筈のない声を彼は聞き届けた。

紫の光と共に、目の前にフリーデインが現れる。その傍らには、全身真っ黒な男がいた。

「チャ、チャンピオン!？」

チャンピオンのザラクが俺とミリガンの間に立ちはだかった。

「褒めてやるぞ、おっさん。よくぞ見抜いた。そして、よくぞオレを呼んでくれた!」

何の事か分からない。

「ま、待って……」

俺が戦うんだ。ミリガンの本気と、俺が!

「悪いな、アルト。こっから先はオレの時間だ!」

「イヤだ! 俺が戦うんだ! 俺とスピアードでミリガンと!」

ザラクの腕を掴むと、何故か嬉しそうな顔をして彼は俺を見つめてきた。

「そうか! そこまで来たか!」

「え?」

彼は懐に手を入れると、かいふくのくすりを俺に押し付けてきた。

「いいぜ! そこまで言うなら譲ってやる。代わりに、あとでバトルしようぜ!」

「い、いいの?」

「おう! たぶん、今一番面白いのはお前だ。それと、残念なお知らせがある」

「残念なお知らせ……?」

ザラクは唇を尖らせて言った。

「ミリガンのヤツ、手加減はしてないが、本気も出せてねーよ」

「どういう事?」

ザラクは言った。

「アイツが本当の力を発揮したら、こんなもんじゃねーよ。ゲツコウガでも、単独なら瞬殺されてる筈だ。だけど、見ろよ。普通に戦えちまってる」

彼は肩を竦めると、ナザレが戦っているヴェルトーゼを見た。

「あっちで暇をつぶしてっから、さっさと済ませな」

「う、うん!」

俺はスピアードに駆け寄った。かいふくのくすりを使うと、すぐに元

気いっぱいになった。

「ゲツコウガ！ 久しぶりに暴れんぞ！ こつち来い！」

「コウガア!？」

ゲツコウガはなんだか驚いている様子だ。

「うっせーな！ そいつはアルトのもんだ。いいから来い！」

「コ、コウガ！」

グソクムシャと斬り結びながら、ゲツコウガは抗議の声を上げている。

「大丈夫だって！ お前、ずっと傍で見てて分かんねーのか？ 今のミリガンとなら、十分戦えんだよ！」

「コツ……、コウガア……」

ゲツコウガはグソクムシャを吹っ飛ばすと、俺を見た。

「大丈夫！」

そう言うと、ゲツコウガはやれやれと肩を竦めると、ザラクの前に飛んでいった。

吹き飛ばされて、瓦礫の中に埋まっていたグソクムシャが出てくる。

「さつきは邪魔が入ったけど、今度は勝つ！ いくぞ、スピアー！」

「スピッ！」

まるで息を吸うように、指を折り曲げるように、自然とスピアーと一体化する事が出来た。

グソクムシャに向かって突き進んでいく。

これが赤の書を開いた効果なのだろうか？ もはや、言葉も要らない。

「スピイイイッ！」

「シヤアアアッ！」

グソクムシャのいあいぎりをダブルニードルで逸し、背後を取った。

けれど、グソクムシャは即座に反転すると、再びいあいぎりを放ってきた。

「スピッ！」

だけど、体勢が整っていない状態で放たれた技なんて怖くない。

今の俺達には止まって見える。左のニードルで勢いが乗る前に受け止めて、右手のニードルをグソクムシヤの急所に向ける。

「シヤッ！」

間一髪のところの後退された。ミサイルばりが飛んでくる。

俺達はその全てを見極めた。一発目を逸し、二発目を飛び越え、三発目を避けて、四発目を突き上げる。五発目を紙一重の所に通し、グソクムシヤに肉薄する。

「お返しだ！」

「スピイツ！」

ニードルを回転させる。間近で見て、スピアーは自分も出来ると確信した。

そうだ、出来ない筈がない。クレルモア大平原で戦っていたスピアーも使っていた。

「ドリルライナー！」

「スピイイイイ！」

「シヤアアアア！」

グソクムシヤも合わせてきた。螺旋と螺旋がぶつかり合う。

押し返されそう。だけど、やっぱりザラクの言うとおりで。こんなの、ミリガンの真の力なんかじゃない！ ミリガンはもつと強い。ミリガンはもつと凄い。

だから尚更、今のミリガンには負けたくない！

「いっけええええ！」

「スピイイイ！」

視界がスパークする。体が引き裂かれそう。だけど、もつと前へ！ もつと前へ！

あの日、思ったんだ。

『もう、大丈夫！ わたしは四天王のミリガン！ 助けに来たわ！』

彼女に追いつきたい。彼女のようにになりたい。彼女を超えたい。

だから、勝つ！ 押し返そうとする烈風を押し返す。

「スピアアアアア！」

「スピイイイイツ！」

勝ちたい！

負けたくない！

戦いたい！

強くなりたい！

そう考えているのが俺なのか、それともスピアーなのか、分からない。
い。

どうでもいい。この感情になら、呑み込まれたって構わない！

今、俺はスピアーと一体になっている。俺がスピアーで、スピアーが俺だ。

「つらぬけ！」

「スピイイ！」

「シャアツ!?!」

グソクムシャが後退する。

逃さない。ねじ込む！

「受け止める、ミリガン！ コレが俺とスピアーの全力だ！ ダブル
ニードル！」

一撃目がグソクムシャの防御を崩す。そして、二撃目がグソクム
シャの急所を貫いた。

「シャアアア!?!」

だけど、足りない！

「もっと、もっと！ スピアー！」

「スピイイイツ！」

感情が際限なく高まっていく。目の前が青一色に染まっていく。

きずな現象が解けて、元の姿に戻り戦闘不能となったグソクムシャ
に俺はニードルを構えた。青白い閃光がニードルから迸る。

「……ハッサム！」

「ハッサツ！」

何か俺の目の前に現れた。腹部に衝撃を感じて、痛みを感じる間
もなく意識が遠のいた。

ぼやけていく視界の向こうから、いつもの温かい声が聞こえてく

る。

「こん、どは、ちゃんと試合で……、ね」

俺が地面に倒れ込むと同時に遠くで何かが倒れ込む音がした。

そして、俺は完全に意識を手放した。

エピソード『Truth lies at the
bottom of a well.』

「いくぜ、サンダース！ フラッシュュ！」

「ダース！」

暗闇の中をサンダースのフラッシュュが明るく照らし出す。そこに立っていたのはバリアードだった。早速図鑑を開いてデータを確認する。

『バリアード。バリアーポケモン。エスパー・フェアリータイプ。マネネの進化系。すばらしいパントマイムに見惚れていると、指先から出す波動で空気を固めて本当に壁を作り出す』

図鑑の説明を読み上げてからバリアードに注目していると、説明どおりにパントマイムを始めた。

「すっげー！ マジでパントマイムうめー！」

「アーイッ！」

「バリバリー！」

気を良くしたのか、バリアードはニコニコ笑顔を浮かべながら更に巧みなパントマイムを見せてくれた。しばらく見学した後、バリアードと手を振りながら別れて、更に下層を目指す。

ここはフィオレの大迷宮パレナスの下層だ。最下層はまだまだ遠い。

「おっ！ 次はジュペッタか！」

「ジュペー！」

バリアードとは違って、問答無用で襲いかかってきた。

「いいぜ、やってやる！ クロバット、ちょうおんぱ！」

「キィー！」

モンスターボールから飛び出したクロバットは間髪入れずにちょうおんぱを放つ。

「エアスラッシュュ！」

「キィッ！」

風の刃がジュペッタに襲いかかる。混乱状態だったジュペッタは

完全に怯んでいる。

「よっしゃー！ いけっ！ モンスターボール！」

モンスターボールがぶつかると、ジュペッタの体はボールの中へ吸い込まれていった。

ゆらゆらと揺れるモンスターボール。しばらくすると、カチツという音がして停止した。

「ジュペッタ、ゲット！」

モンスターボールから出して、凶鑑を確認する。

『ジュペッタ。ぬいぐるみポケモン。ゴーストタイプ。カゲボウズの進化系。捨てられたぬいぐるみの綿に怨念が宿り生まれたという』

「ふむふむ！ よし！ ジュペッタ、よろしくな！」

抱き上げると、ジュペッタは首をコテンと傾けた。

「へへっ！ お前、可愛いな！」

「ジュペー」

照れているみたいだ。首をふるふると振っている。

新しくジュペッタを仲間に加えて、更に突き進む。階段を発見だ。

『ピンポンパンポン。時間になりました！ 今日の挑戦は終了です！』

「マジかよ!? 今日は調子が良かったのに！」

目の前にケーシイが現れる。

相変わらず、すやすやと寝たまま浮かんでいる。

「相変わらず、気持ちよさそうに寝てんなー」

ケーシイのテレポートでフィオレジムに戻ってくると、ババアはお笑い番組を見ながら寛いでいた。

「おい、ババア！ もうちよつと制限時間長くしろよ！」

目にも留まらぬ拳。俺は吹っ飛ばされた。

「アクセルくん？ なんか言い言ったら学習してくれるのかにやー？」

お・ね・え・ちゃ・ん！ でしょー？」

「歳考えろよ、マジ引くわ……」

おっと、素の反応を返してしまった。ひっくり返った視点が元に戻り、ビタンビタンとおうふくびんたが繰り出された。

まったく、大人げないにも程がある。やれやれってヤツだぜ。

「ごめんなひやい、おねえひやん」

頬が真っ赤に膨れ上がって上手く喋れない。

「うんうん！ 素直が一番！ 女も男も愛嬌が一番大事！ これ、試験に出るわよ！」

「ひやいひやい」

オレは馬鹿な事を言っているババアから視線を逸してポケモン達をモンスターボールから出した。

「アーン！」

「キーン！」

「ダース！」

「ルチャツ！」

「ジュペツ！」

「わーい！」

ファイアロー、クロバット、サンダース、ルチャブル、ジュペツタ、フーパ。

ジュペツタが加わった事で、漸く六体が揃った。

「おーっし！ みんな！ 新しく加わった仲間を紹介するぜ！ ジュペツタだ！」

ジュペツタは目を白黒させながらファイアロー達を見回した。

すぐに面倒見のいいサンダースが「ダース！」と声を掛け、ファイアローとクロバットも続く。ルチャブルは出遅れた事に焦ったのか、挙動不審になっている。フーパはと言うと、輪に加わらずにホッペを膨らませて俺を睨んでいる。

「おっと、どうした？」

「アークン！ フーパおこってるの！」

「そりやまたどうして？」

「アークン！ ぜーんぜん、フーパとあそんでくれない！」

プンプンと可愛い事を言い出すフーパ。だけど、ちよっと待ってほしい。

「遊んでんじゃん。制限時間の後のインターバルは毎回。前はお絵か

ききたし、その前はポケモンカードで、その前は……」

「分かってないにやー。フープは制限時間の時にも出してほしいって言ってるのさー」

ババアが口を挟んできた。

「だって、酷い事になったじゃん」

最初は最下層を指すタイムトライアルにフープと挑んだ。けど、フープは例の「おーでーまーしー」で狭い洞窟内にディアルガとパルキアを解き放ち、『あくうせつだん』と『ときのほうこう』の同時発動なんて恐ろしい真似をしようとした。

ババアが事ある毎に意味深な顔を作って言ってる『来るべき災厄』が来るよりも先に危うく、アガリアが地図から消えるところだった。

オレってば、世界を一回救ってんだぜ、スゲーだろ。

「フープ、がんばったのー!」

「へいへい、わかったわかった! 次は一緒に頑張ろうぜ! ただし

! 『おーでーまーしー』は無しな!」

「むうー! しょうがないなー!」

「へへっ、サンキュ!」

とりあえず、まずはこのインターバルでやる遊びだな! ババア曰く、アルト達の方はどうにかなったみたいだし、四天王とかチャンピオンとかアガリア警察がぞろぞろ居るみたいだから心配ないだろ。

「よっし! 決めポーズでも考えつか!」

「きめポーズ?」

「こういうものよー!」

ババアはキリツとした表情で右手を額に翳し、腰を絶妙な角度で折り曲げた。

決まっている。

「さすがだぜ、ババア! まさに年の功!」

またもや吹っ飛ばされた。やれやれだぜ、これだから更年期は。

「アーくん、アーくん!」

「ん? どうした、フープ」

「フープね、アーくんのことかしりたいの!」

「オレの事?」

「うん! アークくんのこと、おしえて!」

まあ、決めポーズはババアのをパクればいいし、いいだろう。

「よし、教えてやるぜ!」

早速、オレのものにした決めポーズを決める。

「パクんな」

アイアंकローだ。顔が痛い。だけど、それ以上に真顔のババアが超こえー。

どうやら、決めポーズをパクるのは地雷だったようだ。

「お、オーケー、ボス」

エピソード『Truth lies at the bottom of a well.』

改めて、自分の事を語ろうと思うと、口から出てくるのは二人の幼馴染の事ばかりだった。

セラとアルト。二人が両親に連れられてヴェゼール・ヴィレッツジに来た日の事を、オレは昨日の事のように覚えている。

村で唯一の子供だったオレに、はじめて同じ年の友達が出来た記念すべき日だからだ。

『オッス! オレ、アクセル!』

『……セラ』

『……アルト』

最初は大変だった。なにしろ、二人揃ってほとんど口を利かない。

今でこそ、セラは口うるさいくらいだし、アルトも我が道を行くタイプに成長したけれど、あの頃は主体性つてものが一切無くて、遊びの方法から、遊ぶ場所まですべてをオレが決めていた。

『アルトはね、昨日、シチューを食べたんだよ』

『セラはね、カレーだったの』

『オレンちは鍋だったぜ! ってか、二人共、自分の事を自分の名前で呼ぶって、変じゃね?』

『変?』

『変?』

まるで双子の兄妹かのように揃って首をかしげる二人に腹を抱えて笑った。

『アルトは『オレ』って言えばよ。セラは……、お袋は『わたし』って言うてるし、それでいんじゃない？』

それから、二人は自分の事を『おれ』、『わたし』と言うようになった。

そんな二人が自分から『あそこに行きたい』、『あれがしたい』、『あれが食べたい』と言い出すようになってから、毎日が更に楽しくなった。

「オレってさ、幸せ者なんだ」

「しあわせものー？」

「おう！ 尊敬出来る親父がいて、美味しい飯を作ってくれるお袋がいて、最高の親友達がいて！ そんで、お前さんがいる！ なんの不満もねーんだ！ まあ、今はアルト達と離れてて、ちっと寂しいけどさ」

「さびしい？ アーくん、さびしい？」

フーパだけじゃなくて、ファイアロー達まで俺の傍に寄ってきた。あつたかい。

「ツヘへ、ちっとだけだよ。お前さんがいるから、どうしてもって程じゃねーんだ」

ファイアローの頭を撫でる。サンダーズの背中をポンポンたたく。クロバットの体に頬をこすりつける。ルチャブルを抱きかかえる。フーパを頭に乗せる。

「オレ、めっちゃ満足してる」

頬を緩ませていると、ババアがジツとオレを見つめている事に気がついた。

「な、なんだよ……」

「べーつにー！ このプリチーなドロシー様の名前が無かったなー、なんて思っていないよー？ およよー、アーくんはわたしの事がキラいなんだー！」

嘘泣きを始めるババア。

「嫌ってねーよ。胡散臭いババアだなんて思ってるだけだ」

また、吹っ飛ばされた。

第六章 『激闘、ヴェゼール・ヴィレッジ』 プロローグ

『幻のポケモン・ミュウ。神秘の力を持ち、大洪水を引き起こしたとか、荒れ地に作物を実らせて人々に分け与えたとか、様々な伝説が残されている。』

絶滅したと言われていたが、最近になってミュウの目撃情報が報告された。我々はミュウを手に入れる為に、目撃情報のあった場所へ足を運んだ。だが、発見できたものは『ミュウの体の一部』のみだった。けれど、十分だ。永遠の命を持つとまで言われるミュウの細胞。これで、研究が進む。

結論から言えば、大成功だ。ミュウの細胞のクローニングに成功した。

安定している。他のクローンが何体壊れても、ミュウのクローンである『ミュウツー』は生存し続けている。

ミュウツーの延命の為、更なる研究を重ねた。ヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネ、そして、わたしの娘である『アイ』のクローンを使い、実験を重ねた。ミュウの成分は睫毛の先の化石しかない。けれど、この四つのクローンならば、いくらでも作り出す事が出来る。

驚いた。ミュウツーが他のクローン達とテレパシーを通じて意志の疎通を行っている。ヒトカゲツー、ゼニガメツー、フシギダネツー、そして、アイツーもこれまでにない反応を示している。

失敗した。いいや、違う。はじめから、間違えていた。わたしは、ただ、アイの為に研究をしていた筈なのに……。

ミュウツーが研究所を破壊している。もうすぐ、わたしは瓦礫の下に埋まる事になる。

いつからだろう。親であるために、人である事をやめてしまったのは……』

プロローグ

『Fujis Report』はまさしく革新的じゃー！』

モンテロは言った。それは、かつてカントー地方を拠点に暗躍している悪の秘密結社「ロケット団」が行っていた悪魔の所業について記された機密文書である。

ヒトとポケモンのクロージング。その研究の一部始終が研究責任者の考察と共に記されている。読み進むと共に吐き気がこみ上げてくる。

『魔王・ヴリル』、『煽動者・アルトギア』、『叛逆者・コスラ』、『咎人・サラ』。彼らの力は強大じゃ。彼らの遺伝子からクロージングを作り出す事が出来れば、『来るべき災厄』を恐れる必要はなくなるじやろう」狂気だ。モンテロだけじゃない。この空間には狂気が渦巻いている。

立ち並ぶ培養槽の中には、小さな子供が浮かんでいる。それぞれの培養槽には『コード：D』、『コード：B』、『コード：R』、『コード：W』と刻まれている。

試験管の中で造られた人間。親もなく、愛もなく、消費される為に彼らは作り出された。

「モンテロ博士。あなたは間違っている！」

もう、この言葉を口にするのが何度目になるのか分からない。博士の方もウンザリとした表情を浮かべている。だけど、譲れない。譲るわけにはいかない。

「人権を！ 倫理を！ 良識を捨てて！ それで危機を回避出来たとして！ 我々は人であり続ける事は出来ません！ そのレポートの最後でフジ博士が悔いたように！」

「だから、受け入れると？ あまりにも愚かしい。人間であり続ける事が出来ない？ 滅びれば、未来を失う事になる！ そんな事は断じてまかりならぬ！」

怒りを顔にする博士。その言葉に宿る信念に、怖気づきそうになる。

「だけど、わたしは声を張り上げる。」

「彼らは人間です！ 研究の為に彼らをすり潰し、解体するなど、許される筈がありません！」

フジ博士の研究は未完成だ。ミュウツー以外にも、ポケモンのクローニングには成功している。けれど、人間のクローニングは終ぞ成功しなかった。

人間はポケモンではない。だから、博士は彼らを使って実験を重ねている。

「あと一歩なのじゃ！ 既に、それぞれのクローンを一体ずつ世に解き放つてみたが、結果は上々。その事はお主も知っておろう」

知っている。知っているからこそ、止めさせなければならぬ。

一人は大切な家族だ。一人は大切な友達だ。あとの二人の事もよく知っている。

「モンテロー」

わたしがモンスターボールを取り出すと、さすがに焦った様子を見せる。

科学者としては優秀でも、ポケモントレーナーとしてはそれなりだ。

「愚かにも程がある！ そもそも、手遅れじゃ！ 今更、すべてを無かった事になど出来ん！ お主のやろうとしている事は、すべてを無意味にするだけじゃ！」

分かっている。失われたものは取り戻せない。

それでも、わたしは――、

「はいはい、そこまで」

「えっ？」

背後から声が聞こえた。振り返ると、そこにはダークライの姿があった。

「しまっ!？」

ヴェルトーゼ。今はメルカトでシグナスと共に作戦実行中の筈なのに、どうして、ここに彼がいるのだろうか。

考えようとして、出来なかった。わたしの意識はダークホールによって闇に沈んでいく。

「ぐめ……、アギ、ト……。ミリ、ガ……」

第一話 『師弟再会』

森がざわついている。少し進むとリングマが襲い掛かってきた。

「ジユカイン」

「ジユカツー」

これで十二体目。森の中に入ってから、まだ一時間も経っていない。遭遇頻度が高過ぎる。

この所、急激にポケモン達が凶暴化していると多方面から報告が寄せられていたけれど、どうやら本当の事らしい。

「困ったな」

まだ、シテイ内でポケモンに襲われたという被害報告は受けていない。それは他のシテイでも同様らしい。けれど、時間の問題だ。

警邏のトレーナーとポケモンを増やして、とりあえずの対策としよう。一時しのぎにしかないけれど、そこから先はヴァイクやルーラーと相談する必要がある。

オーヴェルの超級トレーナー達。彼らの力が必要だ。

第一話 『師弟再会』

溜息が出る。修行に出した筈のアクセルが戻ってこない。

「スパルタ過ぎたというのか?」

たしかに、アクセルの幼馴染であるセラを筆頭に、ジムトレーナー達からチクチク言われていた。けれど、オレはすべてを突き返して方針を改めなかった。

それでも、ついて来てくれると思っていた。

「もう少し、優しくすればよかったのか……」

よく考えてみれば、アクセルは十才の子供だ。それなのに、待ちわびた友との再会を邪魔立てしてしまった。改めて考えると、かなり酷い事をしたのではないか?

事情はあった。だが、それを説明する事が出来なかった。

「なんという事だ! オレは師匠失格だ!」

「いやいや、頑張ったと思うよー」

「おう! 師匠は失格なんかじゃないぜ!」

頭を抱えていたら、聞き覚えのある声が二つ現れた。

顔をあげると、そこには大迷宮パレスの魔女と、行方を眩ませていた愛弟子の姿があった。

「アクセル！ おお、よくぞ戻ってきた！ すまなかつた！ 許してくれ！ 厳しく接し過ぎた！」

「うわー。逃げた嫁に泣きつくダメ亭主みたいだー」

ノイズがうるさい。仮面越しに睨みつけると、魔女はニヨホホと笑いながら見返してきた。

「ヴァイク。いつものアナタなら、状況を理解出来る筈よ。少し、落ち着きなさい」

忌々しい事だが、魔女の言葉はもつともだ。今のオレは弟子の帰還に浮かれていて、冷静ではない。

深く息を吸い込み、ゆつくりと吐く。三度繰り返す事で、ようやくいつものオレを取り戻す事が出来た。

魔女・ドロシー。フィオレジムのジムリーダーであり、四大魔境の一つである大迷宮の管理者だ。その彼女がアクセルと共に現れた理由を考えてみる。

「貴様、アクセルを攫ったな！」

理解が追いつくと同時に怒髪天を衝いた。

「怒るのは筋違いよ、ヴァイク。わたしが攫わなきや、アクセルはエズエズの森で死体になっていたかもしれない。それに、アクセルに期待を籠めているのはアンタだけじゃないんだよ」

背筋が冷たくなるような笑みを浮かべて、魔女は言った。

トレーナーとして、生物として、この女は格が違う。

それでも退くわけにはいかない。

「死体？ それに、期待だと？ 今更、貴様が何を期待する？ 生きた化石の分際で」

「ひ・み・つ」

そう言うと、ドロシーは普段どおりのおちやらかな態度に戻った。

「それじゃ、わたしは帰るわね。ぼっははーい」

音もなく姿を消す魔女。相も変わらず、得体が知れない。

「……大丈夫か？ ヤツになにかされなかつたか？」

オレはアクセルに声を掛けた。十中八九、なにかされているだろうが、まずは心のケアが必要かどうかだ。

「大迷宮でタイムトライアルしてた」

どうやら、オレはスパルタでもなんでもなかつたようだ。

大人でも泣いて逃げ出す『大迷宮チャレンジ』。超級トレーナーの中でも卓越した者のみが挑む事を許される試練だ。そんなものに挑戦させるとは、何を考えているんだ、あのキチガイ。

「それで、どこまで踏破出来たんだ？」

大迷宮は全百階層から成り立っている。ジムが設置されている場所は中層である地下51階だ。そこまではファイオレジムに挑む実力さえあれば誰でも踏破出来る。

問題はそこから先の階層。ドロシーが封じている超級ポケモン達が跋扈している。加えて、侵入者を阻む罠が所狭しと仕掛けられ、地下八十階より先へは卓越した超級トレーナーでさえ入り込む事が出来ない。管理者であるドロシーを除けば、ザラクが唯一の踏破者だろう。

「一番下まで行ってきた」

「なにっ!？」

チャンピオンクラスで初めて可能な完全制覇。オレでも出来ない。

「馬鹿な！ そんな筈はない！ 大迷宮の完全攻略など！」

「いや、攻略ってか……。最後はレックウザとフーパでゴリ推しただけだし」

「は？ レックウザ？ フーパ？」

アクセルは気まずそうに笑いながら二つのモンスターボールをホルダーから外した。

「こっちはナザレから借りてるんだ。返しに行かなきゃ」

そう言っつて、アクセルが投げたモンスターボールからはレックウザが飛び出してきた。

「ギンシャアアアア！」

紛れもなくレックウザだ。伝説のポケモン。しかし、ナザレのモノ

と言われれば納得がいく。クレルモア大平原でゲットしていたからな。問題は、どうしてナザレからレックウザを借りるという状況が発生したのかだ。

さつき、ドロシーはエズの森でアクセルが危うく命を落としかけたと言っていた。

何があつたんだ。師匠であるオレの知らない所で、アクセルはどんな大冒険を繰り広げてきたんだ。

「おーい、師匠。なんで落ち込んでるんだ？」

いけない。すこし、センチメンタルな感傷に耽ってしまった。

「なんでもない。それで、フーパというのは？」

「こいつだぜ！」

もう一つのモンスターボールが開かれる。中から飛び出してきたのは、巨大な魔神だった。

「おーでーまーしー！」

「なっ!？」

そのポケモンを、オレは知っている。実物ではないが、その姿を見たことがある。

カロス地方で起こった大事件。複数の伝説のポケモン達がデセルシテイを舞台に大暴れした。そのニュース映像の中に、このポケモンがいた。

「なんとか頑張つて、地下七十階まではファイアロー達だけで行けたんだけどさ。そっから先はレックウザ任せだったよ」

アクセルは不満そうだが、地下七十階まで自力で進めただけでも十分過ぎる。

階層は、そのままポケモンのレベルを現している。

どうやって作ったのか、どういう仕組みなのか、さっぱりわからないが、大迷宮の内部はそうなっている。

要するに、アクセルは70レベルまでのポケモンを倒せるまでの実力者へ成長したという事だ。オレと修行している時は四十レベルが精々といったところだったのに、非常に口惜しい。

「あの忌々しい魔女め」

レベルはポケモン図鑑で確認する事が出来るポケモンの強さの指標だ。戦闘経験を得る事で、ポケモンは強くなっていく。たいりよく、こうげき、ぼうぎよ、とくこう、とくぼう、すばやさが際限なく高まり、次々にわざを覚えていく。

一説によると、レベルアップは変化の少ない進化らしい。人間が筋力トレーニングを行って筋力を増強したり、有酸素運動を行って肺活量を鍛えるのとは根本的に違う。戦闘を経る事で、ポケモンが持つ『進化の力』の蓋が僅かに開き、肉体を強化する。そして、肉体が十分に強化された時、オレ達の知っている『進化』が発動する。

だからこそ、大迷宮はポケモンのレベルアップにピッタリだ。何故なら、成長に最適な敵を階層によって選別する事が出来る。

もちろん、ノーリスクではない。むしろ、危険性は極めて高い。その理由はドロシーにある。彼女は試練に挑む者を選別し、挑戦する事を許す。けれど、手助けは一切しない。そこで力尽きるのなら、それまでの話。引き際を見誤れば、取り返しのつかない事になる。

オーヴェルに集う超級トレーナー達が迷宮ではなく、オーヴェルで腕を磨くのはそれが理由だ。たしかに、迷宮で本格的に修行に取り組めば、瞬く間に強くなれる。だが、その為のリスクとメリットが釣り合っていない。

一方で、アクセルにはドロシーの万全なバックアップがあった。危険な状況になれば即座にレポートでジムへ送還され、補給を受け、十分な休息を取る事が出来たという。

なるほど、それならば異常な程の成長にも納得がいく。

「それで、師匠」

アクセルはレックウザとフーパをモンスターボールに戻すと、真剣な表情を浮かべた。

「メルカトの事は知ってる?」

「メルカト? ああ、ナザレが帰還したとかで、アガリア警察がメルカト奪還の為に動いたそうだな。そうか、ナザレと会ったのだったな。その辺り、詳しい事を教えてくれないか?」

「はい!」

アクセルの話聞く内に、何度も血管がはち切れそうになった。

また、ヴリル教団だ。このアガリアの治安を乱す最たる要因。

神出鬼没で規模も不明瞭。目的も不明。リールシティの一件では多くの被害者と多大な経済的損失を生み出した。

忌々しいにも程がある。

「それで、師匠。オレ、一度メルカトに向かおうと思うんだ」

「メルカトに？ オレとしては修行を再開したいのだが……」

「も、もちろん、帰ってきたら修行を再開するよ！ ただ、アルト達が心配なんだ。ドロシーは大丈夫だと言ってたけど、自分の目で確かめたいんだ！」

「そういう事か、なるほど。わかった。ならば、行って来い」

「はい！ ありがとうございます！」

そう言うなり、アクセルは飛び出していった。ここに現れた時から、はやく行きたくてウズウズしていたのだろう。それなのに、オレを納得させる為に自分を抑えていたという事だ。

まったくもって、素晴らしい弟子だ。その弟子を危険に晒したヴリル教団。どうやら、オレも本腰を入れる時が来たようだ。

「許さんぞ、ヴリル教団。ついでにドロシー！ オレの弟子に手を出しやがって！」

アクセルがメルカトに向かったのは不幸中の幸いだった。クールな師匠で通しているから、こんなところは見せられない。怒りで筋肉が膨らみ、服が弾け飛んでしまった。

「うわー、キレッキレじゃないですか、リーダー」

「むっ、シャシャか」

ジムトレーナーのシャシャは興奮した様子で入ってきた。

「うーん、たまりませんねー。リーダーの筋肉は世界の宝ですよ！」

「そ、そうか」

ウツトリと筋肉を撫でられて、なんだか恥ずかしくなってきた。

「それより、なにか用事があったのではないのか？」

「はい！ シャンティシティのエルフラン様からリールシティのルーラー様を加えた話し合いの席を求められています。いかが致します

か？」

「エルから？ わかった。すぐに取り次いでくれ」

「かしこまりました」

部屋のスクリーンが起動する。そこに、エルとルーラーの姿が映し出された。

第二話 『ヴリル王』

『オイ』

体を揺すられている。

『起きろ』

小突かれた。

「イタツ!? えっ、なに!?!」

慌てて目を開けると、そこには仏頂面な男が立っていた。

『手間をかけさせるな』

「えっと、おじさんは?」

『分からないのか?』

分かるはずがない。だって、この人と俺は初対面だ。彼の髪の色は黒。アガリアに、黒い髪の人には滅多にいない。だから、一度でも合えば忘れる筈がない。

『寝ぼけているのか? 深く息を吸い、思考を整えろ』

「う、うん」

言われた通りにする。すると、起きる前の記憶が甦った。

ミリガンとのバトル。

その最中に投げ込まれた二冊の本。

コスラが見せた、空白の時代の光景。

「ヴリル王?」

『そうだ。それが俺様の名前だ。ようやく、思考の淀みが取れたようだな』

コスラが見せた光景の中で現れた彼と目の前の彼は完全に一致している。たしかに、俺は寝ぼけていたようだ。

『では、手っ取り早く済ませるぞ』

「手っ取り早くって?」

『貴様に我らのルーツを教えてやる』

「ルーツ? それに、我らって?」

『俺様とお前。ラミタルア、サラ、レムハザード、コスラ、アルトギア、そして、現代の俺様の血を継ぐ者達』

ヴリル王は指を鳴らした。

『我々がどこから来て、どうしてポケモンと心を通わせる事が出来るのか、その真髓をお見せしよう』

視界がぼやけていく。そして、俺の前には一体のポケモンがいた。神々しい程に、美しい。

『アルセウス。すべてを生み出したと言われる伝説のポケモンだ』

第二話『ヴリル王』

気がつくのと、俺は荒野に立っていた。草木どころか、水もない。

『ここが我らの故郷。ミチーナという、今はシンオウと呼ばれている土地だ』

枯れ果てた大地を歩いていると、小さな集落に辿り着いた。

誰もが苦しそうに、それでも、ポケモン達と支え合って生きている。

『その昔、ヒトもポケモンも同じだった。死んだ人間は亡霊ゴーストと化し、超能力を持つ者は己の力を抑えきれなくなった時、魔獣に転じる。だからこそ、ポケモンと交わる者もいた。混じり物もいた』

ヴリル王の言葉に、俺は竜神教の神殿で見た壁画を思い出した。人から魔神へ変わっていく様子を描いた絵。コスラも、自分達をフーパだと言った。

『見るがいい。あの光景を』

俺の前に一人の少年とポケモンがいた。彼らは語り合っていた。言葉ではなく、心を通わせて、確かに意思の疎通をしている。その姿は、ポケモンの姿こそ変わっていないが、きずな現象のようだ。

『ミチーナの民には混じり物や、その末裔がいた。彼らはポケモンと心を通わせる力を持っていた。互いの心を見せ合う力だ』

再び、景色がぼやけ始める。

今度は一人の男がアルセウスの前に立っていた。アルセウスは周囲に浮かぶ石版の幾つかをまとめて、一つの宝玉に変えた。

『男の名はダモス。誰よりも強い力を持っていた。彼はアルセウスを救い、その礼として、『命の宝玉』を貸し与えられたのだ』

ダモスは受け取った宝玉を使った。すると、みるみる内に大地が蘇っていく。

緑が一面に広がり、雨が振り始め、生命が宿った。

ミチーナの民はアルセウスに感謝を捧げ、豊かになった生活を送り始める。

『さて、この後、彼らはどうなると思う？』

「え？」

質問の意図がわからない。誰もが笑顔を浮かべている。まさに理想の世界だ。

「ずっと同じ光景が続くだけじゃないの？」

『そんなわけではない。言っただろう。神はあくまでも『命の宝玉』を恩人であるダモスに貸し与えただけだ』

再び光景が変わる。そこにはアルセウスがいた。『命の宝玉』の返還を求めに来たんだ。

だけど、彼らはアルセウスを裏切った。今の豊かな生活を失う事を恐れたのだ。

宝玉を返さず、あろう事か、彼らはアルセウスを封印してしまった。『ハッハッハ！ どうだ、醜いだろう！ だが、だからこそ、人間らしい』

ヴリル王は言った。

『彼らはそれから豊かな生活を送り続ける。それを与えてくれた神を足蹴にしなごらな』

ミチーナの民は変わらず笑顔を浮かべている。だけど、その笑顔は以前と違っていた。

恩を仇で返す行為。それを平然とやってのける悪人もいる。けど、人間すべてがそうではない。罪の意識は民の心を狂わせていく。やがて、ミチーナの地を去る者が現れ始めた。最初にポケモンと心を通わせ合っていた少年も、その中にいた。

ヴリル王は口を挟まない。俺は少年の後ろ姿を見続けていた。特徴的な黒い髪、意志の強そうな目つき。語られるまでもない。彼こそが後のヴリル王なんだ。

故郷を離れた彼や仲間達は罪の意識から逃れる事が出来た。けれど、それだけだった。

理想郷を捨てた彼らを待ち受けていたのは過酷な世界だった。ポケモンが魔獣と呼ばれていた時代。当然、モンスターボールなんて便利な物はなく、剣を握って戦うほか無い。それに、他の民族は彼らを受け入れなかった。

流浪の民となった彼らはやがて散り散りになっていく。ある者は死に、ある者は乞食となり、ある者は悪に手を染めた。

後に王となる少年は盗賊になった。人から奪い、ポケモンから奪い、生きる為に暴れまわった。そして、当然の如く裁かれる日が来た。彼は他の罪人達と共に檻へ入れられ、小さな船に乗せられた。揺られ、押され、ろくに食事も与えられず、船が数日海を漂う頃には死臭が漂っていた。

それでも、少年は生きていた。死者の血肉を糧に、生き続けた。そして、船は港に辿り着く。

『バステイロ。当時、唯一の街だった』
「唯一？」

港は荒れ果てていた。ガラの悪そうな人達が集まっていて、そこに少年は檻ごと投げ落とされた。死体をクツシヨンにして、またしても生き残った彼はひしゃげた鉄格子の隙間から外に出る。すると、待ってましたとばかりにガラの悪そうな人達が彼を取り囲んだ。

『バステイロ。今では意味が変わっているのかも知れないが、当時の意味は『罪人の港』。後にアガリアと呼ばれる地の正体は罪人の為の流刑地だったのだ』

少年は生き抜いた。奪って、殺して、喰らって、まるで獣のように生き続けた。

そして、彼は屈強な青年へ成長した。従えたポケモンと共に相も変わらず暴れまわっている。そんな中で、彼は何人かの仲間を見つける。

『ふっふっふ！ 色男はっけーん！』

一人は美しい女性だった。マイペースで、掴みどころのない人。彼女は自分の事を『ラミタルア』と名乗った。『傾城の魔女』と呼ばれ、一つの国を崩壊させかけたとして、この地に送られたらしい。

『やあ、はじめまして、こんにちは、よろしくね』

二人目には見覚えが合った。青い髪、青い瞳の青年、アルトギアだ。彼は学者だった。その時代として画期的な発見を繰り返す天才。けれど、世間は彼の才能を認めなかった。いや、認めるわけにはいかなかった。

彼は人やポケモンの命を軽んじ過ぎていた。研究の為に多くの命を実験に使い、『悪魔』と呼ばれた。

『あなたの暴虐はわたしが止めます！』

三人目は、はじめ彼らの敵として現れた。罪人達の島において異常な程、彼女は清廉だった。

罪人の島で生まれた子供。それが彼女の正体だった。彼女の周りには利他的な理由であつたり、無自覚であつたり、仕方なく罪に手を染めた人々ばかりがいたようだ。

穢のない世界を作りたい。心から、そう願う彼女を青年は愛した。向かって来る度に愛を囁き、言葉巧みに彼女の心を奪い取った。

サラという名の少女の仲間入りによって、彼らの暴虐は止まる。ラミタルアとアルトギアは面白そうという理由から、彼と彼女に協力した。

そして、彼らは国を築き上げた。

当時、その地には既に王を自称する荒くれ者もいたが、そんな者達も彼らは従えさせた。

『偉大なる王！ 我らがヴリル王！』

喝采をあげる罪人達。彼らも疲れ果てていたのだ。

奪い合い、殺し合い、魔獣に襲われる日々に。

ヴリル王は荒々しく、厳しく、それでも理想の王として国をまとめあげた。

そして、同時に彼は夫となり、父となった。

ラミタルアとサラ。二人の女性を娶り、それぞれに一人ずつの子供を産ませた。

『うーん、可愛い！ この子の名前、もう決まってるんだよー！』

赤毛の赤ん坊を愛おしそうに抱き上げながら、ラミタルアは言っ

た。

『コスラ！ この子はコスラよ！ 意味は『人を愛する者』！』

それが、後に国を滅ぼす叛逆の王子の誕生の瞬間だった。

『あなた、この子にはあなたが名前をつけて』

そして、もう一人の妻、サラは名付けをヴリル王に委ねた。

『レムハザード。どうだ？ 良い名だろう』

レムハザードと名付けられた赤ん坊は穏やかに眠っている。

◆

『さて、ここから先はアルトギアやコスラが語った通りだ』

いつの間にか、俺は草原の上に立っていた。目の前にはヴリル王がいる。

「あの、聞いてもいいですか？」

『なんだ？』

俺はずっと気になっていた事を問いかけた。

「アルトギア手記って、なんなんですか？」

みんなが奪い合っている。

毎度、空白の時代について教えられる。

だけど、奪い合う理由も、教えられる理由も、さっぱり解らない。

以前、エリザは言っていた。

—— 『アルトギア手記』は単なる歴史書ではなく、空白の時代に存在した技術、遺産についても記述されていて、その中には『最終兵器』の情報も含まれているのです。

—— 『アルトギア手記』は誰かの為のもの。その誰かが力を得ていく為の道標。

だけど、これまでに教えられた中で兵器と呼べるようなものは『きずな現象』や『フーパ化』くらいなもの。だけど、アギトがヴリル教団の団員なら、彼らは既に『きずな現象』を知っている事になるし、彼らはフーパを手持ちに加えていた。

誰かの為の道標というのも、こんな過去を語られて、何を目指せと
いうのか、さっぱり解らない。

『貴様がアルトギア手記と呼んでいる物。それはフーパと化した我ら

の魂を封じたものだ』

「魂を封じた……?」

『フーパには二つの形態がある。荒ぶる魔神の姿と、ただの悪戯好きのポケモンの姿。前者はポケモン達を争わせた人間の邪心。後者は純粋なポケモン達の善心。邪心さえ取り除けば、フーパはただのポケモンとなる。それをアルトギアは解明し、自身で試した。そして、俺様や、最後に残ったサラに書を託した』

「じゃあ、どうして俺に過去を教えるの?」

アルトギア手記がどういう物かはわかった。だけど、結局、こうして過去を見せられる理由にはなっていない。

『貴様は知らねばならないからだ』

「どういう事?」

『悪意か、あるいは因果か、たんなる偶然か、既に事は始まっている。止める者が必要だ。そして、止められる者で、我らの声を聞くことが出来たのはお前だけだ。他にも書を開いた者はいたが、彼らではダメなのだ』

意識が遠退き始める。時間切れという事だろう。

ヴリル王は苦しむような表情を浮かべた。

『あるいは、すべて、神を足蹴にした罰なのかもしれない。けれど……』

最後まで聞き届ける事は出来なかった。

俺の意識は完全に暗闇へ沈んでしまった。

第三話 『VSアクセル』

「説明してもらえますか?」

エリザはザラクを睨みつけた。

「何の事だ?」

「ゲッコウガの事です!」

指を差されたゲッコウガは誤魔化すようにそっぽを向いた。

「あなた、きずな現象を利用して、ゲッコウガの目からわたし達を監視していましたね!」

「別に、監視をしていたわけじゃない。それに、常に繋がっていたわけでもない。きずな現象はポケモンを消耗させる。そして、繋がっているトレーナーにもフィールドバックされる。長時間の維持はそもそも不可能だ」

「だとしても、プライバシーの侵害です!」

エリザの大声にザラクは顔を顰めた。

「あまり怒るな。さじ加減はゲッコウガが決めている。責めるならアイツにしろ」

「コウガツ!」

いきなり罪を擦り付けられたゲッコウガは激昂した。

「コウツ! コウガ! コウガアツ!」

「なに? 『テメエが決めた事だろ! テメエで責任を取れ!』だと?」

「コウガツ!」

ザラクとゲッコウガが睨み合っている。ギャーギャーと子供のようだ。

「驚いたな。ゲッコウガのあんな姿は初めて見るぞ」

バレットは目を白黒させながら言った。アルトの切り札として、常に難敵を打倒してきたゲッコウガの変わりように驚いている。

「ゲッコウガは昔からああですよ? 最近は猫被ってましたけど、基本的にザラクとクリソツなんです、性格的に」

「そうなのか……」

遂には殴り合いを始める二人。ザラクにはゲッコウガの言葉が分かるようだ。きずな現象の応用かもしれない。

羨ましい。

「それにしても、アルトは全然起きないな」

「そうですね……」

二人はザラクとゲッコウガから視線を外し、こちらにやって来た。

「スピアー。看護、ご苦労様です」

「お前も疲れてんだ、無理すんなよ」

無理などしていない。だが、その言葉はありがたく頂戴しよう。

「スピッ！」

第三話『VSアクセル』

目を覚ますと、視界に赤い複眼が映り込んだ。

「おはよ、スピアー」

「スピー！」

心配させてしまったようだ。スピアーを抱きしめて安心させてやる。

「あつ、起きたんですね！」

「大丈夫か？」

エリザとバレットがやって来た。

「うん。心配かけてごめんね」

二人から俺が気を失った後の事を聞いた。

どうやら、ミリガンは自分を取り戻したらしい。それに、ヴェルトーゼはザラクが圧倒してアガリア警察に拘束されているようだ。アギトも事情聴取を受けているみたいで、会えるのはしばらく後の事。

「今はナザレ様とミリガンを中心にアガリア警察がメルカトの今後について話し合っている。こっから先はオレ達の出る幕じゃない。つつーわけで、よ！ 旅を続けようぜ」

「いいの？」

「頼む。オレはもっとお前達と旅がしたいんだ」

バレットの言葉に頬が緩む。もしかしたら、ここでバレットと別れ

る事になるかもしれないと覚悟していた。

「よし、行こう！」

ここでやるべき事は終わった。なら、後は前進あるのみだ。そう意気込んでいると、急に辺りがざわめき始めた。

「ん？」

「なんででしょう？」

バレットとエリザも首を傾げている。

「レックウザだ！」

誰かが叫んだ。その声の主が指差す先を見ると、確かにレックウザが向かってきていた。

「つて、レックウザ!？」

「なんで!？」

「と、とにかく応戦しないと！」

慌ててモンスターボールを構えると、その手を誰かに抑えられた。

「問題ない！ アレはわたしのポケモンだ！」

声を上げたのはナザレだった。隣にはミリガンもいる。

レックウザが降りて来た。

「おーい、アルト！ ナザレ！」

「ええっ!？」

レックウザの背中からひよつこりとアクセルが顔を出した。

レックウザの背中を滑り降りて、俺の前にやって来た。

「やーつと、会えたな」

「あ、アクセル!？ なんで!？ なんで、レックウザの背中からアクセルが降りてくるの!？」

「ナザレに借りてたんだよ」

そう言うと、アクセルはレックウザをモンスターボールに戻した。

「返すぜ、ナザレ」

「うん」

二人はなんだか親しげだ。バレットがすごい表情を浮かべている。

「オイ！」

「ん？」

「お前、何者だ！」

バレットが噛み付いた。どうやら、敬愛するナザレに親しげな同年代にジエラシーを感じているようだ。ナザレの顔がすごく微笑ましそう。

「オレはアクセル！ ヴェゼール・ヴィレッジのアクセルだ！ なんかよくわかんねーけど、言いたい事があるならバトルしようぜ！」
「待った！」

俺は咄嗟に二人の間に割って入った。

「おい、アルト！ 邪魔をするな！」

バレットが怒鳴るけど、ここは譲れない。

「アクセル！」

「お、おう、どうした!?!」

俺はスピアーのモンスターボールを掲げた。

「俺がいるのに、なんでいの一番にバレットにバトルを申し込むのさ！」

「え？ いや、話の流れつつーか、噛み付いてきたから、じゃあって感じで……」

「言い訳無用！ まずは俺とバトルだ！」

「ええっ!?!」

まったく、アクセルにも困ったものだ。久しぶりの再会なのに、俺以外とバトルしようとするなんて！

「よ、よく分からねーけど、そういう流れなんだな！ よっしや、いっけ、アルト！」

「うん！」

思えば、アクセルとバトルするのはヴェゼール・ヴィレッジ以来になる。

「スピアー！」

「ファイアロー！」

投げたモンスターボールから同時に飛び出すスピアーとファイアロー。

ほのおとひこうの二重タイプを持つファイアローはスピアーに

とって天敵と言っても過言じゃない。だけど、タイプの相性なんて関係ない。

「いくぞ、スピアー！ フルパワーだ！」

「スピイイイッ！」

意志を一つに束ねる。青白い光に包まれて、スピアーの姿が変わった。

「きずな現象!? ったく、相手にとって不足無き過ぎだぜ！ ファイアロー、ニトロチャージ！」

「アーイッ！」

炎を纏いながら舞い上がるファイアロー。

「遅い！」

「スピー！」

ニトロチャージで加速して尚、今のスピアーのスピードには及ばない。

「そのまま行け！ ブレイブバード！」

「アーイッ！」

ニトロチャージからの切り替えがスムーズだ。このファイアロー、強い！

「だけど、まだ遅い！」

スピアーは速いだけじゃない。二対の羽は一对の羽では不可能な機動力を生み出す。

最低限の動きでファイアローを避ける。そして、スピアーの眼は超スピードのファイアローを捉える。まるで、時が止まったかのような感覚だ。がら空きの横腹にダブルニードルを叩き込む。

「ファイアロー!?!」

アクセルがファイアローをモンスターボールに戻した。

「やってくれるな、アルト！ 次はこいつだ！ クロバット！ ちよ
うおんぱ！」

「キイイイッ！」

飛び出すと同時にクロバットはちよおんぱを放った。頭が揺さぶられる。

「へっへー！ きずな現象は心を重ねるもの！ 混乱してちゃ、維持なんて出来ねーだろ！」

アクセルの言うとおりで。フィードバックを受けて、思考が定まらない。スピアーのきずなへんげが解けてしまった。

「ス、スピアー！ かげぶんしん！」

「させるかよ！ エアスラツシュ！」

スピアーがかげぶんしんを発動する前にクロバットのエアスラツシュがスピアーの体を引き裂いた。

「スピアー!?!」

「畳み掛ける、ブレイブボード！」

アクセルの判断が速い。まるで、オーヴェルで戦った超級トレーナー並だ。

「負けるな、スピアー！ ドリルライナー！」

「ズピイイイツ！」

「真つ向勝負かよ!?!」

正面からぶつかり合う二体。軍配はスピアーに挙がった。

「……やっぱ、つえーな」

「ス、スピイ……」

アクセルの顔が悔しげに歪む。だけど、スピアーも満身創痍だ。

「だけど、負けねえ！」

アクセルが新たなモンスターボールを取り出した。

その時だった。いきなり、離れた場所に設営されていた小屋が吹き飛んだ。

「なに!?!」

「まさか!?!」

それまで俺達のバトルを見ていたミリガンが血相を変えて走っていく。

呆気にとられてみると、いつの間にか観戦に加わっていたザラクが「おーい、続きはまだかー」と声を掛けてきた。

「ザ、ザラク！ あなた、ヴェルトーゼを見ている筈じゃ!?!」

「はあ？ アルトのバトルだぞ。あんな爺さんを見てる場合かよ！」

その会話で大体察しがついた。どうやら、ザラクがヴェルトーゼを見張っていたようだ。だけど、彼は俺達のバトルを見に来てしまった。そこに来て、吹き飛んだ小屋。

ミリガンが戻ってくる。

「…………逃げられた」

第四話 『原種』

お通夜みたいな空気だ。

「もう！ もうもう！ どうして離れちゃったんですか！ 頼まれた事も満足にこなせないんですか！」

「あんな雑魚、どうでもいいだろ」

ザラクだけは平常運転だ。相変わらず、彼は超然としている。

「どうでもよくありません！ 元を正せば、あの男がすべての引き金を引いたのですよ!? お姉ちゃんだって、アイツのせいで！」

「それは違うぞ、エリザベス」

それまでとは打って変わって、ザラクは真剣な眼差しをエリザに向けた。

「アイリスの死は守ってやれなかったオレの罪だ」

「お、おにいちゃん……?」

俺とバレットは揃って吹き出してしまった。

「お兄ちゃんって言ったね」

「言ったな」

「お黙りなさい！」

怒られた。

「……そうだな。これが最後になるだろう」

ザラクは俺達に向かってげんこつを振り上げているエリザの体を持ち上げた。

「わきやつ!?! な、何するんですか！」

「エリザベス」

ザラクは抱き上げたエリザに言った。

「ごめんな」

「え？」

ザラクはそっとエリザを降ろすと、俺達に背を向けた。

「俺はリーグに戻る。アルト、次に会う時は、今度こそバトルだ。待つてるぞ」

「う、うん」

なんだから、いつものザラクと違う。

「おにいちゃん……?」

エリザも困惑しているようだ。去っていくザラクの後ろ姿を俺達は呆然と見送った。

それからしばらくして、ミリガンがやって来た。

第四話『原種』

大変な事があつたばかりなのに、彼女は休む間もなく働き続けている。

「みんな、アギトくんの事情聴取が終わったわ。会うでしょ?」

「うん!」

ザラクの事は気になるけど、今はアギトだ。彼の事情を俺は何も知らない。だけど、友達だ。

「えっと、オレも行つていいの?」

アクセルが気まずそうに言った。

「いいんじゃない? 彼とバトルしたんでしょ? 昨日の敵は今日の友。そういう格言もあるんだから」

そう言うと、ミリガンは俺達をアギトが待っているテントに案内してくれた。

「あ、そうだ! ミリガン!」

「ん? どうしたの?」

「ギルガルドのモンスターボール。預かってたんだ。返すよ」
「……うん」

ミリガンは俺からモンスターボールを受け取ると、ギルガルドを出した。

「ギル」

ギルガルドはミリガンを見つめた。そして、ゆっくりと俺の方にやって来た。

「ギルガルド?」

「そういう事だよ、アルトくん」

「え?」

何が、そういう事なのかサッパリ解らない。

「ギルガルドは主を変えたの」

「どういう事？」

「ミリガンは言った。」

「原種って、知ってる？」

「原種？」

俺は知らない。物知りなエリザもちんぷんかんぷんな様子だ。

「オレ、ドロシーに聞いた。たしか、最初にポケモンになったポケモンの事だよな？」

「ポケモンになったポケモン？」

「言っている意味が解らない。」

「ポケモン。はるか昔は魔獣と呼ばれていた彼らは、元々は別の生物だったの」

「別の生物？」

「うん。例えば、それは人間だったり、それは雀という鳥だったり、馬という獣だったり。彼らはある日を境に別の生命体へ変化した。切っ掛けは解らない。ある研究者はアルセウスやミュウといった幻のポケモンが関係しているのではないかって説を唱えている。そして、ポケモンに転じた彼らは卵を産み落とす事で種を増やしていった。そして、このギルガルドは古びた剣がポケモンに転じた存在。即ち、原種なの」

はじめて聞く話じゃない。たしかに、凶鑑を開くとそういう話が出てくる時が稀にある。

たとえば、ユンゲラーだ。エスパー少年が自分の力を抑えきれなくなった時、ユンゲラーに変わっていたという説明文が載っている。でも、ユンゲラーはケーシィから進化するポケモンだから、お伽噺的なものなのかと思っていた。あれは原種の事を説明していた文章なんだ。

パウワウの分類であるアシカとか、コダックの分類であるアヒルとか、よく解らない言葉が出てくる時がある。あれも、原種がポケモンになる前の生物の事だったのかもしれない。

「ギルガルドを凶鑑がどう説明しているか、見てごらん」

「う、うん」

凶鑑を開く。

『ギルガルド。おうけんポケモン。はがね・ゴーストタイプ。ニダンギルの進化系。王の素質を持つ人間を見抜く。認められた者は、やがて王になると言われている』

「おうけん。すなわち、王権であり、王の剣。かつて、この子はヴリル王の手持ちポケモンだったの」

「ヴリル王の!?!」

そう言えば、ヴリル王が連れていたポケモンの中にギルガルドの姿もあった。まさか、同一の個体とは思わなかった。

「ずっと、レムハザードが管理している『亡霊の港』バステイロの海底で眠っていたんだけど、わたしが海を覗き込むといきなり浮上してきたのよ。それからはずっとわたしのエースとして戦ってくれていた」

ミリガンは寂しげにギルガルドを見つめた。

「だけど、それも終わり。この子のトレーナーはあなたよ、アルトくん。原種であるギルガルドは一人の主にしかならないの」

そう言うと、ミリガンはモンスターボールを返してきた。

受け取って良いのか分からない。だって、ギルガルドはミリガンのポケモンだ。彼女だって、ギルガルドと別れたいわけじゃない。

「ギル」

ギルガルドは俺を見つめた。そして、その頭部である剣の柄を俺に向けてきた。普通の剣と違って、握るようには出来ていない。だけど、ギルガルドは構わず俺の手に柄を押し付けてくる。

「ギルガルド……」

俺はミリガンを見た。彼女は頷いた。

「わかった。これからよろしくね、ギルガルド」

「ギル!」

モンスターボールにギルガルドを戻す。

「ヴリル王のギルガルドですか……」

エリザは難しい表情を浮かべながら呟いた。

「あつ、ついたよ」

ミリガンが言った。いつの間にかテントの眼の前まで来ていたよ
うだ。

中に入ると、そこにはアギトがいた。

「アギトー！」

駆け寄ると、アギトは気まずそうに手を上げた。

第五話 『閑話休題』

第五話 『閑話休題』

「オレには親がない」

アギトは言った。

「物心ついた時、シエルという女に引き取られた」

シエル。アガリア王家の末裔であり、ジュリアス財団の創設者でもある四天王。

カルネ・シテイでエリザから彼女の話を聞いた。王家にのみ伝わる『アガリアの伝説』に記された『来るべき災厄』からアガリアを救う為にヴリル教団へ入団した経緯も。

「シエルはヴリル教団の中でも暗部に属する連中とつるんでいた」
「暗部？」

バレットが怪訝そうに表情を歪める。

「ヴリル教団は、元々は竜神教から枝分かれした宗派だ。人ではなく、『ポケモンと人の絆を深め、一体となる』という思想を第一とする集団なんだ」

悪の組織。それが、これまでの旅で感じてきたヴリル教団に対する印象だ。だけど、そう聞くと、むしろ平和的な集団に思える。この差異は一体何なのだろう。

「だけど、その思想を利用された」

「どういう事？」

俺が問いかけると、彼は言った。

『ポケモンと人の絆を深め、一体となる』。この言葉を聞いて、何か浮かばないか？」

「きずな現象？」

「そうだ」

宗教の思想としても違和感はない。だけど、きずな現象の説明としても通る。

「詳しい経緯まではオレにも分からない。だが、シグナスは……いや、ヴェルトーゼはアルトギア手記から『きずな現象』の存在を知り、そ

の情報に基づきヴリル教団の中で派閥を築いた。シンパを徐々に増やしていき、遂には教祖の側近という地位にシグナスをつかせた。おそらくはダークライを使ったんだろうな」

「つまり、ヴェルトローゼが作り上げた派閥が暗部って事？」

「そういう事だ。シエルは古参であり、教団の変化に疑問を抱き始めていたオブライエンを抱き込み、暗部に潜り込んだんだ。オブライエンも初めはきずな現象に興味を抱いて派閥に入ったらしい」

きずな現象。俺も何度も使っている。ポケモンと一体になる感覚はたまらなく素晴らしいものだ。スピアーの心、スピアーの痛み、スピアーの全てが伝わってくる。それに加えて、メガシンカすら超える圧倒的な力。操られていたとはいえ、四天王のミリガンと曲り形にもバトルが出来ていた。

そんな力を目の前にチラつかせられて黙ってられるトレーナーなんていない。

「アギトはシエルの手駒として動いていたのか？」

「ああ、そうだ。もつとも、目立つなつて命令以外は、ナザレの回収くらいだけだな」

「そうなの？ もっと、テレビのエージェントみたいな事してるのかと思ってた」

「エージェント。その響きはかつこいいな」

アギトは満更でも無さそうだ。

「なあ、聞いていいか？」

そこで、アクセルが口を開いた。

「ああ、なんだ？」

「ドロシーもボソツと言ってたんだけどさ、『来るべき災厄』って、具体的に何が起きるんだ？」

それは俺も気になっていた。シエルの行動やヴリル教団の暗躍を見聞きする限り、途方もなく恐ろしい事が起きると予感させられるけれど、具体的な事が何も分かっていない。

「オレもすべては知らない。だが、断片的な事はシエルから聞かされている。『はじめ、おおきなあらそいがおきた。ヒトもマジユウもキ

ズついた。あらしいがおわらないまま、ヒルとヨルがナナカイいれかわった。イヘンがおきた。ヒトとマジユウはヒトツとなり、すべてはおわりへむかった。これが『アガリアの伝説』の一文だ。おおきなあらしいはヴリル王とコスラ王子の戦争の事だろう。これが来るべき災厄の始まりだと言っていた」

「戦争がはじまり？ だったら、問題なんてないんじゃないか？ 今どき、戦争なんてしてる国、聞いた事ねーぞ？」

アクセルの言う通り、戦争なんて世界中どこを探してもやっていない。

例えば、こんな話がある。戦争をしていた国々にギャラドスが現れ、すべてを焼き滅ぼしたという。それも、一度や二度じゃない。ギャラドスの進化前であるコイキングはどんな水でも生きられる。つまり、ギャラドスはどこにでも現れるという事だ。

それ以外にも様々な理由はあるが、重要な事は一つ。

この世界で、二度と戦争なんて起こらない。起こりようがない。

「戦争が重要なんじゃない。大きな戦が問題なんだ。たしかに、戦争は起こらない。それでも、世界中で争いは起きている。例えば、カントーではロケット団が暗躍していて大規模な抗争が頻繁に起きている。ホウエンで起きたグラードンとカイオーガの激突、カロスの事件、数え上げればキリがない程、この世界には闘争が溢れているんだ。もちろん、このアガリアでも」

「アガリアで争いを呼んでいるのはヴリル教団ですよ？ つまり、彼らを排除する事がアガリアを救う事になるのでは？ そうなると、アルトギア手記を集めるためとはいえ、シエルが教団に入り込んだのは愚策なんじゃ？ いや、それとも、内側から切り崩していく腹積もりで？」

「違うな、間違っている。たしかに、ヴリル教団は争いを引き起こしている。けれど、暗部が活性化する以前から、既に事は始まっていた」「始まっていたって……、来るべき災厄が！ もう！？」

アギトは頷いた。たしか、ヴリル王も言っていた。

『悪意か、あるいは因果か、たんなる偶然か、既に事は始まっている』

そう、既に始まっている。

コスラとの会話を思い出す。

『怒りは怒りを呼ぶ。憎しみは憎しみを呼ぶ。一度始めてしまえば、もう止まらない。オレの心がポケモン達を戦わせ、進化の蓋を開けさせた。戦って、戦って、戦って、気づけばオレの心にポケモン達の心が逆流してきていた。ポケモン達の抑えきれなくなった闘争心はオレの心をあつという間に呑み込んだ』

なんとなく、分かった気がする。

「アギト。アルトギア手記が俺に見せてくれた。ヴリル王とコスラの戦争。その最中で人はポケモンの進化の力を暴走させて、暴走したポケモンの心は人を呑み込んだ。後に残ったものは闘争心に突き動かされる……、兵器。ずっと考えていたんだけどさ、最終兵器って、それの事じゃない？　そして、来るべき災厄も」

「ああ、オレもそう思う。実際、アガリアのポケモンの闘争心が軒並み高い理由もそこにあるんだろうな。切っ掛けは分からない。だけど、確実に始まっている」

「分からない？　どう考えても、きずな現象が関係しているんだと思うんだけど？」

「アルト」

アギトは言った。

「きずな現象を使える人間はごく僅かなんだ。最近、カロスで使い手が現れたみたいだが、空白の時代から今に至るまで、欠片も目撃情報の無かったものだ」

「で、でも、俺達は使えるじゃないか！　アギトだって、ミリガンだって、ザラクだって、ナザレだって！　きずな現象ではなかったけど、エックスも応用技でZわざを使っていたよ！」

「ああ、それは……」

アギトは何かを言いかけて、やめた。

「オレから言える事は一つだ。少なくとも、ミリガンやザラクの世代より前で使えた人間は竜神教の代々の巫女だけだ」

「……そうなの？」

バレットに問いかける。

けれど、彼は首を横に振った。

「巫女様方が使えた事自体、初耳だ」

メルカトの民であるバレットが知らないとなると、なんだか怪しく感じる。だけど、アギトが嘘を言っているとも思えない。

「結局、具体的な事は何も分からないという事ですな」

やれやれとエリザは言った。

「そうなるな。シエルならば何か知っているのかも知れないが」

なんだか、肩の力が抜けてしまった。

「はいはい、そこまで！」

ミリガンが手をたたきながら言った。

「そこから先はわたし達、アガリア警察の仕事よ」

それもそうだ。気にはなっていたけど、事は俺達がどうこう出来る問題でもない。

四天王が動いている。アガリア警察や政府も対策に乗り出している。

だったら、任せておけばいい。

「シエルがいろいろと動いている事は知ってたけど、アギトくん事は知らなかったわ。シエルにはわたしの方から言っておくから、君はアルトくん達と一緒に行きなさい」

「いいのか？」

アギトはミリガンを見つめた。

「唯一の被害者であるナザレが罪を訴えていないし、なにより、あなたはまだ十歳だもの」

ミリガンはアギトの頭を優しく撫でた。

「情けないところも見せちゃったけど、これから先の旅の安全はわたしが保証する。ナザレが戻った以上、アガリアの空は再び平和を取り戻す。これで、ようやく全力で動けるようになるわ。逃げられはしたけれど、諸悪の根源の正体も掴めたし」

そう言って、ミリガンは微笑んだ。いつもと違う、操られていた時とも違う、凶暴そうな笑みだ。

「たしかに、ヴリル教団に悪意以外のなにかがある事は認める。けど、ダメ。もう、許さない」

「ミリガン?」

「あつ、ごめんね」

ミリガンは元の穏やかな表情に戻ると手を叩いた。

「そうそう、君たちのトレーナーカードを貸してくれる?」

「え? あ、うん」

俺達がそれぞれのトレーナーカードを渡すと、ミリガンは小さな機会を取り出して、その中にカードをセットした。すると、機械から出てきたカードの色が変化していた。

「はい。四天王ミリガンの名の下に、今回のメルカト解放に対する助力を評価して、あなた達をカッパーからシルバーにランクアップさせたわ。それから、これ」

ミリガンは二種類のバッジを俺達にそれぞれ渡した。

「これって、ジムバッジ!」

「ええ、メルカトジムのヴィーヴルバッジとロヴェリアジムのブリットバッジよ」

「なんで!? 俺達、ジムバトルなんてしてないよ!」

理由もなくバッジを貰うわけにはいかない。ジムバッジはトレーナーが実力をジムリーダーに認められた証だ。

「メルカトが解放された時点でクラウスの任務は解かれているの。要するに、一時的に現ジムリーダーに預けていた資格もクラウスの下に戻る。ナザレも同様ね。そもそも、ナザレはメルカトの管理者だから、行方不明になっていた期間もジムリーダーを解任される事は無かった。要するに、このメルカト奪還の際して、君達が十分な実力を持っている事を二人は認めたのよ。さすがにジムバトルを開く余裕はないから、ジムバッジの譲渡が略式になってしまう事を許して欲しいと言っていたわ。それに、どうしても納得がいかなければ別のジムに挑戦してもいいし、それぞれのジムの再開出来るようになったら正式にバトルをしてもいいそうよ」

そう言われても、納得がいかない。だけど、とりあえずケースに入

れておく事にした。

シャンティジムのボワバッジ。

リールジムのコンバットバッジ。

カルネシティのネーヴェバッジ。

メルカトジムのヴィーヴルバッジ。

ロヴェリアジムのブリットバッジ。

これで五つ。あと三つ手に入れば、リーグに挑戦出来る。その先には、ザラクが待っている。

「みんな、今回は本当におつかれさま。アガリア警察として、四天王として、そして、わたし個人として、お礼を言うわ。ありがとう」

第六話 『新たな出発』

クセルセス高原に戻ってくると、待っているはずのセラの姿がどこにもなかった。

俺はエリザ、バレット、アギトと共に旅を続けるつもりだけど、アクセルはオーヴェルに戻るらしい。一緒に旅をしたかったのに、実にワガママなヤツだ。

仕方なく、二時間ちかくお説教したにも関わらず考えを変えない頑固者を連れてセラを迎えに来たわけだ。俺達と来るか、アクセルと行くかセラには選んでもらう必要が出来た。出来れば、一緒に来て欲しい。セラが来れば、アクセルも迷うはずだ。

俺よりも後に街を出たのに、アギトと接戦を繰り広げたアクセル。実際にメルカトで戦ってみて、その力を思い知らされた。きずな現象を真つ向から打ち破ろうとする意志と、それを支えるポケモン達の底力。そして、それを可能とするトレーナーとしての技量。アクセルは間違いなく強い。俺は、もっとアクセルと一緒にいたい。

戦って、戦って、戦って、一緒に高め合いたい。

「……アルト。その眼、やめような」

「え？」

何のことだろう。首を傾げると、アクセルは顔をひきつらせた。

「さっきからちよいちよい獲物を前に舌舐めずりしてる肉食ポケモンみたいな視線向けてくんのやめろっての！」

「だ、誰が肉食ポケモンだよ!?!」

まったく、失礼なヤツだ。

「なるほど、ピツタリだな」

「アギト？」

アギトは言った。

「たしかに、アルトの気持ちは分かる。アクセルは極上だ。アルトとのバトルも最高に楽しいが、アクセルとのバトルはなにより気持ちがいい！ もう一度……いや、二度でも三度でも、それこそ精根尽き果てるまで戦いたい。そう思わせる程の男だ！ ああ、アクセル。お前

を前にしたら、どんなトレーナーも舌舐めずりをする肉食ポケモンになるだろうさ」

「一緒にするな！」

「一緒にしないで下さいー！」

アギトの言葉にバレットとエリザが怒鳴った。

うん。こうして言葉に出すと、結構気持ちが悪い。自重しよう。

「何故だ？ お前達も思うだろう？ アクセルは美味しそうだと」

「思わねーよ！」

「いい加減、きしよいですよ！」

アギトはショックを受けてしまった。ちよつとだけ共感していた事は伏せておこう。

「お前ら、面白いな」

「お前らって言うな！」

「一括りにしないで下さい！ 面白いのはアギトとアルトとバレットだけです！」

「ぎっけんなよ！ お前こそお笑い担当だろ！」

「失礼な！ わたしのどこにお笑い要素があるんですか！」

「要素だらけだろ！ このお笑い芸人！」

一瞬の内に俺達を置いてけぼりにする二人。

「お前、こいつらと一緒に疲れねーの？」

「うん。楽しいよ」

「そっか」

アクセルは笑った。

「楽しいなら、それが一番だな」

「アクセルと一緒に来てくれたら、もっと楽しいんだけどな」

「悪いな。さすがに、これ以上は師匠が可哀想だ。弟子入りした以上、あんまり放置すんのもな」

「そっかー」

「……その眼、怖いからやめような？」

なんの事だろう？ まったく、わけのわからない事を言う。

「とりあえず、セラを探そうぜ」

「うん！」

第六話『新たな出発』

「はあ!? 帰った!? 一人で!？」

アクセルが頭を抱えながら叫んだ。忙しそうに動き回っているアガリア警察の職員の一人を捕まえてセラの居所を確認したところ、捜査員の一人とシャンティシティに戻ってしまったという話を聞かされた。

まさか、挨拶もなく、俺達とも、アクセルとも一緒に行かない選択をするとは思わなかった。

「なんでだろう?」

「いやいやいやいや、当たり前じゃないですか! あなた、彼女に結構ひどい事言っていましたよ!？」

「ええ!？」

「ええ!?! じゃないですよ! あの時は一刻を争っていたし、わたしも空気読んでくれないかなーとか思っていましたけど、幼馴染なんだから彼女の気持ちを少しは理解してあげてくださいよ!」

エリザはプンポンと頬を膨らませながら言った。

「いいですか? セラは幼馴染であるあなたと一緒にいたくて、こんな場所まで来たんですよ? それなのに、あなたはミリガンやバレットを優先して、怯えている彼女を知り合いもいないクセルセス高原に残した。そりや怒りますよ。蔑ろにされたって」

「別に蔑ろにしたわけじゃないんだけど」

面倒くさいな。

「あつ! 今、面倒くさいって思ったでしょ!」

ギクツとした。

「な、なんで?」

「分かりますよ! なんだかんだ、結構付き合っても長くなつて来ましたからね! そして、わたしに分かる事を彼女が分からないはずもない! あなた、彼女に対して面倒くさいって態度が出まくってましたよ! それが最たる原因です!」

反論出来ない。

『なにしてるの!? 逃げようよ!』

『待ってよ! あの数なんだよ!? ちゃんと見てよ!』

セラはそう言って怯えていた。逃げたがっていた。

——— だったら、なんでここに来た?

このアガリアの地で旅をする以上、規模はどうあれ、こういう事態に遭遇する可能性がある事は分かっていたはずだ。そこで逃げるくらいなら、はじめから旅に出るべきじゃない。

うるさい。じゃまだ。彼女が悲鳴をあげる度、俺はそう感じていた。

「だって、仕方ないじゃないか」

俺は自分の意志で旅に出る事を決めた。寂しかったけど、それでも一人で戦い抜く事を旅立ちの時点で決めていた。

アクセルはいい。地に足をつけて、どんどん力をつけている。彼も自分の意志をしつかりと持っている。

だけど、セラは何がしたいのか分からない。別に今生の別れてわけてでもないのだから、寂しいだけならシャンティに残っていれば良かったんだ。

「アルト」

アクセルのおでこをつつかれた。

「な、なに?」

「分かってやれ、なんて言うつもりはねーよ。けどな、セラもオレ達の幼馴染で親友なんだって事だけは忘れんなよ」

「……うん。ごめん」

謝罪に心が籠もらない。なんだろう。アクセルの言っている通り、セラは大切な親友なのに、どうして?

「痛っ」

頭痛がした。視界に変な光景が映り込む。

荒れ果てた大地。俺を見つめる女性。たしか、彼女はヴリル王の仲間の人だ。

名前は、サラ。

『……ギア。そう……。……めだ……。こ……。楽……。……ね』

何かを話している。だけど、聞き取れない。

ノイズがうるさい。

「……いい、アルト！」

「うるさい！」

「なっ!?!」

「え?」

何かの傍から離れていった。意識を向けると、そこにはアクセルがいた。

「そ、そんなに怒るなよ。い、言い方がキツかったか? その、別に責めたりしてるわけじゃなくてな?」

おたおたしているアクセル。

「どうどう、落ち着きなさい。わたしもいろいろ言い過ぎました。とりあえず、ほとぼりが冷めたらポケギアで連絡を取って仲直りしましょう」

そう言うと、エリザは俺達の間割り込んできた。

「セラもアガリア警察の捜査員と一緒になら大丈夫。なら、わたし達は当初の予定通り、旅を続けましょう」

「……うん」

俺はアクセルを見た。

「またな、アルト」

「またね、アクセル」

アクセルはモンスターボールを取り出した。中から飛び出してきたポケモンはファイアローだった。

「そんじゃ、オーヴェルまで頼むぜ、ファイアロー」

「アーンツ！」

ファイアローと共に空へ昇っていく。

「それじゃあ、わたし達も行きましようか! 目指すはサレナジムのあるサレナシティです!」

エリザはフリーザーを出しながら言った。

「約束通り、最高のポフレを作ってやる。楽しみにしておいてくれ」
アギトが言った。

「ツハ、楽しみにしてやるよ」
バレットが言った。

「行こう！」

俺達はフリーザーの背中に乗った。目指すはサレナシティだ。

第七話 『VSサレナジム』

サレナシテイ。別名・学術都市とも呼ばれている。巨大な時計塔を中心に、様々な分野の学校がひしめき合っている。

俺達はアギトに案内されて、彼が宿泊している学生寮を訪れた。学生寮はこの街のいずれかの学校に通っている事を条件に格安で部屋を貸してくれるらしい。

部屋の中には甘い香りが漂っていた。大きな冷蔵ケースやポフレを作るための道具が所狭しと並んでいる。

「つて、寝る場所もないじゃないですか!」

エリザが怒鳴り声をあげた。

「よく、こんな場所で生活していられたね!」

「寝る場所くらいはあるぞ。その冷蔵ケースの横のスペースに座布団を並べてある。いつもそこで寝ているんだ」

「ハイ!?!」

たしかに、冷蔵ケースの横にはスペースがあった。だけど、幅が一メートルもない。

「狭い方が安心出来るんだ」

「いやいやいやいや、狭すぎるでしょ!?!」

「おまつ、こんなところで寝てたらおかしくなるぞ!?!」

エリザとバレットは信じられないといった表情を浮かべている。

「だけど、たしかに落ち着けそうな気もする。」

「試してみよう。」

「アルト!?!」

隙間に入ってみる。窮屈だ。だけど、不思議と安心感がある。

「こんな風に眠った事はないのに、気づけば瞼が重くなってくる。」

「待て、アルト!。そこはオレの寝床だ!。取るな!」

「つていうか、寝ないでくださいよ!。荷物だけ置いたら、まずはジムに挑戦を申し込みに行かないといけないんですから!」

「そうだ、ジム!」

慌てて起きたら頭を打った。やっぱり、ここは狭すぎる。

「だから言ったじゃないですか……」

呆れたようにエリザが言った。

「大丈夫か？ ほら、さっさと行くぞ」

「う、うん」

バレットの手を借りて、アギトの寝床を出る。アギトはちよつと不服そうだ。

「起き方がなっていない。いいか？ 起きる時は頭の方の壁に手を伸ばして、ぐつと体を伸ばすんだ。そして、そのまま足の方からスライド式に出るんだ」

「アギト！ 敵の時はクールで恐ろしい癖に仲間になった途端、どんどん面白キヤラになっていくのやめてくださいよ！ どう接していいか分からなくなるじゃないですか！」

「馬鹿な、オレが面白キヤラだと？ ……悪くないな」

アギトはフツと微笑みながら「面白キヤラ、素晴らしい」と呟いている。ほんとに面白い人だな。

「とりあえず、行こっか」

第七話『VSサレナジム』

サレナジムはシテイの中心部にあった。というか、中心部に聳え立つ時計塔こそがサレナジムだった。巨大な扉を潜ると、あちこちで歯車が回っている。

「サレナジムはカラクリが凝っているんだ。実に楽しかったぞ」

「どうやら、アギトは既にバツジをゲットしているらしい。」

「受付はあつちですね」

ジム内は本当に奇妙だった。縦に広大な広場を空飛ぶ歯車が飛び交っている。アギトはカラクリと言っていたけれど、どんなカラクリで歯車を飛ばしているのかサツパリ分からない。エスパーパーケモンが飛ばしているのかと思つて辺りを見回しても、それらしきポケモンの影は見えなかった。

「おっかなびつくり歯車を乗り継いで、俺達は受付へ辿り着いた。」

「ようこそ、サレナジムへ。本日はどういったご用件でしょうか？」

「なんというか、なにからなにまでコレまでのジムとは違っている。」

対応が事務的かつ効率的で、受付はあっという間に終わってしまった。

サレナジムに挑むためには条件が二種類ある。一つはシティ内にあるいずれかの学校に通っている事。その条件を満たしている場合、その学校の教師に認可を得る事で都合の良い日にバトルを申し込む事が出来る。

そして、もう一種類の条件は時計塔の最上階まで自力で上がる事。

「挑戦開始は明朝十時からになります。リタイアした場合、再挑戦は最速で一ヶ月後となりますので気をつけて下さい。それでは、こちらが外来挑戦者用のIDとなります。こちらを紛失した場合、ペナルティーとして挑戦権の失効、ならびに再挑戦までの期間が半年に延長されます」

IDを受け取ったのは俺とバレットだけ。俺は十時のスタートで、バレットは十二時だ。

サレナジムは祝日や週末になると内部挑戦者で埋まってしまい、外来の挑戦は殆ど不可能らしい。俺達は運が良かった。今はこの学校も週で一番忙しい曜日だ。

サレナジムのジムリーダーはノエル。かつて、ザラクがリーグに挑戦した時、初戦で戦った相手。ザラクには負けたけれど、翌年のリーグでは他を圧倒して優勝した実力者。

ずっと戦ってみたいと思っていた人だ。

俺はザラクと戦いたい。だけど、今のままだとバトルにならない。

竜神教の神殿で、俺がミリガンとバトルしている間、彼はヴェルトーゼとバトルしていた。そして、バトルを終えた彼はヴェルトーゼを雑魚と評した。要するに、幻のポケモンであるダークライを圧倒したのだ。

強くなればなるほど、ザラクが如何に規格外なのかが分かってくる。

彼にとって、諸悪の根源であるヴェルトーゼすら塵芥に等しい。

そこまでの高みに登る為には、もつともつとバトルしないといけない。

◆
翌日、俺は十時五分前にサレナジムの受付へやって来た。受付の案内に従って、近くの歯車に設置されているコンソールへ外来挑戦者用IDを通した。すると、歯車はゆっくりと動き出して、縦長の空間を昇っていく。

止まった先にはジムトレーナーが待っていた。

「ようこそ、チャレンジャー。私はマイヤー。ルールは聞いてるね？」
「はい！ バトルは1対1！ 一度でも負ければ挑戦失敗！ 分かっています！」

「よろしい。では、いきなさい、ガオガエン！」

「ガオオオオオッ！」

ガオガエン。アローラ地方の初心者用ポケモンであるニャビーの最終進化形態。ほのおとあくの二重タイプを持つヒールポケモン。

「いくぞ、スピアー！」

「スピイイイッ！」

モンスターボールから飛び出したスピアーはガオガエンにニードルを向ける。

「スピアー。ガオガエンに対して？ もしや、むしタイプのエキスパートですか？」

「違うよ。みずタイプも、かくとうタイプもいる」

「……そうですか。では、まいます」

マイヤーの目つきが変わった。

「ガオガエン！ フレア——」

遅い！

「ダブルニードル！」

舐めているのか、苛立っているのか、いきなり大技を繰り出そうとして来たけれど、モーションが遅すぎる。

炎を体に纏わり付けさせ、走り出そうとするガオガエンの急所をスピアーは連続で貫いた。

「スピッ」

勝負は決した。

「次に行くよ」

「スピ」

弱すぎる。だけど、一人目なら、こんなものだろう。

「え？ 終わり？ むしタイプのポケモンにガオガエンが……？」

後ろで何か言ってるけど、どうでもいい。

再び浮遊して移動する歯車に乗る。移動した先には新たなジムトレーナーが待っていた。

「お、お見事です。ですが……、チャレンジはまだ始まったばかりです。行きますよ、エルレイド！」

飛び出してきたのはエルレイド。

これがサレナジムの特徴だ。シャンティジムはくさタイプ、リールジムはかくとうタイプ、カルネジムはこおりタイプというように、基本的にジムは特定のタイプのエキスパートが集まっている。けれど、ここは違う。

ジムリーダーのノエルが掲げる思想は『変幻自在』。そんな彼女がリーグで共に戦ったポケモン達は、メタモン、ダブル、ゲッコウガ。まさに、彼女のバトルスタイルを象徴するポケモン達だ。

そんな彼女の下に集うジムトレーナー達はエキスパートを持たないトレーナーばかり。

基本的に、強いのは特定のタイプのエキスパートだ。何故なら、その方が極めやすいからだ。一つのタイプに絞り、そのタイプの弱点の対策を練り上げ、そのタイプの強みを極限まで引き出す。更にタイプごとの環境を用意する必要もなく、わざマシンの種類も限定する事が出来る。

逆にエキスパートを持たないトレーナーは対策を練らずともタイプの組み合わせ次第で弱点を補い合う事が出来る。けれど、みずタイプとほのおタイプのように生息域や生態がまったく異なるポケモンを同時に鍛えるとなると困難を究める。

そして、なによりも戦術の幅が広がりすぎる。選択肢の多さが強さと直結しない。使いこなせなければ宝の持ち腐れだ。四天王のミリガンですら、剣というタイプとは異なるものの、こだわりを持っている

る。

だからこそ、特定のエキスパートを持たないまま頂点に立つザラクや、リーグ優勝を果たしたノエルは常軌を逸している。

そして、そんなノエルの下に集うトレーナー達が弱いはずがない。そう、期待していた。

「つまらない」

指示が遅い。反応が遅い。何もかもが遅すぎる。二人目、三人目、四人目、五人目、どのトレーナーも戦いにすらならなかった。

そして、スパイアだけで最後のジムトレーナーを倒した俺は歯車に乗って時計塔の最上部に到達した。

「……十五分三十二秒。ほぼ、歯車での移動時間だね」

ノエルはミリガンよりも若かった。

「見ていたよ、挑戦者。君に手加減は要らないね。その実力、もう既に……」

ノエルの眼は今までのどのジムリーダーとも違った。

「アルトくん。君の事、実は知ってるんだ」

「え？」

「ゼノンから聞いてた」

ゼノン。それはザラクの前のアガリア・チャンピオンの名前だ。

現在はアギトが通っているポフレスクールを経営していると聞いている。

歴代最高のチャンピオンと謳われた人だ。

「チャンピオンがゲツコウガを貸し与えた子。あの男が狩るのではなく、育てる事を選んだトレーナー。その実力……、真髄を見せてもらう！」

ノエルがモンスターボールを構える。

ルールは三対三の入れ替え戦。ただし、交換はチャンジャーのみ。「いくぞ」

スパイアは相手を瞬殺しているといっても連戦を終えたばかり。だから、ここは！

「キテルグマー！」

「キイイイッ！」

飛び出したキテルグマは既に臨戦態勢だ。

「キテルグマ。アローラに生息する強力なポケモン。相手にとって、不足はない！ いけ、ダブル！」

「ブルッ！」

一番手はドーブルだ。スケッチという技であらゆるポケモンの技をコピーする特殊なポケモン。どんな技をスケッチしているのかは戦ってみないと分からない。

ノエルは審判席に視線を向ける。そこには厳しい顔をした女性が立っていた。

「これより、ジムリーダー・ノエルと、チャレンジャー・アルトのジムバトルを開始します！ バトル・スタート！」

第八話 『VSノエル』

第八話 『VSノエル』

「キテルグマ、アームハンマー！」

「キイイイッ！」

バトル開始の合図と共にキテルグマが走り始める。スピアーと比べれば鈍足だけど、それでも十分に速い。並のトレーナーが相手なら、何もさせないまま仕留められる。

「ブルッ！」

だけど、相手は並じゃない。ノエルのドーブルはキテルグマを敢えて引きつけた。そして、アームハンマーが命中する寸前に最小の動きで回避してみせた。

技が来る。だけど、この流れは想定の内だ。

「そのまま大地を砕け！」

「キイイイッ！」

アームハンマーの威力を落とさず、そのままフィールドを殴りつける。その衝撃はフィールド全体に及び、砕けたフィールドの破片が周囲に撒き散らされた。

じしんやじわれのように技として成立しているものじゃない。だから、この程度でジムリーダーのポケモンにダメージなんて与えられない。

それでも、技の発動は止まる。

「そこだ、ばかちから！」

「キイイイイッ！」

崩れた体勢でも、この技なら関係ない。

「ドーブル、カウンター！」

「ブルッ！」

カウンター。敵の攻撃を倍返しにするかくとうタイプの技だ。

あらゆる技をコピー出来るスケッチ。それこそ、他のポケモンでは実現不可能な理論上のみ存在する技と技のコンボすら可能とする技。究極奥義のブラストバーンとハードプラント、ハイドロカノン、

ボルテツカーだって同時に覚える事だって出来る。じしんで動きを止めたところでハードプラントで拘束、そこからキノコのほうしや催眠術を使い、ゆめくいやあくむで仕留めるコンボだって考えられる。なんでもありがドーブルの持ち味だ。無限にも等しい選択肢。その中からカウンターを選ぶなんて思わなかった。

「いたみわけ！」

「キイイイッ！」

「ブルッ!？」

だけど、ピンチはチャンスだ。ばかちからをカウンターで返されながらも、キテルグマはいたみわけでイーブンに持ち込んだ。

「いくぞ、キテルグマ！」

「キイイイイッ！」

キテルグマが走り出す。

「ドーブル、しんそく！」

速い。だけど、視えてる！

「キテルグマ！」

「クマッ！」

攻撃を紙一重で回避する。

「ブルッ!？」

「ここだ！」

「アームハンマー！」

「キイイイッ！」

「キングシールド！」

「ブルッ！」

アームハンマーがドーブルを捉えた。けれど、ギルガルドの専用技であるはずのキングシールドで防がれた。

「今だ！ インファイト！」

「ブルウウウッ！」

ここぞとばかりにドーブルがインファイトを仕掛けてきた。これで決める気だ。

「キテルグマを舐めるな！」

インファイトは守りを捨てて相手の懐に踏み込む攻撃。だからこそ、これ以上ない隙が出来る。

「はかいこうせん!」

「キイイイイツ!」

「ドブルウツ!」

至近距離からはかいこうせんを浴びたドーブルはそのままフィールドの外へ吹き飛ばされ、壁に激突した。

「ドーブル、戦闘不能!」

ノエルはドーブルをモンスターボールに戻しながら無言で睨んでいる。

「忌々しい眼だね」

ノエルは言った。

「私の事を次に行くための踏み台としか思っていない。あの時のザラクと同じ顔だ」

不思議な事を言う人だ。

「ジムって、そういうものでしょ? もつと見せてよ! 『変幻自在』のノエルの力!」

この人は強い。この人に勝てば、もつと強くなれる。

「君の事、嫌いだ! ゲッコウガ!」

「コウガッ!」

ゲッコウガ。俺がザラクから借りているポケモンの同族。相手にとって不足はない。

「戻って、キテルグマ」

「クマー」

モンスターボールにキテルグマを戻す。

「いくよ、ギルガルド!」

「ギルッ!」

ギルガルドが正式な手持ちになって初めてのバトルだ。

震えそうになる。ヴェゼール・ヴィレッジがヴリル教団に襲われた日、俺を助けてくれたミリガンのエースポケモン。そのギルガルドと共に戦える事を改めて実感している。

「つじぎり！」

「せいなるつるぎ！」

フィールドの中央で刃同士がぶつかり合う。甲高い音が鳴り響き、その直後、息をつかせぬ攻防が始まった。

「ゲツコウガ！」

「コウガアアアッ！」

ゲツコウガの攻撃のテンポが早くなった。だけど、見きれない速度じゃない。

「ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドも剣速を上げる。剣閃が二重三重にも見える程の高速連撃。

「コツ、コウガツ!?!」

ゲツコウガのつじぎりに使う刃はあくタイプのエネルギーを固めたものだ。太古の剣が命を持ったギルガルドの刃と比べれば、圧倒的に軽い。それでも、ザラクが彼のゲツコウガを使えば技で圧倒してくるだろう。

「ギルガルド！ かげうち！」

「ギルツ！」

「飛んで、ゲツコウガ！」

力で圧倒するだけじゃダメだ。

影からの攻撃を飛んで躲したゲツコウガにギルガルドが刃を向ける。

「みずしゆりけん！」

「コウガツ！」

跳び上がったまま正確無比なみずしゆりけんを放つゲツコウガ。だけど、守勢に回る必要はない。

「せいなるつるぎ！」

一直線にゲツコウガへ突き進む。みずしゆりけんを貫き、ゲツコウガの急所を貫く。

「ゲツコウガ、戦闘不能！」

「ゲッコウガ……」

やっぱり、ギルガルドはすごい。俺のやりたい事を完璧に実現してくれる。それに、反応がとにかく早い。俺が指示を出すと、その瞬間には行動に移っている。まるで、自分の手足で戦っているような気分だ。

「いつて、ペラップ！」

「ハイハイ！ ペラップ、サンジヨー！」

いきなり人の言葉を喋り始めるペラップ。だけど、油断は出来ない。あのポケモンには専用の技がある。

「戻れ、ギルガルド！ 頼むぞ、スピアー！」

相手は最後のポケモンだ。ゲッコウガを二番手にしたということ、は、こつちがノエルの最強。だけど、スピアーなら相手が誰でも必ず勝つ！

「スピイイイッ！」

スピアーもやる気十分だ。

「ペラップ！ おしやべり！」

「ヤッハー！ ネエネエ、キミサー……」

「ドリルライナー！」

「スピイイイッ！」

おしやべりはペラップの専用技だ。覚えた言葉を音波として放ち、相手を確実にこんらん状態へ落とし込む厄介な技。だからこそ、速攻で叩く。

「ペラップ、飛んで！」

「ハイハイ！」

間一髪のところ、ペラップはドリルライナーを躲した。だけど、もう終わりだ。

「ミサイルばり！」

「スピイイイッ！」

放たれた五つのミサイルばりがペラップに襲いかかる。

「ふん！ そんな攻撃、当たらないよ！」

ペラップは翼を羽ばたかせ、ミサイルばりの射線上から逃れる。

「いや、当てる」

三つのミサイルばりの軌道を変える。

かつて、クレルモア大平原で見たスピアーがやっていた事。あのスピアーに出来て、俺のスピアーに出来ないはずがない。

「くっ……、ばくおんぱー!」

そうだ。追尾してくる以上、撃ち落とすしか無い。そして、その為には範囲攻撃を使うしか無い。ばくおんぱは強力な技だけど、発動直後はどうしたって隙が出来る。

「終わりだ」

軌道を変えなかった二発のミサイルばりを反転させる。

「うそっ?! エスパークタイプでもないのに!?!」

背後を取った。

「舐めるな! ペラップ、はがねのつばさで打ち落として!」

さすがはジムリーダーの切り札だ。切り替えがはやい。もう、ミサイルばりの迎撃体勢に入っている。

「でも、言ったよね? 終わりだって」

「スピ」

ミサイルばりに意識を集中したペラップの背中をスピアーがとつた。

「なっ?! ミサイルばりを制御しながら接近した!?!」

「それくらい出来なきゃ、ザラクには勝てないよ。ダブルニードル!」

「スピッ! スピイイイッ!」

ペラップの無防備な背中にダブルニードルが突き刺さる。そこへ、更にミサイルばりが命中した。

「ペラップ!」

ペラップが地面に落下した。

「ペラップ、戦闘不能! よって、勝者はチャレンジャー・アルト!」

勝った。これで、また一步ザラクに近づけた。

「ジムリーダー。こちらを」

審判をしていた人が小箱をノエルに渡した。青ざめながら、歯を食いしばるようにして受け取ると、彼女は俺の方にやって来た。

「……サレナジムに勝利した証、アカデミックバッジよ」

押し付けるように渡すと、そのままノエルは背中を向けた。

「クソガキ」

酷い言われようだ。

「失礼しました」

審判の人が謝ってきた。

「彼女は実力を買われ、このジムのジムリーダーに任命されましたが、まだまだ未熟なもので」

「ふーん」

どうでもいい。

「ありがとうございました」

ジムバッジをバッジケースにしまい込む。

これで、六つ。リーグまで、あと二つ。

もっと、もっともっと強くならないと。

第九話 『激戦、ヴェゼール・ヴィレッジ』

「帰ってない!? どういう事だよ、親父!」

『だから、言ってるんだろ! セラは帰ってきていない! それどころか、セラに同行しているっていう捜査員とも連絡がつかねえ!』

「お、おい、待てよ! それ、まさか、行方不明になったって事か!」
居ても立ってもいられなくなった。

「し、師匠!」

探しに行かないやいけない。シャンティを出る時、セラのじいちゃんやんがセラに言っていた言葉を思い出す。

『アクセルなら、かならずお前を守ってくれる。お前に預けたポケモン達は十分に強いが、まっさきに頼るべきが誰かを忘れるんじゃないぞ』

任せてもらった。信じてもらった。それなのに、オレはセラを一人にした。

あの日、エズの森に行かなければ、セラも追いかけてこなかった。散り散りになって、メルカトで集合するなんていう事態にもならなかった。

オレはバカだ。優先するべきものを間違えた。強くなりたいと思った理由を忘れていた。

「オレ、ただ、アルトとセラを守れるようになりたかっただけなんだ……」

ヴェゼール・ヴィレッジをヴリル教団が襲撃して来た日、アルトは死にかけた。

手の届かない場所にいたわけじゃない。それなのに、オレはなににも出来なかった。

また、同じ事が起きるかも知れない。そう考えると、怖かった。

「師匠!」

仕事中は邪魔をしない約束だった。だけど、頼れる相手が他にいなかった。

この人なら力になってくれる。この人なら何とかしてくれる。そ

う思える相手はこの人だけだ。

「アクセル？ どうした？」

師匠は怒らなかつた。持っていた資料をシャシャに預けると、事情を聞いてくれた。

それからの動きは早かつた。すぐに他のジムリーダーと連絡を取って、情報を集めてくれた。

「大丈夫だ、アクセル。必ず見つかるさ」

そう言つて、励ましてくれた。

そして、セラを見たという情報が届いた。送り主はリール・シティのジムリーダー・ルーラーだ。テレビ電話越しに彼女は教えてくれた。

各シティには二年前から空の監視を行う施設の設置が義務付けられている。その監視員がリール上空を横切るギャラドスを見たという。その背中にはトレーナーらしき男と小さな女の子が乗っていた。監視カメラの映像から、その女の子の特徴がセラと合致したらしい。

「そ、それで、セラはどこに向かつて行つたんだ!？」

オレはセラの行方を一刻もはやく知りたかつた。

『……ヴェゼール・ヴィレッジだ』

そう、ルーラーは言つた。

第九話『激戦、ヴェゼール・ヴィレッジ』

「これは、どういう事？」

ミリガンは目の前の光景に絶句していた。セラの失踪の件をヴァイクから聞き、ルーラーの情報を下にヴェゼール・ヴィレッジへ向かつた彼女の前に広がっていたのは想像とはかけ離れた光景だった。

ヴリル教団襲撃事件の後、ヴェゼール・ヴィレッジはアガリア政府の管轄の下で復興作業が行われている筈だった。住民のシャンティ・シティへの移動も一時的な措置であり、住居の再建が完了したら戻ってくる手筈になっている。エルフランが受け入れを認めたのも期限付きだからこそだ。

それなのに、目の前には再建された村ではなく、巨大な要塞が立ち

はだかつていた。

「なんで、こんな事に……」

再建計画は他ならぬアルトの父親が主導で行っていた筈だ。

ミリガンは彼に連絡を撮ろうとポケギアのアプリケーションを起動した。

その時だった。

「ギャオオオオオオッー！」

激しい光と音が視界を埋め尽くした。はかいこうせんだ。

ミリガンは間一髪のところではかいこうせんを躲すと、ハッサムをくり出した。

「ハッサムー！」

ハッサムがモンスターボールから飛び出すと同時に空からギャラドスが降りて来た。背中からトレーナーが飛び降りてくる。顔を隠しているが、その装束には見覚えがあった。

「ヴリル教団！ この要塞を築いたのはお前達か!？」

「そうだよ、ミリガン。このヴェゼール要塞は我らヴリル教団が築いたものさ」

その言葉と共に、音もなく無数の団員達がミリガンを取り囲んだ。

ポケモンのテレポートだ。

「わたしと戦う気？」

「ハッサ」

ハッサムが笑う。クセルセス高原ではフーパに遅れを取ったが、それはアルトを庇った為だ。

ここに居るのは彼女以外のすべてが敵！

「わたしは四天王。数だけ揃えれば勝てる程、甘くはない！」

ヴリル教団の団員達が一斉にモンスターボールを構えた。けれど、その指が開閉装置に触れる前にハッサムが動いた。

目では追い切れない程のスピード。団員達の意識は為す術無く刈り取られていく。一部の団員がモンスターボールの解放に成功しても、飛び出したポケモンは雄叫びを上げる間もなく沈黙する。

「ギャラドスー！ あのハッサムをとめろ！」

「無理だよ。その子はもう、戦えない」

ギャラドスに命令を下したトレーナーにミリガンは冷たく言った。崩れ落ちるギャラドス。団員達の意識を刈り取る前に、すでにハッサムの攻撃はギャラドスの急所を打ち抜いていた。その事にギャラドスのトレーナーが気づけない程のスピードで。

「ハッサー！」

ハッサムがミリガンの前に戻る。離れていた時間はわずか数秒。けれど、すでに立っている者はミリガン一人。ギャラドスのトレーナーもすでに地に伏していた。

「いくよ、ハッサム。この先に、わたしに見られたくないものがあるみたいだから」

「ハッサー！」

ミリガンはエアームドをくり出した。その背中に飛び乗ると、要塞に向かって飛び立っていく。

すると、けたたましいサイレンの音が鳴り響いた。赤いランプがそこかしこで点灯を始め、要塞中の扉が開く。そこから次々に団員達が姿を現した。彼らは既にポケモンをモンスターボールから出して、技の発動態勢を整えている。

放たれる無数のわざ。

はかいこうせん、あくのはどう、ハイドロカノン、ばくおんぱ、かみなり、れいとうビーム、トライアタック、オーバーヒート、ラスタカノン、りゆうせいぐん。

鍛え抜かれたポケモン達の必殺のわざが一齐に襲い掛かってくる。計算されているのだろう、360度どこにも回避出来る隙間はない。

「いくよ、ハッサム！ シザークロス！」

「ハッサーッ！」

どれもが並のポケモンを一撃で戦闘不能にする程の威力。けれど、ハッサムに怖れは微塵もなく、むしタイプのエネルギーが宿る両腕のハサミを交差させ、自ら技に飛び込んでいく。

「いくよ、エアームド！」

「ムアー！」

わざの壁にハッサムのシザークロスが激突する。

「ハッサッ！」

その瞬間、ハッサムはクロスさせていた両腕を一気に開いた。

斬撃が走る。わざの壁に穴を空け、更には、その向こう側のポケモン達をなぎ倒していく。

わざの包囲網を抜けると、ハッサムは次々にポケモン達を沈黙させていく。

数が増えたところで、やる事はなにも変わらない。団員達のポケモンは対抗する間もなかった。それほどまでにハッサムは速すぎる。

すべての団員達が地面に横たわった頃、一人の女性が開いていた扉の一つから姿を現した。

「さすがね、ミリガン」

白い髪が風で靡いている。ミリガンは僅かに表情を和らげながらも、困惑した様子で彼女を見つめた。

「シエル？」

教団に潜入している彼女が教団の施設にいる事自体は不思議でもなんでもない。

けれど、この状況で姿を現す理由が分からなかった。

「わたしと戦う気？」

「そうよ」

シエルがヴリル教団に潜入している事をミリガンが知っている事は絶対に明かしてはならない秘密だ。それなのに、これではミリガンが『シエルがヴリル教団の団員』だと知る事になってしまう。それでは行動に制限が出来てしまう筈だ。

ミリガンはシエルの思考を読み取る事が出来なかった。けれど、この状況で取る事の出来る選択肢は一つしかない。

「シエル。あなたを倒す！」

「悪いけど、倒れるのはあなたよ、ミリガン」

第十話 『潜入、ヴェゼール要塞』

四天王・シエル。

彼女はアガリア王家の末裔であり、アガリアでも屈指のトレーナーである。

雪のような銀色の髪を靡かせ、紫電の宿る眼光をミリガンに向け、彼女はハイパーボールを手に取る。

「いくわよ、マニユーラ！」

「マニユット！」

マニユーラ。あくところおりの二重タイプを持つ、かぎづめポケモン。

「ハッサム、おねがい！」

「ハッサ！」

ハッサムとマニユーラが向かい合う。

シエルはこれまでの鎧袖一触で倒してきた団員達とは違う。四天王は実力がすべて。チャンピオンリーグで結果を残せなければ、その地位は容易く失われる。

実のところ、ミリガンはシエルとバトルを行った事がない。チャンピオンリーグでも、前回はミリガンがザラクに破れた事で対戦が組まれる事はなかった。

けれど、ミリガンには確信がある。

シエルは強い。

「ハッサム、バレットパンチ！」

ハッサムの体がかき消える。

けれど、マニユーラの視線はその見えない筈のスピードを捉えていた。

「ニユラット！」

弾丸の如きハッサムのバレットパンチをマニユーラはつじぎりで受け止めた。

衝撃が走り、大地が割れる。互いに最上級レベルのポケモン同士。一撃一撃が大気を震わせ、その衝撃波は烈風を巻き起こす。

「ハッサムー！」

「マニニューラー！」

ミリガンとシエルは共に自らのポケモンの名を叫ぶ。それだけで全ての意志がポケモンへ伝わった。

バレットパンチからシザークロスへ切り替えるハッサム。対して、マニニューラーは切り替えの隙についてハッサムの懐に踏み込んだ。

ハッサムとマニニューラーの視線が交差する。

ハッサムのシザークロスが発動する。

「ニニューラー」

その攻撃をマニニューラーは利用した。

「ハサツ!？」

ハッサムには何が起きたのか、瞬時に理解する事が出来なかった。

これがイカサマ。相手のこうげきを利用するあくタイプのわざ。

マニニューラーの瞳が輝く。れいとうパンチがハッサムの急所に直撃した。

全身に広がっていくこおりタイプのエネルギーにハッサムが動揺する。

「ハッサムー！ バレットパンチー！」

けれど、ミリガンの声でハッサムは冷静さを取り戻す。

全身を這い回るこおりエネルギーを振り切り、マニニューラーにバレットパンチを繰り出す。

「ニニューラー」

マニニューラーは笑う。既に、この攻防の主導権はマニニューラーが握っている。

音速を超えるハッサムの攻撃をマニニューラーは紙一重で回避すると、ハッサムの急所にカウンターを叩き込んだ。

「ハサツ!？」

意識が飛びそうになり、ハッサムは必死にこらえる。

あと一撃。それで己は沈む。そう確信出来る程のダメージ。それでも、ハッサムの瞳から闘争心は消え去らない。むしろ、炎のように燃え盛る。

「ハッサー！」

ハッサムはシザークロスを発動した。

「ニユーラ」

マニユーラは小馬鹿にするように笑いながらイカサマの態勢に入る。

けれど、その表情は次の瞬間に凍りついた。向かってくるシザークロスの威力が先刻のシザークロスよりも威力が増強されている。

攻撃力を引き上げるわざも、アイテムも使っていない筈。

「マニユーラー！」

シエルが叫ぶが、マニユーラの心に宿った動揺の波はイカサマの発動を一呼吸分遅らせてしまった。それは、ハッサムに大きな隙を晒す行為。

「ツサム！」

シザークロスが急所に直撃した。マニユーラに対して、むしタイプのはわざは効果がばつぐんだ。

「ニユ、ニユーラー！」

しかし、マニユーラはこらえた。

両者、共に限界ギリギリ。けれど、余裕があるのはマニユーラの方。イカサマに、カウンター。冷静さを取り戻せば、マニユーラに死角

はない。

「ハッサー！」

ハッサムの闘争心は衰えない。意識を研ぎ澄まし、シザークロスの態勢に入る。

レベル100。それは個体としての成長限界を示すもの。一時的なものならば限界を超える事は可能だが、恒常的にそれ以上の力を引き出す事は肉体の崩壊をもたらしてしまう。それ故に、レベル100同士の戦いに、成長という不確定要素は介在しない。

既に持っている技術のぶつかり合い。それこそが超級を超える最上級ポケモンのバトル。

「ハッサー！」

だからこそ、ハッサムは負けられない。ここで負ければ、それは技

術で負けた事になる。

ミリガンのポケモン達はミリガンの持つ剣術を仕込まれている。彼女が極めた技術を学びながら、その技術を持たない相手に負けるなど、あつてはならない。

それは、ハッサムのミリガンのポケモンとしてのプライドだった。

「ニユーラ」

マニユーラは笑う。それはハッサムの心の内を見抜いていたからだ。

主の為に勝ちたい。その思いに共感し、その思いに吞まれている様を嘲笑している。

勝ちたいと思うなら、尚の事、冷静さを保たなければならぬ。今のハッサムは隙だらけだった。

「ニユーラッ！」

先に動いたのはマニユーラだった。隙だらけの体につきぎりを放つ。

勝った。そう、マニユーラは確信した。

けれど、それにしても感触がおかしい。その事に気づいた時、マニユーラはハツと表情を歪めた。

「ッサム！」

つきぎりが命中したのはがら空きの胴体ではなく、むしろエネルギーが充填されたハッサムの両腕だった。

シザークロスが発動する。

「ニユッ……、ラー……」

マニユーラは驚愕と共に意識を失った。

「その子の集中力を見誤ったわね」

ハッサムに肉薄されながら、シエルは微笑んだ。

「理由は後で聞く。今は眠っていて、シエル」

二体目は出させない。ハッサムはシエルの意識を刈り取った。

「ご苦労さま、ハッサム。一度モンスターボールに戻っていて」

ハッサムにかいふくのくすりを使い、ミリガンはハッサムをモンスターボールに戻した。

代わりにグソクムシャをくり出し、目の前の要塞を睨みつける。

第十話『潜入、ヴェゼール要塞』

「いくよ、グソクムシャ」

「グシャッ！」

グソクムシャが走り出す。団員達が現れた出入り口は既にふさがっているが、関係ない。

「ドリルライナー！」

「グツシャー！」

ドリルのように螺旋回転しながらグソクムシャが近くの壁に向かっていく。鋼鉄に特殊なコーティングが施された壁が接触と同時に弾け飛んだ。

サイレンの音が鳴り響き、視界は真紅の光に染まっている。

「四天王・ミリガン！　ここから先は通さん！」

通路の先から一人の男が現れた。見覚えがある。たしか、幹部の一人だ。

「押し通る！」

幹部の男のガオガエンが襲い掛かってくる。だが、シエルのマニューラに比べたら、あまりにも遅すぎる。

「グシャッ！」

であいがしらの一撃がガオガエンの急所を抉る。エースポケモンだったのだろう。ガオガエンが一撃で戦闘不能になった事に男は動揺している。

「おやすみ」

グソクムシャが男の意識を刈り取った。

ミリガンは彼が現れた方へ通路を進んでいく。すると、次々に団員達が襲い掛かってきた。

外にいた団員の数は百を超えていた。それにも関わらず、倒してもキリがない程、敵は無尽蔵に湧いてくる。

ミリガンは常々疑問をいだいていた。何故、ヴリル教団はこれほどの数の団員を動員する事が出来るのか？　その疑問の答えは未だに出していない。

「グソクムシヤ、大丈夫？」

「グシャツ！」

ダメージこそ一切受けていないが、さすがに連戦に次ぐ連戦はグソクムシヤの体力を削っている筈だ。そう判断したミリガンはグソクムシヤとキリキザンを交代させた。

「キザン！」

交代した直後、新たな敵が現れた。

「シユナツ！」

ガオガエンと同じく、アローラ地方の初心者用ポケモンの最終進化形態、シユナイパーだ。

「シユナイパー、リーフストームだ！」

「ジュナツ！」

「キリキザン、リーフストームを斬りなさい！」

「キツザン！」

矢のように撃ち出されたシユナイパーのリーフストームをキリキザンはつじぎりで引き裂いた。

「リーフブレード！」

「ジュナ！」

トレーナーの姿は見えない。けれど、その声には聞き覚えがあった。

「ヴェルトーゼ！」

ミリガンは怒りと共にその名を叫んだ。

「キツザン！」

主の怒りに呼応するように発動したキリキザンのハサミギロチン。

一撃必殺！

シユナイパーは崩れ落ちた。

「やれやれ、強いな。強過ぎる。まったく……、同じ四天王をぶつけても殆ど足止めにならんとは！ 実に素晴らしい！」

通路の先の影から赤い光が伸びて、シユナイパーの姿が消えた。モンスターボールへ戻されたのだ。

ゆっくりと足音が近づいてくる。

「ヴェルトーゼ。この要塞はなんなの!？」

現れた男、ヴェルトーゼは楽しげに笑った。

「素晴らしい出来だろう、このヴェゼール要塞は！ 実のところ、完成したばかりなのだよ」

「ここはヴェゼール・ヴィレッツよ！ アガリア政府が復興作業を行っていた筈！ それなのに、どうしてヴリル教団が要塞を築いているの!？ 答えなさい!！」

「おや？ おやおや？ 分からないのかい？ 至極単純な話だぞ？」

「何が言いたいのか……?！」

ミリガンが更に鋭く睨みつけると、ヴェルトーゼは言った。

「アガリア政府直轄の地にヴリル教団の築いた要塞があるんだ。そして、君はアガリア警察の筆頭なのに、政府から何も聞かされていない。要するに、だ」

ヴェルトーゼは微笑んだ。

「政府は我々の味方なのだよ、ミリガン。もう、ずいぶん前からね」
「……は?！」

ヴェルトーゼの言い放った言葉にミリガンは言葉を無くした。

「キザッ!！」

キリキザンの声にハツとした表情を浮かべ、ミリガンは叫ぶ。

「そんな馬鹿な事があるか！ 政府はヴリル教団を危険視している！

そもそも、政府組織が宗教団体と手を組むなどあり得るものか!！」

「はっはー！ 逆なんだなー、これが!！」

ヴェルトーゼは事実を楽しそうに言った。

「政府が宗教団体と手を組んだのではない。政府が宗教団体を作ったのだよ！ もっとも、既にあるモノに手を加えただけだがね！ 君が外で戦った敵はどれほどいた？ 中で戦った敵はどれほどいた？

これまで捕まえてきたもの達の数はどれほどだ？ これほどの大人数をたかだか一介の宗教組織に集められるものか！ そうだろうか？

要するに、彼らは政府の人間なのだよ！ 政府が表立っては行えない事を代行する組織。それこそが『ヴリル教団』の真実さ!！」

「なっ!？」

ありえない。ミリガンはそう断じようとして、出来なかった。

たしかに、政府が裏で糸を引いているのなら、ヴリル教団の規格外な団員数にも説明がついてしまう。それに、政府直轄の地で彼らが好き勝手な振る舞いを出来てしまっている理由にもなる。

「さてさてさーて、四天王・ミリガン。どうして、おれがこんなに丁寧に裏事情を説明してあげたか、分かるかい？」

「なに!？」

いきなり、周囲の壁に亀裂が走った。

「キザン！」

キリキザンがミリガンを庇う為に動く。

そして、壁が崩れると共に左右から同時にグレイシアとパルシエンのれいとうビームが放たれた。

「キリキザン！」

「キザッ！」

直撃を受ける寸前、キリキザンを地面を斬り裂いた。床と共に落下していくミリガンとキリキザン。その姿にヴェルトーゼは微笑む。

「そうだ。上では間に合わない。だから、下に行く。だから、そこに罠を仕掛けさせてもらったよ」

落下した先にはダークホールを発動したダークライが待ち受けていた。

ミリガンは瞬時に回避不能である事を理解した。そして、キリキザンに命じる。

「シザークロス！」

「キザン！」

息を呑む音が響く。ヴェルトーゼのものか、あるいはダークライのものか。

キリキザンのシザークロスはダークライの放ったダークホールを斬り裂いた。

「キリキザン！」

「キツザン！」

刹那の動揺を四天王・ミリガンは見逃さない。ダークライの懐にキ

リキザンが潜り込む。

放たれるシザークロス。効果はばつぐんだ。

崩れ落ちるダークライ。ミリガンとキリキザンは即座に走り始めた。

アガリア政府とヴリル教団のつながり。これが事実であれば、これまで起きた数々のヴリル教団関連の事件が政府主導のものという事になる。真偽を確かめなければならぬ。そして、もしもこれが真実であれば……。

「一刻も早く抜け出さないと……。でも、その前に！」

ここにはセラがいるはずだ。彼女を救う事こそ、ミリガンの本来の目的だった。

「どこにいるの!?! セラちゃん！」

彼女の叫び声は鳴り止まぬサイレンの音にかき消される。

そして……、そのサイレンすら届かぬ地の底にミリガンの探し求める少女はいた。

エピソード『咎と愛』

時々だけど、わたしは夢を夢だと自覚する事がある。

今では懐かしい、ヴェゼール・ヴィレッジの草原で、わたしはアルトやアクセルと一緒に遊んでいる。ビードルが吐き出した糸を棒に巻き付けて投げたきのみをキャッチするオリジナルの遊びだ。

わたし達はいつも三人一緒。朝起きてから夜眠るまで、離れる事はほとんどない。

世界は完成されていた。わたし達は……、わたしは幸せだった。

『……ごめん、セラ』

ヴリル教団が迫ってきた時、アルトはわたしよりも旅の仲間を選んだ。

アルトとアクセルが旅に出ると決意した日、すでに三人だけの世界は壊れていた。

どうして？

なにが不満なの？

一人にしないで！

草原の静寂は破られ、有象無象の雑音が飛び交い、わたしの叫びは彼らに届かない。

気付けば、草原に立っていたのはわたしだけ。青空は闇に覆われ、騒音だけがわたしを苛んでいる。

エピソード『咎と愛』

目が覚めると、見知らぬ場所にいた。

「ハイ、ズィンター」

初めに目に映ったのは土の天蓋。そして、次に目に映ったのは巨大な壁画だった。

中央には巨大なポケモンが描かれている。

忘れもしない。クセルセス高原でわたし達に襲い掛かってきたヴリル教団の幹部がくり出したポケモンだ。名前はたしか、『フーパ』だ。

その両隣には二体の見た事もないポケモンが描かれている。赤と

青。空を飛ぶものと、大地を踏みしめるもの。なにからなにまで正反対の二体だ。

そして、二体のポケモンの後ろには無数のポケモン達が蹲っている。まるで、主人に頭（こうべ）を垂れる奴隷のように。

「これって、アルトとアクセルが言っていた絵？」

ビードルがコクーンに進化した日、ヤドンに吹っ飛ばされたコクーンを追いかけて、アルトとアクセルは大地の亀裂に飛び込んだ。

その先に広がっていたのは『コスラ洞窟』と呼ばれる古代の遺跡。そこで二人は壁画と奇妙な戦場の光景を見たと言っていた。

この壁画は二人が話していた壁画と様々な点で一致している。

わたしはその絵を見た瞬間から、魅入られたように視線を外す事が出来なくなつた。

胸がざわつく。まるで、取り返しのつかない事をしてしまった時のようだ。

悲しい。寂しい。恐ろしい。三つの感情がわたしの中でせめぎ合っている。

「これは『最後』を描いたものじゃよ」

背後から急に声を掛けられてびっくりした。だけど、その声には馴染みがあった。

「博士!？」

振り返ると、そこにはポケモン博士のモンテロがいた。

ヴェゼール・ヴィレッジの誰もが尊敬している人。困った事があつたら博士を頼る。それが村人たちの常識だった。

「やあ、セラ。久しぶりじゃのう」

いつもと変わらないモンテロの様子にわたしは安堵した。

知らない場所で眠っていた恐怖も、壁画を見て感じた不安も、モンテロの顔を見たら吹き飛んだ。

「博士。最後って？」

「二百年前……、空白の時代の終わりの事じゃよ。そして、同時に聖女と呼ばれた女性の最期でもあつた」

モンテロはどこか悲しげに言った。

「博士？」

「ヴリル王の持つ力。『キズナ現象』はポケモンと人の心を通わせる事で発動する奇跡の力じゃった。わしはその力の秘密を解き明かしたかった」

モンテロはどこか夢見るような眼差しで壁画を見上げている。

「好奇心じゃよ。人間という生き物が持つ、もつとも恐ろしく、もつとも抑えがたい感情じゃ。わしはそれに負けた。結果、一人の少年は父に反旗を翻し、偉大なる王は魔王と化した。そして、争いを止めようと足掻いた聖女は『禁断の力』に手を伸ばしてしまった」

「禁断の力？」

「なんだか、頭がぼんやりしている。わたしはよく分からないまま、博士の話を聞いていた。」

「破壊の神・イベルタル。あらゆる生命を吸い尽くすという伝説のポケモンじゃ」

イベルタル。はじめて聞くはずなのに、どうしてか耳に馴染む。胸が苦しくなってくる。

「本来はカロス地方に存在するポケモンじゃ。だが、フーパの力を使えば、異なる地方のポケモンを喚び出す事も出来た。サラはフーパの一体とシンクロする事でイベルタルを喚び出した。そして、すべてを終わらせた。……終わらせてしまった」

あらゆる生命を吸い取るポケモン。不吉な予感がする。

「……どうなったの？」

「死が大地を覆い尽くした。生き残りはサラとフーパとイベルタルのみ。人もポケモンも、すべてが死に絶えた。そして、彼女は嘆いた」
「なんで？」

それが彼女の望みだった筈だ。それなのに、どうして嘆くの？

「彼女はイベルタルを望んだのではない。戦いを終わらせる事を望んでおった。あらゆる生命の死など、彼女にとっても最悪の結末だったのじゃよ。だからこそ、今度はすべてを取り戻そうとした。イベルタルと正反対の性質を持つ伝説のポケモン・ゼルネアスを喚び出した」
「ゼルネアス？」

「イベルタルと同じく、カロスに存在する伝説のポケモンじゃ。永遠の命を持ち、頭の角が七色に輝く時、その生命を分け与えると言われている」

「じゃあ、みんな生き返ったの？」

「生き返った。じゃが、その代償は大きかった」

「代償？」

モンテロは壁画を指さした。

「ゼルネアスは命を分け与えた後、樹木として千年の眠りにつく。サラはみんなを救うためにゼルネアスとシンクロしていた。そして、共に樹木となった」

モンテロは静かに涙をこぼした。

「今でも、彼女は眠っておる。サラの柱と呼ばれる大樹となって……」

サラの柱。それはわたしの名前の由来ともなったシャンティ・シテイの大樹の名前だ。

「わしは彼女を救わねばならん」

「どうして？」

博士は二百年前の話だと言っていた。たしかに悲劇的な話だけど、博士には関係なんて無いはずだ。

「それがわしの……、ボクの咎であり、愛だからだよ」

博士の声が遠のいていく。なんだか、急に眠くなってきた。

「ボクの本当の名前はアルトギア。本当は、君とアルトを使う気はなかったんだ。だけど、ごめんね……」

第七章 『アガリアの伝説』 プロローグ

アガリア地方の東の海には巨大な島が浮かんでいる。潮の干満の差が激しく、引き潮の時にだけ現れる細長の陸橋が本島と島を繋いでいる。

この島の名前はバステイロ。嘗ては流刑地しごくの入り口として、囚人達に恐れられた『罪人の港』。今は呪われた海を鎮める『亡霊の港』。

島に建造された巨大な城塞。その一番高い場所に、彼女はいた。

「……うん。わかったわ」

部屋の中に彼女以外の人の気配はない。けれど、彼女はたしかに誰かと話をしていた。

「やっぱり、アナタだったのね、アルトギア」

プロローグ

「いくぞ、ファイアロー！」

「アーイー！」

ファイアローの足に捕まってそらをとぶ。メルカトが解放された事で、空は自由を取り戻した。ドラゴンポケモンが襲い掛かってくる事もなく、オレはヴェゼール・ヴィレヅジに向かった。

最近、ポケモンが街に入り込んで暴れる事件が頻発しているらしい。その対処のために師匠ジムリーダーは動けない。

アガリア警察が動いてくれているけれど、どうしてもメルカトが優先されてしまって時間がかかる。

だから、オレがセラを助ける。

「頼むぜ、ファイアロー。力を貸してくれ！」

「アーイー！」

ファイアローは速度を上げた。

「サンキュ」

故郷への帰還。まさか、それがこんな形になるなんて思わなかった。

「つと、シャンティが見えてきたな！ ん!？」

クレルモア大平原を超えたところで、シャンティから一匹のポケモンが飛び立った。

「トロピウスだ！」

まっすぐにこつちへ向かってくる。

「おーい、アクセルくん！」

「エルフラン！」

トロピウスの背中に跨っていたのはシャンティジムのジムリーダー・エルフランだった。

「ちっす！」

「ちっす！」

大体の大人からは怒られる事の多い挨拶にノリノリで返してくれる。さすがはジムリーダーだ、格が違うぜ。

「どうしたんだ？ 悪いけど、あんまり時間が無いぜ？」

「知ってるよ。セラちゃんの事でしょ。既にミリガンが向かってるの」

「ミリガンが!？」

「そっ！ だから、あんまり心配しなくて大丈夫だよ」

そう言われても、この状況は前とまったく同じだ。

あの時もミリガンがアルトを助けに行っているとされていて任せきりにしてしまった。

「悪いけど、もう人任せはやめたんだ！ セラはオレが助ける！」

「……向かう先がヴリル教団の根城になっているって言っても？」

「当然だ！」

師匠から、その可能性は聞いていた。オレにはさっぱり分からなかったけど、状況的にそうなっている可能性が高いと言われた。師匠が言うのなら、そうなんだろう。

だけど、そんな事は足を止める理由にはならない。

「オレはセラを助けるんだ！ 邪魔をするなら、全員倒す！」

「アーイッ！」

オレの意志にファイアローも応えてくれた。燃え盛る意志を瞳に

宿してエルフランを見つめている。

「……オツケー。足を止めさせちやつてごめんなさいね」

エルフランはトロピウスを進路から外させた。

「アクセルくん。キミは強いし、これから更に強くなる。だから、行つておいで！ キミなら出来るよ！ セラちゃんを助けられる！」

「おう！ ファイアロー！」

「アーイツ！」

ファイアローが羽ばたく。一直線にヴェゼール・ヴィレッジへ向かっていく。

◆ 装甲車で半日以上かかる距離も、オレのファイアローなら一瞬だ！

遠ざかるアクセルとファイアローの背中を見つめながら、そつとため息を零した。

「男子三日会わざれば刮目して見よ、だっけ？ ずいぶんと、かつこよくなつたねー」

「ピウス」

頷くトロピウスの首を撫でながら、耳に取り付けている装置へ意識を傾ける。

「ミリガン。そつちはどう？」

『まだ、見つかつていない。あらかたの団員は眠らせたし、見落ともしもない筈なんだけど……』

「そうになると、やっぱり地下かな？」

『おそらくね。でも、地下へつながる入り口も見つからない。下手に穴を空けたら、洞窟が崩れてしまうかもしれないし……』

ミリガンは苦戦している。ポケギアでキャプチャーした画像を見た限り、そこまで広大なわけでもなかった。それでも入り口を見つけられないとすると、要塞はダミーの可能性が出てくる。

「ミリガン。もうすぐ、そつちにアクセルくんが行くから、協力してもらって」

『えっ!? 待つて！ ここは危険よ!?』

「あの子は強いよ。それに、ヴェゼール・ヴィレッジを知り尽くしてい

る。必ず力になってくれる筈だよ」

『で、でも！』

「ミリガン！ 時間は一刻を争うの！ それに、あの子の目を見れば分かるよ！ セラちゃんを助けるために覚悟を決めてる。あれは止まらない。だから、年長者として背中を押してあげるんだ！」

ミリガンはすぐに応えなかった。心優しい四天王。彼女は昔から変わらない。

『……分かった。アクセルくんと協力して、絶対にセラちゃんを救ける！』

「うん。頼むよ、ミリガン」

『了解！』

瓦礫を吹き飛ばすような音が聞こえる。エアームドで空に上がったのだろう。

「……こういう時にシテイを空けられないのがジムリーダーの辛いところだね」

本音を言えば、子供が危険な目に合っているのにジツとなんてしていたくない。

まして、子供をそんな場所へ送り込むなんて論外だ。

『大丈夫だ、エルフラン。アクセルは強い！』

ミリガンと回線が繋がっている耳元の機械ではなく、ポケギアから聞き慣れた低い声が聞こえてくる。こっちはオーヴェルのジムリーダー・ヴァイクと繋がっている。

『オレが鍛えた。それに、業腹だがドロシーにも仕込まれている。もはや、並のトレーナーには止められんさ。間抜けなヴリル教団め、このアガリアの新たな灯火を敵に回した事を悔いるがいい！』

ポケギアを少し遠ざける。相変わらず、暑苦しい男。だけど、同感だ。

この世には、決して敵に回してはいけない存在がいる。

それは、勇気と希望を持った新芽。力強く、どこまでも伸びていく大樹の子。

「聖女様」

サラの柱を見上げながら祈る。

「どうか、アガリアの新芽に加護を」

◆ 「……というわけなのよ」

相変わらず、神出鬼没な女。メルカトの復興のために走り回っていると、いきなり彼女は現れた。こちらの事情などお構いなしに彼女は語った。

メルカト奪還の功労者であるアルトと、アクセルの幼馴染であるセラが失踪し、その行方をアクセルが追っている事。その先がヴリル教団の要塞となっている事。

「わかったわ」

大迷宮の魔女・ドロシー。彼女の思惑は分からない。だけど、放つては置けない。

「レックウザー！」

モンスターボールから飛び出したレックウザはわたしの指示を聞くまでもなく、一直線にヴェゼール・ヴィレツジの方角へ飛んでいった。

あの子は賢い。そして、アクセルを気に入っている。

あれこそ、わたしのようない物ではない、天性の才だ。ポケモンに愛される、トレーナーとして最も重要な資質。

「わたしはメルカトを動けない。だから、頼んだよ、レックウザ」

振り返った時、既にドロシーは姿を消していた。

本当に相変わらずだ。

第一話 『挑戦、大迷宮』

「残り二つ。次はどうする?」

サレナ・シテイのメインストリートにあるオシヤレなカフェで、俺達は今後の事を話していた。ここはエリザが見つけた店だ。観光ガイドに載っていたらしい。

「そう言えば、バレットもバッジの数はアルトと一緒になんですわね」

「ん? いや、オレはまだ四つだぞ?」

「え? でも、残り二つって言ったじゃないですか!」

俺もてつきりバレットは同数のバッジを集めているのかと思っていた。

俺達の視線にバレットは気まずそうな表情を浮かべている。

「オレの目的はあくまでもメルカトの奪還だったからな。ジムより大会に出る方が実戦経験も積めると思って、各地の大会を回っていたんだ」

「バレットはリーグに出ないの?」

だとしたら困る。俺はポケモンリーグという晴れ舞台でバレットと全力のバトルが出来る事を楽しみにしているんだ。

「出るさ」

バレットは言った。

「きつと、ポケモンリーグがオレ達の旅の終着点だ。だったら、最後に全力でお前らと戦いたい」

「俺もだよ、バレット!」

うれしい。バレットは俺と同じ気持ちだ。

「アギトも出るよね!」

「ああ、出る。教団とも縁を切ったからな。まだ、バッジは三つだが、次のリーグまで半年あるからな。間に合わせてみせるさ」

アギトもやる気満々だ。俺は最後にエリザを見た。

「エリザも出るよね!」

「ふっふっふ、この流れ、乗るしかありませんね! いいでしょう! わたしも出ますよ、ポケモンリーグ! わたしはバッジを5つ持って

ますからね、一日待ってもらえれば、ノエルからも貰って、アルトに並んでみせますよ！」

ワクワクしてくる。ポケモンリーグまで、あと半年。きつと、アクセルもバッジを集めきってくれる筈だ。それまでに、もつともつと強くならないといけない。

みんなと戦って、みんなを倒して、俺は四天王やチャンピオンとバトルする。

「そうと決まれば！ 明日、エリザがバッジをゲットしたら、オーヴェルに行こう！ まずはヴァイクからバッジをゲットだ！」

「おう！」

「ああ！」

「はい！」

第一話『挑戦、大迷宮』

翌日、エリザが宣言通りにバッジを手に入れて来た後、俺達はオーヴェルへ移動した。

空を飛べるようになったおかげで移動がスムーズだ。

「あれ？」

街中に降り立つと、奇妙な違和感を覚えた。

「なんか、妙に静かだな」

バレットが言った。

たしかに、前に来た時の熱気が感じられない。

以前はそこかしこで繰り広げられていた野良バトルをしているトレーナーもいない。

「とりあえず、ジムに行ってみよう」

アギトの提案で、俺達はオーヴェルジムへ向かう事にした。

ジムに向かうまでの道程でも、人の影はまったくなかった。あれだけ熱気に包まれていた街がここまで静まり返っていると、なんだか不気味だ。

「ここですね」

ジムに辿り着いた。自動ドアを潜って中に入ると、そこには受付の人がいた。

人がいる事にホツとしつつ、俺達は受付の人に声をかけた。

「あのー、ジムに挑戦したいんですけど」

「誠に申し訳ございません。現在、ジムリーダーが多忙の為、一時的にジムバトルの受付を取り止めております。また、シティ内における各種大会に関しましても、主催者であるジュリアス財団の都合により無期限の中止状態となっております。バトルタワーのみ、現在も稼働しておりますので、よろしければご利用下さい」

俺達は顔を見合わせた。

「予想外の展開ですね」

エリザの言葉に俺達は頷くことしか出来なかった。受け付けていないのなら仕方がない。

一旦外に出て、俺達は近くのカフェに向かった。以前来た時にエリザがよく利用していたところだ。俺達以外にも数人のお客がいた。

「なるほどな。大会もジムも閉鎖状態じゃ、この有様にも納得だ」

「どうする？ バトルタワーに行ってみる？」

「魅力的な誘いだが、それはバッジを集めきつてからにしよう。オーヴェルジムがダメなら、他に行けばいい。あと二つなら、バステイロやフィオレにもジムがある」

「うーん。わたし、バステイロのトリアノンバッジは持つてるんですよー」

「だったら、フィオレに行ってみるか？」

「フィオレと言えば、四大魔境の一つ、大迷宮があるんだよね」

「ああ、超級トレーナーの登竜門と呼ばれていて、アガリアで唯一のエスパーパーケモンをゲット出来る場所でもある。行く価値は十分にあると思うぞ」

「ッハ！ だったら、決まりだな！」

「ではでは！ 早速行くとしましょうか！」

俺達もだいぶフットワークが軽くなったものだ。早速、フリーザーヤリザードンに乗って、大迷宮のあるフィオレシティに向かう事になった。

オーヴェルの南東に広がる山岳地帯を飛び越えて、暗雲が広がる巨

大な建造物の前に降り立つ。

「これが大迷宮？」

「違いますよ。これはシティを覆う壁です」

エリザが言った。

「壁？」

「フィオレシティは大迷宮の表層に広がる街ですが、魔境の上にあるだけあって、他のシティとは趣が大分異なるそうですよ」

「そうなの？」

「入ってみれば分かんのだろ。行こうぜ」

バレットはさっさと入り口らしき場所へ向かって歩き出した。

「それもそうだな」

そう言つて、アギトも続く。俺とエリザも慌てて後を追いかけた。入り口に辿り着くと、そこには巨大な斧を持った人が立っていた。大分時代錯誤な格好をしている。

「おや、子供が来るとは珍しい。もしや、フィオレジムに挑戦かい？」
変なのは格好だけのようだ。

「はい、そうです」

「一応、トレーナーカードを見せてもらえるかな？ 申し訳ないが、安全の為にカッパー以下のトレーナーの入場はお断りしているんだ」

どうやら、フィオレシティは想像以上に危険な場所らしい。時々、大迷宮からカッパーでは対処出来ないようなポケモンが飛び出してきたり、腕試しの為に暴れるトレーナーがいたり、一癖も二癖もある住民達に危害を加えられるなんて事まであるらしい。

ここに門番を置いている理由は外からではなく、中から危険物が飛び出していかない為だそうだ。

バレットとエリザはドン引きしている。

「マジかよ。住民が襲ってくるのかよ」

「上層は比較的安全とか嘘じゃないですか。表層の時点でヤバすぎますよ」

まあまあと言いながら二人の背中を押す。住民が襲い掛かって来る街。すごく面白そうだ。

「シルバーなら問題は無い筈だよ、住民以外は」

そんな門番の不吉な言葉に顔を引き攣らせる二人を半ば引き摺るようにシテイへ入る。

すると、そこには驚くべき光景が広がっていた。

「はあ!?!」

頭がおかしくなったのかと思うような奇妙な光景。

なんと、壁や天井に建物がある。しかも、壁や天井を人が普通に歩いている。

「ど、どういう事だ!?!」

街中に縦横無尽に張り巡らされた階段は途中で捻れたり、途中の段が繋がっていないかったりしながら街のあちこちを結んでいる。

更には空中で座禅を組み、奇妙な独り言を呟く老人がいたり、池の上に立ちながら格闘技の訓練に励む青年がいたり、とにかく混沌としている。

「よ、予想以上にヤバイ街じゃないですか!」

エリザは悲鳴をあげた。すると、急に目の前にメガネを掛けた少年が現れた。

「それじゃあ、バトルスタート!」

「ええ!?!」

エリザは目を白黒させている。

「よし、相手になる!」

バトルと聞いては黙っていられない!

「お兄ちゃん、バトルだよ!」

「受けて立つ」

アギトも小さな女の子にバトルを挑まれていた。

「若者よ、ワシとバトルじゃ!」

「うおい、マジか!?!」

バレットは筋骨隆々な老人に挑まれている。

「くぐぐぐぐ、くぐぐぐぐ、バトルじやない!」

「忍者!?! なんだ!?!」

エリザは何故か忍者にバトルを挑まれていた。

正直、忍者とバトル出来るなんて羨ましい。だけど、今は目の前の相手に集中だ。

「それじゃあ、いくよ！ ネンドール！」

「ネーン」

ネンドール。じめんとエスパーの二重タイプを持つどぐうポケモンだ。

「よーし！ いくぞ、スピアー！」

「スッパイ！」

モンスターボールから飛び出したスピアーがネンドールと睨み合う。

「ストーンエッジ！」

「ドール！」

地面から次々に石の刃が現れてスピアーに襲いかかる。だけど、あまりにも遅い。

「スピアー！ 回り込んでダブルニードル！」

「スピー！」

一息の内にネンドールの背後に回るスピアー。

一気に決める！

「スピアー！」

「しねんのずつき！」

スピアーがダブルニードルを放つ直前、ネンドールは死角に入っていた筈のスピアーへ攻撃をくり出した。

「ネンドールは360度を見る事が出来るんだよ！」

態勢を建て直さないといけない。だけど、スピアーはしねんのずつきを受けた事で怯んでしまっている。その隙をネンドールは見逃してくれなかった。ストーンエッジがスピアーに迫る。

「飛び上がれ！」

ストーンエッジが直撃する寸前、スピアーは大地を蹴った。一気に上昇していく。

「ミサイルばり！」

「スピー！」

「サイコキネシス！」

「ネーン」

スピアーの放ったミサイルばかりが空中で静止する。サイコキネシスによってミサイルばかりの主導権を奪われた。

「スピー！」

ここだ！ 主導権を奪ったという事はネンドールの意識はミサイルばかりに集中しているという事だ。スピアーなら、その集中の死角を取れる。

「ダブルニードル！」

「スツピイイイ！」

刹那の内にネンドールの懐へ入り込み、スピアーはネンドールの急所を貫いた。効果はばつぐんだ。

「ネーン……」

ネンドールが目を回しながら地面に横たわる。

スピアーの勝だ。

「うん、合格！」

「え？」

いきなり、少年は俺の目の前に現れた。バトルの為に距離を離していた筈なのに、まさに一瞬だった。

「お一人様、大迷宮へごあんなーい！」

「ええ！」

いきなり目の前が真っ暗になった。

そして、気がつくくと俺は四方を壁に囲まれた空間に放り出された。

「何事ですか!？」

「うおっ!？」

「これは、テレポートか！」

次々にエリザ、バレット、アギトが放り込まれてくる。四人が揃うと、壁が動き始めてアーチを作り出した。先に進めるようだ。

「ど、どうやら、大迷宮への挑戦が始まったようですね」

エリザはフィオレに来てから顔を引き攣らせっぱなしだ。

「ツハ、やってやろうじゃねーか！」

バレットが威勢のいい声で叫ぶ。

「面白い」

アギトもやる気まんまんだ。

何が何だか分からないまま、俺達は流れで大迷宮への挑戦を開始する事になった。

やるからには全力だ！

「よーし！・いくよ、みんな！」

第二話『VSドロシー』

アガリアの四大魔境の一つ、大迷宮。そこは全百階層からなる超巨大ダンジョンだ。階層毎に出現するポケモンのレベルは一つずつ上がっていく。

攻略を開始したアルト達は五十階層までを難なく走破していた。それというのも、彼らの手持ちのポケモン達の平均レベルが既に70を超えていたからだ。

レベルの差は絶対ではない。けれども、20も離れば、その格差を覆す事は至難となる。故にこそ、ポケモン達は彼らに道を譲り、影に隠れ、息を潜めた。

「おいおい、楽勝じゃねーか！」

「何も起きませんでしたね」

「とはいえ、さすがに五十階層も走り続けるのは堪えるな。どこかで休もう」

「そうだね」

道中、何事もなく突き進められた為に四人の緊張感は欠片も残っていなかった。

弛緩した空気の中、アギトが通路の奥に明かりを発見した。

第二話『VSドロシー』

念のためにポケモンを出してから通路を進んでいくと、そこには広大な空間が広がっていた。

大空洞の真ん中には一人の女性が立っていた。

「いらっしやい。待ってたよ」

その顔を見て、アルトはどうしてだか、エリザの顔と重なった。

「お姉ちゃん!？」

エリザが驚愕の声を上げた。けれど、それはありえない筈だ。何故なら、彼女の姉は数年前にヴリル教団の魔の手によって殺害されている。だからこそ、彼女は復讐の旅に出たのだ。

「ぶつぶー。残念だけど、わたしはあなたのお姉ちゃんじゃないんだなー、これが！ わたしの名前はドロシー。この大迷宮の主にして、

ファイオレジムのジムリーダーよ」

「お姉ちゃんじゃ……、ない？ い、いえ、そうですよね」

見るからに落ち込んだ様子を見せるエリザ。それほど、ドロシーは彼女の姉に似ていたのだろう。

もう一度、ドロシーを見る。もしも、彼女の赤みがかった髪が白かったら、それこそエリザの家族か親戚だと思っただろう。それほどまでにそっくりだった。

「はいはい。と・り・あ・え・ず！ まずはやるべき事があるでしょ？ レッツ、バトル！」

ドロシーはモンスターボールを放り投げた。飛び出してきたのはサーナイトだ。

「さてさてさーて！ ジムバトルのスタートだよ！ ルールはシンプル！ 一対一でバトルして、勝てたらバッジをプレゼント！ ささっ！ 誰から来る!?!」

「俺が行きます！」

エリザが心配だけど、バトルと聞いては黙っていられない。

「いくぞ、スピアー！」

「スピー！」

モンスターボールから飛び出すと、スピアーは鋭いニードルをサーナイトに向けた。

やる気まんまんだ。

「先手必勝だ！ ダブルニードル！」

「スピッ！」

スピアーは目にも留まらぬ速度でサーナイトに接近していく。

「トリックルーム！」

「サナッ！」

「スピッ!?!」

サーナイトを中心に不可思議なフィールドが展開される。サーナイトの眼前まで迫っていたスピアーの動きが急に止まった。いや、止まっているように見えた。

トリックルーム。それはスピードの速さが逆転する摩訶不思議な

エスパークタイプのわざ。

素早いポケモンは遅くなり、遅いポケモンは素早くなる。

サーナイトは機敏な動きでスピアーから距離を取った。

「ムーンフォースー！」

「スピアー！」

スピアーの動きが鈍い。このままでは直撃してしまう。

「スピアー！ 地面に向かってドリルライナー！」

「スピッ！」

スピアーはドリルライナーで地面を掘り、地中に隠れた。対象を失ったムーンフォースは地面と激突して激しい烈風を巻き起こす。

砂煙が舞い上がるフィールド。互いに視界は塞がっている。

「サーナイト、ハイパーボイス！」

「サナアアアアアアアアアアア！」

強烈な音波がフィールド全体を襲う。砂煙は吹き飛ばされ、密かに接近しようとしていたスピアーがもがき苦しんでいた。

「スピアー！」

「アハッ！ 油断も隙もないんだからー。ムーンフォースー！」

接近した事が裏目に出た。今度こそ避けられない。

スピアーの持ち味は高速機動による速攻だ。そのスピードを殺された以上、勝ち目は薄い。

「スピアー！」

だけど、諦めたくない。長所を封じられたくらいで、俺のスピアーは負けない。

負けさせない！

「ムーンフォースーごと、サーナイトを撃ち抜け！」

俺が叫ぶと同時に、スピアーは右腕のニードルからミサイルばりを放った。そして、直後に左腕のニードルから二発目のミサイルばりを放つ。一発目がムーンフォースに激突すると、中心に僅かな穴を空けた。その穴を二発目のミサイルばりが突き進んでいく。直後にムーンフォースは破裂し、烈風が巻き起こる。その烈風を追い風にして、ミサイルばりは加速した。

「サナツ!？」

ミサイルばかりがサーナイトに命中した。

「ここだ! スピアー!」

「スピイイッ!」

ダメージを受けたサーナイトにスピアーが接近していく。それに気づいたサーナイトが後退するが、そこには二発目を撃った後に右のニードルで放った三発目のミサイルばかりが回り込んでいた。

ミサイルばかりとダブルニードルによる挟み打ち。

勝った!

「テレポート!」

「なっ!？」

「スピッ!？」

いきなり、サーナイトが姿を消した。テレポートで移動したのだ。空を切ったせいでスピアーはバランスを崩し、サーナイトに当てる筈だったミサイルばかりが直撃してしまった。

「スピアー!」

「ス、スピ!」

なんとか堪えてくれた。だけど、ダメージが大きい。

このままだとまずい。トリックルームは今も継続中だ。ミサイルばりの誘導による不意打ちは二度も通じないだろう。

「ふふっ、楽しそうだね、きみ」

「え?」

「口元、にやけてるよ」

にやけてる。そう言われて、自分が笑っている事に気がついた。負けるのはイヤだ。だけど、負けそうなほどの強敵とのバトルは楽しくて仕方がない。

「そうだ。相手が強ければ強いほど、俺達は強くなれるんだ! いくぞ、スピアー!」

「スピイイイッ!」

緑の稲妻が迸る。スピアーの体が青く染まっていき、一対のニードルが腹部から生えてくる。二対となったニードルには緑の雷光が灯

り、その影響か、俺の手もわずかにビリビリと痛みが走る。

俺の視界はスピアーの視界になり、スピアーの視界は俺の視界になる。

「いくぞ、ドロシー！　これが俺とスピアーの全力だ！」

「スピイイイイイイイッ!!」

緑の雷光が輝きを増していく。眩くフィールドを照らす二対のニードルを遠く離れたサーナイトに向けた。

「ミサイルばり!!」

「スピイイイッ！」

それは、まるで大砲だった。激しい雷鳴と共に撃ち出された四つのミサイルばりは稲妻の如き速度でフィールドの外の壁面まで到達した。

爆風が吹き荒れ、それが収まった時、フィールドにはミサイルばりの余波で地面を抉られたフィールドと、倒れ伏したサーナイトの姿があった。

あまりの威力に体が震える。

最高だ。

「アツハツハツハツハッハ！」

間違いない。俺はまた一つ、強くなれた。また一步、ザラクに近づけた。

「……さっすがー」

ドロシーはサーナイトをモンスターボールに戻すと、俺に向かってバツジを放り投げてきた。

「それがファイオレジムのパレスバツジだよ」

「ありがとうございますー！」

これで七つ目。俺はバツジケースにパレスバツジを仕舞い込むと、エリザ達の下へ戻った。

「負けねえぞー！」

入れ替わりに闘志を燃やしたバレットがフィールドに向かってい

く。

振り返ると、既にフィールドは元の状態に戻っていた。あれほど深く抉れていたのに、どういう仕組みなのだろうか？

「……とりあえず、おめでとうございませす」

エリザは妙な顔つきで言った。

「う、うん。ありがとう」

アギトはというと、自分のポケモン達と戦術を練っている様子だ。俺はスピアーのケアをしながらみんなのバトルを見守った。

第三話『アンノーン』

「そこでぜったいれいどですー！」

心配していたエリザのバトルも終わった。すっぱり切り替えたようだ。彼女の使うフリーザーは相変わらぬの強さだった。いや、以前よりも強くなっている。きっと、エリザが成長したからだろう。強くなったというより、本来の力を発揮し始めている感じだ。

ちなみに、バレットとアギトも見事にバッジをゲットしている。俺が苦戦したトリックルームを、バレットはレントラーのエレキフィールドで攻略し、アギトは地下の密室空間でブラストバーンを使いフィールド全体を炎上させるという暴挙に打って出た。

二人共、俺のバトルを見て、しっかりと対策を立てていた。

「はいはい、ちゅーもくー！」

エリザが俺達の下に戻ってくると、ドロシーが手を叩いて言った。

「パンパカパーン！ パレスバッジをゲットした君達は、晴れて大迷宮の下層エリアへの挑戦が認められまーす！ もっちりん、挑戦するわよねー?！」

妙なテンションの人だけど、返答は決まっている。

「もちろんー！」

俺達が声を揃えて応えようと、ドロシーはにんまりと笑みを浮かべ、フィールドの奥の壁を指さした。

「よろしい！ あそこが下層への入り口だよー！」

俺達はドロシーに導かれるまま、大迷宮への下層エリアへ向かっていった。

第三話『アンノーン』

ドロシーに見送られて下層エリアに入った俺達。大迷宮というだけあって、かなり道が入り組んでいる。上層はそれでも野生のポケモンが出てこなかった分楽だったけれど、下層エリアでは次々にポケモン達が襲い掛かってきた。

「エレキブル、じゅうまんボルト！」

「マニニューラ、あくのはどうですー！」

「リザードン、ドラゴンクロー！」

「ゲッコウガ、みずしゅりけん！」

数メートル置きに出てくるものだから、実力が下でも油断は出来ない。おまけに相手はエスパークタイプ。使ってくる技の殆どが搦め手だ。

「スリーパー！」

野生のスリーパーが現れた。

「さいみんじゅつが来る前に仕留めるぞ！ アイアンテール！」

「グオオオオオオッ！」

スリープやスリーパーは特に厄介だ。初手からさいみんじゅつをくり出してくるせいで、何度も危うい目に合わされた。

アギトのリザードンがスリーパーを吹き飛ばし、俺達は先へ進んでいく。

さすがは四大魔境の一つにして、超級トレーナーの登竜門だ。進む程にポケモン達が強くなっていくし、俺達の間も研ぎ澄まされていく。

「そろそろポケモンを入れ替えましょう！」

「そうだな！ 戻れ、エレキブル！ 出てこい、ライチュウ！」

「ライラーイ！」

ここは七十階層だ。ポケモンの疲労を考えて、十階層毎にポケモンを入れ替える事になっている。俺もゲッコウガを戻して、ギルガルドをくり出した。

「ギルツ！」

目の前に次の階層へ続く階段が見えてきた。一気に駆け下りると、かなり広々とした空間に出た。

頭上に無数の文字が浮かんでいる。

「アンノーンだ！」

それはアンノーンと呼ばれるシンボルポケモンの群れだった。

薄べったく、まるで平面が動いているかのような奇妙なポケモンだ。

「降りてくる様子はないな。アンノーンは群れでいると厄介なポケモン

ンだ。相手にせず、先に進もう」

アギトが言った。襲い掛かってきたわけでもないポケモンに攻撃する気も起きない。

俺達は素直に従って、部屋の端に見える階段を目指して走り出した。

すると、中央まで来たところでいきなりアンノーンの様子が変化した。

「なんだ!？」

アンノーン達が一斉に降りて来た。

「襲い掛かってきたか！ ならば、受けて立つ！ ジャローダ、りゅうのはどう!」

「ジャロー!」

アギトのジャローダがりゅうのはどうでアンノーンを蹴散らす。集まれば厄介な力を発揮するアンノーンだけど、倒せない相手じゃない。

「俺達も続くぞ、ギルガルド！ せいなるつるぎ!」

「ギル!」

青白い光を刀身に纏わせながら次々にアンノーンを斬り裂いていくギルガルド。だけど、アンノーンは次から次へと襲い掛かってくる。

気がつけば、アンノーンは俺達を360度完全に包囲していた。

「なんかやばいぞ!」

バレットが叫ぶ。

「こうなれば、フリーザーのぜったいれいど!」

エリザが出ていたユキノオーからフリーザーに入れ替えようとした瞬間、アンノーン達が一斉に光り始めた。

「なんだ!？」

眩しい。なにも見えない。

『待っていた』

誰かが言った。

『我らは待っていた』

声は耳を通さず、脳内に直接響いている。

『ここは地の果て、流刑の地』

視界が少しずつ回復しはじめる。

『ここは世界の吹き溜まり』

おかしい。さつきまで地下にいた筈なのに、空が見える。

『混沌と絶望が渦巻く終点世界』

見覚えがる景色が広がる。

ここは、クレルモア大平原だ。

『偉大なる王が我らを束ねた』

『叛逆の王子がすべてを壊した』

『咎人は何もかも滅ぼした』

『白き聖女は救いを求めた』

大平原の中心に、誰かがいる。

青い髪の青年だ。

『かの者は恐るべき事を企んでいる』

『止めねばならぬ』

青年の周りには四冊の本が浮かんでいた。

青と赤と黒と白。遠すぎて、よく見えない。だけど、あれはおそらくアルトギア手記だ。

『アレは魂の器』

『アルトギア、コスラ、ヴリル、サラの魂を注ぎしもの』

アルトギアの魂？

あの青年こそ、アルトギアではないのか？

あの青い髪は彼の特徴と一致している。

それなのに、アルトギアの魂の器？

『アレはアルトギアであって、アルトギアではないもの』

『アルトギアが遺したもの』

『アルトギアが残してしまったもの』

『アルトギアの魂を写し取ったもの』

『ポケモン』

『あのポケモンの名は———、』

青年の体が崩れていく。代わりに、見覚えのあるポケモンが姿を現した。

闇を思わせる漆黒のポケモン。

『ダークライ』

『その原種』

『アレは滅びに直面した人々の怨念と悪夢の集合体』

『あんこく』

『アルトギアの魂を写した事で実体を得た想念の結晶』

『真なる敵』

ダークライ。

それはヴェルトローゼのポケモン。

ナザレやミリガン、アギト、フーパを操った恐るべき存在。

——タタカエ。

声ならざる声が響き渡る。

——タタカエ。

赤と青の光の柱が天へ伸びる。

見たこともないポケモンが大平原を挟んで睨み合う。

『破壊の神・イベルタル』

『生命の神・ゼルネアス』

二体のポケモンがそれぞれ無数のポケモンを従え、戦おうとしている。

『これは過去にして、未来』

『一度起きてしまった惨劇』

『これから起きる悲劇』

『止めねばならぬ』

目の前に繰り広げられるのは、いつか見た記憶のある光景。そうだ、思い出した。これは、コスラ洞窟で見た光景だ。

——タタカエ。タタカエ。タタカエ。

笑い声が響き渡る。

燃え上がる空。戦場を見下ろす暗黒。

睨み合う、赤と青。

『お前は救世主となりうるや否や』

『示すがよい』

『はじまりにして、おわりなるものよ』

眩い光が世界を包み込む。目を背け、再び開くと、そこには一体のポケモンがいた。

咄嗟にポケモン図鑑を開く。

ミカルゲ。ふういんポケモン。ゴーストとあくの二重タイプを持つ。

たくさん命が集まって生まれたポケモン。

『さあ、示すがよい』

第四話 『VSミカルゲ』

第四話 『VSミカルゲ』

ぼんやりとした紫の中に緑の光が踊っている。

ミカルゲ。凶鑑によればシンオウ地方で目撃された個体は要石というものに封じ込められていたそうだ。けれど、目の前のミカルゲには凶鑑の写真にあるような要石は見当たらない。

「頼むぞ、スピアー！」

「スピッ！」

相手は得体の知れないポケモンだけど、様子見をしている暇はない。

よく見れば、ここはアンノーン達のいた空間とは違う。ドロシーとバトルした空間よりも更に広大な大空洞だ。いつの間にか移動させられていたらしい。エリザ達の姿もない。

みんなの事が心配だ。

「一気に決めるぞ、スピアー！ フルパワーだ！」

「スピイイイッ！」

スピアーの体から緑の雷光が迸る。体は青く染まっていく。

「先手必勝だ！ ダブルニードル！」

「スピッ！」

スピアーの羽から雷光が吹き出す。まるでロケットエンジンだ。

『スピイ!?!』

いつもの比ではない速度にスピアー自身が戸惑ってしまった。数百メートルはある大空洞の端まで、まさに一瞬の内に辿り着いてしまい、危うく壁に激突するところだった。

「落ち着け、スピアー！ 自分の力をコントロールするんだ！」

『ス、スピッ!』

聞こえるはずのない距離で俺達は言葉を交わし、一緒に呼吸を整える。

「大丈夫だ。お前なら出来る！」

『スピ!』

再び、スピアーは雷光を背に走り出した。

「ミーカー」

ミカルゲが動く。スピアーの進路上から横に退き、あくのはどうを放った。

「スピッ！」

スピアーは更に加速する事であくのはどうを躲し、左腕の二本のニードルから雷光を放って方向転換した。

あの雷光は一体なんなんだろう。超加速は使い方次第で武器になりそうだし、雷光を纏わせたミサイルよりはジムリーダーのポケモンを一撃でノックアウトさせた。だけど、これではスピアーの持ち味である高速機動が出来なくなってしまう。

コントロールしようとしているみたいだけど、梃子摺っている様子だ。

「スピアーー！」

もつと深くスピアーと意識を同調させる。雷光の正体がなんであれ、あれはスピアーの力だ。ならば、コントロール出来る筈なんだ。体に痛みはない。むしろ、体の奥底からどんだん力が湧いてくる。抑え難い程の膨大なエネルギーだ。それが雷光の正体らしい。吹き出した力の一部がニードルや羽から吹き出しているんだ。

羽を動かせば羽から、腕を動かせばニードルから、意識していても漏れ出してしまう。

それを必死になって抑え込もうとするとエネルギーが体の中で爆発しそうになる。

「抑えられないなら、抑えない！ スピアー！」

『スピッ！』

隙間程度だった穴を一気に広げる。二対のニードルと羽から一気にエネルギーが放出される。抑え込まれていた事で歪んでいた流れが正され、雷光は一気に収束していく。

二対のニードルと翼から放出されていた雷光はそれぞれがニードルと翼の形で安定した。

「よしー！ いけるなー！ スピアーー！」

「スピイイイッ！」

今度こそ、スピアーは本来の動きを取り戻した。ただし、その速度は圧倒的に速くなっている。もはや、音が後からやって来るほどだ。

ミカルゲの背面を取り、雷光のニードルを振りかぶる。

「ミーカー」

ミカルゲはまもる態勢に入った。

「スツピイ！」

スピアーの雷光のニードルとミカルゲのまもりがぶつかり合う。衝撃波が爆風のように広がっていく。地面のタイルが砕けていき、ニードルから溢れ出た雷光が暗い空間を眩く照らし出す。

「ミーカー」

ミカルゲの顔が笑ったように見えた。

次の瞬間、ニードルの先から何かが伝ってくるのを感じ、スピアーは即座に後退した。

けれど、纏わりついた得体の知れない感覚は消えない。

「ぐっ!？」

『スピッ!』

激痛が走った。体内で何かが暴れまわっているような不快感を感じる。

「なん、だ、これ……」

「ス、スピッ……、スピイ！」

激痛と共に別の何かが流れ込んでくる。

「ス、スピアー……?」

これはスピアーの怒りだ。

「スピイイイッ！」

伝わってくる。

【自分が痛いのはいい。だけど、アルトが痛いのはイヤだ】
はじめた。こんなにもスピアーの心の声はつきりと聞こえたのは。

だからこそ、ムカムカする。

「スピアー！ 俺とスピアーは一心同体だ！ 嫌がらなくていい！ お前の痛み！ お前の喜び！ お前の感情！ お前のすべてを俺と一緒に分かち合いたい！ だから！」

もつとだ。もつと深く、スピアーと繋がる。

俺はスピアーで、スピアーは俺だ。

「俺達是一緒だ！ どんな時も、どんな事も！」

「そうだ。一緒だ。ボクとアルトはどんな時も、どんな事も！」

「スピアーと一緒になら！」

「アルトと一緒になら！」

「今、この瞬間に！」

「死んだって構わない！」

右腕を振り上げる。

「うおおおおおおおおおおおおおつ！！！！」

『スピーイイイイイイイイイイイイイイイツ！！！！』

底なしに湧き上がってくる力のすべてを右腕のニードルに！

「いくぞ、ミカルゲ！」

「これが！」

「俺と！」

「ボクの！」

「全力だ！」

巨大な槍と化した雷光をミカルゲに向ける。

【ミサイクルばりー！】

放たれたミサイクルばりは空間を捻じ曲げながら進んでいく。

対するミカルゲはあくのはどうを放つが、その程度で止まる筈がない。

『見事なり』

『お前達は示した』

『絶対的なる王の力』

視界が歪んでいく。

「なん、だ？」

視界が一瞬暗転した後、俺とスピアーの目の前には無数のアンノ

ンがいた。それだけじゃない。たくさんのミカルゲが空中を漂っている。

気付けば、スピアーとのシンクロが切れてしまっていた。

「アルト！」

声の方向に振り向くと、そこにはエリザ達が出た。

「みんな！」

どうやら、三人共無事だったらしい。だけど、それぞれポケモンを出して疲弊しきっている。

「戻ってきたか！」

「いきなり消えたから心配しましたよ！」

「大丈夫か？」

「どうやら、別空間に飛ばされていたのは俺だけのようだ。」

「うん、大丈夫」

アンノーンとミカルゲ達を見上げる。目的は分からないけれど、俺達は先に進まないといけない。大迷宮を攻略して、もつともつと強くなるために！

『偉大なる王よ』

『我らの王よ』

『お前に預けよう』

『我らの希望』

『我らを守りしもの』

『我らが預かりしもの』

『王の龍』

空から何かが降りてくる。

「ギャラドス!？」

現れたのはギャラドスだった。黙って、俺の事を見つめている。

「えっと……」

さつきからちよくちよく聞こえてくる不思議な声の内容を吟味すると、このギャラドスを連れて行けって言ってるような気がする。

「一緒に来る？」

「ギャオオオオオオオオン！」

ギャラドスは雄叫びをあげた。

これは『はい』なんだろうか、それとも『いいえ』なんだろうか。とりあえず、俺はモンスターボールを投げてみた。すると、ギャラドスは抵抗する事なくモンスターボールの中へ入っていった。

「よ、よろしくね」

正直、何が何だか分からない。

たしか、謎の声は王の龍と言っていた。

「もしかして、このギャラドスはヴリル王の……？」

『その通り』

『王の剣は海で眠り』

『王の翼は山を閉ざし』

『王の龍は我らと共に』

アンノーンとミカルゲ達が壁に向かっていく。ミカルゲ達は壁に溶け込み、アンノーン達は壁に張り付いた。そして、それ以降はなぞの声が聞こえる事もなくなった。

第五話 『コスラ洞窟、再び』

第五話 『コスラ洞窟、再び』

要塞から飛び出すと、彼方からファイアローに乗った少年が現れた。

アクセルくん。それが彼の名前だ。アルトくとセラちゃんの幼馴染であり、ヴァイクの弟子。聞けば、彼はドロシーから教えを授けられた事もあるという。

「こんにちは、アクセルくん」

「ミリガン！ ここにセラがいるんだよな!？」

彼の目には燃えたぎるような意志が宿っていた。

直接言葉を交わすのは、これが初めての事だ。だけど、分かっってしまう。彼は止まらない。

さすがはアルトくんの幼馴染だ。ただの子供じゃない。自分の意志を貫く強さを持っている。

「その筈よ。力を貸して、アクセルくん！」

「こっちこそー！」

わたしは手短かに状況を説明した。ほぼすべての通路と部屋を確認したけれど、セラちゃんの事も、地下にあるコスラ洞窟への入り口も発見出来ていない事を。

「あそこだー！」

アクセルくんは要塞から少し離れた場所を指さした。少し小高くなっている。その先は森が広がっているようだ。

「あの場所でオレ達はバトルをしていたんだ！ それで、ヤドンがクリーンをふっ飛ばして、それでー！」

その場所に向かいながら、アクセルくんは必死に口を動かしていた。気が急いでいるのだろう、言葉にまとまりがない。それでも、必死にわたしに教えようとしている。

この子は賢い子だ。自分だけで突っ走らず、わたしにキチンと情報を伝えて、しっかりと連携を取れるようにしている。それが最善だと分かっている。

「あそこだ！ 塞がってるけど、あそこにあつた亀裂からオレ達はコ
スラ洞窟へ入つたんだ！」

アクセルくんが叫ぶと同時に空の上から巨大な影が降りて来た。

「ギャオオオオオオオオオオオ！」

レックウザだ。攻撃してくるでもなく、わたし達の上を泳いでい
る。

おそらく、ナザレが送り込んでくれた援軍だろう。

「レックウザ！」

アクセルくんは嬉しそうに声を上げた。すると、レックウザは彼の
前に躍り出て、何かを放り投げた。危うげなくキャッチしたそれは、
モンスターボール。

「一緒に行つてくれるのか!?!」

「ギャオオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げると、レックウザはアクセルくんがさつき指で示した
亀裂の場所へ顔を向けた。

「お前がいてくれれば百人力だぜ！ レックウザ、ガリユウテンセイ
だ！」

「ギャオオオオオオオオオ！」

レックウザの体から七色の光が迸り、メガレックウザに変わった。

デルタストリームの力によつて乱気流が発生する。

雷鳴が轟く中、メガレックウザは莫大なエネルギーを纏いながら地
面に向かって突っ込んでいった。

「む、無茶をする子ね……」

下手に衝撃を与えると地下が崩落するかもしれない。だから、わた
しは地下へ向かつて穴を掘り進める作戦を取れなかった。それなの
に、アクセルくんは躊躇う事なくメガレックウザの必殺技で地面に大
穴を空けてしまった。

これが正解というわけではないだろう。だけど、彼の思い切りに
よつて地下への道が開けた。

「今行くぞ、セラ！」

レックウザをモンスターボールに戻して、ファイアローと共に穴の

先へ飛び込んでいくアクセルくん。わたしも急いでエアームドと共に後を追いかけた。

自由落下よりも少し早い速度で降りたのに、地面に辿り着いたのは数十秒も経ってからだだった。かなり深い。

「ここが？」

「間違いないよ。この壁画、アルトと一緒に見たものだ」

彼が指さした先にはたくさんさんのポケモンの絵が描かれていた。

一体、誰が何の為に描いたのだろうか？

「急ごう！ こつちだ！」

「セラちゃんの居場所が分かるの!？」

「分からない！ だけど、こつちに祭壇があつたんだ！ セラを攫つたヤツが何を企んでるのか分からないけど、ここに連れてきたんなら、絶対あそこに関係がある！ サンダース！」

アクセルくんはファイアローからサンダースに入れ替えて、フラッシュを発動させた。

「フラッシュを使ったら敵に気づかれるわよ!？」

「それでいい！ 敵が来るなら、そつちにセラがいるって事だろ！」

なんて子だろう。彼は理性的に無茶が出来る子だ。

「来た！」

どうやら、餌に食いついたようだ。通路の奥から足音が聞こえてくる。

わたしがグソクムシャを繰り出そうとすると、アクセルくんが手で制止した。

「ミリガンは連戦してたんだろ？ こいつらはオレがやる！ いくぞ、クロバット！ ちょうおんぱ！」

敵の姿が見える前にちょうおんぱを放つ。わたし達以外のすべてが敵という状況だからこそ出来る暴挙だ。

「サンダース、フラッシュを全開だ！」

「ダース！」

ちょうおんぱを食らわせた敵の方へサンダースが加速していく。そして、まばゆい光を混乱中のトレーナーに向けて放射する。

阿鼻叫喚の地獄絵図だ。誰も彼もが目を抑えながらわけもわからず混乱している。

「おっし、でんじはだ！」

「ダースー！」

情け容赦一切なしの連続攻撃。襲い掛かって来る筈だったヴリル教団の団員達はわたし達と接触する前に戦闘不能にさせられてしまった。

卑劣とは言わない。これは公式戦ではないし、そもそも、相手は十歳の女の子を拉致した犯罪集団だ。

「ついた！」

狭い通路を抜けた先は広大な広場だった。巨大な壁画と祭壇がある。

「侵入者め！」

「まさか、埋めた筈の亀裂を掘り返して侵入してくるとは！」

「……来てしまったのか」

わたし達を団員達に取り囲んでいる。

何人かの団員の様子がおかしい。

「タズナのおっちゃん。それに、ケンゴ兄ちゃん。そっちにいるって事は、そうなんだな」

アクセルくんは彼らを知っているようだ。

名指しされた団員達は表情を曇らせている。

「みんなが村を襲った連中の側にいる理由は知らねーけど、邪魔すんなら全員叩き潰す！　いくぞ、フーパー！」

「おっでましー！」

一瞬、言葉を失った。

彼がくり出したのは伝説のポケモン・フーパーだった。

カロスで大事件を巻き起こし、つい最近、クセルセス高原でヴェルトーゼがくり出し、猛威を振るったポケモンだ。

どうして？　何故？　どうやって？

様々な疑問が脳裏を駆け巡る間にアクセルくんが動いた。

「フーパー！　オレはセラを助きたい！　だから、力を貸してくれ！」

「おっまかせー！」

可愛らしい声と共にフーパの体が光に包まれる。

そして、現れたのは恐ろしい姿の魔神。

「いじげんホールで全員まとめてアガリア警察が集まってるメルカトに送ってやれ！」

《オーデーマーシーー！》

さつきまでの可愛い声とは正反対の恐ろしい声と共に、団員達の足元に巨大な穴が開いた。抵抗する間もなく落ちていく。フーパの出現に虚を突かれたせいだろう。

アクセルくんはメルカトに送れと命じていた。あそこには彼の言う通り、アガリア警察の精鋭が集まっているし、なによりもナザレがいる。きつと対処してくれる筈だ。

「よし、いくぞー！」

《イクゾー！ イクゾー！》

「キイツー！」

「ダースー！」

邪魔者はいなくなり、わたし達は祭壇へ向かった。

すると、そこには彼女がいた。

桃色の髪、緑の瞳。間違いない。セラちゃんだ。

「セラー！ 助けに来たぞー！」

彼女の無事を確かめられて、アクセルくんの表情が輝いた。

「……だ、れ？」

「え？」

様子がおかしい。

「誰って、オレだよ！ アクセルだ！」

からかわれたと思ったのか、アクセルくんは憤慨した様子で叫んだ。

「アクセル？ キミはワタシを知っているの？」

「はあ？ 幼馴染なんだから、知ってるに決まってるんだろ！ さつきから、何言ってるんだよ！」

やっぱり、何かがおかしい。

「セラちゃん！ まさか、ヴェルトーゼになにかされたの!？」

「セラ……？ ワタシは、ちがう。ワタシは……、ボクは……、オレは……、アタシは……」

セラちゃんは焦点の定まらない表情でうわ言のように何かをつぶやき始めた。

「そう、ワタシはボクで、オレで、アタシで」

「お、おい、セラ！ どうしちやっただよ!？」

血相を変えて叫ぶアクセルくんはセラちゃんは言った。

「ワタシはダークライ」

「アクセルくん、さがって!」

わたしは急いで彼の腕を引っ張った。

セラちゃんの体を黒いもやが覆っていく。そして、猛烈な敵意を叩きつけられた。

「ダークライ……?」

アクセルくんは戸惑っている。

「ヴェルトーゼね。彼のダークライがセラちゃんに何かしたに違いないわ」

「なんだって!?! って、あれ!?!」

驚きながら、アクセルくんは何かを見つけたように声を上げた。

「モンテロ博士!?!」

彼の視線の先には祭壇の影で倒れている老人の姿があった。たしかに、彼はヴェゼール・ヴィレッジのポケモン博士であるモンテロだった。

けれど、そこに倒れていたのは彼だけではなかった。

「ヴェルトーゼ!?!」

モンテロの傍にはヴェルトーゼの姿まであった。

眠っているだけのように見える。だけど、奇妙なほど静かで、胸が欠片も動いていない。

「まさか!?!」

その時だった。突然、何かが崩れる音がした。

「な、なに!?!」

「壁画が!？」

壁画が崩れ始めていた。そして、その向こうに巨大な目が浮かんでいた。

「なんだ、あれ!?! 眼!?!」

「違う! あれは……ッ!」

更に崩れていく壁画。そして、徐々に眼以外の姿が明らかになっていった。

黒い角、赤い体、禍々しい翼。

「ポケ、モン?」

第六話 『VSカラマネロ』

アンノーンの空間から更に下層へ降りていく。現れるポケモン達はいずれも強敵揃いだ。

「キテルグマ、アームハンマー！」

「キイイイイッ！」

「バレット、後ろから来てます！」

「レントラー、ワイルドボルトだ！」

「エリザ、さがれ！ ガブリアス、ドラゴンクロー！」

四人で互いをフォローし合いながら進んでいく。もう、一撃で落とせるポケモンは出てこなくなった。

「フリーデインだ！」

バレットの前にフリーデインが姿を現した。

「ボルトチェンジ！」

バレットは即座にレントラーをライチュウに切り替えた。

「しんそく！」

これまでにフリーデインと遭遇した回数は三回。そのいずれも大苦戦を強いられた。

サイコキネシス、さいみんじゅつ、みらいよちも厄介だが、なによりもサイコフィールドを使われるのがまずい。他のポケモン達まで強化されてしまう上、しんそくを筆頭に先制攻撃を繰り返す技が封じられてしまう。

だから、出てきた瞬間に何もさせずに倒す。

「キテルグマ、畳み掛けるぞ！ アイアンヘッド！」

「キイイイイイッ！」

ライチュウのしんそくでよろめいたフリーデインにキテルグマがアイアンヘッドを叩き込む。

なんとかノックアウトしてくれたようだ。

「階段だ！」

俺達は落ちるような勢いで階段を駆け下りた。

前の階層のポケモンは次の階層まで追ってこない。これで一度り

セット出来る。

「つて、もう来ましたよ!?!」

エリザが悲鳴をあげた。団体のお出まじだった。

第六話『VSカラマネロ』

「バリバリ!」

「ジェラジェーラ!」

「ソーナンス!」

「リーパー」

「フリーデインツ!」

フリーデインがいる。真っ先に倒そうとアギトのガブリアスが突っ込むと、ソーナンスが前面に躍り出た。

「まずい! 迂闊に攻撃するとカウンターが来ますよ!」

ソーナンスはがまんポケモン。自分からは決して攻撃を加えないポケモンだと言われている。けれど、一度攻撃を受ければ猛烈な反撃を繰り出すポケモンでもある。

「フリーデインを倒さないと形勢が不利になる! だから、アルト!」

俺は頷いた。ソーナンスは一体だ。要するに、反撃出来る相手も一体だけ。

「キテルグマ、はかいこうせん!」

「キイイイイイッ!」

ガブリアスがドラゴンクローでソーナンスを襲い、その隙にキテルグマがはかいこうせんをフリーデインを強襲する。ガブリアスがダメージを受けてしまうが、これでフリーデインを沈められる筈だ。

「なっ!?!」

驚愕の声があがる。

ソーナンスはドラゴンクローをそのまま受けた。そして、ミラーコートを発動させた。

「フリーデインを守った!?!」

「まずい!?!」

はかいこうせんが跳ね返ってくる。キテルグマは反動で動けない。「しんそくでキテルグマを蹴り飛ばせ!」

「ライラーイ！」

「クマ!？」

間一髪、ライチュウが間に合った。蹴り飛ばされたキテルグマは跳ね返ってきたはかいこうせんの射線上から逃れる事が出来た。

「あのソーナンス、気に入った！」

アギトはモンスターボールをよろよろのソーナンスに向かって投げつけた。

「ゲットだ！」

「おまつ、この状況で!？」

「いえ、ベストです！ ソーナンスがいなければ、憂いなく攻撃が出来る！」

「待つて、サイコフィールドがくる！」

発動されてしまった。黒い光が周囲を取り囲む。

「塗り替える！ ボルトチェンジ！」

「ラーイ！」

雷と共にライチュウがモンスターボールに帰り、代わりにレントラーが飛び出した。

「エレキフィールド！」

「ガウツ！」

レントラーがでんきエネルギーを集め始めると、同時にサイコカッターが飛んできた。

サイコフィールドを塗り替えさせないつもりだ。

さっきのソーナンスといい、このポケモン達、野生とは思えない程連携が取れている。

「これは……、トレーナーの代わりに統率を取っているポケモンがいるな」

アギトがソーナンスのモンスターボールを回収しながら言った。

「統率を？」

「種族の異なるポケモン同士が統率者もなしにここまで連携出来る筈がない。これまでの階層とは次元が違うな……」

統率者。たしかに、同じ種族のポケモンの群れには必ずリーダーが

いるけれど、バトルでここまで統制を取れるリーダーの話は聞いた事がない。

そんなすごいポケモンがいるんだ。

「どのポケモンだろう？」

「きつと、統率する為に指示を飛ばせる位置にいる筈ですよ！」

「いや、エスパークタイプならテレパスを使う可能性もある」

「だが、戦場を見渡せる場所にいる筈だ」

戦場が見渡せる場所。

「あそこだ！」

前衛でもないのにポケモンが集まっている場所がある。そこから前面まで一直線にポケモンがいない空間がある。きつと、あそこで統率を取っているポケモンの視界を塞がない為だ。

これだけの規模の軍団をそこまで精密に指揮出来るなんて、人間でも困難な筈だ。

戦いたい！ そうすれば、もつともつと高みへ到れる！

「一緒にいこう、キテルグマ！」

「オレ達も合わせるぞ、ガブリアス！」

俺の意図を察したのだろう。アギトも同時に動いた。

「もつと、もつと、もつと！ 遥かな高みへ！ 『ぜんりよくむそうげきれつけん』！」

「烈火の如く燃える魂！ 受けろ、『ダイナミックフルフレイム』！」

極大エネルギーのかくとうとほのおのZわざが重なり合い、統率者に向かって突き進んでいく。すると、ソーナンス同様に自己犠牲を厭わず次々にポケモン達が射線上に躍り出て、ひかりのかべやしんぴのまもりを使ってZわざの威力を削りながら倒れていく。

その姿は、少し異様だった。

「これ、やらせてんだよな？」

バレットは警戒心を高めながら言った。

「ええ、野生のポケモンが自分から他種族の為にその身を盾にするなどあり得ません」

「そうなの？」

問いかけると、エリザは頷いた。

「他種族同士でもコミュニケーションを取る事は珍しくありません。助け合う事だつてあります。ですが、一方的に自分から進んでダメージを背負う事はありません。野生の献身は群れの存続の為のみに存在するのですから！」

乙わぎがかき消された。だけど、道は格段に広がった。

「正体を掴ませてもらうぞ、統率者！」

「いけ、キテルグマ！」

「ガブウ！」

「キイイイッ！」

ガブリアスとキテルグマが統率者への道突き進んでいく。

「今なら行ける！ エレキフィールド！」

フィールドが塗り替えられていく。

「よし！ ボルトチェンジ！」

それと同時にバレットはレントラーからライチュウに切り替えた。

「しんそくで援護だ、ライチュウ！」

「ライライライライ！」

既に統率者を囲むポケモン達と接敵しているキテルグマとガブリアスの下へライチュウが到達する。

「ばかぢから！」

「ドラゴンクロー！」

蹴散らすつもりだったのに、防がれた。キテルグマのばかぢからを封殺したのはバリヤードで、ガブリアスのドラゴンクローを受け止めたのはエルレイドだ。

そこへブーピッグとチャーレムが襲い掛かった。

「ねこだまし！」

「ラーイ！」

キテルグマとブーピッグの間にライチュウが割り込んだ。ねこだましでブーピッグは怯んでいる。

「バリヤードにしんそく！」

すかさずキテルグマを封じているバリヤードにしんそくで攻撃を

加えるライチユウ。

おかげでキテルグマが解放された。

「チャーレムにアームハンマー!」

「キイイイッ!」

キテルグマがガブリアスのドラゴンクローと斬り合っているエルレイドにアームハンマーを叩き込む。エルレイドが吹き飛ばされた事でガブリアスも自由になった。

「ガブリアス! りゅうせいぐん!」

「ガブウツ!」

真上に打ち上げられるりゅうせいぐん。

「統率者の方へはかいこうせん!」

「キイイイッ!」

ダメ押しだ。統率者を守る為にポケモン達が慌てた様子で統率者を守るポケモンの方へ戻っていく。だけど、もう防ぐ為のわざを使う暇はない。

自身の体を盾にした事でエルレイド達は戦闘不能になった。

残る盾はルナトーンとソルロック、メタグロスのみ。

ようやく、統率者の姿を見る事が出来た。

「カラマネロ!」

統率者の正体はカラマネロだった。

「なるほど、統率の正体はさいみんじゅつか!」

「カラマネロのさいみんじゅつはポケモン界随一ですからね……」

カラマネロ。思い出すのはリールシテイでヴォルフと共に戦ったロイドだ。

彼はとんでもなく強かった。伝説のポケモンであるフリーザーを真正面から打倒し、常に次の一手を打ち続けていた。ザラクが来てくれないければ、俺達は負けていたかも知れない。

「カラマネロ! さいみんじゅつを使ったとしても、こんなにたくさんのポケモンに指示を出せるなんて、すごいよ!」

俺は空のモンスターボールを手にとった。

「俺、お前が欲しい!」

「アルト!?!」

「マジか!?!」

「……オレも欲しいが、ソーナンスをゲットしたばかりだしな」

エリザとバレットは驚き、アギトは少し残念そうにしながらガブリアスを下げた。

「エリザ、バレット! カラマネロ、俺がもらってもいい!?!」

「ど、どうぞ」

「ツハ、好きにしるよ。オレはあっちのフリーデインをもらうぜ!」

エリザは何故か引いているけど、バレットはさっさと切り替えてフリーデインの方へ向かった。

「こ、これはわたしも新しいポケモンをゲットする流れですかね？」

「よし、メタグロス! あなたに決めました!」

「メタ!?!」

エリザはメタグロスに目をつけたようだ。

「いくよ、カラマネロ!」

「ネーロ!」

受けて立つ。そう言っている気がした。

「キテルグマ、アームハンマー!」

「キイイイッ!」

「ネーロ!」

拳を振り上げるキテルグマにカラマネロが接近してくる。

ロイドと戦った時と同じだ。カラマネロはばかちからでアームハ

ンマーを止めた。

本来、ばかちからを使うと反動でパワーが落ちる。だけど、カラマネロの場合は逆だ。落ちるところか、パワーがあがる。

「だけど!」

「キテルグマ! かくとうセンスはお前の方が上だ!」

「キイイイッ!」

キテルグマは後ろに跳んだ。

「マロ!?!」

突然の事にカラマネロがよろめく。

「踏み込め！」

「キイイイッ！」

そこへキテルグマが踏み込んでいく。再びのアームハンマーをカラマネロが防ごうとする。

「そのままアイアンヘッド！」

アームハンマーはカラマネロを狙ったものじゃない。防がせるための罠だ。

アームハンマーを防ごうとしたカラマネロは切り替わったアイアンヘッドに即座に合わせられなかった。

本来、かくとうタイプとエスパータイプならエスパータイプの方が有利だ。

だけど、それは技に限った話だ。接近戦でかくとうタイプが遅れを取る事はない。

「ネッロー！」

アイアンヘッドで吹き飛ばされたカラマネロはサイコカッターをくり出してきた。

「よく見て躲せ！」

「キイッ！ キイッ！ キイッ！ キイイイイッ！」

「ネロオ!?!」

サイコカッターは発動したポケモンの思いのままに軌道を変えられる技だ。だけど、避けながら接近してくるキテルグマの威圧感に冷静さを失っている。躲された後の軌道修正が出来ていない。

「アームハンマー！」

「キイイイッ！」

殴り飛ばされ、カラマネロは壁に激突した。

「はかいこうせん！」

「マ、マロオオオ!?!」

はかいこうせんが直撃した。

今だ！

「いけ、モンスターボール！」

モンスターボールを投げつけると、カラマネロはすんなりボールの

中へ吸い込まれていった。しばらく揺れた後、カチツという音がした。

「カラマネロ、ゲットだ！」

よく考えると、バトルでゲットするのはキテルグマ以来だ。

しかも、キテルグマの時は偶然的なものだった。

「これからよろしくね、カラマネロ！」

どうやら、エリザ達も目当てのポケモンをゲット出来たらしい。

俺達は再び下層目指して走り始めた。

第七話 『王龍』

「ダブルニードル！」

「スピッツ！」

ここは九十八階層。連戦に続く連戦。その上、出てくるポケモンも軒並み強力で、俺達の手持ちポケモン達はみんなヘトヘトになっていた。交代で休憩させても間に合わない。

「ど、どうします？ 撤退しますか？」

エリザのポケモンはすでにフリーザー以外が体力の限界で戦えなくなっている。

「いや、ここまで来たなら先に進もう」

アギトは言った。しかし、彼のポケモンもリザードンしか残っていない。

「つってもな……。今なら戻れるが、これ以上踏み込むと戻る為の体力が残らないぞ」

バレットは疲れ果てた様子のレントラーを気にかけてながら言った。彼のポケモンは全員がまだ戦闘可能だけど、それも数回が限度だろう程に疲弊している。

「大丈夫だよ、みんな」

俺は言った。

「いざとなったら」

ボールホルダーからマスターボールを取り外す。

「……フープですか」

「うん」

フープのいじげんホールなら安全な場所まで一瞬で移動出来る。

「それに、俺にはギヤラドスがいる」

正直、ゲットした経緯が経緯だから、ちゃんと言う事を聞いてくれるか不安だ。

だけど、ギヤラドスは自分からモンスターボールに入ってくれた。きつと力を貸してくれる。

「まあ、ゲッコウガやギルガルドもピンピンしていますし、アルトは大丈

夫でしようね」

「……仕方ない。フリーデイン！」

バレットはゲットしたばかりのフリーデインをくり出した。

「ここからはお前でいく」

「フリーデインッ！」

フリーデインは気合十分だ。

俺達は次の階層に向かった。

第七話『王龍』

「ギャラドス！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ゲットしてから初めてモンスターボールから出したギャラドスは、

早速襲い掛かってきたポケモン達を威圧した。

ポケモン図鑑でわざを確認する。

「よし！ ギャラドス、ハイドロポンプだ！」

「ギャオオオオオオオオオン!!」

ギャラドスは素直に命令に従ってくれた。放たれたハイドロポン

プの威力は凄まじい。

相手は桁外れの能力を有している筈なのに、まともな抵抗すら出来

ずに押し流されていく。

ゲッコウガのハイドロカノンと撃ち合っても、もしかしたら拮抗す

るかもしれない。

「そこでぜったいれいどです！」

すかさず、濡れたポケモン達にぜったいれいどを発動させるエリ

ザ。

水に濡れているポケモン達は為す術なく凍りついていく。

一撃必殺だ。

「向こうに階段があるぞ！」

「進もう！」

ギャラドスやみんなと一緒に敵を蹴散らしていく。

次が最後の階層だ。階段まで、後少し。

「止まれ！」

アギトが叫んだ。直後、なにか、巨大なものが上から降ってきた。

「ジジジジ」

「ピコピコ、ピコ」

「ピピ、ピピピ」

一体ではなかった。

「レジロック、レジアイス、レジスチル!」

「うそだろ!?! こんなにポンポン伝説に会えるもんかよ!?!」

エリザとバレットは驚愕のあまり眼を見開いている。

たしかに、俺達は旅の中で幾度も伝説のポケモンを目撃して来た。だけど、普通は一生の内に一度でも見られたら幸運だと言われている程、伝説のポケモンの目撃情報は少ない。

だから、二人が驚くのも当然だ。

「とにかく、先に進むには倒すしかない!」

「そのとおりだ!」

俺はギャラドスを、アギトはリザードンを前衛に出す。エリザとバレットも意識を切り替えてフリーザーとエレキブルを後衛に出した。「最後の階層前の門番……、というところか?」

「そういう事なのでしようね」

「トリプルバトルか、懐かしいな」

「そうだね」

トリプルバトルはリールシティでエリザとバレットと共にルーラーに挑んだ日の事を思い出す。

もつとも、今日の俺達は三人じゃなくて、四人だけだね。

「いくよ、みんな!」

「ああ!」

「おう!」

「はい!」

「ギャオオオオオオオン!」

「グオオオオオオオオオオ!」

「キュイ!」

「ブルツ!」

ポケモン達もみんな気合は十分だ。

「ギャラドス！ レジロックにハイドロポンプ！」

「リザードン、レジアイスにかえんほうしゃ！」

ギャラドスとリザードンのハイドロポンプとかえんほうしゃがレジロックとレジアイスにそれぞれ命中した。二体が吹き飛ばされ、レジスチルが孤立する。

「今だ、エレキブル！ レジスチルにけたぐりだ！」

そこにエレキブルが突っ込んでいく。体重の重いレジスチルにけたぐりはこうかばつぐんだ。

「ピピ、ピピピピピ！」

押し切ろうとわざの指示を出す前にレジアイスがれいとうビームを放った。

「左に躲せ！」

「ギャオツ！」

ギャラドスは機敏な動きで回避した。すると、今度はレジロックのストーンエッジがリザードンを襲う。そして、ほぼ同時にレジスチルのラスターカノンがエレキブルに放たれた。

「後ろにさがれ、エレキブル！」

「飛び上がれ、リザードン！」

「ギャラドス！ アクアテールでラスターカノンを打ち返せ！」

後ろにさがったエレキブルを追尾してくるラスターカノンをギャラドスは見事にアクアテールで射手であるレジスチルに打ち返した。

強いだけじゃない。速いし、器用だ。

「ピピピピピ！」

「おっと、させませんよ！ れいとうビーム！」

一箇所に固まった形になったギャラドスとエレキブルにレジアイスがれいとうビームを放つが、これをエリザのフリーザーがれいとうビームで相殺した。

地面が凍てつき、まるでスケートのリンクのようだ。

「この足場はエレキブルには不利か！ ボルトチェンジ！」

バレットはエレキブルとフリーデインを入れ替えた。

フリーデインはサイコキネシスで自らを浮かせている。

「リザードン、レジロックにかえんほうしゃ！」

わざを発動しようとしていたレジロックの動きをアギトのリザードンが封殺した。

「ギャラドス、りゅうのはどうー！」

ギャラドスのりゅうのはどうがレジロックを襲う。

「アギト、レジスチルをー！」

「ああ、リザードン！」

ポケモンのタイプには相性がある。ギャラドスとリザードンは立ち位置を入れ替えた。

最初のエレキブルのけたぐりとラスターカーノンを受けて弱っているレジスチルにかえんほうしゃを放った。

「決めるぞ、リザードン！」

アギトがダイナミックフルフレイムの体勢に入った。

こつちも負けていられない。

「ギャラドス！」

「ギャオオオオオオオオン！」

意識を同調させる。大丈夫な筈だ。これまでも、みんなと意識を重ねて来た。

ギャラドスは俺の言うことを聞いてくれている。一緒に戦っている。

だから、心を一つに出来る……、はず。

「あ、れ？」

寒気がした。視界が何かに塗りつぶされていく。

おかしい。今までと違う。

スピアーのように、俺を想ってくれない。

キテルグマのように、俺と手を取り合ってくれない。

ゲッコウガのように、俺を導いてくれない。

ギルガルドのように、俺を支えてくれない。

カラマネロのように、俺を認めてくれない。

「あがつ……」

エリザが駆け寄ってきて、なにかを叫んでいる。だけど、なにも聞こえない。耳が機能を失っている。なんだ、これ？

「これ、は」
視界が暗転する。そして、次の瞬間、目の前には知らない光景が広がった。

焼き尽くされた街。それを俺は見下ろしている。怒りのままに、俺が焼いている。

逃げ惑う人間達を気色が悪いと感じながら、燃え盛る建物を噛いながら、目に映るすべての人間の痕跡を不快に思いながら、俺ははかいのエネルギーを大地に放つ。

壊せ。壊せ。壊せ。
殺せ。殺せ。殺せ。

思考がまとまらなくなっていく。壊し、殺す事以外を考えられなくなっていく。

お、れハ、スベテヲ……、ハカイ、す……。

「アルト！」

頬に衝撃を感じて、目が覚めた。
目の前にはエリザの顔があった。

「え、エリザ？」

「大丈夫ですか!？」

「う、うん」

俺はギャラドスを見た。ギャラドスも俺を見ていた。

さつき、俺はギャラドスになっていた。だけど、あと少しで俺はギャラドスに呑み込まれてしまいそうだった。

拒絶された？ 違う。ギャラドスは心を開いてくれた。だから、同調出来た。

俺の覚悟が足りなかったんだ。ただ、アギトと一緒に乙わざを使いたい。その程度の考えでギャラドスの心と接してしまった。

だから、ギャラドスの心に圧倒されてしまった。

「ごめん、ギャラドス！ もう一度、お願い！」

「アルト!? なに言ってるんですか! 今、あなた……」
「大丈夫だよ、エリザ。今度はちゃんとギャラドスと心を一つにしてみせる!」

心配してくれるエリザに笑いかけてから、俺はギャラドスを見つめた。

ギャラドスも俺をジッと見つめている。

「一緒にいこう、ギャラドス!」

「ギャオオオオオオオオツ!」

ギャラドスの体をみずのエネルギーが取り巻いていく。

青い体がより深い蒼へ変わっていく。

『ギャラドス』

さつきまでの破壊と殺意に満ちた感情とは違う。

なにか、あたたかいものに包まれたような心地よい感情が浮かんでくる。

『一緒にいこう、ギャラドス』

聞き覚えのある声が聞こえる。

これは、ヴリル王の声だ。あたたかくて、おおきくて、ちからづよい。

ギャラドスは人間を憎んでいた。そして、一つの都市を滅ぼした。それから、数多くの人間やポケモンと戦い、傷ついた。

どうして人間が憎いのか、この怒りがどこからくるのか、それすらも分からずに苦しみ、暴れ続けるギャラドスの前に現れたヴリル王はギャラドスに安息を与えてくれた。

はじめて、人間を愛した。破壊するのではなく、守りたいと想った。彼の意志に従い、永劫の忠誠を誓った。

「ギャラドス。君には戦わないといけない相手がいるんだね」

ここにいるのも、俺に従うのも、すべてはヴリル王の意志を守るため。

未来に襲いかかる滅びの使者を打ち倒す。

それが何なのか、どこからくるのか、いつくるのか、なにも分からない。

だけど、それがギヤラドスのやりたい事なら、それは俺のやりたい事でもある。

「ギヤラドス」

もう一度、言う。

「一緒に行こう、ギヤラドス！」

「ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツ!!」

すでにレジスチルはアギトが倒していた。

残るレジアイスとレジロックはエリザのフリーザーとバレットのフリーデンがそれぞれ抑えている。

「受け止める、レジアイス、レジロック！　これが俺とギヤラドスのすべてだ！」

ギヤラドスを取り巻くみずエネルギーが際限なく高まっていく。

『「スーパーアクアトルネード」!!』

ギヤラドスがレジロックとレジアイスの周囲を回り始める。徐々に速く、やがてはみずエネルギーの竜巻と化し、閉じ込められた二体の伝説は為す術なくダメージを受けていく。

「ピ。ピ。ピ。ピ。」

レジロックが倒れた瞬間、レジアイスはれいとうビームを放った。水の渦が瞬間的に凍りつく。だけど、ギヤラドスはすでに次の行動に移っている。

「はかいこうせん！」

レジアイスの真上に移動したギヤラドスは大きく開かれた口からはかいこうせんを放った。

「ピ。ピ。ピ。」

崩れ落ちるレジアイス。

「アルト」

勝ったと確信した時、エリザがちよんちよんと肩を叩いてきた。

「あのレジアイス、わたしがもらっちゃってもいいですか？」

「うん、いいよ」

「ふっふー！　ありがとうございます！　いきなさい、モンスターボール！」

エリザの投げたモンスターボールがレジアイスにヒットする。抵抗はほとんどなく、エリザはレジアイスをゲットした。

「レジロックとレジスチルはどうする?」

「オレはいい」

「オレも」

正直、俺もゲットしたいとは思わなかった。なんというか、彼らはあまりにも無機質に感じる。

「な、なんか、わたしだけ空気読めてない感が……」

「いつもの事だろ」

「気にするな」

「さあ、最後の階層へ降りよう!」

「ちよつと!?! それどういう意味ですか! アギトとアルトも流さないでください!」

階段を降りながら、俺はギヤラドスのお腹を撫でた。

「ギヤオ?」

「これからもよろしくね、ギヤラドス!」

「ギヤオ!」

第八話 『最後のアルトギア手記』

大迷宮の最下層に到達した。そこは想像していたよりも小さな空間で、入ってすぐに全体を見渡す事が出来た。野生ポケモンの姿はなく、奥に光の渦のようなものがみえる。

「あれは？」

「ポケモンのわざか？」

「いや、ポケモンそのものじゃないか？」

「もつと近くに行かないとわかりませんが……」

迂闊に近づいていいものか分からない。

「先手必勝ではかいこうせんとぜったいれいどとサイコキネシスと10まんボルトを打ち込む？」

「容赦無き過ぎだろ」

「アルトの意見も一理はありますが、下手に打ち込んでミラーコートを使われると大惨事ですよ」

「なら、警戒しながら近付こう。ここで言い合っても埒が明かない」

アギトの意見を採用して、俺達は光の渦へ向かって歩き始めた。

あまりにも何事もなく進めるものだから、次の瞬間に何か来るのではないかと疑心暗鬼になりつつ歩を進めていく。

「……なんにも起きませんでしたね」

「つてか、ポケモンじゃなかったな」

最後まで何も起きなかった。

第八話 『最後のアルトギア手記』

「これは本だな」

「もしかして、アルトギア手記!？」

光の渦の中心にあるのは一冊の本だった。表紙は真っ白。だけど、装丁は今まで見てきたアルトギア手記にそっくりだ。

「最後のアルトギア手記か」

バレットは興味深そうに手記を見つめている。

俺はカバンから残り三冊のアルトギア手記を取り出した。

エリザが持っていた『青の書』。

メルカトでミリガンと戦っていた時に投げ込まれた『赤の書』と『黒の書』。

メルカトを離れる時、いつの間にか『赤の書』と『黒の書』もカバンの中に収まっていた。

誰かに預ける気にもなれなくて、ずっと持ち歩いてきたけれど、ついに四冊すべてが揃った。

「おかしいですね……」

「なにが？」

エリザは訝しげに『白の書』を見つめている。

『白の書』はメルカトに封印されていた筈のものです。それに、いずれかの書が『極秘指定文書』として政府の管理下に置かれていると聞いています。青をわたしが持っていて、赤と黒がヴリル教団の手に渡っていた以上、白の書は政府が管理している筈なんです」

「単純に、管理する為にココに置いてるんじゃないのか？」

バレットが言った。

「ここはポケモンリーグの公認を受けたフィオレジムのジムリーダーであるドロシーが管理している場所だ。別にありえない話じゃないだろ」

「あり得ませんよー！」

エリザが叫んだ。

「え？」

持論に自信があつたのだろう。バレットはちよつとショックを受けている。

「わたし達がここに辿り着けている時点で『極秘指定文書』の置き場所には不適切です！ たしかに、ある意味で超強力な野生のポケモン達を守ってくれているとも言えますが、彼らは別に警備員でもなんでもありません！」

「……たしかに、その通りだな」

アギトが言った。

「それに、いくら公認を受けていると言っても、ジムリーダーに『極秘

指定文書』を任せるとは思えない。ポケモンリーグはたしかに政府の管理下にあるが、ほぼ独立している。だからこそ、チャンピオンや四天王は超法規的な権限を持つと言われている。あれだけ問題を起こしているザラクが逮捕もされず、訴訟も受けていない理由がそれだ。ミリガンを筆頭としているアガリア警察も、本来の意味での警察組織じゃないしな」

「えっ!? アガリア警察って、警察じゃないの!?!」

アギトの言葉に今まで聞いたどんな話よりも驚いた。

「ああ、アガリア警察はミリガンの超法規的な権限の下で組織されたアガリアの自警団だ。だから、彼女は筆頭と呼ばれている。他の地方に行けば分かるが、本来の警察はジュンサーという女性が中心となっている組織だ。嘘かホントか、すべてのジュンサーが血縁関係にあるとも聞いている。その上位組織として国際警察が存在しているが、アガリア警察はどちらとも接点を持っていないんだ」

「どうして?」

「シエルから聞いた話だが、政府に権限を移譲するまで、アガリア王家が他の地方との接触を控えていた事が原因らしい。内政干渉を嫌ったのかもしれないと言っていた」

「内政干渉って?」

「要するに、アガリア地方の決めごとを他の地方や国際警察に口を挟まれたくなかったという事だ。それはトップが政府に入れ替わってからも変わらないらしい」

「それ、アガリア警察が出来る前は どうして たんだ?」

バレットが聞いた。アギトの言葉が本当なら、アガリア警察が出来たのはごく最近という事になる。だって、ミリガンだって十代だ。

「それ以前は各地の自警団が頑張っていたそうだ。それを取り纏めたのがミリガンという事らしい。彼女に四大魔境の管理者でもないのにドロシー、レムハザード、ナザレと共にブラックランクを与えられている理由はアガリア警察を組織した事が功績として認められた為だ。実際、アガリア地方の治安や安全が格段にあがったからな」

やっぱり、ミリガンはすごい人だ。俺があと十年生きる中で、自分

よりも大人な人達の集団を纏め上げて、街の治安や安全を守るなんて出来るとは思えない。

そもそも、やろうと思わない。

友達の為ならともかく、赤の他人の為にそこまで頑張ろうとは思えない。

ミリガンの力なら、そんな事をしなくても身近な人達なら簡単に守れる筈だ。だけど、彼女はそれで満足しなかった。なんて、すごい人だろう。

「話がずれたな。要するに、ポケモンリーグの下部組織であるジムのジムリーダーに政府が『極秘指定文書』の取り扱いを丸投げするなんて事はありえないわけだ」

「……なるほど、な。じゃあ、なんで、これはココにあるんだ？」

「そ・れ・は・ねー！」

びっくりした。いつの間にか、俺達の背後にドロシーがいた。

「ジムリーダー!?!」

「なんでここに!?! どうやって!?!」

最近、バレットとエリザの反応が似てきた気がする。どっちがどっちに似てきたというより、両方が両方に影響を受けている感じ。

「どうやってって、普通に歩いて追いかけてきただけだよー」

その通りなのだろう。この人は、この大迷宮の管理を任せられている人だ。

自分で攻略出来ない場所の管理を任せられる筈がない。

「そ・れ・よ・り! パンパカパーン! 大迷宮の完全攻略おめでとー!
君達が三人目、四人目、五人目、六人目の攻略者だよ! ドンドンパフパフ!」

そうだった。思った以上に簡単に攻略出来てしまったから、忘れていた。

この大迷宮を完全攻略したトレーナーはザラクだけだった筈だ。そうになると、エリザとアギトの方が間違っていて、実際はバレットの持論が正しかったのかもしれない。

よく考えると、彼女はジムリーダーであると同時に大迷宮の管理人

だ。だからこそ、『白の書』の管理を任せる相手としてはうってつけな気もする。

「というわけで、アルトくん」

ドロシーは光の渦から『白の書』を取り出すと、俺に差し出してきた。

「この『空白の書』は君にプレゼント！」

「……空白の書？」

これは『白の書』の筈だ。そして、そう呼ばれている理由は白いからだ。

「そう、これは『空白の書』。中には何も無い。アルトギアが作り上げた最後の魂の器」

「なにも、ない？」

以前、黒の書が開かれた時にヴリル王は最後のアルトギア手記を聖女サラの為のものと言っていた。だから、中にはサラの魂が眠っている筈だ。

「魂には色があるの。アルトギアは青。ヴリルは黒。あの子……、コスラは赤。その魂の色によって、器は色を変える。だけど、この器は白のまま。それは中に誰の魂も入っていないから」

手渡された空白の書を見つめる。開いてみても、中には何も書いていない。

「えっと、これをどうすれば？」

他のアルトギア手記はそれぞれと一度だけだけど語り合う事が出来た。

でも、それ以降は一度も起動していない。

正直、カバンが重くなる以外の意味を感じない。

「必要となる時が来るわ。それまで持つていなさい」

「必要な時？」

「そんなに遠い未来の話じゃないわよ。本当は二人目の攻略者に渡しても良かったのだけど、あの子には不適格だったからね」

「二人目？」

そう言えば、彼女は俺達を三人目、四人目、五人目、六人目と言っ

ていた。

一人目はザラクだ。だとしたら、もう一人は？

「君のよく知っている子だよ。あの子は一人で大迷宮を走破した。ただ、魂の器を扱う為の資格を持っていなかった」

「資格って？」

『『王の血』よ。あの子には、それがなかった。だけど、大迷宮を攻略してみせた。どんな人数を揃えても、どんなポケモンを連れて来ても、本当に強いトレーナーとポケモンでなければ走破出来ないように作ったのにな』

ドロシーは言った。

「王の資格なくして、王に匹敵する存在。それは、嘗ては存在しなかった者。だからこそ、これは奇跡なの」

「ど、ドロシー？」

その笑顔を見て、ゾツとした。

そこに浮かぶ感情は、耐え難いほどの渴望。狂おしいほどの嫉妬。激しいまでの憎悪。

「空白の書は何も語らない。だから、わたしが教えてあげる」

ドロシーが指を鳴らすと、世界が一変した。

「これが最後よ。空白の時代の終焉。ラミタルアとサラわたしたしの物語」

第九話 『アガリアの伝説・上』

一人の女が地下へ通じる階段を降りていく。そこは研究施設になつていた。

「やつほー!」

女は背中を丸めながら羊皮紙にせつせと文字を書き込んでいる青い髪の男の背中を叩いた。

「うわっ!?! ラミタルア! いきなり酷いじゃないか! あーあー、書き直しだよ!」

「ぷっぷー! わたしが暗殺者だったら死んでいたわよ? むしろ、羊皮紙一枚で助かつて万々歳じゃない! 感謝しなさいよね、アルトギア!」

「意味がわからないよ。まったく、キミは相変わらずだな」

ラミタルアとアルトギア。共にアルトギア手記にその名を残す人物達だ。

「それで? なにか、ボクに用があるのかい?」

「アンタを呼びに来たのよ。ヴリルが寂しがっていたからね! こーんな陰気な場所に引き籠もってないで、ヴリルと庭でも走ってきなさいよ!」

「ボク等は子供か!? というか、カレの孤独を癒やすのはキミ達の仕事だろう? ボクはカレの覇道の為に休んでいる暇はないんだ。要件がそれだけなら帰ってくれ」

アルトギアの言葉にラミタルアはカチンと来た。

「このバカ! アンタはヴリルの親友でしょ!? わたし達で代わりに務まるわけじゃないじゃない!」

「親友って……、ボク如きが烏滸がましいにもほどがあるよ。カレは偉大な王で、ボクはマッドな科学者さ。月は太陽に照らしてもらおう事で存在を示せるけど、太陽に月は要らないだろろグエツ!」

ラミタルアはアルトギアにゲンコツを落とした。

涙目になって痛がる彼を彼女は心底腹立たしそうに見下ろしている。

「彼と並び立てる人間なんて、アンタしかいないのよ!? なのに、なんでそんな事を言うのよ! ただ、ちよつと遊んでくればいいだけじゃない! 一緒に笑い合えばいいだけじゃない! なんて、そんな簡単な事も出来ないのよ!?!」

一滴の涙を零しながら怒鳴るラミタルアにアルトギアは困ったように笑った。

「ダメだよ、ラミタルア。ボクはカレの隣に立てない」「なんでよ!?!」

ラミタルアはポロポロと涙を流しながらアルトギアを殴った。「せ、せめてパーで頼むよ」

殴られたところを押さええながら抗議するアルトギアを睨みつけると、ラミタルアは去って行った。

「……仕方ないじゃないか」
ボソリと彼は言った。

「カレとボクは違う。そう思わないと……、ボクは……」

第九話『アガリアの伝説・上』

ラミタルアは王宮を歩いている。

ここは、『王には相応の宮殿が必要だ』と言って、アルトギアがヴリル王に従うポケモン達に命じて建てさせたものだ。

無駄に広く、趣味も悪い。ラミタルアはあまり王宮が好きではなかった。

「サラー」

中庭で花に水を上げているサラの姿が見えた。

声を掛けながら近づいていくラミタルア。

「ラミタルア。どうしたの?」

ラミタルアは彼女の事が好きだった。

穏やかで、慎ましく、花を愛でる姿がとても似合う。

彼女がこうありたいと願う理想の女性像をサラは体現していた。

「聞いてよ、サラ! アルトギアってば、地下で研究ばかりしていてヴリルを蔑ろにするのよ! あんなに寂しがってるのに!」

「仕方のない事よ。彼には彼にしか出来ない仕事があるのだから」

「でも！ ちょっとくらい！」

「ラミタルア」

サラは背を伸ばしてラミタルアの頭を撫でた。彼女は年齢の割に、とても背が低い。

「あなたの気持ちも分かるわ。でも、アルトギアの気持ちも汲んであげて」

「アイツの気持ち？」

「そう。彼の心には、常に茨が巻き付いているの。いずれ、その茨から解き放たれる日が来るわ。それまでは待っていてあげて」

「いばら？ うーん、よく分からない！ でも……、まあ、サラがそう言うなら」

ラミタルアは肩を落とした。

「待っててやるわよ、あのバカを」

「うん」

サラは満足したように微笑んだ。その笑顔をラミタルアは眩しそうに見つめる。

清く、正しく、可愛らしい。彼女の笑顔には抗いがたい魅力がある。

「紅茶を淹れるわ。その椅子に座っていてちょうだい」

「はい！ クッキーもよろしくー！」

「はいはい」

クスクスと笑いながら紅茶の準備をしに行くサラの背中をラミタルアはジツと見つめていた。

本当に素敵な人だと、彼女は思った。

穢れきって、歪みきって、見目の美しさとは正反対の内面を持つ自分とは大違いだ。

「本当は、わたしがいない方がいいんだよね」

分かっているのに、彼から離れる事が出来なかった。

ラミタルア。彼女は奴隷の娘として生を受けた。

生まれた時から人生は決まっっていて、虐げられる事が宿命づけられていた。

けれど、彼女には持って生まれた美貌があった。そして、他の人に

はない力があつた。

当時、ポケモンと人の間に大きな差はなかつた。だから、ポケモンと結婚する人もいた。

彼女には、ポケモンの血が流れていた。そして、彼女は異性を虜にするわざを覚えた。

今日では、『メロメロ』と呼ばれているわざだ。

そのわざを無意識の内に使い、彼女はあらゆる人間を魅了した。

彼女を求める者によって、彼女の主であつた青年は殺された。

その青年も殺された。その青年を殺した者も殺された。

彼女を求める人々は延々と殺し合い続けた。

時には、その殺し合いにポケモンが混ざる事もあつた。

やがて、その殺し合いは戦争に名前を変えた。

ただ生きているだけで、彼女の前には死体が積み重なつた。

泣いても、怒っても、戦争は止まらない。

そうして、一つの国が滅びかけた。

彼女は『傾城の魔女』と呼ばれ、屈強な女性達によつて檻に入れられ、流刑地へ運ばれる事になつた。

彼女は何もしていない。それでも、この扱いを理不尽とは思わなかつた。

ただ、彼女は安堵した。

これで、もう誰も死なない。

流刑地に辿り着いた彼女は絶望した。

そこにも、男達がいた。また、彼女を奪い合つた。

また、死体が積み重なつていく。そう思つた彼女の前に、彼は現れた。

『この女はオレのものだ』

彼はその圧倒的な力でラミタルアを自分のものにした。

けれど、彼は彼女に触れる事すらせずに安全な場所まで連れて行くと去つて行つた。

その時になつて、彼女は彼が自分を救ける為だけに自分を欲したのだと気がついた。

はじめ、下心のない親切を経験した彼女は彼を追い求めた。
はじめ、彼女は恋をした。

『あの人に会いたい』

そう思っ、彼女は脇目も振らずに走り続けた。
欲しい。欲しい。欲しい。欲しい。欲しい。

彼女は彼が欲しかった。そして、その感情こそが彼女に男達が向けていた感情なのだと思解すると、それまでの恐れが消し飛んだ。

誰かを殺してでも欲しい。その感情を理解出来たからだ。

どうして、みんなが自分を奪い合うのか？

どうして、目の前に死体が積み重なっていくのか？

それは、みんなが恋をしているからだ。

恋は素敵なもの。

恋の為に死ぬるのなら、それは本望だ。

だから、死んでいった彼らも幸福だったに違いない。

それまで白黒だった世界が一転した。

七色の極彩色に満ち溢れた世界で、彼女は恋に生き始めた。

『ふっふっふっ！ 色男はっけーん！』

数年も探し回って、ようやく見つけた彼に、彼女は再び恋をする。

なんども恋をして、そして、彼を愛するようになる。

離れられる筈がなかった。

彼がいるから、彼女は生きている。彼と離れば、彼女は死ぬ。

とてもシンプルな答え。

「ヴリル。だーいすき」

彼女は僅かに膨らみ始めた腹部を撫でながら呟いた。

彼に相応しい女性が他にいる事を理解しながらも、彼女は与えられた慈悲を大切に抱きしめ続ける。

◆
ラミタルアは小さな少年と遊んでいる。王宮から離れた場所にある小さな家。その庭でボール遊びをしている。

追い出されたわけではない。彼女は自発的に彼の傍を離れた。

「ほーら、取っついておいで！ コスラー！」

「はい！ ははうえー！」

コスラの存在は彼女を変えた。愛の結晶は彼女の新たな生きる希望となった。

寂しくないと言えば嘘になる。時折、ヴリル王とサラが肩を寄せ合い民衆に手を振る姿を羨ましく思う事が幾度もあった。

それでも、彼女は戻らなかった。これこそが本来のあるべき姿だと信じていたからだ。

「ラミタルア」

コスラと遊んでいると、アルトギアが訪ねてきた。

珍しい。ラミタルアは目を丸くした。

「アルトギア？　へーへー、めっずらしい！　アンタが地下から出てくるなんて！」

「べ、べつに！　いつも引き籠もっているわけじゃないさ！」

アルトギアは久しぶりの再会に緊張している様子だった。それがおかしかったのか、ラミタルアは大いに笑った。楽しそうな母親の姿にコスラも笑う。

すっかり不貞腐れてしまったアルトギアをラミタルアは家の中に招き入れた。

「戻ってくる気はないのかい？」

アルトギアが言った。

「無いわよ。当然でしょ？」

「どうして!?　キミはヴリルの奥さんなんだよ!?　ヴリルだって、寂しがつているんだ！」

ラミタルアは笑った。これでは、いつかの反対だと。

「ヴリルが本当に愛しているのはサラだよ。奥さんだからこそ、分かっちゃうんだなー、これが」

「分かってない！」

アルトギアはテールを叩いた。

「おっとー？　いつになくテンション高いじゃない。どったのよー？」

「キミを愛さない人間なんていない！　カレはキミを愛しているんだ

！ そうじゃなきや……、ボクは！

涙をこぼし始めるアルトギアにラミタルアはやれやれと肩を竦めた。

この時になって、彼の気持ちを彼女は知ったからだ。

知ったからこそ、彼の愛の深さを理解出来た。

「悪いわね、アルトギア。わたし、ヴリルを愛しているの」

「知ってるよ……」

「それに、今はコスラの母親なんだ」

「知ってるさ」

「アンタの気持ちには答えてやれない」

「分かっているよ」

「アルトギア。ありがとう」

アルトギアは静かに立ち上がると、ラミタルアの家を出て行った。

それから、春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ、一年が過ぎ、

五年が過ぎ、十年が過ぎた。

彼女は変わらない。彼女に流れるポケモンの血がそうさせている。

「母上」

思いつめた表情を浮かべて、息子が家に入ってきた。

「オレは旅に出ます」

それは悲劇のはじまり。

王国の繁栄が終わりを告げる。

歴史から消し去られた戦いが始まる。

第十話 『アガリアの伝説・中』

コスラが心を痛めている事は知っていた。

王国はポケモンを奴隷として扱っている。ヘトヘトになるまでこき使われた挙げ句、使えなくなるとゴミのように捨てられる。

ラミタルアはそれを仕方のない事だと思っていた。

ポケモンだからではなく、奴隷というものはそういうものなのだ。

その身は頭の先から足の先まで主のもの。使ってもらえる間だけ生かしてもらえる。

「オレは我慢出来ない！ 魔獣達を解放する！」

それはコスラの優しさなのだ和理解しながらも、共感する事は出来なかった。

きつと、主であるヴリル王の下から離されれば、ポケモン達は生きていられなくなる。

何故なら、彼らは彼に従う為だけに生きているのだから。

「母上。オレは父上に逆らいます。だから、母上とも縁を切ります」

「それはダメ」

ラミタルアは躊躇う事なく全力でゲンコツを落とした。

「ひぎっ!？」

頭を抑えて悶絶するコスラに彼女は言った。

「わたしにとって、アンタは世界そのものなんだ。わたしに死ねって言うの？ 冗談じゃないわ。アンタがしたい事なら好きにしてい

よ。でも、わたしはアンタの母上をやめるつもりはない。分かった？」

「は、母上……」

ラミタルアは決して言葉を飾らない女性だった。

彼女の言葉は全てが真実だった。

彼女にとって、コスラは世界そのものと同義であり、生きる理由そのものだった。

第十話 『アガリアの伝説・中』

ラミタルアは古い友人であるフリーデインと共にその様子を見つめ

ていた。

案の定、コスラの前にヴリルが立ちはだかっている。

今の王国にポケモンの労働力は欠かせない。

ヴリルはポケモンよりも人間を取った。優しい人は、厳格な王になつた。

「ヴリル」

「ラミタルア!?」

見たこともないほど、彼は狼狽した。

「すまないね、ヴリル。アンタがこの子の敵に回るなら、わたしもアンタの敵にならないといけない」

「母上!?!」

二人揃つて、似たような表情を浮かべている。そういうところは、やっぱり親子だった。

「待て、ラミタルア! オレはお前達と戦うつもりなどない!」

「母上! あなたは帰って下さい! これはオレの意志なんだ! アナタの意志ではない!」

ラミタルアは理解していた。ヴリルの意志とコスラの意志は決定的にすれ違っている。

「言つたでしょ、コスラ。わたしはアンタの母親なんだ。アンタを見捨てたら、わたしは母親じゃなくなる! そんなのイヤだ!」

「母上……」

ラミタルアはヴリルを睨みつける。

「やめろ」

ヴリルは険しい表情を浮かべた。

「オレは王だ。国を守らねばならない」

「知っているよ。だけど、この子は魔獣達を守りたいんだ」

ヴリルの顔に苦渋の色が満ちる。

「何故だ、ラミタルア! 何故、オレから離れようとする!?!」

ヴリルは涙を零しながら問う。

ラミタルアはその姿に息を呑んだ。彼女の知るヴリルという男は強くて、勇ましくて、誰よりも気高い霸王だった。その彼が一人の男

として涙を零している。

「わ、わたしはアンタに相応しい女じゃなかった……」

「誰が言った!? 相応しくないなどと、誰が決めたんだ! オレはただ、お前が安心して生きられる世界が作りたくて……、だから、王になつたんだぞ!」

「わたしの……、ため?」

そんな筈はない。

彼は優しいから、苦しむ人々を見ていられなくて、だから国を興したのだ。

断じて、穢れ切った、薄汚い一人の女の為などではない筈だ。

「オレが王になると言った時の事を覚えていないのか!」

それは覚えている。

森の中で襲ってきた野盗を返り討ちにした後の事だ。

火を囲みながら、彼はわたしとアルトギアに対して、

『オレは国を作る。そして、王になる。守りたいものを守るように』
そう言った。

一言一句間違はなく、彼女は彼の言葉を覚えていた。

「オレが守りたかったのはお前だ! 野盗共がお前を見る目が気に入らなかつた! お前が空腹になるのも、お前が冷たい水で凍えるのも、お前が傷つくのも、なにもかもが嫌だつた! だから、お前を守る国を作りたかつたんだ!」

嬉しくないと言えば、嘘になる。

彼が為した数々の偉業。その全てが己の為のものだつた。それが嬉しくない筈がなかつた。

「戻ってきてくれ、ラミタルア! コスラも! オレの下に!」

「オ、オレは……、オレは!」

コスラは苦しんだ。父と母の互いを思い合う姿を見て、心に迷いが生じた。

けれど、彼の背中にはたくさんのポケモンの命が背負われていた。

苦しまないで。

それでもいい。

大丈夫だから。

ポケモン達の声無き言葉が心を通じて聞こえてくる。

それが一層、コスラを苦しめた。

「オレは魔獣達を解放する!! 父上が母上の為に行ってきた事を否定するつもりはない! それでも、魔獣達にこれ以上の苦しみを強いる事は許せない!!」

「コスラ……」

それがコスラの意志である以上、ラミタルアの答えも決まっていた。

彼女は既に、ヴリルの妻ではなく、コスラの母となっていたからだ。

「ありがとう、ヴリル。そして、ごめんなさい」

それは決別の言葉だった。

それはヴリルにとって、今までの足跡のすべてが無意味なものとなる言葉だった。

「コスラ」

ヴリルの眼に宿ったのは、怒りだった。

対するコスラの瞳にも、使命に燃える炎が宿る。

「お前達を捻じ伏せてでも、連れて帰る!!」

「オレは魔獣達を解放する!!」

戦いは始まった。

ヴリル王の力がポケモン達に広がっていく。

「みんな、オレと一緒に!」

コスラの想いも、ポケモン達に伝わっていく。

「コスラアアアアア!!」

ヴリル王の意志を受けたポケモン達がコスラの意志を受けたポケモン達を攻撃し始めた。

「父上ちちうええええええええ!!」

激突する、意志と意志。ラミタルアは己の力を解き放った。

いつしか自在に操れるようになった異性を虜にする力。その力によって、コスラのポケモンには活力を、ヴリルのポケモンには不和を与える。

「何故だ!! 何故だああああ!!」

ヴリル王の慟哭が王国全土を揺るがせた。

◆ アルトギアという男は破綻者だった。

人間の構造について知りたいと思えば、赤子から老人まで、あらゆる人間を解剖した。

ポケモンの神秘を知りたいと思えば、同じようにあらゆるポケモンを解剖した。

好奇心。それが彼を突き動かす原動力だった。

彼の探求の成果は様々な分野に影響を及ぼしたが、誰一人として彼を認める者はいなかった。

彼の歩いた道には死体が多すぎた。

投獄され、流刑地に流された彼は、それでも己のスタンスを変えなかった。

知りたい事を探求する事に対して、どんな手段も厭わない。

『ここは素晴らしいね』

実験材料が自分から懐に飛び込んできてくれる。

アルトギアはこの時点で既に、理論上でヴリル王の力を理解していた。

ポケモンと人の可能性。

ポケモンには感情を感じ取る事が出来る能力が備わっている。現代のトレーナーが人間の名付けた技の名前を命じて、それをポケモンが実行出来る理由もそこにある。人が何をして欲しくて、その言葉を叫ぶのか、彼らはトレーナーの感情から察知しているのだ。

そして、その能力は人間にも備わっている。普通の人間はポケモンよりも遥かに劣っているが、一部の人間はポケモンと同等のそれを備えている。

人とポケモンの感情が相互に流れ込み、一体となった時、ポケモンは絶大な力を発揮する。それはポケモンにはない、人間だけが持つ底知れない欲望や闘争心がポケモンの進化の力の蓋を開くからだ。

理論を理解したアルトギアは己の研究の更なる飛躍の為に強い能

力の持ち主を探し求めた。

そして、彼に行き着いた。

「やあ、はじめまして、こんにちは、よろしくね」

数多くのポケモンを自在に操る男。

まさに、アルトギアの研究には打って付けの存在だった。

ただ一つ、想定外だった事は、彼らと共に過ごす日々がアルトギアを変えていった事だった。

「ふん！ だらしのない連中だ」

定期的に襲い掛かってくる野盗。彼らの狙いは貴金属や食料ではなく、ラミタルアだった。

国を傾けるほどの彼女の美貌が荒くれ者共を誘蛾灯の如く集めてしまうのだ。

「そら、アルトギア。新鮮な肉達磨だ！」

同行するようになって、アルトギアは思った。

この二人の倫理観も相当にイカれている。目の前で人間を解体しても呑気に紅茶を嗜むほどだ。ちなみに、その紅茶は襲ってきた荒くれ者の持ち物だった。

死を日常として来た魔女。

盗賊として、悪逆の限りを尽くしてきた暴漢。

老若男女を実験台や解剖の標本に変えてきたマッドサイエンティスト。

改めて考えてみると、この流刑地で一番危険な犯罪集団は自分達だと気づいた。

「オレは国を作る。そして、王になる。守りたいものを守れるように」
ある日、いきなりヴリルがそんな事を言いだした。

遂に頭がおかしくなったのかと思つて、アルトギアは慌てて薬を処方した。

けれど、彼は本気だった。逆らう者は軒並み暴力で黙らせ、時にはアルトギアの怪しすぎる薬を存分に使った。

ラミタルアが自分の美貌を役立たせようとした時だけは止めに入り、その行動の理由をアルトギアは察した。

その頃には、アルトギアも人並みの心を持つようになっていた。ヴリルに親愛を感じ、ラミタルアに恋をした。そして、彼は恋心を心の底に封じ込めた。

自分がまともな人間ではない事を自覚していたからだ。もつとも、彼らの事もまともだと思つた事は一度もないが、それでも自分よりは僅かばかりマシだろうと思つていた。

なにより、ラミタルアはヴリルの傍で幸せそうに笑う姿が一番美しくかった。

「あなたの暴虐はわたしが止めます！」

ヴリルが軍勢と呼べる程の人間を従えるようになった時、彼女は現れた。

清廉潔白を絵に描いたような少女だった。

ラミタルアに負けない美しさを持つ彼女をヴリルは懐に入れる事にした。

「国を築くには、清濁併せ呑む必要がある。ボク達だけだと濁しかなからね。あの子は必要だよ」

そう、アルトギアが彼に囁いたからだ。

要するに、彼女は国をまとめ上げる為の旗印だった。流刑地だけあつて、この土地に住む人間の大半は悪人であり、彼女の正しさは大いなる武器になった。

軍勢も十分に育つと、ヴリルはアルトギアのアドバイスに従い、薬物や暴力に頼る事をやめて、真つ当な手段で集団を纏め上げ始めた。聖なる少女に諭されたのだと公言しながら。

建国は驚くほどのスピードで完了した。

後になって考えてみれば、それが間違いだつた。

彼の建国という夢に、ラミタルアはほとんど貢献する事が出来なかつた。それなのに、サラは王国にとって無くてはならない存在となつた。

それが彼女のサラに対する劣等感を生み出してしまった。

「オマエじゃない」

いつしか、アルトギアはサラを疎ましく思い始めた。

親しき友の為に必要だと思い招き入れた異物が、完成されていた。パズルをバラバラにしてしまった。

楽しかった日々は、いつしか苛立ちの募る日々へ変わった。

ラミタルアの笑顔が減り、アルトギアは見たくない光景から逃れる為に地下の研究室に引き籠もるようになった。

「アルトギア」

ある日の事、サラが彼の研究室を訪ねてきた。

「……なんだい？」

「アナタはどうして自分を押し殺すの？」

「はあ？」

嫌悪感を隠す気にもなれなかった。睨みつけると、サラは微笑んだ。

まるで、何もかもを見透かすような眼差しだ。

「アナタはラミタルアを愛している。それなのに、彼女に思いを伝えないのは何故？」

「バカを言うな。ボクが誰を愛しているって？ 人妻に懸想する程、落ちぶれちゃいないよ」

「あらそう？ じゃあ、この事を話しても大丈夫そうね」

「なに？」

「彼女に子供が出来たわ」

その言葉を聞いた瞬間、アルトギアは呼吸の仕方を忘れてしまった。

サラはそんな彼を優しく見つめている。

「可愛そうな人。そして、優しい人。彼女の幸福はあなたの自己犠牲の上に成り立っている。すばらしい愛だわ」

「出て行け！」

怒りのあまり、顔を真っ赤に染め上げながらアルトギアは怒鳴りつけた。

彼女の言葉は毒だ。じわじわと染み込んでいく、悪意の毒。

アルトギアはこの時になって、サラという少女がただの純真無垢な乙女ではない事を悟った。

「なにが、聖女だよ。あの女狐め」

アルトギアは研究に戻った。

国の繁栄の為に、王の力を次の代にも継承させる為の研究だ。

「ラミタルアの子供が生まれる」

胸が苦しい。だけど、彼女の為に出来る事があるのなら。

アルトギアは彼女の子供に己の研究のすべてを懸けて祝福を与えようと決意した。

数年が経ち、ラミタルアが王宮を出て行った。

以前から、彼女はサラに対して劣等感を抱いていた。

ヴリルの隣に立つ資格を持っているのはサラなのだ、間違った確信を抱いてしまった。

「何故だ、ラミタルア……」

報せを聞いて、ヴリルの下へ行くと、そこには嘆き悲しむヴリルと、彼を慰めるサラの姿があった。

アルトギアは悟る。自分が地下に引き籠もっている間に起きていた、王宮内の静かなる闘争の結末を。

使用人達は口を揃えて、サラが唯一の王后となった事を祝福していた。ラミタルアの出奔を嘆く声は一つも聞こえなかった。

「恐ろしい女だな、キミは」

「酷いわ、アルトギア。わたしはアナタにチャンスをおあげたのよ？」

「チャンス？」

「そうよ。彼女は小さな子を抱えて、一人で出て行ったの。王宮での生活で、彼女の牙はアナタが思う以上に丸まってしまっている。彼女の美貌に目をつけた男達を、果たして彼女は退ける事が出来るかしら？」

言葉が見つからなかった。

それは、あまりにも濃密な悪意であり、あまりにも濃密な誘惑だった。

今なら、彼女を手に入れる事が出来る。

「出て行け」

アルトギアの言葉に張りはなかった。

それから、アルトギアは定期的に彼女の下を訪れた。
決して顔は出さずに、見守り続けた。

そして、コスラが成長した頃、アルトギアはコツソリと彼の前にだけ、姿を現した。

「おじさん、だーれ?」

「おじさんは魔法使いさ」

ラミタルアが魔女と呼ばれていた事を思い出して、アルトギアは冗談を口にした。

「キミに魔法をかけてあげるよ。魔獣達の言葉が分かるようにしてあげる」

「まじゅうたちの!」

それは彼の研究の成果だった。人間も僅かに持っている、ポケモンが感情を感じ取る能力を増幅する薬をアルトギアはコスラに飲ませた。

「にがつ!? って、え? ええ!? 今、大丈夫? って言った!」

苦味に顔を歪めるコスラの下ヘジグザグマが駆け寄っていくと、彼は驚いたように目を見開いた。

「すごい! すごいよ! キミの言葉がわかる!」

研究は大成功だ。ヴリルの血があつてこそだが、だからこそ、これで彼がヴリルの後継者となれる。

仮に、彼がそれを望まなくても、ポケモン達は彼に従う。

未来はきつと、明るいものになる。

「ありがとう、魔法使いのおじさん!」

「ああ。お母さんを大切にするんだよ、コスラくん
そう言うと、アルトギアは去って行った。

「あれ? おれ、名前……、さっすが魔法使い!」

◆
こんな筈ではなかった。

必死に走りながら、彼は思った。

「ラミタルア。コスラ。ヴリル!」

コスラがポケモン達を率いて反乱を起こした。ラミタルアも一緒

だという。

そんな事、ある筈がない。そう叫びながら王宮を出て、ヴリルが向かった先へ駆けつけた。

「なんで？」

そこで、彼の愛した三人が戦っていた。

「なんで、こうなる？」

地獄のような光景を前に、立っていられなくなった。

燃え盛る大地。凍てつく川。雷鳴が轟く空。

たくさんのポケモン達が傷つけあっている。ヴリルとコスラは狂ったように叫んでいる。

ラミタルアはコスラを抱きしめながら彼を守っている。

「ラミタルア」

彼女を救わないといけない。

アルトギアは戦場を走り始めた。かえんほうしゃとハイドロカノンを転がるように避け、秒単位で地形の変わる地面を蹴り進み、しびれごなやどくのこなが蔓延する地帯を駆け抜けた。

「ラミタルア！」

彼は叫んだ。

アルトギアの存在に気がついたラミタルアは目を見開き、叫んだ。

「ヴリルを止めて！ 彼が壊れちゃう！」

「それ、は」

アルトギアはヴリルを見た。

激情に駆られ、理性を失っている。そのせいで、彼の能力が暴走していた。

このままでは恐ろしい事が起こる。彼の能力の真髓を知っているが故に、アルトギアはその事を理解してしまった。

「ヴリル……」

それがラミタルアの願いならばと走り出そうとして……、出来なかった。

「無理だ」

「アナタしかないの！」

「ボクには無理だ！ カレを止めるなんて、出来っこない！」

「出来るわよ！ アナタは彼の親友でしょ！」

「親友なものか！」

彼の愛する人に横恋慕をしておいて、親友を名乗る事など許される筈がない。

「こんな時にまで、何を言ってるの!?!」

「逃げよう、ラミタルア！ キミだけなら逃がせる！」

「出来ないわよ！ 二人を置いて、逃げられる筈がないでしょ!? お願いだから、ヴリルを止めて！ 彼を止められるのは、彼に並び立てるアナタしかいないの！」

「無理なんだよ！ ボクなんかじゃ！」

どうして？ どうして、分かってくれないんだ？

キミしか助けられない。キミなら助けられる。

それなのに、どうしてボクの手を取ってくれないんだ？

「こんなのイヤよ！ こんな事、望んでない！ わたしはただ、コスラの母親でいたかっただけなのに！」

「ああ……、うわああああああああああああ!!」

聞きたくなかった。

この状況を生み出した一端を担ったのは、間違いなくアルトギアだった。

彼がコスラに力を与えなければ、こうはならなかった。

アルトギアのせいで、ラミタルアは不幸になった。

「イヤだ！ そんなのイヤだ！」

幸せになつて欲しい。ただ、それだけが望みだった。

アルトギアはコスラに与えた薬を飲み込んだ。

ヴリルの下へ行くためには、彼と同じ力が必要だった。

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

流れ込んできたのは無数の声。けれど、それはポケモンの声ではなかった。

『どうして、わしを殺したんじゃ』

『痛かった』

『オギヤー、オギヤー』

『なんで？　なんで？　なんで？』

『呪ってやる！』

『殺してやる！』

それは怨霊の声だった。彼が殺してきた人々の怨嗟の声が彼の魂を一瞬にして呑み込んだ。

「あ、ああ、あああああああああああああ!?!」

黒い影がアルトギアを取り巻いていく。

「アルトギア!?!」

アルトギアは真っ黒な影法師に変わってしまった。

やがて、その姿は安定していき、一体のポケモンに変わる。

後の世の人々は、そのポケモンを指して、こう呼んだ。

ダークライ。

第十一話 『アガリアの伝説・下』

その光景をサラは見つめていた。

「結局、アナタに必要なだったのは彼女なのね」

肩を落とし、ため息をこぼす。

彼女の事が羨ましかった。素直で、正直で、ありのままの自分を愛してもらえている彼女の事が。

サラにとつて、世界は嘘と罪で満たされていた。

この地では、人の物を奪う事も、傷つける事も、欺く事も、全てが肯定される。無秩序こそが秩序であり、無法こそが正義だった。

そんな世界において、清く正しく生きられる筈もない。

ただ、憧れているものがあつた。

アーロン戦記。波動の勇者・アーロンの伝説を描いたものだ。

世界のはじまりの樹があるロータ地方を舞台に、アーロンは相棒のルカリオと共に戦争を止めるという内容だ。

サラは勇者を求めていた。

国を興そうとしている集団がいる。そういう噂を聞いた。

強大な力で人々を纏め上げていく様を見て、人々は霸王だとか、魔王だとか言っている。

サラは集団を率いているヴリルという男に興味を抱いた。

彼が英雄なのか、魔王なのか、確かめたいと思った。

「あなたの暴虐はわたしが止めます！」

彼の前に立ちはだかり、彼と問答を交わした。

驚くべき事に、彼は暴力でわたしを払い除けなかった。

三日三晩、正しさを説き続けるわたしに、彼は自分の理想を語り続けた。

守りたいものの為の国が欲しい。

彼の根源にあるものは、愛だった。

愛を胸に戦う彼は、間違いなく英雄だ。サラは確信を得た。

「いいですか、ヴリル。人々はあなたに未来を預けるのです。ならば、その未来はよりよいものでなければいけません」

「そうか」

サラはヴリルを理想の王とする為に、彼の勧誘を受けた。嘘と罪ばかりの世界を希望と正義で塗り固める。

勇者・アーロンのように。

「ああ、わたしの勇者様」

ヴリルはサラの思い描く通りの理想の王となった。

けれど、問題もあった。

ラミタルアとアルトギアの存在だ。この二人の存在は理想の英雄にとつて、汚点となりうるものだ。

もつとも、ただ排除すればいいというものでもない。

ラミタルアはヴリルが愛を向ける相手だ。その相手がいなくなれば、彼は愛を失う事になる。それでは、理想の王ではなくなってしまう。

だから、その愛を手に入れる事にした。

「ヴリル。わたしを愛して下さい」

ヴリルの心を籠絡し、ラミタルアの劣等感を削り、臣民の信頼を得る。

その為に、必要な仮面を何枚も被り、演じた。

健気で、穏やかで、無垢な乙女として、彼女は在り続けた。

彼はサラを第二の妻とした。そして、ラミタルアは王宮を出た。

すべては計画通り。

ラミタルアを失った彼の愛を独占し、その愛を一層深めていく。

アルトギアは地下に引きこもり、ラミタルアは王宮を出ていた為に知らなかった事だが、それから数年の内にサラは第一子であるレムハザードの他にも三人の子供を産んでいた。

だけど、彼女に対する愛を塗りつぶす事は終ぞ出来なかった。

彼女の愛を失った彼は理想の王ではなくなってしまう。獣のよ
うに暴れている。

「馬鹿な人……」

サラは生まれて初めて、本当の涙を零した。

第十一話『アガリアの伝説・下』

「アグアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

「アルトギア!？」

人間がポケモンに変わっていく。その光景にラミタルアは絶句した。

「ちちうえ……、ちちうええええええええええつ！」

「コスラ!？」

コスラの様子もアルトギアの変化に引きづられるようにおかしくなっていた。

「コスラアアアアツ！ ラミタルアアアアアツ！」

コスラとヴリルの姿も変わっていく。

「なによ、これ!？ なんなのよ！ コスラ！ ヴリル！ アルトギア！」

黒いもやがコスラとヴリルを取り巻いていく。

ラミタルアの体は大きく弾き飛ばされてしまった。

「キャツ!？」

地面を転がっていくと、何かにぶつかった。

「ラミタルア」

見上げると、そこにはサラがいた。

「サ、ラ？」

サラは空に昇っていくダークライを見上げながらつぶやく。

「わたしは間違えていた。彼はわたしの勇者様じゃなかった」

彼女の手には一冊の本があった。

「アルトギアの研究室から持ってきたの。彼なら、こうなる事を予期していた筈だと思って」

「ど、どういう事よ!？ この状況を予期していたって言うの!？」

ラミタルアが目を見開くと、サラは「ちがう」と首を振った。

「彼が予期していたのはヴリルの力の行き着く先よ」

「行き着く先？」

サラは言った。

「森のなかでは魔獣となり、村にあつては人となる。かつて、魔獣と人は同じものだった。魔獣と婚姻を結ぶ者もいた。彼の力はその頃の

名残り。心を繋げる事で、人も魔獣も等しい存在になる」

「コスラとヴリルが魔獣になるって言うの!?!」

「ええ、そうよ」

言葉を失うラミタルアを尻目に、サラは本をダーククライに向けた。

「これはアルトギアが作り出したもの。万が一の時、魂を救済する為の器。彼は『空白の書』と呼んでいたわ」

本が開かれる。ページが破れて、無数の紙片が空を舞う。

紙片はダーククライを包み込み、溶け込んでいった。

「何が置きているの!?!」

「魂の救済よ」

ダーククライの内側から、紙片に包まれた何かが抜け出てきた。

それは真っ直ぐにサラの持つ本へ向かってくる。

「あれはアルトギアなの!?!」

「そうよ。その魂」

アルトギアの魂は紙片と共に開かれた本の中へ入っていった。

破かれた筈の紙片は元に戻り、表紙が青く染まっていく。

「どうなったの!?!」

「彼の研究所によれば、この中にアルトギアの魂を回収出来た筈よ」

「そ、それで?」

「それでって?」

「だって、魂を回収して、その後はどうするの!?! 彼の肉体はどこにいったの!?!」

「肉体はあそこよ。もう、取り戻す事は出来ない。回収した後の事までは、まだ読み進められていないの」

「そんな!?!」

ラミタルアが悲痛な声を上げると、それを塗りつぶすかのような絶叫が響き渡った。

「コスラ!?! ヴリル!?!」

コスラとヴリルの姿が変わっていく。

アルトギアとは違う、大きな異形に変貌していく。

「とにかく、魂を魂を救い出しましょう。その後で研究書を読み進め

て、彼らを救うのよ」

「わ、わかった！」

サラから別の空白の書を受け取ると、コスラの下へ駆けていく。

「アナタはその子を選ぶのね」

サラは眩くと、ヴリルの下へ走り始めた。

「わたしは間違えてばっかりね」

彼女は母になった。けれど、子供を三人も産んでおきながら、自分は女のままだった。

いつ王宮に被害が出るかも分からない状況で、サラは子供達に何も伝えずに飛び出してきてしまった。

母としての責務を放棄してしまった。

「なにをしているのかしら、わたしは」

彼から愛する人を遠ざけておきながら、結局奪う事が出来なかった。

その挙げ句、なにもかもが壊れてしまった。

今頃、娘達は泣いているかもしれない。怒っているかもしれない。

「あはは」

なんて、愚かな女だろう。

「ヴリル！」

わたしは魔神と化したヴリルの前に立った。

コスラとヴリルの異変によって、ポケモン達の動きが止まっているおかげで無事に辿り着く事が出来た。

《アアアアアアアアアアアアアア!!》

山の如く大きな姿。六つの腕が宙を舞っている。

なんて、恐ろしい姿だろう。

「助けるわ、ヴリル！」

《ダ、メダ。ヤメ……、ロ》

「ヴリル!?!」

魔神はヴリルの言葉を口にした。

《ニゲ、ロ。オレガ……、オサエル。ラミタル、アトトモニ、トオクへ》
振り絞るような声。

ラミタルアの方も、空白の書を掲げながら叫び声をあげている。コスラも同じ事を言っているのだろう。

二人が抑えているから、魔神が停止している。

二人の魂を救えば、その瞬間から魔神は行動を開始するだろう。

その身から感じる力はあまりにも膨大で、解き放たれれば王国どころか、この土地全土が無事では済まないだろう事が容易にわかった。

「ダメよ、ヴリル」

サラは微笑んだ。

「あなたは勇者じゃなかった。だから、みんなを守るために頑張らなくていい」

サラは空白の書を起動させた。

《ヤメロ、サラ!》

「愛しているわ、ヴリル。だから、あなたの役目はわたしが引き継ぐ!」

ヴリルの魂が空白の書に回収された。

「ラミタルア!」

黒く染まった本をラミタルアに向かって投げる。

「サラ!」

サラは小さな小瓶を取り出した。

それはアルトギアがコスラに与えたものであり、アルトギア自身が飲み下したものだ。

王の力を得る為の薬。それを彼女は飲み干した。

「さあ、わたしと一つになりなさい」

サラは魔神と意識を一つにした。すると、思いの外空虚な内面に驚いた。

「ああ、そうか」

この魔神は生まれたばかりなのだ。だから、なにもない。けれど、その力は絶大だった。

「ラミタルア! コスラを空白の書に! 魔神はわたしが止めるわ」

「サラ!? わ、わかった!」

ラミタルアがコスラを回収すると共に、三冊の本を抱えて走り始め

た。

暴れだす、コスラの魔神。

サラはヴリルの魔神を操り、戦い始める。

◆

「みんな、こつちへ！」

王宮へ戻ったラミタルアは臣下に命じて、地下の天然洞窟へ民を避難させた。

すべてを救うには時間が足りない。けれど、やるしかなかった。

「ラミタルア様！」

「我々はどうなるのですか!？」

「怖いよー！」

「ママ、どこにいるの!？」

魔神同士の激突は、その余波だけで人々を死へ駆り立てていく。

「落ち着きなさい！ 天然洞窟へ逃げるのよ！ 一人でも多く！ 生きなさい！ 生きれば、未来は繋がるから！」

ラミタルアが王宮を去った事を歓迎していた臣下達は進んで彼女の命令に従った。

街中を駆けずり回り、必死になって救助活動を行っていく。

「ラミタルア様！」

大臣が三人の子供を連れてきた。

「何をしているの！ はやく避難させなさい！」

「分かっております！ ですが、もう限界です！ 貴方様もお逃げ下さいー！」

「出来ないわ！ わたしが残らなければ、誰が指揮を執るの！」

「わたくしめが執ります！ 一人でも多く逃してみせます！ ですから、どうか！」

大臣は子供達を押し付けると、勝手に指揮を執り始めた。

「だ、大臣!？」

「ラミタルア様！ どうぞ、こちらへ！」

「その方々は我らの希望なのです！ どうか、共にお逃げ下さい！」
逡巡するラミタルアに小さな鳴き声が聞こえた。それは子供の一

人の鳴き声だった。

怯えている。

「……いくわよ」

泣いている少女を抱きかかえて、二人の少年を引つ張りながら天然洞窟へ向かっていく。

ラミタルア達が入ると共に、洞窟の入り口は塞がれた。

洞窟の奥の広場には恐怖と絶望が蔓延していた。

「ラミタルア様！」

「どうか、助けてください！」

「我らを導いて下さい！」

ラミタルアの下に人々は殺到した。縋り付く彼らを見捨てる事も出来ず、子供達を傍に置きながら彼女は懸命に人々を励まし続けた。

地下に避難してから数日が経っても、状況は変わらなかった。

幾度となく洞窟が揺れ動き、土砂崩れに巻き込まれる者が大勢いた。

飢餓も深刻になり、苛立ち始める者も出てきた。

掴み合いをする者、ラミタルアを非難する者、狂い出す者が出る中

で、ラミタルアに出来た事は子供達を守る事だけだった。

「おばさま」

ラミタルアの下に外套を纏った一人の少女が現れた。

「ん？ もしかして、レムかい？」

「はい、レムハザードです」

「ずいぶんとけつたいな格好をしているね。でも、無事で良かったよ」

「おばさまも無事で何よりです。弟妹達を守ってください、感謝致します」

三人の子供達はサラの子供だった。直接は誰からも聞かなかったけれど、ラミタルアは気づいていた。

「どうする気？」

今になって姿を現した事には理由がある筈だ。ラミタルアはレムハザードに問う。

「外に出ます」

「正気？」

「それ以外にわたし達が生き残る術はありません。少なくとも、食料や水を確保しなければ保ちません」

その通りだとラミタルアにも分かっていた。子供達も我慢してくれているけれど、既に衰弱してしまっている。もう、あと数日もすれば死者が出始める事は明白だった。

「でも、危険よ？」

「それでも、わたしは王の娘です。生き残った人々を救う義務があります。それに、おばさまが注意を引き付けてくださったおかげで色々調べる事が出来ました。どうか、外に出られそうな場所がありませんから、そこから行きます」

引きつけていたつもりはないのだが、中々に強かな性格に育ったようだ。ラミタルアは感心した。

「わたしがいくよ。子供達を任せる」

「でも！」

「アンタに行かせて死なれでもしたら、サラに顔向けが出来ない。アンタは弟妹を守ってやりな。危険な仕事は大人の役割さ」

ラミタルアはレムハザードから出口を聞くと、彼女の外套を被り、走り始めた。

「サラ！」

レムハザードを危険に晒せないと思ったのは本当だ。けれど、それ以上に外に残してしまったサラが心配だった。

こんな事を言えば笑われるかもしれない。だから、言えなかった事がある。

ラミタルアは家族を知らなかった。奴隷の身に自由はなく、親と共に過ごした記憶は残っていない。その内にここへ送られてしまった。

だから、ヴリルとアルトギア、そして、サラを大切な家族だと思っていた。

理想の女性。彼女はラミタルアにとって母であり、姉であり、妹であった。だから、ヴリルを譲る事が出来た。

「サラ！」

外に飛び出すと、そこは想像以上の地獄となっていた。

二体の魔神が暴れまわる中で、無数のポケモン達が戦っている。中には見たこともないポケモンもいた。

そして、サラは見た。

赤き絶望が次元の彼方から現れる瞬間を――。

「なに、あれ？」

滅びの光が放たれた。

「オオオオオオオオオオオ！」

光に照らされる寸前、何かを割り込んできた。

それはアルトギアから生まれたポケモン、ダークライだった。

第十二話 『アガリアの伝説・終』

いったい、どのくらいの時が過ぎたのだろう。戦い続けている内に、サラの自我は少しずつ磨り減っていた。

魔神が己の中の虚を埋めようとしている。記憶、感情、すべてを食い潰されていく。

「ヴリ、ル」

子供の頃の記憶はすでに無く、彼らとの記憶も虫食い状態になってしまった。

『サラは紅茶が好きなんだね』

それを言ったのはラミタルア？ それとも、アルトギア？

『くだらない』

これは誰の言葉？

『愛しているとも』

息が苦しい。その言葉を口にした人を忘れたくない。それなのに、忘れかけている。

おそろしい。かなしい。くるしい。

イヤだ。イヤだ。イヤだ。イヤだ。イヤだ。

「わた、し……は」

大切な記憶が壊れていく。それを惜しむ心が碎けていく。暗い闇に呑み込まれていく。

「ごわれ、た……く、ない」

手を伸ばした。

壊れたくないから。

その為には、壊すしかなかった。

第十二話 『アガリアの伝説・終』

「なんなの、あれは!？」

ラミタルアはダークライに守られながら、その光景を見た。

命が吸われていく。ポケモン達が倒れていき、草木は枯れ果て、大地はひび割れていく。

「あ、ああ……、あああああああ」

死が広がっていく。ラミタルアは悲鳴を上げながら洞窟の中へ戻っていった。

その後をダークライが追いかけてくるが、気にする余裕などなかった。

レムハザードに教わった道を逆に進んでいき、あの広場まで辿り着くと、そこにも死が満たされていた。

「レム！ アルト！ アギト！ サラー！」

髪をかき乱しながら四人の子供達の下へ駆け寄っていく。

けれど、彼らは息をしていなかった。まるで、物言わぬ石のように冷たく横たわっている。

「嘘よ。うそ……、嘘だと言ってよ！」

叫んでも、揺らしても、叩いても、誰も目覚める事はなかった。

みんな、死んでいた。

「なんで……？？？ なんで、こうなるの？」

ただ、愛する息子と一緒なら良かった。他には何も望んでいなかった。それなのに、なにかもが失われてしまった。

「……違う。まだよ！ サラー！」

ラミタルアは走り始めた。地響きはまだ続いている。あの赤いナニカが現れた時も、ナニカが光を放った後も、魔神達は動いていた。

あそこには、サラもいるはずだった。

「ゴオオオオオ」

走りながら、ずつとついてくる黒い影に漸く意識を向けた。

「アルトギア」

洞窟を出て、ラミタルアは急いでアルトギアの研究所へ向かった。崩れた王宮は瓦礫が散乱していて、道が塞がっている場所もあった。それでも、彼女はどうか目的の場所へ辿り着いた。

かつて、アルトギアが研究に勤しんでいた場所。幸いな事に、彼女の求めるものは無事だった。

「《王の力に関する考察》、これね」

そこにはアルトギアの研究のすべてが記されていた。

《ヴリルの力の真髄。それは魔獣と人が同一であった頃の名残りであ

る『感情を受け取る能力』にある。

通常、魔獣は人間の感情を一方的に受け止めている。魔獣使いの命令を理解する事が出来るのも、その力があってこそだ。魔獣は無垢であり、それ故に人間の感情に染まりやすい。魔獣使いの手持ちとなった魔獣の成長が早いのも、魔獣使いの強くなつて欲しいという感情や、戦いに勝ちたいという感情を受ける事で魔獣自身が強くなりた、勝ちたいと思うようになるからだ。それによって、彼らは進化の力の蓋を開く。

ヴリルの場合、感情を共有する事が出来る。一方的に押し付けるのではなく、共に思い、共に感じる事が出来る。それは魔獣との間に通常では手に入らぬほどの強い絆を芽生えさせる。魔獣達はヴリルの為に在りたいと願うようになる。

他の人間がいくら強さを求めても、成長限界に達すれば、魔獣はそれ以上、進化の蓋を空けたりはしない。けれど、ヴリルの場合は違う。彼が望めば、魔獣達は己の身の破滅も厭わず限界を超えてみせる。

それは大いなる力だ。魔獣という種の計り知れない力のすべてを解き放つ事が出来れば、既存の世界を自分好みに塗り替える事すら可能となるだろう。

けれど、この力には相応のリスクが存在する。

魔獣との感情の共有。同調とも呼べる状態となった時、彼は魔獣と同一であった頃の人間と同じ存在になっている。その状態は、一歩間違えれば彼が魔獣と化してしまう危険性を秘めているのだ。

一旦魔獣と化してしまえば、人の姿に戻る事は不可能となる。故に、そうなつてしまった時の為の対策を練る必要があるだろう。だが、現段階では完全な対策は不可能だ。可能なのは魂の救済のみ。

魂の存在は既に確認されている。それを一時的に保管する器を用意した。とりあえず、『空白の書』と名付けておく。

この本の中に魂を保管しておけば、いつか、その魂を蘇らせる事が出来る筈だ。

もつとも、それには数百年の時間が必要となるだろう。必要なのは

文明が進歩する為の時間なのだ。こればかりはどうにもならない。

さて、研究の過程で面白い物を作る事が出来た。

ヴリルの能力の再現を可能とする薬だ。これは、既に退化してしまっている『感情を受け取る器官』を活性化させるものだ。個人差はあるものの、人体実験の結果、数名の被検体が王の力の再現に成功した。

ただし、この薬を使うには条件がある。まず、子供である事だ。感受性の豊かな子供ならば、この薬品に馴染む事が出来る。大人が口にした場合、高確率で発狂し、そのまま息絶えてしまった。

また、子供であっても長期間の生存は難しい事が判明した。何故なら、魔獣との同調は精神を著しく摩耗させるからだ。この摩耗の仕方には個人差があったが、結局のところ、一年以上生存出来た被検体はいなかった。

だが、ヴリルの血を引く子供ならば完全な適合が可能な筈だ。何故なら、彼の子供の感情を受け取る器官は他の人間よりも優れている筈だからだ。実際、レムハザードを健診した際に、それを確かめた。彼女に風邪薬だと偽って吞ませた結果も上々だ。彼女は見事に一年以上生き続けている。その上、精神を摩耗した様子も見せない。

この薬をコスラに与えようと思う。王の力を使えば、なんでも思いのままに出来る。きっと、幸福な人生を歩める筈だ。

さて、レムハザードの処分の方法を考えなければならぬ。あの力を持つ者は少ない方がいい。研究の役に立ってくれた彼女には、苦しくない最後を迎えさせてあげよう」

研究書を読み終えた後、ラミタルアは嫌悪感のあまりに吐きそうになった。

「レムを殺そうとしていた？ ヴリルとサラの子を？」

信じたくない。

この研究書はなにかの間違いだ。

誰かがアルトギアを陥れる為に用意したものだ。

そんな風に、ありえない妄想に逃げ込みそうになるほど、その内容はおぞましかった。

「なんでよ、アルトギア。ヴリルの親友である筈なのに、どうして彼の娘を殺そうと思えたの？」

答えなど返ってくる筈もない。

それでも、問わずにはいられなかった。

『ラミタルアを愛していた』

そう、彼の声が聞こえた。

ギョツとして振り返ると、そこにはダークライがいた。

『親友などではなかった。羨んでいた。妬んでいた。ラミタルアを奪いたかった』

それはオウム返しのようなもの。ただ、問われたことに対する答えを持っていたから、ダークライは答えてしまった。

「ああ、そっか」

同じだったのだ。奴隷であった頃、多くの男に奪い合わられた頃と、何一つ変わっていない。

「そんな力を持っていたヴリルのせい？ 反旗を翻したコスラのせい？ コスラに力を与えたアルトギアのせい？ それとも、他の誰かのせい？」

ラミタルアは笑った。

ケタケタと心底おかしそうに嗤った。

「わたしのせいじゃん！ また、わたしの顔のせいでぐちゃぐちゃになって、みんなが死んじやった！なのに、なんで？ なんで、わたしは生きてるのさ!？」

歪んでいく。壊れていく。崩れていく。

それでも残ったものが彼女を突き動かす。

「サラ……。サラ……。」

サラを助ける。それだけが彼女に残されたものだった。

アルトギアの研究書の傍にあった薬の瓶を掴み取り、彼女は駆け出しました。

王宮を出ると、あの赤い翼を持つ魔獣が空中を漂っていた。その下で、魔神達も制止している。

「なにをしているの……っ？」

『魂を吸っている。あの二柱の魔神の生命力は底が知れない』
「魂を!？」

急がなければならぬ。さもなければ、間に合わなくなる。
直感に従って、彼女は裂け目だらけとなった大地を走った。

夥しいほどのポケモン達の死骸から目を逸らし、やがて彼女は辿り着く。

「サラ!？」

サラは魔神の傍にいた。虚ろな表情を浮かべながらも、生きていた。

「サラ!・ ねえ、サラ!」

必死に呼びかける。けれど、彼女は応えない。

「どうして? どうして、応えてくれないの!？」

『彼女は既に心を失っている。ヴリルの血を引いていない者に、薬は適合しない』

ラミタルアは冷徹に答えを示すダークライを睨みつけた。

「どうすればいいのよ!?! どうすれば、サラを救えるの!?!」

『救う事は出来ない。手遅れだ。彼女の心は既に魔神に食い尽くされている』

「嘘よ!」

『嘘ではない』

もう、ラミタルアは立っている事が出来なかった。唯一残っていたものが失われてしまった。

それは生きる意味の喪失を意味した。

「なんでよ。なんで、みんなが死んで、わたしだけ残るの? コスラ、ヴリル、サラ、レム、アルトギア、アルト、アギト、セラ……」

『レムハザード、アルト、アギト、セラならば救える』

それは福音だった。

「ほんとうに?」

『奪われたものを取り戻せばいい。必要なものは揃っている』

「どうすればいいの?」

『薬を飲め。お前ならば適合出来る』

「でも、わたしにヴリルの血は……」

『お前にもヴリル程ではないが、感情を受け取る器官が存在している。魔獣の血を引いているのだろうか』

ラミタルアは薬の瓶を取り出した。

迷っている暇も、理由もなかった。

一気に飲み干すと、彼女はダークライに問う。

「それで、どうすればいいの?」

『魔神と同調しろ。そして、あの破壊の神と対となる神を喚び出すのだ』

「対となる神……」

ラミタルアは魔神に意識を向けた。やり方なんて分からない。ただひたすら、魔神と一体となる事を念じ続けた。

そして、ラミタルアは魔神と一つになった。

「これが、ヴリルの見ていた世界」

魔神を通じて見る世界はいつもと違って見えた。何も感じず、何も考えず、虚ろに世界を見つめている。

ラミタルアは破壊の神の対となる神を喚び出そうと祈り始める。

「神様。そんなものがあるなら、どうか……、あの子達を助けて下さい」

祈りは魔神の持つ輪を通じて彼方に伝わっていく。

そして、七色の光が世界を照らし尽くした。

現れたのは、大きな角を持つ、碧き聖獣。

後の世にイベルタル、ゼルネアスと呼ばれるようになる伝説のポケモンは互いを睨みつけた。

「キシィィィィィッ!」

死の風が吹き荒れる。イベルタルは魔神だけでなく、ゼルネアスの命をも吸い取ろうとしていた。

「シャアアアアッ!」

対するゼルネアスは大地から力を集め始めた。吸い取られる以上の力がゼルネアスに集まっていく。

ゼルネアスのツノが虹色の光を帯び始めた。大地から集めた力と、

「うわあああああああああああああああああん!!」

意識が吹っ飛びそうになるほどの大音量にラミタルアは転びそうになった。

「つてか、あの魔神は!?!」

『そこにいる』

「え?」

ダークライは四匹のポケモンを指さした。

『命を吸われた事で力を失ったようだ』

「でも、四匹いるわよ? 魔神は二体だったのに』

『お前とサラが同調した事が原因だ』

「ふーん」

ラミタルアは天然洞窟の方を見つめた。

「みんなは大丈夫よね?」

『その筈だ』

ラミタルアは歩き出した。

すると、四体のポケモンがついて来た。

「……おいで」

ラミタルアが手を伸ばすと、ポケモン達は嬉しそうに笑顔を浮かべた。

◆

ダークライはその背中を見送った。

ラミタルアを救う事。それが生み出された時に魂に刻まれた使命だった。

それが果たされた今、ダークライはゆっくりと己の影の中へ沈んでいく。

ダークライは知っていた。イベルタルは眠りについただけの事。

それも、本来の眠りではない為に、そう遠くない未来に蘇る事を。

そして、それが己の望みである事を。

その事を誰にも知られてはならない。邪魔をさせてはならない。

◆ ダークライは密やかに微笑んだ。

天然洞窟へ戻ると、そこには人々の喧騒があった。
生き返ったのだ。ラミタルアは喜んだ。

「レム！ アルト！ アギト！ セラー！」

彼女は失いかけた彼らの背中を見つめて笑顔を浮かべる。

そして、彼らは口を開いた。

「だれ？」

「(どこどこ)？」

「わたし、だれ？」

ゼルネアスが蘇らせたもの。それは命だけだった。

彼らは心を失っていた。

「なによ……、それ」

これは終焉の物語。

これは再起の物語。

ラミタルアは心を失った人々を纏め上げた。

新たな国を作り上げ、アルトギアの研究成果と小さくなった魔神達の力を使い、四人の子供を四つの本と共に眠らせた。

時が来るまでは起きる事のないように、

ヴリルが蘇った時、また親子で再会出来るように、

アルトギアが予知した文明が生まれる時を迎えられるように、

アルトギアの本とアルトは氷に閉ざされた山に、

コスラの本とアギトは静かな海の底の社に、

そして、ヴリルの本とセラは築き上げた迷宮の底に、

いずれ時が満ちるまで、彼らが守られるように……。

「女王様！」

「我らがアガリア女王陛下！」

ラミタルアの名前を嘗ての王国の墓前に添え、新たにアガリアと名を改めた彼女は嘗て程ではないにしろ、豊かな国を築く事が出来た。

そして、疲れ果てた彼女は忠臣として仕えてくれた一人の青年の子を産み、その子供にすべてを継承させた。

ポケモンの血により永らえた命が終わろうとしている。

『それはだめだ』

永遠の眠りにつこうとしていた彼女の前に、再びダークライが現れた。

『眠りにつくのは構わない。だが、死ぬ事は許さない』

ダークライは空白の書を広げた。

肉体から魂が絡め取られ、空白の書は銀色に変化した。

そして、次に目覚めた時、彼女は雪原に横たわっていた――。

エピローグ 『真実』

エピローグ 『真実』

映像の再生が終わった。風景が元の地下室に戻る。

目の前にはドロシーと、おそらくは彼女のフーデインがいた。

「なんだよ、今のは」

バレットは困惑している。

「破壊の神？ 生命の神？ それに、なんでアルトやアギトが？」

あの映像の中に、俺とアギト、そして、セラが登場していた。サラの三人の子供として。

だけど、俺にそんな記憶はない。

「破壊の神と生命の神は、それぞれ、イベルタルとゼルネアスだな。カロスで実在が確認された伝説のポケモンだ」

そう言いながら、アギトはポケモン図鑑を操作した。すると、確かに映像の中に登場した二体のポケモンが登録されていた。

イベルタル。はかいポケモン。あくどひここの二重タイプ。翼と尾羽を広げる時、赤き輝きをもって、あまねく生命を吸い取る伝説のポケモン。

ゼルネアス。せいめいポケモン。フェアリータイプ。ツノが七色に輝く時、永遠の命を分け与え、樹木の姿で千年の眠りにつく。

「カロスに伝わる《大破壊》と《滅びの都市》。二つの伝説に二体は登場している。それに、最近になってアブニヨン郊外にある湖でそれらしき存在が目撃されたという情報もあるそうだ」

「あんなポケモンが最近!?!」

バレットは目を見開いた。

「ゼルネアスは樹木となり眠りについたそうだが、イベルタルはどこかへ飛び去ったという話だ」

「大丈夫なのかよ、カロス……」

「カロスの心配をしている暇はありませんよ」

エリザが言った。

「破壊の神と生命の神は実在する。それは分かりました。だけど、ど

うして？ どうして、アルト達が映像の中に登場したのですか!？」

エリザが詰め寄ると、ドロシーは言った。

「彼らがサラの子供だからよ」

「そんな筈はありません！ だって、アルトやセラにはご両親がいるんですよ!？」

実のところ、二百年という時間を無視すれば、ドロシーとエリザの言葉は矛盾しない。

「俺とセラはどっちも養子なんだよ」

「え？」

お父さんとお母さん。二人の事は愛しているし、大切に思っている。

だけど、事実は変わらない。アクセルのように両親を『父ちゃん』、『母ちゃん』と呼べない理由は養子だからだ。どうしても、踏み越えられない一線を感じてしまう。

「俺達はお父さん達にどこからかヴェゼール・ヴィレッジに連れてこられて、そこでアクセルと出会った。アクセルと出会う前の事はなんも覚えていないんだ」

「それって、まさか……」

エリザはドロシーを見た。

「あの映像に脚色は一切ないわよ。だって、わたしが作ったものじゃないもの。あれはわたしや、アルトギア手記と呼ばれているものの想念をフリーデインが紡ぎあげたものだもの」

「じゃあ、なんですか!？ アルト達が二百年前に生まれたヴリル王とサラ王女の子供だって言うんですか!？」

「そ・の・と・お・り。ちなみに、封印を解いて解放したのはレムよ。知ってるでしょ？ バステイロジムのジムリーダー」

エリザは絶句した。何かを喋ろうとしているけれど、言葉にならないみたいだ。

「同一人物だよ。竜メルカトの山脈で眠っていたの。代々の巫女に守られながら。ちなみに、竜神教の『竜神』っていうのは、レムの事よ。あの子もアルトくん達みたいに薬を使わずにポケモン達を……、特にドラゴ

ンタイプを従わせる事が出来た。まあ、アルトギアが出産時に何かしたんでしょね」

「それは、アルト達もアルトギアに何かをされているという事ですか!?!」

「おそろくね。だから、キズナ現象を操れるのさ。あれは本来、ヴリルのような特殊な人間か、あるいは……、本当の意味でポケモンと心を通わせる事が出来る真のポケモントレーナーにしか使えないものだからね」

「言ってくれるな」

「俺達は真のポケモントレーナーじゃないって事?」

まるで、スピアー達との絆をバカにされていたように感じて、腹がたった。

「そうは言っていないよ。だが、真のポケモントレーナーでも、キズナ現象を複数のポケモンに対して発動させる事は出来ない。カロスでゲッコウガをキズナヘンカさせたトレーナーも、それ以外のポケモンでは使えなかったようだしね。あんた達に元から才能があつたとしても、複数にキズナ現象を発動させられている時点で、王の力が関わっているんだよ」

そう言うと、ドロシーは手を叩いた。

「まあ、あんた達も自分の出生の事に興味なんて持ってないだろ?」

そういう目だ。本題に入ろう」

そのとおりだ。実際のところ、本当の親が誰で、自分がいつの時代に生まれた人間なのかなんて、そこまで興味はない。

両親に対して距離を感じている事は確かだけど、大好きな事も確かなんだ。

「あんた達に二百年前の真実を教えた理由。それは、そろそろイベルタルが復活するからさ」

「イベルタルが!?!」

「復活!?!」

バレットとエリザが目を丸くしている。だけど、俺にはなんとなくだけで予想がついていた。二百年前、ゼルネアスがイベルタルを倒し

た時、イベルタルは繭の形になって大地に沈んでいった。

あれは死んだわけじゃない。復活の為にエネルギーを蓄える為の形態なんだ。

それはつまり、いずれ復活しようとしている事を意味する。

「ダークライの目的は二つ。一つはわたしを死なせない事。これはアルトギアの意志が残っているせいね。そして、もう一つは世界を滅ぼす事」

「世界を滅ぼすって、なんで!?!」

エリザは困惑している。

「ダークライはアルトギアを核に、アイツが背負って来た死者達の怨念が寄り集まって生まれたポケモンだからさ。この世のありとあらゆるものを恨み、憎んでいる。だから、すべてを滅ぼす。その為のイベルタルであり、それを復活させる為のアガリア政府。その尖兵たるヴリル教団」

ドロシーは言う。

「ダークライによるイベルタル復活計画。それこそが『来るべき災厄』だよ。イベルタルの復活を予感しているポケモン達は死の恐怖から凶暴化を増している。当時の恐怖を知る亡霊の港の亡霊達も騒ぎ出している」

「い、いやいやいやいや! 仮にそれが真実だとしても! それを知っていて、どうして防ごうとしないんですか!?! イベルタルの復活って……、二百年前に起きた悲劇が繰り返されるって事ですよね!?!」

エリザが叫ぶように言うと、ドロシーは不服そうに頬を膨らませた。

「あら、失礼ね! これでも頑張ったのよ? ダークライを倒せれば一番手っ取り早かったけど、わたしには無理だったからさ! 王家にはさつき見せた光景を文章化したものを遺したし、その時代の魔獣使いがイベルタルを倒せる力を得られるように大迷宮を築いたし!」

「なんで、ダークライを倒せなかったんだ? フーパ達だっていたん

だろ?」

バレットのもつともな質問にドロシーはキレ気味に答えた。

「アイツ、わたしに危害を加えられないからって、完全に逃げに徹するのよ! さすがのわたしも逃げに徹するダークライを捕まえる事は出来なかつたわ」

なるほど、たしかに逃げに徹するポケモンを捕まえるのは容易じゃない。

凶鑑で確かめると、ダークライはあくタイプだけど、ゴーストタイプののように壁をすり抜ける事も出来るそうさ。

「それで、いつ復活するの?」

「今」

「ふーん、今なんだ。ん? 今?」

いきなり、地面が揺れ始めた。

「今って、今なんですか!」

「なんで、そんなギリギリのタイミングなんだよ!」

「いやー、本命が既に向かつてるからさー」

「本命?」

「そうだよー。言ったでしょ? あんた達は三番目であり、四番目であり、五番目であり、六番目だつて」

ドロシーの言葉にハツとした。

「二番目の攻略者!」

「大正解! 一応、あの子が失敗した時の為にあんた達にも状況を理解させる為に映像を見せたのよ。特にアルトくんはヴリル達が期待を寄せていたみたいだしね」

「あの子って、誰?」

「君がよく知っている子さ」

ドロシーは意地悪く微笑んだ。

「アクセル。あの子がわたしの本命。王の資格なくして、王に匹敵する存在。真のポケモントレーナー。あの時代には存在しなかった……、わたしが求めた力を持っている子」

第八章 『来るべき災厄』 プロローグ

プロローグ

壁画が崩れ、その奥に封印されていたポケモンの姿が顕となった。アクセルは咄嗟にポケモン図鑑を開く。

「イベルタル。はかいポケモン。あくどひここの二重タイプ。翼と尾羽を広げる時、赤き輝きをもって、あまねく生命を吸い取る伝説のポケモン」

アクセルは図鑑の説明文と目の前のポケモンを何度も見比べた。

「ウソだろ!? 伝説のポケモン!?!」

泡を食うアクセルを尻目に、ミリガンは周囲を見渡す。

この場にいた教団員達はフーパの異次元ホールによってメルカトへ送られた。けれど、増援に現れた教団員達が広場に集まり始めている。

「ほぼ全員がイベルタルの存在に驚き、慄きの表情を浮かべている。

「な、なんだ、ここは!?!」

「お、おい、なんだよ、あのポケモン!?!」

「ど、どうして、わたし……!?!」

「おれ、なにしてんだ!?!」

「あ、あれ? なんだ、ここ!?!」

「様子がおかしい。まるで、いきなりここに迷い込んでしまったかのようだ。」

「うそ。全員!?! 待って。まさか、ヴェルトーゼも!?!」

「ミリガンはセラを見た。」

「長かった。無数の声がワタシの中で渦巻き続けた。だが、それも終わる」

「セラの瞳が赤く輝きはじめた。」

「ダークライ! すべて、あなたの仕業だったの!?! シグナスでも、ヴェルトーゼでもなくて、ポケモンのあなたが!?!」

「すべてではない。運命を整えた者は他にいる。ワタシは求める者の声に応えてきただけだ。歴史の真実を求める者、強き力を求める者、世界の救済を求める者。彼らの想いがあってこそだ」

その言葉には深い感謝の念が籠められていた。

「これこそが真実。これこそが力。これこそが救済。彼らの望みも叶う。イベルタルがすべての命を終わらせるのだから」

「命を終わらせる!?!」

「何をするつもりなの!?!」

アクセルとミリガンの顔に恐怖と焦燥が浮かぶ。目の前でゆつくりとまばたきを始めたポケモンには、ダークライの口にした事を実行出来る程の力がある。そう感じたから。

「イベルタルは生命を吸い取り、長き眠りにつく。ただ、それだけを繰り返す。故に破滅的ではあっても、永遠ではない。だが、王の力を使えば、その限りではない。地上すべての生命を吸い尽くしてみせよう」

「い、意味わからねえ!　なんで、そんな事をするんだよ!?!」

「意味?　イベルタルこそが空白の時代を終わらせたもの。イベルタルこそが最強の力。イベルタルのもたらす滅亡こそ、救世だ。それ以外に意味など無い」

「意味がないわけないだろ!　テメエが言つてた事じゃねえか!　歴史も、力も、救世も!　お前以外のヤツの望みなんだろ!?!　だったら、テメエの望みはなんなんだよ!?!」

「ワタシに望みはない。ただ、この声が聞こえなくなればいい」
「声?」

「うるさく騒ぎ続ける声だ。死にたくない。消えたくない。そればかりを繰り返す。ワタシが生まれ落ちた時から延々と。それが堪らなく不快なのだ。すべてを滅ぼせば、この声も消えるのだろうか?　だからこそ、ワタシは魔女の企みに乗る事にした」

「魔女?　まさか、それは……」

ミリガンが口を開いた瞬間、イベルタルが動き出した。

「キシヤアアアアアアアアアアツ!!」

巨体が動き出した事で、洞窟全体が揺れ始めている。天井や壁に罅が走り、今にも崩れてしまいそうだ。

「アクセルくん！ いじげんホールでみんなを！」

「分かった！ 頼むぞ、フーパー！」

《フーパー、ワカッター！ オーデーマーシー！》

フーパーは張り切っている。

「な、なんだこれは!?!」

「い、いや、落ちる!?!」

「助けて！」

阿鼻叫喚だ。右往左往していたヴリル教団の教団員達は次々にフーパーの異次元ホールに呑み込まれていく。

洞窟に残っているのはアクセルとミリガン、そして、セラの三人のみとなった。

「ダークライ！ お前の事情もぼんやりとだけど分かった！ けど、セラは関係ないだろ！ 返せ！」

「返せない。モンテロの生み出したクローンを使おうとしたが、ラムタルアやサラのクローン達では王の力を使えない。ヴリルとコスラの因子を持ったクローンの成功体はミリガンのみ。だが、ミリガンの力ではイベルタルを御する事が出来ないと分かった。やはり、王の力を正當に受け継ぐ者でなければならぬ。アルトと戦わせてみて、それがわかった」

「アルト!?! ってか、王の力って何なんだよ!?! あと、クローンって何!?!」

「王の力とはヴリル王の力の事だ。その力は二百年前に魔女が眠らせた三人の子供達に受け継がれている。そして、クローンとは……、ワタシもよく分からないが、科学の力がすごいらしい」

「最後雑だな!?!」

アクセルがずっこける横で、ミリガンは息を呑んだ。
「待って！」

自分がクローンである事は知っている。培養槽の中で白い気泡がゆらゆらと揺れながら消えていく様を追いつけた日々の事も覚えて

いる。

生きたい。産まれない。外に出たい。

それだけを想いながら、外の世界に憧れ続けていた。ただ、知らない。

「ラミタルアやサラのクローンって、どういう事!？」

「ジュラ山脈。そして、メルカト。この二つの集落はラミタルアとサラの魂の器を作り上げる為の実験場だ。もっとも、お前を生み出したモンテロの科学とはアプローチの仕方が異なる故、クローンという言葉を使うのは誤っているかもしれないな」

「ジュラ山脈とメルカト!? それって、まさか!？」

ミリガンが叫ぶが、おしゃべりの時間はそこまでだった。ついにイベルタルが完全に覚醒を果たし、暴れ始めた衝撃で天井と壁が崩れ始めたのだ。

「と、とりあえず脱出するぞ! ミリガン! セラ……じゃなくて、ダークライも来い!」

「必要ない。ワタシは壁を抜けられる」

「セラの体で出来んの!？」

「あつ……」

ダークライはしまった! という顔をした。

「……行くぞ」

「仕方がない。頼むぞ」

《オーマーカーサー!》

ダークライは我先にいじげんホールを通っていった。

その光景にミリガンは脱力した。

「アクセルくん。君って、すごいね」

「え?」

「行きましょう」

「お、おう!」

いじげんホールを潜った先はヴェゼール要塞の外だった。

大地が揺れている。

「さて、イベルタルと同調するでしょう」

「いや、するなよ！ よく分かんねーけど、やったらまずい事は分かん
だよ！」

アクセルはダークライの腕を掴んだ。
「止めても無駄だ」

ダークライはアクセルの手を振り払おうとした。けれど、振り払え
なかった。

「む？ 何故だ？」

「いや、めっちゃ掴んでるじゃん」

腕をブンブンと振り回しておきながら、ダークライの手は逆にアク
セルの腕を掴んでいた。

「おかしい。掴む気はなかったのだが」

腕を振るのを止めると、ダークライはジツとした。

何もせず、何も語らず、ジツとしている。

「……え？ なにしてんの？」

「いや、離そうとしているのだが、何故か離せないのだ」

ダークライは困惑している。

その姿を見ていて、ミリガンはポンと手を叩いた。

「もしかして、セラちゃんが離したくないからじゃない？」

「セラが？」

「そうなのか？」

「そう考えないと、今までのアナタと今のアナタのギャップが説明出
来ないもの。アナタが操っていた筈のシグナスやヴェルトーゼは邪
悪そのものだったけど、セラちゃんを操っているアナタは邪悪ってい
うより、天然つぼさがあるっていうか……」

「天然だと？ ワタシのどこが天然なんだ!？」

ダークライは怒った。

「たぶん、今のもセラの感情じゃね？」

「む？ そうなのか？ たしかに、何故、天然と言われて怒ったのか、
ワタシ自身も不可解だ。天然とは一体、なんなのだ？」

困惑しているダークライを見つめながら、アクセルは思った。

ダークライは悪いポケモンなんかじゃない。怖い事を言っている

のも、きつと、なにか事情がある筈だ。

「ダークライ。今も、その声つてのは聞こえているのか？」

「ああ、聞こえている。だが、妙だな。いつもより、声が遠く感じる。それ以上に、天然と言われた事に対する怒りが湧いてくる。天然……。ミリガンよ、一体如何なる罵詈雑言を口にしたのだ!？」

「いや、そこまで酷い事を言ったつもりはなかったんだけど……」

そう言いつつ、ミリガンは「ごめんね」と頭を下げた。

地下での張り詰めた空気が嘘のようだ。

だからこそ、アクセルは決めた。

「よし！ ダークライ！ オレのものになれ！」

「なに!? ……何故だ、胸がドキドキしてきたぞ」

頬を赤らめるダークライの両肩にアクセルは手を置いた。

「どうすればいいかは分からねえ！ だけど、約束する！ オレがその声つてヤツをぶっ飛ばす！ だから、オレと一緒に来い！」

「くっ……、何故だ！ 何故か分からないがすごく嬉しいぞ！ これは一体!？」

今も大地は揺れ動き、要塞はどんどん崩れていつている。

けれど、ミリガンの表情は穏やかだった。

破壊の神の復活は大問題だ。けれど、今はそれよりも目の前の大事件だ。

「もう一度言うぞ、ダークライ！ オレのモノになれ！」

「わ、わかった！ よくわからないが、わかった！」

「よし、行くぞ、モンスターボールだ！」

「お、おお！」

アクセルがモンスターボールをダークライの……、正確にはセラのおでこに当てた。すると、セラの体から黒いもやが抜け出て、そのままボールの中へ吸い込まれていった。

アクセルはダークライをゲットした。

「これからよろしくな、ダークライ！ お前を苦しめてる声つての、絶対になんとかしてやるからな！」

ダークライのモンスターボールを握りしめ、熱く叫ぶアクセル。

ミリガンはついつい拍手してしまった。

「つと、セラ！」

急にセラが脱力した。抱きとめようとアクセルが手を伸ばすと、見えない力に弾かれてしまった。

「なんだ!?!」

《いかん!》

モンスターボールからダーククライが飛び出した。

「な、なんだ!?! どうしたってんだ!?!」

《魔女よ! まさか、そこまでか!?!》

「え? どういう事だ?」

《セラの王の力にイベルタルが干渉している! この場を離れろ、アクセル! 来るぞ!》

「エアームド!」

咄嗟にミリガンが動いた。アクセルの腕を引くと、くり出したエアームドの背中に飛び乗り離脱する。

直後、大地が裂けた。

「お、おい、セラが!」

慌ててエアームドから飛び降りようとするアクセルをダーククライが押さえつける。

《セラは無事だ! だが、まずい事になった!》

「なんだよ、まずい事って!」

《あれだ……》

ダーククライが指さした先、大地の亀裂から赤い翼が飛び出してきた。

そこにセラの体が飛んでいく。

「セラ!」

そのまま、セラはイベルタルと接触して、その内側に呑み込まれてしまった。

「セラ!!」

「取り込まれた!?!」

《イベルタルめ。二百年前の事を覚えていたな。王の力が脅威である

事と、大いなる力である事を覚えているようだ。利用する気だな、王の力を！」

「だ、ダークライ！ セラは大丈夫なのか!？」

慌てふためくアクセルにダークライは言う。

《しばらくは大丈夫な筈だ。だが、王の力を引き出させ続けなければ、二百年前のヴリルとコスラに起きた事が再現されてしまう。ヤツを倒せば、取り込まれたセラも解放される筈だ。急げ、アクセル!》

「よく分かんねーけど、時間がないって事だな！ そういう事ならやってやる!」

アクセルはファイアローをくり出した。

「アーイツ!」

「いくぞ、ファイアロー！ セラを助けるんだ!」

「アーイツ!」

アクセルはイベルタルを睨みつけた。

「勝負だ、イベルタル！ セラを返してもらおうぜ!」

「キシヤアアアツ!!」

まるで、アクセルの挑戦に応えるかのように、イベルタルは雄叫びを上げた。

第一話『VSイベルタル』

アクセルが戦っている。

そう聞いた瞬間、胸の中で炎が沸き起こった。

「フーパー！」

「おつでましー!!」

モンスターボールから飛び出したフーパーは嬉しそうに両手を広げた。

「フーパー！ 俺をアクセルの下へ連れて行ってくれ！」

「ちよっ、待って下さいよ！ いきなりですか!?!」

「今の今まで連戦してたんだぞ?! ちよっと、落ち着けよ！」

エリザとバレットが止めてくる。だけど、立ち止まってなんていられない。

「イベルタル。神と呼ばれるようなポケモンと戦えるチャンスなんだ！」

「は?」

「え?」

「うわっ……」

エリザとバレットは何故か驚き、ドロシーに至っては引いている。

「な、なに、その反応? 早く行かなきゃ! アクセルが倒しちゃう前に!」

「倒しちゃう前につて、お前……」

「仮にも神と呼ばれるようなポケモンなんですよ!?!」

不思議だ。どうして、二人は耐えられるんだろう?

「二人は神と戦いたくないの!?!」

「そりやそうだろ!?!」

「むしろ、なんでそんなに戦いたがってるんですか!?! 相手は一国を滅ぼした存在なんですよ!?!」

「だって、神に勝てば、俺のスピアーは神を超えた事になるじゃないか! ザラクと戦うんだから、神くらい超えていかなきゃ!」

「あなたの中でザラクはどんな存在なんですか!?! 神より上なんです

か!?!」

「当然だ！ 最強のポケモントレーナー！ 俺が目指す到達点だ！ 神を踏み越えた先に彼はいるんだ！ だから、俺は神を倒す！ フーパ！」

「おーでーまーしー！」

フーパがいじげんホールを展開した。

「本気で行く気なんですか!?!」

「ちよつと待て！ マジか!?! 大迷宮を攻略した直後なんだぞ!?!」

二人がいじげんホールの前に立って止めようとしてくる。

「バレット、エリザ」

俺が口を開く前にアギトが二人の前に立った。

「オレも戦いたい。二百年前の事などどうでもいいが、神と戦うチャンスは見逃せない！」

「お前もか!?!」

「だああああ、この脳筋共！ 今までの敵とは違うんですよ!?! 死ぬかも知れないって分かっています!?!」

「分かっているよ！」

俺はアギトの隣に立った。

「分かっているても、戦いたいんだ！ お願いだ、二人共！ 行かせてくれ！」

「頼む！」

俺とアギトは二人をジッと見つめた。

しばらくすると、二人は揃ってため息を零した。

「だああああ、もう！ もう！ もう！ 分かりましたよ！」

「こうなったらヤケだ！ とことん付き合ってやるよ！」

二人は青筋を立てながら言った。

「付き合うって、別に二人は無理に来なくても……」

「ああ、二人はここで待っていてくれ」

俺とアギトの言葉に二人の顔は更に険しくなる。

「ふざけんな！ あんな怪物と二人だけで戦わせられるか！」

「わたし達は旅の仲間です！ 共に歩み、共に戦う！ 引くも一緒、進

むも一緒！ あなた達が戦うというのなら、わたしだって、バレットだって、戦いますよ！」

胸が熱い。昂ぶる。

「分かった。戦おう！ みんなで一緒に、神を倒すんだ！」

「燃えてきたぞ！」

「やってやるぜ！」

「行きますよー！」

いじげんホールに向かっていく。

「ほーんと、羨ましい！」

いじげんホールを潜る寸前、ドロシーのつぶやきが微かに聞こえた。

第一話『VSイベルタル』

「ニトロチャージだ！」

「アーイツー！」

アクセルの指示を受けて、ファイアローは羽ばたく。

ニトロチャージは炎を纏いながら攻撃する技だ。そして、この技にはほのおエネルギーを貯める事で飛翔速度をあげる追加効果がある。

速度を高めながら接近してくるファイアローに対して、イベルタルが動いた。

「キシヤアアアアアッ！」

イベルタルの体に暗黒の光が漂い始める。

「イベルタルがわざを放つわ！」

「ああ！ 避ける、ファイアロー！」

指示と同時に軌道を変えるファイアロー。

直後、イベルタルは暗黒の光を放った。直撃こそ免れたものの、その余波によって発生した烈風がファイアローを天高く舞い上がらせる。

アクセルとミリガンに乗せたエアームドも発生した乱気流に呑み込まれてしまった。まるで洗濯機の中にいるかのように上下左右に振り回されながらも、ミリガンはアクセルを抱きしめながらイベルタルの放った光の着弾点を見た。

山が二つに割けていた。大地にも底の見えない亀裂が刻まれている。

「なんて威力なの!?!」

超級と呼ばれるポケモンのわざの中には恐るべき威力を秘めているものもある。

けれど、ここまでの威力を生み出せるポケモンなど、四天王の一人であるミリガンをして、見たことがない。

まさに、空前絶後。直撃すれば、何者も生き残る事は出来ない。

「セラちゃん……、ごめんなさい!」

撤退するしかない。自分一人ならば最後まで戦い続けただろう。けれど、ここにはアクセルがいる。

ミリガンはイベルタルを相手にしながら、アクセルを守り切る自信が持てなかった。

乱気流から抜け出して、ようやくエアームドの飛行が安定したところで、ファイアローを戻させる為に、気を失っているだろうアクセルの手下にあるモンスターボールに手を伸ばす。

けれど、その腕をアクセルは掴んだ。

「アクセルくん!?! 君、意識があるの!?!」

「つたりまえだ! セラを助けなきゃいけないんだ! 寝てる暇なんてない!」

その瞳に宿る意志の強さにミリガンは息を呑んだ。

意識があるのなら、当然、イベルタルが放った『あくのはどう』の空前絶後の威力も理解した筈だ。それなのに、彼の顔には恐れが一切ない。

「セラを助けられるのは今しかないんだ! そうだろ!?!」

アクセルは追いかけてきたダークライに問う。

《あ、ああ。その通りだ》

「だったら、やるしかねえ! レックウザ! フーパ!」

アクセルはレックウザとフーパをくり出した。

「オレに力を貸してくれ!」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!」

《フーパニオーマーカーセー!》

アクセルはエアームドの背中からレックウザの背中に飛び移った。

「アクセルくん!」

「ミリガン、アンタは逃げてくれ! これはオレの戦いだ! アンタが付き合う必要はない!」

「馬鹿言わないで! 君を置いて逃げられるわけがない!」

ミリガンはハッサムをくり出した。ギルガルドが居ない今、空で戦えるポケモンはエアームドとハッサムのみ。

「いくわよ、ハッサム!」

「ハッサツ!」

ハッサムの体に漆黒の雷霆が迸る。両腕のハサミが大きく、禍々しく変わっていく。全身が漆黒に染まっていく。

「メガシンカ!? いや、キズナ現象か!」

ハッサムの変化が止まると、ミリガンとハッサムは同時にアクセルを見つめた。

「アクセルくん。君が死んだら、セラちゃんは助かったとしても喜ばない。きつと、心に大きなキズを持って生きる事になる! だから、君は決して死んではいけない! それを忘れないで!」

「あ、ああ! 分かってるさ! オレは死んだりしねえ! 絶対にセラを取り戻す!」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

《フーパ、セラ、タスケル!!》

アクセルの決意にレックウザとフーパが応える。

そして、そこにファイアローが戻ってきた。

「ファイアロー! お前も頼むぞ!」

「アーツ!!」

フーパとファイアローがイベルタルに向かっていく。

「斬る!」

「ハッサツ!」

同時にミリガンのハッサムも飛び出した。一気にファイアローとフーパを追い越し、イベルタルに肉薄する。

「ギンチャアアアアアアアッ!!!」

イベルタルは雄叫びを上げた。あまりの音量に大気が震えている。イベルタルの翼に暗黒の光が集まる。

《いかん！ イベルタルのデスウイングが来る！ 当たれば死ぬぞ！》

「ハッサム！」

「ファイアロー、フープ！」

死を誘う光が放たれる。ハッサムは自身とミリガン、二つの眼をもつて光の射線を見切り、間一髪で回避した。ファイアローも持ち前のスピードで効果範囲から離脱に成功する。

けれど、フープだけは回避が間に合わなかった。

「フープ!?!」

《オーカーエーシー!》

しかし、フープは健在だった。いじげんホールでデスウイングの光を異次元空間に飛ばし、別のいじげんホールからイベルタルに向かって送り返した。

「ナイス！」

《フープ。ナーイースー!》

命を刈り取る光線を自ら受けたイベルタル。ただでは済むまいと笑みを浮かべるアクセル。

けれど、

「ギンチャアアアアアアッ！」

イベルタルにダメージを負った様子はない。

「なんで!?!」

《デスウイングは相手の生命を吸い取るわざだ。自身で受けても、自身に還るのみ!》

「まじかよ!?!」

「けど、あのわざをフープが防げるなら心強いわ！」

そう言いながら、ミリガンは同調したハッサムと同様に右腕を振り上げる。

ハッサムはデスウイングをただ避けたわけではなかった。その光

を目眩ましにして、イベルタルの背後をとった。

「シザークロス！」

ハッサムの両腕のハサミに漆黒の雷光が絡みつき、巨大な刃となった。交差した黒雷の刃がイベルタルに襲いかかる。

「キシヤアアアアアッ!!」

イベルタルは怒りに満ちた雄叫びを上げると、いきなり回転し始めた。

巻き起こる烈風はまたたく間に竜巻へ変わった。

「ぼうふうか！」

「くっ！」

ハッサムは弾き飛ばされてしまった。

そして、竜巻の中から暗黒の波動が放たれた。

第二話 『最強の力』

渦巻く旋風の中から黒い閃光が放たれる。

「フーパ！ いじげんホールで叩き返してやれ！」

《フーパニオーマーカーサー！》

どんなに高威力の攻撃でも、いじげんホールに取り込んでしまえば怖くない。

デスウイングと違って、今放たれたわざはあくのはどうだ。効果はいまひとつでも、確実にダメージを入れられる。

フーパのリングにあくのはどうが直撃した。

《アレ、レ？》

「フーパ!？」

おかしい。さつきはデスウイングを抵抗なく取り込めたというのに、フーパのリングが押されている。それどころか、リングの周辺の空間が軋みをあげている。

「時空が歪むほどの威力!? まずい！ アクセルくん、フーパを戻して！」

「え？ あっ！」

フーパのリングに亀裂が走った。

《イダイ!?! イダイヨー、アークン!》

「フーパ!?! も、もどれ！」

フーパをボールに戻す為にモンスターボールに手をかける。けれど、すぐには戻せなかった。

「届かない!?!」

モンスターボールに回収する為には距離が離れすぎていた。

「レックウザ、フーパに近づいてくれ」

「待って！ 時空が歪んでいるのよ!?! 下手に近づいたら死んでしまわー！」

ミリガンが叫ぶと、アクセルは恐怖の表情を浮かべた。

「フ、フーパ!! すぐに助けに行くぞ!!」

「ギャオオオオオオオオオオオオオツ!!」

近づいただけで死ぬ可能性がある。そんな場所にフーパはいる。送り出してしまった。受け止めさせてしまった。取り残してしまった。

アクセルは拳を強く握りしめながらレックウザに命じる。

「ガリヨウテンセイ！」

同時にレックウザの体が七色に輝く。

「待って！ ダメよ！」

「フーパはオレのポケモンだ！ 絶対に助ける！」

メガレックウザへメガシンカを遂げたレックウザは天高く舞い上がっていく。

背中に乗せた主を気流操作によって保護しながら、最大最高の威力を発揮出来る高度へと至り、そこから急降下を開始した。

時空が歪む程の攻撃からフーパを庇う事は出来ない。射線に割り込んだところで盾にすらならないだろう。だからこそ、レックウザが狙う先はイベルタルの本体。

この一撃で決める。その一念をもって、レックウザは一本の槍と化した。

『ハアアアッ！』

その瞬間に、ダークライも動く。

『かなしばりを受けよ！』

イベルタルを完全に止める事は不可能。技も封じ込める事も出来ない。

それでも、一瞬のみならば、それも、体の一部分のみならば止められる。

そう判断したダークライはイベルタルに対してぼうふうの渦越しにかなしばりをかけた。

『いまだ！』

「いつけえええええっ！」

ガリヨウテンセイが竜巻を突き破り、イベルタルに命中した。

「これなら！」

「キシヤアアアアッ!!」

信じられない。アクセルは息を呑んだ。

メガレックウザのガリョウテンセイは計り知れない破壊力を秘めたレックウザの必殺技だ。

それをまともを受けて立ち上げられる理由が分からない。

「戻って、アクセルくん！」

ミリガンが叫ぶ。同時にきずなへんげ状態のハッサムがメガレックウザにドラゴンクローを叩き込もうとしていたイベルタルの翼にシザークロスを叩き込む。

その隙にレックウザはフープパの下へアクセルを運んだ。

「フープパ！」

「イダイヨー、アーくん！」

フープパは泣いていた。ときはなたれし姿からいましめられし姿に戻り、アクセルに抱きつく。アクセルはフープパを抱きしめながらすごいキズぐすりを振りかけた。

「ごめんな、フープパ……」

致命的な判断ミスのために、あと一步でフープパが死ぬところだった。

『アクセル……』

ダークライはアクセルの心が板挟み状態になっている事に気づいた。

セラを救いたい。

ポケモン達を危険に晒したくない。

これはただのポケモンバトルではなく、命のやりとりである事を今になって悟ったのだろう。

「アーン」

ファイアローも戻ってきた。心配そうにアクセルを見つめている。

彼の抱いた矛盾は一朝一夕でどうにかなるものではない。

そして、今この瞬間もイベルタルは動いている。

「ギシャアアアアアアアッ!!」

怒りに満ちた雄叫びと共に、イベルタルは闇雲にあくのはどうを放ち始めた。

「怒りで我を失っているの？」

エアームドと共にミリガンもアクセルの傍に降りる。

『おそろくな。ハッサムのシザークロスとレックウザのガリヨウテンセイを受けたのだ。無傷の筈がない』

「でも、ダメージを負った気配はないわよ?」

『デスウイングだ。ヤツめ、ぼうふうとあくのはどうを同時に発動しながら、デスウイングで地下の生命体の生命を吸っていたのだ』

「地下の?」

『この地下には完成していないクローン達の培養槽が大量に保管されていた。おそろくは……』

「ここでもクローンを?! まさか、そんな?!」

ダークライの言葉が示すもの。それはミリガンにとって兄弟姉妹とも呼べる大量のクローンの死だった。

『彼らは失敗作だった。けれど、イベルタルを御する為の器を目指して製造された。その生命が内包するエネルギーは常人の数倍以上だ』

それを聞かされたミリガンの表情は苦痛に満ちていた。

クローン達は意志を持っている。培養槽から出たい。外の世界を見たい。そう願いながら泡の数を数え続けている。

培養槽の中にいた頃のミリガンがそうだった。

それなのに、何も出来ず、何にも成れず、何も見れずに生命を吸われて果てていく。

「そんなの……っ!」

酷すぎる。ミリガンの眼は涙で滲んでしまった。

そして、この状況において、それは致命的過ぎた。

イベルタルのあくのはどうがミリガンとアクセルの下へ飛んでくる。

二人は動けない。ダークライ、レックウザ、ファイアロー、フーパ、ハッサム、エアームドも咄嗟に思いつけた行動は迎撃の為に最大威力の攻撃を放つ事だけだった。

あくのはどうを放ってから、ダークライは判断を間違えた事に気がつく。逃げるべきだった。二人を連れて、回避に全力を尽くすべきだった。

これがトレーナーの指示を得られない状況のポケモンの限界だった。

『あ、アクセルだけでも!』

ポケモン達はアクセルとミリガンの壁となる事を最後の使命と考えた。

守る事。それ以外のすべての思考を消し去り、覚悟を決めて衝撃に備える。

そして、彼らは聞く。

「バシャーモ、ブレイズキック」

「バシヤッ!」

第二話『最強の力』

ダークライは何が起きたのか理解する為に数秒の間硬直した。

イベルタルのあくのはどうはまさに空前絶後。時空すら歪むほどの威力だった。

そのあくのはどうを現れたバシャーモはブレイズキックで二つに割いたのだ。

両断されたあくのはどうは大地を割り、底も見えない程の谷間を大地に作り上げた。

『あ、あれは……』

黒い男がそこにいた。

『ヴ、ヴリル……?』

ダークライはつい、いる筈のない男の名前を呟いた。

「誰だ、それは?」

黒い男はミリガンとアクセルの傍に降り立った。

「ガツカリしたぞ、ミリガン。お前はその程度だったのか?」

煽るように、彼は言う。ミリガンは涙を拭いながら声の主を見た。

「ザ、ザラク……」

チャンピオン・ザラク。アガリア地方最強のポケモントレーナー。

黒い外套を風で靡かせながら、彼の瞳はミリガンを見つめていた。

「ミリガン。アレを野放しにすれば、このアガリアは死の大地と化すだろう。それなのに、何をしている? 俯いて、見過ごすのか? そ

れがお前の正義か？」

「だ、だって！」

ミリガンは涙を零しながら叫んだ。

「こ、この地下にはわ、わたしと……わたしと同じ境遇の子達がいたの！　それ、なのに！　それなのに！」

「それが立ち止まって俯く理由になるのか？」

その言葉にミリガンはザラクを睨みつけた。

「あ、あなたには分からないのよ！　培養槽の中で生まれて、外の世界も見る事が出来ずに死んでいく無念さが！」

「ああ、分からない。それに、そんな事はどうでもいい」

「そんな事ですって!？」

ミリガンの顔は怒りで歪んだ。これまでも、ザラクの理不尽さや、はた迷惑な行為に怒りを感じる事が無かったわけではなかった。けれど、ここまでの感情を抱いたのは初めての事だった。

「あなたに人としての心はないの!？」

「あるさ。もちろんだ。人だからこそ、オレは今、心の底からガツカリしている。そして、同時にワクワクもしている」

「なにそれ……」

相変わらず、この男の思考回路は理解が出来ない。ミリガンは辟易した。

「お前ならば、その余計な感情を飲み込み、更なる高みへ到れる筈だ。ああ、余計というのはまさに余計な一言だったな。むしろ、意義のある感情だ。踏み台としてな」

「あなたの言っている事、なにもわからないわ」

眉間にシワを寄せるミリガン。

「そうか、それは残念だ。ならば、お前はここまでだな」

そう言うと、ザラクは白けた表情でミリガンから視線を外した。

『お、おい、貴様。いくらなんでも酷いのではないか?』

ダークライが見かねて口を開くと、ザラクは嗤った。

「人を真似るのがうまいな、お前。だけど、真似すぎると後で後悔するぞ」

そう言うと、彼はイベルタルを見上げた。

「さてさてさーて、そろそろこっちに意識を向けてもらおうか、イベルタル」

バシャーモの姿が変わっていく。黒い炎が全身を染め上げていく。

「バシャーモ、ブレイズキック！」

「バシヤッ！」

一鳴きすると、バシャーモはまるでミサイルのようにイベルタルへ向かって飛んでいった。

イベルタルが気づき、あくのはどうを放つ。けれど、バシャーモはブレイズキックで再びあくのはどうを引き裂いた。

『じ、時空ごと引き裂いた!?!』

イベルタルのあくのはどうは時空が歪む程の威力を誇る。けれど、バシャーモのブレイズキックは歪んだ時空ごと斬り裂いている。

『あ、あれではまるで『あくうせつだん』ではないか!』

シンオウの伝説に登場する伝説のポケモン、パルキアの持つ必殺技。それと同等の威力を誇るブレイズキックなど、常軌を逸している。

「あれが、ザラクの本当の力……?」

ミリガンも、さっきまでの怒りすら忘れて見惚れてしまう程の力だった。

「す、すげえ」

アクセルもポカンとした表情を浮かべてザラクの戦いぶりを見つめている。

そして、その間にもバトルは続いている。

「バシヤッ！」

「ギシヤアアアアッ！」

常識外なのはわざの威力だけではなかった。ザラクのバシャーモの音すら置き去る圧倒的なスピードに翻弄されてしまっている。

イベルタルが攻撃を放つと、その度に後ろへ回り込み、急所への確に攻撃を加えていく。

「二時代を終わらせた神。この程度か? ちきゆうなげ！」

その光景はまさに圧巻だった。それまで散々猛威を奮っていたイベルタルがバシャーモに振り回され、地面に向かって叩きつけられてしまった。

「……やめだ」

「え？」

いきなり、ザラクはバシャーモをボールに戻してしまった。

「ザ、ザラク!？」

ミリガンは慌ててザラクを呼び止める。

後少して勝てるというのに、このままではデスウイングですぐに復活してしまう。

それなのに、ザラクは帰ろうとしている。

「やっぱり、野生のポケモンはダメだな。動きが単調過ぎてつまらない」

「待って！ イベルタルを止めに来たんじゃないの!？」

ミリガンが言うと、ザラクは虚を突かれたような表情を浮かべた。

「正義の味方はお前だろ」

そう言うと、ザラクはフリーデインをくり出して、一緒にテレポートで去ってしまった。

「あつ……」

つい伸ばした手を下げられないまま、啞然とした表情を浮かべるミリガン。

その背の向こうで、イベルタルは再び飛び上がった。

「ギシャアアアアアアアアアアアツ！」

黒いオーラを纏いながら、さつきまでとは比較にならない程の怒りを露わとしながら。

そして……、

「間に合った！」

突如出現したリングから、青い髪の少年が飛び出してきた。

「イベルタル！ オレが相手だ！」

爛々と瞳を輝かせながら、ヴェゼール^こ・ヴィレッツジ^地で出会った少年はスピアーをくり出した。

第三話 『再起』

フーパのいじげんホールを抜けた先には惨状が広がっていた。嘗ての風光明媚な景観だった頃の面影は欠片も残っていない。

「これがイベルタルの力」

崩壊した故郷を前に、アルトの表情は生き生きとしていた。

底も見えない程の大地の亀裂を見ても、割かれた山を見ても、それを為したイベルタルに対して、彼はワクワクを感じるのみ。

そして、それは彼の手持ちポケモンのエースであるスピアーも同様だった。

「スピイー」

彼らの瞳に怖れはなく、怒りもなく、純粋な闘志のみが燃えている。

「いくぞ、スピアー！ フルパワーだ！」

「スピイーイイツ！」

緑の雷光が轟く。

きずなへんげを遂げたスピアーはアルトの心の声に応えた。

「真正面からはダメよ、アルトくん！」

イベルタルに向かって一直線に飛んでいくスピアーを見て、ミリガンが叫んだ。

同時にイベルタルがあくのはどうを放つ。

時空すら歪ませる空前絶後の攻撃を前に、アルトは叫ぶ。

「ドリルライナー！」

「スピイーイイツ！」

ニードルから緑の雷光を迸らせ、スピアーは螺旋を描きながらあくのはどうに向かっていく。

「そんな、ダメよ！」

イベルタルのあくのはどうを何度も体感したミリガンはスピアーが辿るであろう運命を幻視して悲鳴を上げた。

けれど――、

「スピイーイイツ！」

スピアーはあくのはどうと交差した後も健在のまま、その更に先へ

突き進んでいく。

「そのまま穿^{つらぬ}け、スピアー！」

「スピイー！」

遂にあくのはどうを超えたスピアーはイベルタルの急所に向かつてダブルニードルを放った。

「どうだ！」

「スピイツ！」

信じられない。同じ事がハツサムに出来るとは思えないし、させようとも考えられない。

時空すら歪むエネルギーの波動に対して、スピアーはニードルの先にエネルギーを一点集中させる事で貫いてしまった。

集中させるエネルギーが不足しても、波動を貫く間に刹那の迷いが生じても、スピアーは軀を晒していた筈だ。それほどまでに危険な行為を躊躇いなく実行した。

「アルトくん。あなた……」

会う度に強くなる。会う度に彼に近づいていく。

以前、メルカトでリール署の副所長であるヴォルフに言われた言葉がある。

『アルトなら、届く。チャンピオンの領域まで。その足を止めさせたらアカン』

アルトは既に、その領域に足を踏み入れかけている。

「ギシャアアアツ！」

「あれ？ あんまり効いてない？」

「アルト！ イベルタルはデスウイングを使うんだ！ 周囲の生命体の生命そのものを吸い尽くすわざだ！ それで回復してんだよ！」

アクセルが叫ぶ。彼の瞳に再び光が戻っていた。

幼馴染の登場は、彼の心を再起動させた。

「戻ってくれ、フーパ。レックウザ、お前も」

アクセルはフーパとレックウザをモンスターボールに戻した。

残っているのはファイアローのみ。

「アルト！ アイツを速攻で倒さないと、セラが危ない！」

「セラが？　なんで？」

「説明してる暇がない！　いいから、やるぞ！　イベルタルを倒す！」

『ア、アクセル！』

再び闘志を燃え上がらせるアクセルにダークライは目を見開いた。
「うん。そのつもりで来たんだよ」

そして、アルトは当然のように言った。

「破壊の神・イベルタル！　相手にとって不足はない！」

恐怖など微塵も感じていない。

あるのはひたすらのワクワクのみ。

その瞳に宿す光は、まさにザラクと同一のものだ。

「熱くなるのは結構ですが、作戦はあるんですか？」

いつの間にか、いじげんホールをくぐり抜けたエリザ達が合流を果たしていた。

フリーザーを出しながらエリザが問う。

「回復が間に合わないくらいにボコボコにする！」

「ああ、それしかねえ！」

予想通り。エリザはやれやれと肩を竦めた。

「なんとまあ、脳筋な……」

「だが、それ以外に勝ち筋はないだろう」

そう言うと、アギトはりザードンをくり出した。

「こういう時、オレの役割って地味なんだよな」

バレットはぼやきながらフリーデインをくり出した。

「オレ達がバックアップしてやるよ」

「フリーデインッ！」

バレットの心に応えるように、フリーデインはサイコパワーを高めている。

「ところで、そっちのダークライはなんですか？　なんか、味方っぽい立ち位置にいますけど、敵っていうか、黒幕的な存在ですよね？」

エリザがダークライを睨むと、アクセルが視線を遮るようにダークライの前に立ちはだかった。

「ダークライはオレのポケモンだ！」

『アクセル……』

ダークライはもじもじしながら嬉しそうにアクセルを見つめている。

「……なるほど。要するに、敵ではないという事ですね」

さすがはドロシーの本命。エリザは既に黒幕を攻略済みのアクセルに感心しながらアルトを見つめた。

「ではではー。ちゃっっちゃと片付けちゃいましょうか！ 正直、さつさと終わらせてお風呂に入りたいんです！」

「たしかに、今日は盛り沢山だったしなー」

「風呂もいいが、ポケモン達のケアも念入りにしてやらないとな」

「そうだね。スピアーのニードルをピカピカにしてあげなきゃ！」

イベルタルを前に、あまりにも緊張感が欠けている。

そう思いながら、ミリガンはゆっくりと息を吸い込み、そして、ゆっくりと吐き出した。

そんな彼女に、アルトは手を伸ばした。

「ミリガンー！」

「……アルトくん？」

「一緒に戦おう！」

無邪気で、年相応の笑顔を浮かべて、アルトは言った。

手を取り、共に戦い、イベルタルを倒す。それが最善であり、アガリア警察の筆頭である己の為すべき事。それを理解しながらも、ミリガンは手を取れない。

地下深くで意味もなく生命を終えてしまった同胞達に対する言葉で表せない感情が彼女の手を縛り付けている。

「ミリガン」

けれど、その手をアルトは無理やり取った。縛り付けていたものを無理やり引き剥がして、ミリガンに言う。

「俺、ようやくミリガンと一緒に戦えるところまで来たよ！」

はじめて会った日、コクーンを必死に守ろうとしていた少年。彼が旅立ちを決意した時にも立ち会った。それからアガリア全土で巻き起こる数々の事件の中で彼の成長を目の当たりにしてきた。

身長も、少し伸びた気がする。

「……強くなったんだね」

「うん！」

繋いでいる手から彼の体温が伝わってくる。

あたたかさがじんわりと流れ込んでくる。広がっていく。動かな
なくなっていた手足が息を吹き返す。

「アルトくん」

なぜだろう。彼の前ではかっこよくありたい。

憧れてくれた彼の理想でありたい。

生まれて初めてかも知れない。

見栄を張りたい。

「一緒に戦おう」

「うん！」

繋いだ手をそのままに、ミリガンはイベルタルを見つめる。

さつきまでの渦巻くような感情は収まっていた。

「イベルタル！ アガリアの平和の為に、斬る！」

第三話『再起』

第四話 『スピアー、怒りのミサイルばり』

イベルタルの怒りは極限に達していた。身に纏う暗黒は陽光を遮る天蓋となり、死を齎す極光がトレーナーとポケモン達に襲いかかる。

デスウイングに触れたものはまたたく間に石化していく。人であろうと、ポケモンであろうと、植物であろうと、生き物である限り、例外なく生命を吸い尽くされていく。

一つの時代を終わらせた存在。破壊の神。その偉大なる力を前に、胸を高揚させるものがいた。

「スピアー」

緑の雷光を纏う、青い蜂。アルトのスピアーは昂ぶっていた。

それは、キズナを通じて伝わって来るアルトの心だけが理由ではない。

スピアー自身が、この状況を喜んでいた。

嘗て、手も足も出なかった存在。かげぶんしんを教えてくれたポケモン。ハッサムと肩を並べて戦える事が嬉しい。

踏み越えれば、更なる高みが約束されている強大な敵に立ち向かえる事が嬉しい。

最愛の主であるアルトと心が通じ合い、同じ想いを共有出来ている事が嬉しい。

「準備はいい？ スピアー」

無論。

「よし、いこう！ かげぶんしん！」

アルトの指示と共にかげぶんしんを発動する。

すると、同時にハッサムもかげぶんしんを発動した。

「ハッサー！」

ハッサムの本体がチラリとスピアーを見る。

「スピアー」

共にいこう。

種族は違えど、共に主を思う者同士。共に高みを目指す者同士。

スピアーとハッサムの心は通じ合っていた。

「ギシャアアアツ！」

イベルタルのデスウイングが無数のかげぶんしんを消し飛ばしていく。けれど、目眩ましとしての役割は十分に果たした。

所詮、いくら強くても、イベルタルは野生のポケモンだ。

トレーナーの指示がなければ、その判断能力には限界がある。

「ニトロチャージ！」

スピアーとハッサムの無数のかげぶんしんの影に身を隠しながらイベルタルに接近していたファイアローが姿を晒す。

イベルタルの暗黒によって、辺りは真夜中の如く暗い。そんな中で、ニトロチャージにより炎を纏ったファイアローの姿は殊更目立ち、イベルタルの視線を縫い止めた。

「いくぞ、リザードン！」

その瞬間、アギトはZリングを起動させた。

Zリングはアローラ地方に存在する、Zわざを使う為のアイテムだ。しかし、王の力を持つアギトにとって、Zリングは必ずしもZわざの発動の為に必要なものではなく、王の力を隠すために四天王・シエルが与えただけのものだった。

アギトはこれまで、Zリングを使う時は王の力を使わず、王の力を使う時はZリングを使わなかった。その理由は、両方を同時に使う事が危険だった為だ。

片方だけでも、ポケモンは限界を引き出す力を持っている。それを両方使うという事の意味。それは限界を超えた、その先の力に手を伸ばすという事。

「オレ達も強くなるぞ、リザードン！」

アギトはドロシー戦でのアルトとスピアーを思い出しながら叫ぶ。

共に高みを目指す二人。その力を目の当たりにして、アギトの心は震えた。

己とリザードンも、もつともつと強くなれる。いつか、アルトやスピアーと全力のバトルをしたい。その舞台は、きつとポケモンリーグになる。その時の為に強くなれるチャンスは逃せない。

「烈火の如く燃える魂！ 受けろ、『ダイナミックフルフレイム』！」
王の力とZリング。二つの力がアギトとリザードンの間を駆け巡る。

吐き出された炎はレーザー光線のようにイベルタルへ伸びていき、太陽の如き閃光と共に炸裂した。

「ギシャアアアアッ!？」

イベルタルは苦しんでいる。デスウイングによる回復量をダイナミックフルフレイムが上回ったのだ。

「フリーデイン、レポート！ からの、かなしばり！」

《わたしも続くぞ!》

直後、バレットのフリーデインとダークライがイベルタルの眼前にレポートする。

二体のかなしばりによって、イベルタルのデスウイングが封印された。

《長くは保たんぞ！ 決めろ!》

ダークライが叫ぶ。

そこへ、エリザのフリーザーが最大威力のこおりエネルギーを解放した。

「ぜったいいいど!」

一撃必殺のぜったいいいどがイベルタルに命中した。瞬時に氷の彫刻と化したイベルタルは、それでも完全に戦闘不能にはならず、氷の中から抜け出そうとしている。

「なんとという……、ですが!」

イベルタルの前に二体のむしポケモンが飛来する。

「ダブルニードル!」

「シザークロス!」

スピアーとハッサムの最大威力の攻撃はイベルタルの急所に決まった。

イベルタルは藻掻くのをやめた。ここに至り、イベルタルは戦闘続行不可能なダメージを受けた。

「勝った!」

誰かが叫んだ。

イベルタルの纏う暗黒の中から、一人の少女が飛び出してくる。

「セラ！」

アクセルのファイアローがセラを掴むと、バレットのフーデインは瞬時に二人を回収してテレポートした。

「セラ！」

アクセルが慌てて駆け寄ると、セラは薄っすらと瞼を開いた。

「……アクセル？」

名前を呼ばれた瞬間、アクセルはセラを抱きしめた。

「え？ え？」

いきなりの事に顔を赤く染めるセラ。けれど、アクセルは解放しなかった。

助けられた事が実感出来るまで、セラを抱きしめ続けた。

「……なんか、呆気なかったね」

そんな中、アルトは少しつまらなそうに呟いた。

すると、エリザがポカンとアルトの頭を叩く。

「空気を読みなさい！」

「ご、ごめん」

そのやりとりを見て、ミリガンはクスリと微笑む。

「本当に強くなったわね、アルトくん。それに、みんなも」

一度は撤退すら検討した相手を一方的に打ち倒せた理由は援軍として現れたアルト達の強さがあってこそだ。

彼らは既に超級の中でも上位に食い込んでいる。今年のポケモンリーグはすごい事になりそうだ。

ミリガンは少しだけワクワクした。

そうして、彼らの意識がイベルタルから僅かに外れた時、静かに魔法は現れた。

「ご苦労さま、みんな」

モンスターボールをイベルタルに放り投げ、彼女はイベルタルをゲットした。

第四話『スピアー、怒りのミサイルばり』

「は?」

「え?」

「ドロシー……?」

イベルタルがゲットされた事に気がついたアルト達は戸惑いながら彼女を見る。

「ありがとう。そして、さようなら」

ドロシーは再びモンスターボールからイベルタルをくり出した。

回復のクスリを振りかけ、呟く。

「イベルタル、デスウイング」

「ギシャアアアアアアツ!」

完全に不意を突かれてしまった。

デスウイングは一直線にトレーナー達の下へ向かう。ポケモン達は咄嗟に壁になる為にアルト達の前に躍り出たが、その威力はこれまでの比ではなかった。

「シザークロス!」

唯一、ハッサムだけが技を繰り返す事が出来た。けれど、弾き返す事はおろか、デスウイングを完全に抑える事が出来ず、その身が徐々に石化していく。

「ミリガン!」

「スピーッツ!」

ハッサムと繋がっているミリガンの体まで石化を始めた。

それを見た瞬間、アルトとスピアーの頭は真っ白になった。

こみ上げてきた怒りに呑み込まれてしまった。

「スピアー!!」

「スピーイツ!」

激しい怒りに呼応するように、スピアーの翼とニードルから凄まじい緑の雷光が迸る。

ドロシーと戦った時の比ではない。

荒々しいエネルギーの猛りに大気が悲鳴を上げている。

「ミサイルバリ!!」

「スピーイツ!!」

緑の雷光が放たれる。

「イ、イベルタル！ あくのはどう！」

「ギシャアアアツ！」

ドロシーの表情に恐怖が宿る。放たれたミサイルばりを撃ち落とす為放った筈のあくのはどうがかき消されていく。

時空すら歪む空前絶後の威力を誇るイベルタルのあくのはどうが完全に押し負けていた。

「クソツ、フリーデイン！」

「フリーデインツ！」

ドロシーはイベルタルをモンスターボールに戻すと、フリーデインの手を掴んだ。

瞬間、その姿はテレポートによって消失し、寸前まで彼女がいた場所をミサイルばりが通過した。

そのままミサイルばりは天空へ昇っていき、イベルタルによって塞がれていた暗黒の天蓋を引き裂き、その向こうに広がる雲海すら引き裂いた。

「ミリガン！」

あまりにも途方もない威力に誰もが言葉を失う中、アルトはミリガンに駆け寄った。

彼女の半身は完全に石化してしまっていた。苦しそうに喘ぐ彼女にアルトは狼狽え、同様の状態になっているハツサムに対してスピアーも狼狽えている。

「ス、スピ!? スピー! スピイイッ！」

きずなヘンゲが解け、スピアーは泣き叫んでいる。

このままでは命に関わる事が明白だった。

「ど、どうしよう!?! エリザ! なんとかならないの!?!」

「ど、とにかく、病院へ連れていきましよう! フーデインのテレポーターならロヴェリアの病院までひとつ飛びでしよう!?!」

「お、おう! フーデイン、頼むぞ！」

「フリーデインツ！」

フリーデインがミリガンとハツサムに手を伸ばそうとした、その時

だった。

『ダメよ、病院じゃ』

そんな声が響き渡り、突如空間に暗闇が現れた。

「ゲーン！」

その暗闇から現れたのはメガゲンガーだった。メガゲンガーはミリガンとハツサムを掴むと、再び暗闇の中へ戻っていった。

「なっ!? ミリガンを返せ！」

アルトが叫ぶ。

『治療の為よ。来たければ、好きにしなさい』

その言葉を聞いて、アルトとスピーアーは迷わず暗闇に飛び込んだ。

「ちよつと!? もう！ 少しは冷静に行動して下さいよ！」

その後をエリザが追いかける。

「つたく！ 仕方ねーな！」

「だが、行くしかない」

バレットとアギトも追いかける。

「オ、オレ達も行くか？」

アクセルはセラに問いかけた。

けれど、彼女は首を横に振った。

「行きたくない」

「そっか……」

アクセルはレックウザをくり出した。

「とりあえず、シャンティに行こう。病院に行かないとな」

「……うん」

第五話 『レムハザード』

上手くいった。アルトが最後に放った攻撃は予想を遥かに上回り、少しだけヒヤリとしたけれど、大きな問題ではない。重要な点はクリアしている。

最悪な結末は、ザラクがイベルタルを殺してしまう事だった。「長かったわね」

二百年。人が三度の生を全う出来る程の時間をかけた。

特に、この数年間は忙しかった。

原因はザラクだ。あの異常な程の力を持った男の出現が、計画を大きく歪ませてくれた。

「ナザレが使い物になれば、もつと簡単だったのだけど……」

モンスターボールが発明される以前は王の力に頼る他無かった。けれど、わたしの持っている力ではイベルタルを従えるには足りず、アルトとアギト、セラの三人は最後の切り札だった。

だからこそ、クローン技術に目をつけた。

もつとも、今の時代のように遺伝子を操作する事など当時は不可能だった。故に、取った選択肢は近親交配だ。母胎としたのはサラとザラクの長子であるレムハザード。

彼女に子供を産ませ、その子供の子を孕ませ、その子供同士を合わせさせていった。

嘗て、故郷の貴族や王族が行っていた事だ。

結果として、失敗も多かったが、それなりの成功例も得た。遺伝病を発症した子供は忌み子として捨て、王の力を発動した子供を巫女とする宗教組織を設立した。

文化、伝統、規律、信仰によって、実験場はわたしの手を離れても実験を勝手に繰り返してくれた。

そして、最高傑作として生まれた存在がナザレだった。

あらゆるドラゴンポケモン達が彼女に従い、伝説のポケモンすら自らモンスターボールに飛び込む程の完成度だ。これならばと、ダークライはわたしの器の為に養殖していたジュラの実験場の最高傑作か

ら魂を抜き取り、わたしを蘇生させた。

けれど、ダメだった。ナザレをもつてしても、イベルタルを御する事は不可能だった。

フーパに喚ばせた力の弱い別個体さえ大人しくさせるどころか、暴走させてしまう結果となってしまうた。

だから、最後の手段に打って出た。アルト、アギト、セラの封印を解き、それぞれの王の力を覚醒するよう導いた。

はじめに、彼らがいとも遊んでいた広場の近くに地下の天然洞窟を改装した遺跡への入り口を開いた。アレはじめんタイプの『じわれ』を使って作り上げた人工の亀裂だ。そして、そこで二百年前の光景をダークライのダークホールで見せた。

地下での不可思議な体験を子供が自分達だけの秘密に出来る筈もなく、彼らは偶然にも居合わせたヴリル教団の幹部に地下空間の事を話してしまう。そして、その翌日にヴリル教団の襲撃事件が起こるわけだ。

この時まで、教団にもイベルタルが眠っている場所を隠していたが、コストラ洞窟と名付けた遺跡の存在は教えていた。その場所こそが教団にとって最も重要な場所だと。

そして、一人の野心を持つ幹部をモンテロの下へ派遣する形でアルト達の話聞かせた。

「本当は罪悪感から逃避する形で旅立たせようと思ってたんだけどねー」

まさか、故郷を襲撃された原因が自分達にあるという事を教えて追いつく前に力だけを求めて旅立つとは思わなかった。

まあ、結果オーライだろう。

その後はシャンティを出たアルトと、アルトギア手記を探し求めるエリザが合流するように仕向けた。加えて、オブライエンを表立って大会の運営にかかわらせる事でエリザをアギトがいるユニオンへ向かわせて、アギトとも合流させた。

そこで、バレットが加わる事は想定外だったが、特に大きな問題ではなかった。

「まあ、エリザと二人旅をする中で今よりももっと親密になってくれていたら、色々と取れる手段も多かったんだけどねー」

アルトギア手記と共にアルトは幾度も極限のバトルを繰り返し、成長していった。

それこそ、ザラクがミリガン以上に固執する程までに。

イベルタルにトドメを刺す事無く、彼が撤退した理由はアルトが来る事が分かっていたからだ。アルトの成長の糧になると踏んで、彼は敢えてイベルタルを見逃した。

そうするようにわたしはタイミングを図っていた。

「兎にも角にも、これでイベルタルが手に入ったわ」

イベルタルをモンスターボールでゲットする。それがモンスターボールの発明によって芽生えた新たな希望だった。

モンスターボールでゲットすれば、あらゆるポケモンが命令を聞くようになる。

けれど、それは容易なことではなかった。破壊の神と呼ばれるだけの力を持つているイベルタルをゲットする為にはデスウイングの回復量を上回る攻撃でイベルタルを弱らせなければならぬ。それが、わたしには出来なかった。

だからこそ、王の力を覚醒させたアルトとアギトをあゝの状況に居合わせさせた。

そうだ。ここまでの彼の旅路はすべて、わたしが操る運命の中にあつたのだ。

「もう、あの子達は必要ない」

彼らに見せた二百年前の光景に偽りは無い。

ただ、その後には語った言葉は嘘だった。

「さあ、イベルタル。サラを取り戻すわよ」

これはわたしと彼女の物語だ。彼女を救い、ヴリルとコスラとアルトギアを蘇らせる。その為に、あの日救った命を奪う。

「借りたものは返さないよね」

第五話『レムハザード』

暗闇を通り抜けた先、そこはどこかの古城だった。

「ここは？」

「バステイロですよ」

エリザが近くの窓から外を眺めながら言った。

「バステイロって、亡霊の港か!？」

バレットも窓へ駆け寄っていく。俺もつられて窓の外を見ると、そこには巨大な壁に囲まれた都市の姿があった。壁の向こう側には真つ暗な海が広がっている。

「ようこそ、バステイロ・ジムへ」

声が響いた。振り返ると、そこには金髪の少女が立っていた。

「アナタが、レムハザードか？」

アギトが問う。

「そうよ、アギト。アルトも、ひさしぶりね。そして、はじめまして。こんばんは」

レムハザード。アガリアの四大魔境の最後の一つ、亡霊の港の管理者にして、バステイロ・ジムのジムリーダー。

歳は俺達と殆ど変わらないように見える。だけど、彼女の纏っている雰囲気はミリガンやナザレに近い。

「久しぶり？　なら、アンタは本当にオレやアルトの姉なのか？　そして、アルトとオレは兄弟なのか？」

「おばさまが過去を見せたのでしょうか？　アレに嘘偽りは無いわ。ええ、そうよ。アナタとアルト、そして、セラはわたしの弟妹よ。必要なら、記憶を戻してあげてもいいわよ？　今の時代を生きる上で不要と思ったから封印していたのだけど」

「いや、要らないな」

「うん。俺も必要ないよ」

二百年前の記憶。正直、あまり興味がない。

アクセルやセラと遊んだ時間。エリザとバレット、アギトと過ごした旅の時間。ミリガンやザラクが見せてくれた高みへ至る為のここまでの道程。その全てに俺は満足している。これまでの人生が幸福だった事を確信している。敢えて、二百年前の事を思い出す必要は見いだせない。

「そう言うと思ったわ。セラは繊細な子だったけれど、あなた達は昔からマイペースだったものね。超然としているというか、本当に父にそっくり」

「それって、ヴリル王の事？」

「ええ、そうよ。特にアルトはお父様にそっくり」

そう言うのと、レムハザードは俺の傍にやって来て、頬を撫でた。

「でも、その事もあなたにとってはどうでもいい事よね？　なによりも、今大切な事はミリガンの安否。違うかしら？」

「あつ！　そうだよ、ミリガン！　ミリガンはどこ!?　大丈夫なの!?!」
慌てて辺りを見回したけれど、ミリガンの姿はない。

「安心しなさい。完全に生命を吸いつくされたわけじゃないもの。数日はかかるけれど」

「本当に？」

「ええ、本当よ」

レムハザードは微笑んだ。不思議と、その言葉に安堵を覚えた。信じられると、心のどこかが確信している。

「あ、ありがとう！」

「ええ、どういたしまして」

ミリガンは大丈夫だ。そう確信した途端、急に肩の力が抜けてしまった。

「ミリガンの事、大好きみたいね？」

「え？　うん。ミリガンの事、大好きだよ」

「ななっ!?!」

何故か、エリザが目を見開いた。

「あ、アルト！　あなた、ミリガンの事が!?!」

「え、どうしたの？」

相変わらず、変なタイミングで変になる子だ。

「どうどう。落ち着け、エリザ」

バレットが落ち着かせてくれているけれど、エリザは混乱しているようだ。

「ミリガンは命の恩人だし、あの強さに憧れて、俺は旅に出たんだ。そ

れに、ミリガンの笑顔が俺は大好きなんだ」

「あらあら、大胆ね。なんとというか、本当にお父様にそっくりだわ。あの人もお母様やおばさまに対しての愛情表現が実にストレートだったもの。だけど、気をつけなさいね。お父様は愛によって己を見失ってしまった。あの人の最後を知ったのなら、同じ過ちを犯さないようにね?」

「えっと、うん? うん。わかった」

「本当に分かってるんですかねー」

何故か、エリザが睨んでくる。

「なんだ? お前、アルトが好きだったのか?」

バレットが聞くと、エリザは唇を尖らせた。

「ベーツーにー」

「あつはっは! 振られてやんの!」

腹を抱えて笑うバレットの腹をエリザのエルボが抉る。きゆうしよにあたった。こうかはばつぐんだ。

「バレット。もう少し、デリカシーを覚えた方がいい」

「……お、おう」

アギトの言葉にバレットは蹲りながら応えた。

「っていうか、レムハザード! あなた、わたしを騙しましたね!」

「あら、矛先がこつちに來たわ」

エリザのやつあたり。レムハザードは困った顔をしている。

「うがー! あなた! アルトギア手記の真実を全部知ってたんじゃないですか! なーにが、誰かの為の試練ですか!」

「あら、嘘じゃないわよ。心外ね」

レムハザードは頬に手を当てながら言った。

「おばさまとダークライの目的はイベルタルの制御。その為には強いポケモントレーナーが必要だった。だから、強くなれる場を用意したの」

「ぐう……」

悔しそうに歯ぎしりをするエリザ。

「そーいや、聞きたいんだけどさ」

「なにかしら?」

漸く回復した様子のバレットがレムハザードに問う。

「結局、ドロシーは何が目的なんだ? イベルタルをゲットして、いきなり攻撃を仕掛けてきやがったけど」

「彼女の目的はお母様の解放。それと、お父様やアルトギア、コスラお兄様の蘇生ね。その為に、ゼルネアスを千年の眠りから起こす必要がある。そして、その為にゼルネアスが二百年前に放出した生命いのちを返さなければいけない。その為のイベルタルよ」

「ん? どういう意味だ?」

「言葉通りの意味よ。イベルタルにゼルネアスを起こす為の生命を回収させる事。それがおばさまの目的」

「回収って?」

「そのままの意味よ。イベルタルのデスウイングで必要な生命が貯まるまで、この地の生物の生命を吸い尽くすつもりなの」

「はあ!?!」

「つもりなの、じゃないでしょう!?!」

バレットとエリザは大慌てだ。

「なるほど。つまり、再戦というわけだな」

アギトは言った。

「そういう事だね」

折角のバトルに水をさされた上に、ミリガンを傷つけられた。

再戦は望むところだ。

「マジで、お前らって兄弟なのな」

バレットが呆れたように言った。

「自覚はないけどな」

「でも、悪い気分じゃないね」

今度のイベルタルは野生じゃない。きっと、前よりもっと手応えがある筈だ。

「楽しみだな」

「うん!」

アギトと拳をぶつけ合う。

「ところで、どっちがお兄ちゃんなんでしよう？」

エリザがそんなわかりきった事を聞いてきた。

「そんなの決まってるよ」

「オレだ」

「俺だよ」

アギトは相変わらず天然だ。

「アルト。オレの方が年上っぽい気がする」

「いやいや、俺の方が若干上なような気がするよ」

「どっちも気がしてるだけじゃねーか」

バレットが呆れたように言う。

「三つ子だから、誕生日は同じよ？ 順番は確か、セラ、アルト、アギ

トの順番ね」

「ほらね」

「オレは弟だったのか」

アギトはちよつと悔しそうだ。

「それで、兄さん」

「なんだい、弟よ」

「いきなり兄弟っぽくするの止めろよ。なんか戸惑うだろ」

家族が家族らしくしたら戸惑われた。

「兄弟っぽいんですかね……。なんか、兄弟の振りをしている不審人

物二人って感じですけど」

「失敬な」

「失礼な」

俺達のやりとりを見ていたレムハザードがクスリと微笑んだ。

「ちなみに、二人の名前はアルトギアから取ったものよ。上から読む

か、下から読むかって感じね。二人揃ってアルトギア。お父様がもつ

とも信頼していた友人の名前」

なんとなく、そんな気はしていた。アルトとアギト。どちらもアル

トギアの名前と似ていたけど、色々な事を知る内に、それが単なる偶

然ではない気がしていたんだ。

「とりあえず、ドロシーの野望を砕きに行くか、兄さん」

「そうだね、弟よ！」

「だから、止めろ！　なんか違和感スゲーんだよ！」

「そこは兄者、弟者とかでどうです？」

「了解した。行こう、兄者！」

「ああ、弟者！」

「遊んでんなよ!?!」

「ぷはっ」

いきなり、レムハザードが吹き出した。

「あつはつは。あなた達、本当に仲良しね」

そう言うと、レムハザードはメガゲンガーをくり出した。

「送ってあげる。戻ってきたら、ジムバトルをしましょう」

「うん！　言ってきます、姉者！」

「言ってくるぞ、姉者！」

「乗るしか無い、この流れ！　行ってきます、姉者！」

「お前、それいいのか!?!」

俺達はメガゲンガーの作り出した暗闇の中へ飛び込んだ。

「いってらっしゃい、みんな」

レムハザードの言葉を背中に受けながら。

第六話 『幕間』

シャンティ・シティに帰ってきた。レックウザの襲来に、シティ中の人間が外へ飛び出してきている。

「アクセル!? それに、セラ!?!」

親父の声だ。

「おっす、親父! 帰ってきたぜ!」

セラと一緒にレックウザから飛び降りると、親父はレックウザとオレを交互に見比べた。

「おまつ! おまつ! これ、レックウザか!?!」

「おう! ナザレに借りてるんだ」

「ナザレ? って、メルカトのナザレか!?!」

「おう!」

みんなが驚いたり感心したりするのがなんだか嬉しい。

「アクセルくん!」

よく通っていたポケモンフードの店の姉ちゃんが駆け寄ってきた。

「オッス、姉ちゃん!」

「やった! 覚えててくれたんだねー」

「あつたりまえだぜ!」

「キヤー、うれしい!」

なんか、出発の時にも同じような会話をした記憶がある。

そう言えば、あの時はセラに耳を抓られたんだった。

咄嗟に耳を庇うと、ポケモンフードショップの姉ちゃんはキョトンと首を傾げた。

「どったのー?」

「いや、あれ?」

抓って来ない。どうしたのかとセラを見ると、真顔でオレを見つめていた。

「せ、セラ?」

セラの顔が迫ってくる。

「へあ!?!」

咄嗟にさがろうとしたら、後頭部を掴まれた。そのまま、セラとの顔の距離が零になる。

みんながキヤーキヤー言い出す。

何が起きたのか、オレにはさっぱり分からない。

「え？　え？　え？」

解放された時、オレは「え？」という言葉を繰り返す壊れたラジオになっていた。

そんなオレの腕をがっしり掴んでくるセラ。

ポケモンフードショップの姉ちゃんを睨んでいる。

「アクセル。お前、セラに何したんだ？」

「オレ!?　いや、されたのオレの方なんだけど!？」

「行くよ、アクセル!」

セラが腕を引っ張る。

「行くなってどこに!？」

「どこって、博士のところ……、に」

言うてから、セラは表情を曇らせた。

「どうした？　セラ？」

親父が心配そうにセラに声をかける。

「モンテロ博士はヴリル教団の関係者だったんだ」

「は？」

親父はハトーボがタネマシンガンを食ったような顔をした。

この様子だと、親父は本格的に何も知らないようだ。

「どっから話せばいいのかな？」

「最初から」

そう言ったのは、いつの間にか現れたエルフランだった。

「でも、その前にセラちゃんだね。事情は大体把握してる。これからリール・シティに向かうよ。あそこにはアガリア随一の医療設備を備えた病院があるからね」

そう言うと、エルフランはセラを見つめた。

「ごめんね。愚か者達の蛮行を防げなかった」

「い、いえ……」

エルフランはセラを抱きしめると、トロピウスをモンスターボールから出した。

「少し待っていてね。もうすぐ来るはずだから」
「だれが？」

オレが問いかけると同時に、空から炎をまとった巨大な鳥ポケモンが姿を現した。

「ふあ、ファイヤー!？」

それは伝説の鳥ポケモンの一体、ファイヤーだった。

「遅くなつてすまない! アクセル、無事か!？」

ファイヤーの背中から飛び降りてきたのはフルフェイスの鉄仮面。オーヴェル・ジムのジムリーダーであり、オレの師匠でもある男、ヴァイクだった。

「師匠!」

師匠は一直線にオレの方へ向かってくると力強く抱きしめてくれた。

「すまん、アクセル! 全てが後手に回った!」

「だ、大丈夫だって、師匠! セラも確り取り戻してきたしき!」

師匠は感極まってしまったようだ。

「よくやった! それでこそ、オレの弟子だ!」

「オッス!」

気合を入れて応えた直後、いきなり膝が崩れてしまった。

「アクセル!？」

「どうしたの!？」

「お、おい!？」

「大丈夫!？」

みんなが駆け寄ってくる。だけど、大丈夫だと応える余裕もなかった。

師匠がいる。そう思うと、安心しきってしまったって、緊張が途切れてしまったようだ。

疲れが一気に押し寄せてきた。

意識が闇の底へ沈んでいく……。

第六話『幕間』

寝息を立て始めたアクセルをヴァイクは抱き上げた。

「本当によくやったぞ、アクセル」

眠るアクセルを労うヴァイクに、アクセルの父親であるアラートが困惑した表情で声を書けた。

「えっと、アンタはオーヴェルのジムリーダーか？」

「ん？ いかにも、オレはオーヴェルジムのジムリーダー、ヴァイクだ」

「ヴァイク。この方はアクセルのお父さんだよ」

不遜な態度で名乗りをあげるヴァイクにボソツとエルフランが囁いた。

「アクセルのお父上!? あっ、これはどうも、ご挨拶が遅れまして！ わたくし、アクセルくんの師匠をやっております！」

「はいはい、テンパらないの！」

弟子の父親の登場にテンパリ始めるヴァイクの仮面の眉間部分に手刀を打ち込みながらエルフランは言った。

「まったくもう。そういう部分は直しなよ？ もう、キミもいい大人なんだからさ」

「そういう部分ってなんだ!? オレはアクセルのお父上にご挨拶をだな!?!」

「挨拶はいいけどテンパリ過ぎなんだよ！ ほら、深呼吸！」

「ぐぐつ……! スーハー スーハー、よし!」

改めてアラートに向き合うヴァイク。

「失礼した！」

「あーっと、アクセルが世話になったみたいで」

「いえいえ、アクセルくんは優秀なトレーナーですので——」

なんだろう、この会話。エルフランはサレナ・シティのポケモンスクール時代の三者面談を思い出した。お父さんと先生が似たような会話をしていた覚えがある。

「はいはい、そこまで！」

このままだと長くなりそうだと判断したエルフランが手を叩いて

話を打ち切らせた。

「なんだ、エルフラン。今、大事な話をしているんだぞ！」

「欠片も実りのない会話をしている暇はないの！ セラちゃんをリールの病院に連れていかなきゃいけないんだって言ったでしょ！ なの為に呼んだと思ってるの!?!」

「あつ、そうだった！」

「この脳筋バカ！」

エルフランの手刀がヴァイクの鉄仮面に突き刺さる。かなり痛かったようだ。エルフランは少し赤くなつた手を擦りながら涙目の状態でセラの下へ向かう。

「とりあえず、行ってくるから！ 留守は頼むよ！」

「ああ、任せておけ！ だから、はやく病院へ！」

「キミのせいで時間を取られたんだよ!!? もう！ 行くよ、セラちゃん！ アクセルくんも連れて行くから貸して！」

「は、はい」

「え？ いや、アクセルは置いていけ！ これからじっくり修行をつけてやる予定で……」

「シヤラップ！ 黙れ！ 空気を読め！」

「え？ あ、え？」

エルフランに怒鳴られて、ヴァイクはしどろもどろになっている。「いきなり意識を失うなんて、ただ事じゃないんだよ!!? アクセルくんも一応病院で診てもらわないと！」

「お、おう。その通りだな！」

「分かったらトロピウスに乗せて！ はやく！」

「は、はい！」

エルフランに顎で使われている息子の師匠に少し呆れた表情を浮かべながらアラートはエルフランに声をかけた。

「あの、オレも一緒に行ってもいいですか？」

「もちろんです！」

アクセルとセラの身に何が起きたのか、アラートには分からない。けれど、エルフランの様子からただ事ではない事だけは察する事が出

来た。

アラートはオンバーンをくり出して、その背中に乗る。

「さっき、モンテロ博士がヴリル教団の関係者だったとかアクセルが言ってたんだが、アンタは何か知ってるのか？」

セラと気を失ったままのアクセルと共にトロピウスの背中に跨ったエルフランにアラートが問う。

「その説明は病院でします」

「お願いします」

二体が飛び去るとヴァイクは集まっていた村人達に言った。

「さて、あなた方にはオレから説明をしよう」

第七話 『伝説の真実』

第七話 『伝説の真実』

呼吸を整える。王国の滅亡から二百年余り、想定外など数知れない。

「何のつもり？」

フーデインのテレポートによって移動した先に待ち構えていた男の真意を問う。

運命を操る。そう言われる程に人間の心理を知り尽くした魔女をもつてして、読めない男。

一度は退いた。それなのに、今再び、目の前に立ちはだかっている。男が現れなければ、魔女はとづくにイベルタルのデスウイングでアガリアの地を死都に変えていた。

「ドロシー。お前の操るイベルタルと戦いたくなかった！」

頭痛がする。信じ難い事だけれど、男は本心から言っている。

長きに渡る悲願を阻む理由が『戦いたいから』。

ふざけるな。ドロシーは叫びそうになった。

「野生の状態では弱過ぎたからな。だが、ドロシー。お前ほどのトレーナーの指揮下に入った今ならば、オレを楽しませてくれる筈だ！ さあ、バトルだ！」

チャンピオン・ザラク。この世でもっとも理不尽な存在。

彼が表舞台に姿を現した瞬間、ドロシーは彼の存在を脅威だと感じていた。

決して、敵対してはならない相手だと確信していた。

だからこそ、慎重に動いてきた。

「わ、わたしの邪魔をしないで！ 事が終わったら、いくらでも相手になるから！」

彼には策略など無意味。どんな言葉もザルに水を通すかの如く。

それでも、敵対する事だけは避けなければならない。

イベルタルの絶大な力をもつてしても、この男にだけは絶対に勝てないのだから。

「ダメだな。今を逃せば、お前と戦えなくなる。それに、事が済めば、イベルタルも力を使い果たして眠ってしまう。だから、したいんだ！ バトルがしたいんだ！」

無邪気な笑顔を浮かべ、戦いを迫ってくる。

「戦うから！ 必ず、すべてが終わった後に戦うから！ だから、今だけは見逃して！」

「言ってるだろ？ ダメだ。それに、出来ない約束をしようとするな」「出来ない約束って、どうしてよ!? た、たしかにイベルタルは力を使い果たしてしまうかもしれない。でも、あなたとのバトルの分程度なら余力を残せるわ！」

「ああ、イベルタルは、な」

わからない。それならば、何も問題はない筈だ。

実際、ここで見逃してもらえるのなら、いくらでも相手になる。それがドロシーの本心だ。

「ん？ まさか、ドロシー。おまえ、自分で気づいてないのか？」
「は？」

ザラクは少し考え込むように俯いた後、呟いた。

「アイリス」

それは、ドロシーが使っている肉体の本当の主の名前だ。

ジユラ・マウンテンの隠れ里で暮らしていた少女。

氷神と謳われるポケモン、フリーザーに見初められた巫女。

かつて、ザラクは彼女の婚約者だった。

「残念だけど、その子は死んだよ。だからこそ、わたしの魂の受け皿となったの」

残酷な真実を口にする。これで怒りを宿すようならば、まだ光明を見出させる。

そう、心中で呟く彼女に、ザラクは言った。

「違うな。間違っているぞ、アイリス。おまえは死んでいない」

「ザラク……?」

わけがわからない。彼はアイリスの死を受け入れていた筈だ。だからこそ、彼女の肉体を使っても、彼はドロシーをアイリスとは

呼ばなかった。常にドロシーという別個の存在として扱ってきた。それなのに、突然考えを翻した理由がドロシーには分からなかった。

「いきなり、何をトチ狂った事を言っているのさ！ わたしはドロシーだ！ アイリスじゃない！ その子は死んだのよ！ だからこそ、二百年の時を経て、わたしはここにいる！」

「ああ、おまえはドロシーだ。だけど、アイリスだ」

「あ、アンタ、何言ってるの？」

ドロシーは不可解そうに顔を歪めた。

「少なくとも、ラミタルアなんて女ではないぞ」

「は？」

自分の正体が何者であるか、そんな事は自分自身が一番よく知っている。

二百年前に一国を己の色香で滅ぼした魔女。

偉大なるヴリル王の妻となった女王。

アガリアという王国を築いた女王。

祈りを胸に、二百年の時を超えて現世に蘇った魔女。

「わたしはラミタルアだ！」

「だから、違うと言ってるだろ。おまえもオレと同じだ。あの日、あの場所でおまえは『青の書』を使ったんだ。そのせいで、おまえは自分を二百年前の女だと勘違いした」

「なに、言ってるの？ そもそも、青の書はアルトギアの魂の器よ!？」

「だいたい、アンタと一緒に何の……」

ドロシーはかなしばりを受けたかのように動けなくなった。

「……アンタ、は」

「あの本は魂の器じゃないぞ。アルトギアがキズナ現象を擬似的に行えるようにする為の装置だ。要するに、アルトギア式のメガストーンというわけだな」

「メガストーン……？ ウソよ。そんな筈ない！ だって、アレは王の力の結末を予期したアルトギアがヴリルを救う為に作ったものなのよ!？」

「ウソじゃない。そもそも、アルトギアがヴリルを救う筈がないだろ」
「は？」

ドロシーの顔は怒りで歪んだ。アルトギアを侮辱されたからだ。
彼は親友の為に研究を重ねていた。

ザラクの言葉は、そんな彼の行為を否定するものだった。

「アルトギアはラミタルアを愛していた。だから、彼女の愛を独占するヴリルに嫉妬していた。そんな男が、ヴリルを救うために行動する筈がないだろ。アレはむしろ、ヴリルの力を利用する為に生み出したものだ。王の力の行き着く先、フーパと化したヴリルを操る為の装置。それが『アルトギア手記』の真実だ」

「そんな筈ない！」

「いや、事実だぞ？ だから、イベルタルのデスウイングがラミタルアを襲った時、ダークライは彼女を庇ったんだ。あの時のダークライは生まれたばかりだったから、能動的に行動する事は出来なかった。ラミタルアがアルトギアの真意を問うた時、ダークライはオウム返しのようにアルトギアの真意を赤裸々に語っていただろう？ あの時のダークライは完全に受動的だったんだ。『アルトギア手記』という装置を介して、ダークライは意識的にしろ、無意識にしろ、ラミタルアの命令に従っていたのさ」

ありえない。ドロシーは思った。

そもそも、この男が何を知っているというのか、たかだか十数年を生きただけの小僧が。

所詮、口からでまかせだ。おそらく、言葉で惑わせて、自分の思い通りの展開に運ぶつもりなのだろう。

「ザラク。アンタの言葉になって、わたしは惑わされない！」

「惑わしてない。そもそも、アルトギア手記の起動方法はメガ進化やキズナヘンゲの時に発生するエネルギーを注ぐ事だ。その時点で、アレがそういうものだど気付けないのか？」

「え？」

「ん？ 知っているだろ？ アレの起動方法を」

知らない。そもそも、アレは開くだけでいい筈だ。

「ああ、そうか。その時点の記憶も無いんだな。アイリス。おまえはヴリル教団に囲まれた時にフリーザーを守ろうとした。そして、フリーザーもおまえを守ろうとしたんだ。人とポケモンの心が一つになった時、絆の力が生まれる。特に、あの里はラミタルアの末裔の集落だ。その体にはポケモンの血が流れている。おまえとフリーザーの絆はフリーザーにキズナヘンゲを遂げさせた、そして、その時のエネルギーが、フリーザーが守っていた青の書を起動させたんだ」

「か、仮にアンタの話が真実だとしたら、わたしがここにいる理由が説明出来ないじゃないか！」

「説明出来る。アルトギア手記が、なんで手記って呼ばれてるか分かるか？」

「それは……」

「手記だからだ。そして、アルトギア手記と呼ばれている理由は、最初に発見された赤の書がアルトギアの視点を描いたものだったからなんだ。もつとも、順番的には第二章というべき内容だったがな」

「……やめて」

恐ろしくなった。ザラクにそれ以上喋らせてはいけなと思った。

彼の話をこれ以上聞くと、何か壊れてしまう気がした。

「第一章とも言うべき内容は、青の書に記されていた。それは手記の執筆者であるラミタルア自身の視点によるもの。おまえは起動した青の書とつながり、彼女が手記に籠めた想いを取り込んでしまったんだ。ポケモンの意志の逆流によってポケモンへ転じてしまったヴリルやコスラのようにな」

「やめてよー」

ドロシーは叫んだ。まるで、自分という存在の根幹が揺らいだような気分だった。

「わ、わたしはラミタルアだ！」

「ちがう。おまえはアイリスがラミタルアの意志を取り込んでしまった事で生まれた、アイリスのもう一つの人格に過ぎない。それがドロシー。おまえの正体だ」

「違う！ そんな筈ない！ わたしは……、わたしは！」

ドロシーはイベルタルのモンスターボールを投げた。

この男を倒さなければならぬ。さもなければ、己の存在が崩壊してしまう。

彼女の心は恐怖と絶望に支配されていた。

「ああ、それでいい。多重人格っていうのは、目的を達成すると消えてしまうものだ。だから、ドロシー。消える前に、オレと戦え」

「ザラク！ おまえはっ！ おまえは悪魔だ！」

ドロシーの悲鳴のような叫びに、ザラクは嗤った。

「さあ、楽しいバトルのはじまりだ」

第八話 『ヴァイク』

レムハザードに送り出された先は地獄と見紛うばかりの惨状だった。

「なんだこりゃ!？」

バレットが叫ぶ。たしかに、そう叫びたくなる気持ちもわかる。

俺達が立っているのは小高い丘の上。そこから見える下界の大地は融解し、真っ赤に燃え上がっている。その上空では赤と赤がぶつかり合っている。

激突の度に衝撃波が烈風を巻き起こし。無数の竜巻が蠢いている。

この瞬間、世界の終焉が始まったと言われても信じてしまいそうな程だ。

「イベルタルは!？」

ギヤラドスの背中に乗ったまま、イベルタルを探す。

「どうやら、先を越されたようだな」

よく見れば、赤の一方はイベルタルだった。

そして、もう一方はバシャーモ。

「まさか、ザラク!？」

イベルタルと二対一で渡り合う姿は、以前見たポケモンリーグの映像に登場したザラクのバシャーモそのものだった。

「ズルい!」

イベルタルと戦うのは俺達の筈なのに、勝手に戦うなんて酷い。

「いやいやいやいや! この光景見て、まだ戦う気満々なんですか!？」

「無茶言ってるじゃねーぞ!？ 余波だけで死ぬぞ、この状況!」

「だからこそ、燃えるじゃないか!」

「極限状態のバトル! もう、我慢出来ない!」

「このバトルジャンキーブラザーズ!!」

俺はギルガルドをくり出した。本当はスピアーを出したいけど、無数の竜巻と融解した大地が発する高温のせいで気流が乱れに乱れている。ここはサイコパワーで浮遊するギルガルドが適任だ。

アギトの方はガブリアスをくり出した。リザードンも翼で飛ぶた

イプだから、翼を使わないで飛べるガブリアスを選んだのだろう。

「……あれ？　そう言えば、ガブリアスって、翼がないのにどうして飛べるの?」

「知らん！　それを言ったら、ギャラドスだって何故か飛べてるだろ！」

「あつー！」

そう言えば、ギャラドスも翼なんて持ってないけど、何故か飛べている。

「ひこうエネルギーを使ってるんですよ」

エリザが言った。

「リザードンやスピアーの飛行能力だって、翼の力だけで飛んでいるわけではないんですよ？　リザードンなんて、科学的に見たら重過ぎて飛べる筈がありませんからね」

「そうだったんだ」

「さすがエリザだ」

「へー」

勉強になった。

「って、説明してる場合じゃなかった!?　あくのはどうが来てますよ!？」

エリザが悲鳴をあげる。イベルタルのあくのはどうがこつちに向かってくる。

直撃を受ければ、俺達は肉片一つ残らない。だけど、回避は間に合わない。

「だったら、斬る！　ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドの刀身が輝く。

せいなるつるぎが世界を二つに裂いた。大地には底も見えない程の亀裂が走り、雲は分かれた、イベルタルのあくのはどうは二股に斬り裂かれた。

「ウソツ!？」

エリザは目を丸くしている。

「ギルガルドは元々ヴリル王やミリガンのポケモンだったんだ。このくらいは出来るよ。でも、足りない！ もっともっと強く！ いくぞ！」

「ギルツ！」

ギルガルドが飛んでいく。そこに、俺の意志を乗せる。

紫の光がギルガルドの刀身から迸る。

「ギルガルドでキズナヘンゲを!?!」

バレットが叫ぶ。

ギルガルドの全身は青に染まり、その刀身からは紫の雷光が帯電していた。

「こつちもいくぞ、ガブリアス！」

「ガブツ！」

その光景を見ていたアギトもまた、ガブリアスと意識を同調させていく。

紅蓮の炎が舞い上がり、ガブリアスの全身が真紅に染まっていく。

キズナヘンゲを遂げたガブリアスは、まるでジェット機の如く飛んでいく。

尾ビレから炎を吐き出し、その速度はまたたく間に音を超えていく。

「はやっ!?!」

ガブリアスはギルガルドすら超えて、一気にイベルタルとバシヤーモの戦闘に介入を開始した。

「ギシヤアアアアアアッ！」

「バシヤッ!?!」

「ガブウ！」

三つ巴となった戦場に、腹の底から激しい感情が昇ってくる。

「こつちも負けていられないぞ、ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドも速度をあげ、紫の雷光を刃に変えた。

「せいなるつるぎで斬れ！」

「ギイイイイイルウウウウウウツ!!」

こんな惑星破壊規模の攻撃を繰り出す非常識な弟と一緒にしないでほしい。

「何を言っている？ アルトの攻撃だって、斬られた空間がそのままじゃないか」

「え？」

さつき、ギルガルドが斬り裂いた所に視線を移す。

すると、切り開かれた次元の歪みのようなものが無数に発生していた。

「ウソだろ、馬鹿野郎！ 何してんだ!?!」

「アガリアを滅ぼす悪者を倒しに来てんですよ!?! なんで、あなたが世界を滅ぼそうとしてるんですか!?!」

どうやら、ちよつと加減を間違えたようだ。

「だって、イベルタルやバシャーモだって暴れまわってるし」

「オレ達がちよつとくらい張り切ったって誤差だ誤差」

「誤差で済んでないでしょ!?! っていうか、りゅうせいぐん止めてくださいよ！ あんなの地面に接触したら一帯どころか、本当にアガリアが吹き飛びますよ!?!」

「いや、そうはならんだろ」

「え？」

バレットは顔を引き攣らせながらイベルタルを指さした。

イベルタルはすでに体勢を整え、迫り来るりゅうせいぐんを見ている。

そして、

「ギシヤアアアアッ！」

放たれたのはあくのはどう。迫りくる隕石の群をまるごと飲み砕いていく。

「さすがですね」

「破壊の神の二つ名は伊達ではないという事だな」

「そこだ、ギルガルド！ せいなるつるぎ！」

背後の山ごと斬る！

「おまつ!?!」

「この星の救世主になんて事を!？」

「いや、アレがそもそもアガリアを滅ぼす存在だからね!？」

そもそも、この程度で倒せるポケモンじゃない。

背後の山が横一文字に斬り裂かれて微かに浮き上がり、その後、大地を揺るがしながら落下した。

振動が来る前にギャラドスを出して、その背中に飛び乗る。エリザ達もそれぞれの飛行能力を持ったポケモンに乗って空へ上がった。すると、山が落ちた衝撃波が大地を空へ舞い上げた。

それでも、イベルタルは健在だ。

「なんて事すんだ!？」

「ちよつ!?! これ、山の反対側とか大丈夫なんですか!?!」

「問題ない! あつちはシャンティだ。エルフランが防いでくれる!」

そうだ。この場所には見覚えがある。ヴェゼール・ヴィレッツジからシャンティに移動した時の走行バスの狭い窓から僅かに覗いた外の光景。シャンティ・シテイから山を挟んだ先に広がるキナイ平野だ。「そんな無責任な!？」

その直後だった。いきなり、山の向こうから炎の壁が現れた。

山が小さくなるほどの超巨大な炎のカーテン。

「なんだ!?!」

「あれは一体!?!」

炎の壁の向こうから、何かが来る。

「あれは……、ファイヤー!?!」

第八話『ヴァイク』

数分前の事だ。

超級トレーナー同士の大規模なバトルが発生した時特有の振動を感じて、調査を命じたジムトレーナーが戻ってきた。

山の向こうでザラクとドロシーが戦っている。その報告を受けて、ヴァイクは頭を抱えそうになった。

思い出すのは数ヶ月前のクレルモア大平原で起きたザラクとナザレのバトル。あの時は四天王総出で余波を抑える事で辛うじて被害

を出さずに済んだ。

けれど、今回は前回以上にまずい。まず、アクセルの話によると、四天王最強のミリガンが戦闘不能に陥っているらしい。そして、なによりもドロシーの実力がナザレを上回っている点がまずい。

夢の対決というべきか、夢のままであってほしかった対決だ。

「どうしますか!？」

シャンティジムのジムトレーナー・カザリが取り乱した様子で問いかけてくる。

無論、答えは決まっている。

「オレが出る。ロヴェリアのクラウドスに連絡を取っておいてくれ。それから、ポケモンリーグにも、四天王・ザイリンとフレデリックの助力を仰ぐんだ」

「か、かしこまりました!」

カザリは大急ぎで部屋を出て行った。

「さて……」

ヴァイクはシャンティ・ジムを出て、シテイのシンボルであるサラの柱の頂きへ登った。

そこから、エルフランに託されたシテイの全景を見回した。

ここには愛弟子の家族もいる。

「守らねばな」

取り出すのはハイパーボール。

その中から飛び出してきたのは、伝説のポケモン・ファイヤー。

フリーザー、サンダー、ファイヤー。

こおり、でんき、ほのおの名を関する三体の鳥ポケモン。

オレンジ諸島のアーシア島に存在する個体は世界の天候さえ左右する程の強大な力を持つと言われている。

まさに、神の如きポケモンだ。

この三体は三位一体の関係にある。一体が存在するなら、他二体も必ず近くに存在している。そういう存在だ。

ジュラの氷神と呼ばれたフリーザー。その存在は、同時にサンダーとファイヤーの存在を示唆している。

メルカトの北に広がる山脈に潜んでいたサンダーが四天王・フレデリックに捕獲されたのは二年前の事だ。

そして、ヴァイクがクレルモア大平原と、ポケモンリーグの会場が存在する《マグノリア高原》の狭間に存在する名峰《ラグランジア》でファイヤーをゲットしたのも、同じく二年前の事だ。

ヴァイクは確信している。

あの日、あの時、フレデリックも同じ場面に居合わせたのだろうと。理由はわからない。

それまで、決して人の前に現れる事の無かった二体のポケモンは、いきなり暴れ始めたのだ。

ラグランジアは、通称・チャンピオンロードとも呼ばれている。頂点を目指すトレーナー達が最後の修練場として挑む場所だ。その時も、多くの挑戦者達がいた。

その内の一人は、現在のオーヴェルジム・ジムトレーナーのシャシャだった。

シャシャからの救援要請を受けて向かった先で彼が見たものは、業火に包まれたラグランジアの姿だった。

さすがにチャンピオンロードに挑む実力を備えたトレーナー達は全員が無事に脱出していたが、巨大な山を丸ごと燃やす程のポケモンが暴走を続ければ、近隣の都市が危険に晒される事になる。

それ以前に、野生のポケモン達が取り残されていた。

ラグランジアに集まっていた超級トレーナー達がポケモン達の救出に全力を尽くしたが、業火は容赦なく彼らを責め立てた。

究極奥義であるハイドロカノン、ぜったいれいどですら鎮火する事の出来ない炎の前に、やがて彼らはそれ以上の救出活動を断念する他なくなってしまうた。

ヴァイクもまた、諦めかけていた。それほど、目の前の炎は強大過ぎた。

けれど、彼の前に一匹のポケモンが歩いてきた時、彼の生存本能は機能を停止した。

業火に焼かれ、瀕死の重傷を負いながら子を抱えた親ポケモン。慌

ててかいふくのくすりを振りかけても、その生命は救えなかった。その瞬間に彼はキレたのだ。

——この生命は、諦めかけたオレの心が殺したのだ。

自分への怒りが彼を突き動かした。

止めねばならない。守らねばならない。救わねばならない。

その時の行動こそが、彼をオーヴェルジムの新リーダーにした。

その時の行動こそが、ミリガンやエルフランが彼に絶対的な信頼を置く理由。

相棒であるゴウカザルと共に山を駆け上り、たった一人と一匹だけで神に等しき伝説のポケモンに挑んだ彼は、ファイヤーの荒ぶる心を鎮めた。

彼の鉄仮面は、その時の戦いで負った大やけどを隠すためのもの。治そうと思えば、今の医療ならば治せる傷。けれど、彼は傷を敢えて残している。

あの日、失われた生命を悼む為に。

「ファイヤー」

「キユイ」

荒れ狂い、人もポケモンも無差別に焼き尽くそうとした炎の化身は、炎の如き男の心に寄り添い、彼方で放たれた極大の斬撃が齎す破壊の波を止める為に力を解き放つ。

放った技の名前は《かえんほうしゃ》。

けれど、それを放ったポケモンの力は、まさに規格外。

炎は火力を上げながら広がり、山一つの落下による衝撃すら呑み込んでいく。

「アクセル、エルフラン。お前たちの家族や仲間はおれが守ってやる。お前たちの師匠として、友達としてな！」

彼らは飛び立つ。山を超え、超級を超える神々の戦場へ。

第九話 『眠り姫の目覚め』

「どいつもこいつも……」

ドロシーは目の前の光景に顔を引き攣らせた。本来なら、今頃は計画の最終段階に移行出来ていたはずだ。それなのに、ザラクの横槍のせいで全てが台無しになってしまった。おまけに、アルト達までやって来て、今度はヴァイクだ。

バシャーモ、ギルガルド、ガブリアス、ファイヤー。

いずれもイベルタルの力をもつてしても楽には勝てない難敵ばかりだ。

「……なんでよ？」

あの時は、誰も敵わなかった。絶対的な破滅の使者だった。だから、必死になって策を巡らせた。勝てない存在に勝つ為に。抗えない運命に抗う為に。

それなのに、なんだこれは？

勝てないはずの存在に勝ててしまう存在がうじゃうじゃと現れて、己の邪魔をしている。

ドロシーは笑った。

あまりにも理不尽過ぎる目の前の現実には、彼女は笑う事しか出来なかった。

「外野が増えてきたな」

ザラクはドロシーの隣に腰掛けながら言った。

ザラクとドロシーは心で思うだけでポケモンに指示が伝わる。それ故に、地形を変える程の大規模なバトルを展開していながら、彼ら自身は実にまったりと時を過ごしていた。

「まあ、いつか」

ザラクはドロシーの腕を引いた。抵抗する気力もわかず、ドロシーはザラクの腕の中に倒れ込む。涙を零しながら笑い続ける彼女に、彼は言う。

「こんなものだ、ドロシー。昔は出来なかった事が、気付けば出来るようになってきている。それは当たり前前の事なんだ。最強なんて存在は、次

の最強が現れるまでの一時的なものに過ぎない。もう、イベルタルが破壊の神である時代は終わったんだ。今は、アイツもただのポケモンだ」

「イベルタルが……、ただのポケモン」

その言葉はドロシーの心に重くのしかかった。

「お前がイベルタルで生命を集めようとしても、すぐに止められる。だから、もう諦めろ」

「……イヤよ。わたしはサラを蘇らせる」

それだけの為にここまで来た。

それだけの為に酷い事をして来た。

それだけの為にわたしは存在していた。

「サラは蘇らない」

ザラクは言った。

「サラの柱はゼルネアスが変化したものだ。人間であるサラの肉体はとうの昔に滅びている。ゼルネアスの力をもってしても、蘇らせる事は出来ない」

「そんな事……」

無いと言いたい。それなのに、ドロシーは言えなかった。

「ヴリルも、コスラも、アルトギアも、サラも、そして、ラミタルアも既に過去の人間だ。そんな事、お前も気づいていた筈だ。違うか？」

「わたしは……、わたし……、は」

言い返したい。けれど、言い返せない。

心がどんなに拒絶しても、彼の言葉が正しいのだと頭が理解してしまっから。

「そろそろ、疲れただろう？」

「……うん」

ザラクはドロシーを抱きしめた。

やさしく、彼女の頭を撫でる。

「あなた、イヤなヤツだわ」

「そうか」

瞼を閉じながら、ドロシーは思った。

「この不器用な優しさを知っている。

「あなた、わたしとあなたが一緒だと言ったわよね？」

「ああ、言ったな」

「なら、あなたはヴリルなの？」

「いや、違う」

彼は言った。

「オレの名はザラク。このバトルの聖地、アガリアのチャンピオン！

それ以外の何者でもない」

「そう……。そうよね……」

ドロシーは涙を零しながら眠りについた。

「おやすみ、ドロシー」

ザラクは優しく彼女の頭を撫でた。

第九話『眠り姫の目覚め』

「もどれ、イベルタル」

その言葉と共に、赤い光がイベルタルを回収してしまった。

今まさに神々とのバトルが開始されるのだと意気込んでいたアルトとアギトはずっこけた。

意気揚々と登場したばかりのヴァイクもずっこけた。

「ザ、ザラク！」

ヴァイクはギャラドスに乗って飛んできたザラクを仮面越しに睨みつけた。

「貴様！　　またも問題を起こしたな！　　いい加減にしろ！」

ヴァイクのお説教にザラクは笑う。

「相変わらずだな、ヴァイク」

「何故笑う!?　　オレは叱っているんだぞ！」

憤慨するヴァイクにザラクはやれやれと肩を竦めた。

「悪いな、ヴァイク。今日はこれ以上バトルする気がないんだ。だから、おまえはあっちの対処を頼む」

「あっち？」

「あっち」

ザラクが指差す方角にヴァイクも顔を向ける。

そこには、ついさつきアルトのギルガルドが斬り裂いた空間の亀裂が無数に漂っていた。

「なんだアレは!？」

「はっはっは、アルトにも困ったもんだ。うっかりこの世の裏側に通じる穴を開いてしまったらしい。そろそろ向こうの存在が亀裂に気づく頃だ。おまえなら問題なく対処出来る筈だから頼んだぞ」

そう言うと、ザラクはバシヤーマを回収し、アルト達の方へ飛んでいってしまった。

一瞬遅れて面倒事を丸投げされた事実気づくヴァイク。

「えっ!？」

そして、彼の前には次元の亀裂から巨大なポケモンが現れた。

「ギ、ギラティナ……」

ギラティナ。それはこの世の裏側に存在する破れた世界に棲まう伝説のポケモン。

「や、やってやるぜ!」

そして、ヴァイクは二度目となるアガリアを救う為の戦いに身を投じた。

一方その頃、ザラクはアルト達の目の前に降り立った。

「アルト。また、強くなったな」

「ザラク! っていうか、そっちはドロシー!？」

アルトの視線はザラクのギャラドスの背中で横たわっているドロシーに向いた。

「え? ポケモンバトルじゃなくて、トレーナーバトルで決着つけちゃったの!？」

「ああ、そうだ」

「そうなの!？」

驚愕するアルト達を楽しそうに見つめながらザラクはドロシーの体を持ち上げた。

そのまま軽々とエリザのフリーザーの背中に乗り移る。

「エリザベス。説明は省くが、ドロシーはアイリスだ。多重人格になっっていたが、ドロシーの人格は眠った筈だから、起きた時にはアイ

リスに戻っている筈だ。姉妹として、面倒を診てやってくれ」

「はあ!? えっ、お姉ちゃん!? 説明省くって、説明してくださいよ!!
どういう事なんですか!?!」

「面倒だ。それより、アルト」

「ちよつとー!」

眠ったままのドロシーを押し付けられて混乱しているエリザを無視して、ザラクはアルトのギャラドスに飛び移った。

「バツジは集まっているか?」

「うん。あと一つだよ!」

「そうか、よく頑張ったな。その調子で、次のリーグに出場しろ。オレはチャンピオンリーグで待っているからな」

「うん!」

ザラクは満足そうに頷くと、再び自分のギャラドスに跨った。

そして、

「よしよし。じゃあ、帰るか」

ザラクは帰っていった。

「……えっ!?!」

しばらくして、アルトは気づいた。

これから決戦が始まると気合を入れた瞬間にバトルが強制終了させられた事実には、

「じ、自由過ぎる……!」

バレットは顔を引き攣らせた。

「さすがはチャンピオンだな。いきなり盤面自体をひっくり返してくるとは。オレも強くなってきたと思っただが、まだまだ次元が違うな……!」

「いや、強さっていいのか? あれ……!」

アギトの言葉に納得いかなげなバレット。

「っていうか! ドロシーがお姉ちゃんってどういう事ですか!?!
なんで説明省くんですか、あのバカ!」

そして、エリザがキレた。

「意味がぜんぜんわかりませんよ!?! あのバカは昔からそうなんです

よ！ 旅に出る時も全然説明とかしてくれなかったし！」

プンプン怒るエリザ。その怒声のせいか、ドロシーが身を振った。

「あつ、えつと、えつと、お、お、お姉ちゃん!」

慌てて呼びかけるエリザ。

「……ん、あれ?」

瞼を開いたドロシーはエリザをジツと見つめると、不思議そうに首を傾げた。

「あれ?」

「お、お姉ちゃん……、なんですすよね? あの、えつと、その……、違つてたらあのバカを殺しに行かないといけないんですけども!」

「お姉ちゃんつて事は……、やっぱり、エリザなの?」

その言葉にエリザは目を大きく見開いた。

「お姉ちゃん……?」

「エリザ。なんだか、大きくなってない? それに……、わたし達、なんで神様の背中に乗ってるの?」

エリザはその時になつて漸く確信を得た。

小首を傾げるその仕草は、紛れもなく姉のもの。つまり、ザラクの言う通り、ドロシーはアイリスだったという事だ。

「……よし、あのバカ殴りに行きますよ!」

「えつ!?! どうしたの!?!」

困惑する姉を尻目にエリザは頬を膨らませた。

本来ならば感動の再会だというのに、ザラクが何も説明しないものだから混乱が先に立ってしまったのだ。

嬉しい。けれど、素直に喜べない。その元凶であるザラクを一発殴らずにはいられなかった。

「アルト!」

「な、なに?」

怒り心頭のエリザに呼ばれ、アルトはビクツとなった。

「ザラクとはわたしが戦います! ポケモンリーグでは容赦しませんよ!」

その言葉に、アルトは心底嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「ああ、望むところだよ！」

第十話 『VSお父さんとお母さん』

一部始終を視ていたレムハザードは驚いていた。

「まさか、ザラクが動くなんて……」

てつきり、アルトの成長の為に利用するものとはばかり考えていた。けれど、蓋を開けてみれば一人でなんとかしてしまった。

「百年前とは違う？ それとも、ザラクだから？」

来るべき災厄。それはまだ終わっていない。

むしろ、ここからが始まりだ。

二百年前は国が滅びた。

百年前は当時のアガリア王が《災厄の化身》を打ち倒す事で事なきを得たけれど、それでも多くの犠牲が出た。

《考えていても答えは出ないよ》

誰かが言った。

《その通りだ。百年前も、二百年前も、三百年前も、その前も、この地は災厄に見舞われてきた》

《この地には怨念が染み付いている》

《怨念は魔獣の心に宿る》

《怨念は魔獣を闘争へ駆り立てる》

《そして、無垢なる受け皿が魔獣達の心を受け入れた時、災厄は始まる》

《無垢なるもの》

《エカテリーナ、オスロー、ヘルガ、コスラ、エックス、そして、ザラク》

《その魂の行き着く先は闘争》

《鎮める為には戦い他なし》

姿なき声にレムハザードは頷く。

「結局、それ以外に道はなし」

その為に用意したものがポケモンリーグ。この地に誘致し、根付かせた。

「アレン、エレノア」

レムハザードは意識を目の前の二人に向ける。

そこにいるのはアルトの父親と母親。

「これまでご苦労だったわね」

二人は沈黙している。

今、この時をもつて、二人に与えた任務は解かれた。

彼らの所属は《アガリア政府》。それはレムハザードが作り上げた組織だ。

「……レムハザード。あの、わたし達は……」

エレノアは苦しそうに口を開いた。

「わたし達は……、アルトの親です」

「ええ、仮初のね。わたしが二百年の眠りから目覚めさせ、あなた達に面倒を見るように命じた」

「そ、それはそのとおりです！ ですが、その……」

継るようにレムハザードを見つめるエレノア。その隣では、アレンもまた、訴えかけるような眼差しをレムハザードに向けている。

「情が移ったの？」

レムハザードの言葉に二人は顔を歪めた。

「でも、あなた達はあの日、わたしの命令に従って、ヴェゼール・ヴェレツジを襲撃した。ええ、ダークライの支配下にあったのはあなた達の兵隊となったヴリル教団の団員だけ。あなた達は自分の意志で動いていた」

「……それは、すべてはアガリアを救う為に！ だから……、だから……」

アレンがアルトに渡したポケナビには、はじめからザラクやミリガン、アラートなどの名前が登録されていた。バトルをした相手の名簿の中に。

それは、アルトに渡す前にポケナビを持った状態でアレンがヴェゼール・ヴェレツジ襲撃に参与していた事実を示している。

「そうよ。あなたにアルトを任せたのはアガリアの為。この地の平和を守る為に必要な事だった。だけど、だからこそ、あなた達の役割は終わったのよ。アルトは既に旅立つ前の彼とは違う。あなた達を必

要とはしない。むしろ、あなた達がいなくなる事で、彼は更なる力を手に入れる」

「でも、わたしはあの子の母親なんです!」

エレノアの悲痛な叫びに、レムハザードは眉一つ動かす事なく言った。

「違うわ。あの子の母親はサラ。そして、父親はヴリル。立場を弁えないさい」

「……わたし、わたしは」

エレノアは涙を流した。その姿に、アレンはまるで本当の夫のように肩へ手を回して慰めはじめた。その光景をレムハザードは冷たく見つめていた。

「そう。なら、仕方がないわね」

「レムハザード!」

レムハザードの言葉に希望を抱いたアレンが顔をあげる。けれど、そこにあつた彼女の顔は、やはり冷たいままだった。

「これでも、わたしなりに双方を思いやったつもりなのだけど、仕方ないわね。アルトに真実を伝えるわ」

「そんな!?!」

「待っててください! 僕達は……ッ!」

「問答無用。ザラクの気まぐれのせい、アルトの試練が一つ失われてしまった。ならば、わたし達で仕上げてあげましょう。親としての最後の仕事よ、二人共。彼の為の試練となりなさい」

レムハザードは姿なき声の主達に命じる。

「取り憑きなさい」

《やむを得ん》

《これも災厄に抗う為だ》

姿を現したのは二体のゴースト。

彼らは原種。かつて、死体で溢れた場所に溜まった腐敗ガスに怨念が交わった事で生まれた存在達。彼らの悲願は災厄の阻止。その為だけに数百年の時を超えて漂い続けている。

「ま、待っててください!」

「僕たちは！」

後ずさりながら叫ぶ二人にゴースト達は近づいていき、その体の中に溶け込んでいった。

「さあ、いらっしやい。これがあなたに用意してあげられるお姉ちゃんからの最後の試練よ、アルト」

第十話『VSお父さんとお母さん』

さて、これからどうしようか？

そう考えていると、目の前にレムハザードの門が開いた。

俺達は黙って頷き合い、門を潜った。

「おかえりなさい、みんな」

出迎えてくれたのはレムハザードだけじゃなかった。

そこには予想外の二人が待っていた。

「お父さん!?! それに、お母さん!?!」

ビックリだ。いつも仕事で忙しい筈のお父さんや、シヤンティにいる筈のお母さんがどうしてここにいるのか、さっぱりわからない。

「アルト」

レムハザードが口を開く。

「彼らがバステイロジムのジムトレーナーよ。二人を打ち破って、わたしへの挑戦権を勝ち取りなさい」

その言葉に、頭の中は疑問でいっぱいになった。

だって、お父さんはアガリア政府の人間だし、お母さんは専業主婦だ。その二人がバステイロジムのジムトレーナーをしている理由がさっぱり分からない。

「ふふっ、わけがわからないって顔ね。でも、安心しなさい。ちゃんと教えてあげる」

彼女は言った。

「ドロシーから聞いているでしょう？ あなたやアギト、それにセラを二百年の眠りから目覚めさせたのはわたしなの。そして、アガリア王家の先々代当主であるロビンと協力してアガリア政府を設立したのもわたし。アガリア政府の設立者として、政府の役人であるアレンとエレノアにあなたを預けたのもわたし。二人にヴリル教団を率い

てヴェゼール・ヴィレッジを襲わせたのもわたし」

次々に彼女は自分のして来た事を語った。

エリザと出会った日に、エリザにクレルモア大平原を通り、ユニオンへ向かうように誘導した事。

アギトをユニオンの大会に出場するように仕向けた事。

アルトギア手記を狙うという建前の下で、アガリア政府の直轄組織としたヴリル教団に俺達を襲わせた事。

まるで、俺やみんなの旅がすべてレムハザードの思惑によつて強制させられていたかのように彼女は語った。

エリザやアギトを見ると、どうにも思い当たる節があったらしい。

アイリスは考え事をしているのか、俯きながら眉間にシワを寄せている。彼女なりに、今の話に思うところがあつたようだ。

バレットだけは置いてきぼりを食らつたような空気を発している。彼に関してだけはレムハザードも何も関与していないようだった。

「どう？ アルト。あなたの人生はわたしが用意したもの。その事実を聞いて、思う所はある？」

何かを期待しているかのような声で、彼女は問いかけてきた。

何を期待されているのかはさっぱりだけど、俺は素直に答えた。

「どうでもいいよ」

「アルト……？」

エリザが気遣うように声をかけてくる。

その優しさに感謝しつつも、これが俺の素直な気持ちだった。

「うん、違うね。ありがとう、姉さん。あなたが用意してくれた人生、俺はとっても楽しかったよ」

そう言うと、レムハザードはクスリと微笑んだ。

「なら、最後の試練も楽しんでもらえるかしら？」

「ああ、もちろんだ。お母さんとお父さんとのバトル、ワクワクするよ！」

「仮初の親だと教えた筈だけど？ わたしの命令に従っただけの偽物だって」

「それでも、お父さんとお母さんだ。俺は大好きだ。だから、偽物だろ

うと関係ないよ。それに、お父さんとはまたバトルがしたかったんだ！」

旅に出た日の前日、俺はお父さんとバトルをした。それはとても楽しい時間だったけれど、今にして思えば、お父さんは手加減をしていた。

俺は本気のお父さんとバトルがしたい。

「だから、お父さん！ お母さん！ 俺とバトルだ！」

そう言うと、それまで沈黙し続けていたお父さんとお母さんがゆっくりと顔をあげた。

そして、二人の中から、いきなりゴーストが飛び出した。

「アルト」

お父さんは涙を零しながら微笑んだ。

「息子は父親を超えるものだ。全力でかかってきなさい」

「うん！」

元気よく答えると、お母さんも微笑んだ。

「アルト。わたしも、お父さんも、あなたの事が大好きよ」

「俺もだよ！ だから、お母さんも全力で来て！」

「ええ、わかったわ！」

二人がくり出したポケモンはオーダイルとケンホロウ。

「アルト」

バレットが背中をポンと叩いてきた。

「よく分かんねーけど、せっかくだ。楽しめよ！」

「うん！」

エリザも背中をポンと叩いてきた。

「あなたのそういうところ、尊敬しますよ」

「えへへ！」

アギトも背中をポンと叩いてきた。

「親とのバトルか、羨ましいな」

「アギトもシエルとバトルしてみたら？」

「……そうだな。それも、いいかもしれない」

アイリスさんも少し考えた後に、何故か頬をつついてきた。

「うん、柔らかいわね」

「何してるんですかお姉ちゃん!？」

「え？ 弟になるかもしれないし、柔らかさチエツクだけど？」

「意味がわかりませんよ！ っていうか、アルトはミリガンにゾッコ
ンなんですよ！」

「え、そうなの？」

「うん！」

俺が頷くと、お父さんとお母さんが口をポカンとあけた。

「ええっ!? やだ、アナタ！ アルトつてばミリガンにぞっこんで
すつて！」

「こ、これは衝撃的な事実にお父さんびっくりだよ、アルト！」

なんか、ちよつと恥ずかしくなってきた。

「と、とにかくバトルを始めるよ！」

「照れた!? あのアルトが照れた!？」

エリザがうるさい。

「ああ、もう！ スピアー！ キテルグマ！」

「スピイツ！」

「クマー！」

スピアーとキテルグマはやる気まんまんだ。

「いくよ！」

「来い！」

「来なさい、アルト！」

エピソード『VSレムハザード』

「スピアー、かげぶんしん！」

「スピッツ！」

スピアーが分裂していく。その数はバステイロジムのバトルフィールドを埋め尽くす程だ。

アルトの父、アレンは思う。

もはや、アルトの実力は四天王に匹敵している。自分達の実力ではどうあがいても勝つことは出来ないだろう。

「強くなったな、アルト」

それが嬉しくて堪らない。

「オーダイル、ハイロカノン！」

「ダブルニードル！」

本音を言えば、アルトに旅に出てほしくなんてなかった。

危ない目にあつて欲しくなかった。

それでも、レムハザードの命令に背くわけにはいかなかった。

アガリアの未来の為だけじゃない。命令に背く事で、アルトの親であれという命令を解かれる事が怖かった。

アレンとエレノアはアルトの親であり続けたかった。

「ケンホロウ、エアカッター！」

「キテルグマ、アームハンマーで打ち落とせ！」

フォローに入ろうとしたケンホロウのエアカッターがキテルグマに全弾打ち落とされた。そのまま、キテルグマのアームハンマーはケンホロウ本体を襲い、地面に叩きつけた。

そして、スピアーのダブルニードルはハイドロカノンの発動態勢に入ったオーダイルの背中へ回り込み、ダブルニードルを打ち込んだ。

回避も防御も間に合わない。スピードが違い過ぎる。

「俺達の勝ちだ！」

「スピッツ！」

「クマー」

アルトとスピアー、キテルグマは右腕を掲げながら勝鬨をあげた。

手も足も出なかった。

「……ああ、よかった」

アルトの背中には、二百年の眠りから目覚めた瞬間から大いなる宿命を背負わされていた。

だけど、アルトは十分に強くなった。安心して見ていられるほどに、強く。

エピソード『VSレムハザード』

雨降って地固まる。アルトの強さを嬉しそうに褒めるアレンとエレノア。アルトも嬉しそうに頬を緩ませている。そこに、真実を識つたが故の苦悩など一欠片も見当たらない。アレンとエレノアは、今度こそ本当にアルトの両親になった。

別に、こうなる事を意図していたわけではない。普通の子供なら人間不信に陥ったり、アレンとエレノアに憎しみを向けてもおおかしくはなかった。

「なるほどね」

ザラクがアルトの為の試練であるドロシーを横取りした理由が分かった。

もう、彼女では試練になり得なかったのだ。アルトは既に十分な力を得ている。

だから、後は仕上げるだけだ。

「アルト」

レムハザードはアルトに呼びかける。

「お姉ちゃん、勝ったよ！ さあ、バトルしよう！」

好戦的な眼差しを向けてくる。

「ええ、バトルしましょう」

アルトを育てる。最強を超える最強へ。アルトギア手記も、ヴリル教団も、ドロシーの存在も、すべてはその為だけに用意した。

「アルト。強くなったあなたの力、そのすべてをお姉ちゃんにぶつけてちょうだい」

「ああ、いくぞ！」

アルトはスピアールとキテルグマを戻した。これより始まるバトル

は6対6のフルバトル。

レムハザードとアルトは同時に最初の一体をくり出した。

「いくわよ、ガラガラ！」

「ガラッ！」

「いくぞ、ギャラドス！」

「ギシャアアアアッ！」

レムハザードがくり出したポケモンはアローラのすがたと呼ばれるガラガラ。通常、じめんタイプである筈のガラガラがアローラの環境に適應してほのおとゴーストの二重タイプを獲得した姿だ。

「ハイドロポンプ！」

「ギシャアアアッ！」

「遅い！」

「ガラッ！」

ギャラドスのハイドロポンプをガラガラは俊敏な動きで躲した。

アルトはスピーアーをエースに据えているだけあって、小回りの効くスピードタイプのポケモンの扱いに長けている。その分、キテルグマやギャラドスのような鈍重なタイプは不得手であり、そのせいでキテルグマの勝率はあまり高くない。

その事をレムハザードも把握している。それ故に、初手にガラガラを選んだ。

これはアルトを成長させる為のバトル。苦手を克服し、得手を伸ばす。

「ストーンエッジ！」

ガラガラが骨で地面を砕き、舞い上がった岩石がギャラドスに襲いかかる。

「アクアテールで打ち落とせ！」

「ギシャアアアアッ！」

巨体であるが故の利点。同一のわざであっても、巨体な分だけ影響を与える範囲が広がる。ガラガラの放ったストーンエッジは数が多くて威力も高いが、大きさは小粒。ギャラドスのアクアテールはそのすべてをまとめて水流で絡め取り、打ち落とす。

「ぼうふうー！」

突風が渦巻き始める。俊敏な敵を相手にする上で最も効果的な戦術は閉じ込めてしまう事だ。ギャラドスのぼうふうによって、ガラガラは風の渦の中に閉じ込められた。

「はかいこうせんー！」

逃げ場を奪えば、あとは簡単だ。風の監獄をまるごと呑み込む威力の攻撃をぶつけるだけでいい。

ギャラドスがエネルギーを溜め始める。

その時だった。

アルトの耳に風を切るような音が聞こえた。

その正体に気づいたのは、ギャラドスがはかいこうせんを放つ寸前だった。そして、それはギャラドスの側頭部に命中した。

ホネブーメラン。ガラガラだけが覚える必殺技だ。

「ギシャアアア」

ギャラドスは衝撃ではかいこうせんを非ぬ方向に放ってしまった。反動で身動きが取れなくなっているギャラドスに、骨を回収したガラガラが迫る

「シャドーボーンー！」

ガラガラが骨が紫の光を放ち始める。ギャラドスの急所に命中した。

「ギシャアアア！」

ギャラドスが苦痛の叫びをあげる。

「決めなさい、ガラガラ！ シャドーボーンー！」

レムハザードが畳み掛ける。

ポケモンは四つのわざしか覚えられない。ハイドロポンプ、アクアテール、ぼうふう、はかいこうせん。それがギャラドスの覚えている技のラインナップだ。

懐に潜り込んだ小型のポケモンに対処出来る技はない。

「じめんに向かってハイドロポンプ！」

「なっ!?」

ギャラドスはハイドロポンプを地面に向かって放った。その反動

で、ギャラドスの体が跳ね上がる。シャドーボーンを躲されたガラガラは即座に次の行動に移ろうとするが、ハイドロポンプの水流に足を取られて動きが鈍った。

「ぼうふうー！」

ギャラドスの防風が水流ごとガラガラのを持ち上げる。今度は骨ごと風の牢獄に閉じ込めた。

「フレアドライブで脱出を！」

「ガラッ！」

「アクアテール！」

全身に炎を纏うガラガラを、風の牢獄ごとアクアテールで地面に叩き落とす。

ほのおタイプのガラガラにはこうかばつぐんだ。

「ハイドロポンプ！」

「ギシャアアアア！」

「避けなさい、ガラガラ！」

「ガラ！」

「逃がすな、ギャラドス！」

「ギシャアアアア！」

ギャラドスはガラガラの走る方向をハイドロポンプで薙ぎ払った。

「ガラッ！」

けれど、それをガラガラは見事に回避した。

「ホネブーメラン！」

「ガラッ！」

「かまうな！ そのままはかいこうせん！」

「ギシャアアアア！」

ギャラドスは命令通り、ホネブーメランを無視してはかいこうせんを放った。

回避しようとしたガラガラは二発のハイドロポンプによってぐちゃぐちゃになったフィールドの土に足を取られた。

はかいこうせんが命中する。そして、同時に飛んできたホネブーメランがギャラドスに命中した。

ギャラドスとガラガラは同時に戦闘不能になった。

「……肉を切らせて骨を断つ。悪くない作戦だけど、それで倒れちゃうのはマイナスよ」

レムハザードはガラガラを戻しながら言った。

「うん。ギャラドスとの連携は今後の課題だね。もつと上手く出来た筈なんだ」

アルトはギャラドスを戻しながら悔しそうに言った。

「さあ、バトルは始まったばかり。次のポケモンはこの子よ」

次にレムハザードがくり出したポケモンはデスカーンだった。

まるで、棺のような姿をした不気味なポケモン。

「いくよ、カラマネロ！」

「ネーロ」

アルトがくり出したポケモンは、彼の手持ちの中で唯一の搦め手を得意とするポケモン、カラマネロ。

アルトにとって、ここは最後のジムだ。そして、レムハザードは自分を鍛える為に全力で尽くしてくれている。それが分かっているからこそ、不得手なポケモンから順番に繰り出している。

ザラクと戦うには、苦手を苦手のままにしておくわけにはいかないからだ。

「デスカーン、シャドーボール！」

「カラマネロ、サイコカッター！」

二体が放ったわざはフィールドの中央で激突した。

衝撃がさっきの戦闘で水浸しになったフィールドのドロを跳ね飛ばす。

「カラマネロ！」

「ネーロ」

カラマネロがデスカーンに向かっていく。

カラマネロは近距離にも、遠距離にも対応出来る幅広い応用力がある。おまけに本来は搦め手こそ得手とするポケモンだ。使いこなす事が出来れば頼りになるポケモンだ。

「トリックルーム！」

「カーン」

デスカーンのトリックルームが発動した。すばやさが反転してしまふ摩訶不思議な空間が形成され、カラマネロの動きが鈍くなった。

「おにびー！」

「カーン」

デスカーンがおにびを放つ。

「サイコカッターで撃ち落せ！」

「ネーロー！」

おにびは当たれば必ずやけどを負わされる。トリックルームが展開している状況で継続的にダメージを受けてしまう状況に陥るのは避けたい。

サイコカッターが次々におにびを撃ち落としていく。さすがは大迷宮で大勢のポケモンのリーダーを勤めていただけはある。この状況でも、一切集中が乱れていない。

「シャドーボール！」

「サイコカッター！」

おにびを撃ち落とした瞬間、間髪入れずにシャドーボールが飛んできた。サイコカッターで迎撃すると、今度はおにびが来る。

撃ち洩らせば一気に形勢が傾いてしまう。だけど、このままだとジリ貧だ。

「ばかちからで地面を砕け！」

「ネーロー！」

カラマネロはばかちからで地面を割った。持ち上がった地面の土が迫っていた鬼火を防ぐ壁になる。

「今だ、サイコフィールド！」

「ネーロー！」

トリックルームをサイコフィールドで上書きする。

「今だ、接近しろ！」

「ネーロー！」

トリックルームが解除された瞬間、カラマネロは一気にデスカーンに肉薄した。

「ばかぢからー！」

通常、ばかぢからは使用後に疲れてパワーが落ちてしまう諸刃の剣だ。けれど、カラマネロはその常識を反転させる。使えば使う程、カラマネロのパワーは上がっていく。

掠っただけでデスカーンの体はふっ飛ばされた。

「サイコカッターー！」

「ネッローー！」

サイコカッターで畳み込む。

勝った。アルトがそう確信した瞬間、レムハザードが命令を下す。

「みちづれにしなさい！」

「カーン」

サイコカッターが命中した瞬間、デスカーンの体から何かが飛び出した。

そのなにかはカラマネロが咄嗟に放ったサイコカッターをすり抜けてカラマネロに取り憑いた。

「ネロオオオオ!?」

カラマネロは悲鳴をあげ、その場に倒れ伏した。

これがみちづれ。名前の通り、自分が敗れた時、相手を道連れにする技だ。

「どんなに強いポケモンでも、倒す手段はいくらでもある。みちづれもその一つ。覚えておいてね、アルト」

「……うん」

眉間にシワを寄せるアルト。

みちづれという技をアルトは好きになれなかった。カラマネロが頑張っ手に入れた勝利を台無しにされたからだ。

「ご苦労さま、カラマネロ。いくよ、ギルガルド！」

「ギル！」

次のポケモンはギルガルド。

「いきなさい、シャンデラ」

レムハザードがくり出したのはいぎないポケモンのシャンデラ。あのイベルタルと似通った力を持つというゴーストタイプのポケモ

んだ。

「トリックルーム！」

初手から厄介なトリックルームを張ろうとするシャンデラ。

「斬れ！」

空間が広がる前に、ギルガルドは青白い光を刀身に宿し、その身を振り上げた。

イベルタルのあくのはどうすら切り裂くギルガルドのせいなるつるぎはフィールドの対面にいるシャンデラに余波だけで大ダメージを与えた。

すぐに戦闘不能にならない辺りはさすがだけれど、シャンデラはトリックルームの構築には失敗した。

「何もさせるな！ 斬れ！」

「ギル！」

シャンデラがろうそくに灯している炎の火力を上げ始めるのを見て、アルトが叫ぶ。

ギルガルドは一瞬でシャンデラに肉薄すると、その身を斬り裂いた。

「シャン!？」

今度こそ、シャンデラは戦闘不能になった。

「さっきの二戦とは比較にならない動きね……」

「ギャラドスやカラマネロと違って、もっともっと強くなってみせるさー！」

トリックルームさえ発動させなければ、アルトの残りのポケモン達ならば一方的に勝負を決められる。それほどのスピードを備えている。

恐るべきは、そのスピードに翻弄されず、的確に指示をくだせているアルトの能力。

「戻って、シャンデラ。次はあなたよ、ジュナイパー！」

ジュナイパー。くさとゴーストの二重タイプを持つポケモンだ。

「ギルガルド、そのままいけるよね？」

「ギル！」

当然だ。そう応えるギルガルドにアルトは頷く。

「このまま一気に勝つ！　いくよ、ギルガルド！」

「ギル！」

そのアルトとギルガルドの言葉にジュナイパーの眼差しが細まる。

「いくわよ、かげうち！」

「ジュナツ」

レムハザードの命令と共にジュナイパーの姿がかき消える。

「うしろだ、ギルガルド！」

「ギルッ！」

目にも留まらぬスピード。けれど、これまでそういうスピードで戦うスピーアー達とのバトルを経験して来たアルトはジュナイパーの姿を捉えた。

ギルガルドの刃がジュナイパーのかげうちを弾く。

「そのまま斬れ！」

青白く輝くせいなるつるぎ。

「リーフブレード！」

その刃をジュナイパーはつばさに仕込まれた矢羽から打ち出したくさの刃で止める。

「リーフストーム！」

そして、次弾であるリーフストームを間髪入れずに撃ち込んだ。

「キングシールド！」

「ギル！」

ギルガルドはシールドに自らの刀身を仕舞い込む。

鉄壁を誇るキングシールドはジュナイパーの強力無比なリーフストームを防ぎ切った。

「そこよ、ジュナイパー。ハードプラント！」

キングシールドの状態のギルガルドを地面から生えてきた蔦が絡め取る。

「逃げろ、ギルガルド！　せいなるつるぎ！」

「ギ、ギル！」

アルトが慌ててフォルムチェンジを命じるが、蔦はギルガルドを完

全に絡め取り、キングシールドの状態に固定してしまった。

「どくどくー！」

そこにジュナイパーは接近し、どくどくをギルガルドに浴びせかけた。

「ギル!？」

もうどくを受けたギルガルドは悶え苦しむが、ハードプラントの蔦のせいで身動きが取れない。

「シャドーボールだ！」

こうなつてはキングシールドの状態でも放てるわぎで無理やり脱出するしかない。

けれど、それは当然の如く読まれていた。

「ジュナイパー、リーフストーム！」

シャドーボールで蔦を破壊すると、その余波でギルガルドはダメージを受けた。

その隙について、ジュナイパーはリーフストームを放つ。それも一撃だけじゃない。一息の内に放たれたリーフストームは三弾。神速の魔弾がギルガルドに襲いかかった。

「ギ、ギル……」

ギルガルドは地面に落下した。キングシールドの状態でも耐えきれない程のダメージを受けてしまったようだ。戦闘不能になったギルガルドをアルトは悔しそうにモンスターボールに回収する。

「これで三対三。さあ、次はだれで来るのかしら？ 言っておくけど、ジュナイパーは強いわよ」

分かっている。アルトは心の中で毒づいた。ギルガルドは特別なポケモンだ。ヴリル王やミリガンの手持ちとして、種としての極限の力を身に着けている。そのギルガルドを倒すなんて、尋常じゃない。

「いくよ、スピアー！」

「スピッ！」

スピアーの投入に、レムハザードは僅かに驚く。

「ここでエースを出していいの？」

「エースだからこそだ！ ジュナイパーは強い。でも、スピアーなら

絶対に倒せる！」

「スピッツ！」

スピアーが動く。目にも留まらない、などという次元ではない。まるで時を止めたかのような瞬間移動。音も立てず、スピアーはジュナイパーの背後に回り込んだ。

「ジュナ」

けれど、ジュナイパーは気づいていた。スピアーの突き出したニードルを紙一重で回避すると、どくどくを浴びせかけた。

「スピ」

スピアーはどくどくの液が体に付着する前に距離を離す。

「ジュナ」

すると、移動先が分かっていたかのように、スピアーへジュナイパーがリーフストームを撃っていた。

「穿け！」

アルトが選んだのは、回避ではなく特攻。螺旋を描きながらリーフストームに飛び込んでいくスピアー。ドリルライナーで強引に突破すると、そのままジュナイパーへ襲いかかる。

ジュナイパーは全力で後方に飛んだ。紙一重では余波でやられると直感した為だ。

その判断は正しい。スピアーのドリルライナーは、そのあまりの速度故に衝撃波を巻き起こし、地面を深く抉った。紙一重では、まさに紙のように吹き飛ばされ、戦闘不能に陥っていた事だろう。

これがスピアーの力。アルトがもつとも信じるポケモン。アルトのエース。

あまりの疾さに、その強さに、レムハザードとジュナイパーの思考が一瞬止まる。

スピアーがその隙を逃す事などあり得ず、気付けばジュナイパーの胸元にスピアーのニードルが突き立てられていた。

「ダブルニードル！」

「スピッツ、スツピイイイッ！」

急所に命中した。ジュナイパーの体はフィールドの外の壁に激突

して戦闘不能になった。

「……一応、わたしのポケモンの二番手だったんだけどね」

レムハザードは顔を引き攣らせている。ギルガルドと比べても、スピアーの実力は段違いだ。

「温存しても無駄ね。ゲンガー!」

「ゲン!」

レムハザードの五番手はゲンガー。彼女の手持ちのエース。

「壁の中に潜り込みなさい!」

「ゲン!」

「させるな!」

「スピッ!」

壁の中に潜り込もうとするゲンガーにスピアーはミサイルばりを放った。まさにミサイルの如き威力と速度でゲンガーの潜った地面を大きく抉るミサイルばり。けれど、肝心のゲンガーは捉える事が出来なかった。

「ゲンガー、ほろびのうた!」

フィールド全体におそろしげな歌声が響き渡る。

ほろびのうたは聞いたものを呪う恐ろしいわざだ。はやく決着をつけなければスピアーは戦闘不能になってしまう。そう判断したアルトは意識を研ぎ澄ませた。

王の力はポケモンの心を感じ取る力。それは、なにも自分のポケモンだけじゃない。

「そこだ、スピアー! ミサイルばり!」

「なっ!」

レムハザードは驚愕した。アルトはゲンガーが隠れ潜んでいた場所を正確に見抜いてしまったのだ。壁の中という、肉眼では決して発見する事の出来ない場所。そこにスピアーのミサイルばりが殺到する。咄嗟に壁から脱出したゲンガーはサイコキネシスでミサイルばりを止めた。

けれど、その隙にスピアーはゲンガーに肉薄していた。

「ドリルライナー!」

ドリルライナーはじめんタイプのわざ。ゲンガーにはこうかばつぐんだ。

「ゲン」

目を回すゲンガーに、レムハザードは息を呑む。

この時点になって、彼女は気づいた。たしかに、まだまだ未熟な部分はある。苦手な事も残している。けれど、アルトの力は己の遥か上をいつている。あのスピアーが出た時点で、このバトルは詰んでいた。それほどまでに、圧倒的だった。

アルトの手持ちのポケモンは、そのほとんどが別のトレーナーに育てられたポケモンばかり。キテルグマはアローラの元チャンピオン。ゲッコウガは他ならぬザラク。ギルガルドやギャラドスに至ってはヴリル王の手持ちだった。カラマネロとて、大迷宮というドロシーの庇護下で力をつけていた。

スピアーだけはアルトが一から育てたポケモンだった。その信頼関係は他のポケモンと一線を画している。そして、それ故にアルトの実力が最も反映されているポケモンでもあった。

「……わたしの負けね」

レムハザードは最後のポケモン、ユキメノコを繰り出す。けれど、勝負になどならなかった。エースであるゲンガーや、二番手であるジュナイパーを倒された時点で分かっていた事。ユキメノコはスピアーのスピードを認識する間さえ与えられず、気づいた時には戦闘不能になっていた。

「お姉ちゃん。俺の勝ちだ」

ため息が溢れる。

ここで仕上げるつもりが、アルトはどうの昔に己の想定を超えた高みに達していた。

少し、空回りをしてしまった気分だった。

「これがバステイロジムのジムバッジ、トリアノンバッジよ」

レムハザードはポケットから取り出したバッジをアルトに手渡した。

ゴクリと息を呑みながら、バッジケースにトリアノンバッジを仕舞

い込むアルト。

「おめでとう。これで、あなたはポケモンリーグ・マグノリア大会への出場権を得たわ」

「ポケモンリーグ・マグノリア大会……。これで、ザラクと……」

バツジケースを握りしめながら、アルトは雄叫びをあげた。抑えきれない感情を吐き出すように。

「ザラク！　これでようやく、スタート地点に立てたよ！」

アルトは振り返り、旅を共にした仲間達を見つめた。

「エリザ、バレット、アギト！　ポケモンリーグ、俺が勝つ！」

燃え滾るような闘志を向けられた仲間達は、揃って笑顔を浮かべる。

「残念ですね。ザラクをぶん殴るのはわたしです。つまり、チャンピオンリーグに駒を進めるのはわたしという事です！」

「ツハ！　吠えるだけ吠えろ！　だが、オレは負けない！　この旅で、オレは強くなった！　ポケモンリーグまでに、もっともっと強くなる！」

「楽しみだ。楽しみで仕方がない。ポケモンリーグのスタートが待ちきれない。ああ、勝負だ！　最強はオレだ！」

その光景に、レムハザードはクスリと微笑んだ。

アルトの想定外の成長。その理由が目の前にある。

切磋琢磨するライバル達。アルトとスピアーの力を目の当たりにして尚も折れない心でぶつかってきてくれる彼らの存在。それこそがアルトの強さの秘訣。

「姉さん」

アギトがレムハザードに向かってモンスターボールを構える。

「次はオレだ！」

「……ええ、かかってきなさい。アギト！」

第九章 『開戦、ポケモンリーグ！』 プロローグ

名峰ラグランジアの足元に広がるクレルモア大平原。そこではポケモンリーグに参戦するトレーナー達が最後の調整を行っていた。

その中には、これまでのリーグに一切参加して来なかったバトルタワーの上層フロア常駐者もいた。ジムトレーナーやアガリア警察といった立場から離れ、一人のトレーナーに立ち戻った者もいた。

彼らは時折、同じ言葉を呟いた。

「ザラクを倒すのはオレ（わたし）だ」

チャンピオン・ザラク。歴代最強と謳われるポケモントレーナー。彼に因縁を持つトレーナーは多い。

ある日、突然目の前に現れてバトルを仕掛けられ、再起不能なほど徹底的に敗北を味合わされたトレーナーの数は到底数え切れるものではない。

歩く災害とまで呼ばれ、そんな彼とバトルをして、それでも膝を屈する事のなかったトレーナーは一人残らず超絶と呼ばれる高みへ上り詰めていた。

そんな彼らの望みはただ一つ。

ザラクとの再戦。その果ての勝利のみ。

あの日の敗北をバネに彼らは研鑽を重ねてきた。

そんな彼らの耳に、ある噂話が流れてきた。

曰く、『ザラクに認められたトレーナーがいるらしい』というもの。他の追隨を許さない圧倒的な存在であるザラク。彼が認めるとすれば、それは四天王最強の存在であるミリガンにおいて他にあるまい。そう確信していた彼らが次に耳にしたものは、『ミリガンではなく、まだ十歳の少年らしい』というもの。

ミリガン以外のトレーナーがザラクに認められた。

その衝撃が彼らを戦いの祭典へ駆り立てた。

我こそが彼の敵である。そうした自負を持ち、彼とバトルフィール

ドで再会する事を夢見ている者達にとって、看過ならない事実だったからだ。

バトルの聖地と呼ばれるアガリア地方。

今、この地でバトルの祭典、ポケモンリーグが始まろうとしている。プロリーグ

「おーい、セラ。そろそろ行くぞ」

アクセルの声が階下から聞こえてくる。そろそろ出発の時間らしい。

鏡で身だしなみをチェックする。

今日は大切な日。オシヤレにも気合が入る。

「よしー」

わたしは部屋を飛び出した。

コスラ遺跡の一件から、もう三ヶ月。通院の必要もなくなり、わたしの体調は万全だ。

階段を降りて、玄関が出る。

「アクセルー」

「おうー」

木漏れ日を受けて、キラキラ輝く金色の髪。すこし前まではなんとも思っていなかった髪の色でさえ、今のわたしの目には魅力的に映る。

見つめているだけで、胸がドキドキしてくる。

「いよいよだ」

アクセルはバッジホルダーを開いた。そこには8つのバッジが輝いている。

わたしの看病の合間に集めたいらしい。

本当に強くなった。師匠のヴァイクも太鼓判を押して今日を迎えさせた。

「ポケモンリーグー」

最強を決める為の戦いの祭典。その開会式は十時間後に迫っている。

アクセルは出場選手として、既に登録は済ませてある。

「アクセルなら勝てるよ！ 優勝間違いなし！」

わたしの言葉に、アクセルは照れくさそうに笑った。

「おう！ オレは勝つぜー！ 誰が相手だろうと、絶対に！」

◆ 「エリザ。本当にいいの？」

お姉ちゃんがしつこく聞いてくる。フリーザーも隣で悲しそうな視線を送ってくる。

だけど、これは決めた事だ。

「ポケモンリーグはわたしの力だけで戦います」

元々、フリーザーはジュラの氷神として崇められていた存在。

それを、お姉ちゃんの仇討ちの為に連れ出した。

どうして守ってくれなかったのかと責め立てて、道具のように利用してしまった。

アルトとカルネシティで再会した夜、わたしは決めていた。

仇討ちは止めよう。

フリーザーは、元の場所へ還そう。

そもその話、お姉ちゃんは生きていた。

詳しい経緯は未だによく分かっていないけれど、生きている人の仇なんて打てない。

だから、わたしはフリーザーのモンスターボールをお姉ちゃんに渡した。

フリーザーが主と認めた相手はわたしじゃない。巫女はお姉ちゃんなのだ。

「フリーザー」

「キュイ」

寂しそうな声で鳴かないで欲しい。

「今まで、ありがとうございしました」

一方的に連れ回して、一方的に決別の言葉を告げる。

なんて酷いトレーナーだろう。

「…………ごめんなさい」

俯きそうになる頭を必死に持ち上げる。

「キユウ」

フリーザーはわたしの胸を軽くつついた。

すると、胸元にある『とけないこおり』を入れたブローチが輝き始めた。

ユニオン大会の優勝賞品。アルトが最初の宣言通りにプレゼントしてくれたもの。

振られた今になっても、未練がましく身に着け続けている宝物。

「エリザ。あなた、好きな人がいるのね？」

「ほえ!？」

お姉ちゃんの不意打ちに顔が赤くなった。

「神様が教えてくれたわ。その胸のとけないこおりはあなたの心そのものだって」

「ふ、フリーザーが？　もしかして、お姉ちゃんも王の力を？」

「二百年前の王様の力だっけ？　うーん、そうなのかな？　覚えていないのだけど、ドロシーだった頃の名残りかもしれないわ。神様の心の声が分かるの」

お姉ちゃんは言った。

「神様は言っているわ。諦めないで欲しい。あなたの心が望むことは、わたしの心が望む事なのだから」

「そ、それ、本当にフリーザーが言ってるんですか？」

疑うわたしにフリーザーは「キユイキユイ」と怒った。

どうやら、本当らしい。

「諦めないでって言われても、アルトはミリガンが好きなんですよ？　どうしろって言うんですか……」

バトルの事ばかり考えている脳筋。だけど、わたしがヴリル教団の幹部に攫われた時は必死になって助けてくれた。

わたしの旅の目的を知っても、変わらぬ態度であり続けてくれた。悩んでいる時は気づいてくれて、わたしの話を真摯に聞いてくれた。

「クレルモア大平原で出会った時から、ずっと一緒にいたんです。ずっと、ずっと……」

世の中は不公平だ。長い時間を掛けて好きになった相手が、出会う前から別の人間を好きになっていたなんて、そんなのどうしようもない。

だけど、相手はミリガンだ。アルトにとって、彼女は命の恩人で、憧れの人だ。

四天王であり、アガリア警察の筆頭であり、わたしよりも年上の綺麗なお姉さん。

勝てる要素が欠片もない。

「好きですよ。好きになっちゃいましたよ！ 仕方ないじゃないですか！ ポケモンとバトルの事ばかり考えている癖にわたしを見てくれていて、優しくしてくれて、一緒にいてくれたんだもん……」

気付けば泣きじやくっていた。

諦められる筈がなかった。今だって、わたしはアルトの事が好きだ。

「なら、諦めなくてもいいと思うよ？」

お姉ちゃんは天使のような顔で、悪魔のように囁いてくる。

「相手が別の人を好きでも、自分の方をより好きになってもらえるように努力をしたっていいじゃない。それでもダメなら、その時はお姉ちゃんが慰めてあげる。だから、エリザ」

お姉ちゃんはわたしを抱きしめながら言った。

「諦めないで、エリザ。優しくして、誰よりも可愛らしい、わたしの天使。あなたの幸せがわたしと神様にとっての幸せなの」

「お姉ちゃん……」

暗に略奪愛を推奨してくるお姉ちゃんに戦慄しつつも感謝した。

たしかに、アルトが好意を向けている相手はミリガンだ。

だけど、まだ付き合っているわけではない。

そもそも、ミリガンの歳でアルトと付き合うのは犯罪と言われても文句を言えない。

そうだ。諦めるのはまだ早い。

「ふ、ふふ、ふふふふ！ いいでしょう！ 奪ってやりますよ、アルトの心！」

「その意気よ、エリザ！」

「キユイキユイ！」

◆ 「バレット。不安？」

夜、クセルセス高原を見つめていると、ナザレ様に声を掛けられた。すっかり復興したメルカト。けれど、戻ってきた住民は多くない。多くがヴリル教団に吸収されていたせいで、アガリア警察に拘束されたままだからだ。

事情を識っているミリガンが動いてくれているおかげで少しずつ戻ってきては居るけれど、全員が帰還するまでには長い時間がかかる。それに、警察から解放されても、メルカトに戻らない者もそれなりにいた。

事情は人それぞれだし、わざわざ聞いて回るんもおかしな話だから、詳しい事は知らない。だけど、それがナザレ様の忙しさに拍車をかけているのが気に入らない。

「ナザレ様。どうして、こんなところに？」

「わたしは気分転換の為に夜の散歩よ。それより、いよいよ始まるわね」

「……はい」

ポケモンリーグ。オレにとって、少し前までは気が向いた時にテレビで見る程度のイベントに過ぎなかった。けれど、今回のリーグは違う。

アルト、アギト、エリザと戦う。一緒に旅をした仲間達。メルカトの奪還にも協力してくれた恩人でもある。

「不安ってのは、ちょっと違いますね」

正直に言えば、オレは勝っても負けても構わないと思っている。

オレが勝てれば嬉しいだろうし、あいつらに負けても悪くない気分になれる筈だ。

だけど、その先はない。

「情けない話だけど、寂しいんです」

これから始まる戦いは旅の終わりを意味している。

バステイロジムでのジム戦の後、オレ達はそれぞれのバッジ集めや鍛錬の為に別れた。

連絡は取り合っていたし、時々には直接会っていたけれど、それでも寂しさに押しつぶされそうになる事が幾度もあった。

アギトを寂しがり屋だと笑っていたが、オレの方がよっぽどだ。

「もつと、一緒に旅をしたかったんです。もつと、いろいろな場所に四人で行きたかったんです。でも、それが終わってしまう。そう思うと、オレ……」

「楽しかったのね、バレット」

ナザレ様の言葉に、オレは嗚咽を漏らしながら頷いた。

そうだ。楽しかった。ヴリル教団との戦いだって、イベルタルとの戦いだって、アイツらと一緒になら何でも楽しかった。

「旅はいつか終わるもの。それを寂しいと思えるのなら、それはとても幸せな事よ」

「……はい」

「バレット」

ナザレ様は優しくオレの頭を撫でてくれた。

「旅は終わっても、絆は残る。大好きなお友達との最後の時間を悔いのないように全力で楽しみなさい。楽しければ楽しいほど、その記憶は根強く残る。その記憶があなた達を結び続けるわ」

「……はいー」

アルト、アギト、エリザ。オレの最高の友達。

ああ、そうだ。忘れられないくらい、楽しいバトルをしよう。

第一話 『開会式』

「ジュナイパー、リーフブレード！」

「ジュナツ」

本来は近接用の物理技であるリーフブレードを、ジュナイパーは矢として放つ。そして、放たれた魔弾は意志を持つかのように自在な軌道を描く。

これがジュナイパーの固有能力。手元から手放しても、手元にあるかのように操る事が出来る。

はじめは慣れなかったが、段々と感覚を掴めてきた。

「やはり、リーフブレードが一番使いやすいな」

ジュナイパーはレムハザードから譲り受けたポケモンだ。アルトにご執心のようなことから、こうしてポケモンを託されたのは意外だった。だから、オレをアルトの試練に仕立て上げるつもりかと思うと、『ただの姉心よ』と言われたので素直に受け取った。

家族なんてものに縁などないと思っていた。けれど、アルト達との旅を通じて、いきなり血を分けた兄弟が三人も現れた。正直なところ、未だに実感が湧いていないし、セラとはほとんど接点がない。

だけど、悪い気分じゃない。

「アギト。まだやってるの？ そろそろ支度をしないと、開会式に遅れるわよ？」

鍛錬場にシエルが入ってきた。四天王の一人として、しっかりと身だしなみを整えている。

「ああ、すぐに準備をする。シエルこそ、こんな時間までここにいて平気なのか？」

「ええ、段取りは整えてあるから問題ないわ。今回のリーグはあなたにとつて特別なものだもの。わたしも気合が入ったわ」

「そうか、ありがとう」

シエルは嬉しそうに微笑んだ。数ヶ月前の彼女とは別人のようだ。

来たるべき災厄からアガリアを守る。

それが彼女の宿願だった。

その為に四天王の座に就き、ヴリル教団に入り込み、悪事にも手を染めた。

けれど、ヴリル教団は崩壊した。そして、彼女はダークライやドロシー、レムハザードに教団が利用されていた事を識った。

——道化じゃない、わたし……。

そう言つて、彼女は泣き崩れた。

彼女に真実を教えたのはオレだ。ヴェゼール要塞の近くで倒れていた彼女が搬送された病院へ赴き、すべてを語り聞かせた。

別に、彼女を苦しめたかったわけではない。むしろ、解放してやりたかった。

彼女が自分の罪と使命の狭間で苦しんでいた事を知っていたからだ。

「アギト」

この数ヶ月、オレは彼女と共に過ごしてきた。鍛えてもらう為でもあり、オレにとってアルト達とは別の意味で、『家族』と呼べる存在は彼女だけだと思つたからだ。

家族として、これからも一緒にいたい。そう彼女に告げた時、彼女は泣きながらオレを抱きしめた。

何度も謝られて、何度も感謝されて、それからは今のよう笑顔に向けてくれるようになった。

「リーグ、がんばってね。チャンピオンリーグで待ってるわ」
「ああ、待っていてくれ」

シエルが家を出ていくと、オレも出かける支度を始めた。

ホルダーには六つのモンスターボール。

リザードン、ガブリアス、ジャローダ、ソーナンス、ジュナイパー、そして、もう一体。

「さあ、行くか」

第一話『開会式』

クレルモア大平原。思えば、ここからすべてが始まった。

旅に出て、初めて目撃した超級トレーナー同士の究極バトル。その余波から逃れる為にエリザと行動を共にして、行く筈だったオーヴェ

ルではなく、ユニオンにたどり着いた。

そこでバレットやアギトと出会い、リールシティでヴリル教団やアルトギア手記の事を識った。

「懐かしいね、スピアー」

「スピー！」

リザードンとジュナイパーを相手に、ギャラドスと共に戦っていたスピアーの勇姿が瞼の裏に蘇る。あの勇ましい姿に憧れた。ミリガンとのバトルを通じてドリルライナーを覚えた時は嬉しくて仕方がなかった。

これから始まる戦いの祭典に、この旅のすべてをかける。

「一緒に行こう、スピアー。誰も見たことのない高みへ！」

「スピー！」

モンスターボールからギャラドスを出す。

その背中に乗って、空へあがる。名峰ラグランジアの上空は俺のような参加者や、応援者が乗っているひこうポケモン達でごった返していた。

見覚えのある姿がちらほら見える。

「見えた」

ラグランジアを超えた先に広がるマグノリア高原。そこに設営された巨大なスタジアム。

あそこがポケモンリーグの会場だ。

ギャラドスを着陸させて、モンスターボールに戻す。

人の波に乗って入場門を潜ると、選手用の受付があった。

「ようこそ、ポケモンリーグへ。トレーナーカードとバッジホルダーの提示をお願い致します」

「はい」

言われた通り、トレーナーカードとバッジホルダーを受付のお姉さんに渡す。すると、お姉さんは少し驚いたような表情を浮かべた。

「し、シルバークランク・トレーナー、アルト様。バッジ数、八。確認が完了しました。隣のゲートから入場して下さい」

「はい」

トレーナーカードとバッジホルダーを返してもらおうと、俺は言われた通りにゲートを潜った。すると、門の先には独楽のような機械が浮いていた。

眼の前に光の文字が浮かぶ。

《こちらは個室への移動装置となります》

乗ってみると、落下防止の為にしき柵が下から伸びてきた。そして、すごいスピードで長い通路を進み始めた。時々左や右に曲がって、上へあがっていく。ようやくたどり着いた場所はバトルフィールドを見下ろせる位置にある個室だった。

部屋にはソファアールやポケモンの回復のための装置が備え付けられている。他にも、ポケモン用のお菓子やトレーナーような飲料も取り揃えられていた。

すごく豪華な部屋だ。とりあえず、ソファアールに座ってみる。ふかふかで体が沈みそうになった。

開会式のスタートまで、残り時間は三十分程度だ。

スピーカーと一緒にお菓子を食べながら待っていると、ピンポンパンポーンという音が響いた。

《これより開会式が開始されます。参加者の皆様は移動装置に乗り、フィールドの方へ移動して下さい》

勝手に扉が開き、ソファアールから移動装置の場所まで、床に矢印が現れた。

「なんだか慌ただしいね」

「スピーカー」

スピーカーをモニターボールに戻して、俺は移動装置に向かった。またもや上下左右に揺られ、たどり着いた先は真っ暗闇な空間。

「どうしたんだろう?」

移動装置はピクリとも動かない。

故障かと首を傾げていると、目の前に光の文字が浮かび上がった。

《これより、開会式が開始されます。そのままの状態でお待ち下さい》
それと共に、いきなり大歓声が響き渡った。

『さあ、お待ちせいたしました! これより、アガリア地方ポケモン

リーグ・マグノリア大会を開始致します！」

大歓声を押しつけて、テレビ中継でよく聞く声が聞こえてきた。

たしか、こういう大規模な大会とかでよく実況を勤めているアガリアTVのアナウンサー、ジーンだ。

『それでは、今大会に参加する選手達に入場していただきます！ みなさま！ 盛大な拍手でお出迎えをお願い致します！』

その言葉と共に拍手の音が響き渡り、同時に天から光が降り注いできた。

移動装置が浮上を開始する。天蓋を抜けると、そこはバトルフィールドの中央だった。どうやら、俺はバトルフィールドの真下で待たされていたらしい。

「アルト!?!」

隣から聞き慣れた声が聞こえた。

顔を向けると、そこにはやっぱりエリザがいた。

「エリザ！」

「真横に現れるとは、もってますね！ アルト！」

「よく分からないけど、うん！」

エリザと直接会うのはかなり久しぶりだ。バッジ集めの他にも、自己の研鑽の為と言って、いろんな所を飛び回っていたらしい。

「エリザ。久しぶりに会えて嬉しいよ！」

「クフツ！ いきなりかましてきますね！ わたしの乙女心がドキドキですよ！」

相変わず、ちよいちよ意味不明な事を言う子だ。

「いよいよだね」

「ええ！」

二人揃って、バトルフィールドの正面の大ビジョンに視線を向ける。

そこには参加者達の顔が映り込んでいた。

そこにはバレットがいて、アギトがいて、アクセルがいて、ヴォルフの姿もあった。

「って、ヴォルフ!?! なんで!?!」

「いやいやいや、見間違えですよね!? あの人の、公務員ですよ!?!」
いや、確かにヴォルフだった。リール署の副署長にして、リールジムのジムトレーナー。

リールシティでも、メルカトでも、幾度となく俺達を助けてくれた頼りになる人。

まさか、ポケモンリーグに参加してくるとは思わなかった。

「戦いたい!」

ヴォルフにはリールシティで負けたままだった。

あの時よりも強くなった自分を彼に見せたい。いろいろな事を教えてくれた彼に認めてもらいたい。

「相変わらずですね、アルト」

クスクスとエリザは笑った。

「アルト」

「なに?」

呼びかけられて顔を向けると、エリザは言った。

「わたしもあなたとバトルがしたい」

「俺もだよ!」

ずっと一緒に旅をしてきたから分かる。エリザは強い。それに、俺の知らない事をたくさん知っている。エリザと戦うのはユニオン大会以来になるけれど、一筋縄ではないだろう。

「なら、わたしと戦う時は、わたしだけを見ていてくださいね」

「えっ? いや、バトルの最中はポケモンの方も見ないと……」

「ミリガンやザラクの事なんて忘れて、わたしとの戦いに集中して下さいねって意味ですよ」

やれやれと肩を竦めながら彼女は言った。

この大会を勝ち進めば、ザラクやミリガンと戦う事が出来る。

どうやら、エリザは先の事ばかり考えすぎるなどアドバイスをくれたようだ。

「うん! 俺、エリザだけを見るよ!」

何故か、エリザはそっぽを向いてしまった。自分を見ろと言っておきながら自分は見えない。さすがはエリザだ。行動が読めない。

『それでは、これよりルールの説明を始めます!』

おっと、大切な部分だ。よく聞いておかないとね。

『今大会はトーナメント形式です。参加者は64名。六回連続で勝つ事が出来れば、晴れて優勝となります! 一回戦から四回戦までは三対三。準決勝と決勝戦では六対六でのフルバトルとなります!』

この辺は例年通りだ。前に見たポケモンリーグの中継も同じルールだった。

開会式はその後も続き、著名人の挨拶なんかも差し込まれた。

その内の一人はアギトの保護者のシエルだった。

『それでは、開会式は以上となります。引き続きまして、今大会の特別イベント! エキシビション・マッチを開始致します!』

「エキシビション・マッチ?」

「要するに、大会を盛り上げる為の前哨戦ですよ。でも、誰が戦うんでしょう?」

エリザと話していると、大ビジョンに二人のトレーナーの姿が映し出された。

一方は現チャンピオンのザラクで、もう一方は前チャンピオンのゼノンだ。

まさかの新旧チャンピオン対決に会場全体が湧き上がった。

俺も興奮で鳥肌が立っている。間違いなく、凄まじいバトルになる筈だ。

そう思って大ビジョンを見つめていると、ザラクがマイクを手にとった。

『アルト! この時が来たぞ! 待ちに待った戦いの時だ!』

何故か、対戦相手のゼノンじゃなくて、俺に向かって喋り始めた。

周りが「アルトって誰だ?」「例のルーキーの事じゃないか!」「メルカトで活躍した子だよ!」「リアルシティでヴリル教団相手に戦ったって聞いたぞ」などと囁き始めている。さすがにちよつと恥ずかしい。

「あのバカ……」

エリザも呆れた様子だ。

『オレは！』

ザラクはギャラドスを繰り出して、その背中に乗った。そして、その上からまっすぐに俺を見つめてきた。

『お前を待っている。上がってこい！』

そう言われたら、応えないわけにはいかなかった。

今日、この日まで持ち続けてきたモンスターボールをホルダーから外す。

「ザラク！」

俺が叫ぶと、みんなが注目してきた。だけど、そんなのどうでもいい。

俺はザラクに向かってモンスターボールを投げた。まっすぐに飛んでいくモンスターボールをみんなの視線が追いかける。そして、ザラクはモンスターボールを受け取った。

「ありがとう！ おかげで、ここまで来れた！」

『おう！ よくやった！』

あのモンスターボールはゲッコウガのものだ。

ヴェゼール・ヴィレツジで彼に預けられたポケモン。その圧倒的な力で俺達の旅を助けてくれた。

感謝の気持ちがある。

離れたくない気持ちがある。

でも、それ以上に、俺はゲッコウガと戦いたい。それも、ザラクが使う、最強の状態のゲッコウガと！

「絶対にそこまであがっていく！ だから、バトルだ！」

『ああ、バトルだ！』

交差する視線。燃え上がる闘志。さっきまでの賑わいが嘘のように、会場は静まり返った。

『あ、あの、チャンピオン』

そんな中、勇気ある実況者であるジーンがザラクに声をかけた。

『ああ、エキシビジョン・マッチだったな。いいぜ、やろう！』

ザラクは地上へ飛び降りた。

すると、同時に乗っていた移動装置が再び起動して、エリザと言葉

を交わす暇も与えずに俺を地下の暗闇へ導いた。

そして、そのまま上下左右に揺られながら移動し、元の個室へ戻された。

個室の大型テレビには、バトルフィールドで向かい合うザラクとゼノンの姿がある。

旅人のような格好のザラクに対して、ゼノンはまるでマフィアのボスのような格好をしている。

黄金の髪をかきあげ、ゼノンは言った。

『……お前は変わらないな、ザラク』

やれやれと彼は言う。

『そういうお前はどうかんだ？ まさか、あの時のままとは言わないだろうな？ それではつまらないぞ』

『さて、どうだろうな』

両者は微妙に不穏な空気を醸し出しながらモンスターボールを構えた。

ザラクの握っているモンスターボールは、さつき返したばかりのゲッコウガのものだ。

『いくぞ、ゲッコウガ！』

モンスターボールからゲッコウガが飛び出す。

『コウガア！』

久しぶりの再会にも関わらず、ゲッコウガはザラクに視線一つ送らない。

まるで、離れていた時間など無かったかのように、二人は自然体のままそこにいる。

『いくぞ、ピカチュウ』

『ピカチュウ！』

対して、ゼノンが繰り出したのはピカチュウだった。

第二話 『エキシビション・マッチ！ ザラクVSゼノン』

第二話 『エキシビション・マッチ！ ザラクVSゼノン』
前チャンピオンのゼノンと言えば、アギトが通っていたポフレス
クルルの学長だ。

アギトから聞いた話では、他にもポケモンコンテストの審査員なん
かも勤めているらしい。

だから、バトルよりも、ポケモンのお世話が好きな人という印象
だった。

『ピカチュウ、でんこうせっか！』

『ゲッコウガ、つじぎりだ！』

それは間違っていないのだろう。だけど、彼はやはりチャンピオン
だった。

刹那の間に鳴り響いた十二の衝撃音が開戦を告げる。

ピカチュウのでんこうせっかは正しく電光石火の如く、一息の内に
十二回もゲッコウガを襲撃した。そして、ゲッコウガはその十二回の
襲撃をすべてつじぎりで凌ぎ切った。

距離を取る二体のポケモン。

『みずしゆりけん』

『アイアンテール』

放たれるゲッコウガのみずしゆりけんをピカチュウはアイアン
テールで受け、その軌道を変えた。新たな軌道はゲッコウガを狙う。

『つじぎり！』

けれど、ゲッコウガは臆さない。迫りくるみずしゆりけんを斬り裂
きながら、ピカチュウに向かって走り出す。

『でんこうせっか』

まるで、時が飛んでしまったかのような錯覚を覚える。

ゲッコウガに向かって駆け出す態勢に入ったピカチュウが、次の瞬
間にはゲッコウガの背後に回っていた。

ピカチュウがゲッコウガの背中を突き破った。

「つて、かげぶんしん!？」

思わず叫んでしまった。いつ入れ替わったのか、まったく分からなかった。

ピカチュウが突き破ったゲッコウガは水しぶきを上げながらかき消えてしまった。偽物を掴まされた事に気がついたピカチュウは本物を探す為に周囲に放電を開始する。

『コウガアッ!』

発見される前に、ゲッコウガは自ら姿を現した。彼がいた場所は地面の下。よく見ると、さつきゲッコウガがみずしゆりけんを斬り裂いた場所の真下に奇妙なみずたまりが出来ている。

ゲッコウガはみずしゆりけんを斬り裂いた瞬間にかげぶんしんと入れ替わり、つじぎりで地面を掘り進んだのだ。あのみずたまりはその事に気づかせない為のフェイク。

飛び出したゲッコウガはピカチュウのから空きな背中へつじぎりを振り下ろす。

『アイアンテール!』

『ピカ!』

まるで背中に目がついているかのようだ。ピカチュウは振り向く事さえせずに鋼鉄の如く硬質化したしっぽでつじぎりを見事に受け止めた。

『エレキボール!』

『ピカピカピカピカ!』

つじぎりを弾いた瞬間にしっぽの硬質化を解き、ピカチュウはエレキボールを生成する。

破裂するでんきエネルギーにゲッコウガはダメージを受けた。

「そんな!？」

信じられない。あのザラクが先に一撃を決められるなんて、あり得ない。

『さあ、ギアを上げるぞ! ばちばちアクセル!』

『ピカピカピカピカピッチュ!』

「なにあれ!？」

ピカチュウがでんきエネルギーを纏いながら電光石火並の速度でゲッコウガに迫る。

見た目はボルテッカーに近い。だけど、ボルテッカーにしては威力が低く、代わりにスピードが早い。

ばちばちアクセル。聞いたこともない技だ。

『ああ、そうだな。つじぎり!』

『コウガア!』

ポケモン図鑑でばちばちアクセルを調べようとしていたら、ゲッコウガがピカチュウを吹き飛ばした。

ザラクは笑っている。

『楽ませてくれるじゃないか、ゼノン!』

『……相も変わらず、底の見えない男だな』

ゲッコウガが動く。さっきまでとは明らかに動きが違った。

『でんこうせっか!』

その光景を見て、ようやく理解した。

ピカチュウのでんこうせっかをゲッコウガは完全に見切り、背後を取ろうとしたピカチュウの急所をつじぎりで斬り裂いた。

『ピカア!』

地面を何度もバウンドしながら吹き飛ばされるピカチュウに会場全体が静まり返る。

さっきまでの互角な戦況は、単にザラクが手を抜いていたから成立していただけの事。

本気になったザラクにとって、前チャンピオンといえども敵ではない。

『もつとだ、ゼノン! もつと、お前を見せてくれ!』

それなのに、ザラクはゼノンに更なる力を求める。

『ならば一撃。それで雌雄を決しよう』

ゼノンが呟くと同時に、ピカチュウの頬からビリビリと放電が始まった。

『面白いじゃないか』

ザラクは笑みを深める。

固唾を飲んで見守る中、ピカチュウが動いた。

『かげぶんしん!』

『ピッカア!』

いきなり攻撃技を放つのかと思ったら、ピカチュウはかげぶんしんを発動した。

無数のピカチュウがフィールド中を駆け巡る。

『ん? 五つ目だと!?』

ザラクが目を見開く。

そうだ。でんこうせっか、アイアンテール、エレキボール、ばちばちアクセル。これでピカチュウの技はすべての筈だ。通常、四つしか技を覚えられない筈なのに、五つ目の技なんて、あり得ない。

『戸惑ったな、ザラク。その一瞬が欲しかった』
『なに!?!』

ゼノンが指を鳴らす。すると、一匹のピカチュウがかげぶんしんの中から飛び出した。

『見るがいい。これがピカチュウの必殺技だ!』

ピカチュウの体全体から激しい雷霆が迸る。同時に空が雷雲で満たされた。

『ゲッコウガ、ハイドロカノン!』

『コウガア!』

ザラクの叫びには明らかな焦燥が混じっている。

凶鑑を見ても詳細不明のばちばちアクセル。五つ目の技。そして、放たれようとしている必殺技。

前チャンピオン・ゼノンのピカチュウはあまりにも規格外過ぎる。

『ピカピカサンダー!!』

『ピカアピカアチュウウウウツ!!』

『コウガアアアア!!』

天から幾筋もの雷光が飛来する。その威力は同系統の技である『かみなり』を遥かに凌駕していた。直前にゲッコウガはハイドロカノンを頭上に放ったけれど、みずタイプのわざとでんきタイプの技では相

性が悪い。僅かに威力の減衰には成功したが、そのまま圧倒的なエネルギーに押されてしまった。

「そんな、まさか!」

ザラクが負ける? 彼を倒す為にここまで来たのに、そんなの困る。絶対にイヤだ。

「ザラク! 負けるな! がんばれ!」

聞こえる筈もないのに、それでも叫ばずにはいられなかった。

『……これが、お前の本当の力なんだな、ゼノン』

『ああ、そうだ。これですべてだ』

ザラクとゼノンが言葉を交わし合う。

何故だろう。この状況なのに、ゼノンの顔には諦めのような感情が浮かんでいる。

対して、ザラクは心底嬉しそうに、楽しそうに笑っている。

ピカピカサンダーの衝撃によって舞い上がっていた土煙が晴れた。

そこにはつじぎりを構えたゲッコウガの姿があった。

「なっ……」

あれほどの威力の攻撃を受けたのに、ゲッコウガにダメージを受けた様子がない。

いや、それよりも、どうしてハイドロカノンの発動直後につじぎりを発動出来ているのか、理解が出来ない。究極奥義に分類される技は、その威力故に反動が大きく、どうしても一拍の隙が出来てしまうものだ。

『反動が出ないギリギリまで威力を削ったな? その上で、ハイドロカノンが作り出した刹那の空白の間にピカピカサンダーを見切り、つじぎりで引き裂いたか……』

ゼノンが説明してくれた。

その説明を聞いた上で、鳥肌が立った。

今の俺に、同じ事が出来るとは思えなかったからだ。

これが、現時点での俺とザラクの差。

『倒しきれない事は分かっていた。けれど、ハイドロカノンによる硬直の瞬間に最大威力のばちばちアクセルを叩き込めば勝機はあると

思っていた。まさか、ここまでとはな。前言を撤回しよう、ザラク。おまえは、二年前よりも更に強くなっているな』

『当然だ。オレは成長する。成長し続ける。他の誰よりも!』

成長。俺が成長している間に、ザラクも成長している。

『見事だよ、ザラク。最強の男。このエキシビジョン・マッチはきみの勝ちだ』

ゼノンの宣言と共に、それまで一言も喋らなかった実況がようやく自分の仕事を思い出した。

『しよ、勝者、ザラク選手! な、なんとという戦い。これまで、実況者として様々なバトルを見てきましたが、あまりにも……、あまりにも凄すぎる!!』

ゼノンとザラクは互いの健闘を称え合った後、それぞれポケモンをモンスターボールに戻した。

俺はソファーに倒れ込んだ。やけに息が苦しい。どうやら、途中から息をするのも忘れて見入ってしまったようだ。

ゼノンは間違いなく強かった。前チャンピオンに相応しく、最強を名乗るに十分な実力を備えていた。その上、三つも切り札を用意していた。それなのに勝てなかった。

「成長しなきゃいけない。俺も、この大会の間にもつと……」
ザラク以上の成長速度で、現時点よりも成長している状態のザラク以上に。

『さあ! それではトーナメントの順番を発表致します!』

部屋のテレビから実況者ジーンの声が響く。

視線を送ると、画面の左には全体のトーナメント表が表示されていて、右側には上部にジーン顔、下部に俺と対戦相手の顔が並んでいた。

「……ヴォルフ」

一回戦の相手はヴォルフだった。

リアルシティやメルカトシティでお世話になった人。

俺を負かした人。

俺にとって、紛れもなく超えるべき壁。

「行くぞう」

移動装置に向かう。試合開始はすぐだ。

第三話 『開戦、ポケモンリーグ！ VS ヴォルフ』

ヴォルフ。リールシティの治安を守る、アガリア警察リール署の副所長にして、リールジムのジムトレーナー。

その強面からは想像もつかないほどに優しい人。

「アルト、久しぶりやな」

笑顔なのに、相変わらず凶悪な人相だ。

「久しぶりだね、ヴォルフ」

かくとうタイプのジムであるリールジム。彼もまた、かくとうタイプのエキスパートだ。

「イベルタルの件、聞いたで。すまん、助けに行つてやれんで……」
暗い表情を浮かべるヴォルフ。

思わず笑ってしまう。

「笑うとこちやうで!？」

「ヴォルフつて、本当にやさしいね」

だけど、このバトルではその優しさを捨てて欲しい。

「ヴォルフ」

スピアーのモンスターボールを握りしめる。

「君のすべてを俺に見せてくれ!」

「……ああ、見せたるわ。本気の本気を!」

第三話 『開戦、ポケモンリーグ！ VS ヴォルフ』

『さあ、始めました! アガリア地方ポケモンリーグ・マグノリア大会! エキシビジョン・マッチによって、会場は盛り上がっております!』

実況のジーンの声が響き渡る中、俺はスピアーを繰り出した。ヴォルフはエビワラーだ。

軽快なステップを踏むエビワラー。

『一回戦第一試合、開始!』

開戦の合図と共にエビワラーが動く。俊敏だ。いつもは先手を打って背後に回るスピアーの背後を逆に取りに来た。だけど、スピアーはその動きを見切っている。

振るわれたバレットパンチを紙一重で躲し、逆にダブルニードルを叩き込む。

「つく」

けれど、エビワラーもまた、スピアーの動きを見切っていた。スピアーが突き出したニードルを回避して、スカイアツパーを繰り出してきた。回避した筈なのに、余波でスピアーはよろめいてしまった。

「そこや、きあいパンチー」

大技が来る。

スピアーの速度なら、回避に全力を注げば仕切り直せる。ダブルニードルできあいパンチを迎え撃つ選択肢もある。だけど、それだと成長出来ない。

相手はヴォルフだ。ヴォルフとの戦いだからこそ、得られるものがある筈だ。

逃げるんじゃない。攻めるんじゃない。

「受け流せー」

さっきのザラクとゼノンのバトルで見出した第三の選択肢。

ゼノンのピカチュウがアイアンテールでみずしゅりけんの軌道を変えたように、きあいパンチの軌道をダブルニードルで変える。真っ直ぐに迫る拳に真正面から貫くのではなく、ニードルの側面を横から当てる。

スピアーの眼だからこそ出来る業。

そして、受け流した反動でスピアーの体は回転する。その回転のまま、ドリルライナーに移行して、エビワラーに強襲を仕掛ける。

「ライアー」

けれど、エビワラーは回避してみせた。まるで滑るような移動方法。

ドリルライナーを回避されたスピアーはそのまま直進する。止まれば、そこにエビワラーの攻撃が来るからだ。

十分な距離を取ったところで反転する。そこにエビワラーは既に接近していた。

けれど、戸惑いはない。それだけのスピードを持っていると予めわ

かかっていれば、こうなる事も読める。

「バレットパンチ！」

神速の拳が振るわれる。

「ミサイルばり！」

「なに!？」

ヴォルフが驚く。当然だろう。ミサイルばりは遠距離技。本来、接近戦で使う技じゃない。

だけど、それでも使う。

放ったのは一発分。その一発をバレットパンチに真下から当てる。

元々、ミサイルばりはスピアーの意志で誘導出来る。左右だけでなく、上下にも自由自在だ。それなら、前後にだって誘導出来る筈だと考えた。

前に誘導する。それは即ち、弾速の底上げだ。ミサイルばり自体も鋭く、細くする事で、更に空気抵抗を無くして素の弾速も上げられる。結果、ミサイルばりは拳銃なみの速度を得られた。

音速のバレットパンチをスピアーの眼が見切り、ミサイルばりという弾丸を放つ。

跳ね上げられた拳。がら空きになった胴体。

「いや、腕は二本あるんやで？」

さすがはヴォルフだ。奇襲地味たミサイルばりの高速射撃に対する驚愕を瞬時に飲み込み、切り替えた。右腕のバレットパンチを躲された直後に、左腕でスカイアッパーを繰り出すエビワラーも、相当な胆力だ。だけど、スカイアッパーならミサイルばりを使うまでもない。

さつきエビワラーが使ってみせた奇妙な回避方法は真似したくてもスピアーには出来ない。

あれは地に足がついた状態に慣れた上でないと使えない動きだ。だけど、スピアーには羽がある。三次元的な動きが可能なスピアーは二次元的な回避が限界の相手の上をいける。

スピアーは羽を僅かに動かし、スカイアッパーの軌道上から外れた。

「その程度でええんか？」

スカイアツパーは当たっていない。

それなのに、スピアーの体が吹き飛んだ。

「余波!? いや、これは―」

単なる余波じゃない。明確な指向性をもたせた攻撃だ。

どうやったのかは分からないけれど、エビワラーは殴りつけた空気を弾丸としてスピアーに叩きつけたんだ。

エビワラーが追撃してくる。

「迎え撃て―」

スピアーも態勢を立て直してエビワラーに向かっていく。すると、いきなりエビワラーのスピードが変化した。

「チェンジ・オブ・スピード。ワザやないで、これは技術や」

エビワラーの急激な緩急の変化にスピアーの対応が遅れた。

バレットパンチが来る。

「避ける―」

「スピッ!」

スピアーはバレットパンチを回避した。

その筈だった。

それなのに、スピアーの体が地面に叩きつけられた。

「カウンター? いや、フェイントか!」

バレットパンチは単なる囮。それを回避させて、本命の一撃を叩き込んできた。

ヴォルフ。とてつもない強さだ。

「オラ、立たんかい! こんなもんやないやろ!」

ヴォルフが倒れ伏しているスピアーを怒鳴りつけた。

「すべて見せる言うたんは自分やで? もっともっと見せたるわ!」

その言葉と共にエビワラーが左右に揺れ始めた。

トーン、トーンとその場で僅かに跳び始める。

「なにか来る― スピアー!」

「スピー!」

スピアーが構える。警戒しながら距離を取り、隙を伺う。

「え？」

いきなり、エビワラーの姿が消えた。

「スピッ！」

違う。跳び上がった後、着地と同時に姿勢を下げたんだ。そのまま地を這うように走り出し、スピアーに肉薄する。

相変わらず、左右にゆらゆらと揺れながら拳を振り上げる。

「受け流せ！」

「ス、スピ！」

バレットパンチですらない、ただのパンチ。それなのに、スピアーは受け流せなかった。

「ど、どうして!？」

スピアーが不調なわけじゃない。それは分かる。

それなのに受け流せなかった。

「リズムってヤツや」

ヴォルフが言った。

「一定の動きを繰り返す事で、そこにリズムが生まれる。そのリズムは相手にも伝わり、それを敢えて崩せば相手の対応も崩す事が出来る。アルト。お前が戦つとるんはかくとうタイプ。格闘家の戦い方は、ただ技を放つだけとちやうで」

少し、カチンときた。

リズムの事とか、はじめて知る事が出来た事もある。この戦いで、たしかに俺は成長出来ている。きっと、彼と戦う前には出来なかった事や、浮かばなかった発想が出来るようになっていし、浮かぶようにもなっている。

だけど、それとこれとは話が違う。

「ヴォルフはやさしいね」

さつきも言った事だ。このバトルは彼の優しさに満ちあふれている。

まさに、俺を成長させる為のものだ。

「アルト？」

まるで、学校の授業みたいだ。

「ふざけんなよ、おまえ」

俺達が戦っているのはポケモンリーグだ。

最強を決める為の決戦場。

石と石をぶつけ合う事で一つの宝石を磨き上げる戦いの祭典。

それなのに、懇切丁寧に技術を説明しながら披露する？

あまつさえ、仕留められた攻撃を実行せずに相手が立ち上がるまで待っている？

「スピアー」

「スピ」

彼は恩人だ。

優しい人だ。

だけど、だからこそ、許せない。

「ダブルニードル」

「スピ」

「なっ!？」

刹那の間にエビワラーへ肉薄したスピアーはダブルニードルを発動した。

咄嗟にエビワラーはスピアーのニードルを受け流そうとしたけれど、そうはいかない。

受け流す為には横から力を加えなければならない。そして、微かにズレた軌道に合わせて体を逸らせる必要がある。その為に要する時間は一秒の数百分の一にも満たない。

『エ、エビワラー、戦闘不能!』

その時間すら与えなければ、受け流すという技術は使えない。

「あ、アルト……」

ヴォルフが呆然とした表情で俺を見ている。

「もう、君は要らない。本気で戦う気のない人間とのバトルなんて、何の意味もない」

ヴォルフが次に繰り出したのはサワムラー。

だけど、もう勝敗は決している。

「ミサイクルばり」

「スピ」

先手を打とうとしたのだろう。マツハパンチを繰り出してきたサワムラーの足元にミサイルばりを撃ち込んだ。態勢が崩れたサワムラーの急所をスピアーはダブルニードルで抉る。

「サ、サワムラー!?!」

「つまらない」

楽しみにしていた。それなのに、裏切られた。

『サワムラー……、戦闘不能』

ヴォルフは次のポケモンを繰り出す。

ポケモンリーグは準決勝までは三対三。

彼の最後のポケモンはカポエラーだった。

エビワラー、サワムラーと共にバルキーから進化するポケモン。

頭部のツノで自重を支え、自由となった腕と足で攻撃を繰り出す変則的なポケモンだ。

「ドリルライナー」

けど、その特徴故に移動速度がエビワラーとサワムラーに比べて低すぎる。

小手先の技なんて、使わせない。

『カポエラー、戦闘不能! 第一試合はアルト選手の勝利です!』

試合の終了を告げるアナウンスと共にスピアーをモンスターボールへ戻す。

「アルト!」

ヴォルフが声を掛けてきたけれど、耳を貸す気になれない。

真剣勝負で技術指導なんて、舐めるにも程がある。

そのまま、ヴォルフに背中を向けて、俺は移動装置に乗って部屋へ戻った。

第四話 『バレット』

「ヒデエもんだな、ありゃ」

リールジムのジムリーダー、ルーラーはテレビの画面を見つめながら呟いた。

そこには啞然とした表情を浮かべるヴォルフと、つまらなそうにフィールドを去っていくアルトの姿があった。

こうなることは分かりきっていた。

リールシティ

この街でヴリル教団が引き起こした事件。

あの時から、ルーラーは気付いていた。

強大な敵と戦い続けることの意味。

負ければ苦痛と屈辱を味わい、勝てば甘美な愉悦に満たされる。

勝利という美酒に酔わない人間などいない。

相手が強者である程に、その味わいは深みを増していく。

アレは力に取り憑かれた人間の顔だ。

美酒を味わい過ぎた者の末路。

常に乾きを覚え、新たな美酒を求め続ける亡者だ。

ジムに現れた時、既にその兆候は現れていた。

ギラギラとした眼光。とても、子供の作る表情ではなかった。

他の二人と比べても、勝利を掴み取ろうとする意志が特に強かった。

「けどよ、ガキ。その乾きは、最強の座を勝ち取っても消えないぞ」

ルーラーは元々、群雄割拠のバトルタワーのレコードホルダーだ。

その頃の彼女は最強を手にかけていた。

雲よりも高い位置に自室を与えられた彼女は、ずっと乾き続けていた。

たまに骨のあるトレーナーが挑みに来ても、自分に並び立つ程ではなく、それ故に満たされない。

「世界が少しずつ色褪せていった。

勝つて当然の勝利では意味がない。

勝つか負けるか瀬戸際の勝負を制した時の勝利にこそ価値がある。

それ以外の戦いは、心底つまらなかった。

まさに餓鬼道。一度堕ちれば、永劫終わらぬ苦痛に苛まされる。

「そこに行き着いちゃったヤツ。それがザラクだ。そんなヤツに、あのガキは憧れちゃった」

ザラクが『歩く災害』と呼ばれるようになったのは、目に留まった強いトレーナーに片っ端から勝負を仕掛けたからだ。そして、そのトレーナーの限界を超えた限界を求め続けた。

そのせいで、多くのトレーナーが再起不能になった。

「乾ききったヤツと、乾きそうなヤツ。そんな二人をぶつけ合うなんて、正気の沙汰じゃないぞ、ヴォルフ……」

ルーラーはヴォルフに救われた。

戦い以外のもので彼女を満たしたからだ。

けれど、ザラクは既に手遅れだ。ヴォルフがルーラーに与えたものと同じものを誰かが与えても、もう救われない。

罅割れる程に乾燥してしまった大地には、恵みの雨も意味を為さない。

第四話『バレット』

「もったいねーの」

アルトとヴォルフの試合を見て、オレが思ったことはそれだけだった。

かつて、共に挑んで負けた相手。その相手に勝利したのに、アルトの顔は実につまらなそうだ。

「楽しまなきや損だぜ？ アルト」

本気を出さない相手はつまらない？ それなら、本気を出させればいい。

アルトはワガママだ。

あの試合、そもそもカラマネロを出せば完封出来ていた。

あのエビワラーのスピードも、トリックルームを使えば封じ込められる。後はこうかばつぐんのエスパータイプわざで決めればいい。

それなのにスパアーを出して、何度もしスクを背負った行動を取っていた。

要するに、アルト自身が本気とは程遠かったわけだ。相手を踏み台としか思っていない。

それで相手にばかり本気を求めるのだから困ったものだ。

「さて、次はオレの番だな」

トーナメント表の組み合わせは完全なランダムだ。だから、希望通りとはいかない。

どうせなら、決勝戦で華々しく戦いたかった。

この試合に勝てば、次がアルトだ。

「ワクワクしてくるじゃねーか」

アイツにつまらなそうな顔をされたら、たぶん、しばらく立ち直れない。

だから、アイツを心底ワクワクさせたい。

「さあ、行くぜ！ レントラー！」

「ガウッ！」

バトルフィールドにレントラーを解き放つ。対する敵は、特に因縁などない赤の他人。

筋骨隆々のおっさんだ。

使うポケモンのタイプも、どんな修羅場を超えてココに立っているのかも分からない。

だからこそ、面白い。

「……先にポケモンを出すということは、相手にアドバンテージを与えるということだ。それを理解しているのか？」

ギロリと睨んでくる。

「当然！」

先にポケモンを出せば、相手は相性の良いポケモンを繰り出してくる。自分を不利にする行為だ。だから、公式戦では基本的に相手と同時にポケモンを出す。

「来いよ、おっさん。楽しもうぜ、このバトル！」

「……ああ、気に入った！ 楽しもうではないか！」

おっさんがハイパーボールを投げる。飛び出してきたポケモンは

ドサイドン。

当然の如く、でんきを無効化するじめんタイプが出てきた。しかも、ドサイドンはでんきエネルギーを自分のパワーに変える力も持っている。

「遠慮はせん！ 躊躇いもせん！ 油断もせん！ ワシの名はゾディアック！ バトルタワーの現レコードホルダーである！」

思わず口笛を吹いた。レコードホルダー。それはリールシティで戦ったルーラーが持っていたもの。バトルタワーで最強を誇るトレーナーという証。

つまり、大当たりを引き当てたということだ。

『それでは、第二試合！ バレット選手対ゾディアック選手！ 試合開始です！』

実況による開戦の宣言と共にゾディアックが笑う。

「ゆくぞ！」

「ボルトチェンジ！」

「ぬぁにい!？」

その笑顔が驚愕に変わる。

『おーっと、バレット選手！ いきなりのボルトチェンジ！ そして、代わりに飛び出してきたのはマリルリだーっ！』

「ルリッ！」

レントラーを先に出したのは、でんきタイプに強いポケモンを出させる為だ。

でんきタイプに強いポケモンといえばじめんタイプ、あるいはドラゴンタイプ。

マリルリはその両方にアドバンテージを取ることが出来る。

仮に読まれて、相性を無視したポケモンを出されたなら、そのままレントラーを使えばいい。

「いくぜ、レコードホルダー！」

ルーラーには三人がかりだった。しかも、奇策に奇策を重ねて、感情に振り回されていたルーラーに対して、ギリギリで競り勝った。

そのルーラーの後釜だ。最初からトップギアでいく。

「アクアジェット！」

「ルーリイツ！」

みずを纏いながらドサイドンに向かっていくマリルリ。

「ストーンエッジ！」

ドサイドンが地面を踏みしめ、次々に岩の刃を生み出していく。

「地面を蹴れ！」

「ルーリツ！」

オレのマリルリはちから自慢だ。アクアジェットの軌道を無理矢理変えて、ストーンエッジを避ける。

「そこだ、ドサイドン！ つのドリル！」

けれど、それは相手も読んでいた。避けた先を狙いすまし、一撃必殺を狙ってくる。

「そこだ！ アクアテール！」

「ルーリツ！」

アクアジェットを解除して、迫り来るつのドリルにアクアテールのカウンターをぶちこむ。

こうかはばつぐんだ。

「一撃必殺のつのドリルを欠片も恐れずに……、見事だ」

倒れたドサイドンをゾディアックが戻す。

「強いな、貴様」

「まだまだだ。こんなもんじゃねーぞ、オレは」

なんとと言っても、オレは最強になるヤツをワクワクさせないといけないんだ。

だったら、こんな所で躓いてなんていられない。

「征けい、ジバコイル！」

「ジバ」

ゾディアックの二番手はジバコイル。

みずタイプにでんきタイプ。

しかも、ジバコイルにはマリルリのもう一つのタイプであるフェアリーのわがが通じにくい。

定石を外さない奴だ。

「チャージビーム！」

でんきの束がマリルリに襲いかかる。

「避ける！」

「ルリッ！」

マリルリはギリギリで避けられたが、チャージビームは単なる攻撃技じゃない。

攻撃と同時にでんきエネルギーを自身に溜め込んでパワーアップするわざだ。

チャージが完了するまでの一瞬の間に考える。

「マリルリ！ やるぞ！」

「ルリッ！」

オレの考えを汲み取り、マリルリはガッツポーズを決めた。

これはマリルリに負担を強いる作戦だ。それでも、マリルリは恐れずに乗ってくれた。

「はらだいこー！」

「ルリッ！」

はらだいこは攻撃力を最大までた高める技だ。けれど、攻撃力を高めている間は無防備を晒してしまう。パワーの上がつているジバコイルの攻撃を受ければ、一撃でノックアウトしてしまう可能性だってある。

「ジバコイル！ かみなりだ！」

案の定、最大威力のでんきわざが来た。

「ルッ、ルリイイイイッ！」

けれど、マリルリは膨大なでんきエネルギーを浴びせられながらもはらだいこを続けた。

マリルリはオレが最初にゲットしたポケモンだ。

子供の頃はずっと一緒に遊んでいた。だけど、メルカトが滅びた日、おとなしい性格のマリルリはモンスターボールに閉じこもるようになってしまった。

だから、旅に出た日、オレはマリルリと一緒に逃げ延びた人に預けた。

「マリルリ、アクアジェット！」

「ルリイイイイイイイッ！」

預けている間、マリルリはずっと寂しそうにしていたらしい。それでも、置いていったオレをずっと待っていてくれた。

三ヶ月前、ようやく迎えに行つた時、泣きながら抱きついてきた。ポケモンリーグに出たいと言うオレに、付いて来てくれた。

この三ヶ月で、忙しい中で特訓に使ってくれたナザレ様が太鼓判を押ししてくれる程、強くなった。

「むう!? リフレクター！」

「ぶち破れ！」

「ルリイイイイイイイッ！」

「ジバツ!？」

ジバコイルが張つたりリフレクターが割れる。そして、アクアジェットはジバコイルを捉えた。

吹き飛ばすジバコイル。

「10まんボルト！」

「させるかよ！」

でんきを放つ暇なんて与えない。

体勢を立て直す前にマリルリはジバコイルに肉薄した。

「アクアテール！」

「ルリ！」

強烈なアクアテールが急所を直撃し、ジバコイルは地面に叩きつけられた。

『ジバコイル、戦闘不能!』

これで二体目。残りは一体だ。

「ルリッ！」

二体のポケモンを倒した直後だというのに、マリルリの眼から闘志は消えない。

「ああ、このまま勝つぞ! マリルリ！」

「ルリ！」

「そうはいかんで、若造！」

ゾディアックが最後に繰り出したのはフシギバナだった。

他に相性が良いポケモンがいなかったのか、それとも、そのフシギバナがエースなのか、オレには分からない。

ただ一つ言えることは、ゾディアックがミスを犯したことだ。

「もう、マリルリは限界だ！ 一気に倒すぞ、リーフストーム！」

「ッハー！ やるぞ、マリルリ！」

服の袖をめくる。

「なっ!？」

ゾディアックの驚愕の声が響く。

それはリーフストームの直撃を受けながら涼しい顔をしているマリルリに対してか、

それとも、オレの腕にあるZリングに対してか、

「ナザレ様。あなたに頂いた力、今ここで！」

リーグに出場することを決めたオレに、ナザレ様はこれをくれた。

「いくぞ、ゾディアック！ これがオレ達の全力だ！ 『スーパーアクトルネード』！」

Zわざが炸裂する。膨大なみずのエネルギーに押し流され、フシギバナはフィールドの外へ吹き飛んでいき、そのまま壁に激突した。

『ふ、フシギバナ、戦闘不能！ この試合、バレット選手の勝利です！』

オレは眉間にシワを寄せているゾディアックにサムズアップした。

「楽しいバトルだったぜ！ またやろう！」

「……ああ、それまでに鍛え直しておく」

オレは天井付近に並ぶ選手用の個室を見上げた。どこにいるかはわからない。だけど、どこかにはいる。

「さあ、アルト。ワクワクさせてやるから、楽しいバトルをしようぜ」

第五話 『エリザベス』

アルトもバレットも見事に一回戦を勝ち抜いた。相手はどちらも名の知れた猛者。

ヴォルフは言わずもがな、バレットが戦ったゾディアックもバトルタワーのレコードホルダーだ。

レコードホルダーという肩書は生半可なものじゃない。それはバトルタワーで最高の記録を残した者の証だからだ。

レコードと一口で言っても種類が分かれる。

例えば、それは対戦回数であったり、勝利回数であったり、連勝記録であったり。

リズムのジムリーダー、ルーラーの持っていたレコードは連勝記録だ。この記録は、未だに塗り替えられていない。

ゾディアックの持っていた記録は連勝記録以外のいずれかだ。

ピンキリとは言わないまでも、連勝記録と比べれば他の記録は見劣りする事だろう。

けれど、もつとも簡単に手に入る対戦回数でも、十万回を超えなければならぬ。そのレコードホルダーはバトルタワーの老獪と言われるザラという女性だ。彼女を超える為には初老に差し掛かっているゾディアックでも不可能だろう。

それ以外となると、更に難易度は跳ね上がる。

「そんな相手に勝利したわけですから、バレットも相当に強くなっていますね」

それも、一体のポケモンによる三連続勝利。

結果だけでなく、過程から見ても圧勝だった。

「……わたし、だって」

アルトにわたしを見てもらいたい。

だけど、トーナメント表はわたしとアルトを正反対の場所に寄り分けた。

戦えるとしたら、決勝戦。

その前に、わたしはアギトと戦わなければいけない。

アギトは強い。出会った時から、隔絶した力を持っていた。それでも、戦う前から諦めるなんてナンセンス。

この三ヶ月、わたしだって怠けていたわけじゃない。

「次はアクセルの試合ですね」

テレビに映っているのはアルトの幼馴染の少年、アクセル。

彼もまた、同い年とは思えない程の力量を持ったトレーナーだ。

彼の対戦相手はエリートトレーナーのシャーロット。エリートトレーナーの肩書はゴールドのクラスにあがる事で得られるものだ。

ミリガン、ドロシー^{おねえちゃん}、レムハザード、ナザレだけが持つブラックに次ぐランク。それが、ゴールド。それを持つという事は、その者がアガリア地方に多大な貢献を為した熟練のトレーナーという事を示している。

それなのに、アクセルは圧倒的な力で完封してしまった。

群雄割拠。そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

その後、アギトも危なげなく二回戦に駒を進め、それからしばらく経って、わたしの手番が来た。

わたしは自分がポケモントレーナーとして凡才である事を自覚している。

今までの勝利の数々はフリーザーの力に頼つてのものばかり。

そのフリーザーを置いてきた。

それでも、勝たなければいけない。

アルトにわたしのバトルを見てもらうために。

第五話『エリザベス』

バトルフィールドに移動すると、対面に経っていたのは年上の女性だった。ずいぶんと露出が多い。中々のボン・キュツ・ボン。

「……また、ガキか」

女性は深い溜め息を零した。

人の顔を見てため息をつくとは失礼な人だ。

「なんですか、いきなりー」

「アンタで五人。その歳でポケモンリーグに出場するトレーナーなんて、早々いない筈なのに、どうなってるのかねえ」

まるで探るような眼差しだ。

「まあ、他の連中が負けた理由は油断だろうね。だけど、わたしは他の連中のように無様を晒すつもりはないよ。そもそも、あのザラクが目をかけているってガキも十歳らしいじゃないか。年齢で相手の力量を見誤るなんて、呆れるよ」

中々に性格がキツそうな人らしい。けれど、彼女の言葉はもつとものだ、

ヴォルフはともかく、バレットやアクセル、アギトの相手は明らかに実力を発揮し切れていなかった。理由は彼女の言う通り、年齢だろう。

「いいかい？ ザラクと戦うのはわたしなんだ！ アイツに敗北してから、わたしは今日まで研鑽を重ねて来た！ アンタみたいな乳臭いガキを相手に躓いている暇はないんだよ！」

なるほど、彼女はザラクの被害者の一人らしい。

『第一回戦、最終試合、レイフォン選手対エリザベス選手の試合を開始します！』

実況の言葉と共にレイフォンがモンスターボールを構える。

「わたしも一体目を選んだ。

「ガキはさっさとお家に帰りな！ いけ、アブソル！」

「シャア！」

「いきなさい、マニニューラ！」

「ニユラッ！」

二体のポケモンが飛び出す。

「油断はしない！ だから、最初から全力でいく！ アブソル、メガシンカ！」

「シャア！」

「なっ!？」

レイフォンが掲げた腕とアブソルの首元から眩い光が迸る。

メガストーンだ。

『おーっと！ レイフォン選手、いきなりのメガシンカです！』

メガアブソル。初手からとんでもない切り札を出してきた。

「アブソル、あくのはどう!」

「シャアアツ!」

放たれたあくのはどうは余波でフィールドの地面を削りながらマニニューラへ襲いかかる。

どうやら、口だけの女ではないようだ。

安心した。

「ありがとうございます、レイフォン!」

「は?」

マニニューラが走り出す。

「シャドーボール!」

「ニユラツ!」

マニニューラは手元にシャドーボールを留めながら跳んだ。

「馬鹿がつ!」

あくのはどうを跳び越そうとしたマニニューラに向けて、アブソルはあくのはどうの軌道を変える。

それを待っていた!

「マニニューラ!」

「ニユラ!」

マニニューラは留めたままのシャドーボールをあくのはどうにぶつける。けれど、破裂はさせない。接触状態のまま、尚も形状を留め続ける。それによって、エネルギー同士は反発し合う。

マニニューラは逆立ち状態のまま、まるでシャドーボールをスノーボードのように使って、あくのはどうという波を滑り始めた。

「なっ!?!」

「シャア!?!」

あくのはどうを滑り降り、一気に肉薄したマニニューラは留めていたシャドーボールのエネルギーを解放する。

炸裂したエネルギーにアブソルは仰け反った。

「ここです!」

マニニューラは右腕にエネルギーを集中する。

「避けなさい、アブソル!」

「逃がしませんよ！ きあいパンチ！」

回避行動を取ったアブソル。だけど、直前に仰け反ってしまった為に、その動きは緩慢だ。

マニニューラは地面を蹴り、アブソルが回避した方向へ先回りした。きあいパンチが炸裂する。

こうかはばつぐんだ。

「シャ……、アア」

苦痛に顔を歪めるアブソル。

「クソガキがあ！」

「終わりです！」

「ツクソ、みらいよち！」

「シャア！」

「なっ!？」

マニニューラがトドメの一撃を与える直前、アブソルの瞳が虹色に輝いた。

そして、眼前に迫るマニニューラではなく、別のなにかを見た。

「え？」

アブソルが見た方角。そこに、小さな穴が空いていた。

その先に、一瞬だけ白い影が見えた。けれど、角度のせいか、その正体がわからない。

「ニユラッ！」

そうしている間に、マニニューラはアブソルを仕留めた。

同時に、アブソルが開いたららしい穴も閉じた。

みらいよち。奇妙奇天烈奇々怪々なるエスパークタイプのわざの中でも、このわざの不可解さは指折りだ。

未来に攻撃を送り込む。わざとしての説明はこうだ。

けれど、それをどうやって行っているのかに関してはいくつかの諸説がある。

ある学者によれば、このわざは一定の間だけ異空間に攻撃を隔離して、その後に隔離空間から呼び戻す技との事。

ある学者によれば、わざの構築を敢えて遅らせる事により、時間差

攻撃を行う技との事。

ある学者によれば、時空を操作して、一時的に未来と現在をリンクさせている技との事。

異空間、時の制御。これらの突飛な説も、ポケモンならばありえる。異空間を泳ぐポケモンや、時を渡るポケモンは実在するし、世界の理さえ塗り替える力を持つポケモンさえ存在する。

「……みらいよち。実際に見たのは初めてです」

「あら、そうなの？ まあ、見た事があっても無意味よ。わたしのアブソルのソレは別格だから」

「別格？」

「そう、別格。みらいよちってわざはエスパークタイプであっても極僅かなねんりきを送り込む事しか出来ない。だけど、わたしのアブソルは違う！」

レイフォンはバンギラスを繰り出してきた。

「……その違い、教えてはくれないんですか？」

「教えるわけないだろ、バーカ」

バンギラスがマニニューラめがけて走り出す。

「そんな鈍重な動きで！」

「ニューラ！」

マニニューラをかみくだこうと口を開いたバンギラス。その大口に、マニニューラは軽快な動きで接近し、れいとうパンチを叩き込む。

「そういうところがガキなんだよ！」

「なっ!？」

いきなりバンギラスの動きが変わった。マニニューラのれいとうパンチは空を切り、その腕を捕まれ、攻撃の勢いをそのまま利用されて地面に叩きつけられた。

「イカサマ!？」

「わざじゃない、技術だ！」

バンギラスがはいこうせんを放つ。

「避けて！」

「ニュツ!？」

マニニューラは避けられなかった。
はかいこうせんが直撃した。

『マニニューラ、戦闘不能!』

マニニューラが負けた。

アルト達は一体のポケモンで相手のポケモンをすべて倒しきつたのに。

「ユキノオー!」

「オオオオオオツ!」

ユキノオーを繰り出す。その身に纏う冷気が空気を凍結させ、あられに変える。

「ウッドハンマー!」

「オオオオオオツ!」

「ストーンエッジ!」

「ギャオオオオツ!」

右腕にくさエネルギーを集中しながらバンギラスに飛びかかるユキノオー。

バンギラスは大地を踏みつけ、岩の刃で迎撃を図る。

「ストーンエッジごと、フィールドを殴りつけて!」

「オオオオオオオオオオツ!」

ユキノオーはウッドハンマーを自身に迫るストーンエッジごとフィールドに叩きつけた。

激しい衝突音と共に土煙が舞い上がる。

「奇策に走ればいいってもんじゃねーんだよ!　じしん!」

「ギャオオオオオオオ!」

バンギラスが大地を踏みつける。すると、フィールド全体が大きく揺らめいた。

「オオオオオオツ!」

土煙の向こう側からユキノオーの苦悶の音が響く。

「ユキノオー!」

「そこだ、バンギラス!」

未だに土煙が舞う中で、レイフオンはまっすぐにユキノオーのいる

場所を指さした。

「まさか、さっきのみらいよちで!？」

「いわなだれ!」

「ギャオオオオオオツ!」

「こ、こつちもいわなだれ!」

「オオオオオオオツ!」

バンギラスのいわなだれに対して、ユキノオーもいわなだれを放つ。

「はかいこうせん!」

「あつ……」

いわなだれで迎撃したユキノオーに、バンギラスは容赦のないはいこうせんを放った。

『ユキノオー、戦闘不能!』

「そんな……」

二体目も倒された。残りは一体。

「ほら、モタモタしてないで、さつさと最後のポケモンを出しなよ。それで、アンタのポケモンリーグは終了さ」

レイフオンの言葉が胸に突き刺さる。

終わってしまう。まだ、何も見せられていないのに。

体が震える。こんな体たらくでは、アルトの関心を失ってしまう。

つまらない存在と思われて、もう視界にすら入れてもらえなくなる。

イヤだ。イヤだ。イヤだ。イヤだ。イヤだ。

「レジアイス!」

「ピコピコ、ピコ」

終わらない。

終わりがたくない。

終われない。

「わたしは勝つ! だから、レジアイス!」

周りの音が消えていく。

レイフオンの声、バンギラスの声、実況の声、観衆の声、風の音、す

べてが消える。

代わりに視覚が研ぎ澄まされていく。

「ピコピコ」

繰り返すわざを決めた瞬間、レジアイスは動いた。

ラストーカーノンが放たれる。それは、今から命じようと考えていたわざ。

言葉にする前に、レジアイスはわたしの思考を読み取っていた。

そして、気付いた。

レジアイスの姿が、通常のものから変化している事に。

『こ、これは!? 伝説のポケモンであるレジアイスがメガシンカした!?』

聴覚が機能を取り戻し、実況の声が聞こえた。

眼の前には倒れ伏したバンギラス。その向こうには啞然としているレイフオン。

「眼の前……?」

顔に手を触れると、わたし自身の手とは別に、氷で出来たレジアイスの手も見えた。

これが意味する事は一つしかない。

キズナ現象だ。

「でも、どうして?」

キズナ現象は王の力だ。

ヴリル王の血縁者でもないわたしには使える筈のない技。

「ピコピコピコ」

脳裏に奇妙な声が響く。

《マスター・エリザベス嬢ジュラ。命令を要請》

「えっ?」

戸惑っていると、レイフオンが最後のポケモンを繰り出した。

「やってくれるじゃない。伝説のポケモンを持ち出すなんて、正直驚かされたよ。だけど、わたしの勝利は揺るがない!」

彼女の最後のポケモンはヘルガーだった。

「ガールルルル」

警戒心を露わとしているヘルガー。

その時、再び脳裏に声が響いた。

《種族名・ヘルガーを確認。迎撃態勢に移行。命令を要請》

まさか、この声はレジアイスのもの？

あまりにも機械的で、生き物というより、ロボットのようだ。

《ヘルガーの口内にはのおエネルギーの集中を確認》

「まずっ」

避けて。そう叫ぶ前に、レジアイスは回避行動に移っていた。

その直後、かえんほうしゃがレジアイスのいた場所を襲う。

《命令を要請》

本当に、思うだけで命令が伝わるようだ。

これがアルト達の力。

「クソツッ！ 伝説を操っているからって、思い上がるんじゃないよ！」

ヘルガーがいきなりレジアイスから距離を取った。

「にほんばれ！」

「オオオオオオオン！」

日差しが強くなった。

まずい。戸惑っている場合じゃない。

ヘルガーに対して、レジアイスのわざはどれも通りにくい。受け身

に回れば一方的にやられてしまう。

「ピコピコピコ」

レジアイスはラスターカノンを放った。

「オーバーヒート！」

「オオオオオオン！」

強くなった日差しがヘルガーの放つほのおタイプのわざの威力を上げている。

ラスターカノンを呑み込んで、ヘルガーのオーバーヒートがレジアイスに迫る。

回避は間に合わない。

「こういう時、アルトならー！」

避けられないなら、避けない。

レジアイスはれいとうビームを放った。こおりとほのお。相反するエネルギーのぶつかり合いは一瞬の均衡の後、巨大な爆発を起こした。

爆心地付近にいたレジアイスはわたしの目の前まで吹き飛ばされてしまった。

「だけど、それでいい。それがいい！」

理由はわからない。だけど、王の力が使えるなら、アレが使える筈だ。

「いきますよ、レジアイス！ わたしの心を、この一撃に！」

膨大なこおりエネルギーがレジアイスを包み込む。

「させるな、オーバーヒート！」

ヘルガーがオーバーヒートを放つ。

「だけど、距離が離れすぎている。もう、この技は止まらない。」

「放ちなさい！ レイジングジオフリーズ！」

本来のレジアイスの必殺技であるふぶきすら上回る極大のこおりエネルギーが放たれた。

ラスターカノンすら呑み込むオーバーヒートを呑み込みながら、ヘルガーに命中する。

「へ、ヘルガー!?!」

巨大な氷に閉じ込められたヘルガーは身動き一つ取れなくなり、そのまま意識を失った。

『へ、ヘルガー、戦闘不能！ この試合、エリザベス選手の勝利です！』
勝った。

偶然発現した王の力に頼り切った勝利だけど、なんとか勝てた、へたり込みながら、心底安堵した。

まだチャンスがある。アルトに見てもらおうチャンスが。

「おい、ガキ」

レイフォンが近づいてくる。

「なんだ、あれは？ レジアイスのメガシンカなんて聞いた事がない。それに、メガシンカにしても、メガストーンはどこだ!? それに、Zわざまで！」

彼女の顔に浮かぶもの。それは困惑と怒りだった。まるで、ゲームでイカサマをされたかのように彼女は不快そうな表情を浮かべている。

「き、キズナ現象ですよ。知らないんですか？ 最近、ブームなんですよ？」

「きずな現象だと？」

その時だった。実況の声が響く。

『たった今、エリザ選手の行ったメガシンカとZわざに関する情報が入りました！ これらは最近になってカロスで発見された新たな進化の形、『キズナ現象』によるものだそうです！』

実況の解説を聞き、レイフオンは舌を打つ。

そして、わたしをにらみつけると、そのまま去って行った。

後味は最悪だ。彼女の気持ちも分かる。だけど、勝ちも勝ちだ。

「ピコピコ」

《戦闘終了》

「……おつかれさまです」

レジアイスをボールに戻して、わたしはよろよろと移動装置へ戻った。

第六話 『幕間』

一回戦のすべての試合が終わった。日はすっかり暮れてしまっている。

今日の試合は終わり、観客達もスタジアムから撤収して、最寄りのホテルなどに戻っている。

「エリザ。なんだか、焦ってたな」

直前のエリザの試合を思い出す。普段の彼女らしくない戦い方だった。

まるで、川に流されそうになりながら、必死に藁を掴もうとしているかのようで、心配になった。

「ちよつと、出てみようかな」

移動装置に乗って、外に出る。

ポケギアを起動して、エリザの名前をタップする。

しばらく待つと、スピーカーからエリザの声が聞こえてきた。

『ア、アルトですか!?! ど、どうしたんですか!?!』

やっぱり、様子がおかしい。なんだか、慌てているようだ。

「エリザ。一緒に散歩に行かない? 屋台が出てるみたいなんだ」

『さ、散歩ですか!?! 行きます! すぐに行きます! 行きますから、待ってて下さいよ!?!』

「う、うん。待ってるね」

ポケギアの通話アプリをオフにしながら、首を傾げる。

「俺から誘ったんだから、そんな念を押さなくても待ってるのに」
しばらく待っていると、エリザが出て来た。

「アルト! おまたせしました!!」

移動装置に乗ってきた筈なのに、何故か肩で息をしているエリザ。

「大丈夫?」

「へっちゃらです! ノー・プロブレムです!」

「そっか」

やっぱり、今日のエリザは少し変だ。笑顔を浮かべているけれど、なんだか強張っている。

妙に辺りを気にして視線を揺らしている。

「行こうか」

「は、はい！」

この三ヶ月の間に何かあったのかもしれない。

「エリザは何を食べたい？」

「そ、そうですねー、りんご飴がいいですかね！」

「あるといいね」

「はい！ アルトは何が食べたいですか？」

「俺はわたあめ」

厄介事に巻き込まれているのか、それとも他に理由があるのか。

一緒に屋台を回っている間に事情を話してくれる事を期待しよう。

第六話『幕間』

なんなんですか？ いきなり、なんなんですか？

いきなり電話を掛けてきたかと思えば、屋台を一緒に回ろう？

大慌てで用意して出口までやって来ると、そこにいたのはアルト一人。

バレットやアギトの姿はない。呼ばれたのはわたし一人だ。

「懐かしいね」

「え？」

アルトは屋台を見ながら言った。

「ユニオンを思い出すよ。大会の前に一緒に屋台を回って、そこでバレットに会ったんだよね」

「そうでしたね」

言われて思い出した。

あの時も、大会を前に腹ごしらえをする為に二人で屋台を回った。

「エリザ」

アルトは急に立ち止まると、真剣な眼差しを向けてきた。

まさか、これは！

「ありがとう」

「え？」

告白じゃなかった。

「俺、あの日、あの時にエリザと出会えてよかった」

アルトは言った。

「時々、思うんだ。あの時、エリザと出会わなかったら、自分はもうなっていたんだらうって」

「わたしと出会わなかったら?」

「きつと、俺はユニオンには向かわないで、そのままオーヴェルに行っていたと思う。そこで、ヴァイクに世話を焼かれていたと思う。バレットやアギトに出会わず、アクセルが来るまで、ずっとオーヴェルで自分を鍛えていたかもしれない」

アルトはポケモンリーグの会場を見つめながら言った。

「それはそれで、強くなれたかもしれない。現に、アクセルはすごく強くなっていたしね」

言われてみると、わたしと出会わなければ、アルトはもっと安全に、もっと強くなれていたのかもしれない。

とんだ疫病神だ、わたし。

「……ごめんなさい」

「え? どうして謝るの?」

「いや、だって……」

アルトはクスリと微笑んだ。

「言ったでしょ? 感謝してるんだ。エリザやみんなと一緒にだったから、俺は楽しかった。みんな、いつだって全力だったから」

再び歩き出しながら、彼は言った。

「俺が旅に出たのは強くなりたかったからなんだ。ヴェゼール・ヴィレッジが襲われた夜に見た、ザラクとミリガンの圧倒的な力に魅せられて、ああいう風にバトルがしたいと思った。だけど、それだけだったんだ。漠然とゴールだけが見えていて、そこまでの道のりがまったく見えていなかった。ただ、闇雲にジムを回ろうとしていたんだ」

それは、アルトが特別なわけではない。むしろ、大抵のトレーナーは強くなりたいからジムを回る。そういうものだ。

「エリザ達と出会って、旅の目的が出来た。強くなりたい理由も増えた」

「理由ですか？」

「うん。俺はエリザを守りたいと思ったんだ」

「ほえ!？」

不意打ちだ。いきなり過ぎて顔が真っ赤になってしまった。

「それに、バレットの故郷であるメルカトを解放したいと思った」

一瞬で茹でダコになってしまったわたしに気づかないまま、アルトは言う。

「ヴリル教団は解体されたし、メルカトも解放された。それでも、みんなが困っているなら助けたい。その為に、もつともつと強くなりたい。そう思えるようになったんだ」

初めて聞いた。アルトが力を求める理由を。

「だから、エリザ」

アルトは立ち止まり、わたしを見つめた。

「困っている事があったら、いつでも言っよ。どんな事でも、力になるから」

恋する乙女に対して、なんて事を言うんだらう。

「どんな事でも、ですか？」

「うん！ エリザの為なら、なんだってする」

脳筋の癖に！

ミリガンの事が好きな癖に！

ますます好きになってしまうような事を言わないで欲しい。

「じゃあ、お願いがあります」

わたしは言った。

「なに？」

「わたしを見ていて下さい」

「え？」

アルトは戸惑っている。それはそうだろう。いきなりこんな事を言われて、困惑しない人間なんて、早々いない。

それでも、わたしが口に来る言葉はこれだけだった。

「明日のバトルも、その後のバトルも！ 負けるかもしれないけど！ 無様な姿を晒すかもしれないけど！ でも、わたしはあなたに見て

いて欲しいんです！」

「エリザのバトルを見ない筈がないだろ？」

不思議そうに、アルトは言った。

「ほ、本当ですか？」

「うん。俺はエリザを見るよ。なにがあっても、絶対に！ だから、泣かないですよ」

「え？」

言われて、自分が涙を零している事に気がついた。

「あ、あれ!? っ、ごめんなさい！ これ、違くてですね！」

慌てて目元を袖で擦る。

なんて、情けない。不安だからって、涙を流すなんて……。

「エリザ」

アルトは言った。

「りんご飴、食べに行こうよ！」

そう言っつて、彼はわたしの手を掴んだ。

ユニオン大会の日とは逆だ。あの時は、わたしが彼を引っ張り回した。

「はい、これ」

アルトがりんご飴を差し出してくる。

甘くて美味しい。

アルトからの、二つ目の贈り物だ。

「アルト」

わたしはりんご飴をなめながら呟くように言った。

「なに？」

「わたし、明日は絶対に勝ちます」

「うん。エリザなら大丈夫だよ」

「はい！ 見てて下さいね！」

「うん、もちろん！」

第七話 『ライバル対決！ VS バレット』

停止した移動装置から飛び降りて、バトルフィールドに向かう。
いよいよだ。興奮のあまり、心臓が高鳴っている。

「バレット！」

「アルト！」

互いの名を叫び合う。

ユニオン・シテイで出会った日から、ずっと一緒に旅をしてきた仲間だ。

「キテルグマー！」

「ライチュウー！」

繰り出したポケモンは、あの日に繰り出したポケモン達。

「楽しもうぜ、アルト！」

「うん！」

バレットは本気だ。湧き上がるような闘志を感じる。

『ポケモンリーグ・二回戦！ 第一試合！ アルト選手対バレット選手
の試合を開始します！』

第七話 『ライバル対決！ VS バレット』

オレにとつて、ポケモンバトルはメルカト奪還の為の手段に過ぎなかった。

その考え方が変わったのは、アルト達との旅が理由だった。

時に本気でぶつかり合い、時に背中を預け合う。そうした経験が、オレにポケモンバトルの楽しさを教えてくれた。

だから、照れくさくて面と向かつては言えないけれど、オレは共に旅をして来た仲間達の事が大好きだ。

「しんそくー！」

「ラーイー！」

このバトルは旅の終わりを意味している。この先を歩くものは一人だけ。

だからこそ、悔いは一欠片も残さない。

この旅で磨いた力のすべてをこのバトルで出し尽くす。

「地面に向かってアームハンマー！」

「舞い上がる瓦礫を足場にしろ！」

「ジャンプだ！」

空高く舞い上がるキテルグマ。相変わらずのフィジカルに舌を巻く。

アルトの狙いは分かる。跳び上がる事でフィールドを俯瞰してライチュウを捉えるつもりだろう。

「そうはいかない！ かみなりだ！」

「ラアアアイ、チュウウウウツ！」

キテルグマの真下に入り込み、ライチュウはかみなりを発動した。天空に雷雲が渦を巻き、そこから一筋の雷光が迸る。

ライチュウ目掛けて落下して来た雷を、キテルグマは回避する事が出来なかった。

当然だ。雷の速度は音の三倍。見てから回避出来るスピードじゃない。

「今だ！ かみなりパンチ！」

「なにっ!？」

かみなりの直撃を受けた筈のキテルグマが腕に雷を帯電しながらライチュウ目掛けて落ちてくる。ダメージを受けた様子は一切見受けられない。

「しんそくだ！」

「ラーイー！」

間一髪、ライチュウは爆心地から退避に成功した。

そう、爆心地だ。

キテルグマがフィールドに叩き込んだかみなりパンチはフィールド全体に亀裂を入れ、極大のどんきエネルギーを迸らせた。

どうやら、ライチュウのかみなりを利用して、かみなりパンチの威力をブーストさせたらしい。

「さすがだね、バレット！ 今のは完全に不意を打てたと思ったのに！」

「ツハ！ 相変わらず、とんでもない戦法だな！」

「ボルテツカー！」

「ライライライライライライライライライライツ！」

極大のでんきエネルギーを纏いながらエレキボールの直撃を受けたばかりのキテルグマに迫るライチュウ。

「はかいこうせん！」

「キイイイイイイイイイッ！」

「ライライライライライライライツ！」

はかいこうせんがライチュウに命中する。

それでも、ライチュウは足を止めなかった。はかいこうせん直後の硬直状態に陥ったキテルグマにライチュウのボルテツカーが命中する。

キテルグマは目を回しながら倒れた。

そして、同時にライチュウもボルテツカーの反動で倒れてしまった。

『キテルグマ、ライチュウ！ 共に戦闘不能！』

オレ達は互いのポケモンをボールに戻しながら見つめ合った。

「ボルトチェンジ、使わないんだね」

「まあな」

でんきタイプだけに拘るなら、ボルトチェンジ戦法は有効だ。

だけど、ここはポケモンリーグ。一つのタイプだけで戦えるほど、楽な戦場じゃない。

『息も吐かせぬ攻防戦！ さあ、両者！ 次なるポケモンは!?!』

しかも、相手はアルトだ。

スピアー、キテルグマ、ギルガルド、ギャラドス、カラマネロ。六体目はフーパか？

いずれにしても、隙の少ないバランスの取れたパーティだ。

「いくよー」

「いくぜー」

二人同時にモンスターボールを投げる。

飛び出してきたポケモンは、

「ネーロ」

「フリーデインッ！」

カラマネロとフリーデイン。

『おーっと、ここで両者、エスパークタイプのポケモンを繰り出した！』
しくじった。フリーデインなら幅広い相手に対応出来ると思って選
んだけれど、カラマネロとの相性は最悪に近い。

そもそも、カラマネロにはエスパークタイプのわざが通じない。

「サイコカッター！」

容赦のないアルトの指示が飛ぶ。飛んでくるサイコカッターを
フリーデインは軽々避けるが、反撃に移ろうにも、攻撃手段がない。

「フリーデインッ！」

フリーデインが一瞬だけオレをみた。

ポケモンの言葉なんて分からない。アルト達のように、心で想いを
伝え合う事も出来ない。

それでも、一緒に過ごしてきたからこそ、その視線の意味は分かっ
た。

「かなしばりだ！」

「フリーデイン！」

フリーデインは迷うことなく指示に従った。

「ネロッ！」

カラマネロのサイコカッターが止まる。どうやら、うまく封印出来
たようだ。

「トリックルーム！」

「ネーロオオオッ！」

トリックルームが展開される。相変わらず、厄介な技だ。フリーデ
インの動きが目に見えて鈍くなっている。

さりとて、慌ててサイコフィールドで上書きしても、カラマネロを
パワーアップさせるだけで、その隙に痛恨の一撃を食らわされるのが
関の山だ。

だからこそ、オレは、

「どくどくだ！」

「フリーデイン！」

フリーデインは生成した毒を自らあおった。

「なっ!?!」

『なんと!?! バレット選手のフリーデイン！ 何を思ったか、自らの毒を呑み込んだ!』

アルトも実況も驚愕している。おかげで、カラマネロの動きが僅かに鈍った。

「フリーデインッ!」

フリーデインには特別な力がある。自らが受けた状態異常を相手に転写する力だ。

フリーデインは自ら背負った猛毒状態をカラマネロに転写した。

「ネッ!?!」

「カラマネロ!?!」

苦悶の表情を浮かべるカラマネロ。

「よし、フリーデイン！ サイコフィールド!」

「フリーデインッ!」

猛毒に苦しめられながらも、フリーデインはサイコフィールドを展開した。

籠めたサイコエネルギーは最小限。トリックルームを上書きすると、すぐに消えてしまった。

「壊されたら張り直すだけだ！ カラマネロ!」

「ネロ!」

再びトリックルームを発動しようとするカラマネロ。

けれど、少し遅い。

「さあ、フリーデイン！ 全力で逃げろ!」

「フリーデインッ!」

「え!?!」

フリーデインのスピードはカラマネロより上だ。トリックルームさえ展開させずに逃げに徹すればかちからで接近戦に持ち込まれる事はない。

サイコカッターも封じ込めた。

「バレット!?! まさか!」

そのまさかだ。フリーデインもカラマネロも互いに猛毒状態。膠着状態が続けば、いずれは二体とも動けなくなる。

『な、なんと……』

実況が絶句している。それはそうだろう。ポケモンに自分の毒を煽らせて、相手と心中させるなんて、我ながら悪どいにも程がある。

「悪いな、フリーデイン」

「フリーデインッ！」

フリーデインはカラマネロから逃げ回りながら笑った。

大迷宮でゲットしてから三ヶ月、共に過ごす内に分かった事がある。

フリーデインは負けず嫌いだ。だから、負けない為ならどんな手段も躊躇わない。

「フリーデインッ！」

「ああ、わかってる！」

これは、次に繋げる戦いだ。勝てなくても、負けなければいい。次に勝てば、それでいい。

『カ、カラマネロ、フリーデイン、両者ダウン！』

観衆がブーイングを飛ばしてくる。けど、そんなのはどうでもいい。

「さすがだよ、バレット」

アルトは興奮した様子で笑みを浮かべる。まるで、獲物を見つめる肉食獣のようだ。

どうやら、存分に楽しんでくれているらしい。

「ワクワクしてるか？ アルト」

「うん！ とつても、ワクワクしてるよ！」

「そうかそうか。じゃあ、もっとワクワクしようぜ！」

「うん！」

三体目を繰り出す。

「いけ、スピアー！」

「いこうぜ、レントラー！」

モンスターボールから飛び出した二体のポケモンは火花を散らし

合う。

幾度となく共に戦った戦友同士。互いに、エースを張るポケモン。

『さあー… いよいよ三体目同士のバトルです!』

これが、本当に最後のバトルだ。

つい、泣きそうになった。

「バレット!」

アルトが叫ぶ。

いつの間にか俯いていた顔をあげると、そこにはさっきまでの肉食獣のような笑顔ではなく、普段通りの穏やかな笑顔があった。

「楽しもう!」

「……ああ、楽しもう!」

そうだ。寂しがっている場合じゃない。

この瞬間を全身全霊で味わう。その為に、全力を尽くす!

「いくぞ、レントラー! でんこうせっか!」

「迎え撃つぞ、スピアー! ダブルニードル!」

高らかに吠えながら、レントラーが猛スピードでスピアーに接近していく。

対するスピアーは冷静にレントラーの動きを見極めようとしている。

「そのままワイルドボルト!」

「ガウウウウツ!」

でんこうせっかの速度を維持したまま、レントラーは雷霆を纏った。自らの肉体をも傷つける膨大なでんきエネルギーが迎え撃とうとしたスピアーに襲いかかる。

「スピツ!」

間一髪のところではスピアーは回避した。相変わらず、優れた眼力だ。

「逃さねえ! 10まんボルト!」

「ガウウウウウツ!」

ボルトチェンジに回していたでんきエネルギーも同時に放出する。膨大なでんきエネルギーがスピアーに襲いかかる。

「突き破れ！ ドリルライナー！」

「スッピイイイイツ！」

思わず舌を巻く。

降り注ぐでんきエネルギーの豪雨を、スピアーはドリルライナーで突っ切ってくる。

「舐めんなよ！ ワイルドボルト！」

「ガウウウウウウツ！」

「スピイイイイツ！」

ドリルライナーとワイルドボルトがぶつかり合う。その衝撃は烈風を巻き起こし、キテルグマのアームハンマーによって亀裂が走っていたフィールドは完全に粉碎してしまった。

「でんこうせつか！」

レントラーは舞い上がった岩石を足場に、スピアーの周囲を縦横無尽に駆け巡り始めた。

「ス、スピッツ!？」

「惑わされるな！ 集中しろ！」

レントラーの動きに戸惑っていたスピアーはアルトの声で即座に冷静さを取り戻す。

本当に、いいコンビだ。

「ほのおのキバ！」

「ダブルニードル！」

レントラーのほのおのキバをスピアーは両腕のニードルで受け止めた。

「ス、スピッツ！」

けれど、迸るほのおエネルギーは受け止めたニードルを通じてスピアーを苛んだ。

「距離を取れ！」

「スピッツ！」

「逃がすな！ 10まんボルト！」

「ガウウウウウウツ！」

スピアーは完全にレントラーに背中を向けて逃げ始めた。それな

のに、まるで背中に目があるかのように降り注ぐ雷撃を回避している。

王の力？ いや、アレはスピアーの複眼によるものだ。スピアーの眼は人間であるオレ達の眼とは比べ物にならない範囲を見渡す事が出来る。

「ミサイルばり！」

10まんボルトの射程範囲から外れたスピアーは反転してミサイルばりを撃ってきた。

放たれた魔弾の数は五。

「オレ達だって！ でんこうせっか！」

「ガウー！」

でんこうせっかで走り始めたレントラーは自在な軌道で襲いかかってくるミサイルばりを回避していく。

一発目は紙一重で右に、二発目は僅かにしやがみ込み、三発目は跳び上がって、続く四発目は身を捻り、最後の一撃は歯で掴む。

噛み取ったミサイルばりを捨てて、一直線にスピアーへ向かっていく。

「強い！ 強い！ バレット！」

アルトは興奮している。

オレも同じだ。興奮している。

この瞬間を永遠に続けていたい。そう思えるくらい、アルトと全力でぶつかり合うのは楽しい。

だけど、終わらない旅がないように、終わらないバトルなんてない。

「受け止める、アルト！ これがオレとレントラーの全力だ！」

「いくよ、バレット！ オレとスピアーのすべてを！」

オレとアルトは同時に叫んだ。

「ワイルドボルト！」

「ドリルライナー！」

雷霆を纏うレントラー。

高速回転するスピアー。

二体がぶつかり合う。

そして……、

「アルト」

必死に堪えてきた涙がこぼれ落ちてしまった。

「オレ達の旅は終わった」

「……うん」

フィールドに立っているのは一体のポケモンのみ。

「だけど、これからもオレ達は友達だ！」

「うん！」

倒れ伏しているのはレントラー。

そして、

『レントラー、戦闘不能！ これにより、試合終了！ 二回戦第一試合を制したのは、アルト選手です！』

立っているのはスピアー。

オレ達はそれぞれのポケモンの下まで歩み寄っていった。

労いの言葉を掛けてからモンスターボールに戻して、今一度相手を見つめる。

アルトが右手を差し出してきた。オレは迷わずに握り返した。

「今まで、ずっと楽しかった！一緒に旅をしてくれて、ありがとう！」

「こつこつこそ、メルカトの件も、感謝してる。ありがとう」

アルトは鼻を吸った。一筋の涙が頬を伝い、フィールドに落ちた。

「ツハ！オレに勝ったんだ。絶対取れよ？最強の座！」

「うん！取るよ、チャンピオン！」

拳をぶつけ合うと、耳が痛くなるほど観衆が湧いた。

まったく、うるさい奴らだぜ。

オレ達は苦笑し合い、それぞれの移動装置の下に戻っていった。

敗者はそのまま出口にご案内って事もなく、宛てがわれた個室に戻された。

このまま帰るのも、残って試合の行方を見届けるのも自由という事だ。

オレは備え付けのベッドに寝転がった。

「ああ、楽しかった」
オレは大声を上げながら泣いた。

第八話 『アギトVSエリザベス』

アルトとバレットのバトルが終わった。二人が拳をぶつけ合った瞬間、わたしは立っていられなくなった。寂しさとか、羨ましきとか、感動とか、いろいろな感情が胸の中で渦を巻いている。

一緒に旅してきた仲間同士のバトル。

本当に、本当の、旅の終わり。

「……バレット」

別に、これでわたし達の人生が終わるわけじゃない。

友情に終止符が打たれるわけでもない。

会おうと思えばいつでも会える。遊ぼうと思えばいつでも遊べる。新しい冒険にだって、出かけられる。だけど、この旅は終わりだ。

クレルモア大平原で出会ったアルト。ユニオンで出会ったバレットとアギト。

アルトも言っていたけれど、わたし達の出会いはかくも運命的だった。もし、あの日、あの時に出会えなければ、わたし達の旅路はまったく違うものになっていた。

けれど、異なる運命を辿っても、きつとこの瞬間に行き着いていた事だろう。

このポケモンリーグはわたし達にとって、運命の終着点だ。

この運命だからこそその決着がつく。

第八話 『アギトVSエリザベス』

試合は進んでいく。二回戦に勝ち上がったトレーナーは一回戦で戦ったトレーナー以上に強く、それでもわたしは必死に食い下がった。

そして、この時が来た。

「エリザ」

対面のフィールドにはアギトが立っている。その強さはアルトと双璧を為すレベル。わたしの実力では、勝てるビジョンが全く見えない。

けれど、彼に勝てれば、わたしはアルトと戦える。

「肩に力が入り過ぎだ。もっと、リラックスしろ」

アギトはそう言うのと微笑んだ。

難しい事を言ってくれる。彼とわたしの實力には大きな隔たりがある。

だけど、負けたくないんだ、わたしは。

『俺はエリザを見るよ。なにがあっても、絶対に！』

アルトが見ていてくれる。もっともっと、見ていてほしい。

最高の舞台上で、わたしだけを見てほしい。その瞬間だけでも、ミリガンを忘れて、わたしだけを見てくれたなら、それ以上の幸せなんてない。

「エリザ。お前の相手はオレだぞ？」

困ったように、アギトは言った。

その言葉に、ハツとさせられた。

「アルトと戦いたいののはオレも同じだ。けど、このバトルはオレとエリザのものだ。そうだろう？」

「……は、はい！　そうです！　その通りです！」

バカだ、わたし。アルトに自分を見てほしいって言うておいて、目の前にいるアギトから目を逸らすなんて、本当にバカだ。

「失礼しました、アギト！　全力でお相手致します！」

「ああ、エリザ。オレも全力でいく。楽しいバトルをしよう！」

「はいー！」

一体目のモンスターボールを手取る。

バレットのように、自分の得意分野に固執せずに新たな戦法を編み出す事なんて出来なかった。結局、わたしが操るのは故郷を覆う雪と氷のポケモン達。

だけど、一芸特化が弱いわけじゃない。

「いきますよ、ユキノオー！」

「さあ、いくぞー！　リザードンー！」

モンスターボールから飛び出したユキノオーとリザードンが睨み合う。

相性は圧倒的に不利だ。

「よ、容赦がありませんね」

「当然だ！ エリザは強い！ その事を、オレは知っている！ だからこそ、手加減なんてしない！」

相変わらず、燃え盛る炎のような人だ。

けれど、その炎に溶かされるほど、わたしの氷は軟じゃない。

「ユキノオー！」

わたしは胸元のブローチから『とけないこおり』を取り出した。

アルトにもらった宝物。それをユキノオーに託す。

「いきますよ！ パワー全開です！」

「オオオオオオオオオオオオオツ！」

ユキノオーの雄叫びと共に、フィールドの空気が急速に冷やされていく。

「負けないぞ、エリザ。オレ達も、すべてを出し尽くす！ 燃えろ、リザードン！」

本当に容赦がない。これまでの試合で一度も見せなかった癩に、アギトはリザードンをきずなへんげさせた。三本のツノ、ギザギザのつばき、赤い肌に、相反する青い炎。

その身が放つ熱気がユキノオーの放つ冷気とぶつかり合う。あられが水に変わり、地面に落ちる前に蒸発していく。

「負けるもんですか！ わたしは勝つんです！ ユキノオー！」

「オオオオオオオオオオオオオツ！」

ユキノオーを青白い光が包み込んでいく。背中の芽が急速に成長していき、巨大な氷晶となった。メガユキノオーへのメガシンカに似ている。けれど、メガユキノオーとは違い、自身の体重を、その二本の脚で確りと支え、ユキノオーは立っている。

『こ、これは!? 両者、共にメガストーンを使っています！ これは、『キズナ現象』です！』

睨み合う、二体のポケモン。

押されていたユキノオーの冷気が、リザードンの熱気と拮抗し始めた。

フィールドという狭い範囲内に発声した猛烈な気温差は烈風とな

り、やがて竜巻となった。

「リザードン、かえんほうしゃー！」

「回避して、こおりのつぶてー！」

レイフォンとの試合では無我夢中でよく分かっていたいなかったけれど、これがキズナ現象。

今のわたしは自分の眼でフィールドを俯瞰すると共に、ユキノオーの眼で戦場を間近に視認している。それに、わたしが命令を思考した瞬間にはユキノオーが行動に移っていた。

おまけに、放ったこおりのつぶてはわたしの思い描いた通りの軌道で飛んで、リザードンに襲いかかった。

「ドラゴンクローで撃ち落せー！」

「今ですー！」

こおりのつぶてに気を取られたリザードンに、ユキノオーはいわなだれを発動する。

殺到する岩石群に対して、アギトは唇の端を吊り上げる。

「飛べー！」

リザードンが飛んだ。

「ふぶきー！」

ユキノオーは最大パワーのこおりエネルギーを解き放つ。それはフィールド中に今だ渦を巻き続ける烈風に乗ってフィールド全体へ拡散されていく。

こおりタイプはほのおタイプに弱い。けれど、ほのおタイプも体が冷えれば動きが鈍る。それに、炎の火力も下がっていく。

「かえんほうしゃー！」

それでも、アギトは強引にリザードンにかえんほうしゃを放たせた。

狙い通り、その威力はさつきと比べると明らかに弱まっている。

「地面に向かってウッドハンマーー！」

ユキノオーはフィールドをウッドハンマーで殴りつけた。

舞い上がる土煙はふぶきと合わさり、視界がほとんど効かなくなつた。

だけど、それは地上の話。空中のリザードンはここから丸見えだ。
「こおりのつぶてー！」

今だ持続しているふぶきによってこおりのつぶての威力が上がっている。

「ドラゴンクローー！」

リザードンはドラゴンクローで応戦する。けれど、地上と違って三次元的に襲いかかるこおりのつぶてを完全に撃ち落とす事は出来なかった。

「今です、ユキノオー！ わたしの心を、この一撃に！」

「これは!? リザードン！」

アギトが気付いた。だけど、もう遅い。

「放ちなさい！ 『レイジングジオフリーズ』！」

空中で無理にこおりのつぶてを撃ち落とそうとした挙げ句に着弾してしまったリザードンは完全に隙だらけだ。そこに極大のこおりエネルギーが飛んでいく。

リザードンの体は一瞬の内に巨大な氷塊へ呑み込まれた。そのまま地上に落下していく。

『リザードン、戦闘不能！』

「勝った？ アギトのエースに勝った!?!」

一瞬遅れて、自分のしでかした事に気づき、心臓が脈打った。

「強いな、エリザ」

アギトは言う。

「負けないぞ、エリザ！」

「わ、わたしは勝つ！ あなたにも、他の誰にも、わたしは負けない！
通用しているんだ。わたしの力が！」

「まだ行けますね!?! ユキノオー！」

「オオオオオオオッ！」

ユキノオーの冷気がフィールド全体を凍てつかせた。氷のリングと化したフィールドに、アギトは新たなポケモンを繰り出す。

「いくぞ、ガブリアス！」

「ガブウ！」

二体目はガブリアス。アギトは当然のようにきずなへんげをさせ
て来た。

わたしは息を荒げながらユキノオーに指示を下した。

「こおりのつぶてー！」

「だいまんじー！」

こおりのつぶてとだいまんじがぶつかり合う。

破裂する二つのエネルギー。その衝撃をユキノオーが浴びると同
時に、わたしまで間近で全身を殴られたような衝撃を感じた。

あまりの痛みに息が止まる。

その瞬間をアギトは見逃さなかった。

「いくぞ、エリザー！ 烈火の如く燃える魂！ 受けろ、『ダイナミック

フルフレイム』！」

極大のほのおエネルギーが迫る。

その瞬間、急にユキノオーの姿が元に戻った。直前に、強い拒絶の
感情を感じた。

「ユ、ユキノオー!?!」

「オオオオオオツ!?!」

炎に呑み込まれるユキノオー。

そうだ。キズナ現象はトレーナーとポケモンをシンクロさせる。
それは視界や思考だけじゃない。ダメージまでも共有させる。

その事にユキノオーは気付いた。だから、わたしとのシンクロを無
理矢理解いたんだ。

「ユキノオー！」

ユキノオーは戦闘不能になってしまった。

モンスターボールに戻して、ギユツと抱きしめる。

「ユキノオー……」

情けない。あまりにも情けない。

キズナ現象の事を知っていたのだから、あの程度の衝撃に怯んでは
いけなかった。

それなのに、わたしは痛みで思考を止めてしまった。だから、ユキ
ノオーは負けてしまった。

「ありがとうございます、ユキノオー」

涙を拭う。まだ、試合は終わっていない。

「来い、エリザ！」

「クレベース！」

わたしの二体目はクレベース。

「いきますよ！」

覚悟を決める。息が荒くなっているのは、それだけキズナ現象の負担が大きいからだ。

それでも、この力を使わなければ、アギトやアルトと同じステージには立てない。

だから、無理でもやる。もう、痛みで怯んだりしない。

この試合の後に倒れたとしても、絶対に勝つ。後のことなんて考えない。

「ジャイロボール！」

「クレー！」

高速回転を始めるクレベース。

「りゅうせいぐん！」

空から降り注ぐりゅうせいぐんがクレベースに命中した。

信じられない痛みが走る。だけど、必死に歯を食いしばる。

りゅうせいぐんの発動直後であるガブリアスの動きは止まっている。

「クレベース！」

「クレエエエエ！」

ジャイロボールが命中した。吹き飛ばされるガブリアス。

「畳み込みます！ れいとうビーム！」

「クレー！」

「だいもんじ！」

「ガブツ！」

れいとうビームとだいもんじがぶつかり合う。

破裂するエネルギーの余波に耐えながらたしは叫んだ。

「れいとうビーム！」

「じしんだー！」

フィールドが波をうち、クレベースのれいとうビームは明後日の方向に飛んでいってしまった。

「しまっ!？」

「受ける、エリザ！ 烈火の如く燃える魂！ 受ける、『ダイナミックフルフレイム』！」

ダイナミックフルフレイムが迫ってくる。回避は間に合わない。「クレツ!？」

クレベースが必死に拒絶の意志を向けてくる。だけど、絶対にキズナ現象は解かない。

「クレベース！ ゆきなだれ！」

「クレエエエエエエエエッ！」

ダイナミックフルフレイムが直撃すると同時にクレベースの体から放たれたゆきなだれはガブリアスに殺到した。

勝利を確信していたのだろう。ガブリアスは回避が間に合わなかった。

「ぐうううううっ！」

まさに全身が炎に包まれたような苦痛が走る。

苦しい。熱い。辛い。

だけど、これはユキノオーとクレベースも味わっているものだ。彼らに戦わせているわたしが、逃げるなんて出来る筈がない。

この痛みの中に、わたしが掴み取るべき勝利がある。

『ガ、ガブリアス、クレベース、共に戦闘不能！』

最後のモンスターボールを握りしめる。

視界はぼやけ、今にも倒れてしまいそうだ。

だけど、勝利は目の前にある。地面を踏みしめて、最後のポケモンを繰り出した。

「たの、みます……よ、マニョーラ！」

「ニユラッ！」

飛び出したマニョーラは全身を逆立てながらアギトを睨みつけた。「いくぞ、ジュナイパー！」

涙が溢れ出して止まらない。ユキノオーやクレベースが必死に戦ってくれたのに、あと一步だったのに、わたしのせいで負けてしまった。

こんなみつともない姿、アルトに見られたくないのに、涙も鼻水も止まらない。

「エリザ」

何か顔が覆った。すごく、温かい。

「今度は俺を見ててよ」

それはアルトの声だった。

「そして、リーグが終わったら、一緒にバトルをしよう」

「アル、ト?」

わたしの涙とか鼻水が服にべっちよりとついてしまったのに、顔を上げた先にあるアルトの顔は微笑んでいる。

「エリザ。俺を見てて」

「……はい」

わたしは近くのティッシュ箱から何枚もティッシュを取って、涙と鼻水を拭った。

「見えます! わたし、あなたを見えます! だから、絶対優勝して下さいよ! わたしを負かしたアギトなんてボコボコにしちゃって下さい!」

「うん!」

「……いや、ほぼ互角だったわけで、負かしたというか、あれは時の運というか」

「ブツブツ言ってんなよ、アギト。オレはお前を応援してやつから」

「ああ、頼む」

そうだった。ここにはアギトとバレットもいたのだった。

「アギト!」

「あ、ああ! どうした?」

「今度は途中で倒れるなんて無様は晒しません! だから!」

わたしは言った。

「また、バトルして下さい」

「ああ、もちろんだ！」

アギトは笑った。

「おいおい、オレは除け者か？」

「ふっふっふっふ、バレットには普通に勝てそうですね！ 泣かしちゃったら可哀想ですから！」

「言っただな、このやろう！ 絶対バトルすんぞ！ こっちが泣かせてやらあ！」

「ふふーん！ 出来るものならやってみる事ですねー！」

「やったらあ！」

第九話 『ライバル対決！ VS アクセル・前編』

「そろそろ機嫌直せって」

このフリーズを何度繰り返したことが。

「別に不機嫌なわけじゃないもん」

頬を膨らませながら言うもんだから、説得力が欠片もない。

「……アルトは変わっちゃったもん」

寂しそうに、悲しそうに、セラは言った。

「そりゃ、変わるだろ」

涙目で睨まれた。

だけど、これは当たり前前の事だ。

「人は変わるもんだ。アルトだけじゃない。オレやセラだって、旅に出る前とは違ってる」

「わたし達は変わってないもん！」

「変わってるだろ。っていうか、変わってないとダメだろ」

「なんで!?! どうして、変わらないとダメなのよ！」

セラは怒っている。だけど、オレ達の中で一番変わったのは、たぶん、セラの方だ。

「オレ達は旅をしてきたんだ。ジムバッジを手に入れるために、ここ三ヶ月はアガリア中を回った。そこでいろいろなものを見て、いろいろな体験をした。楽しかったり、怖かったり、嬉しかったり、辛かったり、いろいろな事を思った。オレは、この旅の中で世界が広いんだって事を知ったんだ」

良い人がいた。悪い人がいた。強いポケモンがいた。弱いポケモンがいた。

思い通りになる事があった。どうにもならない理不尽な事があった。

「オレが旅に出たのは、アルトやセラを守ってやれる強さが欲しかったからなんだ」

ヴェゼール・ヴィレッジが襲われた日、オレは家に取り残されていたアルトを助けに行かなかった。その事を、今でも後悔している。父

親の説得に耳を貸してしまい、納得してしまい、任せてしまった。その結果、任せたミリガンは負傷して、アルトは一步間違えれば死ぬような目にあっていた。

だから、オレはポケモンもスピードタイプを選んで育ててきた。強くなつて、二人がどんな危ない目にあつても、即座に守りに行ってやれるスピードがほしかったからだ。

だけど、師匠に鍛えてもらつて、ドロシーに大迷宮を攻略させられて、イベルタルと戦つて、オレは思った。

「冒険の旅つていうのは、ただ目的を達成するものじゃない。その間に、いろいろなものを入れるものなんだ。強くなる感動、困難に打ち勝った時の達成感、見知らぬポケモンとの出会い、そういうものを通じて、オレの視界はどんどん広がつていった。いろいろな事を考えられるようになった。守りたい人も増えた」

「守りたい人つて？」

「師匠やドロシー。村のみんなや、ショップの姉ちゃん。つてか、オレが旅の間に知り合つたみんなを守つてやりたい。そう思うようになった」

オレの言葉に、セラは下唇を噛み締めた。裏切られたように感じているのだろう。

セラはオレとは逆だ。世界を狭めてしまった。ヴェゼール・ヴィレッジで過ごしていた日々に戻ろうと躍起になっている。世界の広さを見ようとしなくて、必死に目を逸し続けている。変わっていく事を怖がっている。

でも、むかしのセラは変わる事を望んでいた。シャンティ・シティのサラの柱の事とか、ウィオルネ・ブランドの事とか、オレ達が外の世界に関心を持つ前から、ずっと外の世界に憧れていた。

ヴェゼール・ヴィレッジが襲われなかったら、もしかしたら、いの一歩に旅に出ていたのはセラだったのかもしれない。

セラを変えたのは、あの日の襲撃事件だ。誰かが死ぬかもしれない。その経験がトラウマになっているんだ。

「セラ」

オレは言った。

「オレは強くなった。もう、心配しなくて大丈夫だ」

「アクセル……」

要するに、そういう事だ。

セラは不安なのだろう。アルトやオレが変わっていく事で、知らない間にどこか遠くへ行ってしまうのではないかと。そして、知らない場所で倒れてしまうのではないかと。

「見ててくれ、セラ。オレとアルトのバトルを」

三人だけの世界に引きこもる必要なんてない。傍にいても、離れていても、必ず笑顔で再会出来る。それだけの強さを、オレは手に入れた。

「うん」

セラは涙を拭いながら言った。

「見てるからね！ アクセル！」

「ああ、頼む」

試合開始の時間が迫ってきている。

いよいよだ。

第九話 『ライバル対決！ VS アクセル・前編』

『さあ、アガリア地方ポケモンリーグ・マグノリア大会！ いよいよ準決勝です！ 第一試合はアルト選手 VS アクセル選手！ なんと、この二人は同じ村の出身だそうです！ 目の離せない一戦となる事、間違いない！』

実況のジーンが観衆を盛り上げる中、アルトとアクセルは見つめ合っていた。

今よりも幼い頃から一緒に同じ村で過ごしてきた幼馴染。アルトがクレルモア大平原でエリザと出会わなければ、彼らは共に旅をして、今とは違う立場や感情でここに立っていたのかもしれない。けれど、運命は彼らの旅路を二手に分けた。

旅の仲間ではなく、異なる道を歩んだライバルとして、互いに闘志を燃やしている。

「アクセル！ 君と戦える事に、ワクワクしてる！」

「アルト！ オレもだぜ！」

二人は揃って観衆に視線を向けた。

二人の少女が別々の場所から、同じ場所を見つめている。

「いくよ、アクセル！」

「こい、アルト！」

同時にモンスターボールを投げる。

『さあ、今！ 準決勝第一試合、スタートです！』

モンスターボールから飛び出してきたのは、カラマネロとジュペッタ。

「やっぱり、そう来たか！」

アクセルのポケモンはスピードタイプがメインだ。それ故に、アルトのカラマネロが使うトリックルームは脅威だった。その事を互いに理解し合っている。

「サイコカッター！」

「ゴーストダイブ！」

アルトの表情は硬い。ジュペッタに対してはトリックルームが意味をなさず、切り札であるばかりからも効果がない。こうなると、サイコカッターかさいみんじゅつしか使えるわがない。

ジュペッタはサイコカッターを回避すると、そのまま自分の影の中に沈み込んでしまった。

「来るぞ！ サイコカッター！」

カラマネロの背後の影が僅かに揺らぐ。そこから、ジュベッタが飛び出してきた。

「シャドークロー！」

完全に不意を打ったジュペッタのシャドークローはカラマネロの急所に命中した。

苦しみながらも放ってきたサイコカッターをジュペッタは必死に回避しながら影に逃げ込む。

「またか！」

影に隠れたジュペッタにカラマネロは攻撃を加える事が出来ない。その上、どこから出てくるのかも分からない。その焦りがアルトの判

断を遅らせた。

「今だ！ シャドークロー！」

「ネロツ！」

シャドークローが急所にあたった。

『カラマネロ、戦闘不能！ ジュベッタの勝利です！』

倒れるカラマネロにアルトは目を見開く。こんなにアツサリと倒されてしまうなんて思っていなかった。そういう表情だ。

「アルト！ お前が旅の間に強くなったように、オレも成長してるんだ！ あんま、舐めんなよ！」

アクセルの挑発に、アルトは肉食獣の如き笑みを浮かべた。

仲良しの幼馴染との楽しいバトルから、強いライバルとの真剣勝負にスイッチが切り替わる。

「ギャラドス！」

アルトの二体目のポケモンはギャラドス。雄叫びをあげ、空を泳ぐ姿にアクセルは興奮する。

「かつけー！」

「かつこいいだけじゃない！ ギャラドス！ りゅうのまい！」

ギャラドスが神秘的な舞を踊り始める。

思わず見惚れてしまいそうになったけれど、アレは力を高めるためのもの。傍観しているわけにはいかない。

「シャドーボール！」

「アクアテール！」

ジュベッタが放ったシャドーボールがギャラドスのアクアテールで打ち返された。ジュベッタは余裕を持って躲けたけれど、やっぱり空を飛ばれるのはキツイ。

「だから、落とす！ サイドチェンジ！」

「ジュベツ！」

「なっ!？」

不思議な力がジュベツとギャラドスの位置関係を反転させた。

突然地面の上に移動させられたギャラドスは戸惑っている。

これでジュベツはすべての技を晒してしまった。ここで決める

！

「シャドーボール！」

「ベツタ！」

「はかいこうせん！」

「なにっ!？」

戸惑っていた筈なのに、ギャラドスはアルトの指示を聞くと同時にシャドーボール目掛けてはかいこうせんを放った。破壊の力の奔流はシャドーボールを止まらない。

「ジュベツ!？」

そのまま、ジュベツタははかいこうせんに呑み込まれてしまった。

『ジュベツタ、戦闘不能！』

オレはアルトを見た。爛々と青い瞳を輝かせている。

「王の力ってやつか」

セラにはまだ話していないけれど、アルトやセラの本当の出自についてはバツジ目的でバステイロジムを訪れた時にレムハザードから聞いていた。

聞いてはいたが、本当に厄介だ。キズナ現象に至らなくても、その気になれば心を通じて意志をポケモンに伝える事や、視界を共有させる事が出来るらしい。

「っへー！ おもしろええ！」

ノーリスクってわけでもないのだろう。同じような力を使っていたエリザが倒れた以上、無制限に使えるものじゃない筈だ。その証拠に、アルトはカラマネロやギャラドスをきずなへんげさせていない。このバトルは六対六のフルバトル。序盤に使い過ぎればエリザの二の舞になりかねない。

だったら、やりようはある。

「いくぜ、サンダース！」

「ダース！」

ギャラドスが相手なら、やっぱりでんきタイプだ。

「でんこうせっか！」

ギャラドスは未だにはかいこうせんの反動で飛び上がれていない。

サンダースはでんこうせつかで組み付いた。

「とびはねろ！」

ギャラドスはサンダースに組み付かれたままの状態で跳び上がった。

「ダ、ダース!？」

サンダースは目を白黒させている。

「慌てるな！ 10まんボルト！」

「ダースッ!？」

サンダースがでんきエネルギーを集中し始めると、いきなりギャラドスは降下を開始した。かと思えばすぐに飛び上がり、また落ちる。振り回されたサンダースはギャラドスから手を離してしまった。

「そこだ！ アクアテール！」

「ギシャアアアアアアッ！」

「まずい！ 避ける！」

「ダッ!？」

サンダースにアクアテールが命中した。大きくふっ飛ばされたサンダースに向かって、ギャラドスが巨大な顎を開く。

はかいこうせんが来る！

「サンダース！」

「はかいこうせん！」

放たれる破壊の息吹。それを見て、オレはエリザの試合を思い出した。

数回会っただけだけど、アルトの旅の仲間だから試合は全部チエツクしていた。

その時に使っていた戦術が閃光の如く脳裏に浮かび上がった。

「ワイルドボルトではかいこうせんの上を走れ！」

「ダース！」

雷光を全身に纏い、はかいこうせんの着弾寸前に跳び上がるサンダース。そのまま、でんきエネルギーをはかいこうせんのエネルギーに対するバリアにして、その上を走り出す。

「エリザの!？」

そうだ。彼女が一回戦で使った、シャドーボールによるあくのはどう滑り。その応用だ。

はかいこうせんを放った直後のギャラドスは動けない。

「そのまま決めろ！ サンダース！」

「ダース！」

サンダースのワイルドボルトがギャラドスに命中した。

こうかはばつぐんだ！

『ギャラドス、戦闘不能！』

「つしやあ！」

ガッツポーズを決めると、アルトはぐぬぬと悔しそうに唇を噛み締めた。

「まだまだ！ 勝負はここからだよ、アクセル！」

「おう！ 来いよ、アルト！」

アルトが三体目を繰り出す。

「おねがい、キテルグマ！」

「クマー！」

キテルグマ。たしか、前の試合ではじめんタイプのわざである『じしん』を使っていた。

「悪いな、アルト！ そんな安直な考え、オレには通じねえ！ ボルトチエンジ！」

「なあ!？」

雷撃を置き土産に、サンダースがモンスターボールに戻る。

代わりに飛び出したのはルチャブル。キテルグマに対して、確実なアドバンテージを取れるポケモンだ。

「頼むぜ、ルチャブル！」

「ルチャー！」

ルチャブルは軽快なステップを踏みながらキテルグマを見つめている。

キテルグマも静かな眼差しをルチャブルに向けている。

「かみなりパンチ！」

「キイイイイイイッ！」

「うおっ!?!」

巨体からは想像もつかない速度でキテルグマが迫ってくる。

「フェザーダンス!」

「ルツチャ!」

落ち着け、オレ。

キテルグマのわざの構成はかみなりパンチ、アームハンマー、はいこうせん、じしんの四つだ。捌め手はない。

「ルツチャ! ルチャルチャ! ルチャブルツ!」

キテルグマのかみなりパンチを避けながら、翻弄するように舞うルチャブル。

舞い上がる羽毛はキテルグマの毛皮によく絡みついた。

「キイイイイイイイイイッ!」

キテルグマが怒りの声をあげた。血走った目に、思わず腰が引けそうになる。

「呑まれるな!」

自分に言い聞かせるように叫ぶ。

「フライングプレス!」

「ルチャ!」

跳び上がるルチャブル。

「クマツ!」

猛烈な勢いでキテルグマを押しつぶす。

こうかはばつぐんだ!

「まだだ、キテルグマ! かみなりパンチ!」

「はあ!」

フライングプレスが命中したんだ。もう、立てる筈がない。

その筈なのに、キテルグマは恐ろしい形相で雷を纏った拳を振り上げていた。

「ルチャツ!」

かみなりパンチがルチャブルに命中した。

こうかはばつぐんだ!

「ルチャブル!」

「ル、ルチャツ！」

ギリギリ、耐えてくれた！

「もう一度だ、ルチャブル！ フライイングプレス！」

「迎え撃て、キテルグマ！ かみなりパンチ！」

フライイングプレスにキテルグマのかみなりパンチが突き刺さる。

苦痛に顔を歪めるルチャブル。けれど、ルチャブルはそのままキテルグマを押しつぶした。

両者、こうかはばつぐんだ！

『キテルグマ、ルチャブル！ 共に戦闘不能！』

目を回しているルチャブルをモンスターボールに戻す。

ルチャブルはよくやってくれた。だけど、あのキテルグマの根性が凄すぎた。まさか、フライイングプレスの直撃を耐え抜くなんて思わなかった。

あれはオレの油断だ。

「ごめん。ありがとう、ルチャブル」

オレは三体目の、アルトは四体目のモンスターボールをフィールドに投げ込んだ。

「頼む、ギルガルド！」

「いくぞ、クロバット！」

第十話 『ライバル対決！ VS アクセル・後編』

クロバット。このポケモンの事はよく知っている。お父さんもクロバットを育てていた。

そのスピードはあまねくポケモン達の中でも指折りだ。

でも、相性の面では悪くない。ギルガルドにどくタイプの技は効果が無いし、ひこうタイプの技も今ひとつだ。

「先手必勝だ、クロバット！ ブレイブバード！」

疾い！ アクセルが指示を出すと、クロバットはあつと言う間にギルガルドの目の前まで迫ってきた。

だけど、甘い。アクセルのポケモンはスピードタイプばかり。だからこそ、必ず先手必勝を狙ってくると思った。

「ギル！」

「キイイイイッ！」

ギルガルドは飛び出した時点からシールドフォルムの状態だ。ギルガルドのキングシールドはまさに鉄壁の守りだ。

「いくぞ、ギルガルド！」

「ここから反撃開始だ！」

「とんぼがえり！」

「えっ!？」

クロバットがギルガルドの盾を蹴ると、そのままモンスターボールに戻っていった。

そして、代わりに現れたのはファイアローだった。

「しまっ!？」

ギルガルドはすでにフォルムチェンジしてしまった。ブレードフォルム状態でせいなるつるぎを発動している。

「ニトロチャージ！」

「アーン！」

「迎え撃て！」

「ギルッ！」

ギルガルドが刃を走らせる。けれど、ファイアローは僅かな動きで

刃を躲し、ギルガルドが体勢を立て直す前に再度襲いかかってきた。

「ギルガルド！」

「ギル！」

こうかばつぐんのニトロチャージを受けても、ギルガルドがなんとか耐えてくれた。

だけど、この状況はまずい。あのファイアローはアクセルのエースポケモンだ。ここで出してくるなんて思わなかった。

ボルトチェンジ、とんぼがえり。こういう交代用の技を甘く見ていた。

バレットのボルトチェンジ戦法のように、複数のポケモンを一体のポケモンの如く操るだけじゃない。こうして、最初に見せ札として出した後、次に相手のポケモンと相性の良いポケモンと交代させる戦法も取れる。

「ギルガルド！」

アクセルのポケモンはまだ四体もいる。これ以上、落とされるわけにはいかない。

ファイアローの圧倒的なスピードに対抗する為には、もう、きずなへんげしかない。

「ああ、その瞬間を待っていたぜ！ オーバーヒート！」

ファイアローがオーバーヒートを発動した。

ギルガルドは紫の光を纏いながらきずなへんげを遂げようとしている途中だ。

きずなへんげによる変身までの時間なんて、メガシンカと変わらない。僅か一秒程度だ。

その一秒を、アクセルは見逃さなかった。

避ける事も、迎え撃つ事も出来ない。

失敗した。安易にきずなへんげに頼ろうとしたから、そこを突かれた。

「あがつ!？」

オーバーヒートがギルガルドを呑み込む。業火に焼かれる苦痛が俺自身にも伝わってくる。あまりの熱さと痛みを意識が飛びそうに

なる。

ここまでの事を考えて、戦術を組み立てていたのだとしたら、俺はアクセルを舐め過ぎていた。

相手を強いと認めておきながら、どこか慢心していたんだ。

王の力。この力を持つものと持たないものでは勝負にならない。そう、心のどこかで思っていた。だけど、それは間違いだった。

『ギルガルド、戦闘不能！ これで、アルト選手のポケモンは残り二体となりました！ 対するアクセル選手のポケモンは四体！ さあ、アルト選手！ かなり苦しい展開だ！』

実況の言葉通り、まさにギリギリの瀬戸際だ。

オーバーヒートのダメージが残っているせいで、すぐにはきずなへんげも使えない。

それに、使えたとしてもアクセルに通じるか微妙なところだ。

「ああ、アクセル」

本当に強い。王の力もなく、ここまでの力を持てるなんて、なんて凄いいんだ。

「俺は、君に勝つ！」

「来いよ、アルト！ 勝つのはオレだ！」

第十話『ライバル対決！ VS アクセル・後編』

アルトの残りのポケモンは二体。ここまで追い詰める事が出来た。だけど、油断は禁物だ。王の力を完全に発揮されれば、この形勢も一気に覆されかねない。それに、残っている内の一体はスピアード。あの強さ、尋常じゃない。

「いくぞ、ゲンガー！」

飛び出してきたポケモンはゲンガーだった。

トリックルームを覚えるポケモンだけど、そこは心配しなくてもいいだろう。

使えるなら、もっと早くに出てきている筈だ。

「トリックルーム！」

「ゲン！」

「んな!?!」

使ってきた。

「使えんなら、なんでギルガルドを先に出したんだ!？」

オレが何を出すにしても、トリックルームを張れるのならゲンガーを先に出すべきだった。

「ゲンガーは奥の手だったんだ」

アルトは言った。

なるほどな。要するに、アルトは次のバトルの事を見据えていたわけだ。

「……舐めてんじゃねーぞ」

少し、苛ついた。

「うん、ごめん。舐めてた」

素直なもの考えものだ。

こும்もストレートに舐めてた事を認められると二の句が告げなくなる。

「それより、いいの?」

「あ?」

その時だった。いきなり、ファイアローの悲鳴が響いた。

「ファイアロー!？」

アルトは指示なんて出していなかった。それなのに、ゲンガーはあやしいひかりを放った。

ファイアローが混乱してしまっている。

「しまっ!？」

トリックルームが使われた事に動転し過ぎた。

「とんぼがえりだ!」

一度、モンスターボールに戻そう。そう思って、指示を出した。

だけど、混乱しているせいでファイアローにオレの声が届いていない。

「シャドーボール!」

「ゲン!」

シャドーボールがファイアローの急所に当たった。

『ファイアロー、戦闘不能!』

じばく、だいはくはつ、みちづれ。オレはそういう技は嫌いだ。

ポケモンバトルは傷つけ合うものだ。そんな事はわかってる。でも、自分で自分を傷つけさせたり、戦闘不能になる事を前提にした技を覚えさせるなんて、そんなの間違ってる。

「さあ、残るはクロバットとサンダース。どっちを出すの？」

アルトはモンスターボールを既に構えている。

中身がどんなポケモンなのか、考えるまでもない。

「いくぜ、クロバット！」

「キイー！」

アルトは間違いなくきずなへんげを使ってくる。クロバットのスピードなら、その変身途中を潰せる筈だ。これで終わりにする。

「いくよ、スピアー！」

アルトがモンスターボールを投げる。

飛び出してきたのは、やはりスピアー。

「一気にいくぞ、ブレイブバード！」

「キイイイイイイッ！」

一直線にスピアーへ向かっていくクロバット。対するスピアーはジツとクロバットを見つめている。

「ダブルニードル」

「スピ」

何が起きたのか、すぐには分からなかった。

クロバットがスピアーと衝突した瞬間、スピアーの体がぶれたように見えた。

そして、クロバットは地面に落ちた。

『ク、クロバット、戦闘不能！ い、一体、何が起きたんだ!?!』

実況も混乱しているようだ。大画面にVTR映像が流れた。スロー再生を見て、ようやく理解出来た。

事は単純だ。スピアーはクロバットのブレイブバードを紙一重で回避して、ダブルニードルを急所に正確に打ち込んだ。

ただ、それだけの事だ。けれど、ブレイブバード中のクロバットにそんな真似、やろうと思って出来る事じゃない。

尋常ではない眼力とスピード。それを併せ持つスピアーだからこそその神業だ。

『驚くべき強さです！ アルト選手のスピアー！ さあ、アクセル選手も最後のポケモンとなりました！』

ついさつきまで押していた筈なのに、気がつけばこのザマだ。

残っているのはギャラドスとのバトルで傷ついたサンダースのみ。

スピアーには、ただの一度もダメージを与えられていない。

「……頼む、サンダース！」

「ダース！」

まだ、さっきの戦闘のダメージが残った状態のサンダースは表情を引き攣らせている。

「スピアーか……」

アルトが紹介してくれた時はオボンの実もムシヤムシヤ食べて、呑気なヤツだと思った。

アルトといつも一緒にいて、オレもいっぱい遊んだ。

スピアーも、オレにとっては大事な友達だ。

だけど、今だけはスピアーが恐ろしい。あまりにも、底が知れない。

「サンダース、10まんボルトだ！」

「ダース！」

迂闊に近づけば、クロバットの二の舞になる。

サンダースは10まんボルトを放った。

けれど、スピアーは動じる様子も見せず、それどころか舞い踊る雷霆の隙間を縫うように接近してくる。

「10まんボルトを見切ってるのか!？」

アルトの他のポケモンとは格が違う。

「スピイツ！」

「ダース!？」

もう、目の前に迫っている。

「ワイルドボルトだ！」

「ダ、ダース！」

サンダースは雷を纏った。これで、スピアーも迂闊に攻撃する事は

出来ない筈だ。

「ドリルライナー！」

「スツピイイッ！」

スピアーは躊躇う事なくアルトの指示に従い、雷を纏った状態のサ
ンダースに攻撃した。

これがミサイルばりなら、まだチャンスはあった。

だけど、これは……、

『サンダース、戦闘不能！ よって、準決勝第一試合、アルト選手の勝
利です！』

負けた。あんなに優勢だったのに、最後は手も足も出なかった。

「アクセル」

アルトは微笑んだ。無邪気に、ヴェゼール・ヴィレツジで遊んでい
た頃のように。

「楽しかったよ」

「……そりゃ、よかったな」

頭の中で、意味のない考えが浮かんでは消えていく。

あの場面で、ああしていれば良かった。そんな事、負けた後になっ
て考えても無意味だというのに。

「アルト」

「なに？」

「悔しいぜー！」

そうだ。オレは悔しいんだ。

勝ちたかった。勝とうとしていた。

それなのに、負けた。

それが悔しくてたまらない。

「じゃあ、またバトルしようねー！」

「ああ、絶対だ！」

エピソード『決戦前夜、ミリガンとアルト』

「負けちゃったね」

試合が終わってセラの所に行くと、開口一番にそう言われた。

「おう！ やっぱ、アルトは強いな」

強がって言うと、睨まれた。

「負けたのが悔しいって、顔に書いてあるわ」

「マジで？」

「マジで」

アツサリと見抜かれてしまった。

「……負けたくなかった」

オレは言った。

「アルトに勝って、四天王にも勝って、チャンピオンにも勝ちたかった」

負けたくせに、何を言ってるだろう。

「誰にも負けない男になりたかった」

涙が滲んできた。

情けない。

「また、戦うんでしょ？ アルトと」

「……ああ」

そう、約束した。

「だったら、次は勝ってよ。そうすれば、今度こそアクセルが最強よ」

セラは言った。

「だって、アルトはチャンピオンになる。そのアルトに勝てば、今度はアクセルがチャンピオン。そうでしょ？」

「勝てればの話だけどな。オレも、アルトも」

「だけど、セラの言うとおりで。次に勝てばいい。だから、しよげて
いる暇なんてない。」

「もっともっと、強くないとな」

「……うん」

リーグが終わったら、師匠の所に行こう。もっともっと、鍛えても

らうために。

エピソード『決戦前夜、ミリガンとアルト』

アクセルは強かった。

バステイロ・シテイでゲットしたゲンガーで奇策を仕掛けなければ、圧倒されていた。

もちろん、スピアーが残っていれば何体が相手だろうと逆転して勝利を手に入れられたと思う。

だけど、スピアーにばかり頼っていていいのか？

「明日は、いよいよアギトとのバトルだ」

オレとは違って、アギトは準決勝も順調に勝ち上がった。

バレットやアクセルもだけど、エース以外のポケモンでの戦い方がみんなの方が巧い。

これは、きつと指導を受けていたかどうかの差だ。

アクセルはヴァイク。アギトはシエル。そして、バレットもメルカト崩壊事件の前にナザレから指導を受けていたという。

対して、俺は完全な我流だ。バトルを通じて、少しずつ磨き上げてきたもの。

「でも、今更過ぎるか……」

今から指導を受けても、明日の試合には間に合わない。

「悩んでるみたいね、アルトくん」

「え？」

考え込んでいて伏せていた顔をあげると、そこには一人の女性が立っていた。

「ミリガン!?!」

「こんばんは」

いきなりの事で動転してしまった。

「ど、どうして、こんな所に?」

ここはリーグ会場の近くにある公園だ。俺は考え事をするために来た。

ミリガンは散歩の途中なのだろうか？

「君を探しに来たの」

「俺を？」

「うん」

ミリガンは俺が座っているベンチの隣に腰掛けてきた。相変わらず、なんだかいい匂いがして、ドキドキしてくる。

「もしかして、行き詰まってる？」

「どうして分かるの!？」

言い当てられた事に驚くと、ミリガンはクスリと微笑んだ。

「わたしも、同じ壁にぶつかつた事があるの」

「ミリガンも？」

ミリガンは頷いた。

「我流には限界がある。どんな事でもね。これは当たり前的事なの」

彼女は言った。

「本来、技術というものは人から人へ伝えていくもの。そうしていく内に収斂していく。進歩していくのよ。例えるのなら、これは迷宮と同じ。我流はひたすら自分で道を見つけていくしかない。だけど、指導を受けていけば、最短にして、最適な道を突き進む事が出来る」

同じ時間を掛けても、どちらがより先へ進めるかなど考えなくても分かる。

これが指導者の有無。

「だけど、落ち込む必要はないわ」

ミリガンは言った。

「あなたは我流のままどこまで来れた。何事も最短距離を突き進む事だけが正解とは限らない。我流だからこそ、あなたは今の力を手に入れる事が出来た。あとは、少しの知識を得るだけでいい。それで、きつと飛躍的に強くなれる」

「少しの知識で？」

ミリガンは頷いた。

「わたしの時は、エルフランが教えてくれた。あなたには、わたしが教えてあげる」

「ミリガンが？」

「あなたの三ヶ月を、わたしは奪ってしまったからね」

「奪ってなんてない！」

たしかに、この三ヶ月の間、俺のして来た事は研鑽ばかりじゃなかった。

イベルタルのデスウイングを受けてしまったハッサムと、そのハッサムとシンクロしていたミリガンは半身が石化していた。その治療を行う為にレムハザードは数日を要した。

その間にミリガンの肉体は衰弱してしまい、立ち上がる事さえ困難になってしまった。

だから、俺は研鑽の傍らでミリガンの介護をしていた。

「俺はミリガンの力になりたくて、だから！」

「うん、わかってる。ありがとう」

ミリガンには命を二度も救われた。その一部でも返せるのなら、なんだってする。

「でも、あなたなら、この三ヶ月をすべて研鑽に注ぎ込めば、もっと高みへ至れていた。それこそ、ザラクのようにエースでなくてもすべてのトレーナーを圧倒出来ていた程に」

そう言うと、ミリガンはモンスターボールを手にとった。

「あなたに足りないものを教えてあげる」

「ミリガン……。うん、お願い！」

この三ヶ月の間に、俺とミリガンの距離はグツと縮まった気がする。

ミリガンが感じてくれたように、俺もミリガンの気持ちを感じ取れるようになった。

彼女も思い悩んでいる。表には出さないようにしているけれど、ヴェゼール・ヴィレッツジ跡地の要塞で起きた一連の事件は彼女の心に深い闇を落とした。

彼女はクローンだ。今でも、あまり信じたくない気持ちだけど、モンテロ博士が研究の成果として生み出した。その目的は、王の力で来るべき災厄たるイベルタルを御する為。

けれど、そのイベルタルはいなくなつた。

生まれた理由の喪失。それは、彼女にとって降って湧いたようなも

のでしかなかった筈だけど、癒え難い傷痕を心に刻み込んだ。
ベッドで寝たきりだった頃、彼女が話してくれた事がある。

『わたしがアガリア警察を組織したのは、正義の為。だけど、その正義は、誰かの為じゃない。わたしの為のものなの。みんなを守り、みんなに認めてもらいたい。クローンであり、親も兄弟もないわたしの存在を肯定してほしいから、わたしは剣を振るってきた。それだけなの』

偉大なる四天王。

アガリア警察の筆頭。

俺は、そんな彼女の立場を漠然と『凄い』と思っていた。だけど、それは間違っていた。

彼女の凄さは、彼女の悲鳴の裏返しなのだ。

彼女には、支えが必要だ。

だから、俺が彼女の支えになる。

彼女の居場所になる。

だって、俺はミリガンが好きだから。

第十章 『激闘、チャンピオンリーグ！』 プロリーグ 『はじまりのバトル』

ポケモンリーグの試合が進む中、アガリア地方全体で変化が起き始めていた。

最初に気付いたのはシャンティ・ジムのジムリーダーだった。

「フシギバナ、ハードプラント！」

「バーナ」

エルフランは日課となりつつある凶暴化した野生ポケモンの対処にあたっていた。

日を追う毎に事態は悪化していく中で、市民がパニックを起こさないように、アガリア政府主導の下で、ジムリーダーをはじめとした一部の超級トレーナーが事態の究明と対処に当たっていた。

けれど、未だに解決の糸口が見えず、今に至ってしまった。

「目的意識を持ち始めた？」

昨日までは無作為に暴れまわるだけだった。街を狙うものもいれば、他のポケモンを襲うものもいて、中には同族を傷つけようとするものまでいた。

けれど、今日になって、ポケモン同士が協力し合うような素振りを見せ始めた。

まるで、大きな目的のために力を合わせているかのようだ。

野生のポケモン同士が一丸となる。それをあり得ない事とは言わない。

かつて、オレンジ諸島で神と呼ばれていた伝説のポケモン、ファイヤーが悪しき者に囚われた時、世界中のポケモンが一斉にファイヤーを救うためにオレンジ諸島へ向かおうとした事がある。

「これは、アレと同じという事なの？」

世界の滅亡。その規模の危機を瀬戸際で食い止めるための種族を超越した本能が理由だとしたら、こうしてポケモン達の行動を阻害する事は結果的に世界の滅亡を呼び込む行為なのではないだろうか。

さりとして、何もせずにいれば市民がポケモンの被害にあう。

「大げさな考えかもしれない。被害妄想だと言われたら、否定出来ない。でも、この懸念が正しかったら、取り返しのつかない事になる」エルフランはすべてのジムリーダーとリーグ関係者に通信を開いた。

誰が応答する間も与えずに自分の考えを告げる。

『馬鹿な』

『それはありえない』

『戯言を聞いている暇はない』

『そんな事のために我々全員に通信を開いたのか?』

当然の如く、否定的な意見が返ってくる。この通信を聞いた者達の多くはエルフランを誇大妄想持ちの女と評価を下した。

けれど、エルフランの表情は変わらない。強張る事も、歪む事もなく、一切の動揺を見せない。それは覚悟をしていたからだ。これらの反応と、その先に待ち受けるすべてを覚悟して、彼女は通信を開いた。その覚悟を受け取った者達がいた。

『全員、黙っている』

声の主は四天王・ザイリン。普段はポケモンリーグ関係者の総括として全権を取り仕切っている男だ。政府の高官であっても、彼の言葉を無視する事は出来ない。

静まり返る通信。自らが生み出した、その沈黙を自ら破り、彼は言う。

『ポケモンの凶暴化。そこに個ではなく、群としての意志が生まれた。それはわたしも感じていた事だ。なるほど、エルフランの懸念には一理ある。レムハザード、思い当たる事はあるか?』

『あら、珍しいわね。わたしに意見を求めるなんて』

バステイロジムのジムリーダー・レムハザードは通信の向こうでクスクスと笑った。

『御託はいい。答えろ。亡霊達はなんと言っている?』

亡霊。それ即ち、『亡霊の港』を魔境たらしめている存在。

空白の時代から、レムハザードと名乗る少女のみが彼らの声を聞

き、支配し続けてきた。

同じ名前を継承し続ける一族。先代レムハザードが死ぬ時、どこからともなく、新たなレムハザードが現れる。先代と今代、そのどちらもを知る者は恐怖に蝕まれる。まったくの別人である筈の二人が、あまりにも似すぎている為だ。それは外見の話ではなく、中身の話。

その言葉、意志、すべてが共通している。

ザイリンも、彼女達のあり方に恐怖を覚えている者の一人。だからこそ、彼が彼女に意見を求める事は異例だった。

『来るべき災厄が始まった』

その一言に再び沈黙が訪れる。通信を開かれている数百名の人間が、誰一人物音一つ立てない。

『……馬鹿な。終わった筈だろう？ イベルタルはザラクが対処した筈だ』

『ええ、イベルタルはザラクが保有している。だからこそ、事態は進んでいる。ポケモン達は、とつくに気付いているの』

『何が言いたいんだ！ はつきりと言え！』

レムハザードのもつたいぶつた言い回しにザイリンは苛立った声を上げた。

『イベルタルは脅威であり、災害であり、けれども『来るべき災厄』ではない。アレは二百年前の災厄の折りに、サラが喚び出してしまったもの。副産物に過ぎないの』

『副産物だと？ アレが副産物に過ぎないだど!？』

ザイリンが激昂する。

来るべき災厄はイベルタル。それが解散したヴリル教団から接收した資料などからザイリンが下していた結論だった。

『レムハザード。何故、今まで黙っていた？』

問いかけたのはオーヴェル・シテイのジムリーダー・ヴァイク。

『最近になって知ったわけじゃないだろう。最初から知っていたな？』

『ええ、知っていたわ。わたしという存在は、それを伝承していく為に在るのだから』

その言葉を聞きながら、ヴァイクは唸り声をあげる。

『それで、黙っていた理由はなんだ？ それに、どうしてこのタイミングになって、その事を話す気になったんだ？』

『終わったからよ』

『なに？』

レムハザードが言った。

『やるべき事はすべてやった。このリーグの結末は、そのまま世界の結末と同義になるわ』

『待て！ それはどういう意味だ！？』

ザイリンが怒鳴る。けれど、レムハザードは答えなかった。

『答える、レムハザード！』

『落ち着きなよ、ザイリン』

なおも問い詰めようとする彼に、軽い調子の口調でカルネジムのジムリーダー・エックスが声をかけた。

『たぶん、もう通信自体を切っちゃってるよ。レムちゃん、そういう所があるしね』

『エックス。お前は何か知らないのか？』

『残念だけど、なんにも。きっと、リーグが終わる時にすべてが分かるんじゃないかな？』

『それで手遅れになったらどうする気だ！？ 世界の結末と直結するだ！』
と！ やはり、エルフランの懸念は正しかったという事ではないか！』

通信による会議は途中、それぞれの仕事や防衛のために一時退席する者がいるなかで進められた。けれど、結果が実を結ぶ事もなく、時間だけが失われていく。

そうしている間に、いよいよポケモンリーグは最終局面へ突入していった。

プロリーグ『はじまりのバトル』

ポケモンリーグの決勝戦は、言葉を交わす事もなく、静かに始まった。

「キイイイイイッ！」

アルトの一体目はキテルグマ。一直線にアギトの一体目であるガブリアスに向かっていく。

振りかぶられるアームハンマを、ガブリアスはドラゴンクローで迎え撃った。

衝突の衝撃は激しく、キテルグマとガブリアスは共に数メートルの距離を吹き飛ばされた。

「ガブウツー！」

ガブリアスがりゅうせいぐんを発動する。落ちてくる流星をキテルグマは見つめる。落下地点を予測し、見出した経路を走破して、りゅうせいぐん発動直後のガブリアスにアームハンマーで襲いかかる。

対するガブリアスは待っていたとばかりに顎を開いた。膨れ上がるほのおエネルギー。それは、だいまんじ発動の予兆。

「キイイイイイッ！」

そう来ると、キテルグマにも分かっていた。だからこそ、走りながらエネルギーを収束させていた。

ガブリアスのだいまんじに対して、キテルグマははかいこうせんを放つ。

至近距離での極大エネルギーのぶつかり合いは両者を大きく弾き飛ばした。どちらも満身創痍である事は一目瞭然。それでも、瞳に燃える闘争心は火力を際限無く上げていく。

「クマーー！」

キテルグマは大地を踏みつけた。揺らぐフィールドに対して、ガブリアスは飛び上がる。

「キイイイイイッ！」

すると、キテルグマは自身が起こした『じしん』によって割れたフィールドの一部を持ち上げた。それをアームハンマーによってガブリアス目掛けて飛ばしていく。

地上から昇ってくる流星に対して、ガブリアスもりゅうせいぐんを放った。

「キイイイイイッ！」

信じ難い光景が広がる。なんと、キテルグマは跳び上がり、降り注ぐりゆうせいぐんをアームハンマーで殴りつけ、その衝撃でガブリアスの頭上よりも上を取った。

咄嗟にだいもんじを放つガブリアス。けれど、全身を燃やされながらもキテルグマはガブリアスに向かって脚を伸ばした。

そして、じしんをガブリアスの体に対して直接発動した。

落下する二体。どちらも戦闘続行不可能である事は誰の目からも分かった。

『い、異様です！ アルト選手、アギト選手、どちらも口を開かない！ それなのに、バトルは成立し、両者相打つ形となりました！』

アルトとアギトは共にそれぞれのポケモンをモンスターボールに戻し、次のポケモンを繰り出した。

カラマネロとソーナンス。互いに正面からの戦闘を行うタイプではない二体。

まず飛び出したのはカラマネロ。サイコカッターを放ちながら接近していく。

けれど、サイコカッターはソーナンスのミラーコートによって跳ね返され、放ったカラマネロ自身に襲いかかってきた。けれど、カラマネロは再び生み出したサイコカッターを返ってきたサイコカッターにぶつけ、そのエネルギーを取り込ませた。

威力を高めたサイコカッターが再びソーナンスに襲いかかる。そして、カラマネロ自身もソーナンスの眼前に到達した。

カラマネロはすでにばかぢからを発揮している。

ミラーコートでサイコカッターを跳ね返すか、カウンターでばかぢからを利用するか、ソーナンスに選択が迫られる。どちらを返しても、どちらかに襲われる。どちらも当たればソーナンスの耐久力では一撃で落とされてしまう。

故に、選んだのは、

「ソーナンス！」

ソーナンスはあまえた。いきなり懐に飛び込まれ、抱きしめられたカラマネロは硬直する。

そして、迫り来るサイコカッターに対して、カラマネロの体を突き飛ばした。

「ネロ!?!」

驚くカラマネロ。けれど、カラマネロに対して、エスパークタイプのわざであるサイコカッターは効果がない。

仕留めたと確信したのだろう。ソーナンスは隙だらけだ。

「待って、カラマネロ!」

思わず、アルトが叫んだ。そう、ソーナンスが見せた隙は囿に過ぎない。

近距離であったからこそ、カラマネロは選択を誤った。アルトの心臓の声を聞く前に、自身の意志でばかぢからを発動してしまった。

カラマネロは元々、大迷宮で多数のポケモンを操っていたポケモンだ。それだけの頭脳を持っていた。それ故に、自己の判断で動いてしまった。

「ソーナンスッ!」

ソーナンスのカウンターが命中する。倍返しにされたばかぢからのパワーは凄まじく、カラマネロの意識は一瞬の内に飛んでいってしまう。

けれど、その寸前にカラマネロは最後の力を振り絞った。

「ソーナン……スウ……」

さいみんじゅつがソーナンスを眠らせる。

アルトは間髪入れずにカラマネロを回収し、ゲンガーを繰り出した。

「シャドーボール!」

「ゲン!」

眠っているソーナンスに抵抗は出来ない。そのまま戦闘不能になっってしまった。

アギトは悔しげに拳を握りしめ、次のポケモンを繰り出す。

「いくぞ、ヘルガー!」

ここに来て繰り出したのは、アギトがこのリーグではじめて使用するポケモンだった。

ヘルガーはあくどほのおの二重タイプを持っている。

「あくのはどう!」

「シャドーボール!」

あくどゴーストのエネルギーがぶつかり合う。衝撃で巻き上げられた土煙がフィールドを覆っていく。

それが、猛烈な勢いのほのおと共にかき消された。

ヘルガーのオーバーヒートをゲンガーは避けきる事が出来なかった。ダメージを負ったゲンガーにヘルガーはあくどほを放つ。

「ゲーン!」

対するゲンガーはあやしいひかりを放った。

そのまま、ゲンガーはあくどほの直撃を受けて戦闘不能に陥ったが、ヘルガーもあやしいひかりの効果で混乱してしまっている。

「ギャラドス! ハイドロポンプ!」

混乱状態のヘルガーは、アルトが新たに繰り出したギャラドスのハイドロポンプを前に棒立ちのままだった。

「みちづれにしろ!」

アギトが叫ぶと、倒れる寸前、ハイドロポンプのダメージで正気に戻ったヘルガーは最後の力を振り絞った。

ヘルガーと共に、ギャラドスも沈む。

「ギルガルド!」

「ジャローダー!」

残るポケモンの数は、アルトが二体。アギトは三体。

これまでのバトルと比べても、勝負の流れが明らかに早い。

「ハードプラント!」

「せいなるつるぎ!」

大地から伸びる無数の蔦。襲いかかるそれらをギルガルドは斬り刻んでいく。

「リーフストーム!」

「つらぬ穿け!」

リーフストームの中をギルガルドはせいなるつるぎで突き進んでいく。

「躲せ！」

「逃がすな！」

リーフストームを突破したギルガルドからジャローダは距離を取ろうと跳ねたが、ギルガルドのスピードの方が速かった。

「りゆうのはどうー！」

「ギル！」

ジャローダがりゆうのはどうを放つが、ギルガルドはそれごとジャローダを斬った。

「まだだ！ ジャローダ！」

「ジャロー！」

満身創痕にもかかわらず、ジャローダはハードプラントを発動した。大量の蔦でギルガルドを包み込んでいく。

「ラスターカノン！」

完全に蔓がギルガルドを覆い隠す寸前、光が瞬いた。

その光はジャローダに命中し、戦闘不能にした。

「リザードン！ オーバーヒート！」

ジャローダを戻すと同時に、アギトはリザードンを繰り出して叫んだ。

それは、これまでリザードンが使って来なかったわざ。おそらくは、最終決戦に備えて新たに覚えさせたのだろう。

蔦を斬り裂き、外に飛び出そうとしているギルガルドにリザードンのオーバーヒートが命中する。

「こうかはばつぐんだ！」

『ギルガルド、戦闘不能！ さあ、アルト選手は残り一体となりました！』

アルトの残るポケモンは一体。

「スピアー！」

「リザードン！」

スピアーが動く。刹那の間にリザードンの背後へ回り込んだ。

そのスピードは、すでに視覚で捉えきれるものではなく、リザードンは己の直感に従ってアイアンテールを繰り出した。

見えていないにも関わらず、アイアンテールはスピアーを捉えかけた。けれど、スピアーは紙一重で回避すると、リザードンの急所にダブルニードルを叩き込んだ。

「グオオオオオオッ！」

リザードンにとって、スピアーは恐ろしい相手だった。

はじめて、ユニオンで戦った時から感じていた底知れなさ。

相手はむしタイプ。相性ならばリザードンに軍配があがる。けれど、あの時もしリザードンはスピアーに追い詰められた。

勝敗を決したのはゲッコウガだったが、やはり、あの時からアルトのエースはスピアーだった。

「リザードン！」

両者共にきずなへんげは使わない。アクセルとアルトのバトルを通じて、きずなへんげが無敵の力ではない事が判明している。

だからこそ、王の力に頼らずにぶつかりあう。

「フレアドライブ！」

「ドリルライナー！」

正面からぶつかり合った二体は共に吹き飛ばされる。

先にダブルニードルを急所に受けていたリザードンは戦闘不能になった。

「頼むぞ、ジュナイパー！」

これで一対一。フレアドライブは軽くないダメージをスピアーに与えている。

優勢なのはアギトの方だ。けれど、観衆は未だに勝敗の行方を予測出来ず、固唾をのんでいる。

それは、誰もが認めているからだ。今大会において、アルトのスピアーに敗北はない。

如何なる難敵に対しても、確実に勝利をもぎ取り続けている。

そのスピード、眼力は既にポケモンとしての極限に達している。

「ジュナイパー！」

「ジュナッ！」

ジュナイパーが矢羽を放つ。それはスピアーから大きく外れた。

「逃げろ、スピアー！」

その意味に、アルトは一瞬遅れで気がついた。スピアーの影に矢羽が突き刺さる。すると、まるで自分自身が貫かれたかのような痛みがスピアーに走った。その上、身動きが取れなくなっている。

「ブレイブバード！」

「ジュナツ！」

「スピッ！」

ジュナイパーのブレイブバードが来る。スピアーは咄嗟に地面に向かつてミサイルばりを放った。粉碎される大地。影に突き刺さっていた矢羽は吹き飛んだ。

自由になったスピアーはギリギリのところまでブレイブバードを回避して、お返しとばかりにミサイルばりを放つ。

一息の内に五つ放たれた魔弾に対して、ジュナイパーはリーフブレードを矢として放ち撃ち落とした。

「スピ！」

スピアーの体がぶれていく。その身が無数に分かれていく。

「ジュナイパー！」

アギトが叫ぶ。そして、かげぶんしんの群の中から本物のスピアーが飛び出してきた。

「ダブルニードル！」

スピアーのダブルニードルがジュナイパーの急所を穿つ。

勝負あった。

誰もが、そう確信した。

アギトとジュナイパー自身を除いて。

「今だ、ジュナイパー！」

「ジュナアアアアアッ！」

ジュナイパーの全身に緑の光が迸る。

これが、ジュナイパーの底力。満身創痕の中でこそ発揮される力。

「リーフストーム！」

「ジュナアアアアアッ！」

「スピッ!？」

リーフストームが無防備なスピアーに襲いかかった。
こうかはいまひとつ。けれど、威力自体が高過ぎる。

「トドメだ、ジュナイパー！」
「スピアー！」

ジュナイパーが矢羽を放つ。そして、スピアーも霞みゆく意識の中でミサイルばりを放った。共に、避ける余力など残っていない。

魔弾が命中した二体は、共に地面に倒れ伏した。

『な、なんと！ これは、両者戦闘不能！ 相打ち！ ポケモンリーグの決勝戦の最後のバトルは相打ちです！』

両者相打ち。それは奇しくも、アルトとアギトがはじめて戦ったユニオン大会での決勝戦と同じ結末だった。

ポケモンリーグの決勝戦が引き分け。それは前代未聞の事態だった。

『少々お待ち下さい！ 現在、協議を行っております！』

リーグの運営もこの自体に慌てているらしい。それからの五分間、アルトとアギトは互いに見つめ合っていた。

この結末に誰よりも納得がいていないのはこの二人だった。

そして、協議が終わる。

『お待ちせ致しました！ 協議の結果、これよりアルト選手とアギト選手にはダブルバトルによって決着をつけてもらう事になりました！』

「ダブルバトル!？」

「なんだと!？」

驚く二人の下に係りの女性が星のような形のものを運んできた。

「これ、げんきのかたまり?？」

「はい、その通りです」

アルトははじめて見るげんきのかたまりに目を見開いた。

『アルト選手とアギト選手はそれぞれ二体のポケモンにげんきのかたまりを使い、回復させて頂きます。それから、最後のバトルを開始致します!』

どうやら、シングルバトルによって決着のつかなかったバトルで、

再びシングルバトルを行うと同じ結果になるかもしれないと判断されたらしい。それ故のダブルバトル。おそらくはポケモンリーグのラストを盛り上げる為でもあるのだろう。

そう考えながら、アルトとアギトはそれぞれ二体のポケモンを癒やした。

そして、その時を迎える。

『さあ、いよいよ最後の戦いです！』

アルトとアギトが二つずつ、モンスターボールをフィールドに投げ込む。

「グオオオオオオオツッ！」

「ジュナツッ！」

アギトが繰り出したポケモンはリザードンとジュナイパー。

そして、アルトが繰り出したポケモンは、

「ギャオオオオオオオツッ！」

「スピイツッ！」

ギャラドスとスピアー。

それぞれのポケモンが睨み合う。

「いくよ、アギト」

「いくぞ、アルト」

これが最後のバトルだ。

第一話『優勝』

アガリア地方ポケモンリーグ・マグノリア大会の最終決戦が始まった。

空中を自在に泳ぐギャラドスにジュナイパーがリーフストームの照準を向ける。そこにスピアーのミサイルばりが迫り、リザードンがアイアンテールで弾き返す。

放たれたリーフストームに対して、ギャラドスはりゆうのはどうを放った。アルトが決勝戦前にわざマシンで覚えさせた新技だ。さっきのバトルではヘルガーにみちづれにされた為に披露出来なかったが、だからこそ、意表をつく事が出来た。

襲いかかるりゆうのはどうにリザードンがオーバーヒートを放つ。

「ギシャアアアアッ！」

そこにギャラドスが追撃のハイドロポンプを放った。

「ジュナッ！」

回避行動に移るリザードンの背中をジュナイパーが押し、効果範囲からの離脱に成功した。

そこにスピアーが現れる。リザードンはフレアドライブを発動した。

紅蓮の業火を纏ったリザードンにスピアーは距離を取った。そして、上空からギャラドスのハイドロポンプがリザードンとジュナイパーに再度襲いかかる。

「グオオオオオオッ！」

リザードンはオーバーヒートを放った。ぶつかり合う炎と水が大爆発を起こす。

「いくぞ、スピアー！ ギャラドス！」

「いくぞ、リザードン！ ジュナイパー！」

大爆発によって生じた空白の時間。

その瞬間に、四体のポケモンは一斉にきずなへんげを遂げた。

青く染まり、緑雷を纏うスピアーとギャラドス。

赤く染まり、黒雷を纏うリザードンとジュナイパー。

青と赤の戦いは一気に激化していく。

「ミサイルばり！」

「リーフブレード！」

放たれた二つの魔弾はフィールドの中央部でぶつかり合い、そして破裂した。

さっきのオーバーヒートとハイドロポンプのぶつかり合いとは比較にならない程の衝撃がフィールド全体を襲う。その衝撃波を貫いて、スピアーがジュナイパーに接近した。

「スピーツ！」

ニードルの先から迸る緑の雷霆が束ねられ、鋭く長い槍と化す。

「ダブルニードル！」

「リーフブレード！」

迫りくるスピアーのニードルに対して、ジュナイパーは常ならば矢として放つリーフブレードを握りしめ、その軌道を逸した。そして、がら空きの胴体にそのままリーフブレードを叩き込もうと振りかぶる。

「ギャオオオオッ！」

すると、頭上からギャラドスのアクアテールが迫ってきた。

回避の間に合わないジュナイパーをリザードンが回収する。

その背後には、既にスピアーが迫ってきていた。

ジュナイパーはリザードンに抱えられながらかげぬいを放つ。地

上の小さな影を縫い留められ、スピアーの動きが僅かに止まった。

「オーバーヒート！」

即座に反転して、リザードンがオーバーヒートを放つ。そこに、ギャラドスもハイドロポンプを放った。共にきずなへんげによってパワーが跳ね上がった状態での激突。その衝撃に備えて、観客とトレーナーの位置に電磁シールドが展開した。

これは観客とトレーナーにポケモンのわぎの流れ弾が当たらない為の措置だ。けれど、直後に巻き起こった水蒸気爆発は電磁シールドの耐久限界を一撃で上回ってしまった。

『こ、これはいけません！ 観客席とトレーナーを守る為の電磁シールドのシステムがダウンしてしまいました！ 両選手、一時試合を中断して下さい！』

実況のジーンが慌てた調子で叫ぶ。次に同じ事が起きれば大惨事になってしまう。

けれど、アルトとアギトは止まれない。一手誤れば即敗北につながる極限のバトルが二人の集中力を高め過ぎていた。

『両選手、試合は中断です！』

ジーンが叫ぶが、アルトとアギトには届いていない。やむなく、ジーンは観客に避難するように叫んだ。

その時だった。突然、バトルフィールドが眩い光に包まれた。

《みらいよち》

光に満たされた世界に、その言葉が響き渡った。

第一話『優勝』

光が晴れると、目の前には信じられない光景が広がっていた。

さつきまで、ポケモンリーグの会場にいた筈なのに、俺達はクレルモア大平原の上空にいた。俺はギャラドスに、アギトはリザードンに乗って、互いを見つめる。

状況は実に不可解だ。だけど、それがどうしたというのだろうか。

俺達のバトルには、まだ決着がついていない。

「他の事なんて後回しだ！ いくぞ、アギト！」

「ああ、来い！」

スピアーとジュナイパーが飛び出す。フィールドが変わった事で、バトルも変わる。

「ギャラドス！」

「リザードン！」

ギャラドスとリザードンも俺達を乗せたままバトルを再開させた。リザードンのオーバーヒートが迫る。ギャラドスはハイドロポンプで迎え撃った。

三度巻き起こる水蒸気爆発による衝撃の中でスピアーはジュナイパーに肉薄する。

「ジュナツ！」

「スピイツ！」

スピアーのダブルニードルとジュナイパーのリーフブレードがぶつかり合う。

その度に余波で大地が割れた。空が裂かれた。

「りゅうのはどう！」

「オーバーヒート！」

ポケモン達からのフィードバックによるダメージが積み重なっていく。

全身が今にもバラバラになりそうだ。けれど、へこたれている暇なんてない。

この痛みはスピアーとギャラドスのものだ。彼らが戦い続ける限り、俺も戦い続ける。

「スピアー！」

「ジュナイパー！」

緑の雷光と黒の雷光が大地を変質させていく。

そこにリザードンとギャラドスの攻撃も降り注ぎ、大地は地獄の如き様相を呈してきた。

渓谷の如き亀裂が無数に走り、底の方は赤く煮え滾った溶岩が流れている。

空にも雷鳴が轟き、それでもバトルは終わらない。

「ハア……、ハア……、グッ」

どれほどの時間が経過したのだろう。意識が朦朧とし始めて、きずなへんげを維持できなくなってしまった。それはアギトも同じらしく、四体のポケモン達は本来の姿に戻りながら睨み合っている。

「これ、が……、最後の攻防だ！ アルト！」

「いく、ぞー！」

アギトの言う通り、これが最後の攻防となる。

限界はとうの昔に超えている。あとは意地の張り合いだ。先に切れた方が負ける。

「ダブルニードル！ りゅうのはどう！」

「リーフブレード！ オーバーヒート！」

広大な平原の上空を縦横無尽に飛び回りながらバトルは続いていく。

吐き気がして、目眩がして、今にも意識が飛んでしまいそうだ。

だけど、ここを超えた先にこそ、勝利はある。

「はかいこうせん！」

「はかいこうせん！」

ギャラドスとリザードンが同時にはかいこうせんを放つ。

オーバーヒート、アイアンテール、フレアドライブに続く、ここまで温存して来たリザードンの四つめの技もはかいこうせんだったらしい。

双方の間に広がる距離は一キロを超えている。それでも、はかいこうせんは威力が減衰する事なくぶつかり合った。

「ミスイルバリ！」

スピアーに命じる。はかいこうせんの激突のドサクサに紛れて、抜け目なくリザードンの傍まで接近していた。限界である五発を超え、六のミスイルバリを発射する。

リザードンがオーバーヒートを放つが、ミスイルバリは自在に軌道を変えてオーバーヒートを乗り越えていく。そこにジュナイパーのリーフストームが放たれた。

その発射の瞬間をギャラドスは見逃さなかった。りゅうのはどうがジュナイパーに襲いかかる。

リザードンはジュナイパーを抱えて急降下した。りゅうのはどうを回避し切ると、反転してスピアーにオーバーヒートを放つ。

「ドリルライナー！」

スピアーは回避せず、オーバーヒートをドリルライナーで貫いた。

ジュナイパーが慌ててリーフストームを放つが、オーバーヒートの火力が逆にスピアーを守り、遂にリザードンに肉薄した。

ドリルライナーがりザードンの急所を穿つ。

その時だった。落ちていくリザードンの遥か先に、二人の子供の姿が見えた。

白い髪の女の子と、青い髪の男の子。

男の子は俺達を見つめている。見える筈のない距離なのに、その瞳に宿る感情が分かる。

ワクワクして、ドキドキして、いつか、自分もこういうバトルがしたい。

そうだ。さっき、光に包まれる前に声が聞こえた。

みらいよち。これはポケモンのわざだ。過去に未来を映す技。

「レムハザード!?!」

ユキノオーに乗って去っていく少年と少女を見送る後ろ姿が見える。

あの日、あの時、彼女はそこにいた。

俺達の運命を変えたバトルは、彼女が見せた未来。

俺が憧れたのは、俺のスピアーだったんだ。

レムハザードが俺を見た。すると、俺達は再び光に包まれた。

そして、戻ってきた。

『も、戻ってきました！ 突如、謎の光に包まれて消えてしまった二人が帰って来ました!』

実況の叫び声が聞こえる。観客席はガランとしていた。

残っているのはバレット、エリザ、アクセル、セラ、ヴォルフ、それに一部のトレーナーのみ。

「戻ってきたのか?」

アギトは額を押さえながら言った。

「みたいだね」

リザードンは気を失っている。そして、ギャラドスも倒れ伏した。

どうやら、俺が別の事に気を取られている内にジュナイパーが技を放っていたらしい。ギャラドスの急所にリーフブレードが突き刺さっている。

「これが、本当に最後だ!」

「いくぞー!」

スピアーとジュナイパーがニードルとリーフブレードを手に斬りつけ合う。

共に満身創痍。一撃を食らった方がダウンする。

「スパイアー！」

「ジュナイパー！」

ジュナイパーは片手でリーフブレードを振るいながら、もう片方の手で矢羽を投げた。

スパイアーは咄嗟に横へ移動してかげぬいから自身の影を守る。

すると、その移動した先にギヤラドスに突き刺さっていたリーフブレードが飛んできた。

「スピッツ！」

前後から同時に襲いかかってくるリーフブレードに対して、スパイアーは回転した。

一息の内に最高速度に達したドリルライナーの回転はジュナイパーのリーフブレードを削り、ジュナイパー自身を引き込もうとする。

ジュナイパーは咄嗟にリーフブレードから手を離して跳び上がった。

「今だ！」

ドリルライナーで回転しながらも、スパイアーの眼力はジュナイパーを狙い続けている。

「ミサイルばり！」

回転しながら、スパイアーはミサイルばりを放った。

その速度は回転の速度も合わさり、弾丸の如くジュナイパーの急所を穿った。

「こうかはばつぐんだ！」

「ダブルニードル！」

スパイアーは地面を蹴りつけ、ジュナイパーにトドメのダブルニードルを繰り出した。

「……楽しかったな、アルト」

「うん」

アギトはモンスターボールを掲げる。

『ジュナイパー、戦闘不能！ この瞬間、アルト選手の勝利が決定しま

した！ 観客席は避難の為にガラガラですが、代わりにわたしが拍手を送ります！ アガリア地方ポケモンリーグ・マグノリア大会！ 優勝者はアルト選手です！」

勝った。決勝戦で勝利した。

ポケモンリーグ、優勝だ！

「やった……」

「スビ……」

まだ終わったわけじゃない。この後、すぐにでもチャンピオンリーグが始まる。

いよいよ、ミリガンやザラクと同じ舞台で戦う事が出来る。

だけど、今だけは！

「やったあああああああつ！」

「スビiiiiiiiiiiiiッ！」

第二話『終わりと始まり』

俺とアギトのバトルによって、ポケモンリーグの会場はボロボロだった。

観客達も一時的に避難してしまっている為、表彰と閉会式は翌日に持ち越される事になった。

崩落の危険があるという事で、選手用の部屋も立ち入りが禁止されてしまい、俺達はリーグ側が用意したホテルの一室を宛てがわれた。「おめでとうございませー!」

がんばって戦ってくれたスピアー達のケアをしていると、部屋にエリザが飛び込んできた。その後からバレット、アギト、アクセル、セラもぞろぞろと入ってくる。

「スपीイ」
ニードルを磨いている最中だったスピアーはちよつと不機嫌そう
だ。

「そう不満そうな顔をするなよ、スピアー。お祝いにポフレ買ってき
たぜ」

バレットが差し出してきたのはワイオルネブランドの高級ポフレ
だった。前にサレナ・シテイで食べさせた事があり、スピアーが大い
に気に入っていたものだ。

「スपीイ!」
手の平をドリルライナーの如く回転させるスピアー。

「ありがとう、バレット」
「オレだけじゃねーよ。アギトの発案で、全員で出し合ったんだ」
なるほど、アギトらしい。

「みんな、ありがとう」
みんなの手にはお菓子やジュースの入った袋が握られていた。
どうやら、一足先に祝勝会を開いてくれるみたい。

折角だから、ポケモン達とも一緒に祝おうと思い、ホテルのバトル
フィールドを借りる事にした。バトル目的以外の利用は断られるか
とも思ったけれど、ホテルの人に頼むと快く了承してくれた。

広々とした空間に三つのバトルフィールドが並んでいる。今夜は俺達の貸し切りにしてもらえた。

全員のポケモンが飛び出してくる。

「出て下さいー！」

エリザのポケモンはユキノオー、マニニューラ、クレベース、レジアイス、それからリーグでは出さなかったユキメノコ、パルシェンだ。

エリザとはリーグが終わった後にバトルの約束をしている。その時は出さなかった二体の力も見せてもらえる筈だ。楽しみで仕方がない。

「よっし、お前ら出てこいー！」

バレットのポケモンはライチュウ、エレキブル、レントラー、フーデイン、マリルリ、それに、エリザ同様に出さず仕舞いになったエレザード。

エレザードで戦うバレットも見てみたい。マリルリとも戦ってみたい。エリザの次はバレットだ。

「出てこい！」

アギトのポケモンはリザードン、ガブリアス、ジャローダ、ジュナイパー、ソーナンス、ヘルガー。戦ったばかりのポケモン達だけど、あの熱いバトルは今でも心を燃え上がらせる。是が非でももう一度戦いたい。

「全員出てこいー！」

アクセルのポケモンはファイアロー、クロバット、ジュペッタ、ルチャブル、オンバーン、サンダーズだ。ジュペッタには苦戦させられたし、ファイアローを筆頭とした高速戦闘は手に汗を握らずにはいられなかった。まあ、アクセルはいつでも戦えるから問題ない。リーグが終わっても、毎日の充実は約束されている。

「出てきて、みんな」

セラもポケモンを出した。

「ピツカー！」

「サナー！」

ピカチュウとサーナイトだ。前に会った時は他にもポケモンを

持っていたはずだけど、今は本来のトレーナーの下に返したらしい。つまり、この二体こそがセラにとつての本当のパートナー達という事だ。

「みんな出てこい！」

俺のポケモンはスピーアー、キテルグマ、ギルガルド、ギャラドス、カラマネロ、ゲンガー。それに、応援に来てくれたお父さん達に預かってもらっていたフーパ。

ちなみに、お父さん達は俺達が破壊した会場の修繕に駆り出されてしまい、ちよつとしか話す事が出来なかった。だけど、しつかりとお祝いの言葉をくれた。

「アートー！」

飛び出してきたフーパはいきなり抱きついてきた。

「アート、カツコヨカタター！」

「ありがとう、フーパ」

「デモデモ、フーパモイツシヨニリーグシタカタヨ！」

「ごめんね」

フーパはちよつと規格外過ぎる。だから、ポケモンリーグでは外れでもらった。

「でも、チャンピオンリーグでは一緒に戦おう！」

「ホント!? ワーイ！ ヤッター！」

チャンピオンリーグは四天王やチャンピオン、歴代のリーグ優勝者と戦う事になる。

前回のポケモンリーグでは四天王・フレデリックがサンダーを使っていたし、ルギアと共に戦うトレーナーもいた。だから、フーパを出す事を躊躇う必要はない。そういう舞台なのだ。

「チャンピオンリーグか、戦ってみたかったな」

少し落ち込んだ様子でアギトが呟いた。

「どんまいどんまい。来年がんばんな」

バレットがてきとうに励ます。

「……そうだな。来年がある。バレットも当然出場するよな？」

「いや、オレはもう出ないぞ」

「え?」

バレットの言葉に俺達は目を丸くした。

「ど、どうして!？」

当然、バレットも来年のリーグに出場するものだと思っていた。

「だって、オレがリーグに出たのはお前らに付き合っただけだしな。ナザレ様にも誘われてるし、オレはメルカトジムのジムトレーナーになる。いつかは再挑戦するかもしれないが、来年はさすがに忙しくて無理だろうな」

「出ないのか……」

アギトが寂しそうに肩を落とした。

「落ち込むなっての! バトルの相手なら、いつでもしてやるからよ。メルカトに遊びに来いよな」

「ああ!」

「俺も行くよ!」

「わたしもです!」

バレットは既に将来を見据えて新しい道を歩み始めていた。

少しさびしい。でも、バレットが決めた事なら、それが一番いい事なんだ。

「オレは来年のリーグに備えて修行だな。どうせだから、他の地方にでも行ってみようかと思う。カントーのセキエイ大会が半年後に開催されるから、そっちのジムを回ろうかな」

「カントーっていうと、あのオーキド博士のいる地方だよな?」

オーキド博士といえば、ポケモンの権威。ポケモン図鑑の製作者でもあり、ポケモントレーナーにとっては憧れの人だ。

「エリザは来年どうするんだ?」

「わたしですか? わたしもリーグは今年だけですな。それより、コンテストの方に興味があるんですよ!」

「コンテストに!？」

アギトが思いっきり食いついた。旅の間の雑談で、彼はよくコンテストの話をしていた。

この三ヶ月の間にも一度出場してリボンを一つ手に入れたらしい。

「あのコンテスト、わたしもお姉ちゃんと観に行つたんですよ。いつものバトルとは違って、ポケモンのわざを美しく見せる為の舞台に感動しちゃいました!」

俺も観に行こうと思った。だけど、ミリガンの看護が忙しくて行けなかった。

「エリザが出場するなら、絶対観に行くよ!」

「ほんとですか!?!」

俺の言葉にエリザは満面の笑顔を浮かべた。そこまで喜ばれると、ちよつと照れくさい。

「そうだ! セラもどうですか? コンテスト!」

「わ、わたし?」

それまで静かにしていたセラはいきなり話題を振られて目を丸くした。

「いいんじゃない? 前にテレビで見た時、すごいすごい言つてたじゃん」

アクセルの言葉に「そ、それはそうだけど」と悩ましげな表情を浮かべている。

「あ、アルトはどう思う?」

「え?」

「その……、コンテスト、出てみるべきって思う?」

少し考えてみた。セラはあまり暴力的な事が好きじゃない。けど、ポケモンの事は大好きだ。

「うん! いいと思うよ。セラにはリーグとかより、コンテストの方が合つてると思う」

「そっかー。うん。じゃあ、出てみる」

セラが言うと、何故かエリザが変な顔で見てきた。

「ま、まさか、セラつてばライバルですか?」

「うん。そうみたいだね」

「ほほう」

セラに火花を飛ばすエリザ。対する、セラは舌をペロツと出して悪戯っぽく笑つた。

「でも、それはコンテストのだよ」

そう言うと、アクセルの腕に自分の腕を絡ませた。

「ねー」

「ねーって、何がだよ？」

アクセルは首を傾げている。なんて鈍い男だ。

「セラ、苦労しそうだね」

「お前が言うなよ」

「え？」

何故かバレットに呆れられた。

「つていうか、諦めてないならさつきと告っちまえよ」

そう言っつて、彼はエリザを煽った。

ちよつと考える。そして、バステイロジムでの出来事を思い出した。

あの時のエリザやバレットの言動が脳裏に浮かんでくる。

『なんだ？ お前、アルトが好きだったのか？』

『べーつーにー』

『あつはっは！ 振られてやんの！』

あの時はあんまり深く考えなかったけれど、そういう事なのだろうか。

「そっか」

俺はエリザを見つめた。

「な、なんですか？」

「エリザ。ちよつとだけ待っててもらえる？」

「ほえ？」

エリザの想い。それは分かった。だけど、俺にはやらないといけな
い事がある。

「うん。まずはチャンピオンにならないとね」

「いや、ちよつと!! えっ!! 待ってって、ほえ!!」

仰天するエリザ。どうしたんだろう。

「えっ、おまつ！ ミリガンが好きなんじゃないのか!?!」

「え？ 好きだけど？」

「ちよつと!?! えっ、弄ばれてますか、わたし!?!」

「なんか、変な誤解が生まれている気がする。」

「あつ、そういう事?。」

「セラがポンと手を叩いた。」

「ん?。」

「アクセルが首をかしげる。」

「アルト。ミリガンの事、どういう風に好きなの?。」

「難しい事聞くね」

「どういう風に好きなのか、それは実に難しい質問だ。」

「彼女は恩人だ。彼女の笑顔が好きだ。彼女の支えになりたい。」

「この感情を言葉で表現すると、そうだな……、」

「お母さん……?。」

「お母さん!?!」

「いや、ちよつと違ったかもしれない。」

「うーん。でも、一番近いの、お母さんかな?。」

「いや、ミリガンはお前の母ちゃんじゃないだろ!?!」

「バレットに突っ込まれた。」

「いや、それはそうなんだけどさ。お母さんっていうか、お姉ちゃん?。」

「それはレムハザードだろ」

「そうなんだけど、うーん。レムハザードは、なんか違うっていうか」

「えっ、待って!?! アルトって、お姉ちゃんいたの!?!」

「おっと、セラは知らなかったようだ。」

「何を言ってるんだ? オレとアルトとセラとレムハザードは実の兄弟だぞ。レムハザードが長女だ。ちなみに、オレにとってはセラも姉になる」

「え?。 え?。 え?。」

「アギトのカミングアウトにセラの目は点になっている。」

「な、なんと雑なカミングアウトを……」

「おまつ、オレが後でそれとなく教えるつもりだったのに」

「え?。 アクセル知ってたの!?!」

「お、おう。レムハザードに聞いたよ」

「ちよつと、どういう事!? えっ!? アルトって、わたしの兄弟なの!?

それに、アギトくんも!?”

「くんは知らないぞ、姉さん」

「姉さん!?”

うーん、混沌としてきた。

「それよりも!?”

おっと、エリザが迫ってきた。

「ミリガンはアルトにとつて、お姉ちゃんって事ですか!?”

話が戻ってきた。

「そ、それに近い感じかな?」

俺だって、ドラマやアニメは見た事がある。だから、恋愛の事だつて、まったく知らないわけじゃない。だけど、ミリガンに対する想いは、そういうものとは少し違う。

ある意味で、もっと純粹なものだ。

「俺はミリガンの力になりたいと思ってるんだ。それは、やっぱり困った表情を浮かべている時のお母さんを見た時と同じものな気がする」

強くて、凛々しくて、穏やかで、優しい。そんな温かいミリガンが苦しんだり、辛い想いをしてしていると胸が痛くなる。それも、やっぱりお母さんに対して抱く気持ちと同じものだった。

そう思うのは、きつと……、

「ミリガンはいつも俺を見守ってくれていたから」

はじめて会った日から、彼女は俺の事をいつも心配してくれていた。

旅立ちを決意した時も、背中を押してくれた。

ヴリル教団との戦いでは、いつだって守ろうとしてくれていた。

「変な事を言ってる自覚はあるよ。でも、俺にとって、ミリガンはそういう存在なんだ」

だからこそ、俺はチャンピオンにならないといけない。

彼女が安心出来るように、彼女が気を張らなくてもいいように、彼

女が疲れた時に支えてあげられるように。

助けてくれた恩義を、見守ってくれた恩義を返したい。

彼女の心遣いに報いたい。

「そ、それで……、わたしの事は？」

顔を真っ赤にしながら、エリザが問いかけてくる。

「あつ、いえ！ 待ってって言ってましたものね！ ええ、待ってます！ 待ってますから！ だから……、あの……、その……」

もじもじするエリザに俺は言った。

「うん。その時は、ちゃんと答えるよ。ごめんね、待たせちゃって」

「い、いえ！ ぜんぜん！ 全然問題ありませんよ！」

「ありがとう」

正直、恋愛自体は知っていても、ちゃんと理解出来ているわけじゃない。

なにしろ、はじめての事だからだ。

もちろん、エリザの事は大好きだ。でも、それは友達としてだと思う。

だから、やっぱり時間は必要だ。ちゃんと、彼女の想いに向き合う為に。

「どこにもかくにも、まずはチャンピオンにならないとね」

ミリガンを支える為にも、エリザの想いに応える為にも、そして、なによりもザラクを超える為に、俺は勝たなければならない。

「頼むよ、みんな」

「スピー！」

「クマー！」

「ギルツ！」

「ネーロ！」

「ギャオ！」

「ゲーン！」

「フーパニオマカセー！」

祝勝会は夜遅くまで続いた。

そして、夜が明けた。

第二話『終わりと始まり』

リーグの修繕は無事に終了したらしく、開会式の前に三位決定戦が行われ、アクセルが無事に勝利した。

そして、俺とアギト、アクセルの三人は表彰台にあがった。

「優勝おめでとう」

優勝杯をくれたのは、どこかエリザに似ているほっそりとした美しい女性だった。

彼女こそ、四天王・シエル。チャンピオンリーグで、俺が戦うべき相手の一人。

「これで、あなたはチャンピオンリーグへの出場権を得ました。開催は一週間後。準備をしっかりとね」

「はいー」

いよいよ、チャンピオンリーグが始まる。

第三話 『開幕、チャンピオンリーグ』

ポケモンリーグが終わった翌日、チャンピオンリーグのトーナメント表が公開された。

参加者はチャンピオンと四天王を加えて九人のみ。そもそも、チャンピオンリーグの参加権は歴代のポケモンリーグ優勝者のみが保有している。その上、参加権には期限があり、十年単位で失効してしまうそうだ。だから、九人という数は多くもないけれど、少ないわけでもない。

チャンピオンと四天王にはシード権が与えられている為、はじめは歴代優勝者である四人が戦う事になる。一回戦と二回戦を勝ち抜いた者が四天王の一人目であるシエルに挑めるのだ。更に、シエルに勝つ事が出来れば、次はザイリン、フレデリック、ミリガン、そして、ザラクの順に戦う事が出来る。

チャンピオンと四天王の序列はチャンピオンリーグの結果によって変化する。例えば、歴代優勝者が最下位の四天王であるシエルに勝てれば、その時点でシエルは四天王ではなくなり、彼女に勝利した者が四天王の末席に加えられる事になる。そのまま、ザイリンに勝てば第三位の地位を得られ、敗北したザイリンは第四位に落ちる。

まさに弱肉強食の世界。にも関わらず、四天王の入れ替わり頻度が低いのは、彼らの実力が歴代の優勝者達と比較しても圧倒的故だ。

序列最下位のシエルはアガリア王家の末裔。アガリア全土のポケモンバトルの大会を取り仕切るジュリアス財団の会長でもあり、エリザと同じくこおりタイプのエキスパートだ。

第三位のザイリンはポケモンリーグの運営と総括を担当している男だ。事務職故に目立たないけれど、その実力は序列が示す通り、シエルよりも上だ。いわタイプをエキスパートとしているらしい。

第二位のフレデリックはあまり情報がない。ただ、彼が北国で暴れまわるサンダーを単独で鎮めた話はネットのニュースサイトで取り上げられていた。

そして、第一位がミリガン。彼女の実力はよく分かっている。一昨

日の夜、彼女からバトルの手解きを受けた時に約束した。チャンピオンリーグで戦う時は一切の手加減をしない事を。彼女のエキスパートは剣。ポケモンのタイプではなく、刃を持つポケモン達を駆る。彼ら全員に勝てなければ、チャンピオンに挑む事さえ叶わない。チャンピオン・ザラク。歴代最強のチャンピオン。ポケモントレーナーの頂点。歩く災害。俺にとって、憧れの人。

彼と戦う為に、俺はここまで来た。

第三話『開幕、チャンピオンリーグ』

「スピアー、ダブルニードル！ ギルガルドはせいなるつるぎ！」
チャンピオンリーグまでの一週間は長いようで短い。

相手はポケモンリーグの歴代優勝者達だ。勝ち抜く為には更なる力が必要となる。

アルトは寝る間も惜しんで自主練に励んでいた。

「アルトー！」

そんなアルトの下に一人の男が近づいてくる。明らかにガラの悪そうな人相の男だ。

「あれ？ ヴォルフ？」

手を振りながら近づいてくるのは、リールジムのジムトレーナーにして、アガリア警察随一の武闘派集団であるリール署の副署長であるヴォルフだった。アルトがポケモンリーグの一回戦で戦った相手でもある。

「よう、精が出るのう」

「どうかしたの？ っていうか、仕事は大丈夫なの？」

ポケモンリーグに出てたり、こんな所をウロウロしていて、仕事をクビになったりしないのだろうか？ アルトは疑問に思った。

「安心せえ。こう見えて、わしは有能やからな。早々クビにはならへん。それよか、アルトには謝つとかんといかんからな」

「えっ？」

戸惑うアルトに対して、ヴォルフは頭を下げた。

自分より遥かに年上の大人に頭を下げられて、アルトは目をパチクリさせた。

「ほ、ほんとにどうしたの!？」

「ほれ、一回戦の事や。ありや、確かにリーグの試合中にする事やなかったな」

「ありやつて?」

首を傾げるアルトにヴォルフは苦笑しながら言った。

「ポケモンの技術の指導や」

「それって、バトルの途中に言ってた事?」

「せや」

ヴォルフはアルトの機嫌が悪くならない事にホツとしつつ語った。

「本当なら、リーグで学ぶべき事なんやけど、あん時はヴリル教団のせいでゴタゴタしてたからのう。きっちり教えてやれんかったからのう。こつから先、チャンピオンリーグでこいつを知らんのはハンデとしてデカすぎる。せやから、改めて教えにきたんや」

「よく分からないけど、決勝戦の前にミリガンからいろいろ教えてもらったよ? ポケモンバトルの駆け引きについてとか」

「そら最低限の事やで。つてか、そか、そこからなんやな」

アルトの言葉にヴォルフは渋い表情を浮かべた。

「そこら辺はサレナジムで教えてもらえる筈なんやけど、ノエルのやつは何しとんねん」

どこか呆れた様子でヴォルフはつぶやいた。

「まあ、そこら辺も教えたるわ。せやけど、本命は別や。ええか? わしが教えるんはポケモンを使う技術やない。ポケモンがバトルで使う為の技術や」

「ポケモンがバトルで使う為の技術?」

「せやせや。例えば、呼吸法。息の仕方一つで、ポケモンの力は増減するんやで」

「息の仕方で!？」

アルトの驚く顔を見て、ヴォルフは力強くうなずいた。

「せやー! 他にも、最低限の動きで敵の攻撃を躲す為の足捌きや手捌き。攻撃を受ける時にダメージを低減させる構えや筋肉の使い方。リーグはそういう技術を教える為の場所でもあんねん。どや?」

一人で鍛錬を積むのもええと思うが、この一週間、わしに預けてみんか？ 絶対に損はさせへん！」

ヴォルフの真摯な眼差しを受けて、アルトは不思議そうにつぶやいた。

「どうして、そこまでしてくれるの？」

それは純粹な疑問だった。

「俺、試合のときに酷い事を言ったのに……」

思い返してみると、愛想を尽かされても仕方のない物言いをしていった。

「ありや、わしが悪い。せやから謝ったんや。真剣勝負の場でやる事とちやうからな。折角ならポケモンリーグの試合の中で教えたら、とか悪ノリしてもうた。ほんま、すまん」

またしても謝るヴォルフにアルトは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ううん。俺の方こそ、ごめん。ヴォルフは俺の事を考えてくれたんだよね？」

「せや。アルトはもっとつよになれる。その為に力になりたいんや。もう一度聞くで？ わしにチャンピオンリーグまでの一週間、預けてくれんか？」

「ヴォルフ……。うん！ こちらこそ、お願いします！」

それからの一週間、アルトはヴォルフに様々な事を教えてもらった。

アルトだけではない。彼のポケモン達もヴォルフのポケモンから技術を仕込まれた。

エネルギーの効率を良くする呼吸法。体を揺らさない移動法。フレイントやだましうちにも通じるものがある体捌き。他にも様々な技術をスパアー達は体得していった。

そして、一週間後、いよいよチャンピオンリーグの開会式が始まった。



『さあ、今年も始まりました！ チャンピオンリーグ！ 実況はわた

くし！ ジーンが勤めます！』

チャンピオンリーグの開催地は通常のポケモンリーグと同じだ。けれど、そのバトルフィールドたるコロシウムはポケモンリーグのスタジアムよりも奥に存在している。

ポケモンリーグとは比較にならない程堅牢なつくりで、広さも数倍以上だ。フィールド内には森や湖、砂漠、雪原などが点在していて、天候まで機械によってランダムに変化していく。強い日差しが降り注ぐかと思えば、次の瞬間には雷鳴が轟き、そして雪が降る。そんな事もあり得るのだ。

『あまねくポケモントレーナーの頂点。それがチャンピオンです！ さあ、今年のチャレンジャー達は四天王を、チャンピオンを超える事が出来るのでありましようか!? それとも、今年もチャンピオンが王座を守るのでしょうか!? はたまた、四天王の下剋上はあるのでしょうか!? 一秒たりとも目の離せない大激戦が、もうすぐ始まります！』

俺は割り当てられた個室の中でその実況の言葉を聞いていた。

そして、しばらくすると部屋の大画面にトーナメント表が表示された。

一回戦の相手はヴァルカスという大柄な男性だ。

彼も過去のポケモンリーグで優勝を果たしたポケモントレーナー。

相手にとって不足はない。

「行こう」

モンスターボールを握りしめながら、俺はポケモンリーグと同じく移動装置に乗ってチャンピオンリーグのバトルフィールドへ向かった。

「よーっす！ 久しぶりだな、ルーキーー！」

到着するなり、真横の大画面から声が響いた。

どうやら、相手のトレーナーと通信が出来るようだ。

このバトルフィールドはとてつもなく広大だ。相手のトレーナーを双眼鏡でも使わない限り見る事すら出来ない。だからこそその設備なのだろう。

このバトルフィールドの中でもポケモン達に指示を的確に出せるようにポケモン達にはそれぞれインカムを装着させている。インカムといっても耳につけるタイプではなく、体のどこかに付けておけばトレーナーの声が届くようになる最新の機械だ。

「えつと？」

それにしても、久しぶりとはどういう事だろう？

「なんだあ？ 忘れちゃったのか？ シヤンティとクレルモア大平原の間の森でバトルしたろうが！」

「あつ、ああ！ オオスバメの！」

思い出した。そうだ。彼はシヤンティ・シティから旅立った日にはじめて野良バトルを行った相手だ。あまりにも昔の事だったからすっかり顔を忘れていた。

「ええっ!? おじさんも優勝者だったの!?!」

「おじさん言うな！ そして、その通り！ やはり、オレの睨んだ通り、光るもんがあつたようだな！ さあ、バトルだ、バトル！ トレーナー同士、目と目が合ったらポケモンバトル！ 準備はいいかい？ ルーキー！」

ポケモントレーナー・ヴァルカス。あの時は何も出来ないまま負けてしまった。

あの頃とは違うという事を教えてやる！

「ああ、もちろんだ！」

「良い返事だ！ カモン、オオスバメ！」

「スバァ！」

飛び出してきたのはオオスバメ。肉眼では見えないけれど、近くに配置されている複数の大画面で確認出来た。どうやら、フィールドのあちこちにカメラが仕掛けられているらしい。

「いくぞ、ギルガルド！」

「ギルツ！」

「ギルガルドかあ！ そいつでオレのオオスバメのスピードについてこれっかあ？」

その言葉と共にオオスバメの姿がカメラからかき消えた。

そして、彼方から黒い影がミサイルのように一直線に飛んでくる。
「来るぞ、ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドが構えた瞬間、オオスバメの速度が跳ね上がった。数百メートルの距離が刹那の後にゼロとなる。音速を超えて飛来した敵に、けれど、ギルガルドは臆さない。

冷静に、音速の魔弾を神速の斬撃によって迎え撃つ。鋼同士がぶつかり合う音が響き渡る。どうやら、オオスバメははがねのつるぎを発動していたらしい。

激突の衝撃は激しく、風圧が土煙を舞い上げた。その外側へ無傷のオオスバメが飛び出してくる。

「スバァアアアアアアア！」

オオスバメのぼくおんぱが土煙を吹き飛ばし、大地を鳴動させる。わざのパワーも、その機動力も、これまで戦ってきたポケモン達とは一線を画している。

まるで、あのイベルタルと再戦しているかのようだ。

「だけど、俺達は負けない！ ギルガルド、すべてを斬り裂け！」

「ギルツ！」

ギルガルドの刀身が眩く輝く。このフィールドなら、観客席に対する被害を憂う必要はない。ギルガルドの真の力を発動させる事が出来る。

ギルガルドの刀身が振り上げられる。放たれた極大の斬撃はぼくおんぱを引き裂き、オオスバメに迫る。

「スバァ！」

オオスバメは咄嗟にぼくおんぱを中断して回避行動に移った。その直後、オオスバメの真横の空間が斬り裂かれた。

開かれた亜空間が周囲の物質を呑み込もうとする。オオスバメも例外ではなく、オオスバメは引き寄せる引力に抗うべく羽を動かした。そして、逃げた先にはギルガルドが回り込んでいた。

「ギルツ！」

「スバァアアアアアアア！」

ギルガルドの刀身が振り下ろされる寸前、オオスバメはばくおんぱをはなつた。

悪足掻きだ。ここまで接近すれば、ギルガルドならばくおんぱごと斬り裂ける。そう思った。けれど、オオスバメがばくおんぱを放ったのはギルガルドを攻撃する為ではなかった。

後退する為のブースターにしたのだ。そのまま、オオスバメは自ら亜空間へ飛び込んでいった。

「なっ!?!」

あの亜空間がどこに通じているのかなんて、俺だって分からない。そんな場所に自ら飛び込むなんて自殺行為だ。

『な、なんとー。ヴァルカス選手のオオスバメ！ ギルガルドが斬り裂いた次元の亀裂に自ら飛び込んでいった！ とうか、次元の亀裂!?!』

実況のジーンも困惑している。けれど、大型画面に映り込むヴァルカスの表情には焦りも恐れも見取れない。むしろ、不敵な笑みを浮かべてさえいる。

「油断するな、ギルガルド!」

その時だった。次元の亀裂とは別の空間にひび割れのようなものが現れた。光を纏った何かが時空の彼方から飛び出してくる。

「スバァ!」

それはオオスバメだった。ブレイブバードで亜空間側から次元の壁を貫いて戻ってきたのだ。

『な、なにが起きているのかさっぱり分かりませんが、オオスバメが戻って来ました！ そのまま、ブレイブバードでギルガルドを狙う！

対するギルガルド、冷静に刀身をオオスバメに向けている！ これ
がチャンピオンリーグ！ 頂点に臨む者達の戦いの祭典！ 一秒足りとも目が離せない!』

オオスバメのブレイブバードは脅威だ。次元の壁を貫いたという事は、ギルガルドの本気の斬撃と同等の威力を誇っている事になる。

「スバァ!」

「ギルツ!」

光と共に襲いかかるオオスバメに対して、ギルガルドは逸らす事が精一杯だ。

本気の斬撃の為には十分な溜めが要る。けれど、その溜めを作る暇さえ与えてもらえない。

「このままじゃジリ貧だ……」

オオスバメの巻き起こすソニックブームがフィールドを蹂躪し、大気を荒れ狂わせている。

「これだ！ ギルガルド、めざめるパワー！」

「ギルツ！」

ギルガルドの刀身が真紅に燃え上がる。

めざめるパワー。それはカルネ・ジムでエックスから譲り受けたわざマシンでギルガルドに覚えさせたわざだ。

ポケモンが持つ、無限にも等しい可能性を引き出す技。

通常、ギルガルドはほのおタイプのわざを覚える事が出来ない。けれど、めざめるパワーはそうした条理を覆す。

大地に向かって放たれた炎は荒れ狂う大気を一気に持ち上げた。

「スバツ!」

オオスバメの飛行能力はギルガルドを超えている。けれど、その飛行には風の力が大きく関わっている。急激な気流の変化がオオスバメの動きをわずかに鈍らせた。

「ラスターカノン！」

「ギルツ！」

その瞬間をギルガルドは狙い撃つ。刀身より放たれた質量を持つ斬撃がオオスバメの急所に命中した。

『オオスバメ、戦闘不能!』

まずは一体。まだまだ、相手のポケモンは残っている。

安心している場合じゃない。

「やるじゃねーか、ルーキー！ 次はこいつだ！ ワルビアル！」

飛び出してきたワルビアルが一瞬だけ画面に映り込む。けれど、オオスバメと同じく、すぐに画面外へ消えてしまった。

「まだいけるよね、ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドが力強く応えた直後、いきなり地面が盛り上がった。そして、ワルビアルが飛び出してきた。あなをほるで地面の中を移動してきたらしい。

「でも、とべないポケモンが相手なら！ ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドはワルビアルの攻撃が届かない高度まで上がっていく。

「ビアアア！」

ワルビアルはストーンエッジを発動した。飛来してくる岩の刃をギルガルドはせいなるぎで悉く斬り裂いていく。

たしかに、遠距離技ならギルガルドまで攻撃は届く。だけど、届くだけだ。下から上に向かう一直線の攻撃なんて、ギルガルドには通用しない。

「ビアアアアアアッ！」

「なっ!？」

反撃に転じようとした瞬間、あり得ない事が起きた。

ワルビアルがギルガルドよりも更に上に現れたのだ。

どうやら、放ったストーンエッジにジャンプで追いつき、そのままストーンエッジに乗って上空へ上がったらしい。

「そんなのあり!？」

「ビアアアアアッ！」

ワルビアルが巨大な顎を開く。ギルガルドをかみくだくつもりだ。

「ギルガルド！」

「ギルツ！」

ギルガルドはワルビアルのかみくだくを回避した。すると、ワルビアルは間髪入れずにストーンエッジを発動し、それを足場にしつつも同時にギルガルドへ攻撃して来た。

おそろしく器用だ。

「けど、そんなのいつまでも続かない！ キングシールド！」

「ギルツ！」

ギルガルドがシールドフォームにフォームチェンジした。

ストーンエッジは無視して、ワルビアルのかみくだくの回避に専念する。

「ビアッ！」

ワルビアルは明らかに焦り始めた。当然だろう。こんな無茶苦茶、短期決戦でなければ使えない。ストーンエッジの操作に対する集中力が切れれば、その時点で詰みだ。

『ギルガルド、ワルビアルの猛攻撃を耐えています！　おーっと、ワルビアルの方は疲れてきたかあ？　動きが徐々に鈍くなってきています！』

遂に、ワルビアルの集中力が途切れた。

「ここだ！　せいなるつるぎー！」

「ギルッ！」

ストーンエッジから脚を滑らせたワルビアルの急所に、ブレードフォルムにフォルムチェンジしたギルガルドのせいなるつるぎが命中する。

「ビアアアアアアアアアッ！」

勝った。そう確信した直後、ワルビアルはあくのはどうを放った。

その威力は途方もなく。ギルガルドを呑み込み、更には空を覆う曇天を貫いた。

あくのはどうが自身の落下速度を上げてしまい、ワルビアルは地面に勢いよく叩きつけられて戦闘不能になったけれど、ギルガルドも戦闘不能になってしまった。

『ギルガルド、ワルビアル！　共に戦闘不能！』

油断したつもりはなかった。まさか、あの体勢からあくのはどうを放ってくるなんて、思いもしなかった。それに、あの威力。きずなへんげ状態のギャラドスのソレよりも遥かにパワーがあった。

「頼む、キテルグマー！」

「クマーー！」

「いくぞ、カイリキーー！」

「リツキーー！」

ヴァルカスの三番手はカイリキーらしい。さっきのワルビアルと

いい、もしかしたら、ヴァルカスはオオスバメ以外にひこう出来るポケモンを持つていないのかもしれない。

「……決めつけはよくないか。いくよ、キテルグマ！」

「キイイイイイイッ！」

キテルグマが駆け出していく。向こうのカイリキーも同様だ。

二体はフィールドの中央に広がる砂漠地帯で激突した。

キテルグマのアームハンマーをばくれつパンチで受け、かみなりパンチにほのおのパンチをぶつけてくる。カイリキーは回避など一切考えていない。そして、その攻めの姿勢がキテルグマにも回避を許さない。

どちらが先に倒れるかのチキンレースが始まってしまった。

「そんなの付き合えるか！　じしんだ！」

「キイイイイイイッ！」

キテルグマは殴り合いながら地面を踏みつけた。大きく揺らぐ地面にカイリキーの動きが鈍る。

「そこだ！　アームハンマー！」

キテルグマのアームハンマーが迫ると、カイリキーは両足と一対の腕を地面に押し当てた。そして、もう一対の腕でばくれつパンチを放ってきた。

カイリキーには四本の腕がある。二本の腕と二本の脚で揺らぐ大地に確りと根を張り、残った二本の腕で再びチキンレースを開始する。

「リツキイイイイッ！」

「キイイイイイイッ！」

殴り合いは数分に渡った。そして、両者は同時に倒れ込んだ。

『キテルグマ、カイリキー！　共に戦闘不能！　な、なんとも血腥いガチンコバトルでした！』

亜空間に自分から飛び込んでいたり、ストーンエッジを足場にしたり、あんなチキンレースを仕掛けてきたり、ヴァルカスのバトルスタイルはあまりにも破天荒だ。

「二体分優勢だなんて考えていられない！　いけ、ギャラドス！」

「ギシャアアアッ！」

「行つて来い、ボーマンダ！」

ヴアルカスの四体目はボーマンダ。空を飛べるポケモンだ。本当に、読めない人だ。

「仕掛けられる前に仕掛けるぞ！ りゅうのはどう！」

「ギシャアアアッ！」

ギャラドスがりゅうのはどうを放つと、ボーマンダも同じくりゅうのはどうを放ってきた。ぶつかり合う二つの波動。互いを喰い潰さんとするりゅうのはどうを尻目に、ボーマンダはすぐさまりゅうせいぐんを放ってきた。前の技が消えていないのに、切り替えが早い。

降り注ぐ流星。その威力はまさしく必殺だ。一撃でも当たれば戦闘不能になってしまう。

「けど、そんなの当たらない！」

オオスバメのスピードと比べれば、流星の降り注ぐ速度なんてアクビが出るほど遅い。

ギャラドスは流星の間を泳ぎ、ボーマンダに肉薄する。

この一週間で、ギャラドスのわざの構成も大幅に変えてある。

「れいとうビーム！」

ギャラドスのれいとうビームに対して、ボーマンダはかえんほうしやを放ってきた。

冷気と炎がぶつかり合い、爆発が起きる。

「ぼうふうだー！」

その爆風をぼうふうによって広げる。

ボーマンダもオオスバメと同じだ。つばさで飛んでいる。爆風とぼうふうによってかき乱された気流の中ではまともに飛び続ける事なんて出来ない。

「はかいこうせん！」

体勢を崩したボーマンダにギャラドスのはかいこうせんが命中する。地面に叩きつけられたボーマンダは尚も立ち上がろうとするけれど、そうはさせない。

「りゅうのはどう！」

これでトドメだ。

『ボーマンダ、戦闘不能!』

残りは二体。

「驚いたぜ」

画面の向こうからヴァルカスが言った。

「マジでつえーじゃねーか、坊主!」

「ヴァルカスこそ」

嘘偽りのない本音だ。ヴァルカスは強い。

だけど、今のボーマンダで確信した。

「さあ、次のポケモンを出しなよ」

「おうさ! 最後まで足掻かせてもらおうぜ? まあ、オーダイル!」

「ギャラドス!」

ギャラドスがヴァルカスの方へ飛んでいく。

さっきのボーマンダは明らかにオオスバメやワルビアルよりも劣っていた。二戦目に出さなかったのは、それが理由だろう。

以前、ザラクがリーグを一体のポケモンだけで勝ち抜いたように、六体すべてが強くななくても、エースがすべての敵をねじ伏せて勝利する事もあるのだろう。

ヴァルカスはそのいうトレーナーだったという事だ。カイリキーやボーマンダも弱いわけじゃない。だけど、彼の切り札はオオスバメとワルビアルのみ。

『オーダイル、戦闘不能! これで、ヴァルカス選手のポケモンは一体のみとなりました!』

最後のポケモン、ドダイトスは凶体が大きいだけだった。

「俺の勝ちだ」

ギャラドスのれいとうビームがドダイトスを氷漬けにして、一回戦は幕を閉じた。

「たはーっ、やっぱ本気で頂点を目指してるヤツはちげーな」

「ヴァルカスは違うの?」

気になって問いかけると、彼は肩を竦めた。

「オレの本業はポケモンウォッチャーでな。ポケモンの生態の観察が

主なのさ。キズナ現象つてのに興味があつたんだが、見れず仕舞いだったな」

ヴアルカスは豪快に笑うと、「がんばれよ、未来のチャンピオン！」と言いながらフィールドを去って行った。

ちよつと、拍子抜けしてしまった。

「見せてあげれば良かったのかな？」

おそらく、ワルビアルやカイリキーの無茶苦茶な戦法もキズナ現象を引き出させる為だったのだろう。

とにもかくにも、まずは一回戦突破だ。

第四話 『四天王戦！ VS シエル』

「さーて、お仕事再開だ！」

チャンピオンリーグの一回戦でアルトと戦ったトレーナー、ヴァルカスはコロシウムを出るとポケギアのアプリを起動した。

並んでいる名前の中から目的の人物をタップする。

「エルフラン。調子はどうだい？」

『バツチリとはいかないね。チャンピオンリーグをテレビで楽しむ事も出来ないよ』

「状況は？」

『ポケモン達が大移動を開始してる』

「それは例の事件の時と同じように？」

『まだ、あの時ほどじゃない。アーシア島の時はすべてのポケモンが一斉に動き出したもん。まだ、自分の領域に留まっているポケモン達もいる』

「けど、時間の問題じゃねーの？ 移動先は、ココかい？」

『うん。他のジムリーダー達の情報を合わせて考えても、間違いなくポケモン達はマグノリア高原を目標している。チャンピオンリーグの会場を』

ヴァルカスはやれやれと肩を竦めた。

彼がチャンピオンリーグに出場した理由はポケモン達の異変との関連を調べる為だった。

ザラクなのか、アルトなのか、それとも他の因子が絡んでいるのか。けれど、リーグ優勝から七年。腕がすっかり鈍ってしまっていた。ポケモンウオッチャーにとって、バトルの腕前はさして重要ではないけれど、もう少し腕を磨いておけば、もっとマシな情報を得られた筈だ。

例えば、キズナヘンゲが発動した時にポケモン達がどう反応するのかなどだ。

『ヴァルカス。キミにはマグノリア高原に残って、チャンピオンリーグを監視しておいてほしい』

「了解」

いよいよ、来るべき災厄が本格的に始まろうとしている。
レムハザードによれば、それは百年周期に起こる事らしい。

このアガリアの地に存在するポケモン達には例外無くキズナヘンゲの素質がある。キズナヘンゲの素質とは、すなわち、人間とのシンクロ。人々の心がポケモン達に少しずつ影響を与えていく。

ポケモンバトルで勝ちたい。それは、ポケモントレーナーならば誰もが抱く想いだ。人間という種が持つ絶大な闘争心に染められたポケモン達は徐々に凶暴化していく。そして、ポケモン達は徐々に肥大化していく闘争心を抑えきれなくなっていく。

行き場を求めるポケモンの闘争心は、それを受け入れられる器に辿り着く。それがコスラであり、歴代の器達であり、ザラクなのだ。

如何に容量の大きな器でも、注がれ続けられればいずれは満ちる。器の心が闘争心一色に塗り固められた時こそ、来るべき災厄、つまりはポケモン達の暴走が始まるのだ。

アガリア中のポケモン達がチャンピオンリーグの会場に集まり始めているのは器が満たされようとしているからなのだろう。

ポケモン達の意志を統べる者。かつて、コスラよりも前に器となった彼らは魔物の王という意味で、魔王と呼ばれていたらしい。

「魔王とか、お伽噺の中だけにしておいてもらいたいもんだぜ」
器を害すれば、その時点で災厄は始まってしまう。このチャンピオンリーグを中断させても、災厄は始まってしまう。

レムハザードは言った。

『すでに賽は投げられている。この地の命運は、チャンピオンリーグで決まる』

それがどういう意味なのか、殆どの者が悟っている。

けれど、それを呑み込む事が出来た人間など、ほとんどいない。

「世界の命運なんて重荷、子供一人に背負わせられるかよ」

かつての霸王の息子だとか、才能あるトレーナーだとか、そんな事は どうでもいい。

そんな理由で子供を矢面に立たせるなど、許される筈がない。

だからこそ、彼らは動き続ける。チャンピオンリーグが、いつものチャンピオンリーグのまま終われるように。ただ、最強のポケモントレーナーが決まり、みんなが頂点に立ったトレーナーを祝福するだけで終わるように。

第四話『四天王戦！ VS シエル』

チャンピオンリーグの一回戦はアルトとレミアアという少女が勝ち抜いた。

一時間のインターバルを挟み、二回戦が始まる。

レミアアのポケモンはシンボラー、ネイティオ、アーケオス、コジョフー、ドンカラス、ムウマージ。

彼女もアルトと同じく、十歳の時にポケモンリーグを勝ち抜いた猛者だ。

「ネイティオ、サイコキネシス！」

「カラマネロ、サイコカッター！」

チャンピオンリーグに相応しく、バトルは熾烈を極めている。

一回戦で敗北した二人の選手とは異なり、アルトとレミアアのポケモンはすべてが頂点を決する為の祭典に相応しい實力を持っていた。

『ネイティ、カラマネロ！ 共に戦闘不能！』

倒れたポケモンを回収すると、即座に二人は新たなポケモンを繰り出し、次々に指示を出した。

コジョフーとキテルグマが森のエリアでぶつかり合う。鬱蒼と茂る草花や木々を盾にしたり、隠れ蓑にしたり、そうして互いの隙を狙い続ける。

『コジョフー、キテルグマ！ 共に戦闘不能！』

どちらも一方的な敗北を良しとしない。倒れかけたなら、なにがなんでも相手を道連れにする。底知れない勝利に対する執念に、観衆達は息を呑む。

「ギャラドス！」

「ドンカラス！」

コジョフーとキテルグマの技巧が冴え渡るバトルの次はギャラドスとドンカラスによる空中を舞台とした大激戦だ。ぼうふうが渦巻

き、はかいこうせんが飛び交う。

『ギャラドス、ドンカラス！ 共に戦闘不能！』

次に対峙したのはギルガルドとムウマージ。

速攻を狙ったギルガルドの攻撃はムウマージを落としたが、ムウマージもギルガルドをみちづれにした。

「アーケオス！」

「ゲンガー！」

今度はさつきとは逆だ。猛攻を仕掛けてくるアーケオスをゲンガーがみちづれにする。

そして、最後のポケモンがフィールド上へ飛び出した。

シンボラーとスピアー。どちらもそれぞれのトレーナーのペースだ。

「ミサイルばり！」

先に仕掛けたのはアルトのスピアー。広大なフィールドの端から、反対の端に浮遊しているシンボラーにミサイルばりを放つ。

音を超える速度で飛来する魔弾に対して、シンボラーはリフレクターを展開した。

そして、ミサイルばりがリフレクターを責め立てている間にスピアーはシンボラーの下へ辿り着く。

信じ難いほどの速度だ。ダブルニードルでリフレクターを破壊すると、シンボラーが反撃に移る間もなく急所を穿った。

『シンボラー、戦闘不能！ よって、二回戦はアルト選手の勝利です！』

さつきまで、二人は完全に互角だった。

けれど、スピアーは違う。あのポケモンだけは次元が違う。

二回戦終了から更に1時間が経過する。

いよいよ、三回戦。わたしの試合だ。

『さあ、ここまで登ってきました！ 今年度のポケモンリーグ優勝者、アルト選手！ いよいよ、四天王との対戦です！』

父から受け継いだ王家の秘伝書を読んだ日から、わたしはアガリアを救うために生きてきた。結局、わたしは道化の如く踊るばかりで、

気がつけば大きな流れの中から取り残されていた。

レムハザードは彼こそが世界を救う鍵だと言っていた。

今代の来るべき災厄、ザラクと戦う資格を持っていると。

「だけど、それがどうしたというの？ 資格を持っているから、彼にすべてを託して傍観しているというの？」

「たとえ、それこそが正しい選択だとしても、わたしは納得出来ない。」

「大いなる運命には、大いなる覚悟が必要となる。彼に、世界を救う覚悟があるとは思えない。それに、覚悟を決めるべきではない。なぜなら、彼は子供だからだ。」

「十歳の子供に必要なものは覚悟じゃない。未来への希望と、将来の夢と、今の幸せだけだ。」

「アルトくん！」

「わたしは彼に宣言する。」

「わたしは四天王・シエル。あなたのチャンピオンリーグはここまですよ！」

「勝つのは俺だ！」

「彼はアギトの友達でもある。その友情を失わせない為にも、わたしは勝たなければならない。」

「アルトを倒して、わたしがザラクと戦う。」

「そして、来るべき災厄を止めてみせる。」

「この命に変えても！」

「オニゴリー！」

「わたしはこおりタイプのエキスパート。」

「彼らの仲間にも、こおりタイプのエキスパートがいたらしい。」

「けれど、格の違いを教えてあげる。」

「ぜったいいいぞー！」

「オニゴリーがぜったいいいぞを放つ。」

「一撃必殺のわざは刹那の後に広大なフィールド全体を氷漬けにした。」

「ギシャアアアアッ！」

「アルトの繰り出したギャラドスが空中に難を逃れたけれど、逃しは

しない。

「フリーズドライ！」

ギャラドスを周囲の空間ごと凍結させる。こうかはばつぐんな上に、ギャラドスは氷漬けになった。

「再び、ぜったいれいどー！」

「ゴーリ！」

ぜったいれいどが放たれる。氷漬けになっているギャラドスに回避する術などない。

『一撃必殺！ ギャラドス、戦闘不能！ さすがは四天王！ フィールドを一瞬にして氷漬けにしたかと思えば、今度はギャラドスが氷漬けだあああつ！』

アルトはギャラドスをモンスターボールに戻した。次のポケモンが出る前にオニゴーリをアルトの傍へ移動させる。

ポケモンを交代する為に生じる数秒間こそ、勝者に与えられる絶对的なアドバンテージだ。

オニゴーリはすでにぜったいれいどの発動体勢に入っている。

「スピアー！」

「なっ!？」

モンスターボールが開いた瞬間、オニゴーリはぜったいれいどを発動した。

それなのに、飛び出したばかりのスピアーはぜったいれいどが届く前に効果範囲から離脱して、オニゴーリの背面を取った。

「ダブルニードル！」

「スツピイツ！」

オニゴーリが地面に墜落する。まさか、こんなに早く出してくるとは思わなかった。

「だけど、これはチャンスだ。

「だいはくはつ！」

スピアーさえ落とせば、もはやアルトに勝機は無い！

「爆風を穿け！」

「スピイツ！」

信じられない。

わたしのオニゴリーのだいはくはつは、このフィールドのすべてを吹き飛ばすほどの超威力だ。実際、観客席やトレーナーを守る為のシールドが軋んでいる。フィールドは完全な更地と化している。

それなのに、スピアーは健在だ。あの爆風をドリルライナーで貫いてしまった。

「けど、ノーダメージな筈がない！ パルシエン！」

「パール！」

パルシエンがつららばりを放つ。つららばりはまるで意志があるかの様に自在に軌道を変えてスピアーへ襲いかかった。

スピアーもミサイルばりで応戦してくるけれど、それでいい。

「いくわよ、パルシエン！」

アギトにZリングやメガストーンを渡したのはわたしだ。

当然、わたし自身も持っている。

「受けなさい、スーパークアトルネード！」

大気中の水分が一気に収束していく。パルシエンを中心に現れた大量の水は一気にフィールドを呑み込んだ。

スピアーは空に上って難を逃れたようだけど、逃しはしない！

パルシエンは水中を猛スピードで進んでいく。そして、スピアーの真下に来ると、パルシエンは高速で回転を始めた。フィールド全体に満ちた水が渦を巻き、まるで竜巻のように空へ昇っていく。

「迎え撃て！ ドリルライナー！」

必殺のZわざに対して、アルトが選んだのは回避でも防御でもなく、攻撃。

過信だ。Zわざの威力に加えて、パルシエンには絶大な防御力が備わっている。まともにぶつかりあえば、どちらが勝つかなど考えるまでもなく明白だ。

それなのに……、

『パルシエン、戦闘不能！』

打ち負けたのはパルシエンだった。

理解出来ない。パルシエンのレベルは100だ。成長の限界まで

鍛え抜かれている。

それなのに、最高威力のZわざを放ったのに、一撃で倒されてしまった。

「スピーー！」

寒気がする。

分かっていた筈なのに、解っていないかった。

あのスピーアーはタダモノじゃない。

「キュウゴン！」

Zリングを手に入れるために向かったアローラで出会ったポケモン。リージョンフォームと呼ばれる、こおりタイプのキュウゴンだ。現れると同時にキュウゴンはあられを降らせた。

これが、アローラのキュウゴンの秘めたる能力。ただ、存在するだけであられが降り注ぐ。

「オーロラベール！」

「コーン！」

わたしの勝利条件はスピーアーを倒す事だ。その為に、すべての力を振り絞る。

「ミサイルばり！」

スピーアーがミサイルばりを放ってきた。けれど、オーロラベールは見事にミサイルばりの威力を弱めてくれている。

「こおりのつぶて！」

速度の緩んだミサイルばりをこおりのつぶてで撃ち落とす。

そして、そのまま更なるこおりのつぶてを放とうとした時、死神はキュウゴンの眼前に現れた。

「スピーー！」

「ゴン!？」

速過ぎる。さつきまでスピーアーの居た位置から、キュウゴンの居る位置までには数百メートルの距離があった。それなのに、ミサイルばりを撃ち落とした直後に現れるなんて、デタラメにもほどがある。

『キュウゴン、戦闘不能！ なんとという事でしょう！ 四天王のポケモンが、たった一体のポケモンに為す術無く倒されていく！ ま、ま

るで、これは二年前の……』

実況のジーンと同様に、わたしの脳裏にも二年前の光景が浮かんでいる。

突如現れた最強の男。彼はたった一体ですべてのバトルを勝ち抜いた。

「グ、グレイシアー！」

息がし辛い。まるで、見えない壁に押されているかのようだ。

れいとうビームを放とうとしたグレイシアが、放つ前にダブルニードルで倒されてしまった時、わたしの脳裏に一つの言葉が浮かんだ。勝てない。

わたしは四天王。最強の五人の一画だ。それなのに、このスピアーには手も足も出ない。

スピードが速過ぎて、わたしのポケモン達では追い切れない。

「……アギト、ごめんね」

グレイシアの後に繰り出したクレベースも、そして、最後に繰り出したユキノオーも倒れ伏した。

『ユ、ユキノオー、戦闘不能です。こ、この試合、アルト選手の勝利です！ なんとという事でしょう！ なんとという強さなのでしょう！』

アルト選手のスピアー、四天王のポケモンを六体連続で倒してしまっただ！』

打ち拉がれながらフィールドを去る。

戦う前の決意も、来るべき災厄に挑む為の覚悟も、あのスピアーの前ではあまりにも無力だった。

「シエル」

気がつけば、わたしはコロシアムの外にいた。逃げてきてしまったのだ。

そして、そこにアギトがいた。

「あぎ、とっ？」

「強かったろ、アルトは」

まるで、それを誇るかのように彼は言う。

「……うん」

アギトはわたしなどよりもずっと立派にアルトのスピアーと渡り合っていた。

その事を思い出して、ようやく理解した。

アルトだけじゃない。アギトも、わたしよりもずっと強くなっていたのだ。

わたしは、また置いていかれてしまう。

「シエル。オレは、またアルトと戦いたい。そして、今度こそ勝ちたい」

アギトは言った。

なんて、強い子なんだろう。あんなにも圧倒的な力を持つ相手に、尚も挑む勇氣を持てるなんて……。

「だから、リーグが終わったら、オレを鍛えてくれ」

「わたしより、あなたの方がずっと強いよ……」

「そうか？ でも、シエルの方がたくさんの方を知っているだろう？」

それに、オレがシエルに鍛えてほしいんだ。ダメか？」

アギトがわたしの手を取った。

親と子ほどではないにしても、ずっと年下の男の子に対して、わたしは不覚にもドキッとしてしまった。

「……ダメなんかじゃないわ」

「なら、頼む」

「……うん」

それからしばらく、わたしはアギトと二人で過ごした。

それから自分の仕事を思い出して、慌てて職場に走っていった。

チャンピオンリーグの運営の仕事の大半はわたしを取り仕切っている。

項垂れたり、十歳の子相手にドキドキしてる場合じゃなかった！

「シエル！ 負けてしよげている所を悪いとは思うがな！ 仕事は仕事だ！ 働け！」

わたしが落ち込んでいる間、仕事を肩代わりしてくれていたザイリンに怒られた。

少しくらい、紳士的な態度を取ってくれても罰は当たらないと思う

の
に
!

第五話 『四天王・ザイリン』

四天王・ザイリンにとって、自らの地位は必要に迫られたからこそのものであった。

ザラクの登場によって、前チャンピオンのゼノンが引退した時、当時の四天王であったヴェガとサリヴァンも辞任を表明してしまった。残されたのは四天王になって日の浅いミリガンとフレデリックのみ。

本来、四天王を超えた者だけが四天王となれる。けれど、その座が空白となってしまう。その上、リーグの運営を主に担っていた三人が同時に抜けた穴はあまりにも大き過ぎた。

リーグの沽券、そして、運営の危機だった。

なにしろ、ザラクは唯我独尊。フレデリックは夢想家。唯一まともなミリガンは頑張っている、まだまだ十四歳の子供。彼女が組織したアガリア警察もようやく形になってきたばかりであり、ミリガンの双肩にのしかかる負担の量は尋常ではなかった。

そこで、アガリア政府は急遽歴代のポケモンリーグ優勝者に声を掛けた。けれど、ほとんどの者はチャンピオンリーグで正式に四天王の座を勝ち取らなければ意味がないと要請を断った。

そうした事情を政府の重役六名から切々と語り聞かせられ、ザイリンは仕方なく四天王になった。元より、彼の組織運営の才能は群を抜いており、アガリア政府は初めからザイリンを四天王に据える腹積もりだったらしい事を就任後に知った。

同時に四天王に就任したシエルに各種大会の運営を任せ、ソレ以外のほぼ全ての業務をザイリンは一人でこなして来た。ミリガンが時折手伝う事もあるが、彼女にはアガリア警察というアガリア地方の安全を守る上で欠かせない組織の長としての仕事もある。彼女のがんばりを見ているからこそ、ザイリンは投げ出す事なく四天王であり続けていた。

「しかし、シエルが敗退した以上、大会の運営もオレの仕事か……」

四天王を超えた者は四天王となる。

シエルが敗退した時点で、アルトの四天王入りは確実なものとなっ

た。

まさか、十歳の子供に大会の運営を丸投げする事など出来ない。

「フレデリックがもう少し弱ければな」

四天王のお荷物こと、フレデリック。やつが序列最下位なら何も問題はなかった。諸手を挙げて、ヤツの四天王退任を祝福してやった事だろう。そして、新たな四天王を笑顔で迎え入れていた筈だ。

だが、ヤツは強い。いつも能天気には振る舞っているが、実力はミリガンとほぼ互角であり、前回のチャンピオンリーグでも接戦を繰り広げていた。

「クソが！ 役立たずの癖に！」

唯我独尊を許されるのは頂点に立つ一人のみだ。すべてのポケモントレーナーの憧れを一身に背負う者。最強という名の象徴。それを支える為に組織されているのが四天王なのだ。

四天王に与えられている超法規的権限はその為にあるのだ。

本来ならば、傍若無人に振る舞うなど許されない。

ミリガンも、シエルも、その事をよく理解している。それなのに、フレデリックだけは分かっていない。だから、オレはヤツの事が大嫌いなのだ。

第五話『四天王・ザイリン』

バトルフィールドに出ると、凄まじい歓声に耳を塞ぎたくなった。

ポケモンは好きだし、ポケモンバトルも愛している。けれど、やかましいのは好みじゃない。

元々、オレは引きこもりだったのだ。

「オレは四天王・ザイリン！ 先達として、君に四天王の力を示そう！」

この決め台詞を何度も練習した。

かつこよく、胸を張って、高らかに！

かつて、憧れていた四天王のように！

「マグカルゴー！」

「マグー！」

オレのポケモンはすべていわタイプを持っている。

理由は単純だ。オレが住んでいた街が鉱山の傍で、周りにいたポケモン達がいわタイプだったからだ。

「だいちのちからー！」

フィールド全体が鳴動する。

アルトが繰り返したポケモンはカラマネロ。

エスパークタイプは厄介だから、早急に片を付けよう。

「大地を感じるー！ ステルスロックー！」

だいちのちからを通して、カラマネロの位置はつかめた。

だいちのちからによって、このフィールド全体にマグカルゴのじめんエネルギーが満ち溢れている。

どこにいようと、もはや逃れる術はない。

マグカルゴはフィールドに浸透した自らのじめんエネルギーを通して、超遠距離にいるカラマネロへステルスロックを発動した。

動きが止まれば、後は簡単だ。

「オーバーヒートー！」

マグカルゴの体温は一万度を超えている。

その熱量を凝縮して放った一撃は、射線上のすべてを焼き溶かす！

『カラマネロ、戦闘不能ー！』

まずは一体目だ。けれど、油断は出来ない。

オレと同じく、前四天王から実力で座を奪い取ったわけではないにしても、去年のチャンピオンリーグで自らの座を守り抜いたシエルのポケモンを六体連続で撃破したスペアーが控えている。

それに、ギルガルド、ギャラドス、キテルグマも難敵だ。それぞれ、チャンピオンリーグに相応しい実力を備えている。

カラマネロとゲンガーは、他に比べて育てが甘い。おそらく、ゲッツとしてから日が浅いのだろう。

『アルト選手の次なるポケモンはギャラドスだ！ おーっと、ステルスロックによって、いきなりのダメージだ！』

ステルスロックは持続時間が長い。これからアルトはポケモンを交代させる度にダメージを受ける事になる。たとえ少量でも、それが勝敗を大きく揺るがす事になる。

「さあて、空へ逃げて、次はどうする気だ？」

ギャラドスの巨体は遠くからでもよく見える。そして、居場所さえ分かれれば！

「オーバーヒート！」

「マグー！」

一万度の体温から放たれるオーバーヒート。

その威力たるや、みずタイプであつても一撃必殺だ。

これぞ、マグカルゴの原種の力。

「ギシャアアアツ！」

ギャラドスがかいこうせんを放った。

悪足掻きだ。マグカルゴの力は火山の噴火に匹敵する。もはや、それは天災の粹だ。

「馬鹿な!？」

それなのに、マグカルゴのオーバーヒートが止まった。

オーバーヒートは使う度に威力が減衰するわざだ。けれど、まだ二発目だ。

「まさか、天災クラスの攻撃力を持つというのか!？」

天災クラス。それは、原種と呼ばれるポケモン達にのみ許された領域だ。

ギャラドスの原種は戦場に出現する。

伝承曰く、ギャラドスの怒りに触れた村が一晩の後に焼き滅ぼされたという。

伝承曰く、ギャラドスの放ったはいこうせんが一撃で大都市を消し飛ばしたという。

「いや、あり得ない」

ギャラドスの原種など、人間に扱える存在ではない。

ある地方では、出現すれば全てを焼き尽くすまで止まらない破壊の神と謳われている。

その凶暴性はコイキングから進化した通常のギャラドスとは比較にならないほどだという。

「マグー!？」

マグカルゴの悲鳴が響く。均衡が崩れたのだ。はかいこうせんがオーバーヒートを呑み込みながら迫ってくる。

「からをやぶれ！」

咄嗟にマグカルゴは己の殻を破った。殻の重みが消えた事で、マグカルゴのすばやさは格段に上がった。必死にはかいこうせんの射程範囲から逃れる為に走る。

そして、はかいこうせんがマグカルゴのいた場所に着弾した。

視界を白い閃光が埋め尽くす。チャンピオンリーグ仕様の最新鋭のシールド装置がダウンしてしまった。

即座に予備システムが起動して、新たなシールドが生成されるが、さっきの威力のはかいこうせんが放たれば、今度こそシールドのシステムが完全にダウンしてしまう。

やはり、あのギャラドスは天災クラス。

マグマの化身たるマグカルゴすら超える、破壊の化身。

「なるほど、ザラクが一目を置くのも分かる。とんでもないポケモンを従えたものだな！」

フィールド全体に突風が吹き荒れ始めた。ギャラドスのぼうふうだ。

「マグー!？」

「マグカルゴ！」

マグカルゴの体が風に攫われ、空高くへ舞い上がった。

そこにギャラドスはハイドロポンプの照準を定め、放った。

「最後の力を振り絞れ！ オーバーヒート！」

アルトはわざの選択を誤った。ハイドロポンプは水だ。一万度を超えるオーバーヒートの熱量を前にすれば、如何に圧力があろうとも一瞬で蒸発してしまう。その後に巻き起こるのは水蒸気爆発だ。

フィールドが真っ白な湯気で満たされた。

「ギシャアアアアッ！」

呼吸が止まる。なにか、良からぬ事が起こると本能が警鐘を鳴らし
ている。

「マグカルゴ！」

「ギンシャアアアアッ！」

マグカルゴは答えず、ギャラドスの雄叫びが響き渡った。雷光が迸る。水蒸気で満たされた空間全体へ雷霆が広がっていく。かみなりだ。

「ハイドロポンプはこの為か!？」

互いの視界を奪った後にフィールド全体へ広がる必殺の一撃。

驚くべきは、アルトがこのリーグ中に行ったわざの入れ替えの回数だ。

わざマシンを使えば、比較的簡単にわざを覚え直させる事が可能とはいえ、普通のポケモンは入れ替わったわざに慣れるまでに相応の間がかかるものだ。

アルトは一回戦からギャラドスのわざを何度も変えている。わずか1時間あまりのインターバルがあるとはいえ、そんな短時間で即座に新技を使いこなすなど尋常ではない。

認識を改めなければならぬ。彼を才気溢れる少年だと思おうのは止めよう。

彼はザラクだ。挑戦者ではなく、侵略者。格下などではなく、このオレよりも格上の存在だ。

「いくぞ、ガチゴラス！ ロックカット！」

「ゴラアアアアッ！」

飛び出したガチゴラスはロックカットによってすばやさを高めた。

「りゅうせいぐん！」

ガチゴラスがりゅうせいぐんを放つと、ギャラドスのはかいこうせんに放ってきた。

さっきのような桁外れの威力ではない。さすがにシールドの機能がダウンした事で自重したのだろう。この辺りはザラクよりも冷静だな。ザラクはお構いなしに撃ってくる。

「だが、おかげで懐に入り込める！」

はかいこうせんの発動直後は動けなくなる。時間にして、わずか数秒だが、その数秒があれば、ロックカットしたガチゴラスはギャラドス下へたどり着ける。

「もろはのずつきー！」

命をかけて、渾身の力で放ついわタイプ究極の必殺技。

本来ならば、放った直後に自身も大ダメージを受けるわざだが、ガチゴラスは自慢のいしあたまで反動を無効化させる事が出来る。

「なにっ!?!」

死角に回り込んでからの一撃だったというのに、ギャラドスは体をわずかに曲げる事でもろはのずつきを回避してしまった。

「見えていない攻撃を紙一重で躲すだど!?!」

ギャラドスがガチゴラスにはかいこうせんを放った。

『ガチゴラス、戦闘不能!』

「バカな……」

強過ぎる。ポケモンリーグの試合を見た限りでは、ここまでの強さは無かった筈だ。

フィールドの広さが無意識のリミッターを外した?

ポケモンリーグ終了からチャンピオンリーグ開幕までの一週間で鍛え上げた?

「いくぞ、バンギラス!」

「ギャオオオオオツ!」

バンギラスが出ると同時にギャラドスがはかいこうせんを放ってきた。

勝者のアドバンテージを存分に利用してくる。

「こちらもはかいこうせんだ!」

はかいこうせん同士がぶつかり合う。

「クソツ!」

けれど、あっさりと押し負けた。今度のギャラドスのはかいこうせんはシールドに対する影響を考慮した上で最大の威力を持っていた。

わざの加減の仕方を覚えたらしい。

『バンギラス、戦闘不能!』

次に繰り出したガメノデスも抵抗する間もなくはかいこうせんに呑み込まれた。

これがシエルも味わった絶望。かつて、ザラクに敗れたトレーナー

達の絶望。

『ドサイドン、戦闘不能！　なんと、アルト選手！　三回戦に引き続き、一体のポケモンで四天王を相手に五体抜きだ！　さあ、ザイリン選手！　最後のポケモンはあ!?!』

油断などしていいない。最初から全力でいく為に、一体目からエースのマグカルゴを出した。

けれど、こうも完膚なきまでに追い詰められるとは思わなかった。

四天王として、あまりにも無様だ。

「クソツ、かつこわるいな……」

かつて、憧れた四天王は強かった。負ける時も、必ず相手を苦戦させた。

いついかなる時もかつこよかった。

『プテラ、戦闘不能！　よって、この試合！　アルト選手の勝利です！』

勝ち取ったわけでもない四天王の座。ただ、頼まれたからやっていただけの事。だから、負けたところで、どうでもいい。

そういう風に考える事が出来れば、どれほど楽だろう。

「ちくしょう……」

子供の頃から、オレは全然成長してない。

いじめられっ子で、外が怖くて、家の中に引きこもってばかりいた頃と同じだ。

四天王としてかつこよく戦うと決めたのに、かつこわるく泣きべそをかきながらフィールドから逃げ出した。

みんな、呆れ返っている筈だ。情けないヤツだと思った筈だ。

「ご苦労さまです、ザイリン」

移動装置を降りて、誰もいない通路で泣いていると、いきなり頭を撫でられた。

「な、何をするんだ！」

そこにいたのは、大嫌いなフレデリックだった。

相変わらず、胡散臭い笑顔を浮かべている。

「素晴らしい試合でしたよ」

「素晴らしいものか！ あんな情けない戦い！」

「情けなくなありませんよ」

フレデリックはハンカチでオレの涙を拭った。

完全に子供扱いだ。五歳しか違わないのに！

「涙を流すほど、あなたは本気で戦った。それをバカにするものなど
いませんよ」

そう言うと、フレデリックはオレから離れていった。

「明日はわたしの試合です。あなたに負けない、全力のバトルをお見
せしますよ」

「うるせえ！ 負けちまえ！」

オレの罵声を笑って受け流しながらフレデリックは去って行った。

嘗ての四天王序列一位。前チャンピオンのゼノンやミリガンとも
互角に渡り合う男。

テレビの向こう側の存在だった、憧れの四天王。

第六話 『VS四天王・フレデリック！ フープ、オンステージ！』

四天王・フレデリック。今年で25歳になる彼は十年前から四天王であり続けている。

先々代のチャンピオン・クシエルの時代から、彼はチャンピオンという存在を間近で味わい続けてきた。

あまねくポケモントレーナー達の頂点に立つ者。その在り方は、常人とは違う。

クシエルにも、ゼノンにも、ザラクにも、他者にはない凄みがある。フレデリックは彼らの持つオーラに魅せられた。

要するに、チャンピオンという存在のファンなのだ。誰よりも傍でチャンピオンを見ていたい。だから、彼は四天王であり続けている。「ヴェゼール・ヴィレツジのアルトくん。キミにチャンピオンの器があるや否や、確かめさせてもらいますよ」

四天王を超えた者だけが、四天王になれる。

そういう意味では、シエルとザイリンは四天王ではなかった。

空席を埋める為だけの存在だった。

けれど、フレデリックは違う。

彼は嘗ての四天王を打ち破り、以後十年に渡って四天王の座を守り続けている本物の四天王だ。その実力は歴代のチャンピオンに比肩するほどである。

第六話 『VS四天王・フレデリック！ フープ、オンステージ！』

四天王のポケモンを一体で全滅させる。その圧倒的な光景を目撃した人々は、二年前のポケモンリーグとチャンピオンリーグの光景を思い出していた。

流星の如く現れて、あまねくトレーナー達のポケモンをバシャーモのみで蹂躪した最強の男、ザラク。天に昇る龍が如く、頂点に駆け上がっていく彼の強さに人々は憧憬を抱いた。

歩く天災などと呼ばれていても、彼はアガリアの人々にとって憧れ

の存在なのだ。

そのザラクに匹敵するかもしれないトレーナーの出現。それが、まだ十歳の少年だという事実には人々は衝撃を受けている。

『さあ、チャンピオンリーグも二日目に突入しました！ 破竹の勢いで勝ち上がるアルト選手！ このまま、チャンピオンの座を奪い取る事が出来るのでしょうか!? いよいよ、五回戦！ アルト選手対四天王・フレデリック選手の試合が始まります！』

誰もが手に汗を握っている。

フレデリックはミリガン登場前までは常に四天王の序列一位に居座っていた男だ。

チャンピオンに挑む為の登竜門。その彼に勝つ事が出来れば、いよいよアルトの実力は本物という事になる。

『さあ、両者ポケモンを繰り出した！ アルト選手は四回戦で猛威を奮ったギャラドス！ 対するフレデリック選手のポケモンはウインディだ！』

ギャラドスは飛び出すと同時に天へ昇った。そして、ウインディはそんなギャラドスの下へ至る為に走り出す。

「二トロチャージ！」

炎を纏いながら速度をあげていくウインディ。

すると、ぼうふうが吹き荒れ始めた。ウインディの巨体が風の力で舞い上がる。

無防備を晒したウインディに対して、ギャラドスはすかさずはかいこうせんを放った。

「風の中を駆け抜けるのです！」

けれど、ウインディははかいこうせんを回避した。

身に纏うほのおタイプのエネルギーで、荒れ狂うひこうエネルギーを蹴りつけながらギャラドスに迫っていく。

それはポケモンリーグでエリザベスやバレットが使っていた戦法と同じもの。異なるタイプのエネルギー同士は反発し合う。その作用を応用した業^{わざ}。

反動を受けて動けなくなっているギャラドスの懐にウインディは

到達した。

「インファイト！」

ウインディの守りを捨てた必殺のインファイトが炸裂する。

こうかはいまひとつ。けれど、無視出来ないダメージを負ってしまったギャラドスは激昂した。

「ハイドロポンプ！」

「しんそくー！」

ギャラドスのハイドロポンプをウインディは軽々と避ける。けれど、ここまで勝ち上がってきた者が闇雲な攻撃など放つ筈がない。その事をフレデリックも理解している。それ故に、吹き荒れ続けているぼうふうがハイドロポンプを巻き込み、四方八方にみずのエネルギーを散開させても驚く事はなかった。

次に来るのは必殺の雷撃だ。それが分かっていたら、対処の仕方も分かる。

「フレアドライブ！」

紅蓮の炎を纏いながら、ウインディは駆け出した。

迫りくる攻撃を攻撃をもって制する。それはアルトもよく使う戦術だ。

「ふぶきだー！」

かみなりではなかった。その事をフレデリックが認識した時、すでに世界は氷結していた。

この為のぼうふうとハイドロポンプ。

フレアドライブを発動していたおかげでウインディは健在だが、フィールド全体に超巨大な氷の大迷宮が出現してしまった。

「脱出を！ フレアドライブ！」

「はかいこうせん！」

自身を取り囲む氷の檻を破る為にフレアドライブを発動するウインディ。

そこに、ギャラドスの無慈悲なはかいこうせんが放たれる。

氷の大迷宮を築いたのは、すばやいウインディに確実にはかいこうせんを命中させる為のものだったのだ。

『ウインディ、戦闘不能！ このまま、四天王・フレデリックも為す術なく負けてしまうのかあ!? さあ、フレデリック選手、次のポケモンを出してください!』

フレデリックが次に繰り出したポケモンに世界が止まる。

「頼みますよ、サンダー!」

そのポケモンの名前はサンダー。伝説の鳥ポケモンの内の一体。かみなりの化身とも呼ばれる伝説のポケモンだ。

「アーイ!」

二年前、メルカトの北に広がるオルネウス大山脈で暴れていたサンダーをフレデリックが単身で捕獲した事はニュースでも話題になった。

「かみなり!」

他のポケモンが使えば命中率の不安定なわざ。

けれど、サンダーはかみなりを自在に操る事が出来る。フィールドの上空に生まれた雷雲から無数のかみなりが降り注ぐ。

「はかいこうせん!」

回避出来る隙間などなく、ギャラドスははかいこうせんで迎え撃とうとするが、かみなりの量に圧殺された。

『ギャラドス、戦闘不能! さすがのギャラドスもサンダーが相手では分が悪かったかあ! さあ、アルト選手! 次なるポケモンはあ!?!』

「ギルガルド!」

アルトが次に選んだポケモンはギルガルド。

「ボルトチェンジ!」

すると、フレデリックはサンダーを戻した。

『おーっと、フレデリック選手! ここでポケモンを交代させました! 繰り出したのは、ヘルガー! ギルガルドとは相性抜群のポケモンです!』

「ニトロチャージ!」

炎を纏いながらヘルガーが走り始める。

「ラスターカノン!」

ギルガルドがラスターカノンで斬撃を飛ばす。

「あくのはどう!」

対して、ヘルガーは立ち止まる事なくあくのはどうを放つ。走る衝撃を乗り越えて、ヘルガーはギルガルドに肉薄した。

「せいなるつるぎ!」

「だいもんじ!」

迫りくる斬撃に対して、ヘルガーはだいもんじを放った。

けれど、業火に焼かれながらもギルガルドの剣速は衰えない。

「キャイン!?!」

斬り飛ばされるヘルガー。

「体勢を整え、再びだいもんじ!」

「無駄だ!」

ヘルガーがだいもんじを放つと、ギルガルドはラスターカノンを放った。

ぶつかりあう炎と鋼。

「だいもんじ!」

「ラスターカノン!」

止められても尚、ヘルガーはだいもんじを放つ。

「ギルツ!」

度重なるだいもんじの発動によって、周囲の温度が上がっている。

「今だ、オーバーヒート!」

オーバーヒートはギルガルドのラスターカノンを呑み込み、更にギルガルド本体を呑み込んだ。

「ギルガルドを舐めるな! すべてを断ち切れ!」

「ギルツ!」

「回避です!」

せいなるつるぎが次元を引き裂く。

原種たるポケモンの上に許された天災クラスの攻撃。

回避しても、開かれた亜空の扉が周囲の物質をブラックホールの如く引き寄せる。

「二トロチャージ!」

「ラスターカノン！」

亜空から逃れようとニトロチャージを発動するヘルガーにギルガルドは容赦なくラスターカノンを叩き込む。

調整したのだろう。亜空は閉じ、ヘルガーは戦闘不能になった。

「さすがはギルガルドの原種ですね。嘗て、暴れまわるギラティナを世界の裏側たる『破れた世界』に追放する為に次元の壁を引き裂いたのもギルガルドの原種と言われています。偉大なる太古の王が握った聖剣。それが変化したポケモン。手強い」

フレデリックが次に選んだポケモンはゾロアークだった。

けれど、その事にアルトを含めた誰も気づく事が出来ない。

『フレデリック選手の次なるポケモンはルカリオです！』

これこそがゾロアークの固有能力。イリュージョンと呼ばれる、仲間の姿に化ける力。

「ラスターカノン！」

「あくのほう！」

ギルガルドのラスターカノンをルカリオに化けたゾロアークがあくのはどうで撃ち落とす。すると、次のラスターカノンは威力が跳ね上がった。それもあくのほうで逸らすのが、その次のラスターカノンは次元に歪みを生み出すほどの威力となり、ゾロアークは回避せざる得なかった。

ギルガルドがゾロアークの方へ近づいてくる。距離が縮まっていた事で、ゾロアークは回避が難しくなってきた。後一メートルも詰められれば、今度こそ天災クラスのラスターカノンが命中してしまう。

その時だった。

「距離は十分に縮まった。今ですよ、ゾロアーク！」

「ゾロアーク！」

ギルガルドのラスターカノンをギリギリで回避したゾロアークは偽装を解き、一直線にギルガルドへ向かって走り出す。

『なんと！ルカリオがゾロアークに変わってしまいました！これは、ゾロアークの固有能力であるイリュージョンです！それにしても、すばやい！』

さつきまでとは明らかに動きが違う。ゾロアークはギルガルドが十分な距離まで近づいてきてくれるように回避のスピードを抑えていたのだ。

次の行動に移る間も与えず、ゾロアークはギルガルドに肉薄した。

「ナイトバースト！」

「ゾロアツ！」

ナイトバーストがギルガルドに命中する。

効果は抜群だ！

ギリギリで耐え抜いたギルガルドだが、闇に視覚を奪われている。

「じごくづきー！」

「ゾロアツ！」

ゾロアークのじごくづきがギルガルドの急所を抉る。

効果は抜群だ！

『ギルガルド、戦闘不能！ これで両者二体のポケモンがダウンしました。いよいよバトルも中盤です！』

中盤という実況の言葉にフレデリックはクスリと笑う。

アルトのポケモンの中で、原種はギャラドスとギルガルドのみ。

キテルグマとスピアーは原種にも比肩する力を持っているが、残りの二体は育てが甘い。

実質、アルトに残された手札は二枚なのだ。

故に、中盤ではなく、すでに終盤。

「ここから巻き返せますか？ アルトくん！」

「頼むぞ、カラマネロ！」

「ネーロ！」

繰り出したのはカラマネロ。相性は最悪とっていいポケモンだ。

『おーっと、ここでアルト選手、ゾロアークに対して相性の悪いカラマネロを繰り出した！ 一体、なにを考えているのでしょうか!?!』

あくタイプのゾロアークにエスパータイプのわざは効果がない。

けれど、考えなしに繰り出したわけではないだろう。そう、フレデリックが考えた瞬間、フィールド全体に光が走った。

『トリックルームです！ フィールド全体にトリックルームが展開さ

れました!』

トリックルームの中ではスピードが速ければ速いほどに遅くなる。奇妙奇天烈摩訶不思議。それこそがエスパークタイプの真髄。

この世の法則が今より僅かな時間だけ書き換えられた。

「駆け抜ける、カラマネロ!」

「ネーロ!」

「なるほど、それが狙いですか!」

カラマネロが猛スピードで迫ってくる。対するゾロアークの動きは鈍い。

「あくのはどう!」

「ゾロアツ!」

「ネーロ!」

ゾロアークがあくのはどうを放つが、発動までの動作が鈍く、カラマネロは容易に回避して、一気にゾロアークに肉薄した。

「ばかぢから!」

「ネーロツ!」

「カウンター!」

ゾロアークの弱点の一つはかくとうタイプ。当然、フレデリックはかくとうタイプに接近戦を挑まれた時の対策を練っていた。

カラマネロのばかぢからに対して、ゾロアークのカウンターが放たれる。

「もっともっと、ばかぢから!」

「ネーロ!」

けれど、カウンターを受けてなお、カラマネロはばかぢからを發揮した。

さつきよりも遥かに威力が増している。

「カウンターです!」

これは一回戦でアルトと戦ったヴァルカスの戦法だ。どちらが先に倒れるかのチキンレース。

そして、勝ったのは……、

『ゾロアーク、戦闘不能!』

本来、ばかぢからは使用後に攻撃力と防御力が下がってしまうわけだ。

けれど、カラマネロの場合のみ、その効果が反転する。

カラマネロはばかぢからを使えば使うほどに強化されるポケモンなのだ。

跳ね上がった防御力でゾロアークのカウンターを受け止め続け、先にゾロアークをノックアウトさせる事に成功した。

「ネーロ」

挑発的な眼差しを向けてくるカラマネロにフレデリックは微笑みを浮かべる。

「なるほど、出し惜しみをしては負けますね。いきますよ、ウルガモス！」

フレデリックが繰り出したポケモンはウルガモス。

太古の時代、太陽の化身として崇められた原種である。

「ばかぢからー！」

「ほのおのまいー！」

果敢に攻め込むカラマネロに対して、ウルガモスは炎の鱗粉を撒き散らしながら踊り始めた。捉えがたい動きに加え、高熱の炎にまかれ、カラマネロは苦悶の声を上げる。

「むしのさざめきー！」

ウルガモスの三対の羽から音波が放たれた。

効果は抜群だ！

『カラマネロ、戦闘不能！』

カラマネロをモンスターボールに戻して、アルトは新たなるモンスターボールを握りしめた。けれど、その色は市販されているどのタイプのボールとも配色が異なっていた。

「あれは、まさか!？」

フレデリックが驚愕する。

『あ、あれはー！アルト選手が握っているモンスターボールは、ハイパーボールすらも超える究極のモンスターボール！マスターボールです！ わ、わたしも実物を見るのは初めてです！』

会場が沸き立つ。

マスターボールはカントー地方に拠点を置くシルフカンパニーが開発したものだ。

市販はされず、存在する事のみがネット上で囁かれてきた幻のモンスターボール。

その登場に、誰もが身を乗り出した。

「いくよ、フーパ！」

「フーパニオマカセ！ イックゾー！」

飛び出したポケモンはフーパ。

幻のポケモンと呼ばれる存在の出現に会場が静まり返る。

「失念していました」

メルカト奪還の際、ヴリル教団幹部のヴェルトーゼが使役していたフーパをアルトが保護した事はミリガンからの報告でフレデリックも知っていた。

けれど、ポケモンリーグでは一切使わず、チャンピオンリーグでもここまで温存して来た為に存在を失念してしまっていた。

《オーデーマーシー！》

フーパが戒めより解き放たれた。巨大な魔神がウルガモスを睥睨する。

「オーバーヒート！」

「いじげんホール！」

ウルガモスの放ったオーバーヒートがフーパのリングに呑み込まれた。そして、ウルガモスの背後に飛んできたリングから飛び出してきた。

自らの炎を受けたウルガモスはゆらゆらと地面に落ちた。

『ウ、ウルガモス、戦闘不能！ そして、たった今、アルト選手の繰り出したポケモンの情報が届きました！ あのポケモンの名前はフーパ！ カロスでのみ目撃情報のあった伝説のポケモンです！』

実況がフーパの事を熱く解説する一方で、フレデリックは新たなポケモンを繰り出した。

「ルカリオでは分が悪すぎる。キミが頼りです。サンダー！」

「アーイー！」

繰り返されたのはサンダー。

『なんとという光景でしょう！ 伝説のポケモン同士が向かい合っております！』

サンダーとフーパが睨み合う。

「かみなり！」

「ゴーストダイブ！」

サンダーが雷雲を呼び寄せると、フーパは自らの影に潜り込んだ。そして、サンダーの背中にわずかに生じている影からいましめられし姿で飛び出すと、再びときはなたれし姿に変わり、拳を振るった。

「アーイー！」

けれど、サンダーはダメージを受けながらもかみなりを発動した。降り注ぐ無限の雷霆に対して、フーパはリングを広げる。

すべてのかみなりを次元の彼方へ飛ばすと、フーパは笑った。

「いじげんラッシュュー！」

《クラエ、フープノヒツサツワザ！》

サンダーを取り囲む六つのリング。そこから次々にフーパの腕が伸びてくる。

四方八方から繰り返される拳に耐えきれず、サンダーは地面に落下した。

『サンダー、戦闘不能！』

フレデリックは感動のため息をこぼした。

「ああ、すばらしい。これが、チャンピオンの認めたトレーナー！」

フレデリックは最後のポケモンを繰り返した。

ゾロアークが化けていたルカリオだ。

「いきますよ、ルカリオ！ いきますよ、未来のチャンピオン！」

フレデリックは袖を捲り、腕に装着したメガストーンを露出させた。

ルカリオの姿が変わっていく。

メガシンカだ。

『ここでフレデリック選手、ルカリオをメガルカリオにメガシンカさ

せたあ！ まだ、諦めていません！』

メガルカリオが走り出す。波動によって、主の心の声を聞き取り、相手の心の声を読み取る。

しんそくによってルカリオは一気にフーパとの間の距離を詰めた。

《エ？ エ？》

そのあまりのスピードにフーパは戸惑っている。

無理もない。フーパにとって、これは初の実戦なのだ。

アルトが指示を飛ばすが、行動に移すまでが遅すぎる。

「オオオオオオオッ！」

至近距離から放たれたきあいだがフーパの急所に直撃する。

信じ難いほどの威力に、フーパはいましめられし姿へ戻ってしまった。

「ウエーン！ イタイヨー、アート！」

泣きじやくりながらアルトの下へ帰ろうとするフーパ。

「これは……、サンダーを落とされたのはわたしの不手際ですね」

あまりにも酷い醜態だ。フレデリックは落胆しながらルカリオにトドメを命じた。

「ウエーン！」

ルカリオのアイアンテールが命中した。

『フ、フーパ……ちゃん、戦闘不能……です。な、なんか、すごく可哀想です……』

フーパの泣き声に実況のジーンも動揺している。まるで、子供を甚振ってしまったかのような罪悪感にフレデリックも表情を曇めた。

「スピアー！」

フーパをモンスターボールに戻したアルトはエースであるスピアーを繰り出した。

「スピイイイイイイツ!!」

まさに一瞬だった。スピアーはルカリオの背後を取り、ダブルニードルを急所に連続で叩き込んだ。

こうかはいまひとつ。

それでも、ルカリオは咄嗟に反撃に移れないほどのダメージを受け

た。

「ドリルライナー！」

「スピイイイイイイイツ!!」

ドリルライナーがルカリオを穿つ。

効果は抜群だ！

『ル、ルカリオ、戦闘不能！ よって、この試合はアルト選手の勝利です！』

ジーンが宣言すると同時にアルトは慌てた様子で移動装置に戻っていった。

勝利の余韻を感じている様子もない。

「……なんとも、後味の悪い」

フレデリックは深々とため息を零した。

第七話 『決戦！ VS 四天王・ミリガン！』

「アートのバカバカー！ フーパ、スツゴクイタカッタヨー！」
「ごめん、フーパ」

ポケモンセンターでみんなを回復してもらった後、俺はフーパを抱っこしながら控室にいた。度重なる四天王とのバトルはワクワクしたし、面白かった。

それに、ミリガンやザラクと戦う前にギャラドスやギルガルドの最大パワーを試す事が出来て良かった。

「モウー・キイテルノ？ アート！」

「聞いてるよ」

次の相手はミリガンだ。俺が憧れた人。最強に最も近い人だ。

ヴェゼール・ヴィレッジで彼女に救われた時、そのあまりの強さに魅了された。

手を伸ばしても届かない高みに、彼女はいた。

「フーパ」

「ナーニ？」

「ここまで来たんだ、俺達」

エリザヤバレット、アギトと共に歩んできた旅路。

これまで経験してきたバトルのすべてをぶつける時が来た。

今なら、伸ばした手が彼女に届く筈だ。

「俺はミリガンと戦う。きつと、さっきのバトルよりも怖い思いや、痛い思いをさせてしまうかもしれない。それでも、俺と一緒に戦ってほしい」

「アート……」

フーパはジッと俺を見つめた後、ニンマリと笑みを浮かべた。

「イイヨ！ アートトイツシヨニ、フーパ、タタカウ！」

「ありがとう」

第七話 『決戦！ VS 四天王・ミリガン！』

実に不思議なのだけど、つい1時間前のバトルでボロボロになった筈のフィールドがすっかり元通りになっている。リーグの運営がポ

ケモン達の力を借りて突貫工事をしているらしいけれど、大したものだ。

『アルトくん』

画面越しにミリガンが声を掛けてきた。

『ついに出たね』

「うん」

胸が高鳴る。

——もう、大丈夫！ わたしは四天王のミリガン！ 助けに来たわ！

脳裏に彼女と初めて出会った時の光景が蘇る。強くて、美しく、気高い姿に見惚れた。

彼女に背中を押してもらえたから、俺は旅に出る事が出来た。

彼女に憧れたから、俺はここまで来る事が出来た。

「バトルだ、四天王・ミリガン！ 俺はあなたを超える！ 今、この戦いで！」

『ええ、超えてみせなさい！ チャレンジャー・アルト！』

バトルが始まる。

繰り出すポケモンは決めてある。

「ギルガード、君に決めた！」

「ギルツ！」

彼女から受け継いだポケモン。亡霊の港に沈んでいたヴリル王の剣。

ギルガードは相手が嘗ての主である事に対して、些かの躊躇いも持っていない。

完全に俺を主と認めてくれている。

そんなギルガードの為にも、このバトルは負けられない。

『わたしの全力、見せてあげる！ キリキザン！』

『キザンツ！』

ミリガンが繰り出したのはキリキザン。

彼女のポケモンは、全員が刃を持っている。

剣聖・ミリガン。メルカトで戦った時の彼女とは違う。その本来の

実力と遂に！

「いくぞ、ギルガルド！ つるぎのまい！」

『キリキザン、つるぎのまい！』

考える事は同じらしい。

最大まで力が高まった瞬間、二体のポケモンは爆発したかのようにフィールドの中央へ進み始めた。

直径にして1km。そんな出鱈目なくらい広大なコロシウムの中にギルガルドとキリキザンは数秒で辿り着くと、挨拶代わりの一撃を互いに繰り出した。

鋼の音が鳴り響く。そして、本格的なバトルが始まった。

「ギルツ！」

「キザン！」

ギルガルドはせいなるつるぎを、キリキザンはつじぎりを発動している。互いに効果抜群の攻撃だ。

攻撃をまともに受けたほうが負ける。それが分かっているからこそ、二体は神経を研ぎ澄ましている。

一秒の間に重なる鋼の音が五つ。それは一秒の内にキリキザンがせいなるつるぎを逸し、ギルガルドがつじぎりを弾いた数だ。

両者が狙うは常に必殺。一秒先の己の敗北を更なる刹那の敵の敗北に塗り替える。

「キツザア！」

「ギルツ！」

王の力のせいか、ギルガルドの心と、そして、キリキザンの心が流れ込んでくる。

かつて、二体は同じ主を仰いでいた。共に研鑽を重ねて来た。共に戦ってきた。

ギルガルドが袂を分かった時、こうなる事をキリキザンは理解していた。そして、その瞬間の到来を心待ちにしていた。

ミリガンのエースだったギルガルド。それを超える事で、己こそが彼女のエースとなる。己こそが彼女の剣となる。

「キザン！」

キリキザンはミリガンがはじめてゲットしたポケモンだった。彼女とキリキザンの出会いの光景が脳裏に浮かんでくる。

ヴリル王のクローンとして生まれた彼女は初の成功体であると同時に、失敗作でもあった。

彼女は廃棄されそうになり、研究所から逃げ出した。

追手が迫ってくる中で、恐怖を抱えながらも生きようと足掻いた彼女の前に現れたのがキリキザンだった。

近くの山に住んでいたキリキザンはミリガンの助けを求め声無き声を聞いたのだ。

「キザアッ！」

負けたくない。

負ける訳にはいかない。

「ギルツ!!」

その気迫に負けじと、ギルガルドが渾身の一撃を放つ。

「キザン！」

一際甲高い音が鳴り響いた。キリキザンのメタルバーストだ。

カウンターやミラーコートの亜種。

渾身の一撃が跳ね返ってくる。

「ギルツ!？」

よろめいたギルガルドに対して、キリキザンは迷うことなく踏み込み、つじぎりを放った。

「キザン！」

致命的な急所に効果抜群の一撃を受け、ギルガルドは戦闘不能に陥る。

「キザ……ツ!？」

けれど、ギルガルドもただでは倒れない。

最後の力を振り絞り、キリキザンをみちづれにした。

「キザ……」

キリキザンはミリガンに向かって手を伸ばしながら倒れ伏した。

『ギ、ギルガルド！ キリキザン！ 共に戦闘不能！ あ、あまりの凄まじい殺陣に、わたくし、思わず呼吸を止めておりました……』

実況のジーンの言葉に、俺も呼吸を思い出した。

いきなり酸素を送り込まれて、心臓が驚いている。

だけど、仕方がない。それほど、凄まじいバトルだった。

「キリキザン、凄いポケモンだ」

ミリガンに勝利を捧げたいと心から願っていた。その執念がギルガルドを打ち負かした。

ギルガルドがみちづれにしてくれなかったら、果たして、他のポケモンで勝てたかどうか分からない。

「頼むよ、カラマネロ！」

ミリガンが繰り出したポケモンはグソクムシャ。

ギルガルドのように切り合いを始めたら勝ち目がない。

「トリックルーム！」

カラマネロがトリックルームを展開させる。

正直、グソクムシャは鈍重なタイプだ。だから、すばやさの反転は逆効果にしかない。

だけど、トリックルームには別の用途がある。

「グソクムシャを捕捉するんだ！」

四回戦でザイリンが使っていた戦法だ。フィールド全体に展開したトリックルームを通じて、敵の居所を探り出す。

「ネロ！」

見つけた。

「どくどくを頭上に！」

「ネーロ！」

猛毒を真上に放つカラマネロ。

「サイドチェンジ！」

「ネロ！」

次の瞬間、カラマネロの立っていた場所にグソクムシャが現れた。

「キシヤツ!?!」

グソクムシャは猛毒を浴びた。

これで、後は逃げるだけだ。

「キシヤアアアツ！」

グソクムシヤが雄叫びをあげる。

はかいこうせんを自分の居た方角目掛けて放つが、すでにカラマネロは移動していた。トリックルームも解除して、息を潜めている。

「ギシヤ……」

それからしばらく経ち、ついに全身に猛毒が回ってしまったグソクムシヤは倒れた。

『グソクムシヤ、戦闘不能!』

これまでのバトルで、ステータスで負けている相手に勝つ為の方法は散々学んできた。

「よくやった、カラマネロ!」

「ネーロー!」

無傷でグソクムシヤを落とせた。これはかなり大きい。

『お見事。でも、次はこうはいかないよ! ジュカイン!』

ミリガンが三体目に選んだポケモンはジュカインだった。

『グラスフィールド!』

『ジュカツ!』

現れると同時にフィールド全体が緑で覆われた。

「まさか!?!」

『ハードプラント!』

『ジュカアアア!』

「ネロ!?!」

いきなりカラマネロの足元から樹木が生えてきた。

『カラマネロ、戦闘不能!』

回避する暇さえなかった。

『アルトくんの真似』

舌をペロツと出して悪戯っぽく笑うミリガン。

悔しいのに、怒る気になれない。

ズルい人だ。

「同じ手は通じないよ! ギャラドス!」

「ギシヤアアアッ!」

飛び出すと同時にギャラドスが天高く舞い上がる。

「あまごいだー！」

地上にいるジユカインの攻撃が決して届かない高度まで上がると、ギャラドスは雨雲を作り出した。

『届かないと思っただ？』

「え？」

背筋がゾクリとした。

ギャラドスは雲の近くまで高度を上げている。例え、そこまで届くほどの攻撃が来ても回避は容易い筈だ。

それなのに、胸騒ぎが止まらない。

「急げ、ギャラドスー！」

雨雲が徐々に広がっていく中、ミリガンの声が響く。

『ハードプラントー！』

フィールド全体から樹木が伸びていく。

信じ難い光景だ。一瞬の内にフィールドが樹海に変わってしまった。その上、樹木は絡み合い、どこまでも高く育っていく。

まるで、シャンティ・シテイにあるサラの柱の如く、ハードプラントが生み出した巨木は天を突き刺した。

ジユカインはその樹木を足場に空へ上がっていく。

「かみなりだー！」

雨雲が完成した。降り注ぎ始める雨にギャラドスは雷霆を走らせる。

雨がジユカインにかみなりを導く。

『雷を切れ！ リーフブレード！』

「なあっ!？」

ジユカインは迫ってくるかみなりに対して、リーフブレードを発動した。

だけど、無理だ。かみなりの速度は音の三倍以上だと、むかしモンテロ博士から教えてもらった。

そんなものを斬れる筈がない。

「ジユカアー！」

その筈なのに、ジユカインに向かって伸びた雷が裂かれ、四散した。

『か、かみなりを斬ったああああ!? し、信じられない！ 我が目を疑いました!』

ジユカインが再び昇ってくる。凄まじい速度だ。

あつと言う間にギャラドスと同じ高度まで上がってきた。

「ギシヤアアアアアッ！」

「ジユカアアアアアッ！」

ジユカインがリーフストームを放つ。

対するギャラドスはいかいこうせんを放った。

はいかいこうせんがリーフストームをアツサリと呑み込むが、それはミリガンとジユカインの想定内だった。

リーフストーム発動直後に、すでにジユカインは回避行動に移っていた。

そして、反動で動けなくなっているギャラドスにリーフブレードを放った。

『ギャラドス、戦闘不能!』

一撃でギャラドスは倒されてしまった。みずタイプを持っているけれど、ギャラドスはひこうタイプも併せ持っている。

だから、くさタイプの攻撃は効果抜群とはならない筈なのに、それでも一撃必殺だった。

これがミリガンのポケモンの力。剣聖の技術によって致命的な急所を的確に狙ってくる。

『アルト選手、これで三体のポケモンが戦闘不能に陥りました！ これは厳しい!』

スパアーは温存だ。ミリガンには、まだまだ強力なポケモンが残っている。

「頼むぞ、キテルグマ！」

「キイイイイイイッ！」

繰り出すと同時にキテルグマはジユカインがハードプラントで生やした大樹を登り始めた。

ジユカインも迎え撃つべく降りてくる。

二体のポケモンが激突する。

「ジュカア！」

「キイイイイイツ！」

ジュカインがリーフブレードを振るう。

一息の内に十の斬撃がキテルグマに迫る。

到底避けきれぬものではない。だから、避けない。

「いたみわけ！」

「キイイイイイツ！」

「ジュカアアアツ！」

最初の攻撃で瀕死スレスレまで減っていた体力がいたみわけによつてわずかに回復する。

同時にジュカインは全身を激痛に襲われ、わずかに表情を歪めた。

「ギガインパクト！」

「キイイイイイイツ！」

その瞬間を逃さない。最大威力ギガインパクトをジュカインにつける。

『リーフブレード！』

対するジュカインはリーフブレードを構えてキテルグマを待ち受ける。

ジュカインはギガインパクトを紙一重で回避しようとしたが、キテルグマは両腕を広げてジュカインの頭を掴み取った。

「ジュカアアアア！」

ジュカインは頭を掴まれたままリーフブレードを振るう。

急所を斬られたキテルグマは意識を失うが、それでもジュカインを離さない。そのまま大樹に叩きつけられたジュカインは目を回した。

『キテルグマ、ジュカイン！ 共に戦闘不能！』

遥かな高度から落下してくる二体を俺とミリガンはそれぞれ地面に衝突する前にモンスターボールに回収した。

そして、次のポケモンを繰り出す。

「いくぞ、フーパ！」

「フーパ、ガンバル！」

フーパの姿がいましめられし姿からときはなたれし姿に変わった。

『おーつと、ここで！ アルト選手が繰り出したのはフーパです！ 前の試合では泣いてしまいました。大丈夫なのでしょうかね!?』

《フ、フーパ、ナイトナイ！ ナイトナイ!》

『あーつと、失礼しました！ し、しかし、会話出来るポケモンとは珍しい！ あとで、ちよつと個人的におしゃべりがしてみたいです!』
俺が繰り出したフーパに対して、ミリガンはエアームドを繰り出した。

エアームドの羽は薄くて固く、そして鋭い。それ故に、過去には刀の素材として使われていた事もあるという。

ミリガンが腰に携えている刀は彼女のエアームドの羽を加工したものだ。

「フーパ、トリックルームだ!」

『遅い』

フーパがトリックルームを展開する前にエアームドが動いた。

一気に最高速度まで加速したエアームドのブレイブバードがフーパの急所を切り裂く。

「フーパ!」

《イダイヨー!》

泣きべそをかき始めるフーパ。すると、エアームドはフーパの前まで戻ってきた。

「アァー!」

《ダツテ、イダインダヨー!》

「アァー! アァー!」

《フーパ、ナサケナクナンテナイ!》

「アァー! アァーアァー! アイアァー!」

《オマエ、ウルサイ! モウ、フーパ、オコッタ!》

フーパは涙を拭った。

『こ、これは! エアームドとフーパが会話をしたのでしょいか!? フーパの方しか分かりませんでした。どうやらエアームドが泣きべそをかくフーパを叱咤したようです! これは、つまり……、フーパ以外のポケモンも意志を籠めて鳴いているという事なのではありません』

せんか!? ポケモンの知性に纏わる研究は世界中で行われておりませんが、『情けない』という言葉を使ったのだとすれば、これは!』

実況が変な所に興奮しているけれど、エアームドの叱咤激励のおかげでフーパは戦う覚悟を決められたようだ。

「いける? フーパー!」

《フーパ、イケル! ムカツク、トリ! ブツトバス!》

「アイー! アイアイー!」

《ムツカー!》

どうやら、エアームドは更に煽ったらしい。

「落ち着くんだ! ゴーストダイブ!」

《ミテロー!》

フーパの体が影の中に沈み込む。

『おいかぜ!』

すると、ただでさえ速いエアームドがおいかぜに乗ってスピードを上げた。

フィールドの上空を縦横無尽に飛び回るエアームド。影からの攻撃を警戒しているのだろう。

だけど、ゴーストダイブの狙いは別にある。

「いじげんホール!」

超スピードで飛び回るエアームドの真正面に向かって、影からリングが飛んでいく。

リングは一気に広がり、避けようとしたエアームドを呑み込んだ。

そして、出口であるリングの真正面で待ち構えていたフーパの拳がエアームドの急所を穿つ。

「決まった!」

エアームドのスピードが逆に仇となった。

カウンター気味にヒットした攻撃はエアームドを一撃で戦闘不能に――、

「ブレイブバード!」

「なっ!?!」

倒れた筈だ。到底、耐えきれぬダメージじゃなかった。

それなのに、エアームドは反撃してきた。

二度に渡るブレイブバードの直撃によって、フーパは倒れ込み、目を回してしまった。

そして、ブレイブバードの反動を受けたエアームドも今度こそ戦闘不能になった。

『エアームドの頑丈さを侮ったわね、アルトくん』
「ぐぬぬ」

これで、俺のポケモンはスピアーのみになった。

ミリガンには、まだ二体のポケモンが残っている。

「頼むぞ、スピアー！」

「スピイツ！」

対するミリガンが繰り出してきたポケモンは、

『ゲツコウガ！ 君に決めた！』

「ゲツコウガ!？」

ギルガルドが俺の手持ちに加わった以上、ミリガンも新しいポケモンを加えている筈だと分かっていた。

だけど、まさかゲツコウガとは思わなかった。

ザラクから譲り受けて、何度もピンチを救ってくれたポケモンの同族。

「スピイイイイイツ！」

スピアーのボルテージが一気に上がっていく。

「コウガ！」

ゲツコウガが一気にフィールドを駆け抜けてくる。

「ミサイルばり！」

『みずしゅりけん！』

ミサイルばりとみずしゅりけんがぶつかり合う。

その間にもゲツコウガは止まらず、スピアーに急接近してきた。

「コウガアツ！」

「スピイツ！」

両手に生み出した水のクナイによってつじぎりを繰り出すゲツコウガに対して、スピアーもダブルニードルで迎え撃つ。

「コウガッ、コウッ！ コウガ！ コウガアアアッ！」

「スピイッ！ スピスピイイッ！ スピイイイイッ！」

さすがはミリガンのポケモンだ。スピアーの眼力を持ってしてもギリギリの攻防を要求される。

「だけど、ゲッコウガはもつと強いんだ！ スピアー！」

同じ種族であっても、俺達と一緒に旅をしたゲッコウガの方が強かった。

だから、ここで苦戦なんてしてられない。

「スピイイイイッ！」

「コガッ!?」

ニードルでゲッコウガのつじぎりを捌きながら、スピアーはミサイルばりを発動した。

ゼロ距離で放たれたミサイルばりをゲッコウガは紙一重で回避する。並のポケモンに出来る芸当ではないけれど、これで終わりじゃない。

「スピイイイイッ！」

スピアーは更なるミサイルばりを放つ。そして、同時にゲッコウガが回避したミサイルばりが軌道を変え、再度ゲッコウガに背後から襲いかかる。

「コウガッ！ コウコウ、コウガアア！ コウガ！ コウガアアアアッ！」

ザラクのゲッコウガほどじゃない。けれど、十分に化け物だ。

前後から襲いかかるミサイルばりをゲッコウガは見事に二刀のつじぎりで捌き切ってしまった。

「スピイイイイッ！」

けれど、そこまでだ。ゲッコウガは極限状態に陥っている。

そこに、スピアーのドリルライナーが迫る。

「コウガアアアアアッ!!!」

回避も防御も不可能。その筈なのに、ゲッコウガはつじぎりでドリルライナーに抗っている。

仰向けに倒れかけた姿勢で、左手を地面に突き立て、右手のつじぎ

りだけでドリルライナーを受け止めている。

『ゲッコウガ!』

「コウガア!」

ゲッコウガは左手を地面から外し、ドリルライナーの回転方向と同じ方向に回転しながらつじぎりの角度を変えた。

遠心力を利用して、一気にスピアーから距離をとる。

『ハイドロカノン!』

「コウガアアアツ!」

ゲッコウガのハイドロカノンがスピアーに迫る。

「ハイドロカノンを^{つらぬ}穿け!」

「スピイイイイツ!」

スピアーは回転しながら地面を蹴りつけ、無理矢理にハイドロカノンの方向へ軌道を変えた。

真横から当たれば押し流される。だから、真正面から打ち破る。

「コウガアアアツ!」

「スピイイイイツ!」

ゲッコウガの表情に緊張が走る。このわざには反動がある。これで仕留めきれなければスピアーの次の攻撃を避け切れない。

その焦りが、ゲッコウガの底力を発揮させた。

ハイドロカノンの威力が跳ね上がる。

「負けるな、スピアー! ここまで来たんだ! もっともっと、高みへ行くんだ! だから……、だから! もっともっと強く!!!」

「スピイイイイイツ!!!」

緑の雷霆が迸る。

「いつけええええええつ!!!」

ハイドロカノンが四散する。そして、その先のゲッコウガにキズナヘンゲを遂げたスピアーのニードルが突き刺さった。

「コ、コウガ……」

ゲッコウガは倒れ伏した。

『ゲッコウガ、戦闘不能!』

ミリガンがゲッコウガを戻す。

次が最後のバトルだ。

『いくよ、アルトくん！　これがわたしの全て！　ハッサム！』

『ハッサアー！』

ハッサム。シャンティ・シティでスピアーにかげぶんしんを教えてくれたポケモン。

スピアーの心が伝わってくる。

嬉しい。

ワクワクする。

強くなつた自分を観てもらいたい。

認めてもらいたい。

超えたい。

俺とスピアーの心は一つだ。俺もミリガンに対して、まったく同じ想いを抱いている。

ハッサムがキズナヘンゲを遂げ、スピアーの前に現れた。

『両者、キズナヘンゲを遂げました！　カロスで確認されたキズナヘンゲを使うポケモンは《サトシゲッコウガ》と呼ばれていたそうです！　さあ、アルトスピアーとミリガンハッサム！　どちらに軍配があるのか！　今、最後のバトルが始まります！』

スピアーとハッサムが同時に動き出す。

ハッサムのバレットパンチを躲し、ダブルニードルを叩き込もうとするが回避され、つばめがえしが来る。

「スピィィィッ！」

スピアーは羽から緑の雷霆を放ち、無理矢理に真横へ移動してつばめがえしを回避した。

そして、緑の雷光を束ね、巨大な槍に変える。

放たれたミサイルばりをハッサムはでんこうせっかで回避した。すると、ミサイルばりはハッサムの後方で破裂し、無数の細かいミサイルばりとなってハッサムに降り注ぐ。

「ハッサアアアッ！」

ハッサムの羽から真紅の熱風が吹き荒れる。むしのさざめきだ。

ミサイルばりを吹き飛ばし、同時にスピアーに向かって炎を纏った

バレットパンチを放つ。

スピアーがキズナヘンゲによってでんきタイプを獲得したように、ハッサムはほのおタイプを獲得したらしい。

タイプの相性はハッサムの方が有利だ。

「だからって、負けられるもんか！ スピアー！」

「スピーイイイツ！」

激突する二体。共にむしタイプのポケモンであり、一時は師弟の関係にあった。

互いの心が流れ込んでくる。

ハッサムは歓喜していた。はじめて会った日はか弱く、それでも強い意志を持っていた子が強く立派に成長して自分に挑みに来てくれた事を。

スピアーは歓喜していた。はじめて会った日は手の届かないほどに強く、それでも自分を認めてくれた相手に真正面からぶつかっている事を。

ハッサムはミリガンであり、ミリガンはハッサムだ。

スピアーはアルトであり、アルトはスピアーだ。

彼らは己のポケモンとすべての意志をシンクロさせている。

『強く……、強くなったわね、アルトくん！』

「うん！ ここまで来れたよ！ ミリガンのおかげだ！ だから！」

二体のポケモンの放つエネルギーがフィールドを、マグノリア高原全体を揺るがし始める。

「受け止める、ミリガン!! これが俺とスピアーのすべてだ!!!」

「来なさい、アルトくん!! わたしのすべてで受け止めるわ!!!」

緑の雷光がスピアーのニードルに集まっていく。

紅蓮の炎がハッサムのハサミに集まっていく。

「ミサイルばり!!!」

「バレットパンチ!!!」

放たれたミサイルばりは雷の如き速度でハッサムに迫る。

それに対して、ハッサムは雷すらも凌駕する速度で右腕のハサミを振るった。

炎と雷がぶつかり合う。天を裂くほどの一撃を、ハッサムは徐々に押し返し始める。

「ミリガン」

「アルトくん」

スピアーの目を通して、

ハッサムの目を通して、

アルトとミリガンは見つめ合う。

そして――、

「俺の勝ちだ!!!」

スピアーが二発目のミサイルばりを放った。それすらもハッサムは反対のハサミで受け止めたが、スピアーは更なるミサイルばりを放つ。

四発、五発と放たれたミサイルばりに、遂にハッサムは限界を迎えた。

「ハッ……、サム」

倒れ伏すハッサム。

『ハ、ハッサム！ 戦闘不能です!! よって、この試合の勝者はアルト選手!!! アルト選手、ついに……、遂に!!! チャンピオン・ザラクに対する挑戦権を手に入れました!!!』

勝った。

「スピアー……」

「スピ……」

徐々に息が荒くなっていく。心臓が飛び出そうなほどに高鳴っている。

「スピアー!!」

「スピアー!!」

キズナヘンゲが解けたスピアーが飛びついてくる。俺は両手を上げてスピアーを迎えた。

抱きしめながら、俺達は叫んだ。

勝ったんだ。あのミリガンに勝ったんだ!

「俺達、勝ったんだ!!!」

「スピーー!!」

憧れた背中を今、超えた。

歓喜に打ち震える俺達。すると、俺達の眼の前いきなり何か落ちてきた。

「アルト!」

ザラクだった。歓喜の笑みを浮かべ、手を伸ばしてくる。

「ここまで来たな!」

「うん!」

「スピー!」

ザラクの手を取る。

「今すぐにもやり合いたいが、オレ達の試合は明日だ。そこで、決着をつけよう」

「うん!」

長きにわたるリーグが、もうすぐ終わる。

俺の旅が、もうすぐ終わる。

最強を目指して歩き始めて、ここまで辿り着いた。

「勝負だ、ザラク!!」

「ああ、アルト!!」

第八話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク I』

アルトとの激戦を終え、ポケモン達をポケモンセンターのジョーイさんに預けたミリガンは物思いに耽っていた。

今回のバトルで彼女は持てるすべての力を出し尽くした。

「……楽しかったな」

他の誰とのバトルとも違っていった。

普段、ミリガンは相手に合わせて手加減をしている。ヴェゼール要塞での戦闘の際も彼女は終始本気を出していなかった。それは彼女の本気をぶつけられる相手がいない為だ。

バトルタワーのレコードホルダーだろうと、ポケモンリーグの四天王だろうと、彼女が本気を出した時、それはバトルではなく一方的なリンチになってしまう。

チャンピオンのザラクだけが彼女の本気を受け止める事が出来た。けれど、彼に対しては逆にミリガンの方が受け止める事が出来ていなかった。その気になれば出来たかもしれないがそのあまりにも暴力的な強さに対して忌避感を抱いていた為だ。

戦いたくない。受け止めたくない。そのシンプルな理由が故に彼女はザラクと本気で戦えた事がなかった。だからこそ、ザラクはミリガンの本気を引き出す為に必死だった。彼にとっても、彼女は自らの本気を受け止められる可能性を持つ唯一無二の存在だったからだ。けれど、今では彼の関心の対象は彼女から逸れている。その理由をミリガンはこのバトルで身をもって理解するに至った。

アルトは他の誰とも違う。その旅立ちの日から今日に至るまで、彼のすべてをミリガンは見守り続けて来た。だからこそ、彼の本気を受け止めてあげたいと思えた。同じくらい、自分の本気を受け止めてもらいたいと思った。受け止めてくれると信じられた。

激戦に次ぐ激戦を乗り越えて、アルトは遂にザラクやミリガンと同じ所へ辿り着いた。その事を強く確信したが故にミリガンは本気を出す事が出来た。

「これが本気のバトル……」

気持ちがいい。もっと、戦いたい。それは初めて抱く感情だった。「ザラクには悪い事をしたかな」

彼が執拗なまでに彼女の本気を求め続けた理由を今になって理解出来た。ミリガンが本気を出せていなかったように、ザラクも本気を出せていなかったのだ。

ミリガンにとって、バトルは生きる為に必要な手段だった。けれど、ザラクは違う。彼はヴリル教団に婚約者を害されるまでは普通の少年だったと聞く。今のような修羅ではなく、ただポケモンバトルが好きなだけの普通の少年だったと。

本気のバトルの楽しさも当然知っていたのだろう。知っているのに、本気を出す事が出来ない。どれだけ渴望しても、本気を受け止めてくれる相手がない。その苦悩を今になってようやく理解出来た。「でも、大丈夫だよ」

ミリガンは微笑んだ。

「アルトくんならあなたの本気を受け止めてくれる。わたしを受け止めてくれたみたいに」

きつと、楽しいバトルになる。

「……だから、邪魔をさせてはいけないの」

ポケモン達の回復が終わったらしい。ジョーイさんからモンスターボールを受け止めると、ミリガンは直ぐにエアームドと共に空へあがった。

月明かりの下、チャンピオンリーグの会場の周囲に無数のポケモンが集まって来ていた。

シエルを含めて、敗北した四天王達は彼らを会場に近づけまいとしている。超級と呼ばれるトレーナー達も彼らと共にいる。そこにミリガンも加わった。

戦闘は起きない。睨み合いながらも沈黙を続けている。人もポケモンも待ち続けている。この地で行われる最終決戦の時を――。

第八話『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク I』

最後の晩、アルトはポケモン達と共にいた。

チャンピオンリーグ周辺の異変を受けて、一部の人間を除いて外出

禁止令が出されていた為、エリザ達と会う事が出来なかったからだ。だけど、不安はない。寂しくもない。ここにはスピアー達がいるからだ。

アルトはポケモン達のケアに残りのすべての時間を費やした。

リールシティでアギトに教えてもらいながらエリザやバレットと一緒に購入したポケモンケア用品もすっかり使い切ってしまった。

「この戦いが終わったら、またみんなで買いに行こう。ミリガンやザラクも誘ってみようかな」

ザラクはあまりポケモンのケアに頓着していないイメージがある。ここはポケモンケア道の先輩として色々とレクチャーしてあげるべきだろう。

フーパのリングをピカピカに磨き上げたところで彼はポケモン達を見た。

「スピアー」

「スピーイ！」

「キテルグマ」

「クマー」

「ギルガルド」

「ギル！」

「カラマネロ」

「ネーロ！」

「ギャラドス」

「ギャオー！」

「フーパ」

「ハイイ！」

一緒に旅をしてきたポケモン達に今一度宣言する。

「ザラクに勝とう！ チャンピオンになろう！」

「スピーツ！」

「クマー！」

「ギル！」

「ネーロ！」

「ギャオンー！」

「ナルー！」

ポケモン達をモンスターボールに戻し、彼は立ち上がった。

「行くこう」

いよいよ始まる。ヴェゼール・ヴィレッジが襲われた日に出会った最強の男とのバトル。

否応にも胸の鼓動が高まっていく。

あの日、あの時、あの瞬間、アルトは彼に憧れた。彼のように戦いたいと思った。

「ザラク」

移動装置に乗り、最終決戦の舞台へ移動していく。

辿り着いた先はミリガン達と戦った場所ではなかった。そこは広大な広場だった。

草木もなく川や湖もない。観客席もない。ただひたすらにまっさらなバトルフィールドが広がっている。

その対面にザラクがいた。彼はモンスターボールを掲げるとコンソール越しに言った。

『アルト。バトルしようぜ!!』

「うん！ バトルしよう、ザラク!!」

ワクワクする。ドキドキする。

『さあ!! いよいよ始まります!!』

実況のジーンの声がフィールドに轟く。彼はどこかにいるらしい。

『チャンピオンリーグの最終決戦!! 二年振りのチャンピオンVSチャレンジャー!! 勝つのは史上最強のチャンピオン・ザラク選手か!?! はたまた怒涛の勢いでリーグを勝ち抜いた新進気鋭の超新星・アルト選手か!?! 両者、準備はいいですかあ!?!』

『おう!!』

「うん!!」

二人は同時にモンスターボールを掲げた。

『それでは!! 最終決戦!! バトルスタートです!!!』

その宣言と同時に二つのモンスターボールがフィールドに投げ込

まれた。

「ギャオオオオオオオオオオオオ!!」
「ギャオオオオオオオオオオオオ!!」

同時に飛び出したポケモンは二体共ギャラドスだった。

『おーつと、両者共にギャラドスを繰り出した!! これは驚きです、ザラク選手はこれまでリーグにおいてバシャーモ以外のポケモンを繰り出した事が一切ありませんでした!!』

二体のギャラドスはぼうふうとあまごいによってフィールド全体に嵐を巻き起こした。二体はみずとひこうのエネルギーは荒れ狂う中を泳いでいく。

「かみなりだ!!」

先に動いたのはアルトのギャラドスだった。嵐の中を雷霆が迸る。みずとひこうの二重タイプであるギャラドスにとって、かみなりタイプの技は致命の一撃になり得る。加えて、この嵐を形成しているぼうふうはアルトのギャラドスが発動したもの。

大気を操り、ザラクのギャラドスの動きを制限し、同時にあまごいによるみずエネルギーを誘導してかみなりが走る為の水のサーキツトを構築していく。

『れいとうビーム!!』

ザラクのギャラドスが放ったれいとうビームが周囲のみずエネルギーを一気に氷結させた。

かみなりは生み出された氷の壁がと激突し、その間にザラクのギャラドスは上空へ移動していく。

「追いかける!!」

間一髪だ。嵐を抜けた瞬間、ザラクのギャラドスは再びれいとうビームを放とうとしていた。後一步で嵐ごと氷漬けにされている所だった。

ひこうタイプを持つギャラドスにとって、こおりタイプの技はでんきタイプほどではなくても天敵だ。

『そのまま放て!!』

「ハイドロポンプ!!」

放たれたれいとうビームに対して、アルトのギャラドスはハイドロポンプを放つ。

ハイドロポンプが見る間に氷結していく。

「そこだ、威力をあげろ!!」

ギャラドスはみずとひここの二重タイプであり、タイプが一致していないこおりタイプのれいとうビームよりもタイプが一致しているハイドロポンプの方が威力は上だ。

それでもハイドロポンプを凍りつかせていくのはさすがの威力だが、氷結していく速度が遅い。既に氷結してしまっている部分をれいとうビームに対する壁にして、アルトのギャラドスはハイドロポンプの威力を一気にあげた。

最終決戦における初戦のギャラドス対決、その最初の一撃はアルトのギャラドスが決めた。その事に歓喜したアルトの笑顔が次の瞬間に強張った。

『ゆきなだれ!!』

「またこおりタイプ!？」

ザラクのギャラドスはハイドロポンプの直撃を受けた直後、こおりエネルギーの塊をミサイルのように撃ち出した。

あれは嘗て、ユニオンの大会でエリザがクレベースに使わせた技だった。

ギャラドスのすばやさでは躲し切れない。そう判断して、アルトは叫んだ。

「はかいこうせん!!」

避けきれないなら、このまま仕留める。

ハイドロポンプの直撃を受けた直後に反撃の為の技を放ったザラクのギャラドスは動きが鈍くなっている。そこに渾身のはかいこうせんを叩き込む。

嘗て、都市を一撃で滅ぼし去った原種であるギャラドスの一撃に対して、ザラクのギャラドスはれいとうビームを放った。しかし、ゆきなだれを放った直後だった為にこおりエネルギーのチャージが足りず、軍配はアルトのギャラドスにあがった。

ザラクのギャラドスがかいこうせんの直撃を受けると同時にアルトのギャラドスもゆきなだれの直撃を受けた。

二体は同時に未だ荒れ狂う嵐の中へ落ちていく。

『ふぶき!!』

「かみなり!!」

かみなりを命じながら、アルトは耳を疑った。ザラクのギャラドスは最初にあまごいを使い、次にれいとうビーム、そして、ゆきなだれを使った。つまり、あのギャラドスはあまごい以外こおりタイプの技しか覚えていなかった事になる。

「……ザラク」

かみなりとふぶきが嵐の中でぶつかり合う。極大のエネルギー同士による極大のダメージを受ける中、王の力を通してザラクのギャラドスの思いが流れ込んでくる。

そのギャラドスこそがザラクにとって最初のポケモンだった。

カルネシテイの水辺でザラクに釣り上げられたコイキングはザラクに引っ張り回されながら戦いの日々を送った。最弱のポケモンと呼ばれている身に対して過酷過ぎる仕打ちだと嘆いたが、それでも粉骨碎身の思いで頑張ってきた。それはザラクが好きで、ザラクと戦う事が楽しかったからだ。

ところが、ある日を境にザラクは変わった。いつものようにザラクを雪山の奥地にある隠れ里まで送り届けてモンスターボールの中で休んでいると急に外に出されて、たくさんポケモンと戦わされた。ザラクは酷く怒っていた。乱暴者だけど怒る事は滅多にないザラクが怒っている。眼の前の人間やポケモン達が何かひどい事をしたに違いないと思った。だから、全員まとめて叩き潰した。そして、そこに倒れ込む少女の姿があった。

ザラクは嘆き悲しんだ。その姿を見ているのが辛かった。ギャラドスにとつて一番守りたいものはザラクの笑顔だった。その笑顔を取り戻したくて戦った。戦って、戦って、戦い続けて、再び見る事が出来たザラクの笑顔は前と違っていた。

だけど、もう失いたくない。ザラクに笑っていて欲しい。楽しい思

いをしていて欲しい。だから、戦う。だから、勝つ。だから――、
「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

負けない。負けてたまるものか、負けるわけにはいかないんだ。

その思いを渾身のれいとうビームに込めて放つ。雪山で生まれ、雪山で育ち、雪山で戦い続けたギャラドスはみずとひこうの二重タイプである事自体は変わらずとも、こおりタイプのエネルギーをこそ最大限に扱う事が出来る。だからこそ、ザラクはこおりタイプの技だけを覚えさせていた。

かみなりの発動で力を使い果たし、ふぶきに続けてれいとうビームの直撃を受けたアルトのギャラドスは氷漬けになって地上へ落ちていく。

「負けるな、ギャラドス!!」

役目を終えた筈のギャラドスに対して、アルトは容赦のない言葉を叫ぶ。その叫びに対して、ギャラドスは嗤う。

そうだ。負けてなどいられない。フィオレの大迷宮で数百年もの間眠っていたのは今この時の為。

このバトルの為に今代の主に忠誠を誓った。それなのに一体すら落とせぬまま脱落するなどあり得ない。!!

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

それこそまさに最後の一撃。放たれた!はかいこうせんは満身創痍のザラクのギャラドスを撃ち抜き、アルトのギャラドスは放った技の反動によって地面へ急加速して激突した。

『……ギャ、ギャラドス!! 二体共戦闘不能!! なんと、なんと!! あのザラク選手のポケモンが戦闘不能になりました!! ザラク選手が二体目のポケモンを繰り出すのも、これが初めての事になります!!』
ギャラドスをモンスターボールに戻し、アルトは二体目のモンスターボールを手取る。

コンソール越しに見たザラクも同じようにギャラドスをモンスターボールに戻していた。

「頼むぞ、カラマネロ!!」

「ネーロ!!」

カラマネロのやる気は十分だ。

第九話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク Ⅱ』

チャンピオンのポケモンが戦闘不能になった。その事実は一アガリア地方に住まうすべての人々を驚愕させた。

彼のポケモン達は一体一体が破格の力を持っていて、あのミリガンとのバトルでさえ疲弊するまでが精々だった。

「……信じられん」

とあるポケモントレーナーは持っていたカップを取り落とした。

「ギャラドス同士。同じポケモンを使って、チャンピオンが相討つた!?」

とあるポケモントレーナーは夢を見ているのかと思いい頬を抓った。

「あの子のギャラドスは原種なのか!? まさか、原種のギャラドスに従えられるトレーナーがいるとは……」

とあるポケモントレーナーは興味深いと喉を鳴らした。

『さあ、ザラク選手とアルト選手の二体目のポケモンはフーデインとカラマネロ!! 今度はエスパタイプポケモン同士のバトルだあ!!』

そして、激闘は続く。

第九話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク Ⅱ』

相手はエスパタイプ最速のポケモンであるフーデイン。まともにより合えばカラマネロはスピードで翻弄されてしまう。

故にアルトはカラマネロを繰り出すと同時に命じた。

「カラマネロ、トリックルーム!!」

「ネーロ!!」

トリックルームは限定空間内においてのみ世界の理を塗り替える事が出来る。速いものほど遅くなり、遅いものほど速くなる。

加えて、トリックルームによってフィールド全体へ広がっていくカラマネロのサイコパワーはそのままカラマネロの目となり耳となる。だから、初手トリックルームはまさに最適解である筈だった。

『……悠長だな』

そんな言葉と共にトリックルームを発動する為のサイコパワーを

集中していたカラマネロの眼前に突如としてフリーデインが現れた。テレポートを使ったのだと理解した時にはマジカルシャインが放たれていた。

「トリックルームを展開しろ!!」

ここでトリックルームの発動を放棄する事はそれこそ愚策だ。

「ネロオオオオオ!!」

弱点であるフェアリータイプのマジカルシャインの直撃を受けながらもカラマネロはトリックルームを展開した。

ダメージは受けたけれど、これでアドバンテージを得られる。ザラクがサイコフィールドを展開せずにテレポートで速攻を仕掛けてきた事も大きい。

「あくのはどう!!」

「ネロオオオオオ!!」

マジカルシャインの次弾を放とうとしているフリーデインにカラマネロのあくのはどうが迫る。けれど、直撃する瞬間にフリーデインの姿が消えた。

「なっ!?!」

フリーデインのテレポートだ。普通、わざの発動中に他のわざは使えない。まして、マジカルシャインはフェアリータイプであり、テレポートはエスパークタイプのわざだ。違うタイプのわざを瞬時に切り替えるなんて、デタラメにも程がある。

それだけで驚嘆に値するというのに、フリーデインはテレポートしながらもマジカルシャインの発動態勢を整えていた。

そこで漸く気がついた。フリーデインはわざを切り替えたのではなく、二つのわざを同時に発動したのだと。

如何にトリックルームですばやさが逆転したと言っても、この距離で放たれたらマジカルシャインの直撃を避ける事は不可能だ。一撃目は絶えたけれど、二撃目は耐えられない。

「みちづれにしる!!」

「ネロオオオオ!!」

「フリーデイン!?!」

マジカルシャインを受けた直後、フリーデインの体が不自然に硬直し、そのまま倒れ込んだ。

『カラマネロ、フリーデイン!! 共に戦闘不能!! カラマネロ、意地を見せました!!』

視界の言葉にアルトは苛立った。

みちづれは敗北を前提にしたわざだ。そんなわざを覚えさせず、もっと別のわざで戦略の幅を広げさせてやる事が出来なかったのはアルトの力不足が故だった。

「……………めん、カラマネロ」

カラマネロは凄いいポケモンだ。大迷宮で同レベル帯のエスパークEMON達を支配下に置いていた。そのサイコパワーはザラクのフリーデインに決して負けていなかった。

もっとカラマネロの力を引き出せばみちづれなんて使わずに済んだ。別のわざで窮地を抜け出して、手に汗握る熱いバトルを繰り広げる事が出来た筈だ。

『アルト』

コンソールからザラクの声が聞こえる。

『頑張ってくれたポケモンに謝って俯く事がトレーナーのやるべき事か?』

違う。

「オレは……………」

カラマネロのモンスターボールを強く握りしめた。

「勝つ!! ありがとう、カラマネロ」

ボールホルダーにカラマネロのモンスターボールを戻し、三体目のボールを掴む。

この二戦で分かった。やっぱり、ザラクは強い。

ギャラドス対決は相打ちになったけれど、もしもアルトのギャラドスをザラクが使っていたら圧勝していた筈だ。なにしろ、アルトのギャラドスは原種なのだから。

原種とそれ以外では生物としてのポテンシャルに天地の差がある。四天王・ザイリンのマグカルゴが良い例だ。通常のマグカルゴも相当

に体温が高いけれど、それでも人間が近づくと事が出来る程度の温度だ。対して、ザイリンのマグカルゴの体温は10,000℃を超え、人間はおろか、あらゆる生物を寄せ付けない。

そんな原種の手を使っておきながら相打ちに持ち込む事しか出来なかった。

このままではダメだ。今の時点では、まだアルトはザラクに届いていない。その差は最初に出会った時のように隔絶している程ではないのかもしれないけれど、勝敗を分けるには十分過ぎるものだ。

だから、成長しなければいけない。殻を破り、限界を超えなければいけない。

『行くぞ、キテルグマ!!』

!!!!!!

『キイイイイイイイイイイイイイイイイイイ』

飛び出してきたキテルグマは気合十分だ。その心がぎずな現象を通じて伝わってくる。

嘗て、届かなかった最強の敵との再戦。旧き主と袂を分かたつ事になった元凶。あの時の悔しさをバネにここまでやって来た。

—— 絶対に負けない。勝利する。これまでの旅のすべてを

懸けて!!!

その意思はアルトと完全なシンクロを果たした。

『ああ、勝つぞ!! キテルグマ!!』

!!!!!!

『キイイイイイイイイイイイイイイイイイ』

吹き荒れる烈風はキテルグマの気合の現れだ。

『さあ、アルト選手の三体目はキテルグマだ!! 対するザラク選手の三体目は——』

『行くぞ、ルカリオ!!』

『——ルカリオだああああ!!!』

三戦目が始まる。

『キテルグマ、トリックルームが生き残っている内に接近するんだ!!』

『キイイイイイイイイイイイイイイイイイ』

!!!!!!

キテルグマが猛スピードで走り出す!!!

カラマネロがトリックルームに込めたサイコパワーは未だに世界

の法則を捻じ曲げ続けている。

ルカリオよりは鈍足である事が、このトリックルームの中では有利に働く。

『おーっと、アルト選手のキテルグマ、猛スピードでフィールドを駆け抜けていくぞ!! 対するザラク選手のルカリオは波動を溜めている!!』

波動ポケモンであるルカリオの代名詞、それがどうだんだ。

ザラクのルカリオが十分に波動を溜め込んだ末に放つはどうだんは紛れもなく必殺の一撃になる。

「行くぞ、キテルグマ。もつと、もつと！ 遥かな高みへ！ 『ぜんりよくむそうげきれつけん』！」

「キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!」

『ここでZワザだーっ!! Zエネルギー!!!全開でキテルグマがどうだんに突っ込んでいく!!』

必殺技には此方も渾身の一撃を放つしかない。Zワザは体力を著しく消耗させてしまうけれど、キテルグマははどうだんを打ち破った。

「行くぞ、ザラク!!」

『ああ、来い!!』

キテルグマがルカリオに肉薄する。キテルグマは『ぜんりよくむそうげきれつけん』の勢いを殺さずにそのままメガトンキックを放つた。ルカリオはその一撃を最小限の動きで躲し、カウンターの一撃を入れようとする。

「いつけえええええ!!」

だけど、キテルグマはもふもふだ。昨夜、丁寧にブラッシングしたキテルグマの毛並みは最高にもふもふだ。

「ガウ!？」

そのあまりのもふもふにカウンターを繰り出したルカリオはまるで柔らかい布団に飛び込んだかのような錯覚を覚えた。

そして、キテルグマのメガトンキックは躲したルカリオの真横をすり抜け、そのまま地面に直撃した。大地が割れ、凄まじい衝撃が

でその姿を見た。ザラクがポケモンリーグに挑戦した時の動画を見た。イベルタルと戦う姿を見た。

その力に憧れた。その在り方に見惚れた。その存在がアルトをここまで導いた。

『ここでザラク選手のエースが登場だああああ!!! 最強のポケモン、バシャーモがフィールドに現れました!!!』

その姿を前に闘志を燃やしているのはアルトだけではない。嘗てのポケモンリーグでキテルグマを打倒したのは誰であろうバシャーモだった。

「キイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

キテルグマは満身創痕だ。それでもバシャーモを相手に退く意思は微塵もない。

「シャモツ!!!」

そして、その闘志をバシャーモは真っ直ぐに見返している。覚えているのだ。嘗て、戦って来たポケモン達の中で最も歯応えがあったポケモン。物理攻撃を半減させるもふもふという特性はほのおタイプのおかげのダメージを増幅させてしまうというデメリットがあり、バシャーモはキテルグマにとつての天敵だった。それでも喰らいついて来た好敵手を前にバシャーモは笑みを零している。

『ブレイズキック!!』

イベルタルを圧倒した究極の一撃が来る。あの技を打ち破る方法はズワザしかない。

けれど、既に満身創痕のキテルグマにズワザを放つ体力など残っていない。

「キイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

それでも放つとキテルグマは吠えね。その心の叫びを受け取って、アルトは頷いた。

「行こう、キテルグマ。もっと、もっと！ 遥かな高みへ！ 『ぜんりよくむそうげきれっけん』!!!」

「キイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

ブレイズキックにキテルグマが突っ込んでいく。距離が近づくと

ブレイズキツクの炎がキテルグマのもふもふの毛皮を焼いていく。それでもキテルグマの瞳はその向こうのバシャーモを見据え続けている。

ここに至るまで、たくさんのバトルを経験して来た。

幼くも強くなる事を望む少年と出会い、時には伝説のポケモンと戦い、時には休む暇もなくバトルに明け暮れ、時に街と街の間の道を爆走した。

力だけを求めていた筈なのに、どこか楽しさを感じていた。その楽しさはバトルのモチベーションを上げてくれた。バトルで得られる経験の重みが増した。

何度も何度も殻を破り、今ここでも殻を破る事が出来た。

「バシヤアアアアアアアア!!!」

「キイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

バシャーモに二撃目のブレイズキツクを放っていた。もはや瀕死の状態になり、『ぜんりよくむそうげきれっけん』のエネルギーは霧散していた。それでもキテルグマは最後の力を振り絞った。

「はかいこうせん!!!」

「キイイイイイイ!!!」

この状況で尚も反撃が来る事をバシャーモは確信していた。その一撃に対して、迎え撃つ準備もしていた。

「バシヤツ!!」

見事。その一言だと、来るだろうはかいこうせんに三撃目のブレイズキツクを構える。

けれど、飛んできたのは光線ではなかった。キテルグマははかいこうせんを真下に向けて放ち、その反動で体をバシャーモに向けて飛ばしたのだ。そして、予想外の事に目を見開いたバシャーモに激突した。

ダメーじにもならない微かな衝撃だった。けれど、その一撃を受けた事にバシャーモは衝撃を受けた。

「バシヤ……、バシヤアアアアアア!!!」

力なく落ちていくキテルグマを慌てて掴み、その健闘を称えた。

第十話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク III』

バシャーモは戦闘不能になったキテルグマを丁寧に運んで来てくれた。

「シャモ……」

地面にキテルグマを横たわらせると、バシャーモは空へ舞い上がった。

「……クマー」

キテルグマは瀕死の重症を負いながら意識を保っていた。バシャーモがいる空を見上げながら、悔しそうに地面を引っ掻いた。

「お疲れ様、キテルグマ。大丈夫だよ。絶対に勝つから」

「クマー」

キテルグマは一鳴きすると寝息を立て始めた。

「キテルグマ……」

ユニオン・シティで出会ってから、ずっと一緒に戦って来た。

ユニオン大会でのバトルを思い出す。リール・シティで攫われたエリザベスを奪還する為に戦った時の事を思い出す。

次々にキテルグマと一緒に戦って来た時の記憶が脳裏を過よぎって行く。

「ありがとう」

キテルグマをモンスターボールに戻し、アルトは次のポケモンのモンスターボールを構えた。

「いくぞ、ギルガルド!!」

「ギル!!」

第十話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク III』

ギルガルドがモンスターボールから飛び出した瞬間、空を舞うバシャーモが「シャモツ!」と叫んだ。

本来、ポケモンの言葉を人間が理解する事は難しい。けれど、きずな現象はポケモンの心をそのままトレーナーの心に伝えてくれる。だから、バシャーモの叫び声の意味をアルトは知る事が出来た。

ギルガルドが聞いたバシャーモの言葉は『そんな雑魚は引っ込めろ

！』というものだった。

「……雑魚？」

誰の事を言っているのかサツパリ分からなかった。なにしろ、ギルガルドはミリガンのエースを務めていたポケモンだ。

ミリガンの二つ名である剣聖は彼女の剣技に由来している。

そもそも、ポケモントレーナーがどうして剣を振るうのか？ その点について、アルトは特に疑問を抱いていなかったのだがミリガンの看護をしている最中に理由を聞いていた。

全てはギルガルドを御する為だった。

その圧倒的な力を徒に振り回せば世に災いを齎す。その事を案じ、彼女は剣を握った。ヴリル王のクローンとして生まれた彼女は天性の才を持ち、瞬く間に剣の道を極める事が出来た。

それが理由だ。彼女の剣とはギルガルドを指し、彼女の剣技とはギルガルドを御する為の技を指す。

「シャモツ！ シャモオオ!! バシャ!!!」

ギルガルドが雑魚などあり得ない。それはギルガルドだけではなく、ギルガルドを御する為に一つの道を極めたミリガンに対する侮辱でもある。

だと言うのに、バシャーモは叫ぶ。

——— それでは勝負にすらならない。エースを出せ！ 最強のポケモンを繰り出して来い！

最強のポケモン。それが誰を指しているのかは分かっている。けれど、アルトは交代などしなかった。

「ギルガルドを舐めるな!!!」

相手はバシャーモだ。ザラクがポケモンリーグに挑戦した時、たった一体で全ての対戦相手のポケモンを戦闘不能にしたエースポケモン。

そのスピードは常に音速を超え、その凄まじき脚力から放たれるブレイズキックはイベルタルが放った空前絶後の威力を誇るあくのはどうを両断する程だ。

けれど、それがどうした？

「お前の相手はギルガルドだ!! いくぞおおお!!!」
「ギルウウウ!!!」

ギルガルドのせいなるつるぎ。時空そのものを切り裂く究極の斬撃が世界を二つに分ける。

『ブレイズキック』

「バシヤアアアア!!!」

時空を切り裂きながら迫りくる斬撃をバシヤームはブレイズキックで両断した。

『時空を切り裂く程度、出来る奴は出来る。アルト、お前はギルガルドを使いこなせていない。ミリガンのようにそいつを御する為だけに集中して鍛錬を積めばあるいは戦いになったかもしれないが、ただ振り回すだけでは棒きれと変わらないぞ』

その言葉でアルトは自分の過ちを悟った。雑魚と言われたのはギルガルドじゃない。使いこなす事が出来ない己に対して向けられた言葉だったのだと。

それでも交換などしたくなかった。使いこなせていないのは分かった。だったら、今ここで使いこなせるようになればいい。

ミリガンのように剣技を極める事など不可能だろう。けれど、それだけがギルガルドと通じ合う唯一無二の方法ではない筈だ。

「ギルガルド。お前はオレのポケモンだ!!」

ギルガルドは剣であり、盾であり、そして、生き物だ。その真髄をミリガンは剣として引き出した。ならば、己はどうする? 盾として使うのか? それでどうなる? 守っていては勝つ事など出来ない。

アルトは選んだ。剣でもなく、盾でもない。生き物としてのギルガルドと向き合う道を。

「オレ達は一つに!!!」

きずなを繋ぐ。深く、深く、ギルガルドのすべてをオレの中に取り込んでいく。

ギルガルドがギルガルドとして生まれた瞬間へ遡っていく。その原点へと至る。

ギルガルドに転じたモノ、それは王の剣と盾だった。

ヴリル王が王を目指すを決めた時、アルトギアは王権を象徴する物が必要だと主張した。そして、サラがアガリアの地に旧くから眠る一振りの剣と盾をヴリルに与えた。

流刑地となるよりも遙か昔、この地には剣を持つポケモンがいた。そして、盾を持つポケモンがいた。

二体のポケモンは青と赤の偉大なる力の化身だった。人々やポケモン達は二体を畏れ敬い、神として祀っていた。

サラが遺跡から持ち出した剣と盾はそのポケモンが遺したものだ。だった。

剣の王・ザシアン

盾の王・ザマゼンタ

その二体の残滓は己を振るう王を渴望した。そして、王となるに相応しき男と出会った。

無機物でありながら、底無き渴望を抱く剣と盾はやがて一体のポケモンになった。

王と共に戦うもの。それが己なのだ。とギルガルドは産声をあげた。

「一緒に戦おう、ギルガルド!!!」

「ギルウウウウウウウウ!!!」

ギルガルドの感情が爆発した。

長き時の中で忘れかけていた。何故、己は王を求めなのか？ 何故、戦うのか？ その原点を思い出し、ギルガルドは己が生き物である事を思い出した。

きずなへんげが始まる。けれど、その姿はミリガンとのきずなへんげとは違った。アルトときずなへんげしたスパアーやギャラドスとも違った。

きずな現象はポケモンと感情をシンクロさせる事で進化の力を限界以上に引き出すものだ。ギルガルドにとっての限界を超えた力、それ即ち、嘗ての王の力。

剣は青く輝き、盾は赤く輝く。

あらゆる者を斬り伏せ、敵味方から畏れられた妖精王の剣が顕現する。

如何なる攻撃も弾き返し、敵味方から崇められた格闘王の盾が顕現する。

「ギルガルド!!」

ギルガルドの青き刀身に光が満ちる。

その光景を前に、バシヤーマはブレイズキツクの態勢を取った。侮ってはならないと警鐘を鳴らす本能に従い、最大最高の一撃を放つべく集中力を研ぎ澄ましている。

「きよじゆうざん!!!」

「ギル!!!」

未知の技が放たれる。迎え撃つべくバシヤーマが放ったブレイズキツクはきよじゆうざんとぶつかりあった。

「バシヤット!」

これまで空間を歪ませるイベルタルのあくのはどうや空間を切り裂くギルガルドのせいなるつるぎを両断して来たバシヤーマのブレイズキツクが逆に掻き消された。

尚も止まらぬきよじゆうざんに対して、バシヤーマは回避行動を取った。そこに二撃目のきよじゆうざんが迫り来る。それを回避すれば三撃目が、四撃目が、まるで同時に放たれたかのように連続で襲い掛かってくる。そして、その斬撃が通った空間は切り裂かれたまま、亜空の扉となつて大気ごとバシヤーマを引き込もうとしてくる。紙一重で躲し続けていては空間の断層に取り囲まれ逃げ場を失つてしまう。それは不味いとバシヤーマが大きく距離を取ろうとした。

『よく見ろ、バシヤーマ』

「バシヤット!」

その寸前、向かおうとした先に真紅の極光を見た。

「きよじゆうざん!!!」

またしても未知の攻撃だ。しかも、きよじゆうざんとは違い、今度は線ではなく面が襲い掛かってくる。

『プラスチックバーン!!!』

「シヤモオオオオ!!!」

近づいてくるに連れて巨大化していく赤光の盾に対して、バシヤーマ

モは究極奥義を放った。

それはまるで地上に現れた太陽だ。あまりの熱量に空間が歪み、ス
タジアムの防御システムは瞬時にオーバーヒートを起こしてしまっ
た。

慌てて四天王のシエルがおりポケモン達に最大パワーのぜった
いれいどを放たせた。それでも灼熱の熱波が地上を襲った。

その熱量にギルガルドは慌ててきずなへんげを解こうとした。
きよじゆうだんが壁となつているが、その熱波は即座に回り込んでギ
ルガルドを襲うだろう。そうなればダメージはシンクロしているア
ルトにも向かう。一振りの剣ではなく、一匹のポケモンとして、ギル
ガルドはアルトの身を案じた。

けれど、アルトはきずなへんげを解く事を拒んだ。人の身では絶え
きればい業火に対して、アルトは叫んだ。

「きよじゆうざん!!!」

「ギルウウウウ!!!」

襲いかかる熱波を超え、壁となつているきよじゆうだんを超え、ブ
ラストバーンの途方もなきほのおエネルギーを断つ。

けれど、斬撃は止まる。バシャーモはブラストバーンを放ち続けて
いた。止めれば反動で動けなくなる。そうなれば積みとなる現況、道
は一つしかない。

「シャモオオオ!!!」

このままギルガルドを倒す。止まった斬撃は徐々に押し返されて
いく。

これがチャンピオン・ザラクのエースの力だ。太古の時代、ブラッ
クナイトという災いを退けた偉大な英雄の力と同等の一撃に対して
一步も引かぬ絶大なパワー。

この攻撃をまともに受ければ、そのダメージは人の精神で耐えられ
るものではない。

諦めてきずなへんげを取ればギルガルドは倒れるだろうが究極奥
義の反動で動けなくなるバシャーモを他のポケモンで倒す事は十分
に可能だろう。それが賢い選択というものだ。それを卑怯とは言わ

ない。臆病とは言わない。ただ見事と讃えよう。そう思考するバシャーモの前でギルガルドはその姿に変化を見せぬまま突っ込んで来ていた。

「バシヤア!?!」

きよじゆうざんの途方もないエネルギーを刀身に留めたまま、ギルガルドは先に放ったきよじゆうざんとブラストバーンの爆心地のすぐ傍を通り抜けた。

背後を取られた。その事に気がついたバシヤーマはブラストバーンを意地したまま後方にかえんほうしやを放った。けれど、その威力は常のそれに及ばず、そして、ギルガルドはその身にほのおタイプに強いいわタイプのエネルギーを纏っていた。

「もろはのずつき!!!」

「バシヤ……ッ!?!」

その一撃にバシヤーマの意識は一瞬途切れ、ブラストバーンのエネルギーは制御を失った。

荒れ狂うほのおエネルギーをもらはのずつきのいわタイプのエネルギーを維持しながら回避し続け、押し留められていたきよじゆうざんがバシヤーマに襲いかかるのと同時に更なる追撃のきよじゆうざんを放った。

「シヤモオオオ!!!」

—— 舐めるなあああ!!!!

その意思と共にブレイズキックが放たれた。

「ギル!!」

強い拒絶の意思がきずなへんげを無理矢理解除した。

「ギルガルド!?!」

直後、バシヤーマにはきよじゆうざんが、ギルガルドにはブレイズキックが直撃した。

落ちていく二体のポケモン。

『……………あつ、ああ!! バシヤーマ、ギルガルド!! 共に戦闘不能!!』

思い出したように実況のゾーンが二体の戦闘不能を宣言した。

エピソード 『バシャーモの思い』

ギルガルドと相打ち、フィールドへ落ちてゆく最中、バシャーモの脳裏には過去の情景が過っていた。

それはバシャーモがまだアチャモだった頃の記憶。

アチャモが卵から孵った時、そこには無数の卵の殻と同族の姿があった。

『クソッ！ まだだ！ また出来損ないだ！』

ポケモンには個体差がある。そのポケモンがどこまで強くなれるのか？ そうした才能とも呼ぶべきものを数値化して測る装置が存在する。

大量のアチャモと卵に囲まれた男はその装置を用いて、より優れた個体を厳選しようとするトレーナーの一人だった。

そのトレーナーはアチャモ達を実験に使ったり、虐待するような事はなかった。ただ、要らないからと外に放り出すだけだった。

問題はそこが極寒の地であった事だ。ほのおタイプのアチャモ達にとって、そこは生きていける環境ではなかった。

『チャモ!! チャモチャモ!!』

寒さに凍える同胞達を必死に奮い立たせようとするものがいた。泣き叫ぶ同胞達を叱りつけるものがいた。生きる為には生きられる場所へ向かわなければいけないと判断出来るものがいた。

アチャモ達は死にたくなかった。どこへ向かえばいいのか、どれだけ歩けばいいのか、分からないまま歩き続けた。

助けようとする野生のポケモンもいた。けれど、その地に住まうポケモン達はその地に適応したこおりタイプのポケモンばかりだった。直接触れようとすれば、幼いアチャモ達の命を逆に縮めてしまう。だから、彼らに出来た事はアチャモ達に進むべき道を示したり、その行進を阻害する障害物を払い除ける事が精々だった。

最初はたくさんいた。けれど、少しずつ数が減っていった。勇敢だったか、かしこかったり、強かったものから先に倒れていった。

気がつけば、アチャモは孤独になっていた。他の仲間達の姿がな

い。アチャモ達はより弱い個体を守ろうとしたからだ。一番弱かったアチャモは仲間達に守られ、最後の一匹となった。

『チャモオ……』

そして、最期の時が来た。吹雪の中、こおりタイプのポケモン達の中でエスパールタイプのわざを使えるポケモンが凍っていない食べ物を必死に運んで来てくれたけれど、それを食べる元気すらなくなっていた。

『オオオオオオオオオ!!』

『メノコオオオオオ!!』

『ベエエエエエエ!!』

『ジオオオオオオ!!』

『ニユラアアア!!』

こおりタイプのポケモン達は泣き叫んだ。その悲痛な叫びは吹雪の中で尚も響き渡った。

そして、その近くの村で友達と遊んでいた少年がその叫び声を聞いた。

『……ポケモンの声? これ、泣き声!?!』

友達や大人達が止める声を振り切り、少年は走った。吹雪の中、小さな子供が一人で走り回るなど自殺行為に等しい。それでも、少年の瞳に迷いは無かった。

『どい? どこにいるの!?!』

そして、少年はポケモン達の泣き声の下へ辿り着いた。

こおりタイプのポケモン達がいいた。そして、彼らが吹雪から守ろうとしている小さな命を見つけた。

『アチャモ!?! こんな所になんて!?!』

慌てて駆け寄ろうとするとツンベアーがいかくするように唸り声をあげた。けれど、少年は止まらなかった。

『どいてくれ!! その子が死んじゃうよ!!』

『グウウウ!!』

『メノコ!! メノ!!』

こおりタイプのポケモン達はそれでも少年がアチャモに近寄れな

いよう自分達の体で壁を築いた。

彼らは知っていた。アチャモがどうしてもこんな目にあっているのかを。

すべては人間のせいだ。人間がアチャモをこんな場所に放り出した。その為に小さな命が幾つも消えていった。

ポケモン達は怒っていた。

『お願いだ!! アチャモを助けなきゃ!!』

ポケモン達の怒りを超えた憎悪の感情を受けながら、それでも少年に瞳は揺らがない。

その瞳にポケモン達は動揺した。そして、彼らの心に少年の心が流れ込んで来た。奇妙な感覚に戸惑いながらも、少年がアチャモを助けようとしている事を心で理解した。ポケモン達は道を譲った。

少年はアチャモを抱き上げると持っていたキズぐすりをありつたけ掛けた。そして、ナナシのみを取り出した。

『すぐにポケモンセンターに連れて行くから!! がんばれ、アチャモ!!』

少年は来た道を引き返そうとした。けれど、それは村とは反対の方向である事に気付いた。デリバードが少年の体を持ち上げた。

『デ、デリバード!?!』

『デリー! デリバ!!』

デリバードは少年とアチャモを村へ送り届けた。

訴えかける目をするデリバードに頷いて、少年はアチャモと共にポケモンセンターへ駆け込んだ。

衰弱しきつた状態のアチャモをひと目見た瞬間、ポケモンセンターのジョーイは彼からアチャモを奪い取った。詳しい理由など聞いている暇はなかった。

小さな命を救うためにジョーイは必死に手を尽くした。少年はその治療の間、待合室で待機している事しか出来なかった。

治療が終わった時、ジョーイの表情は暗かった。手は尽くした。けれど、アチャモの命は風前の灯となっていた。

瀕死どころではない。もはや、アチャモは死にゆく直前のところ

だったのだ。ジョーイはどうしてこんな状態になるまで放っておいたのかと少年を問いただそうとした。けれど、ジョーイの表情を見た瞬間、少年は治療室へ駆け込んだ。

虫の息となつているアチャモを見て、少年は泣き叫んだ。

『死んじやダメだ!! 死なないで!!』

その願いを叶わないとジョーイは顔を顰めた。けれど、奇跡が起きた。

『……チャモ?』

アチャモが鳴いた。

『アチャモ!!』

少年が呼びかけると、アチャモの体にどんどん生気が宿っていく。ジョーイはあり得ないと目を見開き、『アチャモが目を覚ましたよ!』と叫ぶ少年の声でハツとする慌てて治療を再開させた。

それからアチャモが元気になるまで何日も掛かった。その間、少年はアチャモにつきつきりだった。

『チャモ!! チャモ!!』

元気になつたアチャモは荒れていた。

自分を治療したジョーイの手をつつき、少年にひのこを浴びせた。

アチャモは人間を憎んでいた。仲間達の死を悼んでいた。その心を少年は臆気ながらも感じ取っていた。

『その子はきっと、人間にここへ連れて来られたのよ』

少年やその友人の言葉などを聞いて、大まかな事情を察したジョーイは少年に言った。

『その子は傷ついているわ。それに、ひどく弱ってる。暖かい所で野生に逃しても、きっと生きていけないわ……』

その言葉を聞いて、少年は自分をつつくアチャモを見つめた。

血まみれになつた腕をジョーイが治療しようとするけれど、少年は首を横に振った。

そして、自分を攻撃するアチャモを抱きしめると家に連れ帰った。それからどれだけの時間が経っただろうか、少年は多くの時間をアチャモの為に費やした。

体中に傷を負いながら、それでも笑顔できのみを差し出してくる少年にアチャモは少しずつつ心を開いていった。

いつの頃からか人間に対する憎しみよりも、少年に対する愛情の方が強くなっていた。

『アチャモ!! チャモ!!』

きのみをいっぱい食べて、前よりも少し体が頑丈になったアチャモはそれでも自分で歩き回るより少年に抱きかかえられる事が好きだった。

『アチャモ、モモンのみだよ』

『アチャモ!!』

アチャモは少年と一緒にいられる事が幸せだった。少年と一緒にいろんな所へ行く事が好きだった。

ワカシャモに進化しても、バシャーモに進化しても、その気持ちは何も変わらなかった。

いつも優しく、いつも元気な少年の事が大好きだった。

「……シヤモオ」

少年、ザラクは変わってしまった。

あの日、あの時、大切な少女を失ったザラクは復讐者になった。彼の心は憎悪で満たされた。

その憎悪に忘れていた筈の人間に対するバシャーモの憎悪も蘇った。彼の憎悪と共にバシャーモは暴れ回った。

仲間達の誰よりも弱く、だからこそ生き残ってしまったアチャモは誰よりも強いバシャーモになっていた。その力で逃げ惑う人間達を傷つける事は快感だった。

ギヤラドスは嘆いていた。ルカリオは戸惑っていた。フリーデインは何度も止めようとしていた。ゲッコウガは彼と一緒にあって怒り狂っていた。フシギバナは何も語らず、何もしなかった。

今になって思えば、ギヤラドスとフリーデインが正しかった。彼のポケモンとして、彼を止めなければいけなかった。

暴れ回る最中、アイリスがダークライとアルトギア手記によってドロシーという架空の人間となり生きている事を知った。けれど、その

時にはもう止まれなくなっていた。

いつしか戦う事が目的になっていた。アイリスの事すらも忘れてしまう事があった。それでも微かに残っている感情が彼にエリザベスやアイリスを助けさせた。けれど、それが本当に最後だった。

アルトとの決戦前夜、ザラクの前にアイリスが現れた。彼女はザラクと話がしたかったようだ。けれど、ザラクは彼女に一欠片の関心を寄せていなかった。

『ひ、久しぶりね、ザラク。わたし、あなたと話がしたくて……』

『どうでもいい。明日、大事な試合が控えているんだ。すまないが邪魔をしないでくれ』

そう冷たく言い捨てて、ザラクはアイリスに背を向けた。

あれほどの憎悪を身に宿すほどに愛していた女性の事がどうでも良くなってしまいう程、ザラクは戦いに取り憑かれていた。

それはダメだとバシャーモはモンスターボールの中で叫んでいた。けれど、ザラクは聞き届けてくれなかった。

だから、いつそ全力で戦おうと考えを改めた。全身全霊で戦い抜けば、ザラクの心も落ち着くかもしれない。そうすれば、あの頃のザラクが帰って来てくれるかもしれない。

「シャモ……」

ザラク。愛するザラク。また、その笑顔を見せてほしい。

優しくして天真爛漫なあなたと一緒に穏やかな時間を過ごしたい。

「シャ………、モオ」

—— お願いだから、帰って来て……。

その願いと共にバシャーモは意識を失った。

「戻れ、バシャーモ」

バシャーモをモンスターボールに戻すと、ザラクは静かに瞼を閉ざした。

「……足りない」

ザラクは瞳に炎を宿しながら次のポケモンのモンスターボールを掴んだ。

「もっとだ。もっと、熱くなろうぜ!!」

ギャラドスは嘆いていた。フーデインはやる気がなかった。ルカリオは空回りしていた。バシャーモは泣いていた。

だからこそ、未だにザラクの域へ辿り着けていないアルトのポケモン達がザラクのポケモン達と互角に渡り合えていた。

「お前なら応えてくれるよな、オレの心に!!」

それは懇願でもあった。すれ違う心が思うように戦わせてくれない。

その焦燥感にも近しい感情を払い除けるようにザラクはモンスターボールを投げた。

「いくぞ、フシギバナ!!」

「バーナ」

フシギバナはまさに植物だ。静かなる心ですべてを包み込んでくれる。この燃え上がる闘争心もフシギバナならばきつと……!

『いくぞ、フーパ!!』

『オーデーマーシー!!』

アルトが繰り出したのはフーパだった。

『さあ、いよいよ五体目同士のバトルが始まります!! フシギバナ対フーパ!! 勝利するのはどちらなのか!? もはや、誰にも分かりません!!』

最終章 『最強へ至る道』 プロローグ

カルネ・シテイの北部に鎮座する王城の一室でカルネ・ジムのリーダーであるエックスはザラクとアルトの決戦を見守っていた。

「……ザラク」

エックスにとって、ザラクは特別な人だった。

彼は村人から迫害を受けていたエックスと唯一友達になってくれた人だ。

家から一步外に出れば石を投げられ、呪いの言葉を浴びせられる。それが物心付く前からの常識だったエックスに彼は『一緒に遊ぼうぜ！』と言ってくれた。

「運命って、皮肉だよね」

今から百年前、エックスの曾祖父にあたる人物が『災厄の器』となり、この地に大きな爪痕を刻んだ。城下町を取り囲む巨大な壁は跡形もなく破壊され、多くの人とポケモンが傷つけられた。その時の恨みは子々孫々に受け継がれている。

村人がエックスに石を投げつけるのはそれが理由だった。そんな彼を救ってくれたザラクが今代の災厄の器に選ばれてしまった。

「……イヤだよ、ザラク」

手遅れになる前に気付くべきだった。気付ける筈だった。

災厄の器にはポケモンとの共感能力に優れた者が選ばれる。ザラクとエックスが出会ったのも、その能力が切っ掛けだった。

エックスは村人から隠れてポケモン達と心を通わせていた。ポケモンと一緒にいる時だけが彼にとって安息の時間だった。ポケモン達がいれば他には何もいらぬ。心からそう思っていた。

その事をポケモン達は感じ取っていた。そして、心配していた。彼は人間だ。人間には人間の仲間が必要だ。そう考えたポケモン達はエックスと同じ力を持っている少年の下を訪れた。それがザラクだった。

ポケモンにエックスの下へ連れて来られたザラクは自分と同じ力を持つエックスの事を直ぐに気に入った。

彼はエックスを迫害する村人に真っ向から歯向かった。一緒になって石を投げられた。すると、彼は石を投げ返した。

『なにをやるんだ!?!』

『このガキ!!』

『痛いじゃないか!!』

そんな言葉を口にする大人達にザラクは叫んだ。

『痛いだろ!! お前らがエックスにしてる事だ!!』

彼は勇敢だった。大人が相手でも一歩も引かない。間違っていると思つた事は間違つていると言い放つ勇氣を持っていた。

『大丈夫だ、エックス。オレがお前を守つてやる!!』

彼は優しくかった。自分も額から血を流しているのにエックスの事を心配して、安心させようと笑顔を見せた。

『オレはポケモンが大好きだ!!』

彼はポケモンが大好きだった。そして、ポケモン達も彼の事が好きだった。

当然の事だとエックスは常々思っていた。なにしろ、彼もザラクの事が大好きだったからだ。

だから、アイリスを失つて復讐に燃える彼を止める事が出来なかった。彼に嫌われるような事を口にしたり、行動する勇氣が持てなかったからだ。

復讐の為に彼がポケモンを使う。それが何を意味しているのか知っていた癖に、目を閉じて、耳を塞いでしまった。

いつしか、彼は変わり果ててしまった。

『エックス。バトルしようぜ!!』

好戦的な笑みを浮かべるザラクに戦いを挑まれた時、エックスはようやくザラクが災厄の器になってしまった事を悟った。

彼のポケモンの心から感じる闘志は尋常ではなく、その闘志の源がトレーナーであるザラクである事に疑いの余地はなかった。

『……ねえ、また旧市街に遊びに行かない? 探検しようよ。バ、バト

ルもいいけど、昔見たいに一緒に遊ぼうよ』

『はあ？ そんな事して何になるんだ？ それより、さっきのバトルはなんだ？ お前の実力はこんなものじゃないだろ？ もっと本気で来いよ。なあ、楽しくバトルしようぜ!!』

それから何度もバトルした。バトルして、バトルして、バトルして……、彼に愛想を尽かされた。

『……………つまらねえ』

戦う度に現実を突きつけられたエックスは戦う気力を失っていた。それでも必死に彼の機嫌を取ろうとバトルした。そんな無様な戦い方で彼を満足させる事など出来る筈もなかった。

「イヤだよ、ザラク。昔見たいに一緒に遊びたいよ……」

バトルが嫌いなわけじゃない。だけど、ポケモンとのふれあいはバトルだけじゃない。その事を思い出して欲しい。

災厄の器が満たされた時、彼は災いと化す。彼の通り名通り、歩く天災に成り果てる。そして、彼は誰かに討伐される。そうなれば、もう二度と一緒に遊べない。

「……………でも、どうしたらいいんだ」

レムハザードには何か考えがある様子だった。けれど、彼女は自らの思惑を欠片も教えてくれない。

彼女にとつて、ザラクとはどういう存在なのだろうか？ 救うべき存在だと考えてくれているのなら希望がある。けれど、そうでなければ……………。

「ボクは……………」

チャンピオンリーグの決勝戦が終わるまで、各ジムリーダーはそれぞれのシティの防衛に専念するように通達があった。

けれど、ジツとしている事が辛くて仕方ない。もう、耐えられない。「……………(ここ)を守らなきゃ」

それでもエックスは自分を抑えた。

ここはカルネ・シティだ。ザラクの故郷であり、帰るべき場所だ。この地が失われれば、ザラクは今度こそ本当に戻って来てくれなくなってしまう。そんな気がして、エックスはこの地に踏み止まった。

第一話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク IV』

広大なフィールドに佇むフーパとフシギバナ。いよいよ五体目同士のバトルが始まる。

チャンピオンリーグの決勝戦もいよいよクライマックスを迎えようとしていた。

第一話 『最終決戦！ VSチャンピオン・ザラク IV』

『さあ、バトルもいよいよ大詰めです！ ザラク選手が繰り出したのはフシギバナ！ 対するアルト選手が繰り出したのはフーパちゃん！ 実況者として、公平な実況を心掛けたいところではあります！』

フーパちゃん、がんばってくださいー！』

「オウー！ フーパ、ガンバル！」

『うつひょー！ フーパちゃん、がんばえー!!』

実況のジーンのテンションの高さにアルトとザラクは呆れたように肩を竦めた。

「……つと、気を引き締めないとね」

『いいじゃないか』

コンソール越しにザラクが言った。

『バトルは楽しんでなんぼだ。肩肘張ってちゃ、楽しめないぞ』

「……うん。そうだね」

彼の言うとおりで。夢にまで見たザラクとのバトル。それもチャンピオンリーグの決勝戦という晴れ舞台。楽しまなきゃ損だ。

「行くよ、フーパ！ 全力全開だ!!」

「フーパ、ゼンリョクゼンカイダー!!」

そう気合を入れた瞬間、アルトの背筋を冷たいものが走った。

「フーパ、真下にいじげんホールを広げろ!!」

「エ？ エ？ ウ、ウン!!」

フーパがいじげんホールを真下に展開した直後、フィールド全体に次々と樹木が生えてきた。

見覚えがある。これはザラクのフシギバナが発動したハードプラントだ。その効果範囲は広大な筈のバトルフィールド全体をカバー

している。

真下から突き上げられる事態は回避出来たけれど、四方を巨大な樹木に取り囲まれてしまった。

ただの木だとバカには出来ない。なにしろ、この即席の密林はフシギバナのくさエネルギーで構築されている。その意味をアルトは察していた。

「ゴーストダイブ!!」

『パワーウィップ!!』

間一髪だ。霊体化したフーパが地面の中へ潜った直後、森全体が大きくしなり、フーパがいた場所を攻撃した。

戦慄が走る。この森はその全てがフシギバナの一部なのだ。どこに隠れても居場所を掴まれ、森自体が攻撃してくる。

あまりにも規格外過ぎる。けれど、勝ち目が無いわけじゃない。

「いくぞ、フーパ!!」

『イクゾ！ イクゾ！ フーパガイクゾ!!』

フーパがフシギバナの眼前に姿を現した。

「いじげんホール!!」

「ウオオオオオ!!」

いじげんホールを開くのはフシギバナの真下だ。

「バーナ」

フシギバナを中心にいじげんホールは一気に広がっていく。落ちた先、出口であるいじげんホールは遥か上空だ。

『オチロ!!』

咄嗟にツタを四方に伸ばして踏ん張るフシギバナをフーパが殴りつけた。

「バーナ」

『フシギバナ、そのまま落ちろ!!』

「え!？」

ザラクの命令を受けた直後、フシギバナはツタを緩めていじげんホールの中へ落ちていった。

出口のいじげんホールを見ると、そこからフシギバナが落下してく

るのが見える。

「なっ!？」

フシギバナは空を飛べない。あの高度から落下すれば無事では済まない。それなのに自分から落ちていった。

その理由は――、

「頭上にいじげんホール!!」

『ウ、ウン!!』

直後、落ちてくるフシギバナから目も眩むような極光が放たれた。凄まじい光に目を開けていられない。そして、瞼の向こうから凄まじい爆音が轟いた。

恐らくはフシギバナのソーラービームだ。寸前にいじげんホールを展開させたけれど、あまりにも威力が桁違い過ぎる。

「フープ!!」

腕を傘にして薄っすらと瞼を開くと、そこにはフープだけがいた。森は完全に焼失している。

「フ、フープ……」

フープは無事だ。けれど、あまりの眩しさと爆音に意識が飛んでしまっている。

『パワーウィップ!』

「バーナ」

落ちてきたフシギバナはパワーウィップで地面を殴りつけると、平気な顔で地上に降り立った。

「……くっ」

マスターボールを掴む。フープは戦闘不能だ。後はスピアーに託すしかない。

そう思っ、マスターボールの開閉装置を押そうとした瞬間だった。

「……フ、フープ。マケナイモン!!!」

フープは意識を取り戻し、いじげんラッシュを放った。

その姿にアルトは唇を噛み締めた。勝手に負けたと判断して、戦う意思を燃やしているフープを戻そうとってしまった。

ポケモンがトレーナーの指示に従うのはトレーナーを信じてくれているからだ。ならば、トレーナーもポケモンをとことんまで信じ抜かなければいけない。

その大前提を放棄しようとしてしまった。そんな自分が許せない。

「フーパ、一気に決めるんだ!!」

「オオオオオオオオオオ!!」

マスターボールをボールホルダーに戻し、アルトはいじげんラッシュを自身から伸びるツタによるパワーウィップで防いでいるフシギバナを見た。

密林と化していたフィールドはソーラービームによってリセットされた。この状況でラッシュに持ち込む事が出来たのはフーパの頑張りがあつてこそだ。

「ウオオオオオオオオオ!!」

フーパが押している。ザラクのフシギバナは出鱈目な力を持っているけれど、フーパも一つの時代を終わらせた魔神の力は伊達じゃない。

いける。そう思った瞬間、ザラクの声がコンソール越しに聞こえた。

『そこだ。ヘドロばくだん!』

フシギバナがツタを引っ込めた。急な事にフーパはバランスを崩し、そこにフシギバナがヘドロばくだんを放つ態勢を取る。

この瞬間を待っていた。

「今だ!! フォルムチェンジ!!」

ヘドロばくだんが放たれる。けれど、標的であるフーパの体が見るみる小さくなっていき、その姿は解き放たれし姿から戒められし姿に変わった。

「バナ!？」

漸く表情を崩したフシギバナにフーパは悪戯成功とばかりに笑みを浮かべる。

「しねんのずつき!!」

「クラエー!」

フープアのしねんのずつきがフシギバナに命中した。こうかはばつぐんだ。

「バナ……」

フシギバナは倒れた。そして、同時にフープアもよろよろと地面に落下していった。

「フープア、ツカレタア……」

戦闘不能ではないけれど、どうやらフープアはここまでらしい。

アルトはフープアを迎えにフィールドを走った。

「フープア！」

「ムニャア」

疲れ果てたフープアを抱きかかえるとアルトは自分の持ち場に戻っていった。

「お疲れ様。ありがとう、フープア」

「ムニユ……、エヘヘ」

フープアをマスターボールに戻すと、アルトは彼方に立つザラクを見た。それなりにあった障害物は全てフシギバナのソーラービームで消滅させられたから、今は彼の姿がよく見える。

『さあ、最後だ。アルト、全力で来い!!』

「うん!!」

二人は同時に最後のモンスターボールを投げた。

「いくぞ、スピアー!!」

『いこうぜ、ゲッコウガ!!』

「フルパワーだ!!」

『フルパワーだ!!』

二人の声が重なり合う。そして、最後の戦いが始まる。

「スピイ!!」

「コウガア!!」

第二話 『最強対決！ スピアーVSゲッコウガ！』

ザラクのゲッコウガとアルトのスピアー。二体のポケモンがフィールドに現れた瞬間、それまで静観していたポケモン達の様子が明らかに変化した。

四天王のザイリンは如何なる状況にも対応出来るように指示を出し続けている。

「……さて、出来る限りの事はしましたが」

四天王のフレデリックはサンダーと共にマグノリア高原全体を見渡せる高度にいた。

ポケモンリーグの会場とチャンピオンリーグの会場から更に北へ向かった平原地帯。そこでアルトとザラクのバトルが行われている。バトルの様子は最新の超小型ドローンが撮影し、その映像をリアルタイムでポケモンリーグの会場に投影している。

二人のバトルを最後まで見届けたいとマグノリア高原から退避する事を拒む者が多く、ならばいつその事、超級トレーナー同士のバトルに耐えられるよう設計されているポケモンリーグの会場に集めておこうという事になった。

ポケモンリーグの警備に人員を割かれるのは痛手だが、いざとなれば観客達にも協力してもらおう必要が出てくるかもしれない。この地に観戦に来ていている以上、すべての観客が最終進化形態のポケモンを複数所持している事になる。中には超級トレーナーの姿もあり、最悪の事態が発生した時には戦力になってもらう事も可能だという打算あつての事だった。

「フレデリック！」

ミリガンがエアームドと共にフレデリックの下へやって来た。

「どうしました？」

「他の地方のポケモン達にもいよいよ異変が起こり始めてるみたい。各地方のポケモン博士達から事態の説明を求められてシエルが対応してる」

「……困りましたね。それではシエルがいざという時に動けない」

「でも、場合によっては各地方のチャンピオンが援軍として来てくれるかもしれないそうよ」

「かもしれない。それでは作戦に組み込めませんよ。それよりもレムハザードです。その後、彼女は何か話しましたか？」

「いいえ、なにも……」

フレデリックはやれやれと肩を竦めた。

来るべき災厄の真実を知る者はレムハザードのみ。そして、この状況はそのレムハザードが整えたもの。彼女ならばこの後に起こる事もすべて知っているのだろう。

何事もなく終われば良いが、それならばそうと言えばいい。ほんの一言か二言で終わる程度の説明を省く理由が分からない。

「……恐らく、我々の理想と彼女の理想は異なります。我々は何事もなく無事に事態が収まる事を望んでいます……」

「彼女は違うという事？」

「可能性の話です。ただ、彼女の沈黙の理由が気になる」

レムハザード。その名は空白の時代と呼ばれる頃から代々のバスティロ・シテイの長たる少女に受け継がれてきた。その姿は、その声は、その人格はまるで写し身の如く似通っている。

先代と今代を両方知る者が本人が何らかの手段で若返ったのではないかと疑う程だ。しかし、先代や先々代の遺体は確かに存在している。

「……レムハザードは信頼が置けません。彼女の思惑通りに進む事が我々にとっても幸いとは限らない事を肝に銘じるべきです」

「わかった。みんなにも一層警戒を強めるように指示を出しておくわ」

「お願いします」

ミリガンにはアガリア警察という私設部隊がある。練度も高く、ミリガンに対する忠誠心も高い事から政府組織の部隊よりも信頼がける。

「さて……、我々も気を引き締めましょう。サンダー」

「アーイ！」

第二話『最強対決！ スピアーVSゲッコウガ！』

スピアーは嬉しかった。この瞬間をずっと待ち望んでいたからだ。ヴリル教団にヴェゼール・ビレッツジが襲撃された日の翌日、チャンピオン・ザラクがアルトにゲッコウガのモンスターボールを託した。ゲッコウガはモンスターボールから飛び出すなり、スピアーを見つめた。

『挑んで来い。強くなりたいのならばな』

ゲッコウガは強かった。何度挑んでも勝てなかった。

その強さにいつも憧れていた。そして、その強さがいつも悔しかった。

アルトのポケモンの中で最強とはゲッコウガの為にある言葉だった。

「スピーイイ」

その称号を今こそ奪い取って見せる。

アルトの最強は己なのだ証明してみせる。

「コウガアア」

来るがいいとゲッコウガは笑みを浮かべる。

初めて見た時からスピアーを弱いと思った事など一度もない。

進化したばかりの状態で鍛え抜かれたバンギラスを倒せるものが弱い筈がない。チャンピオン・ザラクのポケモンの一撃を初見で受け止める事が出来たものが弱い筈がない。

共に旅をしながらその成長の速さに何度も驚かされた。このチャンピオンリーグでスピアーが一方的に打倒してきたポケモン達がいっただれ程の研鑽を積んできたか理解しているのだろうか？ 彼らとて日々成長し、強くなり続けて来た。そんなポケモン達に勝てる存在を驚異的と言わずしてなんとする。だからこそ、血湧き肉躍る。

「いくぞ、ザラク！ 俺とスピアーの旅のすべてを見せてやる！」

『ああ、ワクワクが止まらない。来い、アルト！ これが最後のバトルだ！ 全部出し尽くせ！』

アルトとザラクの闘志が極限に達すると共にスピアーとゲッコウ

ガが大地を蹴った。

二体の間には数百メートルの距離があった。にも関わらず、一秒後にはスピアーのダブルニードルとゲツコウガのつじぎりがぶつかり合っていた。

「スピスピスピスピスピスピスピイイイイイイ！」

「コウ、コウガ！ コウ、コウ、コウガ、ゲツコウガアア！」

一息の内に二体の攻撃がぶつかり合った回数は数十を超えた。音と音が重なり合い、まるで楽器の演奏のように華麗な音がフィールドに響き渡る。

スピアーは複眼によって、ゲツコウガは経験に裏打ちされた直感によって相手の攻撃を捌き切っている。

最初に戦った時は為す術がなく倒されたスピアーが己に届く程の神速を得て挑みに来ている事実にはゲツコウガは昂ぶった。そして、そこまで辿り着けた事を実感してスピアーも昂ぶった。

二体の感情はマグマのように煮え滾り、火山の噴火の如く爆発した。力の籠もった攻撃同士がぶつかり合い、二体の距離が離れる。

「ミサイルばり！」

『みずしゆりけん！』

互いに五発の攻撃をほぼ同時に放った。威力はみずしゆりけんが上のようなが、コントロールはミサイルばりが上をいく。スピアーはミサイルばりでみずしゆりけんの軌道を逸し、己に命中しないようにした上でミサイルばりをゲツコウガ目掛けて飛ばした。

『ゲツコウガ！』

「コウガア！」

しかし、コントロールが上手いという事はそれだけコントロールに意識を割いているという事だ。その意識の死角を狙い、ゲツコウガはスピアーの背面を取った。そして、軌道を逸らされたみずしゆりけんを掴むと、体を捻り、更に加速させてスピアー目掛け投げ放った。

「スピアー！」

「スピイ！」

けれど、その光景をスピアーの複眼は捉えている。殺到してくるみ

ずしゆりけんを紙一重で全弾回避し、つじぎりを構えて迫りくるゲツコウガに回避の動きを利用して体を回転させ、ドリルライナーを発動した。

「コウガアー！」

「スッパイイイイ！」

咄嗟にゲツコウガはドリルライナーの回転方向に体を逸して離脱を図る。けれど、スピアーは回転しながらもゲツコウガの動きを見ていた。そして、離れた瞬間に回転しながらミサイルばりを放つ。回転によって加速したミサイルばりは雷の如き速度でゲツコウガに襲い掛かった。

「コウガアー！ コウ、コウ、コウガアー！」

その全てをつじぎりで切り裂いたゲツコウガの背後を今度はスピアーが取った。

ダブルニードルをゲツコウガは前面に転がるように避けると、瞬時に三つのみずしゆりけんを放つ。しかし、スピアーは既に追撃の為に転がったゲツコウガの先にいた。

『みずしゆりけんを受け止めろ！』

「コウガアー！」

四つ目と五つ目のみずしゆりけんを両手に構え、ゲツコウガはスピアーのダブルニードルを受け止めた。そのまま幾度か打ち合った後、二体は示し合わせたように距離を取った。

「スピーイ」

「コウガア」

二体は堪えきれない喜びを籠めて鳴いた。

互いが互いに対して同じ事を思っている。紛れもなく、相手は最強のポケモンだと。

「強い。強い！ 強い!! ザラク、強い!!」

「楽しいぜ、アルト！ お前こそ、オレがずっと求めていた存在だ。お前こそがオレにとっての最強のライバルだ！」

アルトとザラクは互いに少年らしく瞳を輝かせた。

戦うのが楽しくて仕方ない。もっともっと楽しみたい。

「いくぞ、ザラク！」

「来い、アルト！」

「スピーイイイ！」

「コウガアアア！」

スピーアーは激しい雷光に包まれ、ゲツコウガは立ち上る渦の中に閉じ込められた。

そして、雷光が晴れた後には翠の雷霆を纏うきずなへんげした青いスピーアの姿があり、渦が晴れた後にはきずなへんげして巨大なみずしゆりけんを背負った黒いゲツコウガの姿があった。

「スピー！」

「コウガア！」

第三話 『アイリスとザラク』

ザラク・デイラとアイリス・ジユラが出会ったのは五年前の事だった。

雪山を半袖で登って来た彼を見て、アイリスは正気を疑った。

—— あ、あなた、寒くないの!?

—— ハツハツハ！ 寒いに決まってるだろ！ だが、オレの

心は熱く燃えているぜ！

破天荒にも程がある少年だった。いくら心が燃えていようとも氷点下の山中を半袖で歩き続けていたら凍死してしまう。

アイリスは半ば無理矢理にザラクを里へ連れて行った。

—— アイリス、余所者を里に入れてはいかん！

—— 死なせろと言うの!?! 冗談を言わないで！ 神様も彼

がここへ来る事を禁じなかったのよ！

アイリスは里の者と口論になっても譲らなかった。

ザラクは笑った。

—— おもしれえ女だな。

彼はアイリスを気に入り、村人に一つの提案をした。

—— 村人全員で掛かってこい！ そして、オレが勝ったら里に入る事を認める。

そんなとんでもない提案をした。村人はアイリスを睨みつけた。

—— おいおい、お前らの相手はコツチだぜ。さあ、バトルし

ようぜ！

そして、彼が繰り出したポケモン達は村人を恐怖と絶望に叩き込んだ。

閉じた世界の中で生きて来た彼らにとって、外の世界で生きて来た彼はまさに異邦からの襲撃者だった。

そんな彼を唯一恐れなかったのはアイリスの妹であるエリザベスだった。彼女はザラクに飛び膝蹴りを食らわせた。そして、その攻撃は急所に当たった。効果は抜群だ。

—— 正義は勝つ!!!

—— エ、エ、エリザ!? な、なんて所になんて事を!?

アイリスはザラクのバシャーモに彼を抱えさせて自宅へと連れ帰った。

彼が目を覚ました後、エリザベスが彼に外の世界の話をせがんだ。迷惑になると叱りながらもアイリスは期待するような眼差しをザラクに向け、彼を苦笑させた。

ザラクは様々な話を二人に語り聞かせた。

—— オレのギヤラドスは近所で釣り上げたコイキングを進化させたんだ。

アイリスはコイキングの身で最終進化形態のポケモン達に挑まされたり、敢えて苦手なでんきタイプやくさタイプに挑まされたりと散々な目に遭わされたギヤラドスに対して心底同情した。

—— ケロマツとはコイキングに滝を登らせようとしてる時に会ったんだ。コイキングの前で軽々滝を登っていった。やってみろって挑発するんだ。それでコイキングの奴、キレちまってさ。ギヤラドスに進化して滝を登り切って、オレとケロマツにはかいこうせんを撃つてきやがったんだぜ! だから、ケロマツと一緒になつて『へいへい、かもーん! あたんねーぞ、ノーコン!』って言ってやったんだよ。そしたら、げきりんを覚えてさ! いやあ、立派に成長したなあってケロマツと一緒にふっ飛ばされながら喜んだもんだぜ!

ギヤラドスの苦難の物語はギヤラドスに進化した後も続いたらしい。本当に可哀想だとアイリスはギヤラドスの好物をザラクから聞き出して美味しいポフィンを作ってあげた。

—— そんなで、ケロマツがゲコガシラに進化した頃、街の外でアチャモを見つけたんだ。今にも死にそうになっててポケモンセンターに慌てて連れて行ったんだ。そこでジョーイさんに言われたんだよ。アチャモはここでは生きられないってさ。

それがザラクが旅に出た理由らしい。アチャモをハウエン地方に連れて行く。その為にゲコガシラを鍛え上げてゲッコウガに進化させたらしい。

二体の最終進化形態を得て、旅に出る許可を得た彼はハウエンに向

かった。そこでアチャモの生息域を探す旅をしているとジムバトルの話聞いたらしい。

その頃にはアチャモとすっかり仲良くなっていたザラクは旅の思いで出にとジム巡りをする事にした。アチャモはザラクと一緒に戦う事を望み、ジムバトルでは常に先発を買って出た。

アチャモの集落を見つけた頃にはワカシャモに進化していて、すっかりバトルの魅力に嵌ってしまった。もともともと、ザラクと一緒に戦いたい。その思いを示す為にワカシャモはザラクのモンスターボールに自分から戻った。何度出されても戻った。そして、ザラクが『一緒に行くか?』と言った時、大喜びで抱きついた。

———それから初めてのリーグに挑戦してき。ワカシャモがバシャーモに進化したんだ。けど、さすがに三匹じゃキツかったな……。

結果はベスト8止まりだった。それでも三匹で挑んだにしては大健闘だと言われた。

けれど、ザラクは悔しかった。ポケモン達も悔しがっていた。だから、アガリア地方に戻る船とほぼ同時に寄港していたカントー行きの船に飛び乗った。

カントーでもジムバッジを集めて回り、その途中で不思議な森に辿り着いた。そこは本当に奇妙な森だった。なにしろ、生き物が一切居なかったのだ。

———その森はフシギバナのハードプラントで出来た森だったんだ。

ザラクは森そのものを作り出す規格外のフシギバナに闘志を燃やした。

戦いたいと強く思い、ゲッコウガと共に挑んだ。フシギバナは森全体を使って反撃して来た。四方八方から襲い掛かってくるパワーウィップをゲッコウガは斬って斬りまくった。そして、漸くフシギバナの本体に辿り着いた時にはもうボロボロになっていた。それでもザラクとゲッコウガは瞳を爛々と輝かせながら闘志を燃やし続けていた。

その姿を見て、フシギバナは笑った。そして、ゲッコウガを仕留めるとザラクのモンスターボールに自分から入って行った。

—— 正直、今でも何を考えてるのかいまいち分からない奴なんだよなあ。

そんな事を言われたフシギバナは気にした素振りも見せずに欠伸を噛み殺していた。

—— カントーのリーグで漸く準優勝まで漕ぎ着けたんだ。そこからシンオウに向かつて、またジムを巡った。そうそう！　そこで変な修行僧とあつたんだよ。なんか、波動がどうたらって言つて来て、無理矢理卵を持たされてさ！　おいおい、これどうすりやいいんだよ!?　って聞いても答えねえで『波動が導くままに……』とかわけの分からねえ事言つてよお。まあ、タマゴからリオルが生まれた時は嬉しかったけどな。バシャーモなんて、特に可愛がつてたな。ブレイズキック覚えさせようと躍起になってたぜ。

シンオウのリーグで初めて優勝した後、チャンピオンリーグにも挑んだらしい。けれど、本気のシンオウ四天王の強さの前に膝を屈する事になった。

もつともつと強くなりたい。そう思つて、彼は故郷であるアガリア地方に戻つて来た。ジムではなく、四大魔境と呼ばれる危険地帯で修行を積むために。

その内の一つ、フィオレ・シティの大迷宮^{パレス}では新たにフーデインを仲間に加え、遂に六体のポケモンを揃えたザラクはそのまま大迷宮をクリアしてしまった。

—— へへっ、オレが史上初らしいぜ！　まあ、シンオウの四天王連中ならクリア出来そうだったけどな。

そこには奇妙な本が置かれていたとザラクは言った。その本を開いた後、気がつくると大迷宮の外にいて、困惑しながらも次の大魔境を目指す事にしたと言う。

そして、次に彼が目をつけた大魔境こそがジユラ山脈だったというわけだ。

長話を終えた彼は今度はアイリスの話を知りたがった。閉ざされ

た里の中で生きて来た平凡でつまらない女の話をザラクは心底楽しそうに聞いた。

その後、彼は次の魔境に行くと言って出て行った。呼び止める間もなく、アイリスは彼が出て行った後、しばらく自宅の前から動く事が出来なかった。

数日後、彼がバステイロの海で暴れて来た事を報告しに来た時は心底ホツとして、彼が好物だと言った山菜のスープを拵えた。

飛び出して行つては土産話を持って帰ってくる。それが何度も続くと、アイリスはザラクの土産話を待ち遠しく思うようになった。そして、いつか帰つて来なくなるのではないかと不安に駆られた。

その不安を抱いた次の瞬間、彼女は彼を押し倒し、告白をした。大胆過ぎるアイリスの行動にザラクは笑った。そして、彼女を抱き締めながらキスをした。その光景を見ていたエリザベスとゲツコウガは揃つて『キヤー』、『コウガア』と歓声をあげた。

「……ザラク」

幸せだった。完成されたパズルのように完璧な日々だった。

その日々はもはや彼方へ消えゆくようとしている。

「大丈夫ですよ、お姉ちゃん！」

昨夜、話を聞いてもらう事すら出来なくて泣きじゃくつたアイリスに対して、エリザベスは堂々とした様子で言った。

「アルトがきつとお兄ちゃんをボッコボコにして連れ帰つてくれますよ！」

「……ボッコボコは困るかなあ」

妹の言葉に少しだけ気が楽になった。

自分が知らない間に彼女は大きく成長していた。そして、共に旅をした少年に対して、自分がザラクに向けているものと同じ感情を向けている。

姉妹だからか、似たような人を好きになった。彼ならばきつとザラクを取り戻してくれる。そう信じる妹の言葉を疑う事など出来ない。

「でも、そうね。エリザが好きになった子だもんね。きつと……」

アイリスは顔をあげ、巨大なビジョンの中で姿を変えた二体のポケ

モンとそのトレーナーを見た。

『なんと、ザラク選手のゲツコウガもキズナヘンゲだ!! ただでさえ最強のチャンピオンが更に最強になってしまった!! けれど、チャレンジャーもまた最強だ!! もう、どっちが勝ってもおかしくない!! いよいよ、チャンピオンリーグの決勝戦もクライマックスだああああ!!!』

第四話 『アルトスピアーVSザラクゲッコウガ!』

きずなへんげした二体のポケモンは互いを見つめている。

「スピー……」

「コウガア……」

次の攻防で決着がつく。それは予感ではなく、確信だ。

どちらが勝つにせよ、この楽しい時間が終わってしまう。だからこそ、今この瞬間を二体は味わい尽くしている。

「ザラク……」

「アルト……」

そして、それはトレーナーである二人も同様だった。

湧き上がる闘争心はもはや抑えつけておけるものではなく、それでもこの瞬間に対する喜びでなんとか正気を保っている。

「ザラクー!」

「アルト!」

戦え、戦え、戦えと心が叫び続けている。

まるでパンパンに膨れ上がった水風船のようだ。切っ掛け一つで破裂する。

その切っ掛けは風と共にやって来た。ゆらゆらと舞い落ちてくる葉はフシギバナのハードプラントが生み出したものだろう。それが今の今まで風に煽られて空中を舞っていたようだ。

その葉が地面に落ちた瞬間、ゲッコウガとスピアーは動き出した。

バトルに必要なもの以外のあらゆる思考が停止して、あらゆる感情が停止して、あらゆる理性が停止した。

戦う。そして、勝利する。それだけが魂を支配した。

「スピーイイイイ!!!」

「コウガアアア!!!」

スピアーとゲッコウガの体がブレていく。そして、無数のかげぶんしんが広大なフィールドを埋め尽くした。

無限と無限がぶつかり合い、その凄まじい衝撃はフィールドの枠として設えられていた背の高い壁をアツサリと粉碎した。

そのままフィールドの場外に溢れ出しそうになったかげぶんしん達の姿がまるで吸い込まれていくかのように本体であるスピアーとゲッコウガの下へ集まっていく。

かげぶんしんに使用した技のエネルギーをそれぞれがニードルとみずしゆりけん集中していく。

「ミサイルばり!!!」

「みずしゆりけん!!!」

空間が振じ切れる程の緑の雷光が放たれる。

空間が切り裂かれる程の鋭利な斬撃が放たれる。

原種のポケモンが引き起こす災害クラスの技すら凌駕する驚天動地の一撃同士がフィールドの中央にぶつかり合った。

その余波だけで地面は大きく抉られ、空間の歪がいくつも出来上がっている。

『す、凄まじい光景です!! あまりの高威力の攻撃同士のぶつかり合いによって、空間が悲鳴をあげている!! このリーグでは何度も目撃された空間の歪ですが、専門家によれば世界には裏側とされる『やぶれた世界』なる反転世界が存在するそうです。この歪はその反転世界との境界に亀裂を走らせているものとの事!! 正直、意味がほとんど分かりません!!』

実況の声を尻目にゲッコウガとスピアーは二発目を放った。そして、三発目、四発目、五発目もほぼ同時に放たれ、その衝撃は天まで届き、雲の天蓋を吹き飛ばした。

荒れ狂う烈風と土煙でフィールドは見通しがまったく効かない状況に陥っている。けれど、二体は戸惑う様子も見せずに動き出す。

きずな現象は極まったポケモンとの共感能力だ。その力は自らのポケモンだけではなく、相手のポケモンにも作用する。アルトが感じ取ったゲッコウガの位置をスピアーが感じ取り、ザラクが感じ取ったスピアーの位置をゲッコウガが感じ取る。

二体のダブルニードルとつじぎりがぶつかり合った衝撃で土煙は彼方へ吹き飛ばされた。そのまま二体は人間の目が認識出来る限界を遥かに超えた速度で斬りあつた。

カノンを地面に向けて放つ。きずなへんげ状態のゲッコウガのハイドロカノンはまさしく究極無敵の最強奥義となり、スピアーが潜っている筈の大地を消し飛ばした。

まるで隕石の落下跡のような状態と化したそこにスピアーの姿はなく、ハイドロカノンが地面に衝突する瞬間に地中から抜け出していた事を悟ったゲッコウガは背後に迫る殺意を感じ取った。

「コウガア!!」

ハイドロカノンの反動を無視して、ゲッコウガは空中であるにも関わらず、空間を蹴りつけて体を振り向かせ、つじぎりを放った。

ダブルニードルを防ぎ、その勢いを利用して一気にハイドロカノンに落下していく。

大穴を作り出した後、反動で舞い上がっていたハイドロカノンの水が落ちてくる。そこはまるで火口湖のような状態になった。

スピアーは湖の中のゲッコウガに対して、ミサイルばりを放つ。今のスピアーはむし・どくタイプからむし・でんきタイプに変化している。そして、ミサイルばりの性質もまたスピアーに変化に呼応するようにならう。うにむしタイプからでんきタイプの技へ変化していた。水は電気を流しやすい。これで決まりだとアルトは笑った。

「えっ？」

けれど、湖に触れたミサイルばりはその水面で止まってしまった。

その隙にゲッコウガが水面から飛び出し、スピアーにつじぎりを仕掛ける。慌てて回避したスピアーはダブルニードルを繰り出す、またしてもゲッコウガは湖に潜ってしまった。

「……そうだ、モンテロ博士に聞いた事がある」

水は電気を流しやすい。けれど、それは不純物を多く含む場合に限られる。

ゲッコウガのハイドロカノンが生み出した水は不純物を含まない純水らしい。だからこそ、でんきエネルギーは遮断されてしまったのだろう。

「やっぱり、凄いな」

アルトはそんなゲッコウガとザラクの凄さが嬉しかった。そして、

彼らと渡り合えている事が嬉しかった。

「……エリザベス」

アルトは呟いた。

「バレット、アギト、アクセル、セラ、ミリガン、ヴォルフ、ルーラー、エルフラン……」

旅の仲間や旅で出会った人達の顔が次々に脳裏を過っていく。

彼らと出会ったからこそその今がある。

「俺が勝つ!! いくぞ、スピアー!!」

スピアーは上空へ登っていく。

「コウガ!」

水中に隠れ潜み気を伺っていたゲツコウガは目を見開いた。

「もつと、もつとだ! もつともつと高く!!」

天高く舞い上がったスピアーは遙か地上を見下ろした。

「受け止めろ、ザラク!! これが俺とスピアーの全てだ!!」

「受けて立つぜ、アルト!! いくぞ、ゲツコウガ!! フルパワーだ!!」

スピアーが四本の腕の腕のニードルと尾の針にエネルギーを集中していく。それを迎え撃つべく、湖を構成していたハイドロカノンのみずエネルギーをゲツコウガはみずしゆりけんに集中した。

「スピアー、ミサイルばり!!!」

「ゲツコウガ、みずしゆりけん!!!」

五発のミサイルばりがほぼ同時ではなく、全弾同時に放たれる。五発のミサイルばりは一つとなり、流星の如くゲツコウガ目掛けて降ってくる。

それに対して、ゲツコウガはハイドロカノンのエネルギーを籠めた最大パワーのみずしゆりけんを放った。

そして、二つの技は空中で衝突した。

第五話 『VSアルセウス I』

世界が二つに割れた。究極のエネルギー同士の激突は強大な波動を生み出し、それはアガリア地方を超え、遠くの地方まで届く程だった。

世界に異変が起きている。

ポケモンの大移動によって、その事を予感していたアガリアの外の人々もいよいよもって確信した。

「ここは地の果て、流刑の地。ここは世界の吹き溜まり。混沌と絶望が渦巻く終点世界」

レムハザードの名を持つ少女は謳うように呟いた。

「そうあれかしと神が定めた地」

神とは一体のポケモンを指し示す言葉。

そのポケモンは世界を作り、人を作り、ポケモンを作り出した。

「咎人とは神の写し身を冒瀆し、裏切ったミチーナの民のように神を貶める者の事。そして、咎人には罰が与えられた。それこそが『来るべき災厄』」

レムハザードは嗤う。

「ああ、なんという……、なんという傲慢さ」

彼女の双眸には憎悪と憤怒が浮かぶ。

「世界を作り出したからなんだと言うの？ 人を生み出したからなんだと言うの？ ポケモンを生み出したからなんだと言うの？」

極大エネルギー同士の激突によって、世界に穴が穿たれた。

その先にあるのは破れた世界ではない。それは神が作り出した五つの世界の中心。

「お前はわたしから父を奪った。兄を奪った。母を奪った。国を奪った」

彼女の顔は禍々しく変貌していく。

この時の為だけに彼女は苦痛に満ちた永遠を受け入れて来た。

「引き摺りだしたぞ、神よ！」

チャンピオンリーグの舞台上空に開かれた孔。

そこから姿を現したのは純白の身に黄金を携えた一体のポケモンだった。

アルセウス。神と謳われしポケモンが現れた。

第五話『VSアルセウス』

気が付いた時、アルトはザラクの隣にいた。そして、傍にはスピアーとゲッコウガの姿があった。

二体はどちらもボロボロで、揃って意識を失っている。

「あれ？ 決着は？」

「……決着自体はついた。覚えていないのか？」

「え？」

ザラクに言われて思い出す。ミサイルばりとみずしゆりけんの激突。その軍配はミサイルばりに上がった。タイプの相性もあつたのだろう。上からと下からでは重力の影響もあつた事だろう。みずしゆりけんを貫いたミサイルばりはそのまま地上のゲッコウガに命中した。

そして、ゲッコウガは戦闘不能になった。

「……勝った？ オレとスピアーが……、勝った!？」

「ああ、そうだ。全力全開で戦って、オレが負けた」

そう言うと、ザラクは微笑んだ。

「楽しかったぞ、アルト」

「オレも！」

そう言って笑い合っていると、一匹のポケモンが降りて来た。

『よもや、我が領域へ至る程の力を持つ者が現れようとは……』

「な、なに!？」

「アルセウスか？ たしか、シンオウで壁画を見た事があるが……」

「アルセウス……?」

「神と呼ばれるポケモンだ。とにかく強いらしい」

「そうなんだ！ じゃあ、バトルしないとだね！」

「だなー！」

二人はワクワクの表情をアルセウスに向けた。すると、アルセウスもまた微笑んだ。

『わたしに挑むのですね？ いいでしょう』

その言葉と共にアルセウスの周囲に浮かんでいるプレートがスピアーを取り囲んだ。

「ス、スピアー!?!」

『その状態では戦えませんからね』

プレートから七色の光が放たれた。その光はスピアーの体を癒やしていく。そして、スピアーを癒やし終えたプレートはゲッコウガも癒やした。そして、今度はアルトとザラクのモンスターボールが光に包まれた。どうやら、他のポケモン達も回復してくれたようだ。

「ありがとう!」

『いいですよ。どうやら、贖罪は十分に果たされたようだ。咎人の末裔よ、名を聞かせてもらえますか?』

「オレはアルト! それから、相棒のスピアーだ!」

「スピー……?」

アルトが名乗ると、その声でスピアーが目を覚ました。

『あなたは?』

「ザラクだ」

そう名乗ると、ザラクはゲッコウガをモンスターボールに戻した。そして、そのボールをアルトの手に握らせた。

「ザラク……?」

「オレは負けた。これからはお前がアガリアのチャンピオンだ。だから、神に挑む権利もお前にある」

「いいの? だって、神様とバトル出来るんだよ!?!」

アルトが心底意外そうに驚くと、ザラクは笑った。

「いいんだ。オレは十分に満足している。それに、オレにはオレのやるべき事があるからな」

「そうなの……?」

「ああ」

ザラクはアルトの頭を撫でた。そして、アルセウスを見た。

「アルセウス。アルトとのバトルは楽しいぞ」

『それは良いですね。楽しみです』

「じゃあ、オレは行くとする。ゲッコウガは貸しておく。お前と一緒に戦うの、凄く楽しかったみたいだからな。最後にもう一回、一緒に戦ってやってくれ」

「……うん！」

「じゃあな」

「またね、ザラク！」

「おう！」

彼は笑いながら去って行った。そして、残されたアルトはゲッコウガのモンスターボールを握りしめながらアルセウスに向き直った。

神と呼ばれるポケモンに挑む。とうとう来る所まで来た感じだ。ザラクとのバトルで燃え尽きるほどに熱く燃え上がった筈なのに、まだまだ心の火は消えていない。

「さあ、アルセウス！ バトルだ！」

『咎人の子、アルト。全身全霊を掛けて挑んで来るといい』

アルトは笑みを浮かべるとスピアーをモンスターボールに戻した。体力は回復しても、ゲッコウガとのバトルでスピアーは精神的にヘトヘトだからだ。

以前、シャンティ・シティのジョーイさんから言われた事を今もしっかりと覚えている。

—— ポケモンバトルはポケモンの肉体だけじゃなくて、精神も削るの。連戦すれば、そのストレスは多大なものになるわ。あなたがスピアーを大切に思っていて、一緒に勝ちたいとも思っている事はわたしも知ってる。だけど……いえ、だからこそ、次は別のポケモンを出すべきよ。

—— ポケモントレーナーなら、誰だって特別なポケモンを持っているの。それがパートナー。パートナーと一緒に強くなりたいと思うのは当然の気持ちよ。だから、その気持ちを否定する必要はないの。大切な事は、パートナー以外の仲間を頼る事。

正式にポケモントレーナーになった日にトレーナーカードをくれたジョーイさん。

彼女の言葉を胸に抱き、アルトはキテルグマを繰り出した。

「いくぞ、キテルグマ！ 神様にだって負けないぞ！」

「クマー！」

「アームハンマー！」

「キイイイイイイイイ！」

キテルグマは速攻を仕掛けた。

『遅いですね』

アルセウスは余裕をもってアームハンマーを避けた。けれど、キテルグマは威力を落とさない。そのまま地面を殴りつけた。

『これは……』

舞い上がる土煙によって視界が塞がれる。

『これがポケモントレーナーとのバトル。おもしろい』

その言葉と共に眩い光が放たれた。その光は土煙を払い除けた。直後、キテルグマは光の発信源目掛けてはかいこうせんを放った。

出方の分からない相手に挑む時はこう動こうと予め決めておいたのだ。

虚を突かれた様子のアルセウスにはかいこうせんはアツサリと命中した。けれど、ダメージは少なそうだ。

『本当におもしろい』

その言葉と共にアルセウスはしんそくでキテルグマの眼前に現れた。そして、はかいこうせんの反動で動けないキテルグマ目掛けて、土煙を払い除けた眩い光を放った。

「まさか、マジカルシャイン!？」

フェアリータイプのわざはキテルグマにこうかばつぐんだ。

「いたみわけ！」

「クウウウマアアアア！」

『むう!？』

マジカルシャインに耐えながら、キテルグマはいたみわけを使った。

ダメージを回復させると共に相手にダメージを与えるいたみわけは突然の痛みを与える事で相手のポケモンの判断力を乱す効果もある。

「キテルグマ！」

「クマー！」

このまま倒す。アルトとキテルグマの意思は一つとなり、必殺技を繰り出した。

『ぜんりよくむそうげきれつけん！』

「クウウウマアアアアアアアアア！」

マジカルシャインをくぐり抜け、必殺の一撃をアルセウスに叩き込んだ。

『グウウウ、やりますねえ！』

けれど、倒すには至らず、アルセウスは再びのマジカルシャインを放った。

「いたみわけ！」

『わたしに同じ手は通用しませんよ！』

アルセウスの周囲に浮かぶプレート一枚が輝いた。その光によって、マジカルシャインの威力が跳ね上がり、キテルグマはいたみわけを発動する間もなく戦闘不能になった。

「キテルグマ！」

「クウウ……」

キテルグマをモンスターボールに戻すと、アルトは悔しそうに歯ぎしりしながらギルガルドのモンスターボールを掴んだ。

アルセウスのタイプをアルトは知らない。けれど、あれほどのマジカルシャインを放てるポケモンがフェアリータイプでない筈がないと判断した。

フェアリータイプに有利なのははがねタイプだ。

「ギルガルド、君に決めた！」

「ギル！」

「ラスターカノン！」

出会い頭のはがねタイプの一撃をアルセウスは避けなかった。代わりに赤いプレートを輝かせた。

「効かない!?!」

アルセウスはラスターカノンの直撃を受けながらも微動だにしない

かった。

そして、動揺しているアルトとギルガルドにかえんほうしやを放った。

「せいなるつるぎで斬れ！」

「ギル！」

けれど、伊達にアルトもチャンピオンまで上り詰めてはいない。

すぐに切り替えて窮地を脱した。そして、即座にギルガルドと意識を同調させる。

王の力はギルガルドに本来の力を取り戻させる。

剣は青く輝き、盾は赤く輝く。

あらゆる者を斬り伏せ、敵味方から畏れられた妖精王の剣が顕現する。

如何なる攻撃も弾き返し、敵味方から崇められた格闘王の盾が顕現する。

「きよじゆうざん！」

「ギルウウウウ！」

『これはまさか!?!』

青く輝く光の斬撃がアルセウスに襲い掛かった。

第六話 『VSアルセウス II』

神を討つ。その為だけに生きて来た少女の前に黒い男が現れた。

「……何故、ここにいるの？」

レムハザードは愕然とした表情で問い掛けた。

今まさに神とのバトルが始まっている筈だ。そこではアルトとザラク、来るべき災厄によって魔王と化した二人が暴れ回っている筈だ。

「何をしているの!?! あなたはアルセウスと戦っている筈でしょ!?!」

「やはり、それが望みだったか」

ザラクは深く息を吐いた。

「生憎だったな。もう、魔王は生まれぬ」

「何を言っているの……? あなたは魔王になるのよ!」

「ならない。そもそも、魔王とは何だ?」

「魔王は魔王よ! 魔獣の王!」

「そうだ。魔王は魔獣の王だ。だからこそ、もう魔王は生まれぬ」

「言っている意味が分からないわ!」

瘡癩を起こしたように喚き立てるレムハザードにザラクはやれやれと肩を竦めた。

「もう、魔獣なんていない」

ザラクは空を見上げた。彼方に広がる海を見た。地平の彼方へ目を細めた。

「ここにいるのはポケットモンスター。縮めて、ポケモン。この世界に住む不思議な不思議な生き物だ」

「そ、そんなの呼び名が変わっただけじゃないの! モンスターボールが発明されて、ポケットに入るくらい小さくなるからポケットモンスター! だけど、本質は何も変わってない!」

「変わっている。ポケモンだけではなく、人間も」

ザラクは言った。

「嘗て、人は魔獣を使って人を殺し、魔獣を殺した。だけど、今は違う」
彼はモンスターボールを手に取った。

「ポケモンバトルは戦いだ。だけど、それは殺し合う為の戦いじゃない。技と技をぶつけ合って、体と体をぶつけ合って、心と心をぶつけ合って、絆を深める為の戦いだ」

「……何を言うかと思えば」

レムハザードは嘲るように嗤った。

「世間知らずの坊やに教えてあげるわ。世界は何も変わっていない。カントー地方のロケット団を知っているかしら？ ホウエン地方のマグマ団やアクア団は？ シンオウ地方のギンガ団は？ カロス地方のフレア団が何をしたか知らないの？ 人は何も変わっていない。魔獣だって、何も変わっていない！」

「だけど、ポケモンバトルは楽しいんだ」

ザラクは微笑んだ。

「アルトと精も根も尽き果てるバトルをして、改めて思った。ポケモンバトルは楽しいんだ！ ロケット団を知ってるかって？ 知っているさ。実際にバトルした事がある」

ザラクはフシギバナを繰り出した。

「フシギバナはロケット団の生体実験に使われていた個体だ。オレがこいつに会った時も実験の真っ最中だった。その中核であるフシギバナを連れ出したわけだからな。当然、ロケット団に襲われた」

「……だったら」

「オレはロケット団とポケモンバトルをした。とても悪いヤツだった。だけど、ポケモン達はアイツの事が好きだった。それに、ポケモンバトルで負けるとアッサリ帰って行った。気を失ったポケモンを急いで治療する為に」

「そ、そんなの一部の例外でしかないわ！」

「そうかな？ どんなに悪いヤツだって、必ずパートナーのポケモンがいるじゃないか。オレ達はポケモントレーナー。ポケモントレーナーはポケモンが大好きなんだ。だから、もう魔王は生まれえない。来べき災厄なんてものは、とうの昔に終わっていたんだ」

「屁理屈よ！ 来べき災厄は神が咎人達に与えたポケモンとの共感能力の事！ ポケモンと意識が一つになる事で互いの闘争心が混じ

り合い、強大な力を得る。力を得た者は更なる力を求め、やがては暴走して魔王と化す！ だからこそ、あなたは『歩く災害』となった！」

「レムハザード。王の力だとか、来るべき災厄とか、時代遅れだぜ。今の時代、この力はこう呼ばれているんだ」

ザラクは言った。

『キズナ現象』と」

「……御託はたくさん！」

レムハザードは叫んだ。

「ザラク！ 神に挑みたいとは思わないの!? ずっと力を求めていたじゃない！ その頂点と戦えるのよ!？」

「頂点だからだ」

ザラクは振り返った。彼の視線の先でアルトがアルセウスと戦っている。

「オレは負けた。チャンピオンはアルトだ。頂点に挑む資格はアルトにある」

「巫山戯ないで！ アルト一人じゃ勝てない！ 魔王化したあなたとアルトが同時に暴れる事でようやく拮抗出来るのよ!？」

「そして、お前がアルセウスを殺すんだろ?」

「そうよ！ わたしが神を殺す！ その為にわたしは今日まで生きて来たのだから！」

そう叫ぶ彼女の顔はまさしく鬼のようだった。

数百年にも及ぶ執念が彼女の魂を禍々しく歪めてしまった。

だから、彼はアルセウスとのバトルというワクワクを諦めてここへ来た。

彼女の怒りを受け止める為に。

「レムハザード。お前の望みを叶える方法はたった一つだ」

彼はニヤリと笑って言った。

「バトルしようぜ！」

第六話『』

「きよじゅうざん！」

「ギルウウウウ！」

『これはまさか!?!』

青白い極光斬撃をその身に受け、アルセウスは驚愕の表情を浮かべた。

『驚いた。これはわたしが勇者に授けた武具。その化身がこうしてわたしに挑みに来るとは!?!』

アルセウスは哄笑した。

『おもしろい! 実におもしろい! 写し身を通して、わたしは多くの世界を垣間見てきた。どの世界でも、人とポケモンは時に傷つけ合い、時に絆を深め合う』

『喋ってる暇なんて無いよ! せいなるつるぎ!』

『ギルギルギルウウウウ!』

『ヌツ!?!』

お喋りをしているアルセウスにせいなるつるぎが命中した。きよじゅうざんよりも反応が大きい。

『やっぱりだ! あのプレートが光る度にアルセウスはタイプを変えているんだ!』

きよじゅうざんははがねタイプ。それを防ぐ為にアルセウスはタイプを同じはがねタイプに変動させていた。だからこそ、かくとうタイプのせいなるつるぎはこうかばつぐんだ。

『昔は人もポケモンも等しき存在だった。昔は今よりも多くの者が当然のようにポケモンと心を通わせ、言葉を交わしていた。けれど、人はそれを忘れてしまった。それを罪だと考える人がいた。忘れてはならない事を忘れる罪を贖いたいと願う者がいた。彼らは己を咎人と呼び、わたしに祈りを捧げた。それが悲劇を齎すものだと言告を与えたが、それでも彼らはポケモンと共にありたいと願った』

『タイプを変えない……? だったら、もう一度せいなるつるぎ!』
『ギル!』

再び、せいなるつるぎが命中した。

アルセウスはよろめいた。けれど、プレートを変えないまま口を動かしかし続け、アルトとギルガルドは困惑した。

『アルト。あなたにとって、ポケモンと一つになるとはどういう事で

すか?』

「それ……、バトルに関係ある?」

『あります』

「……胸が熱くなる。ギルガルドと一つになると、ギルガルドの気持ちの流れ込んで来て、ギルガルドの痛みが共有出来て! 一緒に戦ってるんだって、いつも以上に思えるんだ! だから、ますます楽しくなる! オレはもっとしたい! もっと、ギルガルドと楽しくポケモンバトルがしたい!」

「ギル! ギルギルギルギル!」

アルセウスはアルトとギルガルドを見た。

一人と一体の意思は完璧にシンクロしている。一緒に戦いたい。一緒に楽しみたい。

闘争心もあるのだろう。けれど、それだけではない。

『かつて、人はこの力を災いの基だと考えました。それは事実であり、幾度も悲劇が起きました。人は知恵を持ち、それ故に他の多くの生き物よりも強い感情を抱くようになった。強過ぎる感情はポケモンを強くしたけれど、同時に暴走に危険を孕んでいた。けれど、それは大切な事を忘れてしまったから起きた事』

アルセウスの周りのプレートが七色に輝き始めた。

『人がポケモンを愛し、ポケモンが人を愛すれば、二度と暴走は起こらない。人とポケモンの関係はようやくそこに辿り着いたのですね』

「……よく分からないけど、オレはギルガルドが大好きだよ! キテルグマの事も! カラマネロの事も! ギャラドスの事も! フーパの事も! ゲッコウガの事も! スピアーの事も!」

『それこそがポケモントレーナー。だからこそ、力は名を変えた。キズナ現象。その素晴らしい力と共に挑まれたからには、わたしも本気を出さねば無作法というものですね』

その言葉と共にアルセウスが変わった。

メガシンカしたわけでもなく、フォルムチェンジをしたわけでもない。

けれど、たしかに変化した。

『受け止めてみせなさい。わたしの真の力を！ あくうせつだん！』

「ギルガルド!!」

「ギル!」

アルセウスが放ったわざは空間ごと相手を切り裂く人智を超えた必殺技。

けれど、空間を引き裂く事つがデフォルトとまではいかないまでも、同じ事がギルガルドにも出来る。ギルガルドの渾身のせいなるつきは同じく空間を切り裂きながらあくうせつだんに迫っていく。

『ときのほうこう』

時間が歪む程の強大な力が撃ち出された。

あくうせつだんは時の彼方へ消え去り、ギルガルドは何故かときのほうこうの目の前にいた。

「なっ!?!」

「ギル!?!」

ギルガルドは強い拒絶の意思を示した。

「ダメだ、ギルガルド! 一緒に乗り越えるぞ。きよじゆうざん!」

「ギルウウウウウウウウ!」

究極の斬撃がときのほうこうを斬り裂いた。

『シャドーダイブ』

「消えた!?!」

アルセウスの姿が朧のように消え去り、戸惑っているとギルガルドは死角から蹴り飛ばされた。

「ギルウウウ!?!」

「まずい!?! ギルガルド!」

時の彼方へ飛ばされたあくうせつだんとせいなるつきが蹴り飛ばされた先に現れた。

このままではギルガルドが二つの究極斬撃に呑み込まれてしまう。

「もどれ、ギルガルド!」

慌ててモンスターボールをギルガルドに向けた。赤い光はギリギリでギルガルドに届き、回収出来た。

「おつかれさま、ギルガルド」

ギルガルドはまだ余力を残している。だけど、わざと当たる前にモンスターボールに回収するのは反則だ。あのまま命中していたらギルガルドは確実に戦えなくなっていた。だから、ギルガルドはここままでだ。

「次はお前だ！　いくぞ、ギャラドス！」

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

アルトの三体目はギャラドスだ。

第七話 『VSアルセウス Ⅲ』

ザラクは問答無用で勝負を仕掛けて来た。

「いくぞ、バシャーモ」

「シャモッ！」

モンスターボールから飛び出して来たバシャーモはザラクを見た。彼の表情はまるで憑き物が落ちたかのようなうだ。

「シャモ……」

バシャーモは喜んだ。理由は分からない。だけど、大好きなザラクが帰って来た。

「バシャーモオオオオオオ!!」

喜びの感情が爆発した。全身を紅蓮の業火が包み込み、炎の色が黒く変わっていく。

黒炎は一際大きく燃え上がると、一気にバシャーモの内に吸い込まれていった。

キズナ現象の発動。全身を黒く染め上げたバシャーモはレムハザードを見た。

「……バトルですって？ わたしにそんな暇はないわ！」

レムハザードはモンスターボールを投げた。

「ギシャアアアア！」

飛び出して来たのはドラゴンとゴーストのタイプを持つドラパルトだった。

レムハザードはドラパルトに飛び乗った。ここで無駄足を踏んだ分、急がなければいけない。

「ポケモントレーナー同士のバトルで背中を向ける気か？」

「……あなたはポケモントレーナーだったのね。だけど、わたしは違うの」

彼女は言った。

「わたしは魔獣使い。あなたが言う、時代遅れの存在よ」

ザラクは魔王にならない。この調子では、アルトも同様だろう。けれど、すべてが無駄に終わったわけではない。

極限の力同士のぶつかり合いでなければ神の領域へ至り、神を引き摺り下ろす事は出来なかった。それだけでも彼らは十分に役に立った。

「……神を殺す最後の一手のつもりだったけど、こうなったら仕方が無いわよね」

王の力を解き放つ。

元々はアルトとザラクが魔王となり、暴れる事でアルセウスを疲弊させてから使う筈だった。二つの魔王の力をすべて取り込む事で魔王を討つ力を得る為に。

そして、散々利用してしまった二人を人間に戻す為に。

「無駄だ」

ザラクは言った。

「言っただろう？ もう、魔王は生まれえない。お前だって、もう魔王にはなれない」

「わたしはあなた達とは違う」

「何も違わない。お前のドラパルトを見れば分かる。愛しているのだろうか？ ポケモン達を」

レムハザードは大きく目を見開いた。

「……愛してない」

「嘘を吐くな。オレはお前以上に愛が深い者を知らない」

「わたしに愛なんてない！ わたしは実の弟を利用して来た！ この子達の事も！ あなたの事も！ そんな人間が愛を持っている筈がないでしょ！」

悲鳴のような彼女の叫びを聞いて、ドラパルトは涙を零した。

王の力を持つ彼女はその事を知っている筈だ。それでも必死に目を逸らそうとしている。

「お前は一度でも自分の為に生きた事があるのか？」

「常に自分の為に生きているわ！ 家族を奪われた復讐の為に、わたしは何もかもを利用して来た。あなたとアイリスの事も！ ナザレの事も！ アルトやアギト、セラの事も！」

「王の力を消し去る為にな」

レムハザードは愕然となった。

「すべてはアルト達の為だろうか？ 王の力がある限り、何度でも『来るべき災厄』が起きる。それではいつまで経ってもアルト達を起こしてやる事が出来ない。けれど、神によって与えられた力は神を討つ事でしか消す事は出来ないと考えた。だから、アルセウスを討つための計画を立てた」

「……なんで」

「分かるさ。ポケモンを見れば、そのトレーナーがどういう人間かくらいな」

ドラパルトは泣いている。愛しているからだ。

レムハザードは破滅の道を進んでいる。行き着く先は嘗てない『来るべき災厄』と化して、神と相討つ未来。それでも止める事が出来ないのは、彼女自身の望みが彼女以外の未来にあるが故だ。

「もう一度言うぞ、レムハザード。もう、魔王は生まれない。ここまですポケモンから愛されてしまったトレーナーには、もう憎悪も憤怒も集まらない。疑うのならば今ここで試してみろ。オレもアルトとのバトルを通じて分かった。ポケモンバトルがどれだけ最高なものなのかと」

「……わ、わたしは」

「使え、レムハザード」

レムハザードは恐怖した。もしも、ザラクの言葉が真実ならば、これまでの軌跡が本当に無駄になってしまう。

「レムハザード！」

その声に体を震わせ、レムハザードは王の力を解き放った。

そして、流れ込んで来たのは自分を心配するドラパルト達の心だった。

第七話『VSアルセウス Ⅲ』

チャンピオンリーグの決勝戦。その最後のバトルのクライマックスを映していた映像がいきなり消えてしまった。

「な、何事ですか!？」

「カメラがぶつ壊れたんじゃないやね？ むしろ、よく持ち堪えたもんだ」

文字通りにポケモンリーグとは次元が違うチャンピオンリーグのバトルの最中、会場に設置されているカメラは十二分に仕事を果たした。次元の歪が生まれたり、地上が焦土と化したり、世界の終わりを思わせるような光景をレンズに映し続けていたカメラ達の健闘振りに敬意を評したい程だとバレットは思った。

「いずれにしても決着はついた筈だが……」

映像は途切れたものの、最後の光景はまさしく互いのすべてを掛けた真正正銘最後の一撃同士の激突だった。

「どつちが勝ったのかな……」

「アルトに決まっています！」

セラの呟きにエリザベスが断言した。

「ザ、ザラクかもしれないわよ?」

「アルトが負ける筈がありません！」

姉が恐る恐る発した言葉にもエリザベスは揺るがなかった。

「チャンピオンになったら答えを聞かせてくれるんだもんねー」

「チャンピオンになってももらわないと、そりゃ困るわなあ」

セラとバレットがニヤニヤ笑いながら言った。

アルトがポケモンリーグを制した日、エリザベスはアルトからチャンピオンになるまで待っていて欲しいと言われた。

待たせるだけ待たせて梯子を外してこない保証はない。だけど、その時は大泣きしながら縋り付いてでも考えを改めさせるつもりだ。

一度期待させておいて袖にするような悪い男ではないと言いつれない部分がアルトにはあるからエリザベスは密かに覚悟を決めていた。

「そうです、困ります! というわけで確かにいきますよ! アギト、リザードンを出しなさい!」

「フリーザーがないの、不便じゃないか?」

「神様には神様がいるべき場所があるんです! それに、アルトをゲットしたら、今後はギャラドスやフーパに乗せてもらえばいいから問題ありません!」

「そうか、アルトも大変だな」

やれやれと肩を竦めながら、アギトはりザードンを出した。

「オレ達も行くか」

「そうだな」

アクセルはオンバーンを繰り返り出した。

そして、バレットはタイカイデンを繰り返り出した。

「あれ？ その子、初めて見ますね」

「タイカイデンだ。バッジを集めるには移動手段が必要だろうと神官様が貸してくれたんだよ」

「神官様？ ああ、竜神教の！」

それぞれが飛行出来るポケモンに乗ると、観戦場となっていたポケモンリーグを離れた。そして、地上にいた時には気付かなかった異変に気が付いた。

「な、ななっ!？」

アガリア地方を取り囲む無数のポケモン達の姿があった。

「そう言えば、途中から観客がどんどん居なくなっていたな」

「バトル観戦に夢中で全然気が付かなかったぜ！」

「わ、わたし達、鈍過ぎ……?」

「って、おいおい！ あれ、ザラクとレムハザードじゃないか!？」

「バトルしてる!？」

「ザラク、アルトとバトルしてた筈では!？」

地上ではザラクのバシャーモがレムハザードのドラパルトと攻防を繰り返している。

次から次へと飛び込んでくる異常事態に尋常ならざるものを感じたエリザベスはチャンピオンリーグの会場を見つめた。

「りザードン、急いでアルトの下へ向かってください！」

「ガウ?」

「ああ、頼む」

アギトの承諾を受け、りザードンはエリザベスの命令に従う事にした。

最高速度でチャンピオンリーグの会場に向かうと、そこではアルトが謎のポケモンとバトルを繰り返していた。

「アルト！」

エリザベスが声を上げると、アルトは彼女を見て笑顔を見せた。

「エリザ！　すごいよ！　オレ、神様とバトルしてるんだ！」

「え？　神様と!?　でも、そのポケモンはフリーザーじゃないですよ!?!」

「いや、そっちの神様じゃなくて……、えつと……」

アルトはこの状況を何とか伝えようとしたけれど、自分でも説明出来る程状況を把握出来ているわけではなかった。

なにしろ、ザラクに楽しいぞと勧められたからバトルをしているだけだからだ。

「と、とにかく凄いポケモンとバトルしてるんだ！　でも、絶対勝つよ！　だから、そこで見ててくれ！」

「うーん、説明が下手！　でも、分かりました！　見てますからね、アルト！」

「うん！」

エリザベスが見ている。そう思うと、アルトの心の炎は更に燃え上がった。

ポケモンバトルは楽しい。

それはポケモンとの絆を深める事が出来るから。

それは人との絆を深める事が出来るから。

「行くぞ、ギヤラドス！」

「ギヤオオオオオオオ！」

第八話 『VSアルセウス IV』

思わぬ乱入者にアルセウスはやれやれと首を振った。

『もう少し離れていなさい。あなた達を気にかけていては、アルトとのポケモンバトルが楽しめない』

「喋った!？」

「テレパシーか!」

「アルセウスの言う通りだよ。巻き込まれないように気をつけてくれ!」

「わ、わかりました。頑張ってくださいね、アルト!」

「うん!」

エリザベスとアギトを乗せたりザードンが離れていくと、改めてギヤラドスと共にアルセウスへ向き直った。

キテルグマとギルガルドの全力の攻撃を受けてもピンピンとしている。

原種であり、最高レベルであり、相性有利のわざを複数回受けて尚だ。

いつもならぼうふうの発動から入るけれど、あのポケモンを相手にそれは意味がない。

「ギヤラドス、ハイドロポンプ!」

「ギャオオオオオオ!」

ギヤラドスがハイドロポンプを放つと、アルセウスのプレートが青く輝いた。

『ハイドロカノン』

一体、いくつのわざを使えるのだろうか。

究極奥義とカテゴライズされているみずタイプのわざがギヤラドスのハイドロポンプを飲み込んだ。

けれど、それはアルトとギヤラドスにとって幸運だった。

ときのほうが来ると思っていたからだ。

それに備えていたからこそ、次の一手に淀みなく移行する事が出来た。

「かみなり！」

「ギャオオオオオオオ！」

ハイドロポンプを発動しながら、ギャラドスは発電器官ででんきエネルギーを練り上げていた。

ときのほうこうに対するカウンターとして用意していたかみなりはハイドロポンプとハイドロカノンという最高クラスのみずエネルギーを巻き込み、威力を増大させていく。

ときのほうこうという世界の理すら乱すわざを平然と使えるものがハイドロカノンの反動などで動きを鈍らせる事はないだろう。けれど、わざの発動中は別だ。わざを止める為に一拍の間が空く。その一拍で十分だ。

ギャラドスの雷はハイドロカノンを通じて、アルセウスの口の中へ飛び込んでいった。

『ガガッ!?!』

急所に当たった。効果は抜群だ。

「畳み掛けるぞ！ ハイドロポンプ！」

「ギャオオオオオオオオオオオ！」

かみなりでの追撃も考えた。けれど、プレートでじめんタイプに変わられたらダメージを無効化されてしまう。このチャンスを逃すわけにはいかない。はかいこうせんもゴーストタイプに変わられたら同じだ。

『と、ときのほうこう！』

余裕が無くなったのだろう。今度はときのほうこうを放って来た。時が歪んでいく。アルセウスに迫るハイドロポンプが時の彼方へ飛ばされていく。その影響の範囲をハイドロポンプの消え方で見極める。

「いくぞ、ギャラドス！ ファイナルダイブクラッシュ！」

「ギャオオオオオオオオオ！」

王の力でわざの真髓を引き出した。

これはアローラ地方でZワザと呼ばれているもの。

ポケモンが持つエネルギーを最大まで引き出す必殺技。

ひこうエネルギーを全身に纏い、上空へと一気に舞い上がり、ギャラドスはときのほうこうの射線から逃れ、そのままアルセウス目掛けて突き進んでいく。

「いくぞ、ギャラドス！ ウルトラダッシュユアタック！」

ひこうタイプのZワザにノーマルタイプのZワザを重ねる。

原種であり、鍛え抜かれたギャラドスにしか出来ない荒業だ。

『ぬおおお!?!』

アルセウスは激突の衝撃によって地面へ落下した。

二つのZワザの同時発動でギャラドスは疲弊し切っている。だけど、畳み掛けるなら今だ。

アルセウスはプレートを変えていなかった。

「スパークキングギガボルト！」

「ギャオオオオオオオ！」

これで最後だとばかりにギャラドスは力を振り絞った。残されたすべてのエネルギーをスパークキングギガボルトに込めたギャラドスはそのまま意識を失い、落下していく。

「戻れ、ギャラドス！」

連続でZワザを当てた。だけど、まだまだだ。この程度ではアルセウスは倒せない。

「いくぞ、カラマネロ！」

「ネーロ！」

カラマネロは理解している。自分ではアルセウスには敵わない。

原種の二体でも敵わなかった神を相手に自分が出る事など早々あるまいと。

所詮はゲッコウガやスピーアーに繋ぐ為の踏み台だ。

その役割をフーパにさせるわけにはいかないからこそその選出だろう。

「ネーロ！」

やれやれ、仕方がないとカラマネロは微笑む。

不満はもちろんある。けれど、自分がアルトの手持ちのポケモンの中で一番弱い事をカラマネロは理解していた。出会ったのが遅過ぎ

た。

本当はアルトのエースとして戦いたかった。切り札として、望みを託される存在になりたかった。

だけど、そうなるには壁が高過ぎた。

「ごめん、カラマネロ……」

「ネーロ」

謝る必要なんてない。これはこれで悪くないと思っっている自分がいる。

大迷宮に居た頃はずっと他のポケモンに戦わせていた。壁にしたり、突撃させたり、使ったポケモン達からは常に恨みの念を向けられて来た。だけど、そうしないと生き残る事が出来なかった。

あの迷宮は強くなればなるほど地下深くに追いやられていく仕組みになっている。生き残る為に戦ったら、更に生きる事が難しい場所へ落とされる。その繰り返しだ。

生き残る為には弱くてはいけない。けれど、強くなってもいけない。その矛盾を解決する為には他者を利用するしかなかった。

あそこは地獄だった。そこから救い出してくれたから、カラマネロはアルトに恩を感じている。

そして、こうして仲間を利用するのではなく、仲間の為に体を張れる事は何処か誇らしく感じられる。

「ネーロ」

出来る事をしよう。アルトと意識を同調させ、わぎを組み替えていく。

これは次に繋げる為の戦いだ。

だから、まずはすりかえる。

『ヌッ!?』

窪んだ地面の底から這い上がって来たアルセウスからプレート一枚奪い取る。

そして、

「ネーロ。ネロネーロ」

ちようはつした。

『返しなさい！ わたしのプレートを！』

アルセウスはちようはつに乗った。

『あくうせつだん！』

空間ごと切り裂く究極の斬撃が襲い掛かって来る。

「サイドチェンジ！」

「ネーロ」

カラマネロとアルセウスの位置が逆転した。

『なっ!?!』

「ネーロネロネロ！」

驚く顔が滑稽だとカラマネロは笑う。

モンスタールボールの中からずっと見ていた。この神を名乗るポケモンは戦い方がぎこちない。

わざの威力は桁違い。タイプを変える能力はまさしく脅威。けれど、それだけだ。

自らのあくうせつだんをまともに喰らい、アルセウスは大きなダメージを受けた。

『や、やりますねえ！』

どうやら、かなり怒っているようだ。わざの宣言もなく、ときのほうこうを放って来た。

いよいよハンデを与える気は無くなったというわけだ。

そうでなくては面白くない。卑小な身に神に挑むというのは恐れ多くも胸踊るものだ。そこにハンデなどというものがあつては興奮めも甚だしい。

ときのほうこうは時を歪める。けれど、それはときのほうこうの先端から約20メートルの範囲に限った話である事をギャラドスがハイドロポンプで測り、暴き出した。その距離を正確に測り、タイミングを合わせる。

「カラマネロ」

「ネーロ」

再びのサイドチェンジ。

『わたしに同じ攻撃は通用……、ぬう!?!』

当然、対策を練ってくるだろうと考えていた。そして、サイドチェンジの対抗策として、最も簡単な手段はあくタイプへのタイプチェンジ。だからこそ、すりかえておいたのだ。

「ネーロネロネロネーロ！」

サイドチェンジで位置を反転させたカラマネロはあくタイプのプレートを翳しながら高笑いをした。

カラマネロは観察していた。そして、プレートには色がある事を知り、全てが輝いたタイピングでの色とポケモンの各タイプごとのエネルギーの色を脳内で比較して、あくタイプのプレートを見抜いていた。

時間の歪みの範囲内に叩き込まれたアルセウスは成す術なくときこのほうこうを真正面から受けてしまった。

アルセウスはいよいよよろめき始めた。自らが放った最大威力のわざを二連続で受けたのだ。そのダメージは甚大だろう。

『なるほど、あなたがアルトのエースなのですな！』

そのような見当違いな言葉を受けて、カラマネロは更に笑った。

それはそれは嬉しそうに笑い、これ以上は出来る事がないと目を細めた。

「ネーロネーロ」

褒めて欲しいとアルトに訴えた。

「ありがとう、カラマネロ。よく、頑張ってくれた」

アルトは涙を零しながら言った。

カラマネロを本当のエースにしてあげられなかった事をアルトは悔んでいる。

だけど、カラマネロは気にしないで欲しいと伝えた。

神様が認めたのだ。少なくとも、今この瞬間だけは自分こそがアルトのエースなのだ。だから、最後の一撃だけはエースと認めて、一緒に決めて欲しいと願った。

「うん。いくよ、カラマネロ！」

「ネーロ！」

キズナ現象がカラマネロを青く染め上げていく。アルセウスは

ちようはつに乗ったまま、シャドーダイブを発動した。死角からの不意打ちを狙っているのだろう。

『ハアッ!』

アルセウスが現れた。けれど、その攻撃はカラマネロが寸前に生み出したみがわりに命中した。

「ネーロ!」

カラマネロはアルセウスのプレートをさしおさえた。あくタイプのエネルギーが呪いのようにアルセウスのプレートに絡みついてくる。

『ぐぬっ!? こんなもの!』

「ネーロ」

余所見をしている暇など与えない。かなしぼりで厄介なシャドーダイブを封じた。

『小癩な!』

アルセウスの言葉遣いがどんどん粗くなっていく。

「ネーロネロネロ!」

神をコケにしている。その事が楽しくて仕方がないとカラマネロは喜んでいる。

「さあ、いくよ!」

「ネーロ!」

アルセウスはときのほうこうを放とうとしている。

「マキシマムサイブレイカー!」

「ネーロ!」

マキシマムサイブレイカーは相手を操るわざ。さいみんじゆつを得意とするカラマネロにとって、相性が抜群に良いわざだ。それでも、アルセウスの全身を操る事は出来ない。

けれど、一部分だけなら操る事が出来る。カラマネロはときのほうこうを発射する直前のアルセウスの口を閉じさせた。

『グアアアアアアアア!?!』

恐ろしい程に噛み合う。本当ならば、ここで終わっていた。アルセウスがときのほうこうではなく、あくうせつだんを選んでいたらマキ

シمامサイブレイカーで自滅を狙う事など出来なかった。

その幸運がカラマネロに更なる一手を許した。

「ブラックホールイクリプス！」

「ネロネロネーロ！」

極大のあくエネルギーがアルセウスに直撃した。

「ネロ……」

二連続のZワザ。それはカラマネロの全力だった。キズナ現象も解け、次なるアルセウスの反撃を避ける余力も残っていない。

ここまでだ。けれど、十分に頑張れた。カラマネロは満足だった。

「……ネロ？」

けれど、いつまで経っても反撃が来ない。

恐る恐る見下ろすと、アルセウスは目を回していた。

「ネロ……？ ネロオオオオオオオ！」

アルセウスは戦闘不能になった。

「か、勝った……？ 勝った!？」

アルトも目を見開いている。次に繋ぐ筈が、そのまま勝ってしまった。

その事に驚きつつも感謝していると、突然カラマネロが吹き飛ばされた。

「カラマネロ!？」

『見事』

そこに現れたのはアルセウスだった。

「え？ アルセウス!？」

地面には今も横たわったままのアルセウスがいる。

困惑していると、アルセウスはカラマネロを見つめた。

『我が写身を打ち倒すとは、見事です』

「う、写し身……?？」

『みがわりのようなものです。ここからはわたし自らが相手をしましょう』

「ネ、ネロ！」

折角勝ったのにとカラマネロは憤った。

『そう憤らないでください。あなた方はすでに成し遂げている。本来ならば、そこで終わりでした。けれど、あなたのトレーナーはまだまだ物足りない様子でしたからね』

「ネロ!? ネロネーロ!」

「ご、ごめん、カラマネロ!」

文句の矛先をアルトに変えたカラマネロにアルトは平謝りだ。

アルセウスの言葉は凶星だったからだ。まだまだ、戦い足りない。

「ネロ!」

カラマネロは不満そうに剥れるとアルトの下へ戻っていった。

「ネロネーロ!」

実質アルセウスに勝利したのは自分なのだから、帰ったら一番最初にケアしろと伝えると、モンスターボールに自分から戻って行った。

もうへとへとだとキズナ現象を通して言い残しながら。

「お疲れ様、カラマネロ。すごかったよ!」

『全くですね。あの状況からわたしの写し身を削り切るとは、実にすばらしい』

そう言うと、アルセウスは微笑んだ。

『さあ、ここからは更にギアを上げていきますよ』

「うん! ありがとう、アルセウス! いくよ、ゲッコウガ!」

「コウガッ!」

さつきは敵として戦った。だけど、今度は味方として戦う。

ザラクに返した時、もう二度と一緒に戦えないと思った。だけど、またこうして一緒に戦える。

それが凄くうれしい。カラマネロには本当に申し訳ないけれど、ゲッコウガとも一緒に戦いたくて仕方がなかったから、アルセウスが第2ラウンドを用意してくれて本当に良かった。

「ゲッコウガ。一緒に戦おう!」

「コウガ!」

ゲッコウガはザラクのポケモンだ。だけど、ずっと一緒に旅を続けて来た仲間だ。

だから、遠慮なんてしない。心を一つにして、全力で戦う。

ゲッコウガの体を水流が包み込み、その姿をより深い青に変えていき、その背に巨大なみずしゅりけんが現れる。

『キズナ現象。さしずめ、アルトゲッコウガですね。ああ、彼を思い出す。今はアローラに……いえ、今は目の前のバトルに集中ですね。さあ、いきますよ！』

「うん！ ゲッコウガ、みずしゅりけん！」

「コウガッ！」

第九話 『VSアルセウス V』

王の力を解き放った瞬間、彼の言葉の意味が分かってしまった。ポケモンバトルが生まれた瞬間、わたしの計画は破綻していたのだ。

人とポケモンは近くなり過ぎた。お互いを良き隣人と認め合い、野生のポケモンであっても、人と自分から仲良くなろうとするものまでいる。

どんなに王の力を広げても、流れ込んでくる心はどこまでも健全だった。

「……だったら、どうしてよ!? どうして、あなたは歩く災害になったの!?!」

「それは……」

ザラクは気まずそうに言った。

「……ポケモンバトルが楽し過ぎて、つい」

レムハザードは言葉を失った。

「あと、オレも魔王になるものとはかり考えていたんだ。エックスから先代魔王の話は聞いていたからな。だから、色々覚悟も決めてたし、それなら思い残す事がないように思う存分バトルしておこうと思ってる……。だから、その……、あまり怒るな。アイリス」

「……怒ってないけど?」

明らかに怒っている。ザラクとレムハザードのバトルに飛び込もうとする彼女を慌てて追いかけてきたバレットやアクセルは思った。そんな二人やザラクにセラはやれやれと肩を竦めている。

「わたし達はおじやま虫! 離れておきましょう」

「い、いいのか?」

「いいから!」

セラ達が離れていくと、ザラクはつい手を伸ばしかけた。まるで助けを求めるかのような態度にアイリスは唇を尖らせた。

「わたし、本当に怒ってないのに!」

「す、すまない。明らかにオレに落ち度があるから……、つい」

「あなたが大変な状態にあった事くらい分かってるわ。だから、本当に怒ってなんていないの。ただ、最後にわたしの所に帰って来てくれたら、それだけで……」

「アイリス……」

「ザラク……」

「……ふ、二人だけの世界が出来てる」

悩んでいる内に自分が蚊帳の外へ追い出されている事に気付いたレムハザードは何とも言えない気分になった。けれど、責める言葉など吐ける筈がない。この二人はレムハザードが自らの計画の為に運命を狂わせてしまった二人だ。彼らが再び巡り合い、本来在るべき形を取り戻したのなら、それは諸手を上げて喜ぶべきだろう。

「あ、あのー」

「……セラ？」

消沈しているレムハザードに声を掛けたのはセラだった。

「えっと……、あなたがわたしのお姉ちゃん……、なんですよ？ あの、間違ってたらわたし、すつごく恥ずかしいんだけど……」

「その通りよ。あなたはわたしの妹。何も恥ずかしがる必要はないわ」

そう言っつて、力なく微笑む彼女とは裏腹に、セラは飛び上がりそうなくらい喜んだ。

「本当だったんだ！ わあ！ わあ！ わたしにお姉ちゃんがいたんだ！」

「セラ。お前、アルトとアギトが弟って聞いた時は微妙な顔してなかったか？」

「いや、あの二人が弟って急に言われても……」

セラは興味津々な表情でレムハザードを見つめている。

その顔を見ていると遠い日の記憶が蘇って来る。

彼女が生まれた日、レムハザードは怖々と彼女を抱いた。アルトとアギトは大人しい子だったけれど、彼女は好奇心旺盛で何度も手を焼かされた。その思い出の一つ一つがキラキラと輝いていて、それを思い出すと涙が溢れて来た。

「お、お姉ちゃん!？」

セラにそう呼ばれると、レムハザードは感情を堰き止めておく事が
ますます出来なくなってしまう。

「…………ごめんなさい」

「お姉ちゃん…………？」

「ごめんなさい…………、ごめんなさい…………、ごめんなさい…………」

泣きながら謝り続ける彼女をセラは強く抱きしめた。

そうしてあげるべきだと思ったからだ。まるで、何度も何度もそう
してもらって来たかのように、それが当然の行為なのだと思えた。

第九話『VSアルセウス V』

ゲツコウガはのみずしゆりけんをアルセウスはアクアカッターで
迎え撃つて来た。

かげぶんしんを使っても攪乱にならず、的確に本体をリーフスト
ムで撃ち抜いてくる。

さつきまで戦っていた写し身のように大技を乱発するばかりでは
なく、次々に多彩なわざでこちらの選択肢を奪ってくる。

「つじぎりだ!」

「コウガッ! コウコウコウガッ! コウコウゲコウ! コウゲツコ
ウガッ!」

リーフストームの嵐をつじぎりでやり過ぐすとアルセウスは微笑
んだ。

『では、これは防げますか? さばきのつぶて!』

アルセウスを中心に無数の光弾が現れた。

「ゲツコウガ!」

「コウガア!」

あれがすべて襲い掛かって来たら凌ぐだけで手一杯になってしま
う。それでは反撃の糸口すら掴めない。だからこそ、こちらから攻め
入る。

「コウコウコウガア! コウガ! コウコウガ! ゲツコウガア!」

動き出した光弾を次々につじぎりで逸らしながらゲツコウガはア
ルセウスに迫っていく。その最中、アルセウスのプレートが黄色く

光った。それが意味する事をゲッコウガは直後に思い知らされた。

「コウガアアアアア!？」

「ぐああああああ!？」

ゲッコウガのつじぎりはキズナ現象によってみずタイプに変わっている。そして、光弾はプレートが黄色く輝いた瞬間にでんきエネルギーの塊へ変化を遂げた。強化された筈が、みずタイプになったが故につじぎりを通してでんきエネルギーがゲッコウガの全身を駆け巡り、大きなダメージを与えた。

痛みに耐えながら、キズナ現象を解除するべきという思考が脳裏を過ぎった。

「……違う」

ザラクとのバトルで知った。ゲッコウガの水は電気を通さない純水である筈だ。

それなのに通ったのはゲッコウガの力を引き出し切れていないからだ。

「もつと、もつとだ！ もつと！」

「コウガ」

さらにキズナ現象を深めようとしたけれど、ゲッコウガが諭すように鳴いた。

力を求める必要はない。勝利に固執する必要はない。これはポケモンバトル。楽しむ為の戦いだ。

ずっと一緒に旅をした。この戦いはその旅の本当の終着点だ。

必死になり過ぎて、楽しむ事を忘れてしまったらもつたいない。

「……うん。そうだよね、ゲッコウガ」

ゲッコウガとの旅はこれで本当に最後だ。

寂しくないと言ったら？になる。だからこそ、悔いを残したくない。

思い出した時に苦い思いをしたくない。だから、最高に楽しい瞬間にしたい。

「一緒に楽しもう、ゲッコウガ！」

「コウガア！」

ゲッコウガはアルセウスに踏み込んだ。さつきまでよりも速い。アルセウスも虚を突かれたようだ。

つじぎりで一撃を与え、すかさずみずしゆりけんを投げる。アルセウスはアクアカッターで迎え撃って来たけれど、真つ二つになつたみずしゆりけんはそのまま二つのみずしゆりけんになつてアルセウスに襲い掛かった。その瞬間に一気にアルセウスの懐へ踏み込み、つじぎりを繰り出す。

「コウコウコウガ！ コウコウゲッコウガ！」

アルセウスはシャドーダイブで姿を晦ました。けれど、写し身相手に何度も見たわざだ。アルセウスは必ず死角から攻撃してくる。だったら、死角に攻撃をすればいい。

「コウガア！」

『ぬう』

「へへっ！」

してやったりと思っていると、アルセウスは再びさばきのつぶてを使つて来た。

「みずしゆりけん！」

直接触れたらさつききの二の舞いだ。ゲッコウガは巨大なみずしゆりけんを投げ放ち、その影に隠れてアルセウスに接近した。けれど、それこそがアルセウスの狙いだつた。

それまで大技などほとんど使つて来なかつたくせに、ここぞという時には出し惜しまない。

ときのほうこうがゲッコウガを飲み込んだ。

「みずしゆりけん！」

それでもみずしゆりけんでききのほうこうを切り裂く。

ゲッコウガはなんとかときのほうこうを乗り越える事が出来た。けれど、そこまであつた。

ときのほうこうの強大なエネルギーに対抗するにはゲッコウガの全力を尽くすしかなかった。

「……コウ、ガ」

「ありがとう、ゲッコウガ。今までずっと」

ゲッコウガをモンスターボールに戻して、最後のモンスターボールを掴む。

『そのポケモンが最後でいいのですか？ 七体でも構いませんよ？』

「いいんだ。フーパは今日、いっぱい頑張ったからね。だから、これが最後だ！ いくよ、スピアー！」

「スピイイイ！」

飛び出して来たスピアーは気合十分だ。構えた瞬間にはキズナ現象で姿が変わった。

『まさに一心同体ですね。すばらしい。心からそう思います』

「スピアー、ミサイルばり！」

「スピイイイイイイ！」

緑の雷光が一直線にアルセウスに向かっていく。次元すら歪むその威力はときのほうこうとも遜色がない。だからこそ、アルセウスもときのほうこうをもって迎え撃ってきた。

その瞬間にスピアーは一瞬でアルセウスの背後に回り込んだ。ダブルニードルはつべきで防がれ、サンダーダイブに襲い掛かって来る。けれど、雷の速度でさえ、スピアーには止まって見える。

その動きを完全に見切り、スピアーはミサイルばりを側面から叩き込んだ。その攻撃をひかりのかべで逸らし、ストーンエッジを放って来た。その全てを最小限の動きで避け、スピアーはアルセウスに接近し、ダブルニードルを放った。それをリフレクターが阻んだけれど、だったらミサイルばりに切り替えるだけだ。

「スピアー！」

「スピイイイイイ！」

最終話 『ラストバトル』

夜空が綺麗な日にオレ達は出会った。

運命的なんて言葉とは程遠い出会い方だったけれど、一緒に過ごして、一緒に笑って、一緒に食べて、一緒に眠って、一緒にいる事が当たり前になった。

モンスターボールの中にビードルが飛び込んだ時、泣きたくなくなる程嬉しかった。

それから一緒にいた。アクセルのヤドンとバトルをして、コクーンに進化して、ヴェゼール・ヴィレッジが襲われた日にスピアーに進化した。

たくさんのトレーナーや野生のポケモン達とバトルをした。

いろいろな出会いや別れを一緒に経験した。

楽しかった。毎日が楽しくて楽しくて仕方がなかった。スピアーと一緒に強くなる事はオレにとつての最高の幸福だった。

「勝とう、スピアー！」

相手は神様だ。だけど、勝つ。そして、世界で一番強くなる。

その後はエリザの気持ちに応えないといけない。そう考えると、何だか胸がポカポカして来た。きつと、答え自体はずつと前から決まっていたんだ。だけど、それを形にするのはスピアーとの夢を叶えた後にしたかった。

だって、中途半端になってしまう。それはスピアーにも、エリザにも失礼だと思った。

そのエリザが見ている。目の前には倒すべき最後の壁がいる。だから、勝ちたい。だから、勝つ！

「かげぶんしん！」

「スピイイイ！」

スピアーが無数に分身しても、アルセウスは本体から目を逸らさない。だけど、それでいい。本体が見抜けるからこそ、分身への意識が逸れる。

かげぶんしんによって発生した分身もスピアーのわざエネルギー

の結晶だ。そして、スピアーは自分から体から離れたエネルギーも精密に操作する事が出来る。ミスイルバリがそういうわざだったからだ。進化した日からずっと使い続けて来た。その日々が神を超える一手を生み出した。

影分身が次々にミスイルバリとなってアルセウスに襲い掛かった。意識外からの連続攻撃にアルセウスの対処法はてっぺきを張る事だった。それは紛れもなく正解だ。あれだけの数の攻撃を凌ぐには防御を固めるしかない。

けれど、防御を固めるという事は動きを止めるという事だ。それはスピアーに必殺の一撃を撃たせる結果を齎した。

「ミスイルバリ！」

十分にエネルギーを溜めたミスイルバリがアルセウスに襲い掛かる。

『いじげんホール』

そのわざを見ても驚きはない。散々、見て来たからだ。

あくうせつだんはパルキアのわざ。

ときのほうこうはディアルガのわざ。

そのくらいの知識はある。伝説のポケモンが持つ固有のわざが使えるという事は、他の伝説のポケモンのわざも当然使えるという事だ。

だから、いつか必ず使つて来ると思っていた。なにしろ、相手のわざを確実に防ぎ、そのまま相手にぶつける事が出来るのだ。守勢に回った時、これ以上便利なわざは他にない。

だから、ミスイルバリは左中段の針からだけ出した。いじげんホールの操作は慣れ親しんだフーパでさえ無意識レベルとはいかない。だから、残り四本の針から撃ち出したミスイルバリは避けられない。加えて、いじげんホールによってスピアーの上部から降り注いだミスイルバリもスピアーは自在に操作してみた。

『グヌツ!』

ようやく、アルセウスの原種はよろめいた。

地面に倒れているアルセウスを写し身と呼ぶ、あのアルセウスこそ

が本物の神。

その神の領域にスピアーは辿り着いた。

『なるほど、強いですね』

「スピィィィー！」

ミサイルばかりが直撃した直後、すでにスピアーはアルセウスの間近に接近していた。

神の知覚速度さえも上回った神速を超えた神速。その神速を第六感によってみきり、アルセウスはさばきのつぶてを展開した。一つ一つが意思を持ってスピアーに襲い掛かってくる。その全ての動きをスピアーは複眼によって把握した。

「スピィー！ スピスピスピスピィィー！」

躲し、逸らし、貫き、光弾の檻の中でもスピアーは神速であり続けた。

さばきのつぶてはアルセウスが自ら生み出した唯一無二の専用技だ。あらゆるタイプのエネルギーを無数に展開し、精密操作によって敵を制圧する神の御業。

今のスピアーはむしタイプであり、でんきタイプ。さばきのつぶてはじめんタイプを始めとした、スピアーにとって不利な相性のエネルギーで構成している。それなのにスピアーは止まらない。

スピアーは原種ではない。母たる原種スピアーから生まれた子供達の子孫。

何も特別な所などない、普通のポケモンだ。

『……すばらしい。なんともすばらしい。人とポケモンの可能性はまさに無限大なのですな』

「スピィー！」

神たる存在に対して、欠片も臆していない。

写し身のように自滅など一切していない。けれど、ダメージは確実に蓄積している。

「スピィィィー！」

ミサイルばかり、ダブルニードル。取るに足らない筈のわざが苛烈な威力で襲い掛かってくる。避ける事など出来ない。その攻撃速度は

完全に神を上回っているが故に。

防ぐ事もままならない。スピードとは、すなわち威力だからだ。加えて、スピアーの攻撃は貫通に特化している。てつぺきの護りできえ、もはや突破される事は時間の問題に思えた。

古来より、神に仇なす者を人は魔王と呼んだ。

古来より、魔獣の王を人は魔王と呼んだ。

最も強き魔獣の王。神を打ち倒すもの。

ああ、このスピアーこそがそうなのだろうとアルセウスは思った。

「スピイイイイイイッ！」

神にすら恐怖を与えるもの。

その者、まさしく魔王なり。

渾身の力を込めて、スピアーはアルセウスにミサイルばりを叩き込んだ。

意識が薄れていく。回復しようと思えば可能だ。最初にスピアー達を回復したように、アルセウス自身もプレートンの力で回復出来る。けれど、それはやめておこう。

これはポケモンバトルだ。だから、ポケモンとしてのわざだけで戦うべきだと思ったから。

『……見事です』

アルセウスは戦闘不能になった。

今度こそ、正真正銘の勝利だ。

「勝ったあー！」

「スツピイイイ！」

スピアーは元の姿に戻ってアルトに抱きついた。

そして、その腰にあるモンスターボールの一つをつついた。

「スピスピ！」

「え？ カラマネロを？」

「スピー！」

同じ神に勝利したポケモン同士、健闘を称え合いたいのかもしれない。

アルトはカラマネロを繰り出した。

「ネロ?」

「スピーイ!」

困惑するカラマネロの前でスピーアは戦闘態勢に入った。

「……ネロ?」

「スピーイイ」

スピーアの心の声が流れ込んでくる。

さあ、最強の称号を掛けて最後の勝負だと。

「ネロ……? ネロオオオオオオ!」

カラマネロはアルトの背中に隠れた。

白旗を上げている。

「スピーイイ」

「ネロネロ! ネーロ!」

「スピスピーイ」

「ネロオオオオ」

それでもスピーアはどうしてもカラマネロとやりたいようだ。

けれど、カラマネロは嫌がっている。

「スピーア。嫌がってるんだから、無理強いしちやダメだよ? 仲間

なんだから」

「スピーイ……」

そうして、ラストバトルはスピーアの不戦勝で終わった。

第十話 『ラストバトル』

みんなをモンスターボールから出して回復させていると、アギトが治療していたアルセウスが目を覚ました。アルセウスはアギトにお礼を言うと、アルトの下へやって来た。

『お見事でした。あなた達はわたしを超えました』

アルセウスは微笑みながら言った。

『褒美として、何か望みはありますか?』

「望み……? うーん」

急に言われも思いつかない。むしろ、今の今まで繰り返していたバトルこそがアルトにとっての最高の望みだったからだ。

「特にない……、事もない?」

『では、望みを言つてごらんなさい』

「オレじゃなくて、お姉ちゃんの望みを叶えてあげてくれないかな？」

『構いませんよ。それがあなたの望みなら』

「じゃあ、お願い」

『分かりました』

そう言うと、アルセウスは空へあがっていった。

『彼女はわたしと言葉を交わす事は望まないでしょう。ですが、その望みは分かっています。さあ、後始末といきましょう』

アルセウスの体から七色の光が放たれた。その光はアガリア地方に集まっていたポケモン達を元居た場所へ返していく。

次々にポケモン達が消えていく光景に人々は困惑しているが、今の世の中は情報の伝達速度が早い。ポケモン達が元々の住処に戻されただけだと知ると混乱も収まっていく。

そして、セラに縋り付きながら泣きじゃくる少女の前に光が溢れ出す。

「……レム？」

「え？」

そこには一人の女性が立っていた。

『……わたしでも、死者は蘇らせる事が出来ません。けれど、ゼルネアスと共にあった彼女だけは救い出す事が出来ました』

彼女の肉体は年月に耐える事が出来なかった。けれど、その生命はゼルネアスによって守られていた。

「お母様……？」

「……レム。それに、セラ……」

「え？　え？　えええ!？」

嘗て聖女と呼ばれた女は泣いている娘の下へ駆け寄った。

『ポケモンバトル。実に良いものでした。さようなら、アルト。そして、アルトのポケモン達』

アルセウスの姿が時空の穴の先へ消えていく。そして、空は元に戻った。

アルトは「ばいばい！」とスピアーと共に手を振った後、エリザを

見つめた。

「勝ったよ、エリザ！」

「おめでとうございます！ まあ、分かってましたけど！」

遂に神すらも倒す事が出来た。ずっと憧れていた最強という名の到達点。

アルトは満足感でいっぱいだった。

「さあ、答えを教えてくださいますよ！ ずーっと、待ってたんですからね！」

「うん。好きだよ、エリザ」

「……かひゆ」

望み通りの言葉だった。けれど、もう少し勿体ぶられるかと思っていた。

だから、そのストレートな言葉にエリザベスは過呼吸を起こしかけた。

「エ、エリザ!？」

その姿にアギトやバレットは呆れている。

「締まらねえな」

「だが、エリザらしいな」

「だな！ さあ、今日はお祝いだ！」

「その前にケアが必要だ！ チャンピオンリーグの直後に神と戦ったんだ。アルトのポケモン達はヘトヘトな筈だ！ アルト！ ポケモンケアの準備を始めるぞ！」

「ア、アギト!? も、もうちよつと余韻に浸らせてくださいよ！」

「そんな暇はない！ 分かっているな、アルト！」

「うん！ もちろんさ！」

「ああもう！ せめて、これだけは！」

エリザベスはアルトを抱きしめた。そして、その唇を奪った。

「お、おお……」

「おお……」

それはキスだった。あまりにも大胆なエリザベスの行動にバレットとアギトは真っ赤になった。そして、アルトも真っ赤だった。

「えへへ！ 乙女的にこれだけは譲れません！ 愛の告白の後はキス！ それが常識つてもんですよ、アルト！」

「そ、そ、そうなんだ……？」

「そうなんです！ さあ、スピアー達のケアを始めますよ！」
「う、うん」

こうして、アルトと旅の仲間達の物語は終わりを迎えた。

それぞれの目的を果たし、新たな目標に向かってそれぞれの道を歩き始める。

「楽しかったね、スピアー！」

「スピー！」